関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会報告書第１集

仲道遺跡発掘調査報告書

霞ヶ浦用水送水管埋設工事地内

平成３年11月

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会

関城町教育委員会

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会報告書第１集

仲道遺跡発掘調査報告書

霞ヶ浦用水送水管埋設工事地内

平成３年11月

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会

関城町教育委員会

序

私たちの郷土関城町は，西に鬼怒川，東に小貝川という二つの河川に挟まれた，水と緑に恵まれた早くから文化の開けた地域で，国指定史跡の関城跡や，県指定の船玉古墳を始めとして100以上の遺跡が確認されています。

今回発掘調査が行われた仲道遺跡は，現在水資源開発公団が工事を進めている，霞ヶ浦用水基幹線水路管埋設工事に伴う一連の埋蔵文化財発掘調査の最初のものであります。

この度の調査により，古墳時代中期から平安時代までの年代に該当する多くの遺構や遺物が確認検出されました。また，土壙と住居跡の一部には，縄文前・中期，弥生後期のものと考えられるものも確認されています。特に道路状遺構と大溝遺構は，注目に値するものでした。これらの遺構や遺物の性格を検討することにより，本遺跡の正確な位置付けがなされるものと思います。

この報告書が，文化財に対する認識と遺跡愛護の精神をさらに深めると同時に，祖先の偉業をしのび，郷土を愛する心を培う一助に活用されますことを心から念願いたします。

最後になりましたが，今回の発掘調査に当たりまして，全面的なご理解ご支援をいただきました水資源開発公団をはじめとする関係機関各位，特に玉井輝男団長以下作業にご協力いただいた方に心から感謝申し上げ挨拶といたします。

平 成 3 年 11 月

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会長
関城町教育委員会教育長　齊　藤　　昭

例　　言

1　本書は水資源開発公団の委託を受けた関城町教育委員会が関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会および仲道遺跡発掘調査団を組織し，関城町大字井上字仲道に所在する仲道遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書である。

2　発掘調査は平成1年12月15日より，平成2年4月4日まで実施し，整理期間は同年4月5日より7月3日までおこなった。調査の実施にあたっては，玉井輝男が担当し，報告書の執筆については，第1章から第3章および終章は玉井が担当し，第4章まとめについては原真の年代観に基づき，第1節は玉井が，第2節は原がそれぞれ分担して執筆をおこなった。編集は玉井輝男，北沢雅之（教委・前係長），和田次男（教委・現係長），森正義（教委・文化財担当）がおこなった。

3　本書をまとめるにあたって，茨城県立歴史館川井正一氏，水戸市立博物館市毛美津子学芸員の貴重な助言を得た。

4　本書に使用した記号および表記方法については第1章第2節を参照されたい。

5　調査全般にわたって，御指導，御協力を賜った関係各機関および諸氏には感謝の意を表します。

茨城県教育庁文化課，茨城県立歴史館，茨城県県西教育事務所，千代川村教育委員会，猿島町教育委員会，青木武文氏，大谷昌良氏，坂入正夫氏，広田広一氏，金子哲男氏，仙波亨氏

6　調査会，調査団の組織および調査作業に従事した各位は以下のとおりである。

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会役員

会　長	岩崎三郎	前関城町教育委員会教育長（平成元年12月31日退任）
	松本利一	関城町教育委員会事務局長（平成2年1月1日就任 平成2年3月31日退任）
	齊藤　昭	関城町教育委員会教育長（平成2年4月1日就任）
副会長	坂入三喜男	関城町文化財保護審議会長
理　事	松本利一	関城町教育委員会教育次長兼生涯学習課長
	中山光雄	関城町教育委員会学務課長（平成2年4月1日就任）
	玉井輝男	仲道遺跡発掘調査団長
	八角一男	前関城町文化財保護審議委員（平成2年3月31日退任）
	箱守重造	関城町文化財保護審議委員
	青木武文	関城町文化財保護審議委員
	大畠　進	前井上3区区長（平成3年3月31日退任）
	仲川浩平	井上3区区長（平成3年4月1日就任）
	松本　紀	水資源開発公団霞ケ浦用水建設所副所長（平成3年3月31日退任）
	佐々木皖之	水資源開発公団霞ケ浦用水建設所副所長（平成3年4月1日就任）
	中川郁夫	関城町産業課長

監　事	植　木　　幹	前関城町収入役（平成元年12月31日退任）
	杉　田　樹　良	前水資源開発団霞ケ浦用水建設所用地課長（平成２年９月30日退任）
	松　本　利　一	関城町教育委員会教育次長兼生涯学習課長（平成２年４月１日就任）
	鏡　　日出夫	水資源開発公団霞ケ浦用水建設所用地課長（平成２年10月１日就任）
顧　問	市　村　高　男	中央学院大学専任講師
幹　事	北　沢　雅　之	前関城町教育委員会社会教育係長（平成２年３月31日退任）
	和　田　次　男	関城町教育委員会生涯学習課社会教育係長（平成２年４月１日就任）
	森　　正　義	関城町教育委員会生涯学習課社会教育係主事

仲道遺跡発掘調査団員氏名

調査団長　玉井輝男　　補助調査員　福田　宏

主任調査員　滝坂　滋　　〃　　小島栄子

〃　　原　　真　　〃　　赤井博之

庶　　務　柴　良子

作業協力員

箱守照也，金沢幸次郎，野中康之助，小口章一，柴崎友一，田所勉，高松清三郎，小島正次，勝沼賢，井坂英雄，飯島基良，飯島大三，糸沢文二，杉山虎三，倉持尚浩，中山智弘，滝沢正之，松本利信，山崎淳一，舘野信二，柴崎修一，池田シヅ，小口せん，粟野晴江，小口とし子，大畑ヨシ子，大武みつ，小貫やす，勝沼たか子，勝沼百合子，勝沼マス子，中山ちよ，角野寿代，石田勝江，高島とみ子，津久井よね子，永瀬イシ，石田真弓，野村加代子，田崎いみ子，渡辺寿枝，松本信子。

整理作業作業分担者氏名

図面整理作業　小島栄子，田所勉，倉持尚浩

遺物実測作業　滝坂滋，福田宏，赤井博之

遺物復元作業　小島正次，鈴木京子

トレース作業　柴良子，塚田恵理子

写真撮影　遺構：玉井輝男，遺物：原　真（陶器は玉井が撮影した）

遺物台帳については柴良子が成作に当たった。

目　　次

序

例　言

第１章　調査経緯……1

　第１節　調査に至る経過……1

　第２節　調査方法……2

　第３節　調査経過……5

第２章　位置と環境……8

　第１節　地理的環境……8

　第２節　歴史的環境……9

第３章　調査成果……14

　第１節　遺構と遺物……14

　　(1)　竪穴住居址（ＳＩ）……14

　　(2)　土坑遺構（ＳＫ）……169

　　(3)　井戸遺構（ＳＥ）……187

　　(4)　道路状遺構（ＳＦ－01）・溝遺構（ＳＤ－01）……190

　　(5)　道路状遺構（ＳＦ－02）・大溝遺構（ＳＤ－02）……193

　　(6)　遺構外出土遺物（縄文土器）実測図……198

　　(7)　調査区域内出土遺物（縄文土器）拓影……198

　　(8)　調査区域内出土遺物（弥生土器）拓影……203

　　(9)　調査区域内出土遺物（須恵器）拓影……206

　　(10)　その他の出土遺物――土製品――……208

　　(11)　その他の出土遺物――石製品――……210

　　(12)　その他の出土遺物――鉄製品――……214

第４章　ま　と　め……218

　第１節　遺構について……218

　第２節　奈良・平安期の土器様相……223

終　章　む　す　び……233

挿 図 目 次

第１図　仲道遺跡地形図　（付図１）
第２図　仲道遺跡周辺図（付井上城跡）（付図２）
第３図　仲道遺跡遺構全体図　（付図３）
第４図　仲道遺跡時期別遺構位置図　（付図４）
第５図　仲道遺跡基本土層模式図……３
第６図　１号住居址平面実測図……15
・出土遺物実測図……15
第７図　１号住居址平面実測図……16
第８図　２号住居址平面実測図……18
第９図　２号住居址・カマド平面実測図……20
第10図　２号住居址出土遺物実測図……21
第11図　２号住居址遺物分布図……７
第12図　３号住居址平面実測図……24
第13図　３号住居址遺物分布図……25
第14図　３号住居址出土遺物実測図……26
第15図　４号住居址平面実測図……27
第16図　４号住居址出土遺物実測図……28
第17図　４号住居址遺物分布図……28
第18図　５号住居址平面実測図……29
・出土遺物実測図　(1)……29
第19図　５号住居址出土遺物実測図　(2)……30
第20図　５号住居址・カマド平面実測図……31
第21図　５号住居址遺物分布図……34
第22図　６号住居址平面実測図……35
第23図　７号住居址平面実測図・出土遺物実測図(1)……37
第24図　７号住居址出土遺物実測図　(2)……38
第25図　７号住居址遺物分布図……39
第26図　８号住居址平面実測図……41
第27図　８号住居址遺物分布図……42
第28図　９号住居址・カマド平面実測図……44
第29図　９号住居址出土遺物実測図　(1)……45
第30図　９号住居址出土遺物実測図　(2)……46
第31図　10号住居址平面実測図……48
第32図　11号住居址平面実測図……50
・出土遺物実測図
第33図　９・11号住居址遺物分布図……51
第34図　13号住居址平面実測図……53
第35図　15号住居址平面実測図……55
第36図　15号住居址出土遺物実測図……56
第37図　14・16号住居址平面実測図……59
・14号出土遺物実測図……59
第38図　16号住居址出土遺物実測図……60
第39図　16号住居址・炉平面実測図……61
第40図　14・16号住居遺物分布図……63
第41図　17号住居址平面実測図……65
・炉平面実測図……65
第42図　17号住居址出土遺物実測図　(1)……66
第43図　17号住居址出土遺物実測図　(2)……67
第44図　17号住居址遺物分布図……68
第45図　18号住居址平面実測図……71
・出土遺物実測図……71
第46図　19号住居址平面実測図……72
第47図　20号住居址遺物分布図……74
第48図　20号住居址遺物分布図……75
第49図　21号住居址平面実測図……76
第50図　22号住居址平面実測図……78
・出土遺物実測図　(1)……78
第51図　22号住居址出土遺物実測図　(2)……79
第52図　22号住居址遺物分布図……80
第53図　23号住居址平面実測図……82
・カマド平面実測図……82
第54図　23号住居址遺物分布図……83
第55図　24号住居址平面実測図……85
・出土遺物実測図……85
第56図　24号住居址遺物分布図……86
第57図　25号住居址平面実測図……87
・出土遺物実測図……87
第58図　25号住居址遺物分布図……88
第59図　26号住居址平面実測図……90
出土遺物実測図……90
第60図　26号住居址カマド平面実測図……91
第61図　26号住居址遺物分布図……92
第62図　27号住居址平面実測図……93
第63図　28号住居址平面実測図……95
・出土遺物実測図……95
第64図　29号住居址平面実測図……97
・出土遺物実測図……97
第65図　29号住居址遺物分布図……98
第66図　30・31・33号住居址平面実測図……101

・出土遺物実測図 (1)
……101
第67図 30・31・33号住居址出土遺物実測図 (2)
……102
第68図 33号住居址遺物分布図……105
第69図 32号住居址平面実測図……106
・炉址……106
・出土遺物実測図 (1)……106
第70図 32・33号住居址出土遺物実測図 (2) 107
第71図 32号住居址遺物分布図……108
第72図 34号住居址平面実測図……111
・カマド実測図……111
第73図 34号住居址出土遺物実測図……112
第74図 34号住居址遺物分布図……112
第75図 35号住居址平面実測図……114
・出土遺物実測図……114
第76図 35号住居址遺物分布図……115
第77図 36号住居址出土遺物実測図……116
第78図 36号住居址遺物分布図……116
第79図 37号住居址平面実測図……118
第80図 37号住居址出土遺物実測図……119
第81図 37号住居址遺物分布図……120
第82図 38号住居址平面実測図……122
第83図 38号住居址出土遺物実測図……123
第84図 38号住居址遺物分布図……124
第85図 39号住居址平面実測図……127
・出土遺物実測図……128
第86図 39号住居址・10号土坑遺物分布図…130
第87図 40号住居址平面実測図……131
第88図 40号住居址出土遺物実測図……132
第89図 40号住居址遺物分布図……134
第90図 41・42・42′号住居址平面実測図……134
42号出土遺物実測図……134
第91図 41号住居址出土遺物実測図 (1)……135
第92図 41号住居址出土遺物実測図 (2)……136
第93図 41・42・42′号住居址遺物分布図……137
第94図 43号住居址平面実測図……139
・出土遺物実測図……139
第95図 44号住居址平面実測図……140
第96図 44号住居址出土遺物実測図……141
第97図 45号住居址平面実測図……144
・出土遺物実測図 (1)……144
第98図 45号住居址出土遺物実測図 (2)……145
第99図 46号住居址遺物分布図……146
第100図 46号住居址平面実測図……148
第101図 47号住居址平面実測図……150
第102図 47号住居址遺物分布図・出土遺物実測図
……151
第103図 48号住居址平面実測図……153
・出土遺物実測図……153
第104図 48号住居址遺物分布図……154
第105図 49号住居址平面実測図・出土遺物実測図
(1)……156
第106図 49号住居址出土遺物実測図 (2)……157
第107図 49号住居址炉 平面実測図……158
第108図 49号住居址遺物分布図……159
第109図 50号住居址平面実測図……162
・出土遺物実測図……162
第110図 50号住居址遺物分布図……163
第111図 51号住居址平面実測図……165
・出土遺物実測図……165
第112図 52号住居址平面実測図……166
第113図 52号住居址遺物分布図……167
第114図 53号住居址平面実測図……168
第115図 53号住居址遺物分布図……169
第116図 1号土坑遺構平面実測図……170
・出土遺物拓影……170
第117図 2号土坑遺構平面実測図……171
第118図 3号土坑遺構平面実測図……172
・出土遺物拓影……172
第119図 4号土坑遺構平面実測図……174
第120図 5号土坑遺構平面実測図……175
第121図 6号土坑遺構平面実測図……176
・出土遺物実測図・拓影 176
第122図 7号土坑遺構平面実測図……178
・出土遺物拓影……178
第123図 8号土坑遺構平面実測図……179
第124図 9号土坑遺構平面実測図……181
第125図 10号土坑遺構平面実測図……183
第126図 10号土坑遺構平面実測図・拓影……184
第127図 11号土坑遺構平面実測図……185
第128図 12号土坑遺構平面実測図……186
第129図 12土坑火床遺構平面実測図……187
第130図 1号井戸遺構実測図……189
第131図 1号道路状遺構平面実測図……191
第132図 1号道路状遺構遺物分布図……192

第133図　２号道路状遺構コンター実測図……195
第134図　２号道路状遺構・大溝遺構・出土遺物実測図……196
第135図　２号大溝遺構遺物分布図……197
第136図　遺構外出土土器実測図（縄文土器）　199
第127図　調査区域内出土土器片（縄文土器）拓影……200
第138図　調査地区内出土土器片（弥生土器）拓影……204
第139図　調査地区内出土土器片（須恵器）拓影　207
第140図　土製品遺物実測図　(1)……209
第141図　土製品遺物実測図　(2)……210
第142図　石製品遺物実測図　(1)……211
第143図　石製品遺物実測図　(2)……212
第144図　鉄製品遺物実測図　(1)……213
第145図　鉄製品遺物実測図　(2)……214
第146図　奈良・平安時代第Ⅰ期土器群……224
第147図　奈良・平安時代第Ⅱ期土器群……226
第148図　奈良・平安時代第Ⅲ期土器群……228
第149図　第Ⅰ期b（２号住）と第Ⅱ期（９号住）の竈にみる法量比較……231

表　組　目　次

表１　１号住居址出土土器観察表……14
表２　２号住居址出土土器観察表……18
表３　３号住居址出土土器観察表……23
表４　４号住居址出土土器観察表……26
表５　５号住居址出土土器観察表……32
表６　７号住居址出土土器観察表……39
表７　９号住居址出土土器観察表……46
表８　11号住居址出土土器観察表……52
表９　15号号住居址出土土器観察表……57
表10　14号住居址出土土器観察表……61
表11　16号住居址出土土器観察表……62
表12　17号住居址出土土器観察表……68
表13　18号住居址出土土器観察表……70
表14　20号住居址出土土器観察表……73
表15　22号住居址出土土器観察表……80
表16　24号住居址出土土器観察表……84
表17　25号住居址出土土器観察表……88
表18　26号住居址出土土器観察表……89
表19　28号住居址出土土器観察表……96
表20　29号住居址出土土器観察表……98
表21　30，31，33号住居址出土土器観察表…103
表22　32，33号住居址出土土器観察表……109
表23　34号住居址出土土器観察表……113
表24　35号住居址出土土器観察表……115
表25　36号住居址出土土器観察表……117
表26　37号住居址出土土器観察表……119
表27　38号住居址出土土器観察表……124
表28　39号住居址出土土器観察表……126
表29　40号住居址出土土器観察表……132
表30　42号住居址出土土器観察表……133
表31　41号住居址出土土器観察表……133
表32　43号住居址出土土器観察表……140
表33　44号住居址出土土器観察表……142
表34　45号住居址出土土器観察表……147
表35　47号住居址出土土器観察表……149
表36　48号住居址出土土器観察表……152
表37　49号住居址出土土器観察表……159
表38　50号住居址出土土器観察表……163
表39　51号住居址出土土器観察表……164
表40　１号住居址出土土器観察表……171
第41　３号住居址出土土器観察表……173
表42　６号住居址出土土器観察表……177
表43　７号住居址出土土器観察表……178
表44　10号住居址出土土器観察表……182
表45　遺構外出土土器観察表（縄文土器）…200
表46　調査地区内出土土器観察表（縄文土器）202
表47　調査地区内出土土器観察表（弥生土器）202
表48　調査地区内出土土器観察表（須恵器）　205
表49　土製品観察表……208
表50　石製品観察表……215
表51　鉄製品観察表……216
表52　鉄製品観察表……217

写　真　目　次

ＰＬ　1　空中よりみた発掘調査地域全景
ＰＬ　2　Ａ調査区空中写真
ＰＬ　3　Ｂ調査区空中写真
ＰＬ　4　仲道遺跡と発掘調査区域（南側から）
　　仲道遺跡と発掘調査区域（北側から）
ＰＬ　5　Ａ調査地区　遺構確認作業風景・遺構確認状況
　　Ｂ調査地区風景・遺構確認状況
ＰＬ　6　１号居址・１号住居址遺物出土状況
ＰＬ　7　２号住居址・２号住居址カマド・２号住居址遺物出土状況
ＰＬ　8　３号住居址・３号住居址遺物出土状況
ＰＬ　9　４号住居址・４号住居址と５号住居址・５号住居址
ＰＬ　10　５号住居址・５号住居址カマドと遺物出土状況
　　５号住居址カマド内の遺物出土状況
ＰＬ　11　６号住居址・７号住居址・７号住居址遺物出土状況
ＰＬ　12　７号住居址出土炭化材・７号住居址出土炭化材と屋根材・８号住居址
ＰＬ　13　９号住居址・９号住居址と11号住居址・９号住居址カマド
ＰＬ　14　９号住居址カマド遺物出土状況・10号住居址
ＰＬ　15　11号住居址
ＰＬ　16　13号住居址・14号住居址
ＰＬ　17　14号住居址内に堆積する焼土・15号住居址・16号住居址
ＰＬ　18　16号住居址・17号住居址・17号住居址遺物出土状況
ＰＬ　19　18号住居址・18号居址遺物出土状況
ＰＬ　20　大溝遺構によって切られている20号住居址・20住居址・20号住居址遺物出土状況
ＰＬ　21　21号住居址・22号住居址・22号住居址
ＰＬ　22　22号住居址遺物出土状況・23号住居址・24号住居址
ＰＬ　23　25号住居址・26号住居址
ＰＬ　24　27号住居址・26・27号住居址・28号住居址
ＰＬ　25　28号住居址遺物出土状況・29号住居址・29号住居址遺物出土状況
ＰＬ　26　30，33号住居址・30号住居址遺物出土状況
ＰＬ　27　33号住居址遺物出土状況・32号住居址・32号住居址遺物出土状況
ＰＬ　28　34号住居址・34号住居址カマド・34号住居址
ＰＬ　29　35号住居址・35号住居址カマド・35号住居址遺物出土状況
ＰＬ　30　37号住居址・37号住居址カマド
ＰＬ　31　38号住居址・38号住居址遺物出土状況・38号住居址カマド遺物出土状況
ＰＬ　32　39号住居址と10号土坑・40号住居址
ＰＬ　33　41，42，42′号住居址・41号住居址遺物出土状況・41号住居址遺物出土状況
ＰＬ　34　42号住居址カマド遺物出土状況・42′号住居址内土坑・42′号住居址内土坑出土の刀子
ＰＬ　35　43号住居址と９号土坑・43号居址・45号住居址
ＰＬ　36　45号住居址遺物出土状況・47号住居址・48号住居址
ＰＬ　37　48号住居址遺物出土状況・49号住居址
ＰＬ　38　49号住居址遺物出土状況
ＰＬ　39　50号住居址・51号住居址
ＰＬ　40　51号住居址・52号住居址・53号住居址
ＰＬ　41　１号土坑・２号土坑・３号土坑
ＰＬ　42　４号土坑・５号土坑・６，７号土坑
ＰＬ　43　６号土坑・７号土坑
ＰＬ　44　８号土坑・９号土坑・10号土坑

ＰＬ　45　10号土坑堆積状況・11号土坑
ＰＬ　46　12号土坑・井戸遺構
ＰＬ　47　井戸遺構内堆積状況・井戸遺構完掘状況
ＰＬ　48　１号道路状遺構・空中よりみた１号道路遺構
ＰＬ　49　２号道路状遺構
ＰＬ　50　空中よりみた２号道路状遺構・大溝遺構
ＰＬ　51　空中よりみた大溝遺構・大溝遺構の堆積土状況
ＰＬ　52　大溝遺構の発掘調査風景・遺構外出土遺物（縄文土器出土状況）
ＰＬ　53　１号住居址出土土器
ＰＬ　54　２号住居址出土土器
ＰＬ　55　３号住居址出土土器，４号住居址出土土器，５号住居址出土土器（1）
ＰＬ　56　５号住居址出土土器（2）
ＰＬ　57　５号住居址出土土器（3）
ＰＬ　58　７号住居址出土土器（1）
ＰＬ　59　７号住居址出土土器（2）
ＰＬ　60　号住居址出土土器（3），９号住居址出土土器（1）
ＰＬ　61　９号住居址出土土器（2）
ＰＬ　62　11号住居址出土土器，15号住居址出土土器（1）
ＰＬ　63　15号住居址出土土器（2），14号住居址出土土器（1）
ＰＬ　64　14号住居址出土土器（2），16号住居址出土土器（1）
ＰＬ　65　16号住居址出土土器（2），17号住居址出土土器（1）
ＰＬ　66　17号住居址出土土器（2），18号住居址出土土器（1）
ＰＬ　67　20号住居址出土土器　，22号住居址出土土器（1）
ＰＬ　68　22号住居址出土土器（2），26号住居址出土土器
ＰＬ　69　28号住居址出土土器，29号住居址出土土器
ＰＬ　70　30・31・33号住居址出土土器
ＰＬ　71　32号住居址出土土器（1）
ＰＬ　72　32号住居址出土土器（2），33号住居址出土土器
　　34号住居址出土土器
ＰＬ　73　35号住居址出土土器，36号住居址出土土器，38号住居址出土土器（1）
ＰＬ　74　38号住居址出土土器（2）
ＰＬ　75　38号住居址出土土器（3），40号住居址出土土器，42号住居址出土土器（1）
ＰＬ　76　42号住居址出土土器，41号住居址出土土器，43号住居址出土土器
ＰＬ　77　44号住居址出土土器
ＰＬ　78　45号住居址出土土器（1）
ＰＬ　79　45号住居址出土土器（2），48号住居址出土土器
ＰＬ　80　49号住居址出土土器（1）
ＰＬ　81　49号住居址出土土器（2）
ＰＬ　82　49号住居址出土土器（3）
ＰＬ　83　49号住居址出土土器（4）

第1章　調査経緯

第1節　調査に至る経過

当地域は，東京から75km圏内にあり，耕地のうち畑地が52％を占める一大畑地帯で，かつ優良農業地域である。しかし，地理的条件に恵まれる反面，平年降水量は約1200mmと少なく，しかも降雨分布が不均一なため，台地上に発達した畑地は粗放で，不安定な生産体系となっている。さらに，水田は地区内河川による水源が不安定でしばしば用水不足を生ずるほか，過湿田が広く分布し，土地基盤の悪条件から土地生産性を低くしている。

これら用水不足を解消するため，昭和38年に茨城県は「県西用水事業計画」を樹立し，本格調査に入った。昭和45年に農林水産省においても，国営直轄調査地区として調査に着手した。さらに，昭和46年には首都圏地域としての開発にそなえ，県・市町村の要望によって，水道用水・工業用水を含めた総合用水計画に改められた。昭和50年４月に国営霞ケ浦用水事業として全体実施計画に着手，また並行して，茨城県が昭和53年７月に「県西用水基本計画」を発表した。昭和54年12月には，「霞ケ浦用水土地改良区」の設立が認可された。昭和55年３月，水資源開発基本計画地区として閣議決定され同年９月19日に事業実施方針が指示され，同年11月14日に事業実施計画が認可された。

霞ケ浦用水事業は，茨城県西南地域22市町村の経営耕地約75,000㌶のうち約30％にあたる耕地約21,600㌶に対し，畑地かんがい及び水田補水として最大約17,76㎥/sを補給するとともに，15市町村に対し，最大約0.58㎥/sを供給する水道用水供給事業及び13市町村に対し，最大約1.06㎥/sを供給する工業用水供給事業から成っている。

上記の計画を達成するため，公団は，霞ケ浦湖岸に揚水機場を建設し，霞ケ浦から鬼怒川に至る基幹線木路として，送水路約21.2kmトンネル約14.1km，管水路約18.4km等，計約53.7kmを霞ケ浦用水事業の一環として施工するものである。

うち，当関城町において，水資源開発公団は霞ケ浦用水基幹線水路管理設工事として約10.23kmを計画し，昭和63年７月７日付霞用水第41号で関城工区内の路線に係る埋蔵文化財等について照会が関城町教育委員会に提出した。

これを受けて，関城町教育委員会は昭和63年８月９日付関教委発第343号で，水資源開発公団霞ケ浦用水建設所長宛てに，同路線計画地に周知の遺跡として，①仲道遺跡，②井上城跡，③裏原遺跡，④古稲荷遺跡の４遺跡が所在しており，その取り扱いについては協議を必要とする旨回答した。

以後，関城町教育委員会は文化財保護の立場から必要な措置を講ずるため，起業者の水資源開発公団霞ケ浦用水建設所と協議を重ねた結果，仲道遺跡，井上城跡，古稲荷遺跡の３遺跡については

現状保存が困難であるため，発掘調査による記録保存の措置をとることで合意に達した。

その後，平成元年10月24日に「関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会」が結成され，茨城県教育庁文化課の紹介により，仲道遺跡発掘調査団長に玉井輝男氏を迎えることができた。

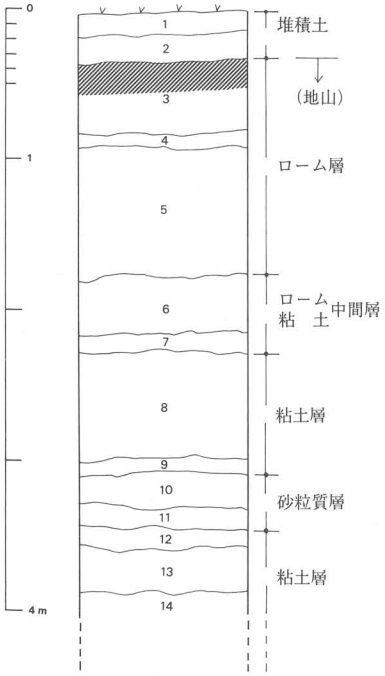
同年12月18日，発掘調査現地事務所において，関係者出席のもと仲道遺跡発掘調査安全祈願が行われ，発掘調査に着手した。

第2節　調査方法

仲道遺跡の発掘調査は送水管埋設部分の幅12メートル，総延長185メートルの調査範囲で実施した。調査地区は地区のほぼ中央部に町道が縦断していたため，この町道を中心に西北側をＡ地区，東南側をＢ地区として分けた。グリットは工事区域のセンターラインを利用し一辺４メートル四方の小グリットをＡ・Ｂ両地区にわたって設定した。グリット番号および記号は西北側より東南側に向って数字，西南側より東北側に向ってアルファベットを使用してＡ１，Ａ２……というグリット呼称を用いた。したがって，グリットの軸線方向は南北方向にはとらず工事区域センターラインに設定した。なおセンターラインの向きは磁北より西側に28度振れている。

基本層序

本遺跡は下館方面よりほぼ南北に延びる野殿台地の中央東端部に位置し，標高は32メートル前後を測ることができる。今回発掘調査の対象地となった地区の基本層序は第５図の模式図にみるとおりである。１層は表土でいわゆる耕作土で，２層は耕作土およびローム風化土との混合土である。１層および２層が本遺跡での基本堆積土となっている。３・５層は関東ローム層でその層厚は140センチメートル前後であり，本層の中間には，鹿沼土いわゆる鹿沼パニス層である４層がみられる。６・７層は５のローム層と８の粘土層との中間層でローム粒子を多量に含む粘性の強い土層となっておる８は粘土層で常総粘土層と呼ばれる土層である。９は粘土質でもかなり砂粒子を多量に含み，10・11の砂粒層に移る中間層となっている。10・11は完全な砂層でかなり鉄分を多く含んでいる。12・13・14は粘土層でいずれも硬質の粘土層である。以上が本遺跡で確認し得た基本土層でこの土層の確認は井戸遺構（ＳＥ－01）のセクション面を観察する際に設定した断ち割りトレンチの壁面セクションからの観察成果がベースになっている。



1．表土（耕作土）			
2．暗褐色土	10ＹＲ(3/3)		
3．明黄褐色土	10ＹＲ(6/6)	かなり硬質でしまりがある	
4．浅黄橙色土	10ＹＲ(8/3)	―鹿沼層―	
5．褐色土	10ＹＲ(4/6)	しまりはあるが水分が多い	
6．黄褐色土	10ＹＲ(5/6)	砂粒子が多く全体的にしまりがなくなる	
7．にぶい黄褐色土	10ＹＲ(5/4)	砂粒子を多く含む粘土となる	
8．明褐灰色土	10ＹＲ(7/1)	粘性が強くかなりしまっている	
9．にぶい褐色土	10ＹＲ(5/4)	荒い砂質粒子が多くなる	
10．褐色土	10ＹＲ(4/4)	粘性の少ない砂質粘土	
11．〃	〃	やや粘性が強い	
12．明褐色土	10ＹＲ(5/8)	粘性が強い	
13．にぶい黄褐色土	10ＹＲ(6/3)	〃	
14・明褐色土	7.5ＹＲ(7/1)	〃	

第５図　仲道遺跡基本土層模式図

土層の分類

①	Ｈｕｅ	10ＹＲ	5／6	黄褐色
②	Ｈｕｅ	7.5ＹＲ	4／3	褐　色
③	Ｈｕｅ	7.5ＹＲ	3／1	黒褐色
④	Ｈｕｅ	10ＹＲ	4／4	褐　色
⑤	Ｈｕｅ	7.5ＹＲ	2／4	黒褐色
⑥	Ｈｕｅ	7.5ＹＲ	3／4	暗褐色
⑦	Ｈｕｅ	7.5ＹＲ	2／2	黒　色
⑧	Ｈｕｅ	10ＹＲ	8／3	浅黄橙色
⑨	Ｈｕｅ	10ＹＲ	7／1	灰白色
⑩	Ｈｕｅ	10ＹＲ	2／3	黒褐色
⑪	Ｈｕｅ	7.5ＹＲ	2／3	極暗褐色
⑫	Ｈｕｅ	10ＹＲ	2／2	黒褐色
⑬	Ｈｕｅ	10ＹＲ	8／4	浅黄橙色

ⓐ　焼土

ⓑ　炭

ⓒ　粘土

ⓓ　ブロック（黄褐色）

ⓔ　砂粒

方　法

本書における遺構の記載は以下の記号を使用した。

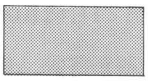
竪穴住居址――ＳＩ　　土坑状遺構――ＳＫ

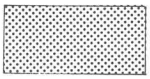
井戸遺構――ＳＥ

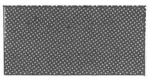
溝遺構――ＳＤ　　道路状遺構――ＳＦ

柱穴・ピット―Ｐ

スクリーントーンの使用は以下のとおりに使い分けた。

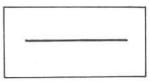
カマド遺構―― 

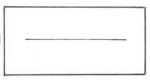
炉遺構―― 

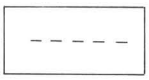
焼土分布域―― 

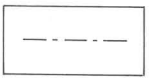
炭化物分布域――

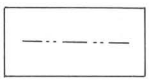
遺構図面に使用した線の種類は以下のとおりに使い分けた。

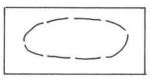
実線（太）  →遺構上端部

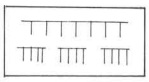
実線（細）  →遺構下端部

点線  →遺構及び土層堆定線

一点鎖線  →遺構想定線

二点鎖線  →発掘区域境界線

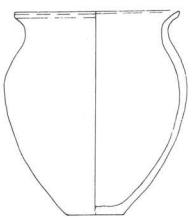
破線（細）  →カマド及び炉の範囲

実線（細）及び破線にケバ  →徴段差

遺物の記載方法

遺物の図化表示は以下のとおりである。

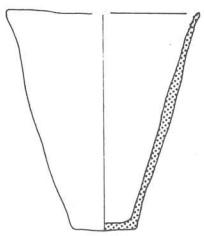
土器－①中心線を挟んで右側が土器の内面と断面の状態を表示し，左側は外面の状態を表示している。断面の表示で白抜きの場合は土師器・土師質土器（かわらけ）・縄文土器・弥生土器・陶器である。黒塗りの場合は須恵器を示す。白抜きで斜線のスクリーントーンを貼ったものは土師質須恵器を示している。なお縄文土器で繊維を含んでいるものもスクリーントーンを使用した。



土師器・土師質土器
（かわらけ）
縄文土器・弥生土器
陶器

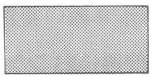
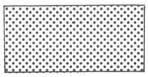
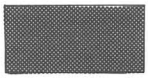
土師質須恵器

須恵器



縄文土器

②土器の内外面に色彩を有しているものはスクリーントーンを用いて表示した。使用スクリーントーンは以下のとおりである。

黒色処理  赤彩処理  墨書文字 

土器片―土器片については断面図を右側に表示し，外面の拓本は左側に付した。内面と外面に拓本の必要がある場合は，左側が外面の拓本，右側に内面の拓本を付した。

その他の遺物―土製品，石製品，鉄製品は基本的には展開図法を用い，必要と思われる部分の実測，図化はおこなった。

※本文中に遺物の出土量を表現したコンテナ（収納箱）の容量は，34×54×20㎝のサイズのポリエステル製の容器である。

※本文中の遺物記載の中で土器の質的表現（土師器，須恵器など）で土師質須恵器と表現したものは，製作技法や胎土が須恵器的であるが，焼成技法が環元焔ではなく燃焼焔で焼成されている質の土器類を環元焔須恵器と区別して土師質須恵器という名称を便宜上使用した。

第3節　調査経過

仲道遺跡の発掘調査は平成1年12月15日より平成2年3月31日までの3カ月半にわたって実施した。発掘調査の経過についてはほぼ一週間ごとに記述する。なお，整理作業は平成2年4月2日より7月3日までおこなった。

12月15（金）～22日（金）

ほぼ調査作業全般にわたっての準備をおこない，道具類，測量器材等が備いしだい試掘調査を開始する。試掘調査により遺構の範囲および堆積土の状況を確認したうえで堆積土（表土）除去作業を重機にておこなう。

1月22（月）～27日（土）

A地区のSI－02・05・07・08・09・11・13の掘り込み調査を週の前半に開始し，掘り込みが完了した住居址よりセクション実測に取りかかった。週の後半には遺物のレベリングおよび位置測量

などの作業に取りかかる。

1月29（月）～2月3日（土）

本週からはＳＩ－16・22などの住居址の掘り込み作業を開始し，前週におこなった住居址の掘り込み継続作業・セクション実測・写真撮影などを中心におこなった。

2月5日（月）～2月11日（日）

前週からの継続作業をおこなう。

12月25日（月）～28日（木）

表土除去作業および遺構確認作業をおこなうと同時にグリット杭設定のための測量を実施し，年内の全作業を28日で終了する。

1月8日（月）～13日（土）

Ｂ地区の表土除去作業と遺構確認作業をおこなう。作業終了後，遺構確認状況の写真撮影，グリット杭の設置測量，遣板の設置等をおこなう。

1月16日（火）～20日（土）

本週は降雪のため発掘作業がおこなえなかったため，出土遺物の洗浄・注記・復元・図面整理などの室内作業に終始した。

1月22日（月）～2月9日（土）

前週までの継続作業を実施すると同時に，新たな住居址ＳＩ－25・26・27・23・24・20などの掘り込み作業を開始する。この頃になると住居址内より遺物類の出土量がかなり増える。なお，本週より高校生（3年生）のアルバイト員を導入し協力員の増強をはかった。東小学校生徒の現地見学，一般町民に対しての〝体験発掘調査〟なども実施した。

2月12日（月）～2月24日（土）

本週からは住居址ナンバＳＩ－30番代の掘り込み調査を開始し，前週およびそれ以前より調査をおこなっていた遺構の平面実測さらには写真撮影などをおこなう。この頃より土坑状遺構の調査も開始する。かなり雨天の日も多かったが，遺物の洗浄作業，整理作業などは進展した。

2月26日（月）～3月3日（土）

本週からは住居址ナンバＳＩ－40番代の調査に入り，10，20番代の完掘状況の写真撮影などをおこなう。土坑状遺構の掘り下げ調査，セクション実測などもおこなった。また，住居址遺構の30番代の各遺構のピット・炉・カマドなどの精査も実施する。新たな遺構の調査としては道路状遺構（ＳＦ－01・02）の遺構面検出作業に入った。

3月5日（月）～3月10日（土）

この頃よりＡ地区は測量作業・写真撮影などの最終段階に入り，各遺構の精査もかなり進展した。8日（木）にはＡ区の空中写真撮影を実施する。

3月12日（月）～3月17日（土）

本週よりＳＦ－02の下層より確認された大溝遺構（ＳＤ－02）の掘り下げ調査を開始する。住居址ナンバー30番代の精査も進み，一部の遺構は撮影をおこなう。ＳＩ－18・28・30・23は重複による切り合いがかなり激しく，発掘作業が遅れぎみとなる。

県教育庁文化課中根氏来訪。

3月19日（月）～3月24日（土）

住居址ナンバー40番代の精査の継続。なお，50番代の掘り下げ調査も進む。ＳＤ－02の掘り下げ調査も進展し，セクション実測と一部，コンター実測を実施する。ＳＩ－49の床面より井戸遺構が確認される。

3月26日（月）～3月31時（土）

本週は住居址ナンバー40番代，50番代の精査，実測，撮影などをおこなう。遺構測量も一部を残してほぼ終了し，最終的な確認測量（補測）をおこなう。ＳＥ－01のセクション実測などもおこなう。

4月2日（月）～4月4日（水）

Ｂ地区の掘り方調査，測量，観察などの作業は完了に近ずき，4月4日をもって，仲道遺跡の発掘調査（野外調査）をすべて終了する。以後，4月5日（木）より7月3日（火）まで関城町河内公民館にて，整理作業を実施した。

第2章　位置と環境

第1節　地理的環境

関城町は，茨城県の西部に位置し，北は下館市，東は明野町，南は下妻市，西は結城市に接している。また，東には紫峰筑波で名高い筑波山を眺望できるほか，小貝川の流れによって形成された沖積低地は肥沃な水田地帯となり，これらを一望することができる。西には栃木県鬼怒沼山東麓を水源とする鬼怒川が流れ，県内でも暴れ川として有名な大河がひかえている。

地形は，西の鬼怒川と東の小貝川によって形成された沖積低地に挟まれた洪積台地が，町域の大半を占める。この洪積台地もほぼ南北に侵食する谷が何条も入り，台地を分断している。さらにこれらの谷から派生する支谷によっても台地が分断され，かなり複雑な地形となっている。また，台地の南には大宝沼跡，東南には古来より有名な島羽江跡などの低湿地をひかえている。関城町はこれらの谷，低湿地，河川などに刻まれた複雑な地形の上に営まれた町であるといえよう。

町域は，ほぼ東西10km，南北５kmで面積は34.93k㎡で，人口は１万5600人前後を有している。また，本町域は西の関本地区，中央の藤ケ谷地区，東の井上，黒子地区との三地域から構成されている。関本地区にはほぼ南北に貫く主要道路結城下妻線（結城街道）が縦貫し，井上，黒子地区には国道294号線と，この国道とほぼ並行して関東鉄道常総線が縦走しており，町域内には黒子駅がある。本町の主要産業として農業がまずあげられ，低地部では稲作農業，台地部では果樹・畑作農業が盛んで，とくに梨の生産としては関城梨の名で全国的に有名である。また，本町は県西地区でも交通の要衝であることから，この有利な条件をふるに活用し，最近では工業団地の誘致なども積極的におこない，田園都市構想のもと着実に発展をとげている。

仲道遺跡は，下館方面より延びる洪積台地の東縁部のうち，野殿，嘉家佐和あたりを付け根として，南に延びる野殿台地のほぼ中央部に位置している。遺跡地の標高は30～35ｍ前後を測れ，かなり起伏に富んだ台地上に立地する遺跡といえる。本遺跡のある台地の基盤層は成田砂層で，その上層に竜ケ崎砂礫層が堆積し，さらに上層には，常総粘土層がある。そして，この常総粘土層上に堆積するのが関東ローム層で，通称赤土と称されているこのローム層は，降下ローム層のなかでも立川ローム層と称されるローム層で，本遺跡の地山層となっている。また，この立川ローム層も本遺跡地内では，上端面より深さ50cmほどの位置で，通称鹿沼土と称する鹿沼パミス層が10～20cmほどの厚さで確認することができる。したがって，仲道遺跡は以上のような地勢環境のもとに立脚し，遺存されてきた遺跡であるといえる。そして，本遺跡の周辺部は市街化区域であることから，宅地開発などの開発事業がしだいに増えつつある状況のなかで，本遺跡の全体像を把握することがかなり難しくなってきていることも事実である。

第２節　歴史的環境

開城町には，原始・古代から近世にかけての遺跡および史跡が数多く残されている。なかでも本町船玉に所在する船玉古墳は方墳で，墳丘部の一辺が35メートルを測れる規模の古墳である。主体部は横穴式石室の形態を有しており，石室内部には壁画を描いた痕跡が認められる装飾古墳であることは考古学上かなり有名である。また中世の遺跡としては，南北朝の争乱期に常陸南朝勢力の中心拠点として，歴史上に名をとどめた関城（館）跡が，現在では国指定史跡として残っている。しかし，現在残る城跡の遺構（土塁・空堀）は室町時代以降，多賀谷氏が下妻城築城以前に拠っていた時期，あるいは戦国期において下妻城の支城として再利用された時期に改築されたものであると推定される。近世にいたると，黒子の千妙寺が隆盛をきわめ，関東の天台宗三昧流の拠点として，本堂以下の建造物などが建てられた。現在残る総本堂は元文３年（1739）に復興されたものとして，町の指定文化財となっている。なお千妙寺の開創は貞観年間（859～877）までさかのぼるといわれている。以上が本町における遺跡・史跡のなかでもとくに著名なものである。以下ここでは本町域内に所在する遺跡について，各時代別に述べることにする。

本町域内において，旧石器時代の遺跡として周知の遺跡は，関城町史編纂事業のもとに実施した遺物分布調査では確認されなかった。しかし，個人所蔵の石器類の中には，旧石器の尖頭器などもあることから存在の可能性を示唆している。昭和61年に発掘調査が実施された西原遺跡からは尖頭器，石核，剝片などの出土が報告されている。しかし，現在の段階では旧石器文化を遺跡単位で明確にするだけの調査がなされておらず，関城町においての旧石器文化を解明するには，今後の調査，研究をまたねばならない。

『関城町史』によると，縄文時代の遺跡は29か所から確認され，最も古い時期に属する土器片は前期のものであるという。この時期の遺跡としては，町内で８か所確認されている。このうち５か所の遺跡からは胎土中に多量の繊維を含む，関山式・黒浜式土器の破片が採集され，他の３遺跡からは，貝殻腹縁文の連続押捺したものや三角刺突文を連続した文様が施文されている型式の浮島式土器と称する一群の土器片が採集されている。遺跡名としては明神遺跡，三道北遺跡，宮本遺跡，上本遺跡，上木有戸Ａ遺跡などがあげられている。仲道遺跡からも本時期の土器で，遺構は伴っていなかったが，接合・復元が可能であった黒浜式土器が２個体分が出土している。

中期になると五郎助Ｃ遺跡，源次郎遺跡，下宿遺跡，上木有戸Ｂ遺跡，本田遺跡，東浦遺跡のほかに10遺跡が確認されている。このうち上木有戸Ｂ遺跡，本田遺跡，源次郎遺跡などからは，霞ケ浦沿岸に広い分布域をもつ阿玉台式土器の破片が採集されている。また，八竜遺跡，五郎助Ａ遺跡，西館遺跡などからは，加曽利Ｅ式の土器片が採集されていることが報告されている。なお，旧石器

時代の中で述べた西原遺跡からは，阿玉台式土器やそれに後続する中峠式・加曽利Ｅ式土器が出土している。とくに阿玉台式土器の中には，ほぼ同時期に並行して，南関東域で一大文化圏を形成していた勝坂式土器の文様からかなりの影響を受けたと思われる土器群も出土している。また，加曽利Ｅ式の土器についても，東北地方に分布する大木式系の要素を多分に含んだ土器群の存在があるという報告がなされている。

後期の遺跡は，南原遺跡，西館遺跡，新宮西遺跡，赤塚遺跡，新宮東遺跡，西勝遺跡などがあり，このうち南原遺跡，西館遺跡，新宮西遺跡，西勝遺跡，赤塚遺跡などからは堀之内式土器が採集される遺跡で，西館遺跡，新宮西遺跡などは堀之内式土器が後続する加曽利Ｂ式土器が採集できる遺跡である。後期になると関城町域に限らず，丘陵部あるいは台地部から低地部に遺跡の移行がみられる時期で，本町においても例外ではなく，台地部の遺跡数が減少し，かわって低湿地部にもこの時期の遺跡が確認されている。低湿地ないしは微高地に立地する遺跡として，西勝遺跡，西館遺跡，新宮西遺跡などが確認されている。なお，西原遺跡においては称名寺式土器，これに後続する堀之内式土器などの優品が出土しており，遺跡の立地としても，台地部から低湿地部にかけての緩斜面を有す遺跡であることなどから，生活環境の変化にともなう遺跡（集落）の移行を予想させるものと思われる。

晩期には，西原遺跡，新宮東遺跡，新宮西遺跡，赤塚遺跡などの４遺跡が確認されており，遺跡の立地としては微高地，低湿地などに所在する遺跡が増える傾向になる時期である。

弥生時代前期から中期における関城町域の様相を把握することは，かなり困難であるのが現状である。しかし，弥生時代も後期になると遺跡も確認されるようになり，本町においても，源次郎遺跡，三道南遺跡，北台遺跡，小池Ｂ遺跡，宮田Ａ遺跡，丸山Ａ遺跡ほか３遺跡などが確認されている。上記の遺跡から採集された弥生土器片の型式については，二軒屋式土器と十王台式土器の２系統が確認されている。二軒屋式土器は栃木県域（下野）に広く分布するもので，本県の県西地区においてもかなり広く分布していることが確認されている。また，十王台式土器は本県北部から福島県南部にその中心的な分布がみられ，県西地区，県南地区においても発見例がかなり報告されている。本町の弥生時代の遺跡で，三道南遺跡，北台遺跡，小池Ｂ遺跡，宮田遺跡などからは二軒屋式土器の破片が，丸山Ａ遺跡からは十王台式土器の破片が確認されている。仲道遺跡においても弥生時代後期に属す竪穴住居址２軒と土坑遺構２基が検出され，いずれも二軒屋式土器の範疇に属す壺形土器が３個体出土し，細片もかなり出土している。なお，平成２年から発掘調査が実施された下木有戸遺跡からも二軒屋式土器を伴出した住居址が発見されている。

古墳時代になると遺跡の数も増加し，町域内では23か所以上の遺跡を確認したことが『関城町史』で述べられている。これによると古墳時代前期（五領期）の遺跡は９か所で確認され，とくに関本

地区と糸繰川，内沼川の沿岸丘陵地にこの時期の集落遺跡が存在する可能性を示唆している。関本地区では北台遺跡，西勝遺跡，中島遺跡などが考えられ，河内，藤ケ谷地区では浅間山遺跡が予想され，井上，黒子地区においては高田遺跡が五領期の遺跡である可能性を示唆している。下木有戸遺跡は糸繰川の北岸に位置する遺跡であり，この遺跡からも五領式土器を伴う遺構が確認されている。詳細については現在整理中でたるため明らかではないが，かなりの規模を有す集落遺跡であったことが想像される。

中期（和泉期）になると関本地区では，この時期の遺跡として西勝遺跡を残してほかには確認されていないようである。しかし，この時期になると糸繰川を境に，東側の地区に同時期の遺跡が移行する傾向を『町史』では指適している。このことを裏付けるかのように，仲道遺跡さらには下木有戸遺跡からも，和泉期の遺構と遺物が多数確認され，かなり大規模な集落遺跡であることが確認されたのである。このほか，糸繰川東岸でこの時期の遺跡として確認されているのは，塚田遺跡，高田遺跡，宅地前遺跡などがある。

後期（鬼高期）では，町域内で17か所の遺跡をあげており，このうち地区別では関本地区４か所，河内地区８か所，黒子地区５か所を確認している。そして，関本地区と河内・黒子地区とでは遺跡数の割合に差が出ることなどと，関本地区に古墳が数多く造られている事実から，墳墓域と集落域との関係を国造の支配形態の中でとらえようとしている。この時期の遺跡で，前の和泉期より継続している遺跡は西勝遺跡，下木有戸遺跡，宅地前遺跡などが予想されている。なお，下木有戸遺跡においては発掘調査によって鬼高期の住居址群が多数確認されている。本遺跡でも古墳時代の遺構・遺物は和泉期から鬼高期まで確認することができた。

本町域内に残る古墳は，墳丘部の認められる規模のもので30基を越える古墳が確認されている。しかし，大正４年に谷貝彦一郎が書残した「真壁郡関本町史関係略図」の確認段階での数とを合わせると，本町域内においては70基（関本・河内・黒子地区合せて）以上の古墳が存在していたことがわかり，これらの古墳の中でも横穴石室をもつ船玉古墳は，平面プランが方墳で，装飾古墳としても考古学上貴重な古墳といえる。さらに桜塚古墳，茶焙山古墳などは平面プランを前方後円墳に推定しており，年代としては６世紀初頭の築造と考えている。

律令期における関城町域は，現在協和町に郡衛の中心を置く新治郡に属し，町域内にもいくつかの郷が存在していたことが推定されている。この時期の遺跡分布は律令制下の行政単位の郷あるいは里と深くかかわり，かなり整然とした行政区画のもとで集落構成がなされていたことが想像できる。町域内において，この時期の遺物を採集できる遺跡は26遺跡にのぼることが，分布調査によって確認されている。そして，これらの遺跡を大別すると，船玉（関本）地区，上野地区，河内（藤ケ谷地区），井上地区の４地区に集中する傾向を『町史』では指適している。船玉・関本地区の遺

跡としては，明神遺跡，南原遺跡，下宿遺跡，三道遺跡，古稲荷遺跡，切掛遺跡，南館内遺跡，五郎助遺跡。河内・藤ケ谷地区では，小池遺跡，宮田遺跡，福根遺跡。井上地区では，高田遺跡，打木崎遺跡，丸山遺跡，仲道遺跡などが，この時期の遺物が散布している遺跡として確認されている。本仲道遺跡においては，部分的ではあるが今回の発掘調査によって，律令期の竪穴住居址とこれに伴う遺物類も多量に出土している。

中世にいたると，古代からの行政単位であった新治郡が東・中・西の3郡に分割され，本町域は新治西郡と呼ばれていた。この西郡もやがて，南・北両条に分割され，新治西郡南条となり，やがて関郡と呼ばれるようになった。さらに西郡南条の東南部と小貝川東岸部がともに荘園として立荘され下妻荘と称されるようになる。そして，この関郡と下妻荘とが，本地方に割拠する武士たちの支配する経済的基盤であると同時に，政治的な紛争に展開する要因を多分に含む下地でもあった。関郡に進出した大方氏は12世紀後半には同郡の支配を掌握したが建保元年（1213）の和田義盛の乱で没落する。こののち，関氏が関郡・大方郷の地頭職を得て支配権を収めるが，宝治元年（1247）の宝治合戦で三浦一族とともに自滅する。いっぽう下妻荘においても常陸平氏系の下妻氏から秀郷流小山氏系の下妻氏へと支配権が移っていった。鎌倉時代も後期になると関郡，下妻荘ともに北条一族あるいはその被官によって支配の実権が脅かされるようになり，これらの不満，反発は反北条勢力として，鎌倉幕府滅亡へとみちびく原動力となっていくのである。鎌倉幕府打到後，後醍醐天皇や公家を中心とした建武政権の樹立はみたが，これもまた足利尊氏を旗頭とした武家勢力との対立がもとで，やがては崩壊につながることになる。本町域においても，この南北朝の争乱期には南朝方の拠点として一躍歴史の表舞台にのぼる関城（館）跡が，国指定として残っている。そして，この関城合戦と呼ばれる抗争は，常陸国内における南朝勢力の最終的な抵抗戦で，関城の落城，さらに諸地域での敗北などが色濃くなってきた南朝方は，事実上常陸より一掃される結果となった。以降，本町城が属す関郡には足利尊氏の信頼を得た結城直光が進出し，鎌倉府開設後においても支配を続けることになる。しかし，鎌倉公方の専制化が強まるにつれて，関東管領上杉氏，さらには室町幕府とのあいだに軋轢が生まれた。その結果，永享の乱，結城合戦の後には，結城氏の支配から関東管領上杉氏の管轄下に本町域も含まれるようになっていった。上杉氏の隆盛も享徳3年（1454）の上杉憲忠打到をさかいに鎌倉公方，結城氏など反上杉勢力が威勢回復し，これにともなって結城氏の家臣として，本領を武蔵国騎西郡多賀谷郷（埼玉県騎西町）に有する多賀谷氏が，鎌倉公方足利成氏から関郡の支配を認められ，このときに，関城合戦の際落城した関城（館）跡を再構築したものと思われる。以後，多賀谷氏は下妻荘方面への勢力拡大と同時に，下妻城を新たに築城し，常陸西部から下総東北部までに支配領国の範囲を広げていくのである。

16世紀前半になると多賀谷氏が結城氏の勢力を上回るようになり結城氏，山川氏とのあいだで，関

郡をめぐる争奪戦が頻繁となる。しかし，16世紀の後半になると結城氏と支配領域を接する佐竹氏などが同盟者の立場を示すようになり，この時期になると，小田原に本拠をもつ後北条氏の勢力が強大になり，多賀谷氏はもとより，結城氏，佐竹氏にとっても後北条氏の勢力は脅威的な存在になりつつあった。このような状況の中で多賀谷氏は，大宝城，関城等を修築するとともに関城地域の掌握につとめ，在地勢力を自らの支配圏強化のために，吸収していったと考えられる。本町域内の城郭遺跡すなわち関城，船玉城，関本小詰城，関本館などはその創築が，南北朝時代，室町時代の初期までさかのぼれると思われるが，しかし，最終段階での遺構は，多賀谷氏の支配下の中で軍事面，治政面にその拠点として，たび重なる改修，増強がおこなわれていた時期の城郭と考えられる。

近世では，本町域が幕領，旗本領，寺社領，藩領など複雑に入りくんだ支配地のもとで農村を形成していた。船王・関本地区は結城，下妻間を結ぶ街道の要所で，鬼怒川の水運の拠点としてもにぎわいをみせていたことが窺える。また，黒子地区も下妻，下館間の街道が縦貫し，黒子辻周辺には中世にその創建を求められる千妙寺が存在していたことから，千妙寺の隆盛とともに門前には市がたち，やがて，黒子辻も門前町として発展していったことが想像される。

参考文献

『関城町史』通史編　上巻　　関城町

『関城町史』別冊史料編　関城町の遺跡　　関城町

『関城地方の中世城郭跡』　　関城町教育委員会

『関城町の文化財』　　関城町教育委員会

『西原遺跡発掘調査報告書』　　関城町教育委員会

『角川・日本地名大辞典』8　茨城県　　角川書店

『茨城県遺跡地図』　　茨城県教育委員会

第3章　調査成果

第1節　遺構と遺物

(1) 竪穴住居址（SI）

1号住居址（第6・7図）

本住居址は，A区，6・7－Bグリットから検出され，A区の北西端に位置する。東5mに6号住居址，北2mには1号溝遺構と1号道路状遺構がある。

規模は南北4.30mで，東西は調査区域外であるため不明である。形状はほぼ方形を呈するものと推定される。主軸はN－81°－Eを指している。床はローム層上を踏み固め，壁周縁部は比較的軟らかい土間となっており，床面全体からみるとかなり凹凸があるほか，全面的に灰白粘土塊が散在していた。壁面は検出できた3方向についての立ちあがり状況および高さは，東側は80°で立ちあがり24cmほどの高さである。西側は未掘のため不明。南側は77°で立ちあがり21cmの高さである。北側は76°で立ちあがり16cmの高さを有す。ピットは南隅部で1個確認され，その規模は47cm×58cm，深さ12cmであった。このピットに対応するピットは他所からは検出できなかった。

カマドは東壁中央やや南寄り部分から検出され，焚口から煙道部までが1m，両袖の最大幅が70cm，現高が21cmであり，一部を残して攪乱をうけていた。構築材は灰白色粘土と砂粒土の混合土であった。覆土は褐色土を主体土とした自然堆積の状況を呈していた。

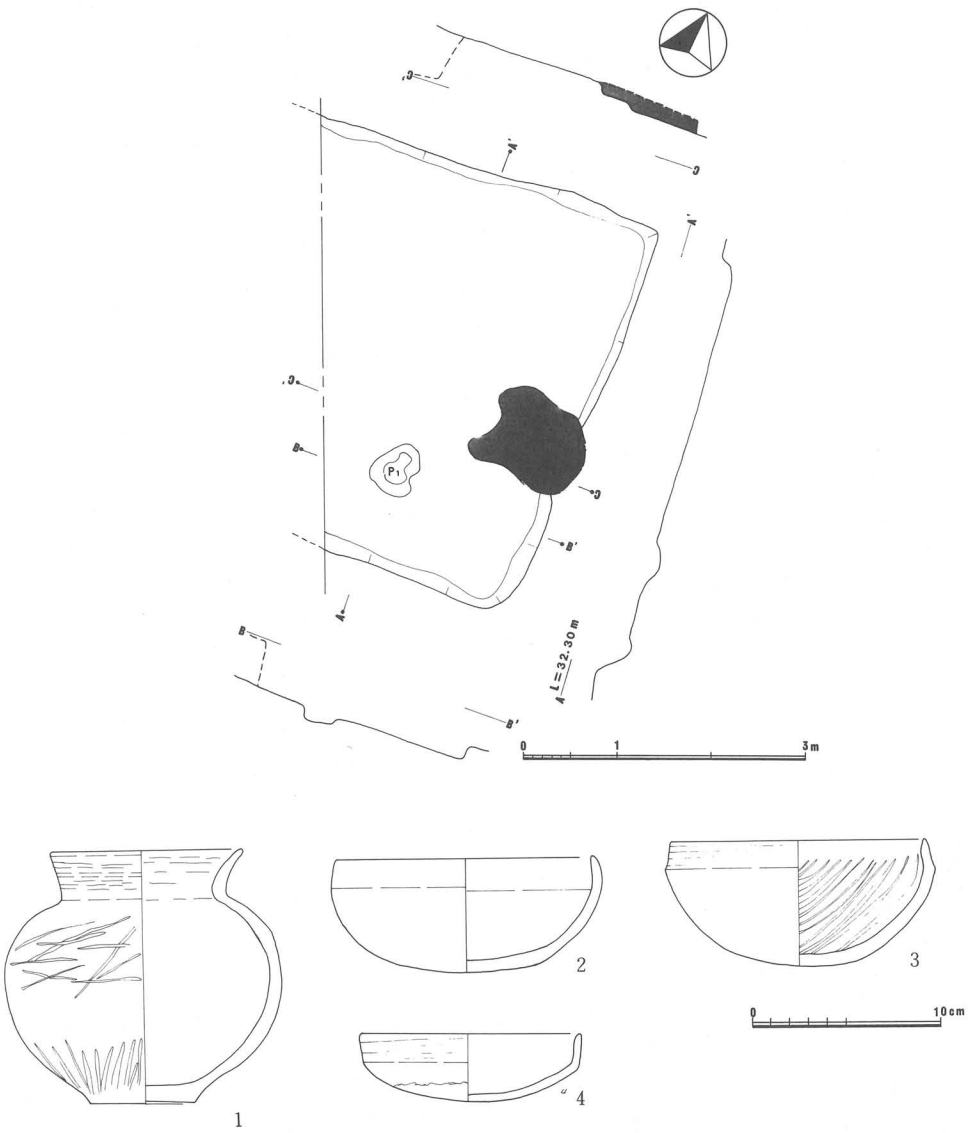
遺物は，6図の1，2，3，4の4点のほか細片が若干出土した。1．小型の甕でカマド右側袖部の外側床面上から出土した。2．埦で1の東側20cm程の床面から出土している。3．1の西隣より出土し，タイプとしては2と同種の埦である。4．2の南側50cm程の床面上より出土した。

本住居址より出土した完形または完形に近い土器類はすべてカマド袖右側の床面上より出土している。

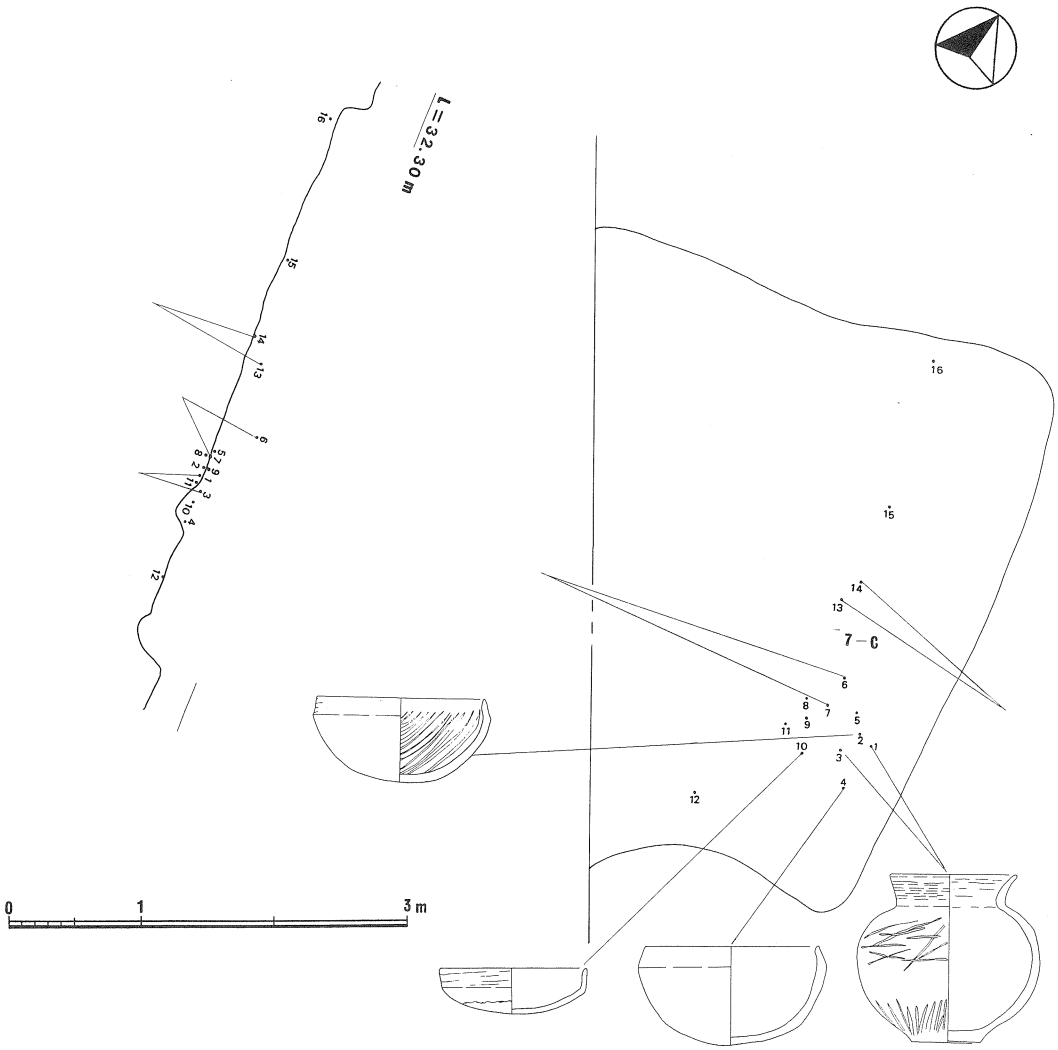
（表1）　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第6図 1	甕 （土師器）	A 11.2cm B 5.7cm C 13.4cm	胴中央部は大きく球状に膨み，口辺部は大きく外反して開く。	内外面ともにナデおよび横ナデをおこない，外面は不明確ながらミガキを若干施している。	A 砂粒，長石 B にぶい褐色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A 14.0cm B ―― C 5.8cm	丸底，底部から体部にかけてはほぼ半球状を呈す。口辺部は内傾して開く。	内外面ともナデを施した体部で、口辺部内外は横ナデを施す。	A 砂粉，長石 雲母 B 橙色 C 普通	

3	坏 (土師器)	A 13.6cm B ——— C 6.7cm	丸底，底部から体部にかけてほぼ半球状を呈し，大きく内彎して立ちあがる。口縁部はやや内傾ぎみに開いている。	内外面はナデを施し，内面には縦位にミガキを入れている。口辺部は外面が横位のナデを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
4	坏 (土師器)	A 11.8cm B ——— C 3.6cm	丸底，体部はやや内彎ぎみに立ちあがり，口辺部はほぼ直立して開く。	内外面ともナデを施し，口辺部外面は，横位のナデを施す。底部はヘラ削りの後ナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	



第6図　1号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第7図　1号住居址遺物分布図

2号住居址（第8・9・10・11図）

本住居址は，A区，10－B・Cグリットから検出され，A区の北西側に位置する。東には4，5号住居址が隣接している。

規模は南北4.18m，東西4.18mである。本住居址の南西コーナー部は調査区域外のため確認はできなかったが形状は方形と推定できる。主軸はN－22°－Eを指している。床はローム層上面を利用しており，全面的に平坦な床となっている。カマド周辺部，とくに焚口前面の床は一部貼り床状を呈し他の床面に比べると一段高くしかも堅緻な床となっている。壁面は各方向とも確認できたが南西コーナー部は調査区域外のため未検出である。立ちあがり状況および高さは東側が76°で立ち

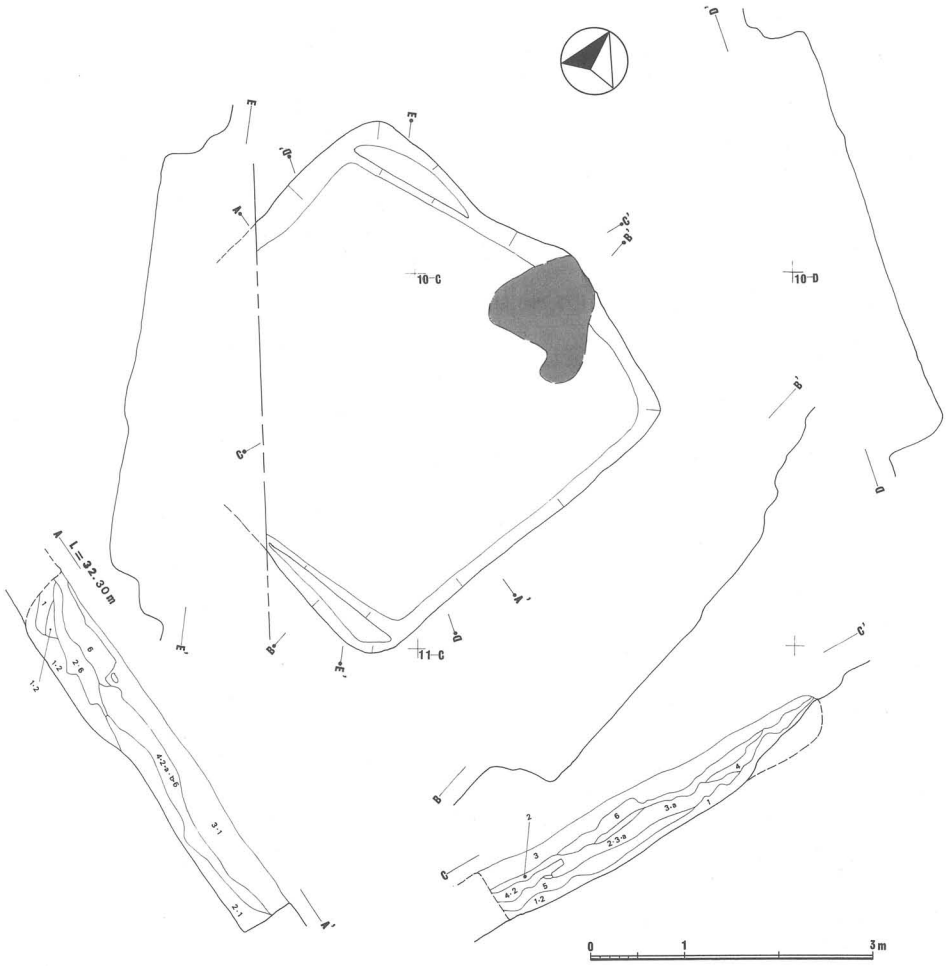
あがり61cmほどの高さである。西側は70°で立ちあがり，高さは65cm，南側は72°で立ちあがり，高さは62cm，北側は74°で立ちあがり，高さは61cmを測ることができた。なお，北西，南東コーナー部には，わずかながら段状を呈す部分が確認できたが，これは本住居址構築前の竪穴の残存であることが切り合い状況から推定できた。壁溝，貯蔵穴はなく，ピットについても検出されなかった。

火床遺構としては，カマドが北壁中央やや東寄り部分から検出され，その規模は両袖間の最大幅が1m，焚口から奥壁部までの最大幅が96cm，現高が40cmを測ることができたが，煙道部は明確に検出することができなかった。内部の堆積状況は焼土および灰の堆積が良好で，上部には構築材の灰白色粘土と砂粒土が崩れた状態で堆積していた。構築材の中には若干の土師器片が含まれていたが，特別に補強材として混入した状態は認められなかった。

覆土は褐色土，黒褐色土，暗褐色土などがほぼ層状に堆積しており，自然堆積の状況を呈していた。

遺物は，10図の14点が実測可能であった。1　甕で本住居址のほぼ中央部より出土し，床面から堆積土中にかけて出土した破片を接合したものである。2　甕の口縁部から胴下半部までの破片で本住居址のほぼ中央部床上面から出土している。

3　甕の口縁部から胴中央部までの破片で，北西コーナー部の堆積土上層部より出土した。4　甕の口縁部から胴中央部までの破片で，カマドの焚口右側の床面上に散在していた破片を接合したものである。5　須恵器の小型短頸壺で住居址中央部よりやや西側の床上面10cmほどの堆積土中より出土。6～13須恵器の坏で本住居址の覆土下層より出土している。14坏で，胎土，成形の技法は須恵器に類似するもので焼成は燃焼焔で焼成されているもので便宜上土師質須恵器と称されているものである。本住居址内での土器の出土状況はほぼ散在した状況で出土しており，いずれの遺物も床面から覆土上層までの範囲にわたって出土した。

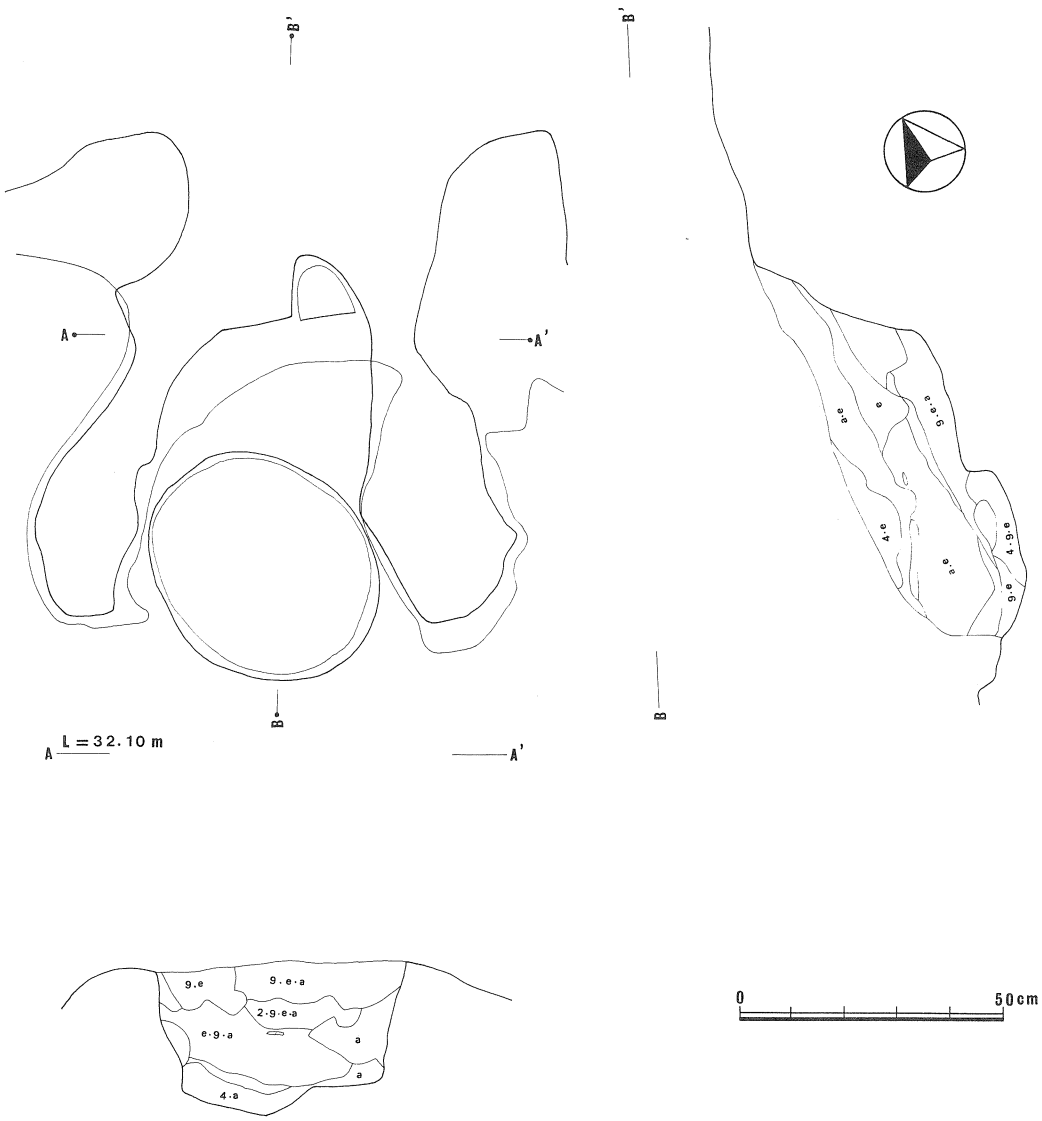


第8図　2号住居址平面実側図

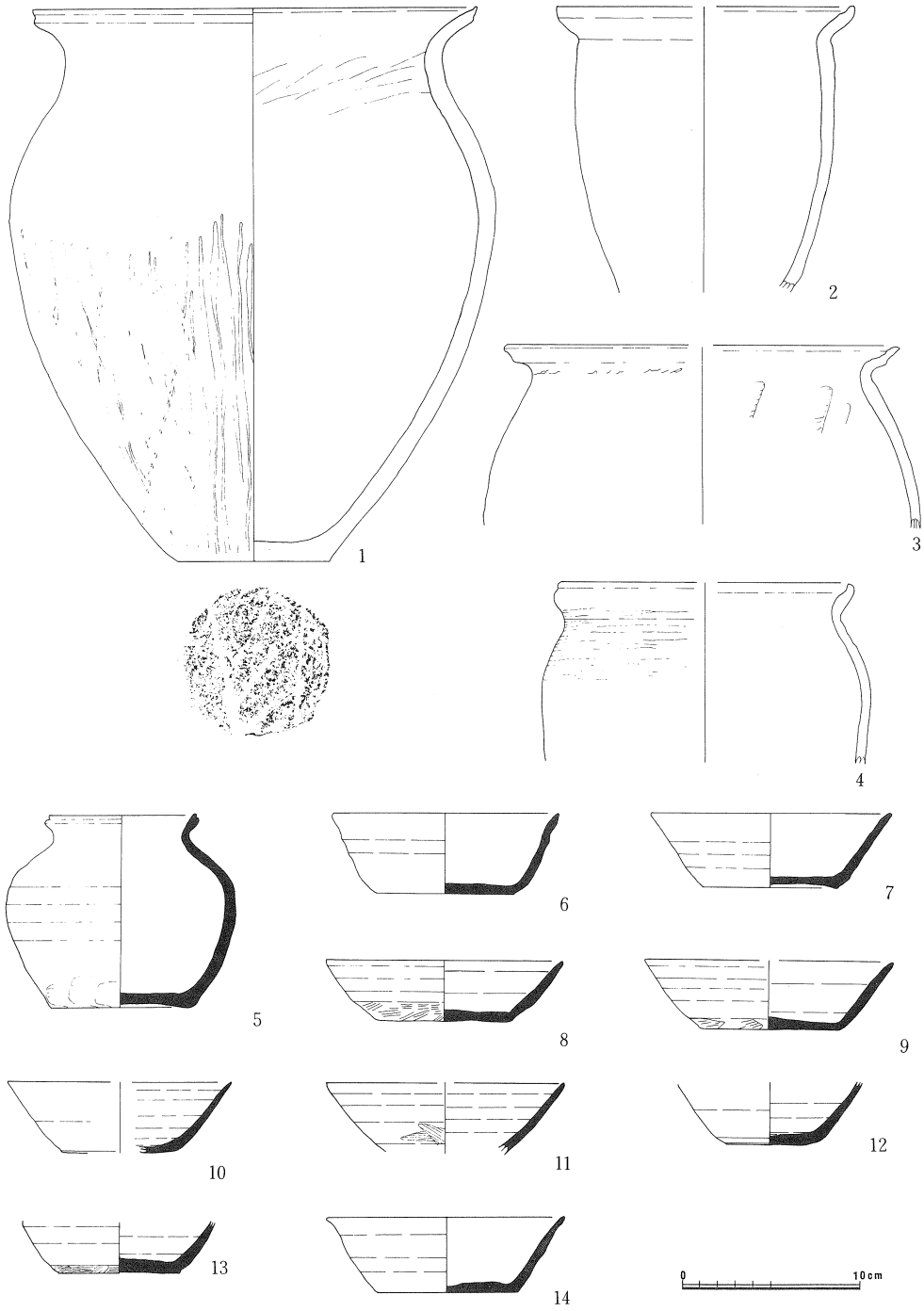
(表2)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第10図 1	甕 (土師器)	A 24.8cm B 8.6cm C 31.2cm	最大径を胴上半部に有す。口辺部は大きく外反して開き，口縁部外側に凹状帯を周回させている。胴部は下端部より内彎ぎみにたちあがり，上端部では内傾して頸部にいたる。	内外面ともに下地はナデを施しているが，外面胴下半部には縦位にミガキを施している。底部には木葉圧痕が認められる。	A 砂粒・砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
2	甕 (土師器)	A 16.8cm B ——— C 16.2cm	下端より外傾して立ちあがる胴部は，中央部あたりで，ほぼ直立し上半部あたりになるとやや内傾ぎみとなって口辺部にいたる。口辺部は，大きく外反したのち，口唇部はわずかに上方に向ってのびる。	内外面ともにナデを施している。	A 砂粒・砂礫 B にぶい赤褐色 C 良好	

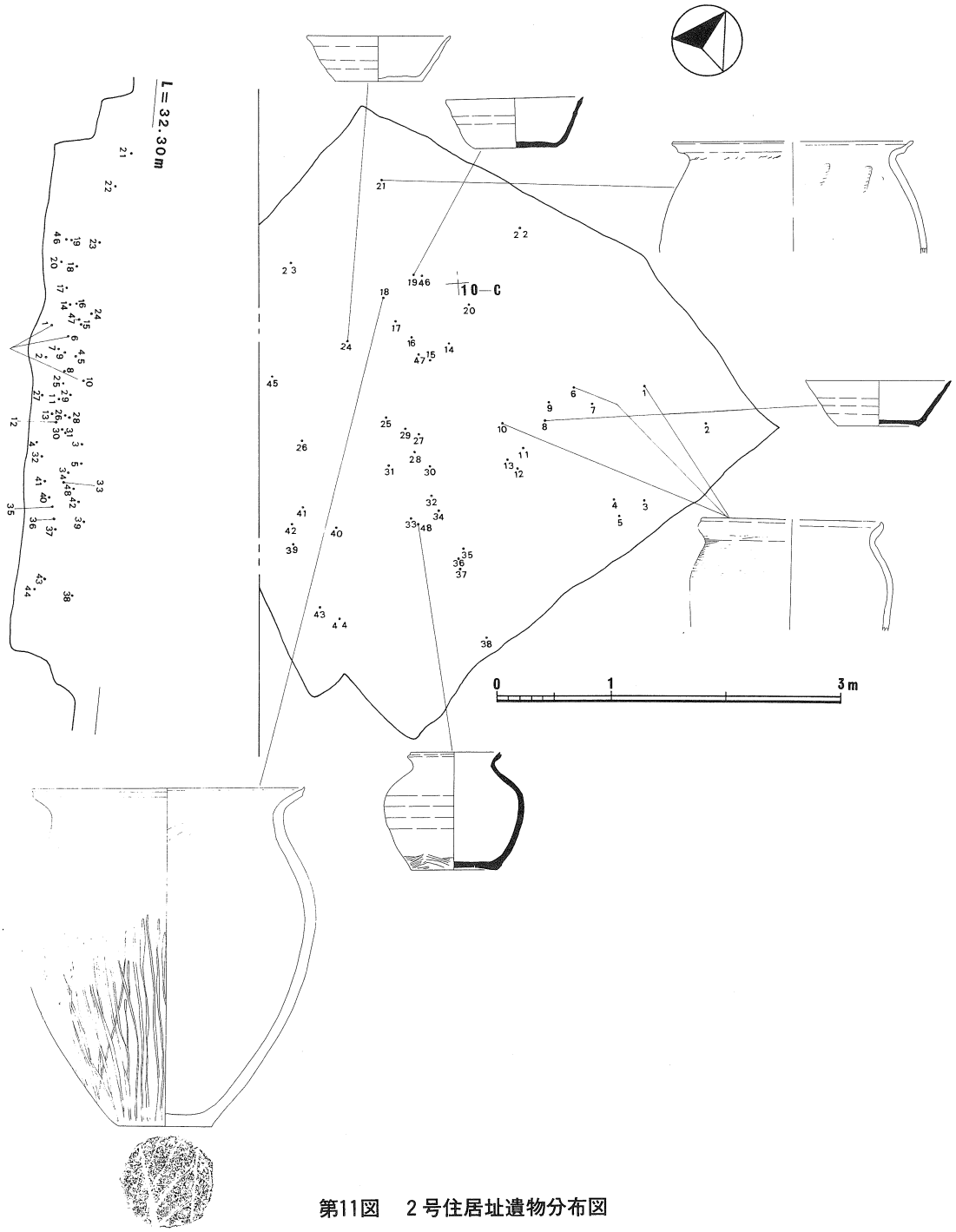
3	甕 (土師器)	A 22.2cm B ——— C 10.1cm	胴上半部から大きく内彎し，口縁部は段状を呈しながら口唇部にいたり大きく外反する。	内外面ともにナデをおこない，内面の頸部にはヘラ削りの痕跡をとどめる。	A 砂位・砂礫 雲母 B 灰黄褐色 C 普通	
4	甕 (土師器)	A 10.4cm B 18.0cm C 10.1cm	直立して立ちあがる胴部は内彎して頸部にいたる。口縁部はわずかに外反してから口唇部が直立して開く。	内外面はナデをおこなっている。	A 砂粒・雲母 B にぶい橙色 C 普通	
5	短頸壺 (須恵器)	A 8.7cm B 8.0cm C 10.8cm	胴部の最大径は上半部に有し，大きく内傾した部分が頸部で，口辺部は大きく外反して開く。	胴部内外面は横ナデを施し，整形をおこなっている。胴下半部はヘラ削り調整をおこなっている。	A 砂粒 B 灰白色 C 良好	
6	坏 (須恵器)	A 12.8cm B 7.5cm C 4.6cm	平底，体部は直線的に外傾して立ちあがる。	底部はヘラ削り調整を施す。水挽き成形の後横ナデを施す。	A 砂粒，砂礫 B 灰色 C 普通	
7	坏 (須恵器)	A 13.7cm B 7.6cm C 4.2cm	ややあげ底ぎみの平底，体部は直線的に外傾して開く。口唇部は丸味を有す。	水挽き形成。底部は回転ヘラ切り後，一方向のヘラナデ調整をおこなっている。	A 砂粒　砂礫 B 灰色 C 普通	
8	坏 (須恵器)	A 13.8cm B 7.8cm C 3.4cm	底部は平底。体部は大きく外傾して開く。	水挽き形成。底部は一方向の手持ちヘラ削り調整，体部下端部はヘラ削り調整。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
9	坏 (須恵器)	A 14.0cm B 8.0cm C 3.9cm	平底，体部は直線状に大きく外傾して開く。	水挽き成形。底部二方向の手持ちヘラ調整，体部下端はヘラ削り。	A 砂粒 B 灰白色 C 普通	
10	坏 (須恵器)	A 12.0cm B 6.0cm C 3.9cm	平底。直線状に外傾して開く体部。	底部は回転ヘラ切り後，手持ちヘラ削り。体部はヘラ削り後，ナデ整形をおこなっている。	A 砂粒怯パミス B 灰色 C 普通	
11	坏 (須恵器)	A 13.4cm B ——— C 3.8cm	大きく外傾して立ちあがる体部。	体部下位にヘラ削り痕を残す。	A 長石，パミス スコリア B 灰色 C 普通	
12	坏 (須恵器)	A ——— B 4.7cm C 3.5cm	大きく外傾して開く体部。	底部は回転ヘラ切り後，ヘラ削り調整。	A 長石，スコリア，小礫 B 暗灰色 C 普通	
13	坏 (須恵器)	A ——— B 6.8cm C 2.9cm	平底，大きく外傾して立ちあがる体部。	水挽き成形。底部は回転ヘラ切り後，一方向のヘラ削り調整。体部下端はヘラ削り。	A 雲母，長石，スコリア B 灰色 C 普通	
14	坏 (土師質 須恵器)	A 13.4cm B 8.0cm C 4.2cm	平底，外傾して立ちあがり，口縁部でやや大きく外反して開く。	水挽き成形後。内外とともに横ナデを施す。底部は回転ヘラ切りの後ヘラナデ調整を行う。	A 砂粒，小礫 B にぶい橙色 C 普通	



第９図　２号住居址・カマド平面実側図



第10図　2号住居址出土遺物実側図



第11図　2号住居址遺物分布図

3号住居址（第12・13・14図）

本住居址は，A区，9－Eグリットから検出され，A区の北西側に位置する。西2mには6号住居址，南5mには5号住居址があり，本住居址の上層には1号溝遺構と1号道路状遺構が重複して

いる。

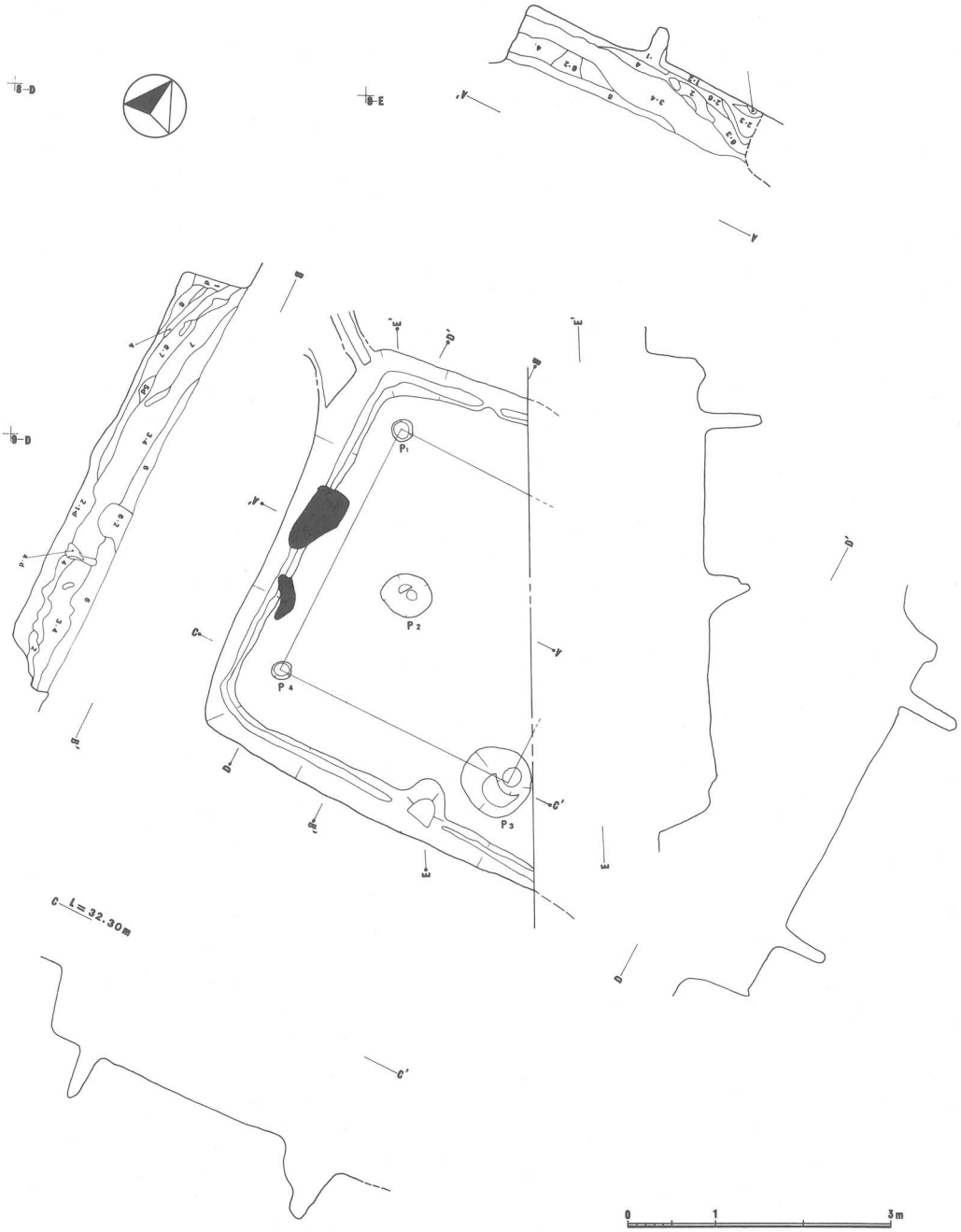
規模は南北4.80m，東西は本住居址の東側部分が調査区域外であるため不明。主軸はN－0°である。床はローム層中を掘り込んだ掘り方底面の上に約10cmの貼り床を構築しており，ほぼ平坦ながら，かなり堅緻な床である。壁面の立ちあがり状況および高さは東側が不明。西側は77°で立ちあがり，高さは70cm，南側は80°で立ちあがり，高さは71cm，北側は77°で立ちあがり，高さは53cmを測ることができた。検出された壁面の周りにはそれぞれ壁溝が検出され，その規模は西壁溝の幅10cm，深さ2cm，南壁溝の幅11cm，深さ5cm，北壁溝の幅13cm，深さ9cmを測ることができた。なお，南壁の中央部からは小規模ながら土壇状の部分が確認され，本住居への入口施設に関連する部分ではないかと推定される。ピットは4個検出されたが，本住居址のメイン柱の柱穴はP1・P3・P4の3個が推定できる。規模はP1の口径20cm×19cm，深さ65cm，P2の口径44cm×48cm，深さ48cm，P3の口径73cm×72cm，深さ75cm，P4の口径17cm×18cm，深さ60cmであった。P3については掘り直しがなされたと思われる痕跡が認められた。火床遺構は確認できなかった。

覆土は黒褐色土，褐色土，暗褐色土が主体土で上層の一部が1号溝遺構によって撹乱され，その部分をのぞくとほぼ自然推積の状況をしめしていた。また，P2付近の床や西側壁溝の一部には焼土と灰の混合土が散布していた。

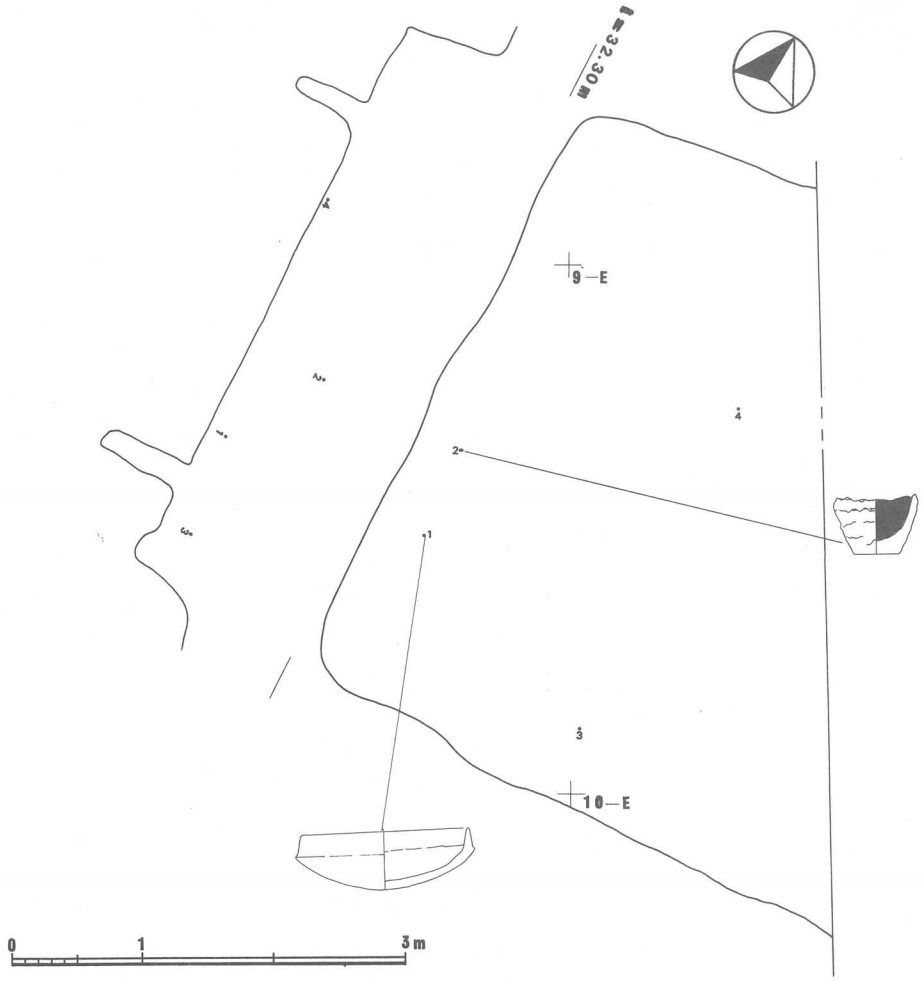
遺物は土師器片が若干覆土中より出土し，14図の図化可能な3点の土器が出土した。1　手づくね土器で西壁溝上部より出土した。2　坏で，1の手づくね土器の南60cmの床上面より出土し29た。3　坏片で覆土中より出土している。

(表3)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

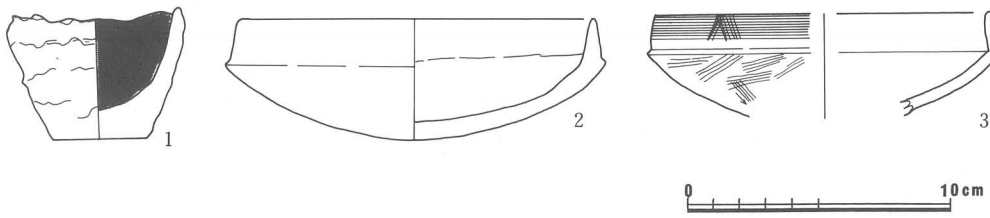
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第14図 1	手ぐつね	A 6.4cm B 3.7cm C 4.8cm		内面は若干ナデを施し，黒色を施す。外面はほとんど無整形。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A 13.8cm B ―― C 4.5cm	丸底で体部は内彎して立ちあがる。口辺部下の稜は明確に残す。	内面及び外面口辺部は横ナデ，外面体部はナデを施す。	A 砂粒 B にぶい褐色 C 普通	
3	坏 （土師器）	A 12.7cm B ―― C 3.9cm	外面に稜を残し，口辺部はやや内傾ぎみに立ちあがる。	外面口辺部は横ナデ，体部にはヘラ削りを残す。	A スコリア 雲母 長石 B 黒褐色 C 普通	



第12図　3号住居址平面実測図



第13図　3号住居址遺物分布図



第14図　3号住居址出土遺物実測図

4号住居址（第15・16・17図）

本住居址は，A区，11・12－Bグリットから検出され，遺構全体の3分の2程度が5号住居址によって切られていた。なお，北には2号住居址が隣接している。

規模は南北5.20m，東西は東側が5号住居址によって切られているため不明である。形状は検出できたコーナー部分から推定すると隅丸方形である。主軸はN－27°－Wを指している。床はローム層上を硬く踏み固めたもので，若干の凹凸はみられた。床の南側部分には多量の焼土が確認できたが，比較的炭化物がみられない点から火災住居址とは断定し難い。壁面の立ちあがり状況および高さは，東側が5号住居址によって切られているため不明。西側は79°で立ちあがり，高さは59cm，南側は80°で立ちあがり，高さは49cm，北側は73°で立ちあがり，49cmを測ることができた。

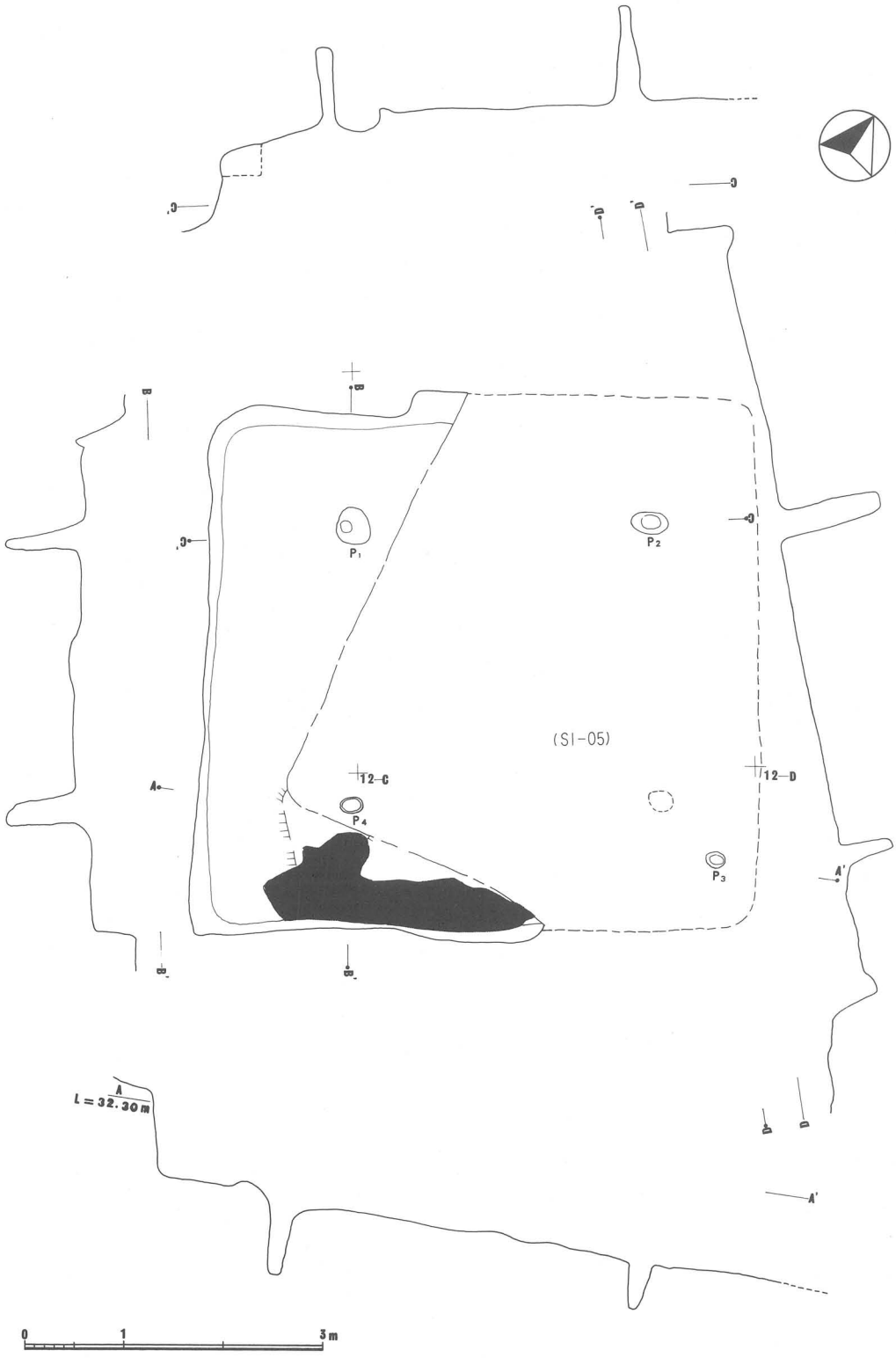
壁際には局部的に凹部がみられたが確認した段階では壁溝とは考えられなかった。ピットは4個確認できたがP1以外は5号住居址の床面より検出できたが，P3については本住居のピットと断定するには位置が若干ずれると思われたが，P3を想定した位置からは検出できなかった。規模はP1口径24cm×23cm，深さ66cm，P2口径23cm×23cm，深さ97cm，P3口径14cm×16cm，深さ52cm，P4口径27cm×25cm，深さ84cmを側ることができた。火床遺構は検出できず，おそらくは5号住居構築の際に削り取られたものと推定できる。

覆土は暗褐色土が主体土で，層土には若干のロームブロックが含まれていた。

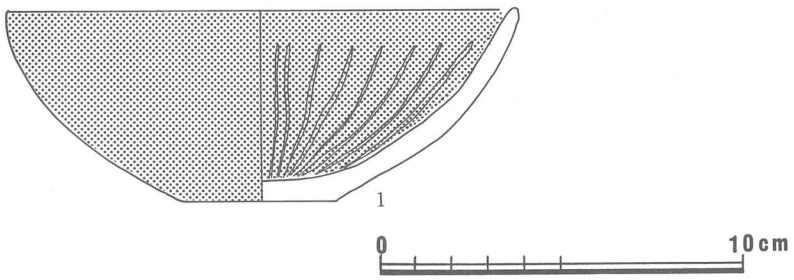
遺物は，16図1の坏が1点西コーナー部分から出土したほかは小破片が若干出土したのみである。

（表4）　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

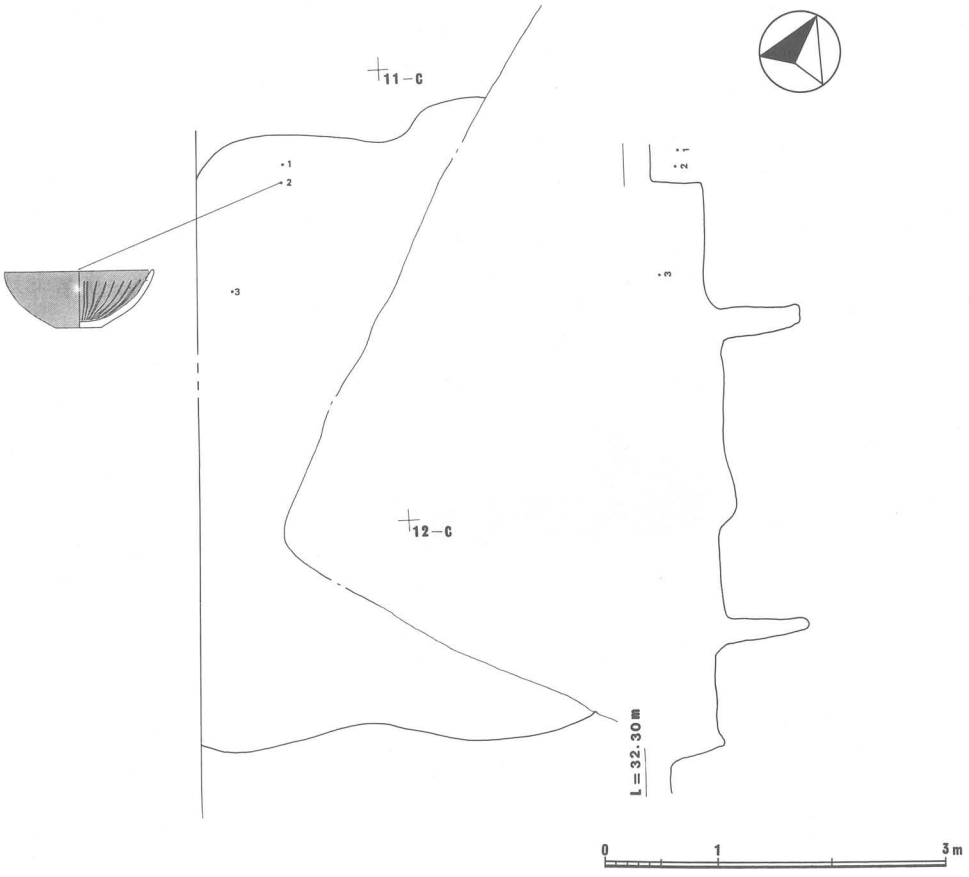
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16図 1	坏 （土師器）	A 14.2cm B 4.2cm C 5.2cm	大きく内彎しながら立ちあがる体部で口縁部はやや外反ぎみである。	内面には縦位にミガキを施す。 内外面に赤彩を施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 普通	



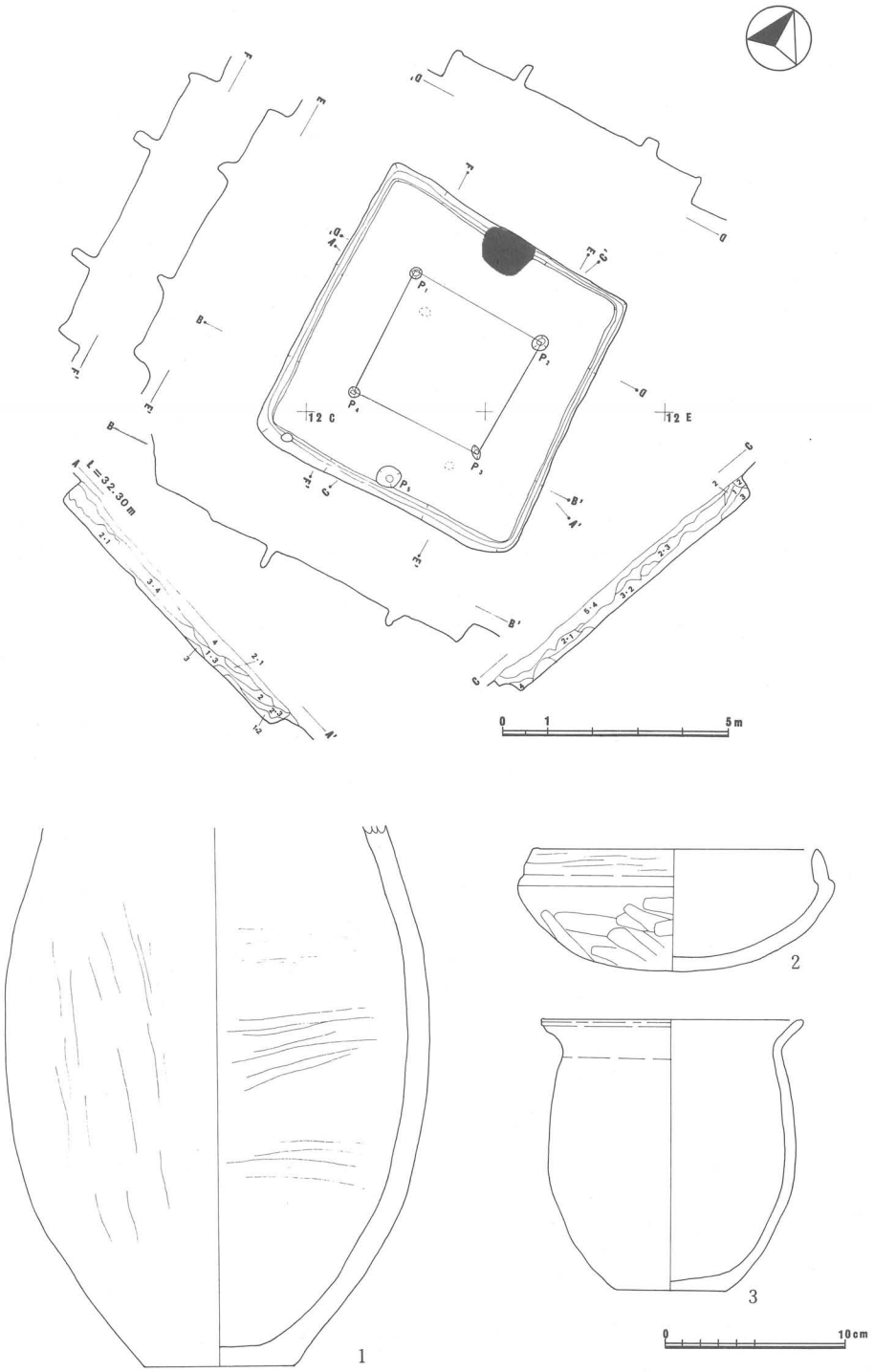
第15図　4号住居址平面実測図



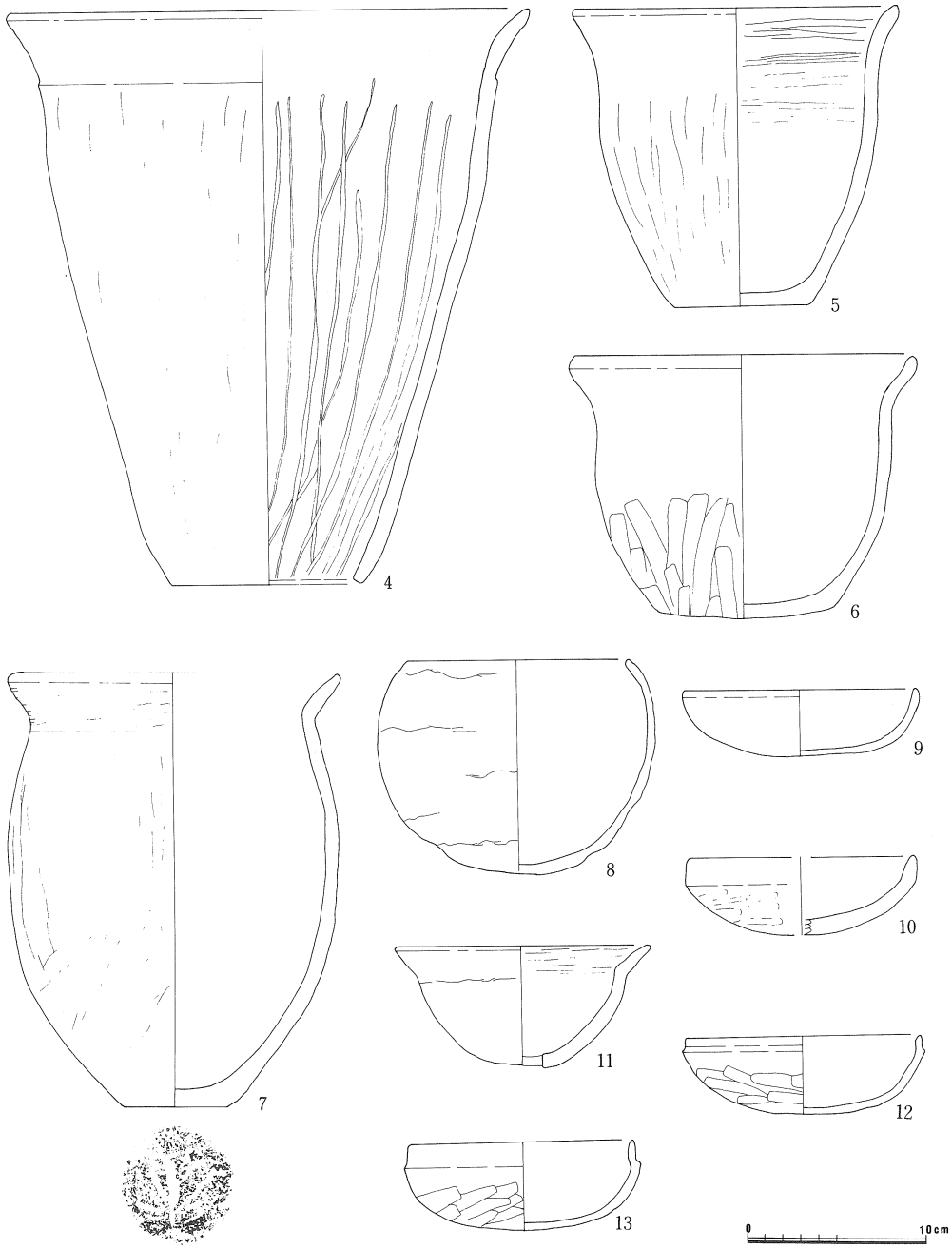
第16図　4号住居址出土遺物実測図



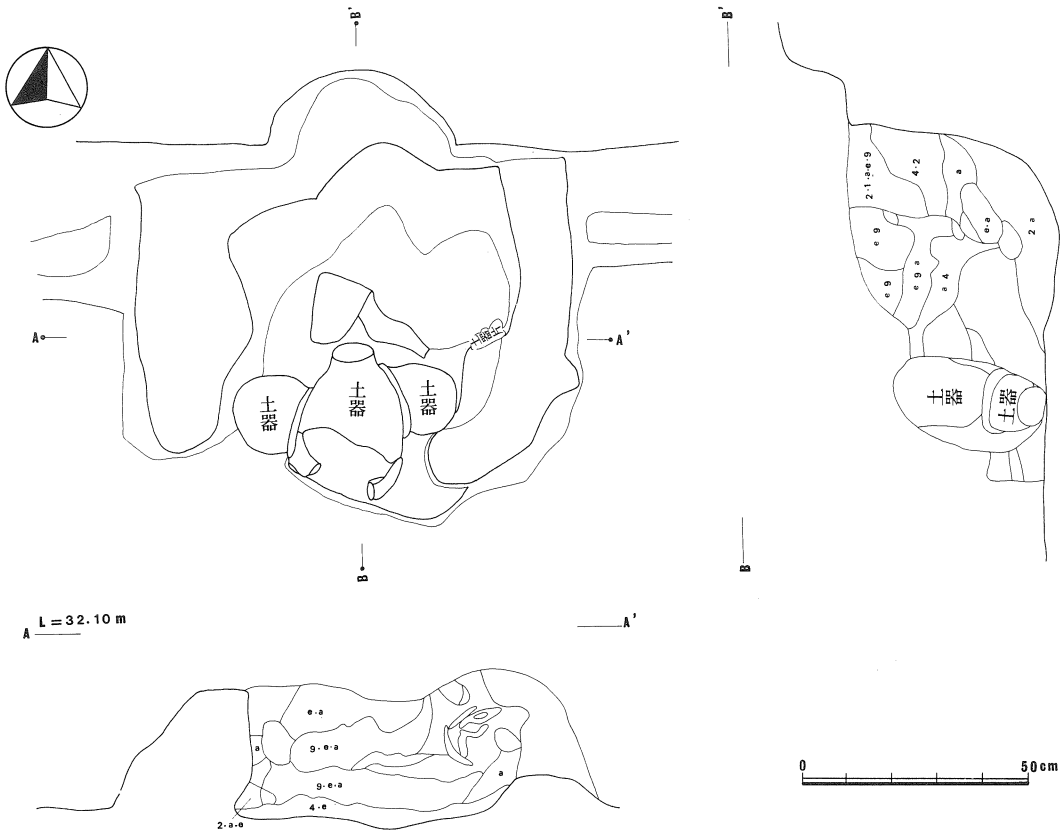
第17図　4号住居址遺物分布図



第18図　5号住居址平面実測図・出土遺物実測図(1)



第19図　5号住居址出土遺物実測図(2)



第20図　5号住居址・カマド平面実測図

5号住居址（第18・19・20・21図）

本住居址は，A区，11－C・D，12－C・Dグリットから検出された。西には2号住居址が隣接し，4号住居址を切っている。東4mには7号住居址がある。北5mには3号住居址が位置している。

形状は隅丸方形を呈す。規模は南北6.30m，東西6.22mを側ることができた。主軸はN－0°を指している。床はローム層上を堅緻に踏み固めた床面で全体的に平坦である。壁面の立ちあがり状況および高さは，東側が86°で立ちあがり，高さは57cm，西側は87°で立ちあがり，高さは66cm，南側は86°で立ちあがり，高さは55cm，北側は90°で立ちあがり，高さは58cmを側れた。検出された壁際からは壁溝が明確に確認され，その規模は，東壁溝の幅14cm，深さ10cm，西壁溝の幅17cm，深さ8cm，南壁溝の幅20cm，深さ11cm，北壁溝の幅17cm，深さ10cmを側ることができた。

ピットは5個確認され，その規模はP1の口径24cm×24cm，深さ48cm，P2の口径30cm，×35cm，深さ45cm，P3の口径30cm×24cm，深さ38cm，P4の口径22cm×20cm，深さ52cm，P5の口径34cm，

×45cm，深さ60cmを測ることができた。このうちＰ１，Ｐ２，Ｐ３，Ｐ４がメイン柱の柱穴と考えられる。

火床遺構としては，北壁中央部よりカマドが検出された。一部はトレレチャーによる撹乱をうけているが，ほぼ良好な状態であった。規模は両袖間の最大幅が95cm，焚口から奥壁部までの幅が85cm，現高が44cmを測ることができた。奥壁部には半円状を呈した煙道部と考えられる削り込みが確認されたが規模としては比較的小型の煙道と推定される。カマド内部は焼土，灰が比較的良好な状態で堆積しているほか土師器の甕３点，坏１点が重ねられた状態で出土した。構築材は灰白色粘土と砂粒子が混入され，さらに焼土粒も含まれていた。

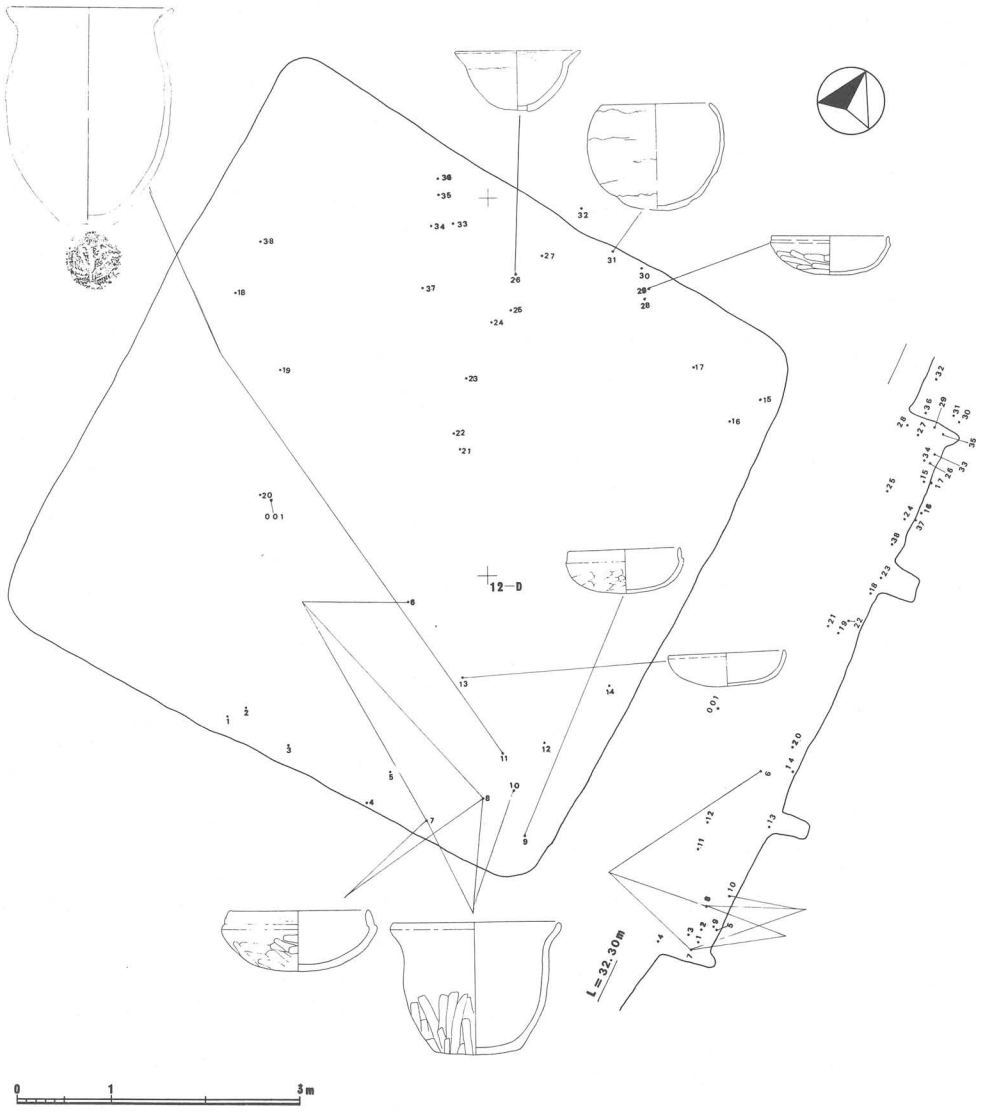
覆土は大別して３層に分けられ，上層が褐色土，中層が黒褐色土，下層が褐色土であり，堆積状況は自然堆積の状況をしめしていた。

遺物は，実測可能なものが13点あり，他は小破片ではあるがコンテナ２箱分出土した。１　甕で頸部以上が欠損しているが，カマド内部にさかさに置かれていたものである。２　坏で本住居址東南コーナーと同壁溝上層堆積土中より出土した破片を接合したものである。３　中型甕で１同様カマド内部より出土したものである。４　カマドの焚口西側の床上面より出土したもので接合後ほぼ完形に復元できたものである。５　中型甕でカマド内部より出土したものである。６　中型甕で，これは本住居址中央よりやや南東側の床上面より出土した破片を接合したものである。７　甕で南東コーナー部より出土したもので全体の60％ほどが接合できたものである。８　鉢でカマド東側の北壁際から確認し，破片の一部が崩壊したカマドの構築材の粘土内に埋まった状況で出土した。９　坏で本住居址の中央よりやや南東側の床上面より出土した。10　坏で，60％は欠損しているが，北東コーナーの床上面より出土している。11　甑であり本住居址のカマド前の床面で出土している。12　坏でカマド東側床面より完形で出土している。13　坏で南東コーナー部の壁溝上から出土している。本住居址内での出土遺物の分布状況はカマドを中心とした部分と南東コーナー部を中心とした部分の二ヵ所に集中して出土している。

（表５）　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	甕 （土師器）	A ―― B 8.5cm C 30.0cm	内彎ぎみに立ちあがる胴部でやや長胴化がうかがえる。頸部以上は欠損。	内部は横位のナデ，外面は縦位から斜位にかけてのヘラ削りを施す。	A 砂粒，砂礫 B にぶい赤褐色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A 16.0cm B ―― C 6.7cm	底は丸底，口辺部は内傾して開く。明瞭さは欠くが稜を残す。体部は内彎して立ちあがる。	内面はナデ，口辺部内には横ナデ，体部外面にはヘラ削りを施した後ナデを行っている。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	

3	甕 (土師器)	A 14.4cm B 6.2cm C 15.2cm	胴部は内彎して立ちあがり，胴上半部から頸部にかけて内傾し，口辺部は大きく外反して開く。	内外面共にナデを施し，口辺部外面は横ナデを行なっている。	A 砂粒，砂礫長石 B にぶい赤褐色 C 普通	
第19図 4	甑 (土師器)	A 29.2cm B 10.8cm C 32.4cm	胴下端部からゆるく外傾して立ちあがる胴部で，口辺部は大きく外反して開く。	内面はナデの後縦位にミガキを施す。外面は縦位にヘラナデを施し，口辺部内外はナデを施している。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 良好	
5	甕 (土師器)	A 18.4cm B 7.8cm C 16.8cm	底部より内彎ぎみに立ちあがる胴部で口縁部は外反して開く。	胴上端部から口辺部にかけての内外器面は横ナデを行っている。胴部内面はナデ，外面は縦位にヘラ削りを施す。	A 砂粒，砂礫 B ——— C 普通	
6	甕 (土師器)	A 18.8cm B 9.0cm C 14.8cm	底部中央部がやや丸味をおびる。口辺部は大きく外反して開く。胴部は内彎ぎみに立ちあがる。	口辺部内外は横ナデ，胴部内外はナデを施し胴下半部外面にはヘラ削りを施している。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
7	甕 (土師器)	A 18.2cm B 6.2cm C 24.2cm	外傾ぎみに立ちあがった胴部は上半部から頸部にいたって内傾し，口辺部は大きく外反する。	口辺部外面は横ナデ，胴部内面はナデ，外面は縦位のヘラ削りを施す。	A 砂粒，砂礫雲母 B にぶい橙色 C 普通	
8	鉢 (土師器)	A 12.5cm B ——— C 12.1cm	ほぼ球状を呈した胴部である。底部は丸底。	内面はナデ，外面はほとんど無整形。	A 砂粒 B 灰褐色 C 普通	
9	坏 (土師器)	A 13.2cm B ——— C 3.8cm	扁平な丸底，ほぼ直立した口辺部で体部は内彎して立ちあがる。	内外面共にナデを施す。	A 砂粒 B にぶい黄褐色 C 普通	
10	坏 (土師器)	A 12.5cm B ——— C 4.4cm	丸底，体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部はほぼ直立して開く。	内縁部内外は，横ナデ，体部外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
11	甑（小型） (土師器)	A 14.4cm B 2.5cm (孔径) C 6.7cm	内彎して立ちあがる胴部で，口辺部は大きく外反して開く。	内外面共にナデを施し，口辺部の内外はヘラナデを横位に施す。	A 砂粒 B にぶい黄褐色 (全体の$\frac{1}{2}$は黒色) C 普通	
12	坏 (土師器)	A 13.2cm B ——— C 4.5cm	底は丸底，口辺部はほぼ直立して開き外面には稜を残す。	内外面共にナデを施し，外面下部にはヘラ削り痕を残す。	A 砂粒 B にぶい褐色 (内外面の80％が黒褐色に) C 良好	
13	坏 (土師器)	A 12.6cm B ——— C 4.9cm	底部は丸底。口辺部の直立し，その下位に稜を残す。	外面口辺部は横ナデ。体部下端にヘラ削り痕を残す。内面は回転横ナデを残す。	A 砂粒 B にぶい褐色 C 良好	



第21図　5号住居址遺物分布図

6号住居址（第22図）

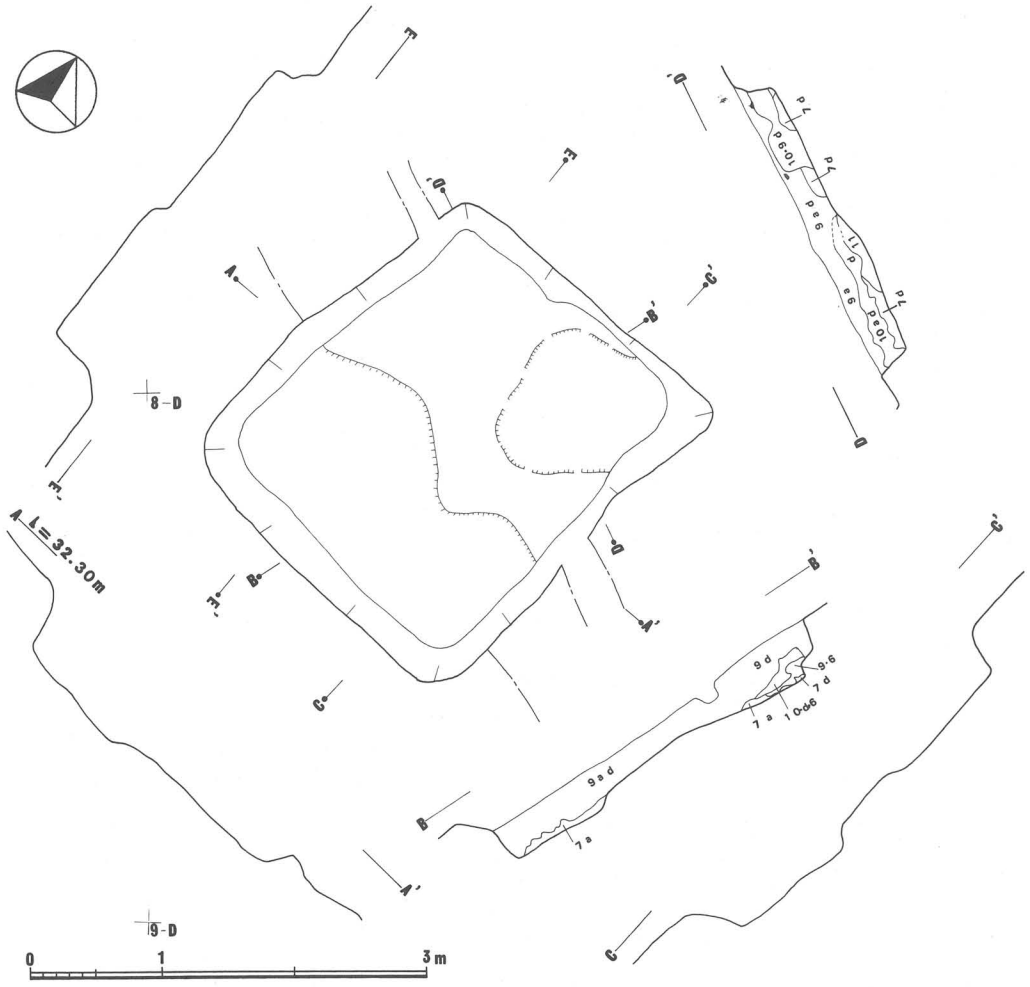
本住居址は，A区，7・8－Dグリットから検出された。西5ｍには1号住居址，東2ｍには3号住居址があり，本住居址は1号溝遺構，1号道路状遺構が重複している。切り合い状況からみて本住居址は溝，道路状遺構より古い遺構である。

形状は隅丸方形を呈している。規模は東西2.60ｍ，南北.90ｍを測ることができた。主軸はＮ－

21°－Eを指している。床はローム層上の踏み固めによる床面となっており，かなり凹凸がはげしいが貼り床を施した痕跡は認められなかった。壁面の立ちあがり状況および高さは，東側が86°で立ちあがり，高さは37cm，西側は81°で立ちあがり，高さは55cm，南側は77°で立ちあがり，高さは54cm，北側は90°で立ちあがり，高さは37cmを側ることができた。壁溝およびピットは検出されなかった。火床遺構についても検出されなかった。

覆土は，黒褐色土とロームブロック，さらに灰白色粘土ブロックが混り，住居廃絶後に撹乱をうけていると思われた。

遺物は小破片が数点出土したがすべて実側不可能な状態のものであった。



第22図　6号住居址平面実測図

7号住居址（第23・24・25図）

本住居址は，A区，13・14－Eグリットから検出された。西4mには5号住居址がある。

規模は北東－南西が4.00m，北西－南東が3.47mを測れ，形状は方形を呈している。主軸はN－60°－Eを指している。床はローム層上の堅緻な床面で，全面的に平坦であるが南東壁際の一部に凹凸がみられ，東コーナー部には土坑状の凹部を有す。本住居址の床面全体には焼土が堆積しており，炭化材もかなり散在して出土した。これらの状態から推定すると火災住居址であることが考えられた。

壁面の立ちあがり状況および高さは，北東側は84°で立ちあがり，高さは24cm，北西側は80°で立ちあがり，高さは44cm，南東側は81°で立ちあがり，高さは31cm，南西側は82°で立ちあがり，高さは58cmを測れ，壁溝は各壁際から検出され，その規模は北東壁溝の幅12cm，深さ5cm，北西壁溝の幅14cm，深さ8cm，南東壁溝の幅13cm，深さ6cm，南西壁溝の幅11cm，深さ9cmを測れ，ピットは2個検出され，その規模はP1の口径16cm×20cm，深さ39cm，P2の口径25cm×22cm，深さ43cmを測れた。しかしP1，P2は柱穴としての意味をもったピットであるかどうかは不明である。

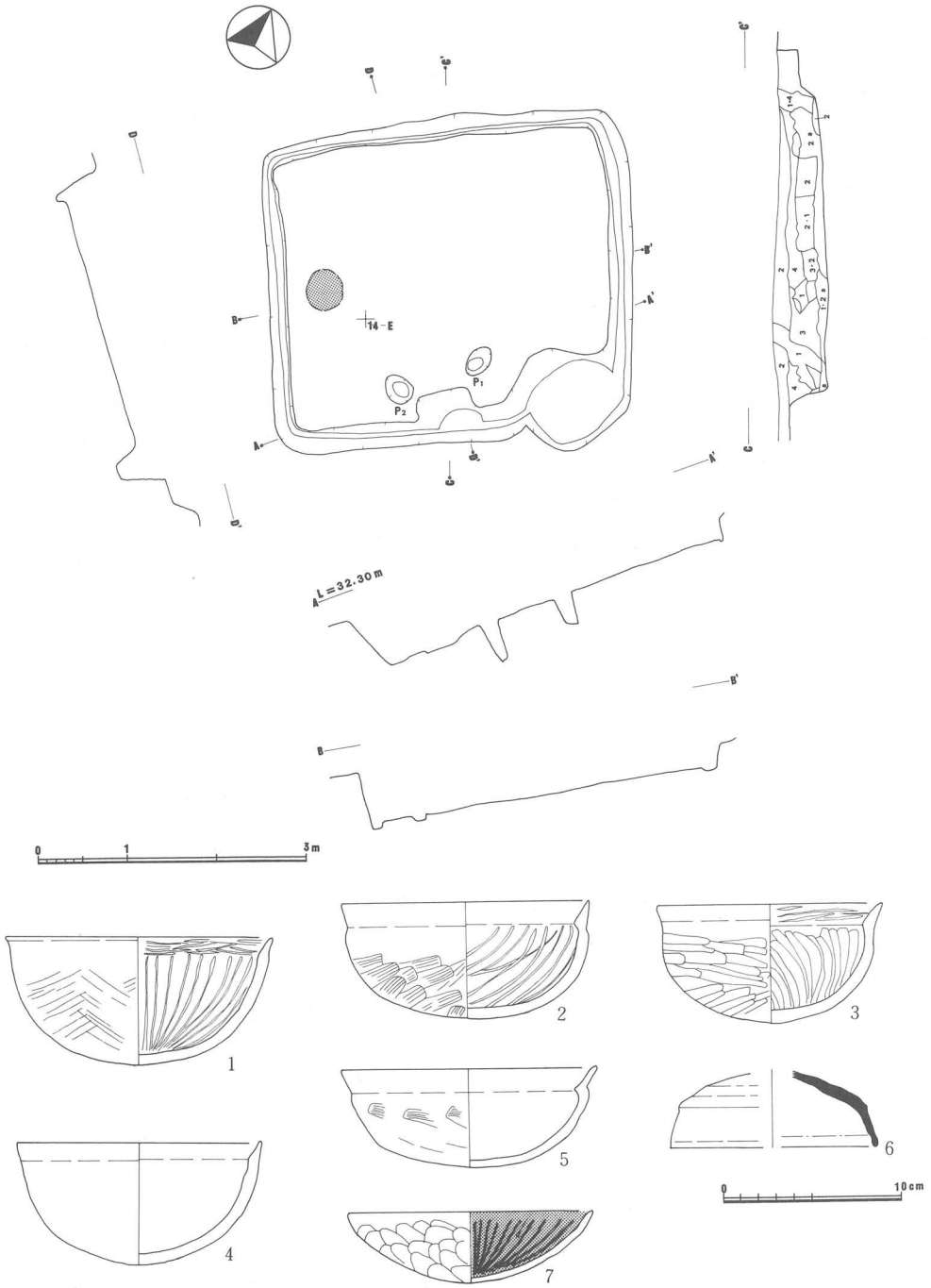
火床遺構としては南西側中央部に炉が確認され，床面を3cm程掘り込んでおり範囲は80cm×50cmである。堆積土は焼土，焼土ブロックと若干の土器片が出土した。

覆土は大別すると3層に分けられ，上層が褐色土，中層が黒褐色土，下層は焼土とロームブロックが混合された堆積土となっている。

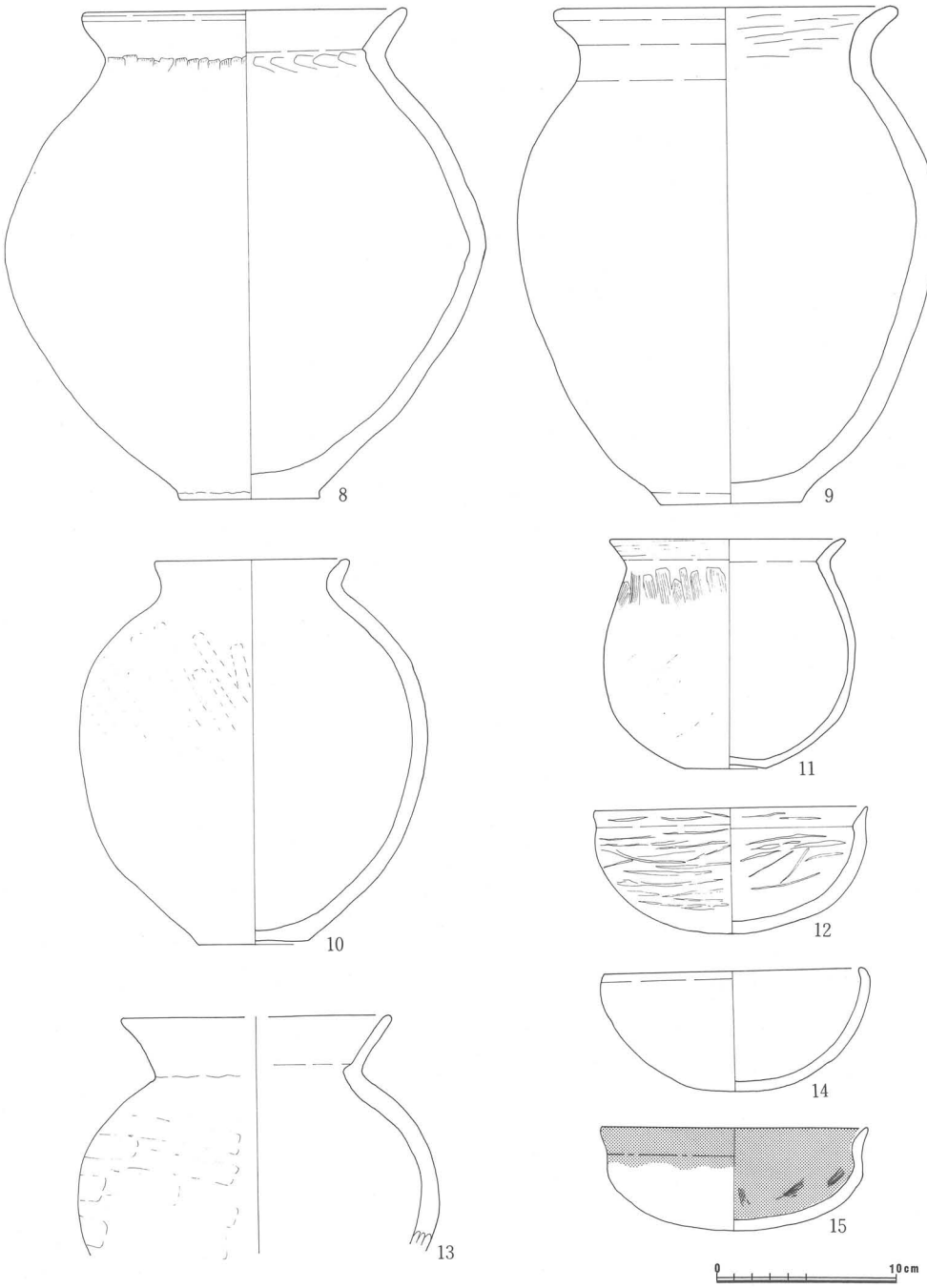
ムブロックが混合された堆積土となっている。

遺物は，実測可能なものとして15点があげられ，その他は小破片でコンテナ1箱分の出土をみた。1　坏でP1とP2の間の床面上より3の坏と並んで出土した。2　坏で中央部の床上面より出土したものである。3　南東側の覆土中層より出土している。4　坏で中央部やや北西側の焼土下より出土した。5　坏で中央部床面より出土し完形である。6　須恵器の蓋片で中央部の床上面より坏出土している。7　坏で南コーナー部付近の堆積焼土中より出土した。8　甕で南コーナー部の床上面から覆土中層にかけて出土した。9　甕で8の甕と同様南コーナー部の床上面から横到しの状態で出土し，完形である。10　壺で南東側壁溝上より出土，焼土，炭化材に材につつまれたような状態で出土し，この甕の周囲からは住居の屋根材であったと考えられる“茅”の炭化したものも若干出土している。11　小型甕で中央部覆土中層から出土している。12　坏で南コーナー部の覆土中より出土。13　甕の口縁部から胴中央部までの破片で床中央部より出土した破片を接合したものである。14　坏でこれも中央部床面上の焼土中より出土した。15　坏で中央部の焼土層中より出土している。本住居址から出土している土器類の出土分布は中央部，南コーナー部，東南壁溝部周辺と3ヵ所に大別でき，出土層位も下層の焼土中と中層の黒褐色土中に集中している。また，下層の

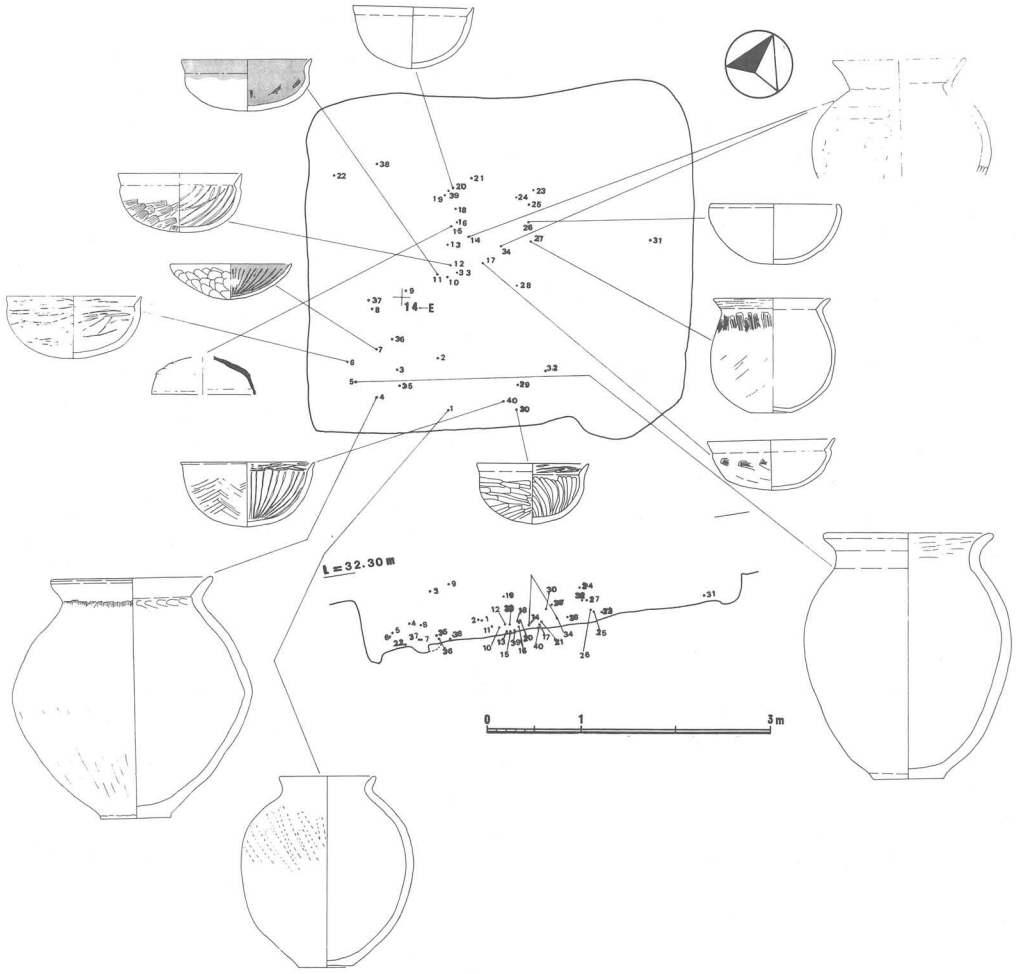
焼土中より出土した土器類はその遺存状態が完形あるいは完形に近い状態のものが多く出土している。



第23図　7号住居址平面実測図・出土遺物実測図(1)



第24図　7号住居址出土遺物実測図(2)



第25図　7号住居址遺物分布図

(表6)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

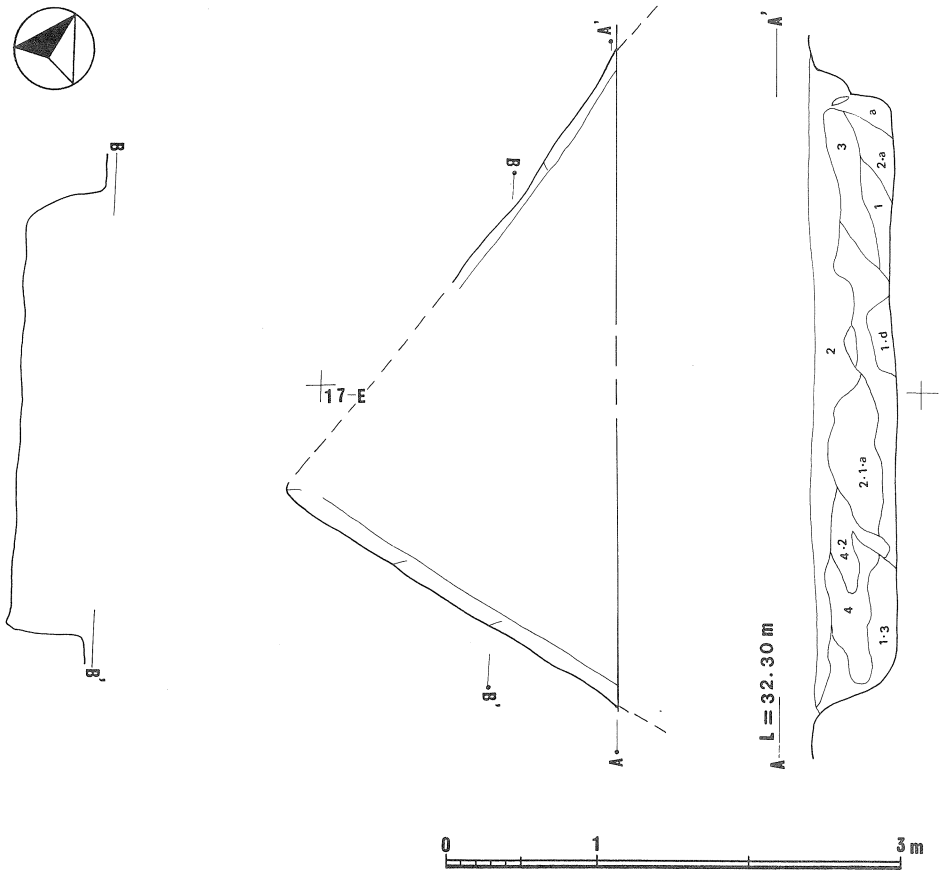
図版番号	器　種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第23図 1	坏 (土師器)	A 15.0cm B ——— C 7.2cm	体部は大きく内彎ぎみに立ちあがり，口縁部はやや外反して開く。	口縁部外面は横ナデ，内面は横位のミガキを施す。体部外面はヘラ削りの後ナデを施す。内面は縦位のミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
2	坏 (土師器)	A 13.8cm B ——— C 6.5cm	大きく内彎して立ちあがる体部で口辺部はさらに外反して開く。	内面はナデの後斜位にミガキを施す。外面はヘラ削りの後，ナデを行っている。口辺部内外は横ナデを施す。	A 砂粒 B 灰黄褐色 C 普通	
3	坏 (土師器)	A 13.6cm B ——— C 6.7cm	底部から体部にかけてはほぼ半球状を呈し，大きく内彎する。口辺部は外反して開く。	外面はヘラ削りを施し，内面はヘラ削りを施した後ミガキを施す。	A 砂粒 B 赤褐色 C 良好	

4	坏 (土師器)	A 13.8cm B ——— C 6.8cm	底部より内彎して立ちあがり，口縁部はやや外傾ぎみで開く。	内外面共にヘラナデを施す。口辺部内面は横ナデを施している。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 普通	
5	坏	A 14.4cm B ——— C 5.6cm	丸底で体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部はほぼ直線的に外反して開く。口辺部，体部の接合部内面には明瞭な稜を有す。	体部内外面はナデを施し，外面の一部にはヘラ削り痕を残す。口辺部内外面は横ナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
6	坏蓋 (須恵器)	A 11.6cm B ——— C 3.8cm	大きく外傾して広がる上端部から一端内傾して開く。かえりはほとんど失われている。	水挽き成形後，回転横ナデを行ない外面上端部は回転ヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 灰白色 C 良好	
7	坏 (土師器)	A 13.8cm B ——— C 4.0cm	大きく内彎して立ちあがる体部で，口縁部も外傾して開く。	内面は縦位のミガキを施し，外面はヘラ削りで整形を施す。内面には赤彩を施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 (赤褐色) C 良好	
第24図 8	甕 (土師器)	A 18.0cm B 8.2cm C 27.2cm	胴部は底部より外傾して立ちあがり，中央部で大きく膨みを有し最大径となる。上半部から頸部にかけては大きく内彎し，口辺部は大きく外反して開く。	内外面共にナデを行ない，胴下半部外面はヘラナデを施す。頸部は胴部，口辺部との接合の為ヘラによる押圧を加えている。口辺部は内外共に横ナデを施す。	A 砂粒，砂礫 長石 B にぶい橙色 C 普通	
9	甕 (土師器)	A 18.8cm B 8.0cm C 28.0cm	胴部は内彎ぎみに立ちあがり，胴上半部で最大に膨れる口辺部は頸部から直立ぎみに立ちあがって，口縁部で大きく外反する。口唇部はかなり肥厚ぎみである。	内外面共にナデを施し口辺部内側は種位のヘラナデを行なっている。口辺部外面は横ナデを施す。	A 砂粒，砂礫 長石 B にぶい橙色 C 普通	
10	壺 (土師器)	A 11.0cm B 6.0cm C 21.4cm	ほぼ球状を呈した胴部で口縁部は頸部よりわずかに外反して立ちあがり開いている。	内外面共にナデで仕上げているが外面にはヘラ削りの痕跡が僅かに認められた。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
11	甕 (土師器)	A 13.2cm B 4.5cm C 12.8cm	胴部は底部より大きく内彎して立ちあがり，中央部あたりから上半部にかけて内傾して頸部に至る。口辺部は直線的に外反して開く。口辺部と胴上半部の接合部内側は鋭い稜を残す。	口辺部は内外共に横ナデ，胴部内面はナデを行ない外面はヘラナデを施す。胴上半部から頸部にかけてヘラ削りを行なっている。	A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 普通	
12	坏 (土師器)	A 15.2cm B ——— C 7.0cm	丸底，底部から体部にかけて，半球形を呈し大きく内彎する口縁部は直立ぎみながらもやや外反ぎみに開く。	内外面共に横位から不定方向のミガキを施している。	A 砂粒 B 赤褐色 C 良好	
13	甕 (土師器)	A 15.8cm B ——— C 13.1cm	口辺部はほぼ直線状に外反して開く。胴部は大きく張り出しほぼ球状を呈し最大径を中央部に有する。	内面はナデ，外面の口辺部は横位のヘラナデ胴部はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
14	坏 (土師器)	A 14.5cm B ——— C 5.6cm	体部は大きく内彎して立ちあがり口縁部はやや内彎ぎみに開く。	内外面共にナデを施し仕上げており部分的にはヘラ工具痕が認められる。	A 砂粒，長石 砂礫 B 明赤褐色 C 良好	

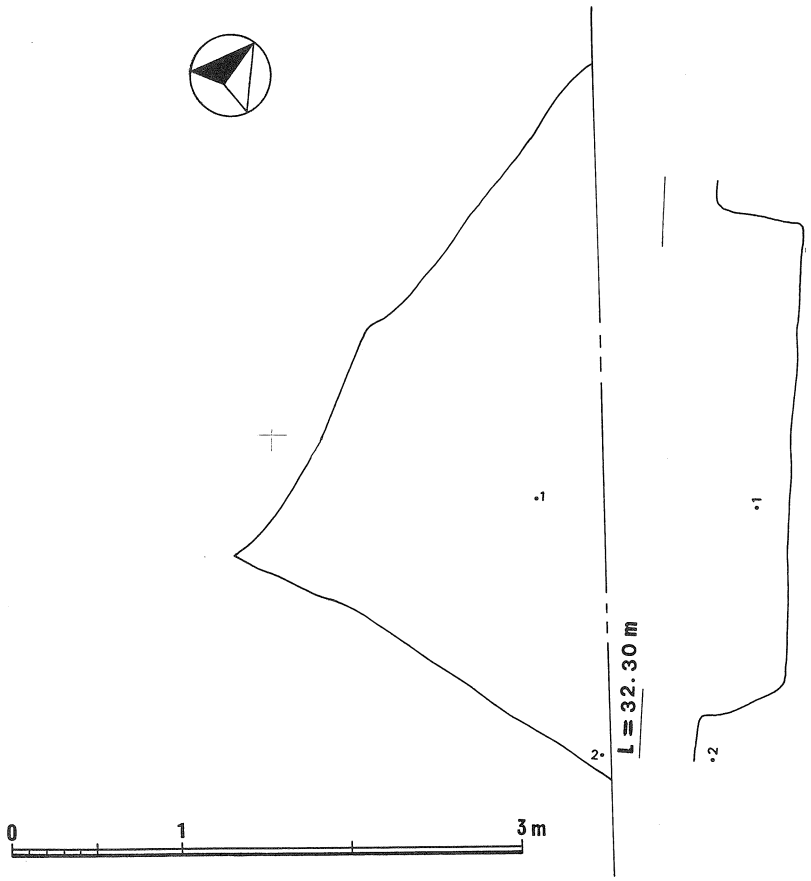
15	坏 (土師器)	A 14.8cm B ——— C 5.7cm	体部は底部から大きく内彎して立ちあがり口辺部は大きく外反して開く。	内外面共にナデ，内面の一部にはヘラ削り痕が残る。口辺部は内外共に横ナデ，内面と口辺部，体部上端には赤彩を施している。	A 砂粒，雲母 B にぶい黄橙色 (内面～外面口辺部に赤彩) C 普通	

8号住居址（第26・27図）

本住居址は，A区，16・17－Eグリットから検出され，A区中央部の北側際より検出され，コーナーの一部が確認されたのみである。したがって，その大半は調査区域外であるため不明であるが，検出された部分の床面はローム層上を踏み固めた床であることは確認できた。壁面は西側が90°で立ちあがり，高さは68cm，南側は87°で立ちあがり，高さは70cmを測ることができた。遺物は土師器片が3点出土したが実測不可能であった。



第26図　8号住居址平面実測図



第27図　8号住居址遺物分布図

9号住居址（第28・29・30図）

本住居址は，A区，17－B・Cグリットから検出された。本住居址は11号住居址と重複した遺構で切り合状況から本住居址のほうが新しい住居址であることがわかった。

規模は南北4.75m，東西は西壁部が調査区域外になるため不明。形状は南東コーナー部のみが良好な状態で検出され，他のコーナー部は未調査および攪乱などで不明だが，隅丸方形を呈していたと推定できる。主軸はN－16°－Wを指している。床は全面貼り床を施し，貼り床の厚さは10～15cm，黒褐色土が主体土で，ロームブロック，ローム粒などが混入されていた。壁面の東，南側は11号住居址と重複していたため，本住居址の壁面としては明確に検出できなかった。なお北側もトレンチャーなどの攪乱により明確に検出できなかった。壁溝は東，南側の2ヵ所で検出されたのみである。規模は東壁溝の幅10cm，深さ7cm，南壁溝の幅が11cm，深さ10cmを測れた。ピットは3個検出

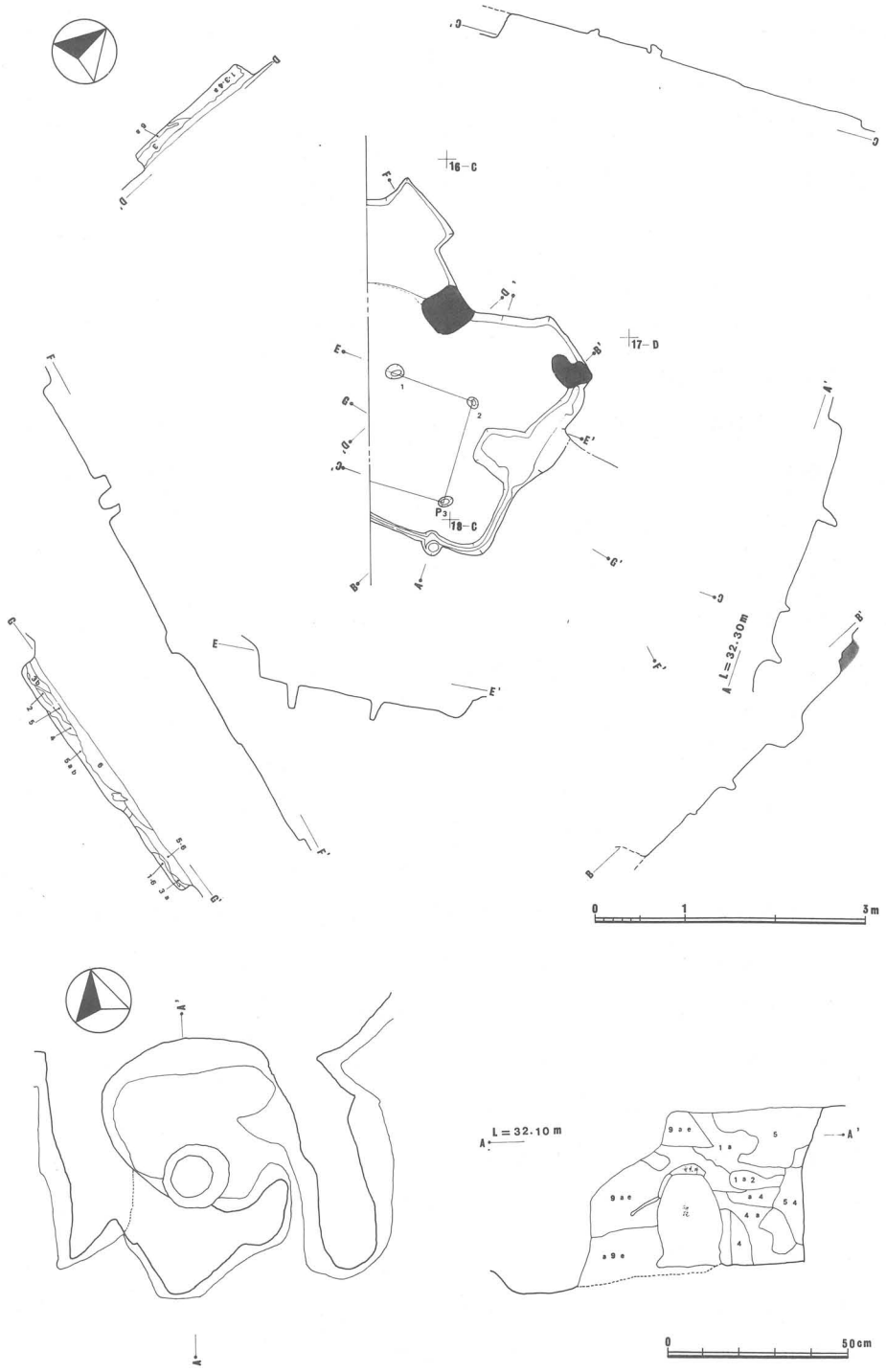
され，それぞれの規模はＰ１の口径30㎝×25㎝，深さ54㎝，Ｐ２の口径22㎝×21㎝，深さ51㎝，Ｐ３の口径23㎝×24㎝，深さ22㎝を測れた。Ｐ４については調査区域外のため不明である。

火床遺構は北壁部より確認されたが，形状は攪乱のため一部が変形していると思われた。現状での規模は両袖間の最大幅が87㎝，焚口部から奥壁部までの幅が70㎝，高さが63㎝であった。カマド内の堆積状況は攪乱部以外はほぼ良好で，焼土，灰，炭化物などが多量に含まれていた。構築材は灰白色，淡黄色粘土が主で砂粒土もかなり混入されていた。カマド内部からは甕２点，坏10点が出土している。

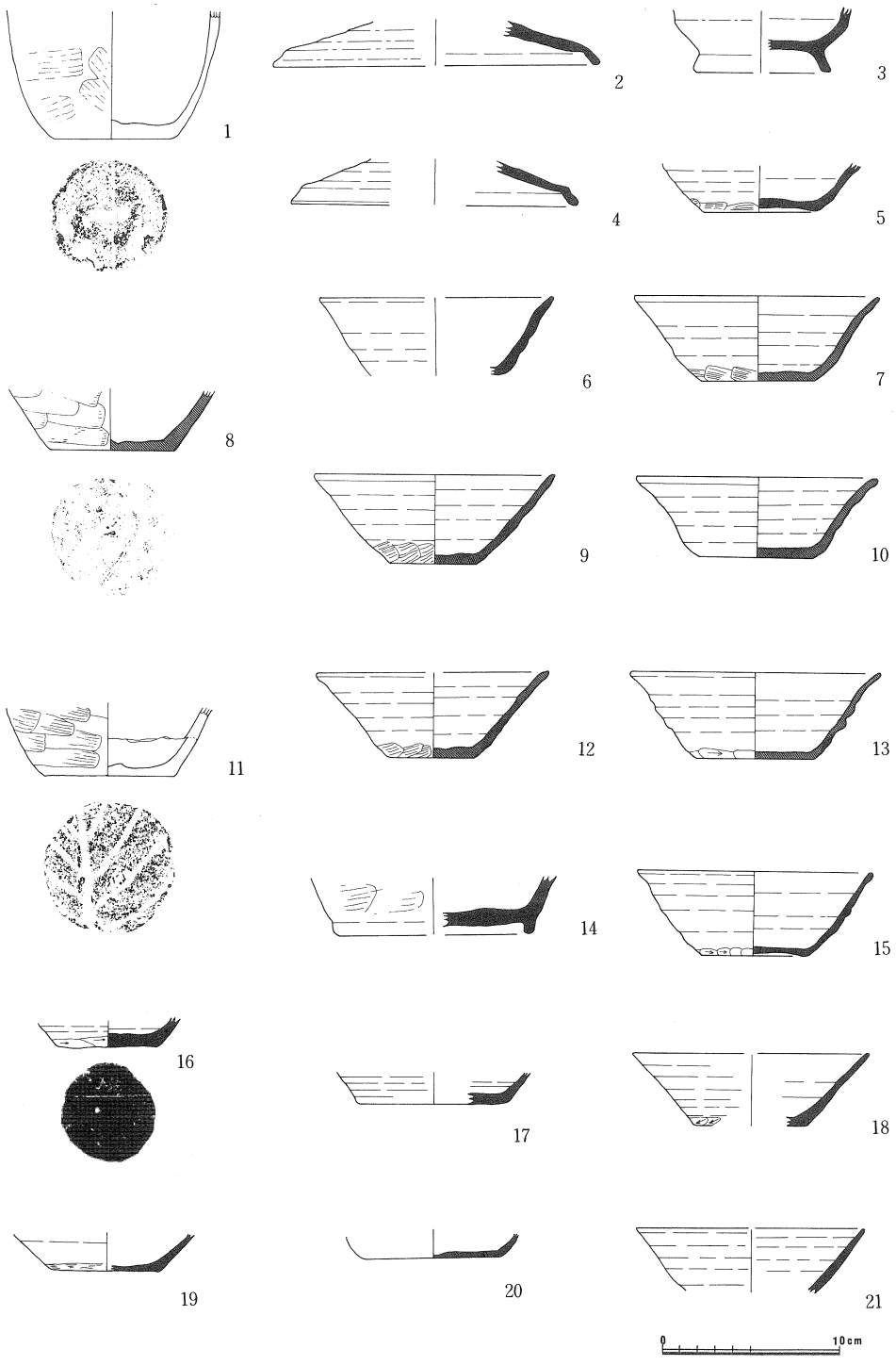
覆土は大別して２層に分けられ，上層が黒褐色土，下層が暗褐色土である。明確なレンズ状の堆積土はみられないが，竪穴の埋没状況は自然堆積の状態を呈していた。

遺物は，実測可能なものとして23点が出土し，小破片はコンテナ箱に半分程出土している。１甕の底部から胴下半部である。本住居址の中央部よりやや南側の床面上15㎝の覆土中より出土している。２　須恵器の蓋で20％ほどの残存片である。これも覆土中より出土したもので層位は上層にあたる。３　須恵器の高台付坏の底部から高台部にかけての破片である。出土位置はカマド西脇の床上面10㎝の位置より９と重なって出土している。４　須恵器の蓋で15％ほどの残存片であり，覆土中より出土したものである。５　須恵器の坏片で45％ほどの残存片で，出土位置は南側床面上より４の蓋片とともに出土している。６　須恵器の坏で覆土中より30％の残存片である。７　土師質須恵器の坏でカマド内の甕16の上に10，12，13，15とともに重なって出土している。８　土師質須恵器の底部から胴下半部にかけての破片である。出土位置は中央部よりやや南側の中層より出土したものである。９　土師質須恵器の坏でカマド焚口の西側より３とともに出土した。10　土師質須恵器の坏でカマド内の甕16に重なって出土している。11　甕の底部から胴下半部の破片である。出土位置は南東コーナー部の床面より上位10㎝の下層中より出土している。12　土師質須恵器の坏で，40％の残存破片である。この坏もカマド内より出土したものである。13　土師質須恵器の坏で60％の残存片であり，これもカマド内より出土している。14須恵器の坏底部片である。出土位置は東西間に残してたベルト内の中層より出土している。

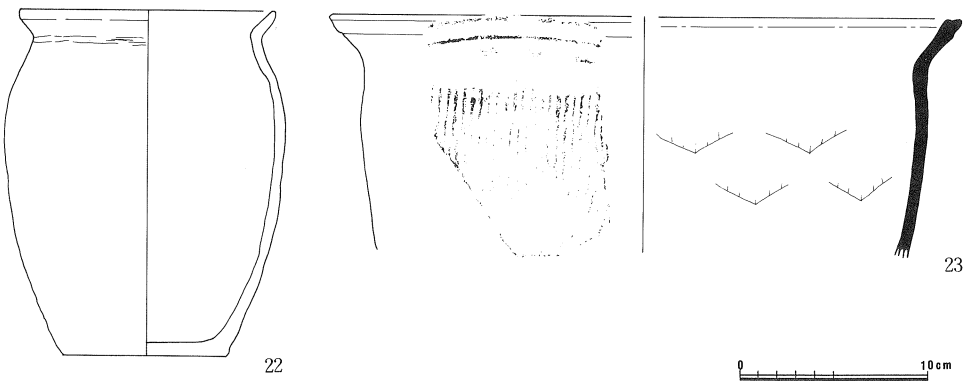
15　須恵器の坏で，口縁部の一部が欠損しているがほぼ完形である。出土位置はカマド内の甕に重なって出土している。16～21須恵器の坏片でいずれも覆土中より出土している。22　中型甕でカマド内の焚口部に逆さに伏せた状態で出土している。23　須恵器の甑あるいは甕と思われるもので，口縁部から胴部までの破片で全体の５％ほどしか残存していなかった。出土位置は南側の覆土中より出土した。本住居址から出土土器は南側より破片類が大量に出土しているほか，完形もしくは準完形のものはカマド内部から出土したものが相当数をしめている。



第28図　9号住居址・カマド平面実測図



第29図　9号住居址出土遺物実測図(1)



第30図　9号住居址出土遺物実測図(2)

(表7)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	鬶 （土師器）	A 12.0cm B 6.4cm C 7.1cm	平底，胴部は外傾して立ちあがるがしだいに直立ぎみになる。	内面はナデ，外面はヘラ削りを局部的に行なっている。	A 砂粒，砂礫 雲母 B 橙色 C 普通	
2	坏 （須恵器）	A 18.4cm B ——— C 2.7cm	上端部は緩やかに開いて広がり口縁部は大きく屈曲して内傾する。	水挽き成形後。回転横ナデを行う。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	
3	高台付坏 （須恵器）	A 10.0cm B 7.6cm C 3.4cm	台部は直線状に内傾して立ちあがり胴下端部は大きく外傾して立ちあがった後，内彎して更に立ちあがる。	内外面共にナデを施す。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	
4	坏蓋 （須恵器）	A 19.4cm B ——— C 2.5cm	口縁部が内傾して屈曲する。	回転横ナデを施す。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	
5	坏 （須恵器）	A 11.0cm B 6.4cm C 2.6cm	平底，体部は外傾して立ちあがる。	水挽き成形後，回転横ナデを行ない体部外面の下端には手持ちヘラ削りを行なっている。	A 砂粒 B 灰白色 C 普通	
6	坏 （須恵器）	A 13.2cm B 7.6cm C 4.4cm	体部は直線状に外傾して立ちあがり，口縁部は僅かに外反している。	水挽き成形後，横ナデを行なっている。	A 砂粒，砂礫 B 灰色 C 普通	
7	坏 （土師質 須恵器）	A 14.0cm B 6.6cm C 4.8cm	体部は，直線的に外傾して立ち上がり口縁部にいたる。	水挽き成形後，回転横ナデを内外面に施す。体部下端部にはヘラ削り調成を行なっている。底部はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 灰白色 C 普通	
8	坏 （土師質 須恵器）	A 11.6cm B 7.1cm C 3.3cm	平底，体部は外傾して立ちあがる。	内面は回転ヘラナデ，外面はヘラ削りを施す。底部外面はヘラ切りの後，回転ヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	

9	坏 （土師質 須恵器）	A 13.6cm B 5.0cm C 5.0cm	体部はほぼ直線状に外傾して立ちあがり口縁部を開く。	水挽き成形。体部内外面は回転横ナデを施す。体部下端部は斜位にヘラ削り調整，底部は回転ヘラ切り後一方向にヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 褐灰色 C 普通	
10	坏 （土師質 須恵器）	A 13.6cm B 6.5cm C 4.5cm	外傾して立ちあがり，緩やかに外反する体部で，口唇部はやや丸味を持つ。	水挽き成形後，回転横ナデを施す。底部はヘラ削り調整を行なう。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 普通	
11	甕（底部） （土師器）	A 11.6cm B 7.6cm C 3.8cm	平底，ほぼ直線状に外傾して立ちあがる胴下半部。	内面はナデ，一部まき上げ痕を残す。外面はヘラ削りを行なっている。底部外面は葉状圧痕を残す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
12	坏 （土師質 須恵器）	A 13.2cm B 6.4cm C 4.8cm	外傾して立ちあがる体部で口辺部付近から更に外反して開く。	内外面共に回転横ナデを施す。体部下端部は手持ヘラ削り調整底部は回転ヘラ切りの後，ヘラ削り調整。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
13	坏 （土師質 須恵器）	A 14.2cm B 6.8cm C 4.8cm	体部は大きく外傾して立ちあがり，口縁部は更に外反して開く。	水挽き成形を行なった後回転横ナデを施す。底部はヘラ切りを行なったのち一方向にヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 明褐灰色 C 普通	
14	高台付坏 （須恵器）	A 13.8cm B 11.0cm C 2.7cm	外傾して立ちあがる胴下半部	内面は横ナデを施し外面はヘラ削りで調整を行なっている。底部は回転ヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 灰赤色 C 良好	
15	坏 （須恵器）	A 13.2cm B 6.2cm C 4.8cm	体部は外傾して立ちあがり，口縁部はやや外反して開く。口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形，底部ヘラ削り調整。	A 砂粒 B 褐灰色 C 普通	
16	坏 （須恵器）	A ——— B 1.5cm C 5.4cm	平底	底部は手持ちヘラ削りを施す。体部下端もヘラ削り調整	A 砂粒，長石 B 灰色 C 良好	
17	坏 （須恵器）	A ——— B 8.5cm C 1.7cm	平底	底部は手持ヘラ削りを施している。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
18	坏 （須恵器）	A 13.5cm B 6.4cm C 4.1cm	直線状に大きく外傾する体部。	底部は手持ヘラ削りを施している。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
19	坏 （須恵器）	A ——— B 6.0cm C 2.1cm	平底	底部は回転ヘラ切りの後手持ちヘラ削りを施す。体部下端は回転ヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
20	坏 （須恵器）	A ——— B 7.8cm C 1.3cm	平底	回転ヘラ切りの後，手持ヘラ削りを施した底部である。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
21	坏 （須恵器）	A 13.0cm B 3.6cm C ———	大きく外傾する体部。	水挽き成形後横ナデ。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
第30図 22	甕（小型）	A 13.6cm B 9.0cm C 18.7cm	底部よりやや外傾しながら立ちあがる胴部で，中央部よりやや上位に最大径を有す。上半部より頸部にかけて内傾したのち口縁部は大きく外反して開く。	内外面ともにナデを施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 普通	

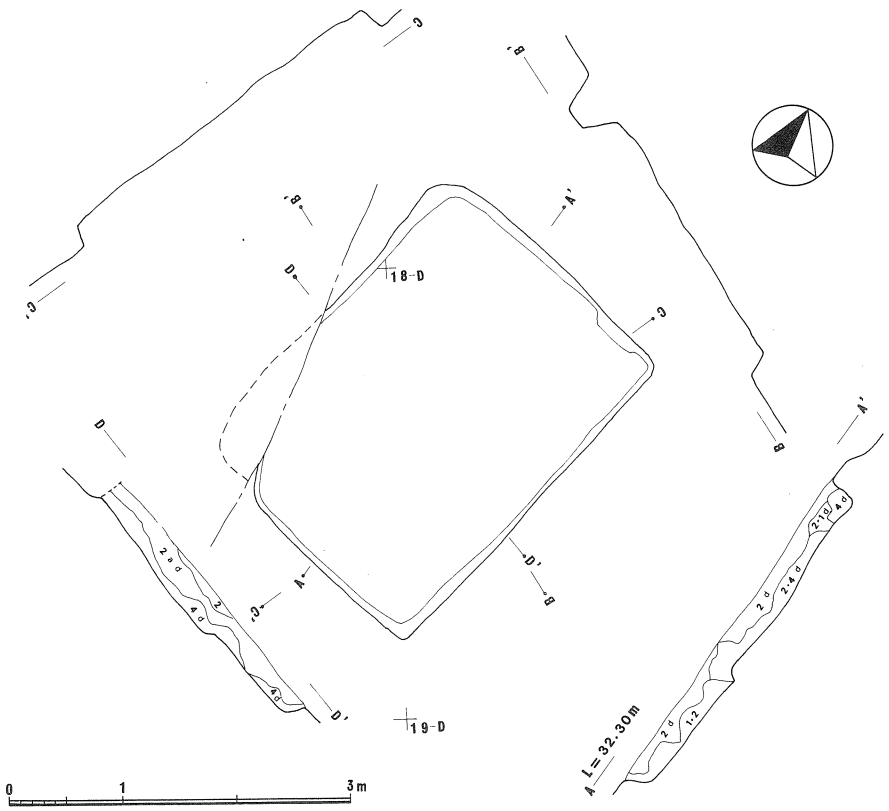
23	甕（甑）	A 33.4cm B ——— C 12.4cm	胴部はほぼ直立して立ちあがり，口辺部は外反して開く。形状からして甕，甑の判別は難しい。	外面は叩き目が残り内面はナデを施している。	A 砂粒，雲母 B 灰褐色 C 良好	

10号住居址（第31図）

本住居址は，A区，18－C・Dグリットから検出された。本住居址は西に11号住居址と接しており，一部切り合っている。東２ｍには13号住居址がある。本住居址と11号住居址との切り合い関係は本住居址が11号住居址を切っているため本住居址より11号住居址のほうが先行する時期のものである。

規模は南北3.26ｍ，東西2.60ｍで形状は隅丸長方形を呈している。主軸はＮ－18°－Ｅを指している。床面はローム層上を床としているが踏み固められた状況はさほどみられず，全面にトレンチャーによる攪乱が認められ，遺存状況はあまり良好とはいえなかった。

壁面も遺存状況としては良好といえないが断辺的に残る部分の計測数値は，東側が80°で立ちあ



第31図　10号住居址平面実測図

がり，高さは26cm，西側は79°で立ちあがり高さは30cm，南側は80°で立ちあがり，高さは21cm，北側は89°で立ちあがり，高さは28cmを測ることができた。本住居址からは，柱穴，火床遺構であるカマド，炉などは検出されなかった。覆土の状況は大別して2層の堆積土がみられたが，いずれも褐色土が主体土であり，自然堆積の状況をしめしていた。

遺物の出土はなかった。

11号住居址（第32・33図）

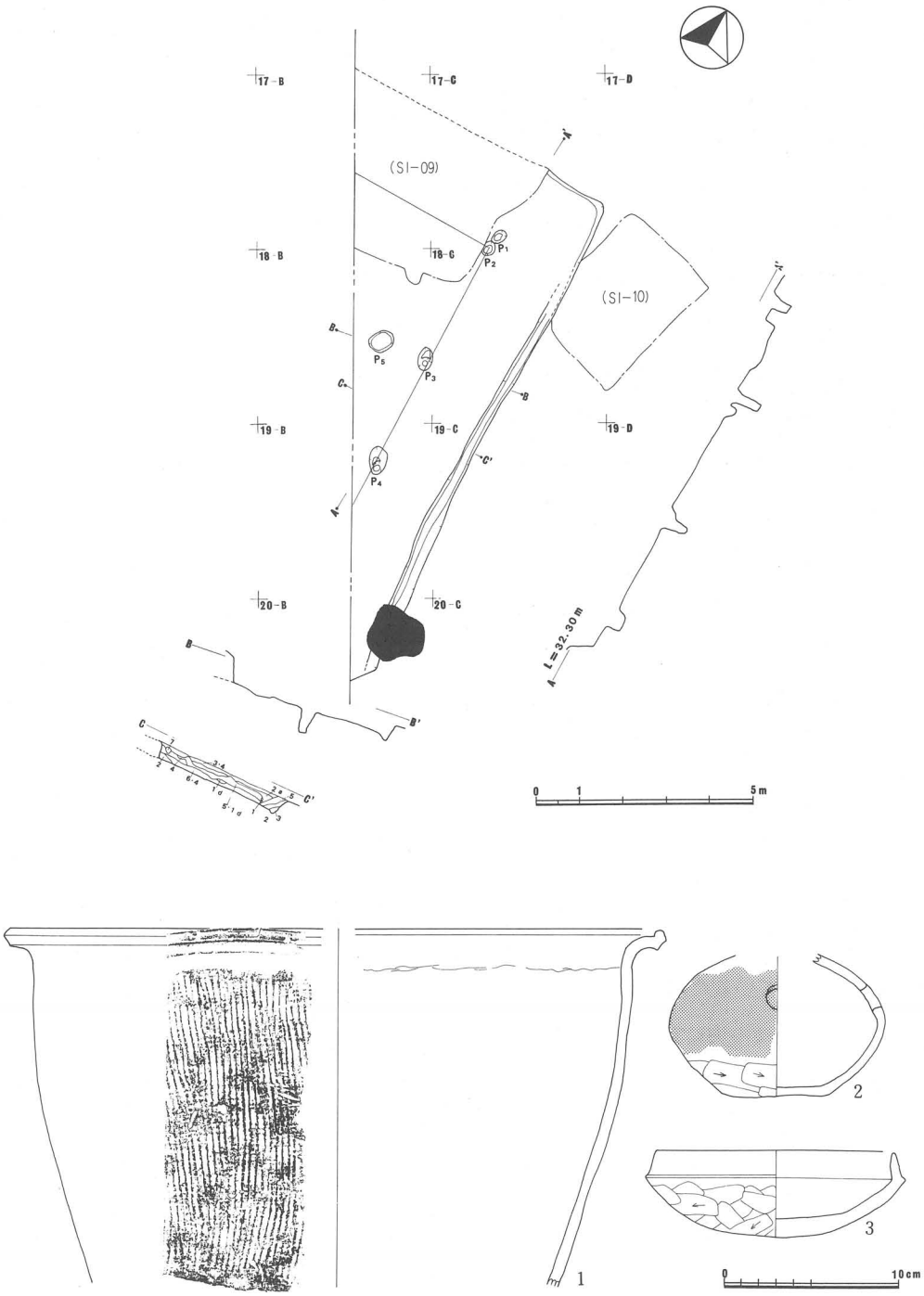
本住居址は，A区，18・19－B・Cグリットから検出された。本住居址と9号住居址とは北側で重複しており，本住居址のほうが時期的に古く先行した遺構である。

規模は，遺構の3分の2ほどが調査区域外にあたるため不明。形状は北東コーナー部の検出された部分をみる限りにおいては方形であると推定される。主軸は不明。床面は全面的に貼床を施し，暗褐色土ロームブロックなどの混合土を20cmほどの厚さで貼っている。壁面の立ちあがり状況および高さは，東側は86°で立ちあがり，高さは36cm，北側は78°で立ちあがり，高さは39cmを測れ，壁溝は東壁際から検出できた。規模は，幅20cm，深14cmを測ることができた。

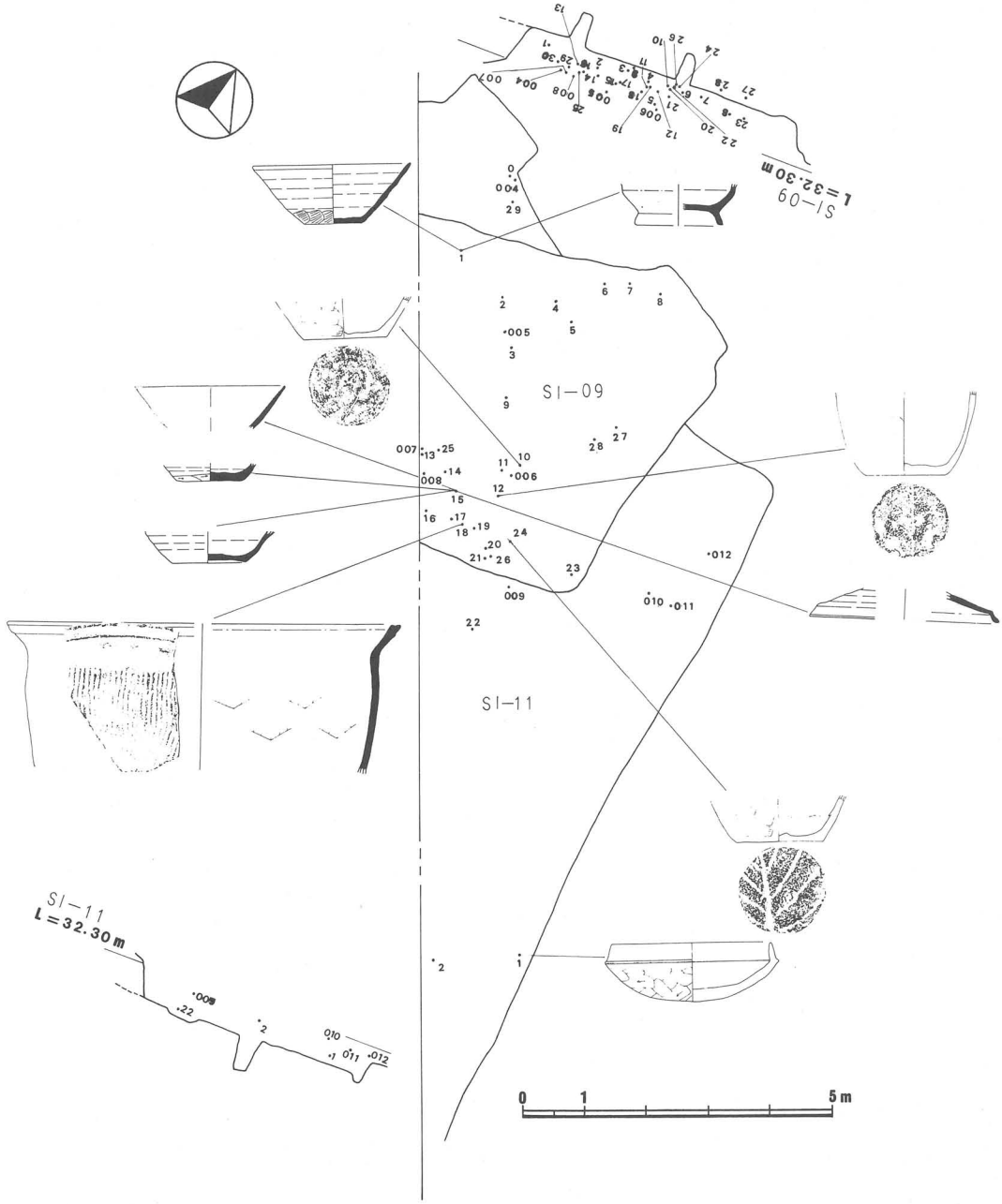
ピットは本住居址に関連するものと考えられるものが5個確認され，規模はP 1は口径32cm×39 26cm，深さ64cm，P 2は口径30cm×30cm，深さ26cm，P 3は口径34cm×45cm，深さ61cm，P 4は口径40cm×53cm，深さ56cm，P 5は口径26cm×25cm，深さ5cmを測れたがP 5は明確にピットとは断定し難い。

火床遺構は確認されなかった。覆土は暗褐色土が主体土でほぼ1層にしか観察できなかったが，自然堆積土の状況を示していた。

遺物は実測可能なものとして3点あったが，1の甑（甕）片は9号住居址とほぼ隣接した場所の覆土中から出土しているため本住居址に伴う土器とは断定できない。2　坩で口辺部以上が欠損している。出土位置は中央に東西方向で設定したセクションベルト中より出土したものである。3坏で東壁溝上より出土したものである。



第32図　11号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第33図　9・11号住居址遺物分布図

(表8)　　A　口径　B　底径　C　現高　　A　胎土　B　色調　C　焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第32図 1	甑 （土師器）	A 37.5cm B ——— C 20.5cm	大きく外反した口縁部で口唇部は直立してあがる。	外面は叩き目を残す。口縁部上端	A 砂粒 B 明黄褐色 C 普通	
2	坩 （土師器）	A 5.0cm B 5.5cm C 8.0cm	平底，胴部は中位で大きく張り出す。円孔1個を有す。口辺部以上は欠損。	内外面共にナデを施し，外面には局部的に赤採を残す。胴下端部にはヘラ削り調整を施す。(外面はかなり剝離している部分が多い)	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
3	坏 （土師器）	A 13.8cm B ——— C 5.0cm	丸底，大きく内彎して立ち上がる体部。口辺部はやや内傾ぎみに立ち上がる，体部と口辺部との接合部外側には僅かな稜を残す。	口辺部内外面と体部内面は横ナデ，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 良好	

12号住居址　（第3図〈付図3〉）

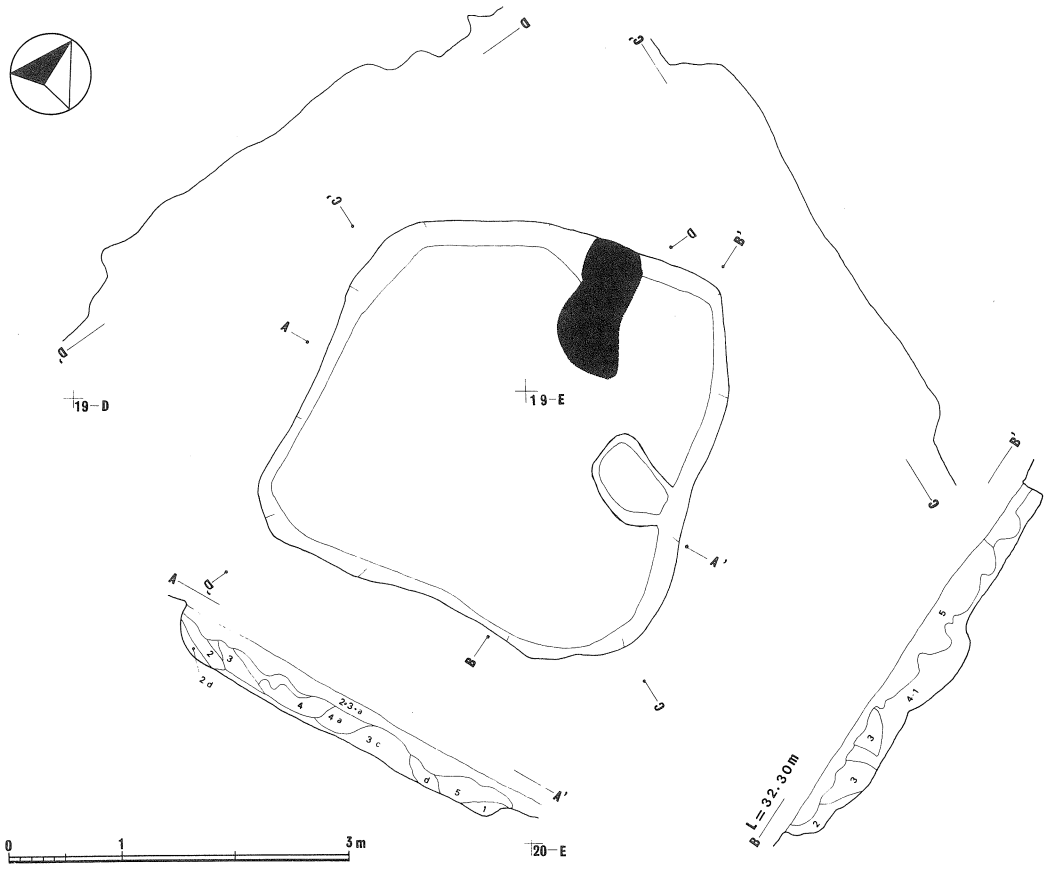
本住居址は，B区，28－Eグリットから検出されたが，大半が調査区域外であるため，南西コーナー部の一部のみが確認されたにすぎないので詳細は不明である。

13号住居址（第34図）

本住居址は，A区，19－D・Eグリットから検出された。規模は南北3.40m，東西3.15mを測ることができ，形状はほぼ隅丸方形を呈していたと思われるが，トレンチャーによる攪乱がかなりはげしいため判然としない。主軸はN－3°－Wを指している。床面はローム層上の床であるが，踏み固めの跡は明確に確認できず，全面的にかなり凹凸があった。壁面の立ちあがり状況および高さは，東側は82°で立ちあがり，高さは21cm，西側は78°で立ちあがり，高さは44cm，南側は70°で立ちあがり，高さは41cm，北側は85°で立ちあがり，高さは35cmを測れた。壁溝，ピットなどは検出できなかった。

火床遺構は北壁中央部より検出されたが，攪乱がはなはだしく，構築材の灰白色粘土，砂粒などが集積された状態でしか確認できなかった。覆土は，大別して2層に分けられ，上層は黒褐色土，下層は褐色土となっており，明瞭なレンズ状の堆積土とはなっていないが自然堆積の状況をしめしていた。

遺物は10数点の土師器片が覆土中より出土したが，本住居址に明確に関連付けられる状況ではなく，覆土中に流れこんだものと考えられる。



第34図　13号住居址平面実測図

14号住居址（第37・40図）

本住居址は，A区，21・22－Cグリットから検出され，16号住居址と重複していた。

規模は不明，形状は検出された東コーナー部からみて隅丸方形と推定される。主軸も不明。床面はローム層上に10～15cmほどの貼り床をおこなっているがトレンチャーによる攪乱のため一部しか検出できなかった。壁面は南側と東側の一部しか検出できなかったが，その立ちあがり状況は，東側は73°で立ちあがり，高さ38cm，南壁は78°で立ちあがり，高さは53cmを測れた。ピットは本住居址に関連するものとしては検出できなかった。火床遺構としては北側にカマドが遺存しているが，明確な規模および形状は攪乱されているため判然としなかった。覆土は黒褐色土が主で下位には床面より焼土が多量に堆積しており，若干ながら炭化物とローム粒子が含まれていた。焼土の分布および堆積状況からみても火災住居址とは断定できなかった。

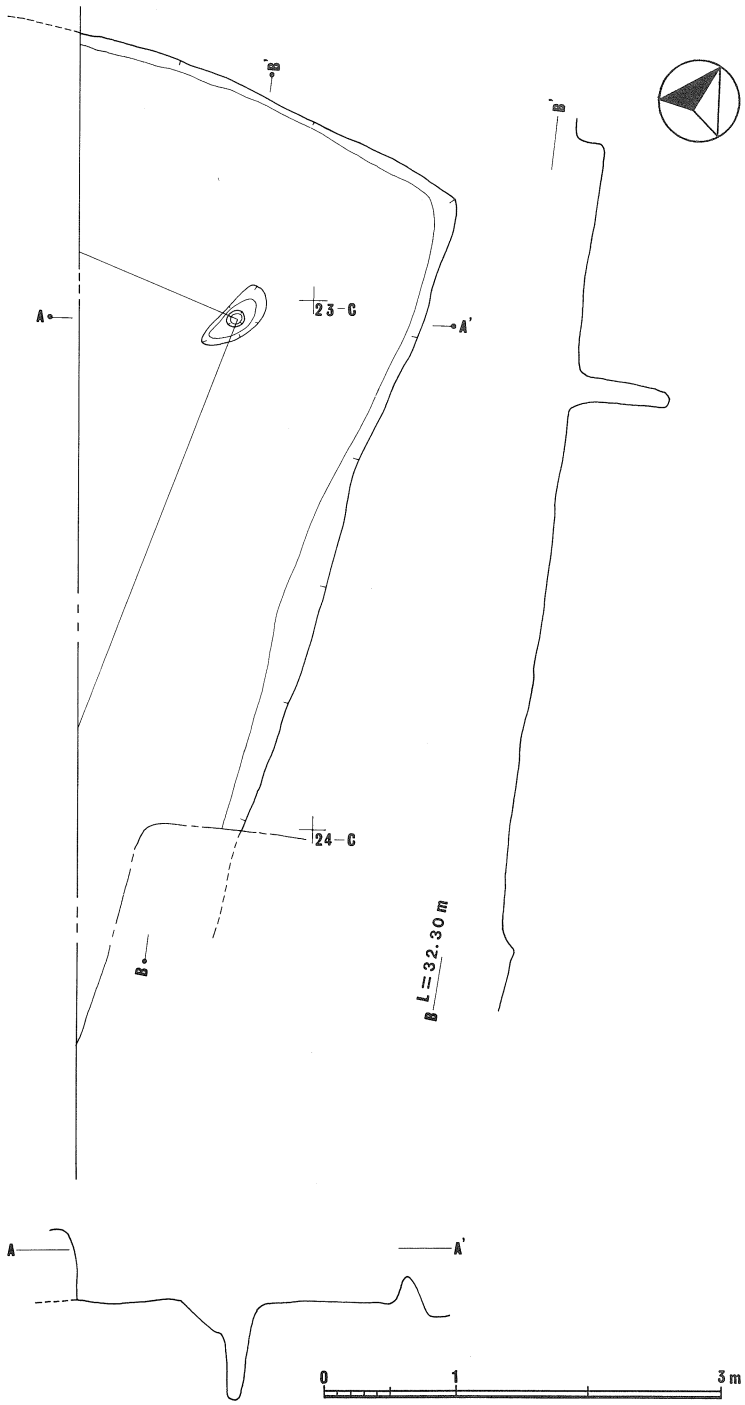
遺物は，実測可能なものとして6点あり，他は覆土中より出土した小破片である。1　坏でカマ

ドの残存部より出土した。2　坏で本住居址中央部の覆土下層より出土した破片で50％残存している。3　坏で中央東寄りの床上面より出土した破片である。4　坏で3と重なった状態で出土している。5　坏で中央西寄りの床上10cmの覆土中より出土している。6　坏で中央南寄りの覆土中より出土した。遺物の分布状況はほぼ散在して出土している。

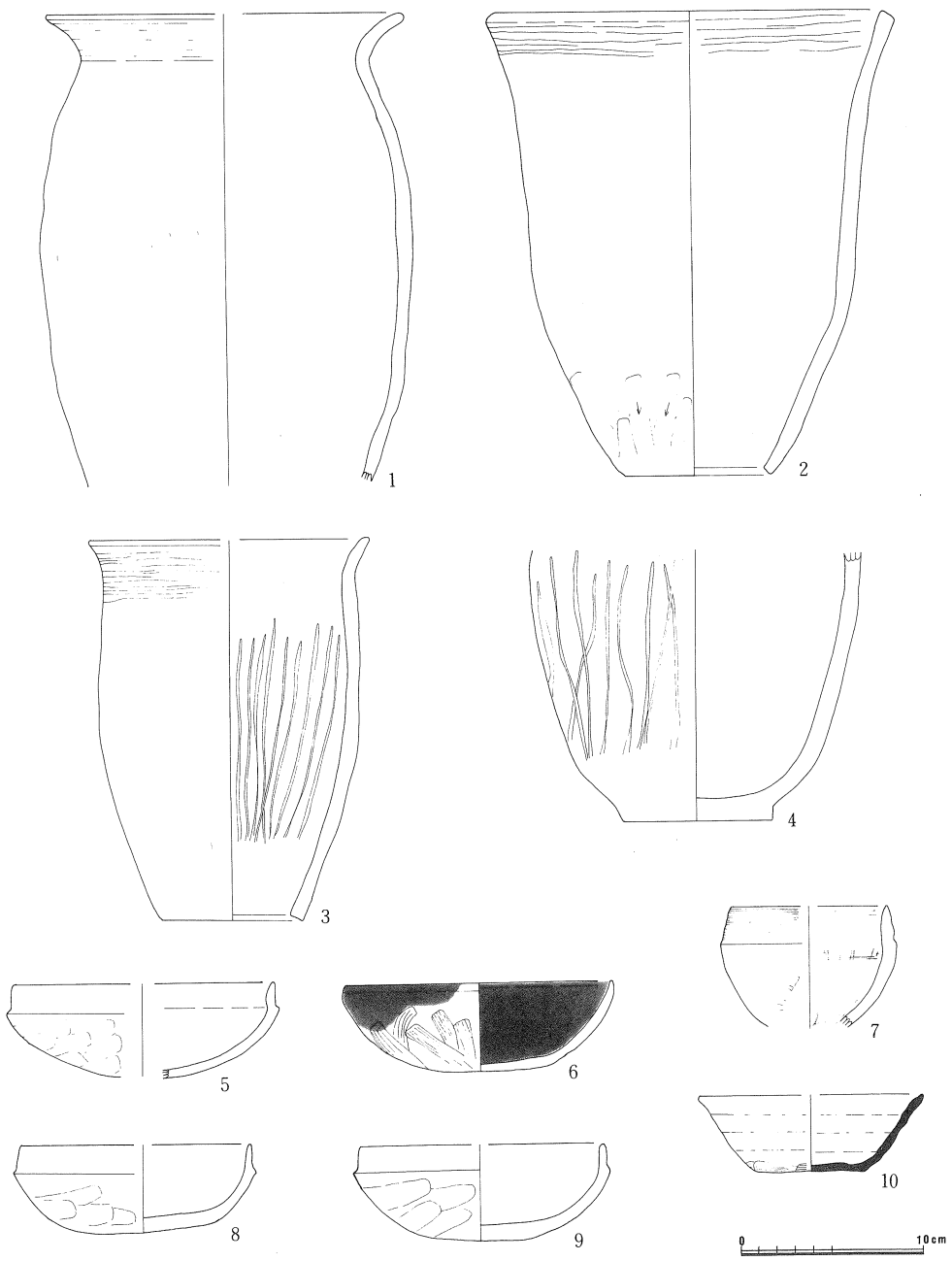
15号住居址（第35図）

本住居址は，A区，22・23－Bグリットより検出された。遺構の大半が調査区域外にあたるため規模，主軸は不明，形状は北東コーナー部から推定すると方形と思われる。床面はトレンチャーによる攪乱をうけているが，全面的に貼り床を施している。壁面の立ちあがり状況は東側78°で立ちあがり，高さは20cm，北側86°で立ちあがり，高さは25cmを測れた。ピットは1個確認され，P1の規模は口径50cm×43cm，深さ52cmであった。火床遺構は不明。覆土は暗褐色土が主体土でほぼ2層に大別でき，自然堆積であることがわかった。

遺物は，実測可能なもので10点，小破片は若干出土している。1　甕で口縁部から胴下半部までの破片を接合したもので，P1の南側床面より出土した。2　甑でほぼ中央床面上より出土した。3　甑で2と同地点より出土し，ともに横到しの状態であった。4　甕の底部片で1，2，3とともに出土している。5　坏でP1の西側床面より出土した破片である。6　坏で東西方向のセクションベルト中より出土し，口縁部の欠損部分をのぞくとほぼ定形である。7　小型鉢の破片で覆土上層より出土。8　坏片でP1西側床上面より出土。5，8，9と同地点である。9　坏片で8と重なった状態で出土した。10　須恵器の破片であるが，覆土上層の北東コーナー部で出土しているが，攪乱時に本住居址へ流れ込んだものと思われる。



第35図　15号住居址平面実測図



第36図　15号住居址出土遺物実測図

（表９）　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技　法　の　特　徴	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	甕 （土師器）	A 19.4cm B 15.5cm C 25.7cm	やや長胴ぎみの胴部で口辺部は大きく外反して開く。底部以下欠損。	内外共にナデ，四辺部外面は横ナデを施す。	A 砂粒，砂礫 B にぶい褐色 C 普通	
2	甑 （土師器）	A 31.4cm B 孔径8.0cm C 25.4cm	胴部は下半部から外傾して立ちあがり，中央部付近でほぼ直立ぎみとなり，口辺部では再び外反して開く口縁部となる。	内外面共にナデを施し，外面の胴下半部ではヘラ削りの痕跡が若干認められる。口辺部は内外面共に横ナデを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
3	甑 （土師器）	A 17.6cm B 孔径7.8cm C 20.8cm	下端部よりやや外傾して立ちあがった胴部は中央部から上半部にかけてほぼ直立し，口縁部では外反して開く。	口辺部外面は横ナデ，胴部外面は中央部下位にヘラ削りを行なった跡が残る。内面は縦位にミガキを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
4	甕 （土師器）	A 不明 B 8.2cm C 14.8cm	底部はあげ底で，胴部は底部より外傾して立ちあがったのち，ほぼ直立してのびる胴部である。	内面はナデ，外面はナデの後縦位のミガキを施す。	A 砂粒 B にぶい褐色 C 普通	
5	坏 （土師器）	A 14.4cm B ——— C 5.2cm	大きく内彎して立ちあがる体部で，口辺部はほぼ直立して開く。	内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。口辺部は横ナデ。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
6	坏 （土師器）	A 14.8cm B ——— C 4.8cm	丸底，大きく内彎して立ちあがる体部。口縁部はほぼ直立して開く。	内面は横ナデを施し，外面はヘラ削りの後ヘラナデを行う。内外面とも黒色処理を施している。（外面の一部は未処理部分もある）	A 砂粒 B 褐灰色（内外面共黒色処理を施す） C 良好	
7	坏 （土師器）	A 8.6cm B ——— C 7.4cm	体部は大きく内彎し口辺部はやや内傾ぎみながら直立して開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はミガキを施し，外面はヘラ削りを行なっている。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
8	坏 （土師器）	A 13.4cm B ——— C 4.8cm	扁平な丸底，内彎して立ちあがる体部で口辺部はほぼ直立して開く。口辺部と体部の接合部外面には僅かながらも稜を有す。	口辺部内外は横ナデ，体部外面はヘラ削りの後ナデ，内面はナデを施している。	A 砂粒 B 灰褐色 C 普通	
9	坏 （土師器）	A 13.6cm B ——— C 5.2cm	扁平な平底。体部は大きく内彎して立ちあがり口縁部はほぼ直立して開く。	内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。口辺部内外は横ナデ。	A 砂粒 B 明褐灰色 C 普通	
10	坏 （須恵器）	A 12.2cm B 6.0cm C 4.2cm	ほぼ直線的に外傾して立ちあがり，口縁部で僅かに外反する。	水挽き成形後回転横ナデを行なう。体部下端はヘラ削り調整。底部はヘラ切りを行なっている。	A 砂粒 B ——— C 普通	

16号住居址（第37・38・39・40図）

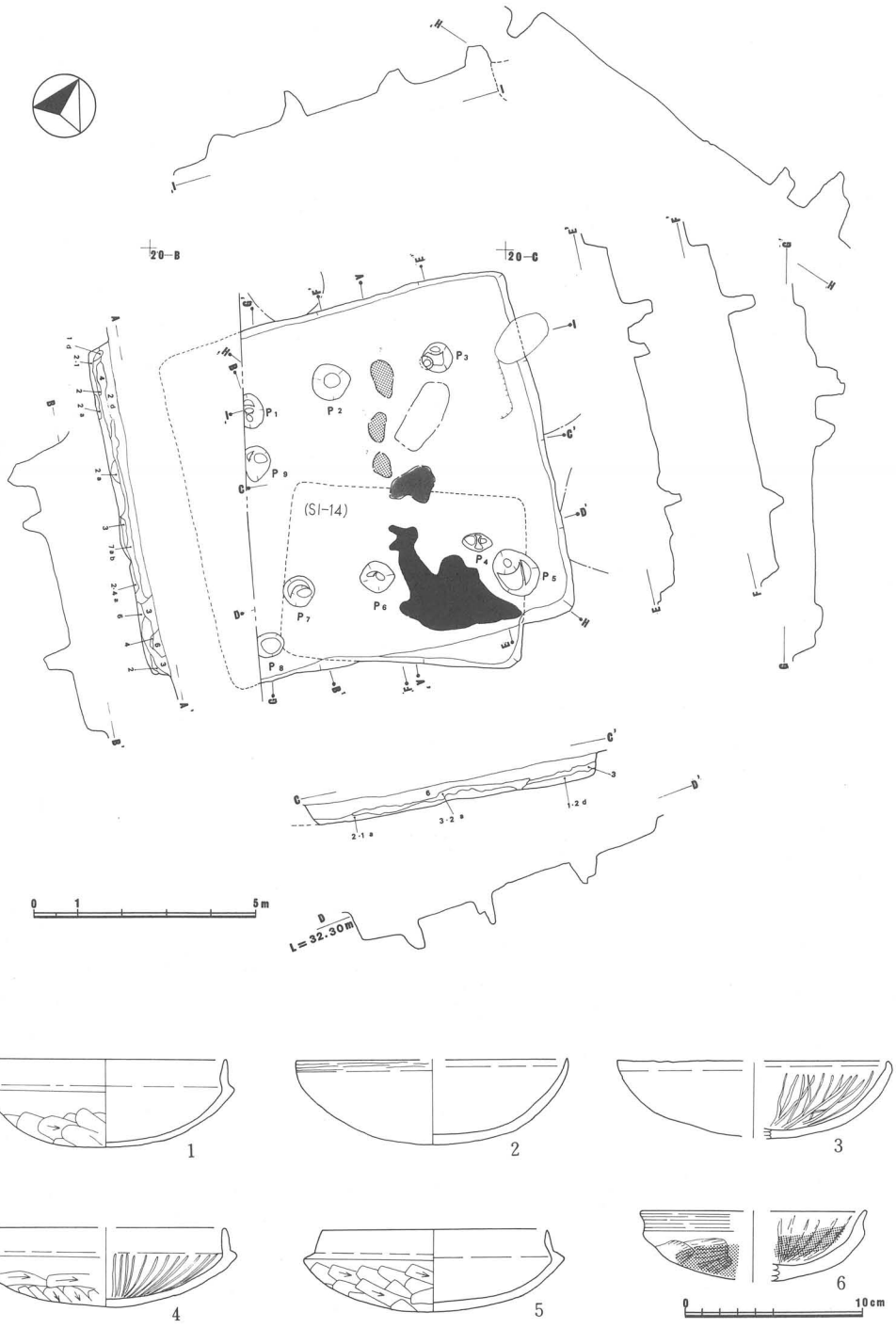
本住居址は，A区，20・21－Cグリットより検出された。東側は14号住居址と重複し，一部攪乱されている。また，東に17号住居址と4号土坑が一部重複している。

規模は，北東・南西間が不明で，北西・南東8,00mで，形状はほぼ方形を呈している。主軸はN－20°－Wを指している。床面はローム上面を踏み固めた堅緻な床となっており，全面的に平坦である。壁面の立ちあがり状況は，北東壁は82°で立ちあがり，高さは51cm，南東壁は88°で立ちあがり，高さは53cm，北西壁は78°で立ちあがり，高さは56cmを側れた。南西壁については調査区域外のため不明である。壁溝は検出されなかった。ピットは9個検出され，その規模はP1口径54cm×68cm，深さ68cm，P2口径75cm×58cm，深さ43cm，P3口径58cm×53cm，深さは最深部で68cm，P4口径51cm×36cm，深さは最深部で58cm，P5口径96cm×83cm，深さは最深部で1.23cm，P6口径56cm×50cm，深さは最深部で71cm，P7口径56cm×46cm，深さは63cm，P8口径48cm×55cm，深さ22cmを側れた。

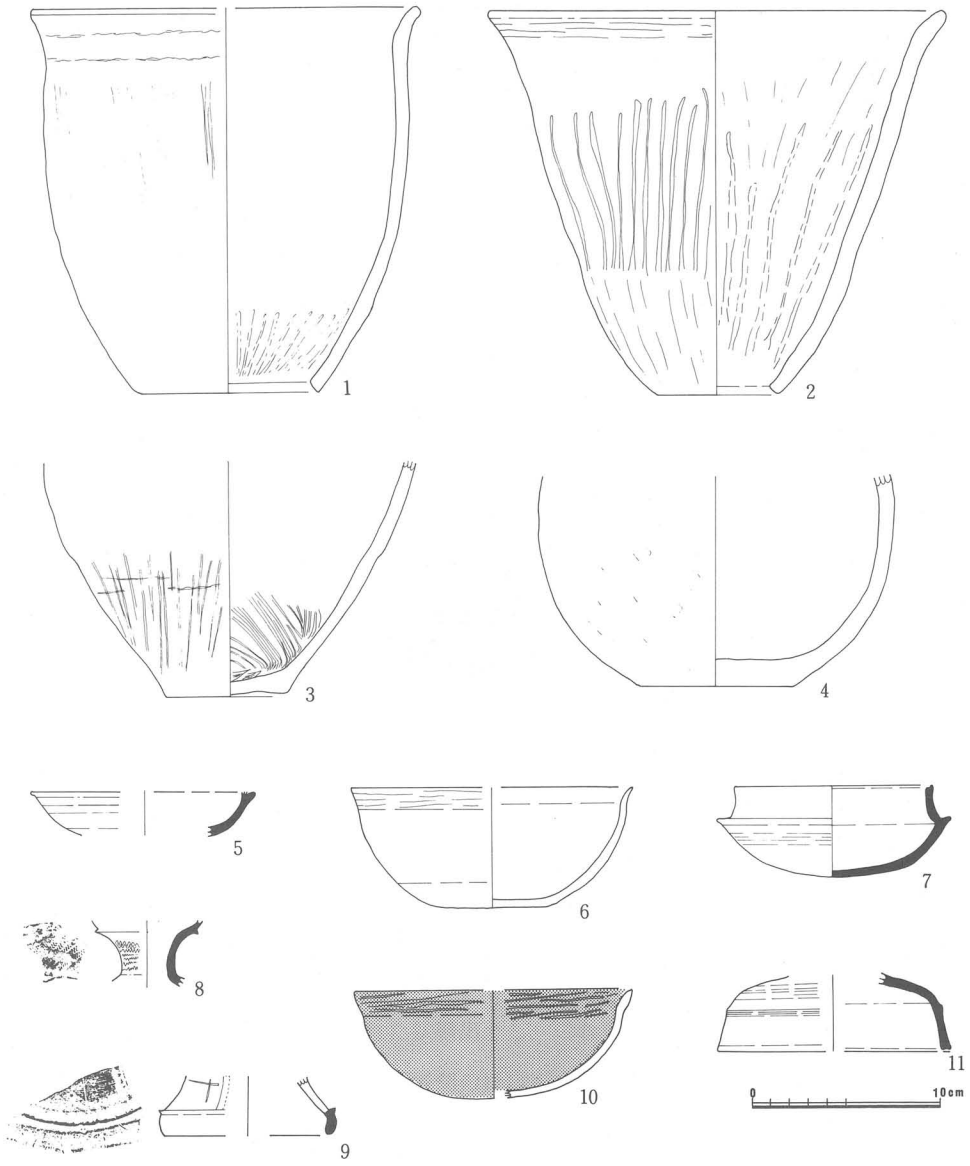
火床遺構としては炉が3基確認された。北側より1号炉，2号炉，3号炉と呼称し，その規模は1号炉80cm×40cm，深さ7cm，2号炉68cm×30cm，深さ4cm，3号炉48cm×18cm，深さ7cmを側れた。いずれの炉も焼土粒および，焼土ブロックが堆積し，ローム粒子と炭化物が若干含まれていた。

覆土は大別して3層に分けられ，上層は褐色土，中層は黒褐色土，下層は，褐色土が主体土で，自然堆積の状況をしめしていた。

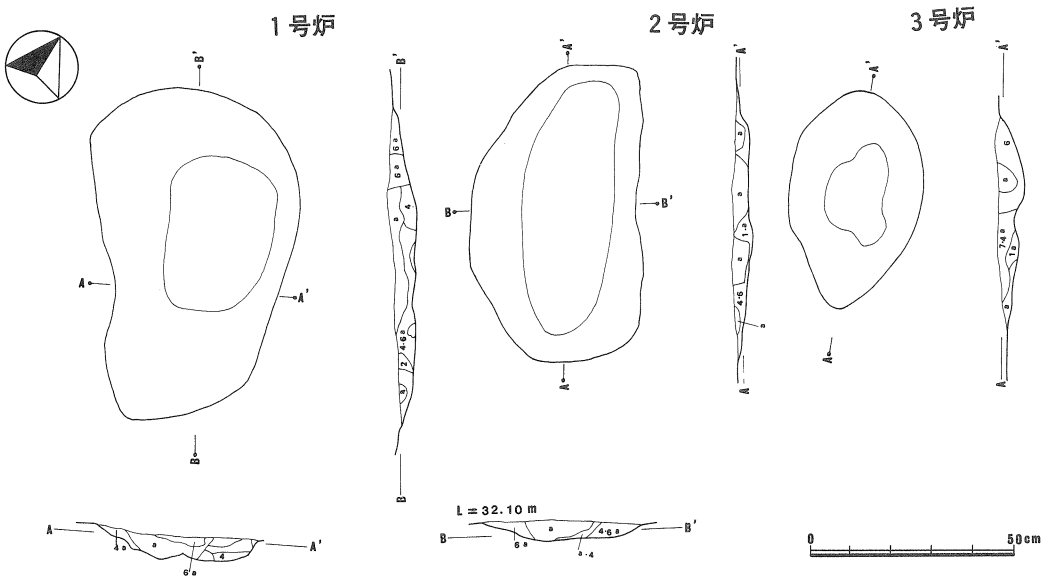
遺物は図化できるものとして11点をあげたが，このうち4については14号住居址に関する土器と考えているが，取り上げ時の状況から本住居址分として記載している。1　甑で北コーナー部の床上10cmの層中より出土した破片を接合したものである。2　甑で調査区域外との境目の土層中より出土した。出土状況は一ヵ所に集積された状態出土し，これらの破片を接合して全体の60％ほどに復元したものである。3　甕底部で，北東壁側のほぼ中央部より出土し，層位は床上5cmほどの位置である。4　は甕の胴下半部片で覆土下層より出土した。5　須恵器の坏片で稜部の張りをするどく残している。6　坏で本住居址中央部の覆土中より出土している。7　須恵器の坏で北コーナ部寄りの床面上より出土し，ほぼ完形の状態で出土している。8　須恵器の坏の頸部片で北コーナー部の覆土中層より出土している。9　須恵器の高坏の脚部片で，一部スカシ部がみられる。出土位置は北東側壁のほぼ中央より西側の下層中より出土している。10　坏でほぼ東西方向に残したレベルと中央部の中層から出土している。11　須恵器の蓋坏片である。出土位置は北側コーナー部の覆土中層より出土した。



第37図　14・16号住居址平面実測図・14号住居址出土遺物実測図



第38図　16号住居址出土遺物実測図



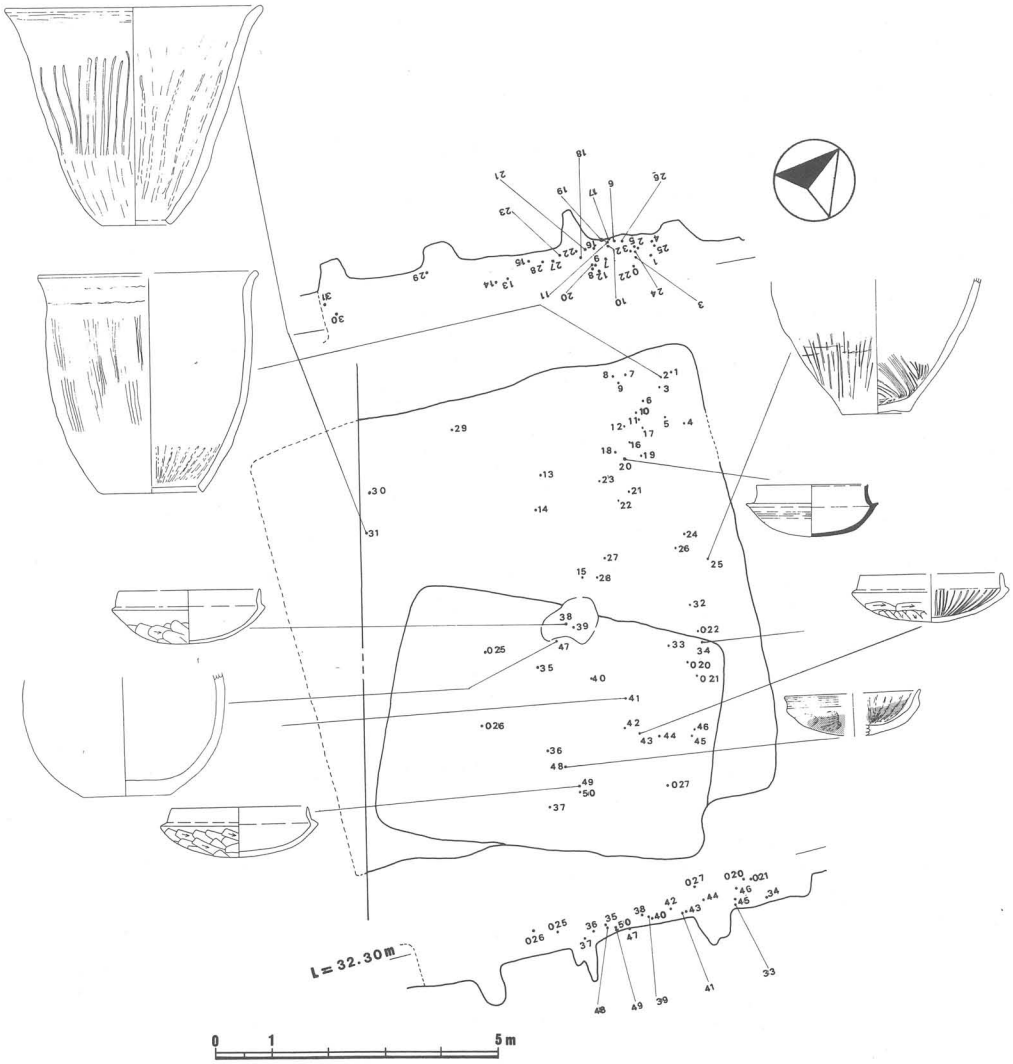
第39図　16号住居址・炉・平面実測図

(表10)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	坏 (土師器)	A 13.4cm B ——— C 5.0cm	扁平な丸底。大きく内彎した体部は稜まで立ちあがり，口辺部はやや内傾ぎみに開く。	体部内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。口辺部内外は横ナデを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
2	坏 (土師器)	A 15.4cm B ——— C 4.8cm	大きく内彎して立ちあがる体部で口縁部はほぼ直立して開く。	内外面共にヘラ削りの後，口縁部は横ナデ。	A 砂粒 B 鈍い褐色 C 良好	
3	坏 (土師器)	A 15.6cm B ——— C 4.4cm	内彎して立ちあがる体部で，口縁部は直立して開く。	内外面共にヘラ削りの後ナデ，口縁部は横ナデ。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
4	坏 (土師器)	A 13.4cm B ——— C 4.5cm	体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部はやや内傾ぎみに立ちあがって開く。口辺部で体部の接合部外側には明瞭な稜をもつ。	口辺部の内外は後ナデ，体部，外面はヘラ削り。内面には縦位のミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
5	坏 (土師器)	A 14.4cm B ——— C 5.2cm	大きく内彎して立ちあがる体部で，口辺部はほぼ直立して開く。	内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。口辺部は横ナデ。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
5	坏 (土師器)	A 13.0cm B ——— C 4.6cm	扁平な丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり稜にいたる。口辺部は内彎して開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
6	坏 (土師器)	A 12.8cm B ——— C 4.0cm	体部は大きく内彎して立ちあがり，口統部は一端内傾してから口唇部で大きく外反する。	内面は縦位のミガキ，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 褐灰色 C 普通	

(表11)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第38図 1	甑 （土師器）	A 20.6cm B 孔径9.6cm C 20.4	底孔部から外傾して立ちあがる胴部で中央部以上はほぼ直立する。口縁部は僅かに外反して開く。	口辺部内外は横ナデ，胴部外面は縦位にヘラ削りを施す。内面はナデと思われるが表面が剥離しており不明瞭である。下端部付近は若干ミガキの痕跡が縦位に残る。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
2	甑 （土師器）	A 24.2cm B 孔径6.5cm C 20.4cm	胴部は下端部よりほぼ直線状に外傾して立ちあがり，口縁部はさらに大きく外反して開く。	内外面共にヘラ削りを行ない，内面は不明瞭ながら縦位のミガキを施している。外面は胴中位部にミガキが施され，下半部はヘラ削りのままである。口辺部外側は横位にナデを施す。	A 砂粒，砂礫 雲母 B にぶい橙色 C 普通	
3	甕 （土師器）	A 不明 B 6.6cm C 12.4cm	外傾して立ちあがる胴部（下半部）である。中央部以外は欠損。	内外面共にナデとヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
4	甕 （土師器）	A 18.4cm B 8.2cm C 11.1cm	平底，胴部は大きく内彎して立ちあがる。	内面はナデ，外面はヘラ削りの後ナデを施す。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
5	坏（身） （須恵器）	A 11.8cm B ——— C 2.1cm	回転横ナデをおこなう。	外面は回転ヘラナデ，内面は横ナデを施す。	A 砂粒 B 灰 C 良好	
6	坏 （土師器）	A 15.0cm B ——— C 6.4cm	扁平な丸底で，体部は内彎しながら立ちあがり，口縁部が若干外反して開く。	内外面共にナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 不良	
7	坏 （須恵器）	A 10.6cm B ——— C 4.8cm	大きく内彎して立ちあがる体部で，口辺部（たちあがり）は内彎ぎみに立ちあがってから直立して開く。口辺部と体部の接合部外側には外方に向って大きく張り出す稜を有す。	口辺部内外，体部内外面上端部は回転横ナデを施す。体部下半部から底部にかけては回転ヘラで整形している。	A 砂粒，砂礫 B 褐灰色 C 良好	
8	坏（口辺～頸部） （須恵器）	A 5.9cm B ——— C 3.5cm	大きく外反して立ち上がる頸部。	外面は横位に波状文を施し内面はナデを行なっている。	A 砂粒 B 黒色 C 良好	
9	高坏 （脚部） （須恵器）	A 8.8cm B ——— C 3.8cm	脚下端部はやや内反している。	内面はナデ，外面はヘラナデを施す。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	
10	坏 （土師器）	A 14.8cm B ——— C 5.8cm	大きく内彎しながら立ちあがる体部で口縁部はさらに大きく外反して開く。	内外面共にナデを施し整形を行なう。局部的にミガキの痕跡を残す。口辺部内外面は横位にミガキを施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 良好	
11	坏蓋 （須恵器）	A 12.4cm B ——— C 4.5cm	天井部分は大きく外傾して開き，口縁部で内彎して「かえり」部にいたる。天井部と口縁部の外面接合部には稜を持つ。口縁部下端には僅かながら「かえり」を有す。	内面は横ナデ外面は天井部に回転ヘラ削り，口縁部には横ナデを施す。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	



第40図　14・16号住居址遺物分布図

17号住居址（第41・42・43・44図）

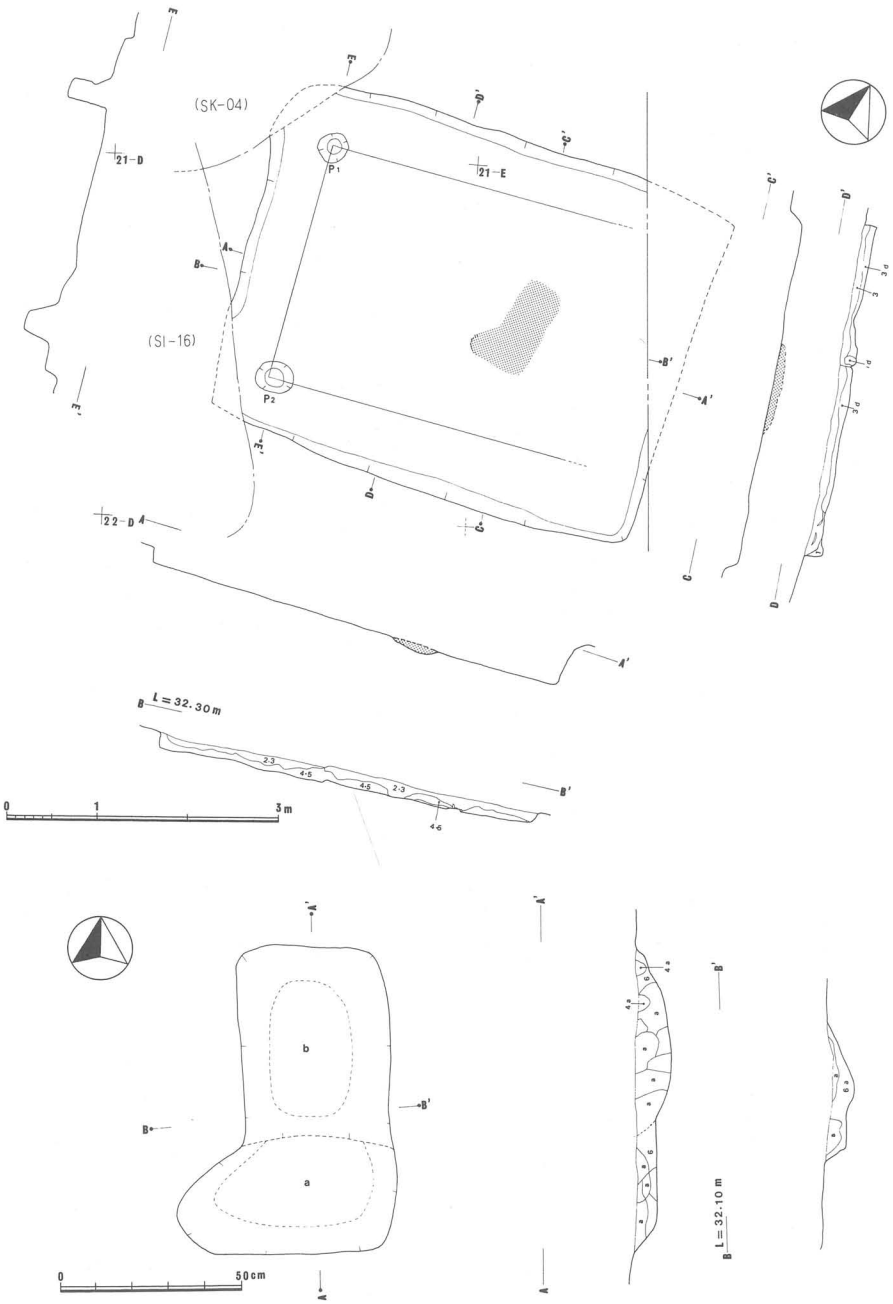
本住居址は，Ａ区，21－Ｄ・Ｅグリットから検出され，西に16号住居址，４号土坑が隣接しているほか，南東に20号住居址，２号大溝遺構などが位置する。

規模は，北西・南東3.90ｍ，北東・南西4.90ｍを測れ，形状は長方形を呈している。主軸はＮ－79°－Ｅを指している。床面はローム層上面を竪緻に踏み固めた床であり，中央部付近より壁面脇になるにつれ低くなっている。壁面の立ちあがり状況および高さは，北西壁が72°で立ちあがり，高さ21cm，南東壁が82°で立ちあがり，高さは20cm，北東壁は調査区域外で不明。南西壁は77°で立ちあがり，高さは20cmを測れた。壁溝は認められなかった。ピットは２個しか検出できなかったが，その規模はＰ1口径29cm×30cm，深さ45cm，Ｐ2口径32cm×31cm，深さ35cmを測れた。

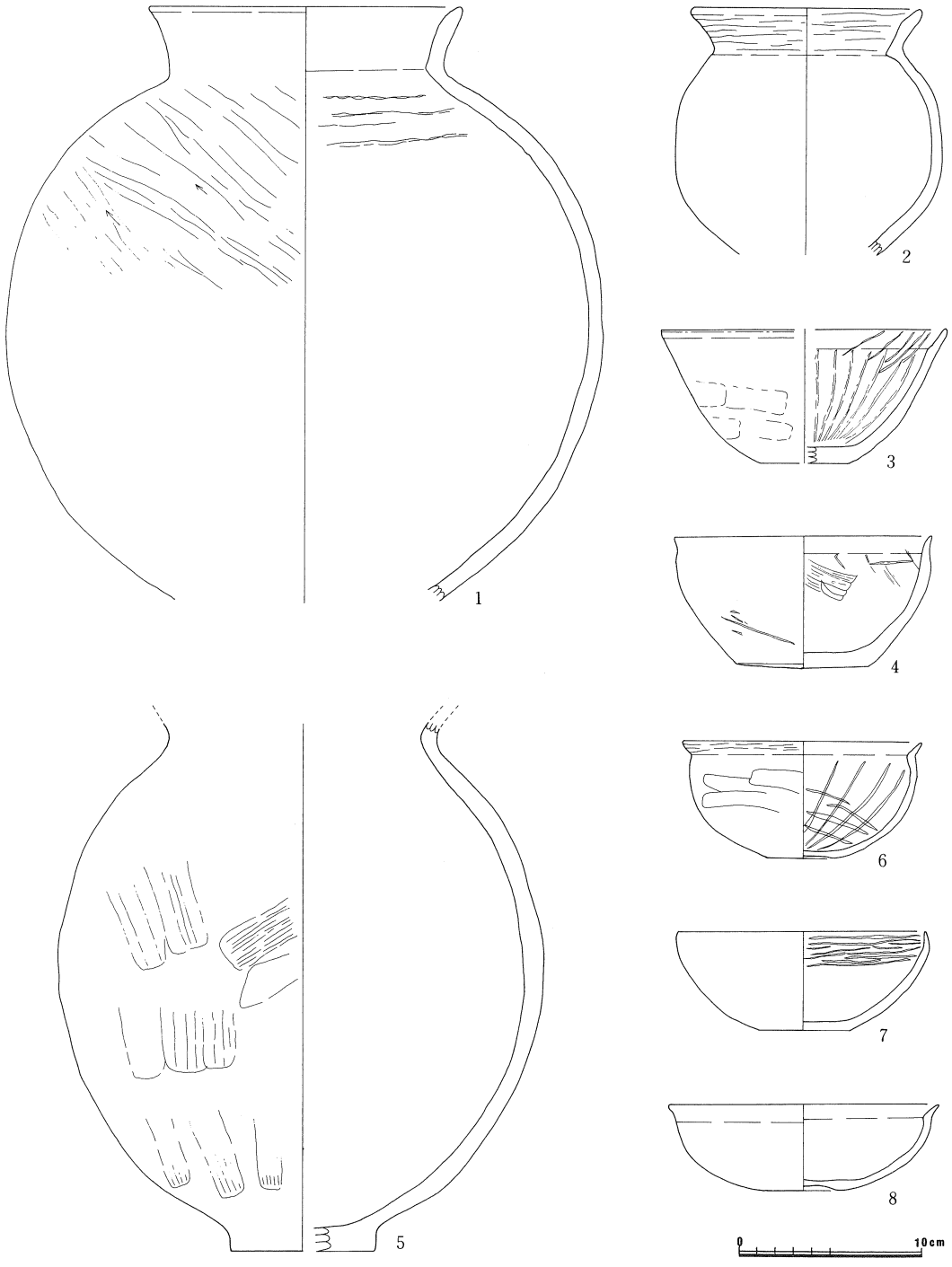
火床遺構としては中央東寄りから炉が検出された。炉には新旧の痕跡があり，先行する時期に使用された炉ａが後に若干の位置を変えて使用された炉ｂによって切られている状況が確認された。炉内の堆積状況は焼土および焼土ブロックと炭化物などが主で，上面には若干のロームブロックなども認められた。規模は最大幅として，東西34cm，南北85cm，深さ10cmの掘り込みが認められた。

覆土は，大別して２層に分けられ，上層は褐色土，黒褐色土の混合土で，下層は暗褐色土が主体土となっており，ほとんど自然堆積の状況を呈していた。

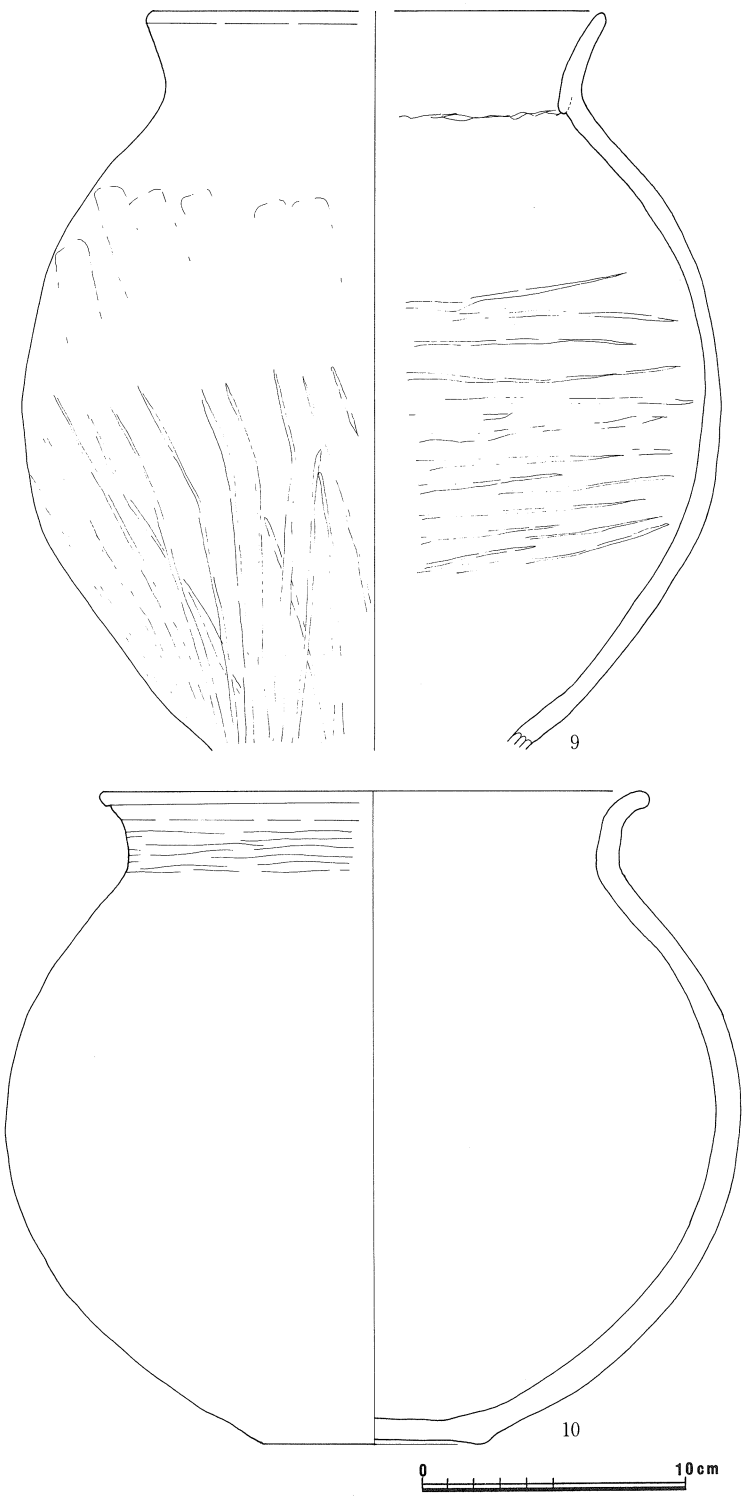
遺物は，図化できるものとして10点あったが，小破片についてはコンテナ１箱分出土した。 1 甕で口縁部から胴下半部までの接合片で残存50％である。出土位置は北西壁の西寄りの床上面から出土した。 2 小型甕で50％の残存片で，出土位置は中央東寄りの床面上から出土している。 3 坏片で北西壁西寄り床上面より出土。 4 坏で出土位置は西南壁中央の覆土上層中より出土し一部遺構確認時に出土していた。 5 甕で遺構確認時に出土した破片と覆土掘り下げ段階に出土した破片とが接合できたもので，出土位置は中央部上層中から出土した。 6 坏で北側床上面10cmの層中より出土，口縁部の欠損は一部あるが，ほぼ完形に近い。 7 坏で南東壁よりやや南寄りの床上面より出土，70％の残存片である。 8 坏で北西壁より西寄りの下層中より出土し，接合したもので80％の残存片である。 9 甕で出土位置は南コーナー部下層上面より出土し，覆土中から出土した破片と接合できた。 10 甕で西コーナー部から出土し，覆土中として取り上げられたものとが接合できた。出土層位は上層下位より出土している。本住居址より出土した遺物類はその大半が竪穴周縁部付近に集中して出土している。



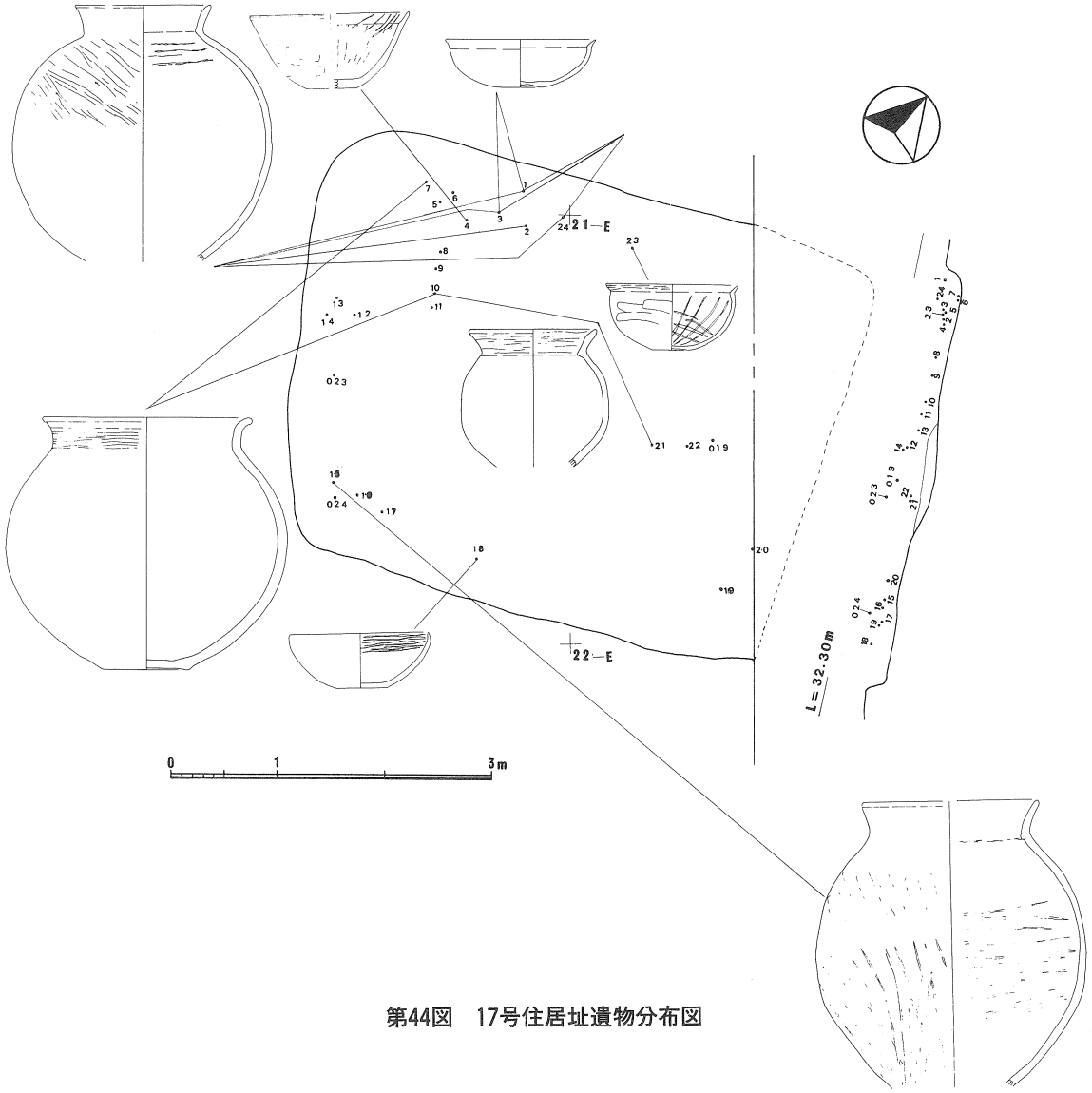
第41図　17号住居址平面実測図・炉平面実測図



第42図　17号住居址出土遺物実測図　(1)



第43図　17号住居址出土遺物実測図　(2)



第44図　17号住居址遺物分布図

(表12)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕 （土師器）	A 17.0cm B 不明 C 32.7cm	胴部は球状を呈し最大径を中央部にもつ，口辺部は稜やかに外反して開く。	内外面共にナデを施し，胴部上半の外面にはヘラナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
2	甕 （土師器）	A 12.6cm B 5.6cm C 13.4cm	ほぼ球状を呈す胴部で，口辺部は大きく外反して開く。底部は欠損。	胴部は内外面共にナデを施す。口辺部は内外面共に横ナデを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
3	坏 （土師器）	A 15.6cm B 5.0cm C 7.3cm	平底。体部は外傾して立ちあがり，口縁部も外傾したまま開く。	内面は縦位のミガキを施し，外面はヘラ削りと口縁部付近はナデを施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 普通	

4	坏 (土師器)	A 14.1cm B 7.4cm C 7.2cm	平底，体部は内彎して立ちあがり，口辺部にいたる。	内面はヘラ削りを行ない，外面はヘラ削りの後ナデを施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 良好	
5	甕 (土師器)	A 17.0cm B 8.0cm C 30.9cm	胴部は，底部から大きく内傾して立ちあがり中央部がかなり張った胴部で，上半部ではかなり内彎する。頸部以上は欠損している。	内面はナデ，外面はヘラ削りの後ナデを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
6	坏 (土師器)	A 13.0cm B 4.0cm C 6.4cm	体部は大きく内彎して立ちあがり，体部上端でやや内傾し口辺部と接合する。同部内側には鋭い稜を持つ。口辺部は大きく外傾して開く。	口辺部は横ナデ，体部外面はヘラ削りの後ナデを行なっている。内面はナデの後ミガキを斜位に交差させている。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
7	坏 (土師器)	A 13.6cm B 4.9cm C 5.4cm	扁平な底部，体部は内彎して立ちあがり口縁部は直立して開く。	内外面共に体部はナデを施し，口辺部内面から体部上端部にかけて，横位にミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
8	坏 (土師器)	A 14.8cm B 4.0cm C 4.8cm	大きく内彎して立ちあがる体部で，口縁部は大きく外反する。口縁部と体部の接合部内面には稜を有す。	口縁部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラナデを施している。底部はヘラ削りによって削り出してつくる。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
第43図 9	甕 (土師器)	A 17.0cm B 11.8cm C 28.1cm	口辺部は外反して開き，胴部は中央部が大きく張り出しかなり，球状に近い形を呈している。底部は欠損。	口辺部内外は横ナデ，胴部内面は基本的にはナデを施しているが，中央部付近には横位にミガキを施している。外面は下半部から中央部まで斜位にミガキを行なっている。上半部ではヘラ削りの痕跡をとどめる。	A 砂粒，石英 B 灰褐色 C 普通	
10	甕 (土師器)	A 20.8cm B 8.6cm C 29.8cm	胴部は下端部より大きく内彎して立ちあがり，中央部が最も張り出し最大径を有す。上半部は大きく内傾してほぼ球状を呈している。頸部から口辺部にかけてほぼ直立ぎみに立ちあがり口縁部はやや肥厚して大きく外反して開く。	口辺部内外は横ナデ，胴部内外はナデを施し整形を行っている。	A 砂粒 B 褐灰色 C 普通	

18号住居址（第45図）

本住居址は，Ｂ区，29－Ｃグリットから検出されたが，28号・29号・30号・31号住居址などと重複して検出された。切り合い状況から観察すると，本住居址が最も新しい遺構であると考えられた。

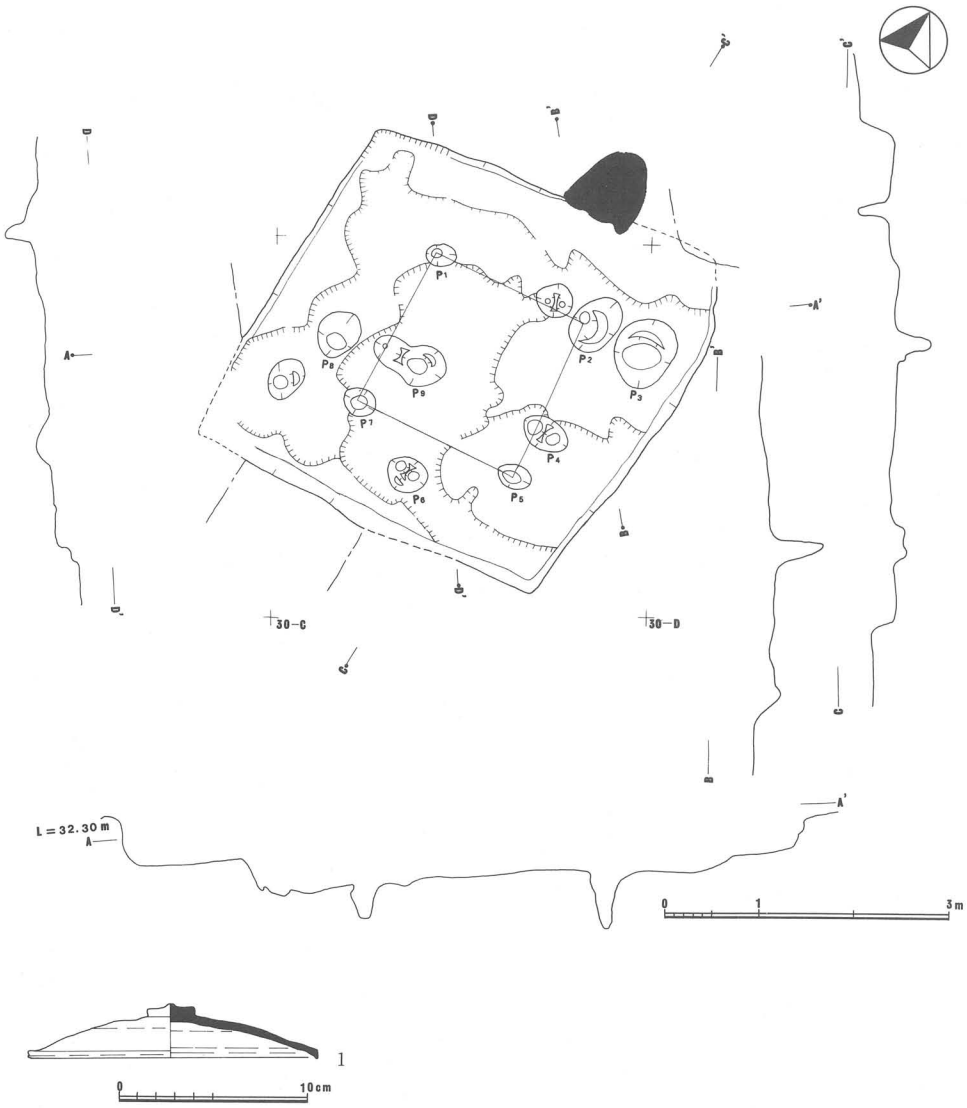
規模は，南北3.95ｍ，東西4.20ｍ，で形状は方形を呈していた。主軸はＮ－0°を指している。床面は全面的に貼り床を施し，その床厚は10cmから25cmほどで，暗褐色土が主体土となった床である。竪穴の掘り方はローム層中まで掘り込み，かなり小起伏があった。壁面は南壁の一部が73°で立ちあがり，高さは52cmを測れたが，他方向の壁面は重複した遺構によって切られているため，覆土と壁面との明確な区別はできなかった。ピットは全部で11個検出されたが全てが本住居址に関連するピットとは考えられないが，計測データは以下のとおりである。Ｐ1口径23cm×20cm，深さ29cm，Ｐ2口径19cm×22cm，深さ43cm，Ｐ3口径32cm×31cm，深さ58cm，Ｐ4口径50cm×57cm，深さ25cm，Ｐ5口径46cm×22cm，最深部で45cm，Ｐ6口径28cm×26cm，深さ16cm，Ｐ7口径24cm×22cm，深さ41cm，Ｐ8口径30cm×29cm，深さ56cm，Ｐ9口径28cm×44cm，深さ40cm，Ｐ10口径30cm×33cm，深さ36cm，Ｐ11口径40cm×40cm，深さ48cmを測れた。Ｐ1・Ｐ2・Ｐ5・Ｐ7は位置と規模から考えても本住居址のメイン柱の柱穴と推定できた。火床遺構としては北壁中央より東寄りの位置からカマドが確認された。形状としては攪乱をうけた跡があることなどから明確にはとらえられず，灰白色粘土および砂粒の集積された状態でのみ検出された。一応，計測数値を記すと，両袖間の最大幅は60cm，焚口部と思われる部分から奥壁部までは64cm，現高としては45cmを測れた。内部の堆積状況は攪乱のため不明瞭であったが，焼土，灰などは若干みられた。

覆土は暗褐色土が主体で部分的にロームブロックが含まれ，若干の焼土も混入されていた。局部的な攪乱をのぞけば本住居址の，覆土も自然堆積の状態をしめしていた。

遺物は，覆土中に混入されていた小破片などがコンテナ４分の１箱分は出土したが図化できるものとしては１点のみであった。 1 は須恵器の坏蓋で，覆土下層の貼り床上８cmほどの層中より完形で出土したのが唯一である。

(表13)　　Ａ 口径　Ｂ 底径　Ｃ 現高　　Ａ 胎土　Ｂ 色調　Ｃ 焼成

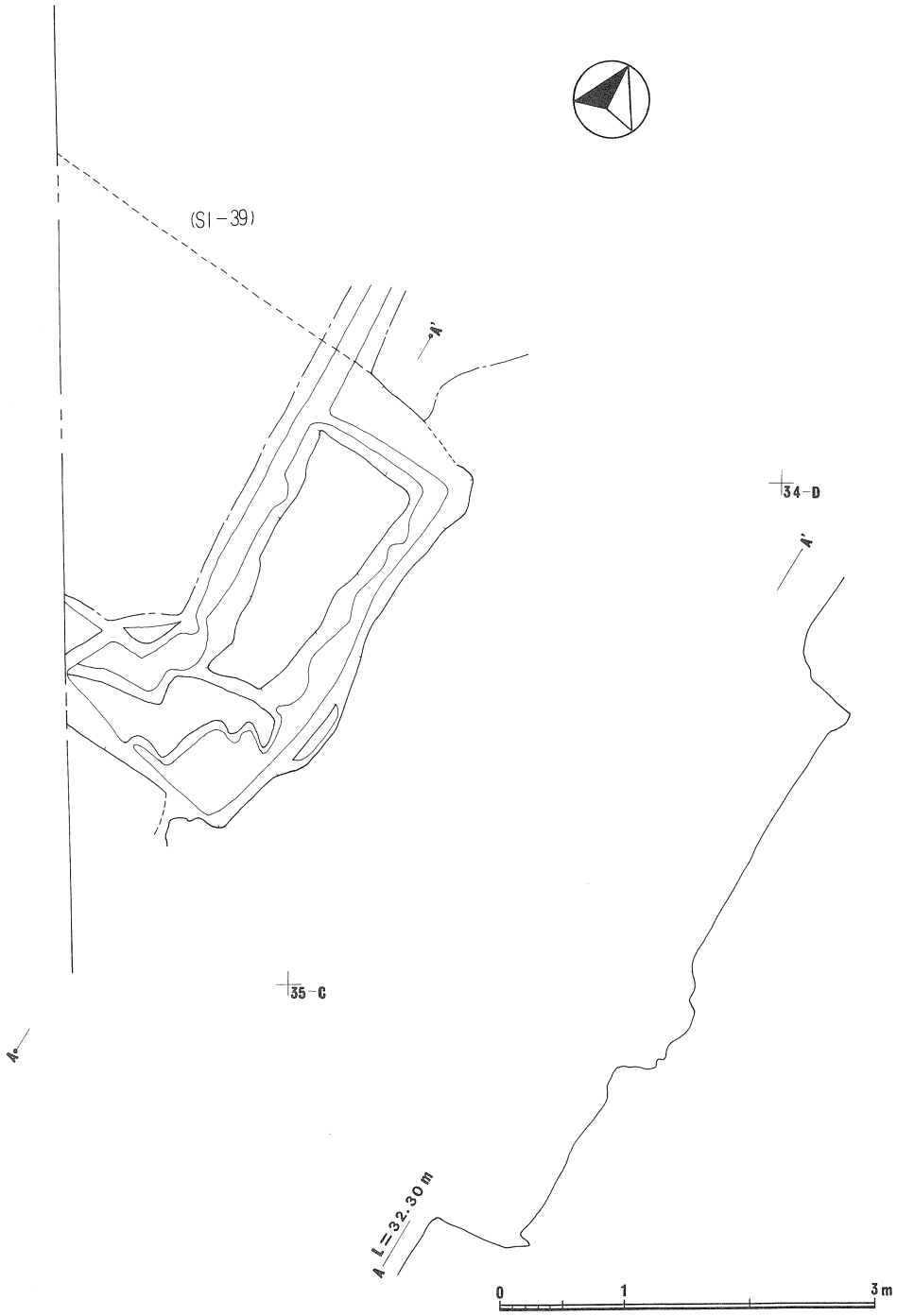
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	坏蓋 （須恵器）	Ａ 15.5cm Ｂ つまみ径 2.7cm 高さ0.7cm Ｃ 2.9cm	つまみは環状で，中央上部が高く突出している。天井部は丸味を持ち内傾して口唇部にいたる。口唇部は端部が真下に折れる。	水挽き成形の後内外面共に回転横ナデを行なっている。天井部上面の80％ほどに自然灰釉がかかる。	Ａ 砂粒 Ｂ 黄灰色 Ｃ 良好	



第45図　18号住居址平面実測図・出土遺物実測図

19号住居址（第46図）

本住居址は，Ｂ区，34－Ｃグリットから検出された。本住居址の位置には，39号住居址，43号住居址などが重複し，これらの遺構に切られていた。したがって南側壁面の一部が確認されたのみで，そのほかは調査区域外にあたる部分が大半をしめていたため詳細は不明であった。



第46図　19号住居址平面実測図

20号住居址（第47・48図）

本住居址は，A区，23－D・Eグリットから検出された。しかし本住居址は大溝遺構（SD－02）がほぼ南北に縦貫し，残存遺構は東西に分断されたかたちで検出された。

規模は，南北5.75m，東西6.00mで形状は隅丸方形を呈している。主軸はN－21°－Eを指している。床面はローム層上を堅緻に踏み固めた床である。壁溝は東側の検出部分，南側の一部，西側の一部などから確認されている。その規模は東壁溝幅13cm，深さ9cm，西壁溝幅14cm，深さ8cm，南壁溝幅13cm，深さ9cmを測れた。壁面の立ちあがり状況および高さは，東壁は80°で立ちあがり，高さは22cm，西壁は73°で立ちあがり，高さは30cm，南壁は64°で立ちあがり，高さは29cm，北壁は50°で立ちあがり，高さは33cmを測ることができた。

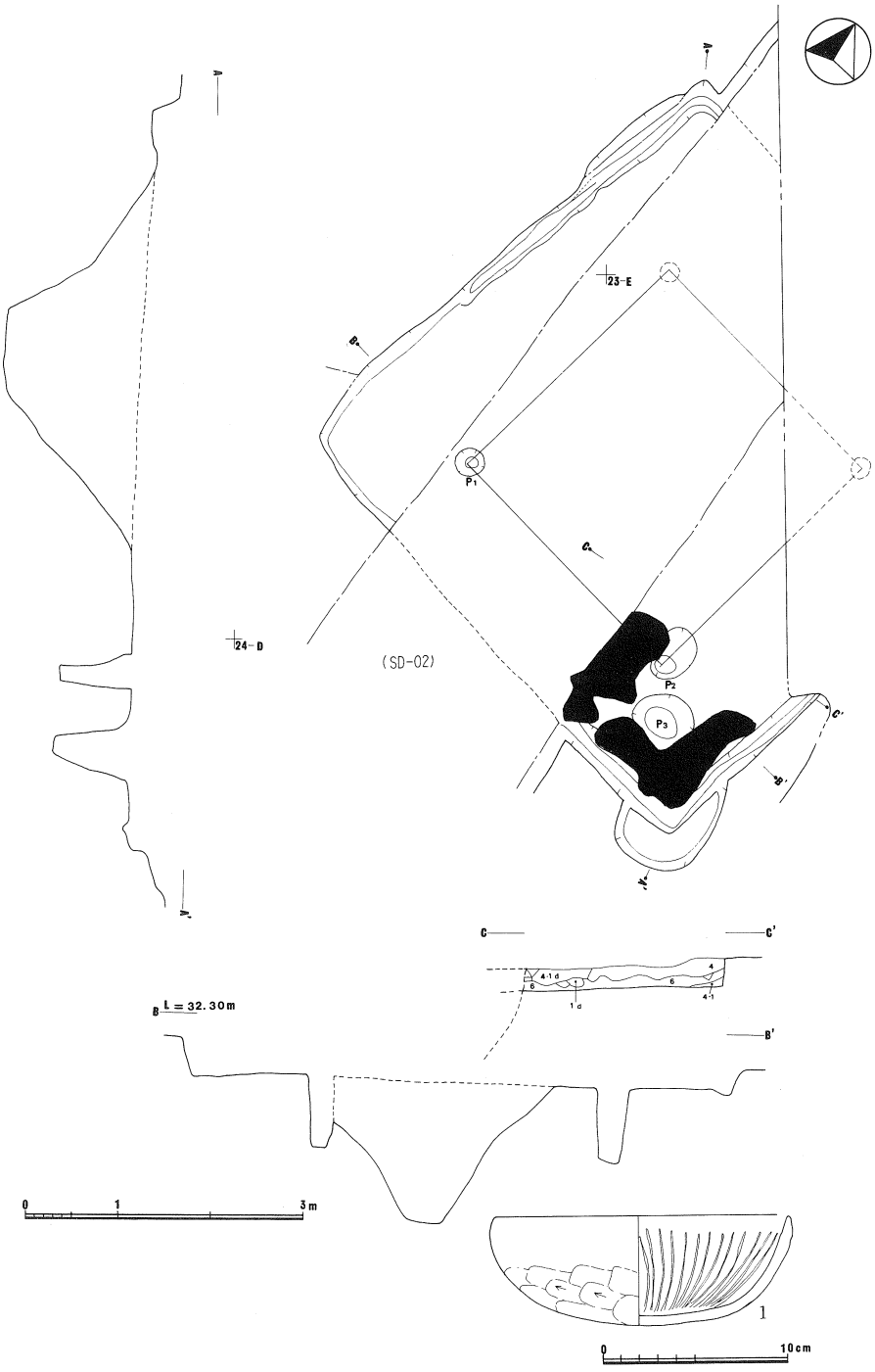
ピットは確認できたもので3個あり，他は調査区以外の部分であるのと，SD－02構築時に消滅したものとがあると思われる。規模はP1口径32cm×32cm，深さ80cm，P2口径37cm×44cm，深さ81cm，P3口径61cm×62cm，深さ82cmを測れた。なおP3の内部からは多量の焼土，木炭などが堆積しており，コブシ状の礫1点が出土した。

火床遺構は今回の検出範囲内からは確認できなかった。覆土は大別して2層に分類できた。上層は褐色土，下層は暗褐色土が主体土でSD－02によって破壊された部分以外はほぼ自然堆積の状況を呈していた。

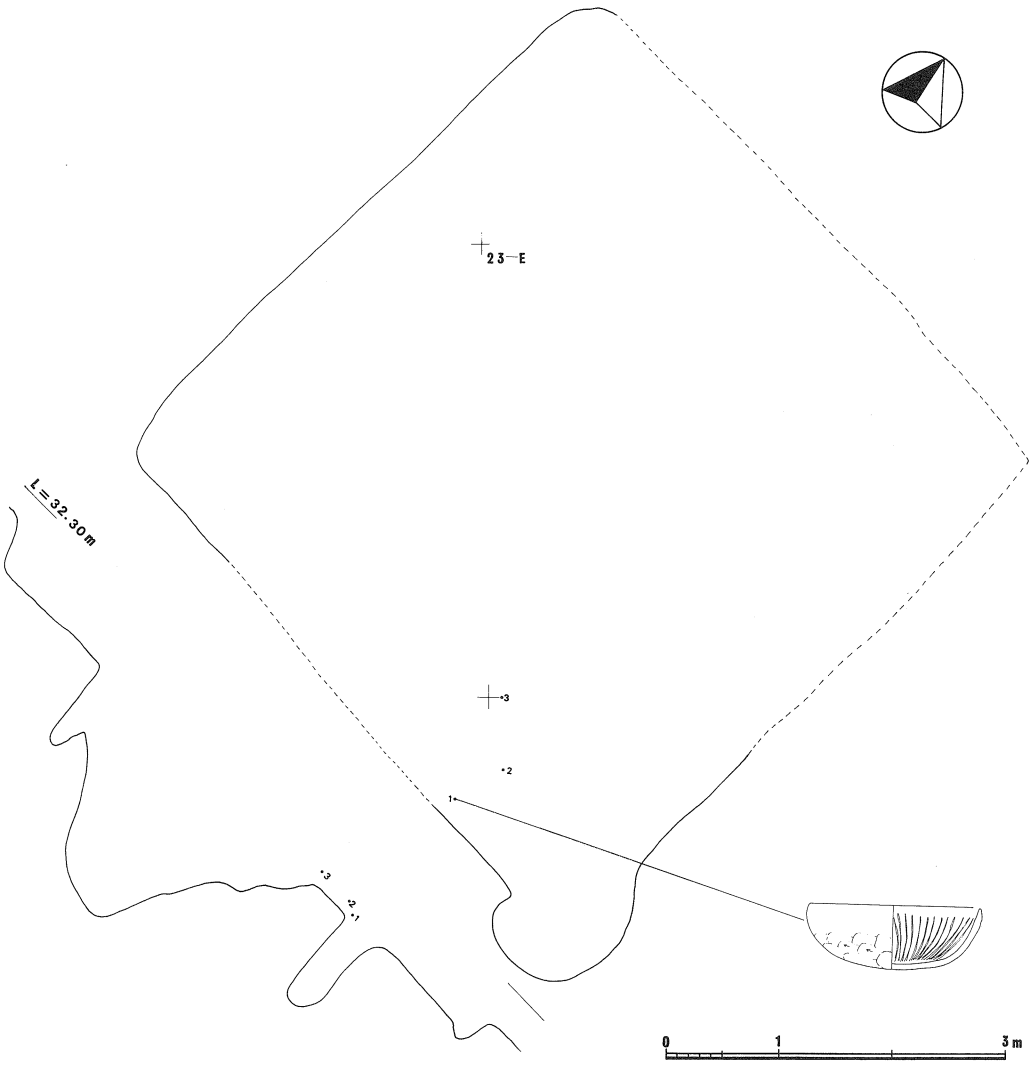
遺物は，ほぼ完形に近い坏 1 が1点，P3の南側の焼土下より出土している。小破片については60点ほど覆土中より出土している。

(表14)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	坏 （土師器）	A 16.2cm B ―― C 5.8cm	丸底，体部は大きく内彎してから立ちあがり口縁部はほぼ直立して開く。	体部外面はヘラ削り，内面は縦位のミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	



第47図　20号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第48号　20号住居址遺物分布図

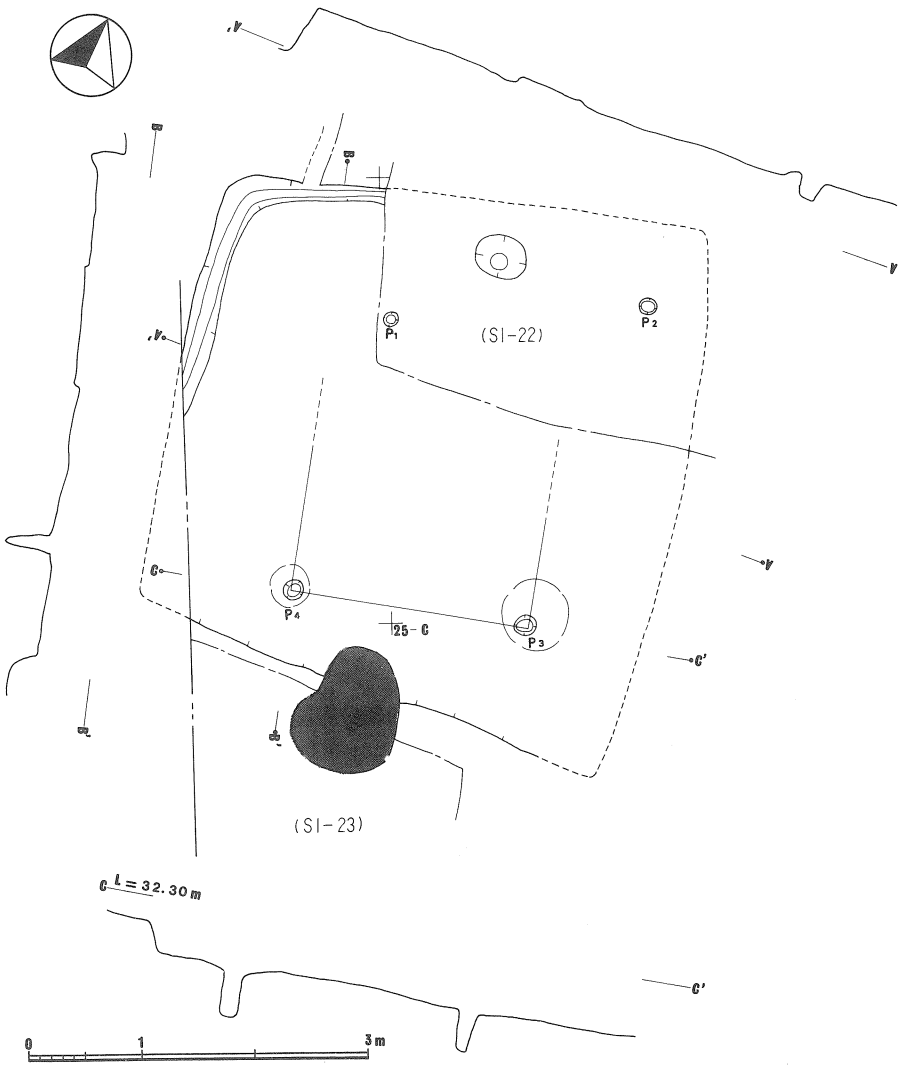
21号住居址（49図）

本住居址は，A区，24－B・Cグリットより検出された。本住居址は北に22号住居址，南に23号住居址が重複，隣接している。

規模は不明，形状は北西コーナー部から推定すると隅丸方形と考えられる。主軸は不明，床面はローム層上を堅緻に踏み固めた床であるがトレンチャーの攪乱によるためか，かなり局部的にもろくなっている。壁面は明確に残る部分としては西・北側の一部で他壁面は明確に検出できなかった。北壁面の立ちあがり状況は82°で立ちあがり，高さは22cm，西壁面は87°で立ちあがり，高さは38cm

を測れた。壁溝も西・北壁際に一部残るのみで，その規模は，北壁溝の幅15cm，深さ８cm，西壁溝の幅９cm，深さ５cmを測れた。ピットは本住居址に関連するものとして４個確認したが，いずれもメイン柱の柱穴としては考え難いものではあるが，一応，測定値を記すと，Ｐ1口径16cm×16cm，深さ26cm，Ｐ2口径20cm×18cm，深さ54cm，Ｐ3口径20cm×20cm，深さ42cm，Ｐ4口径15cm×15cm，深さ45cmを測れた。火床遺構は不明。覆土は暗褐色土が主体土で層位を明確に区別することができなかった。

遺物は若干の小破片が出土しているが，いずれも図化することが不可能であった。



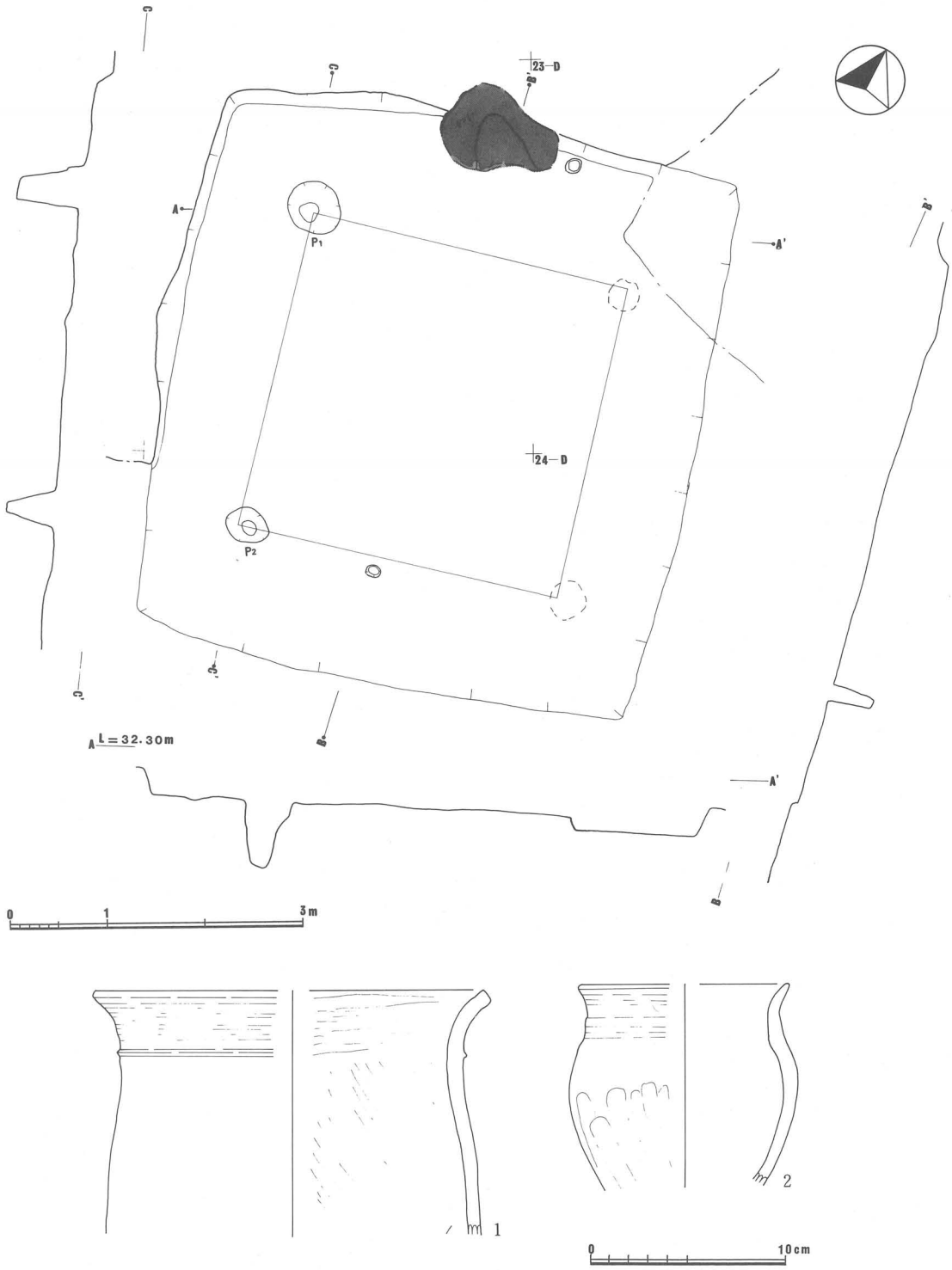
第49図　21号住居址平面実測図

22号住居址（第50・51・52図）

本住居址は，Ａ区，23・24－Ｃグリットから検出された。本住居址の東・西側の壁面は重複遺構のため，明確な壁面は検出されなかったが，床面より，若干の段差が確認されたので，これを床面と壁面との際と推定した。規模は南北5.90ｍ，東西5.80ｍと測れた。形状は方形を呈し，主軸はＮ－12°－Ｗを指している。

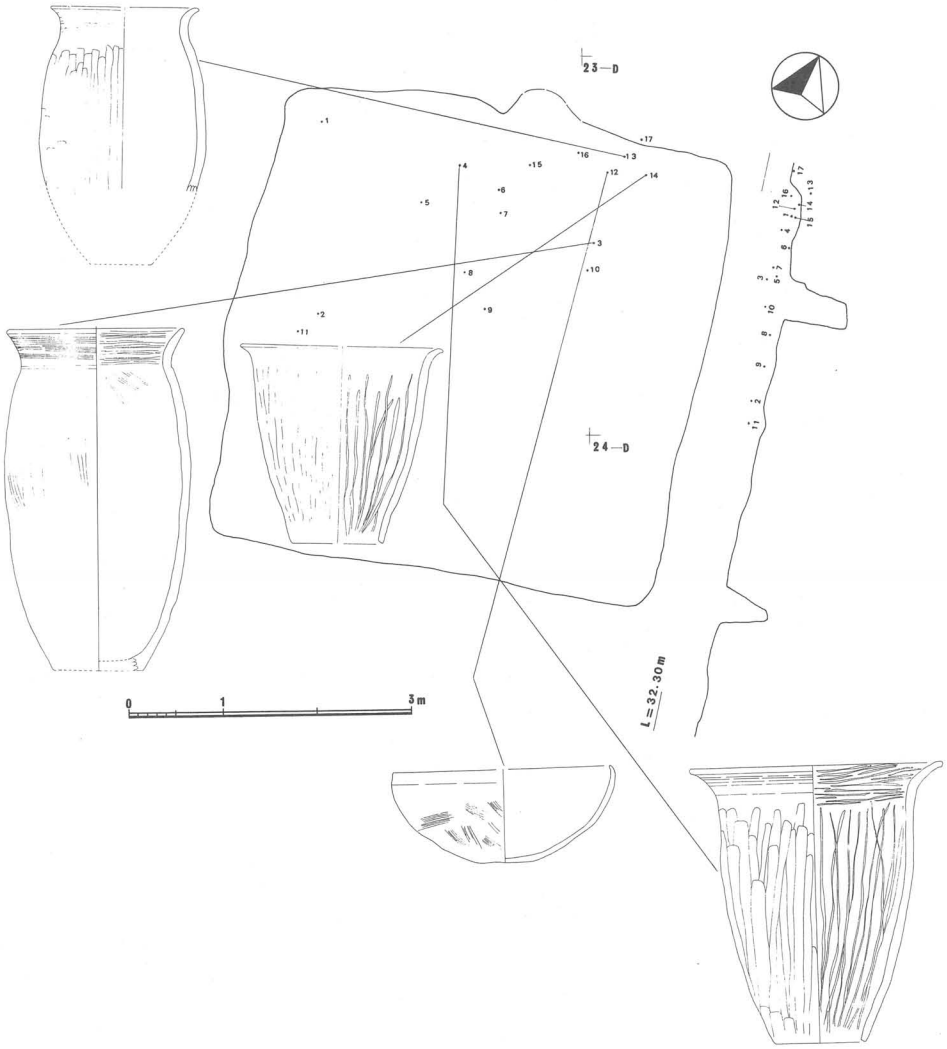
床面はローム層上を踏み固めた床で，かなり堅緻であったが，トレンチャーの攪乱のため全体的にもろくなっている。壁面の立ちあがり状況は，西壁は70°で立ちあがり，高さは26㎝，北壁は65°で立ちあがり，高さは31㎝であった。ピットは２個検出され，規模はＰ1口径46㎝×41㎝，深さ70㎝，Ｐ2口径34㎝×31㎝，深さ67㎝で他のピットはトレンチャーのため消滅したと思われる。火床遺構としては北壁部のほぼ中央にカマド１基が検出された。規模は，両袖間の最大幅が1.06ｍ，焚口部から奥壁部までの幅が62㎝，高さは29㎝を測れた。内部の堆積状況はトレンチャーによる攪乱をうけているため焼土，灰の堆積状況は良好ではなかった。覆土は黒褐色土とローム粒子の混合土であったが，これはトレンチャーの攪乱時にローム粒子などが覆土と混ったものと思われ，残存土層からみて自然堆積の覆土であると観察できた。

遺物は，図化可能なもので７点出土し，他は小破片でコンテナ箱１箱分の出土をみた。 1 甕の口縁部から胴部までの破片でカマド前面１ｍの覆土中より出土したものである。 2 小型甕の破片で竪穴中央より西側の上層中より出土したものである。 3 甑でカマド西袖部の脇の床上面より出土したものを接合し，ほぼ完形品となった。 4 甕で口縁部より胴下半部までの破片である。出土位置はカマド東側の床面上より埋設した状態で出土した。 5 長胴甕でカマド東袖部南部の床上面より出土したものを接合したもので80％の復元が可能であった。 6 甑でカマド東側の床面より出土したものである。 7 鉢でこれもカマド東側の床面土より出土し，50％の残存片である。本住居址からの土器類は主にカマド周辺部の床面上から出土しているものが多く，カマド内にも攪乱時に破損した坏片・甕片などが10点ほど出土している。



第50図　22号住居址平面実測図・出土遺物実測図　(1)

第51図　22号住居址出土遺物実測図　(2)



第52図　22号住居址遺物分布図

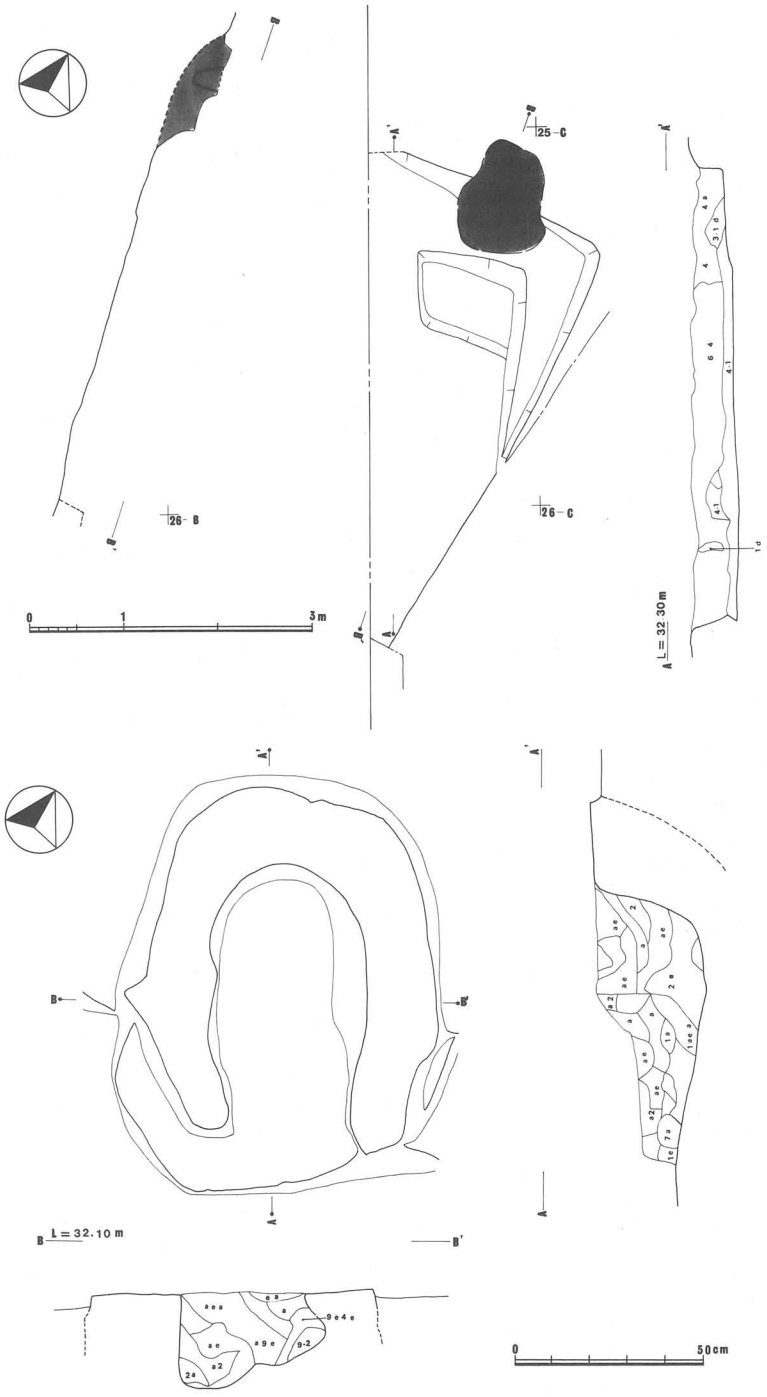
(表15)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	甕 （土師器）	A 20.4cm B ——— C 12.6cm	胴部は直立ぎみながら，頸部でやや内傾し，口縁部は大きく外反して開く。	口縁部内外面は横ナデ，胴部内外面はナデを施している。	A 砂粒 B 明橙色 C 普通	
2	甕 （土師器）	A 10.8cm B ——— C 10.4cm	下半部から外傾して立ちあがった胴部は，上半部あたりで内彎し，口辺，口縁部で僅かに外反する。	外面は斜位から縦位にヘラ削りを行ない，口辺部は横位のナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	

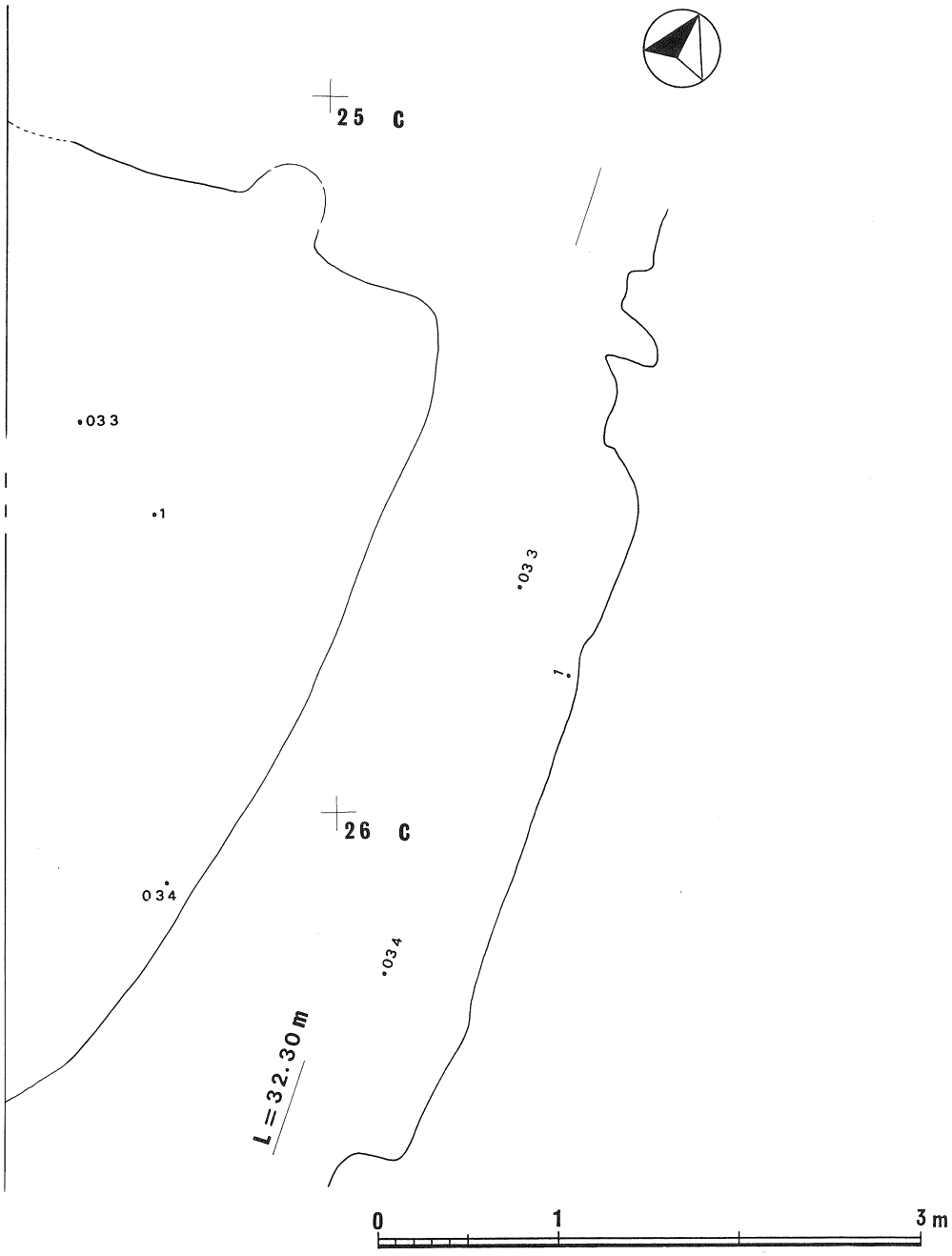
第51図 3	甑 （土師器）	A 27.4cm B 孔 径 10.4cm C 31.3cm	胴部下半より緩く外傾して立ちあがり上半部あたりからはほぼ直立する。口辺部は大きく外反して開く。	口辺部外面は横位にヘラナデ，内面は横位にミガキを施す。胴部外面はヘラ削りを縦位に，内面は縦位にミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
4	長胴甕 （土師器）	A 16.4cm B 6.8cm C 21.0cm	胴中央部あたりはほぼ直立し，上半部に至るにつれて内傾し頸部に至る。口辺部は大きく外反して開く。胴下半部以下は欠損しているかなり長胴化した器形である。	口辺部内外はナデ，横ナデを行ない胴部内面はナデ外面は縦位のヘラ削りを施す。	A 砂粒，パミス B にぶい橙色 C 普通	
5	長胴甕 （土師器）	A 20.0cm B 10.0cm C 38.5cm	胴下半部は緩く内彎して立ちあがり，中央部付近ではほぼ直立する。上半部ではやや内傾ぎみで，口辺部は外反して開く。かなり胴部が長胴化した器形である。	口辺部内外は横位のヘラナデを施し，胴部内面はナデ，外面はヘラナデによる整形を施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
6	甑 （土師器）	A 23.2cm B 孔 径 10.5cm C 22.2cm	胴下半部から緩く外傾して立ちあがり，口縁部では大きく外反して開く。	口縁部内外は横ナデ，胴部外面は荒いヘラナデを行ない外面にはナデの後，縦位にミガキを施している。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
7	鉢 （土師器）	A 25.0cm B ——— C 10.4cm	底部は扁平な丸底で，体部は底部より大きく内紡して立ちあがり口縁部はほぼ直立して開く。	口縁部の内外は横ナデ，体部内面はナデを行ない，外面はヘラ削りを施している。	A 砂粒，砂礫 B 暗赤褐色 C 普通	

23号住居址（第53・54図）

本住居址は，A区，25・26－Bグリットから検出された。北には21号住居址，東には大溝遺構（SD－02）などが隣接しており，なお，東側の一部はSD－02に切られている。本住居址は北壁，東壁，カマドなどを検出したのみで他の壁面は調査区域外のため不明である。したがって規模も不明。形状は北東コーナー部から推定すると方形を呈しているものと考えられる。主軸はN－3°－Wを指している。床面はローム層上の床であり，他遺構のものと思われる掘り込みも検出されたが性格については不明である。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は50°で立ちあがり，高さは21cm，東壁は78°で立ちあがり，高さは33cmを測れた。ピットは不明。火床遺構は北壁部にカマドが検出された。規模は，袖部間の最大幅が88cm。焚口から奥壁部までが1.02m，高さが32cmを測れた。カマド内部には焼土，灰が混在した状態で堆積していた。覆土は2層に大別され，上層は暗褐色土，下層は褐色土が主体土となっていた。遺物は，小破片が若干出土したが図化できるものはなかった。



第53図　23号住居址平面実測図・カマド平面実測図



第54図　23号住居址遺物分布図

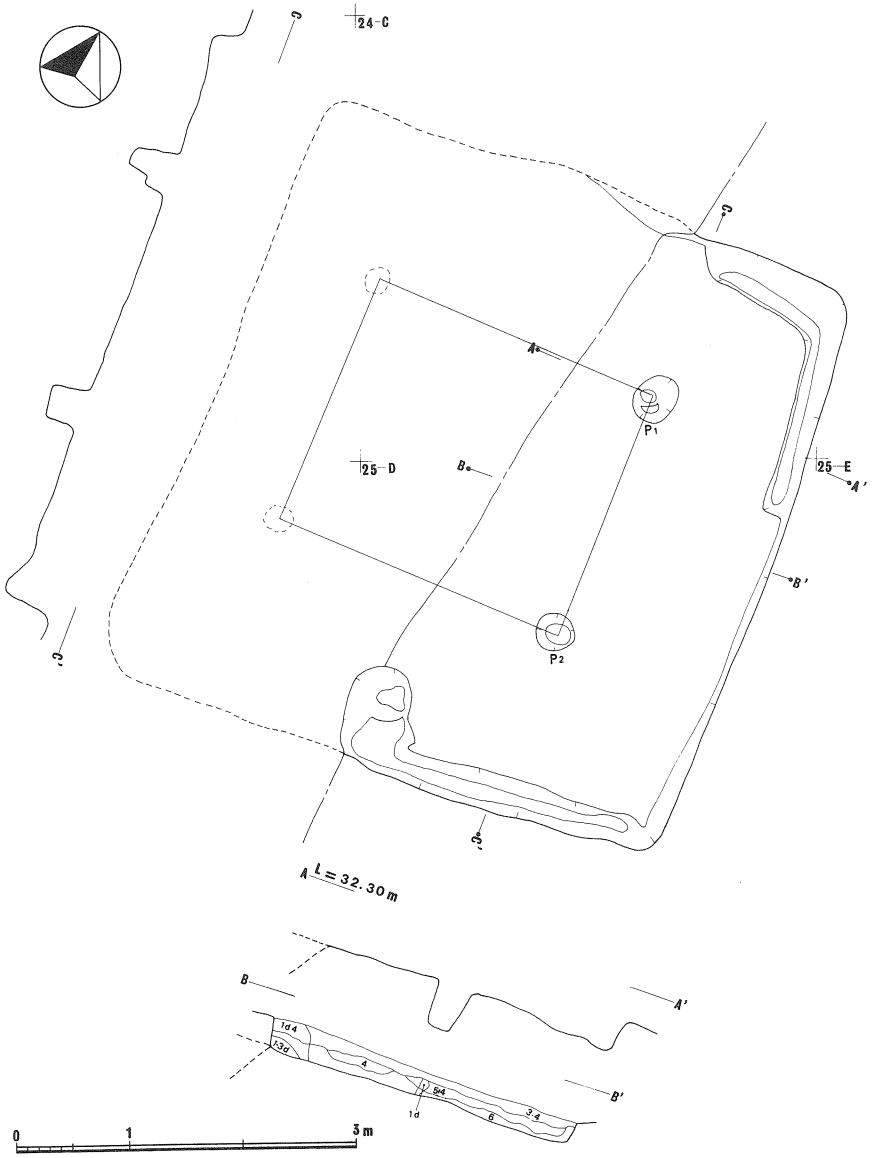
24号住居址（第55・56図）

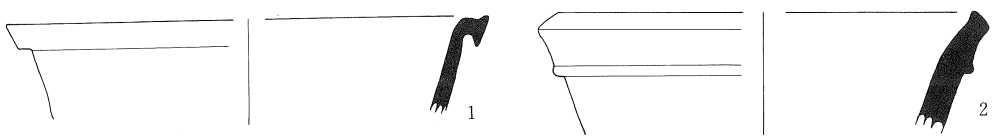
本住居址は，Ａ区，25・26－Ｂグリットから検出された。本住居址の西側半分はＳＤ－02の構築時に掘削されたためか消滅していた。

規模は，南北5.10cm，東西は不明，形状は隅丸方形を呈している。主軸はＮ－5°－Ｗを指している。床面はローム層上に５cm～10cmの貼り床をおこなった床で，かなり堅緻に踏み固めた床面であり，全体的に平坦である。壁溝は局部的に確認され，その規模は，北壁溝の幅12cm，深さ４cm，東壁溝の幅16cm，深さ５cmで北側の一部しか検出できなかった。南壁溝は幅13cm，深さ10cmを測ることができた。壁面の立ちあがり状況は，北壁は68°で立ちあがり，高さは22cm，東壁は84°で立ちあがり，高さは45cm，南壁は90°で立ちあがり，高さは31cm，西壁は不明であった。ピットは２個検出され，その規模はＰ1口径19cm×40cm，深さ42cm，Ｐ2口径30cm×30cm，深さ31cmを測れた。火床遺構は不明。覆土は２層に大別でき上層は黒褐色土，下層は暗褐色土が主体土で，本住居址の範囲においては自然推積土である。遺物は，図化可能なものとして２点出土した。 1 須恵器の甕口縁部片である。 2 須恵器の甕の口縁部片である。いずれも東壁寄りの覆土上層より出土したものである。

(表16)　　Ａ 口径　Ｂ 底径　Ｃ 現高　　Ａ 胎土　Ｂ 色調　Ｃ 焼成

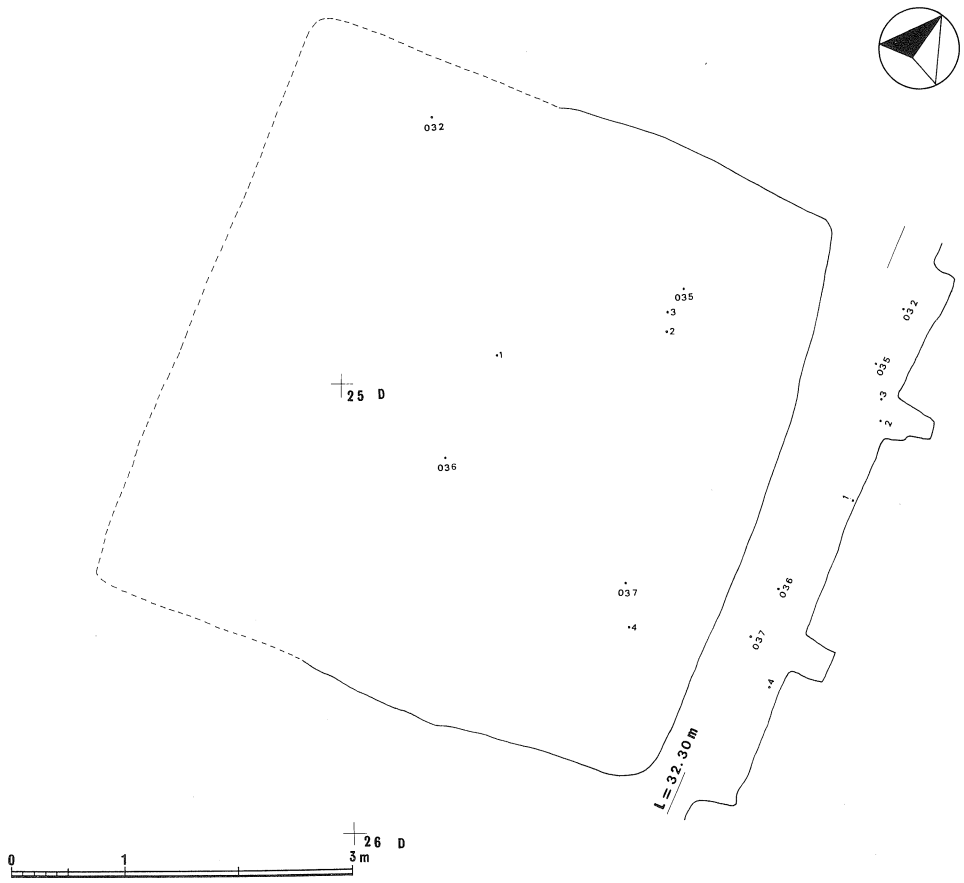
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	甕 （須恵器）	Ａ 21.4cm Ｂ ―――― Ｃ 4.4cm	外傾して立ちあがる口辺部で，口縁部はＴ字状に折り返している。	内外面共に横ナデを施す。	Ａ 砂粒 Ｂ 灰白色 Ｃ 普通	
2	甕 （口縁部片） （須恵器）	Ａ 20.0cm Ｂ 不明 Ｃ 5.4cm	口辺部片の一部で外反ぎみに開く口辺部と思われる。口縁部下位には高さ４mm程の隆線を周回させていたと思われる。	内面はナデを行ない外面は横位のヘラナデを施している。	Ａ 砂粒，砂礫 Ｂ 灰色 Ｃ 良好	





0 10cm

第55図　24号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第56図　24号住居址遺物分布図

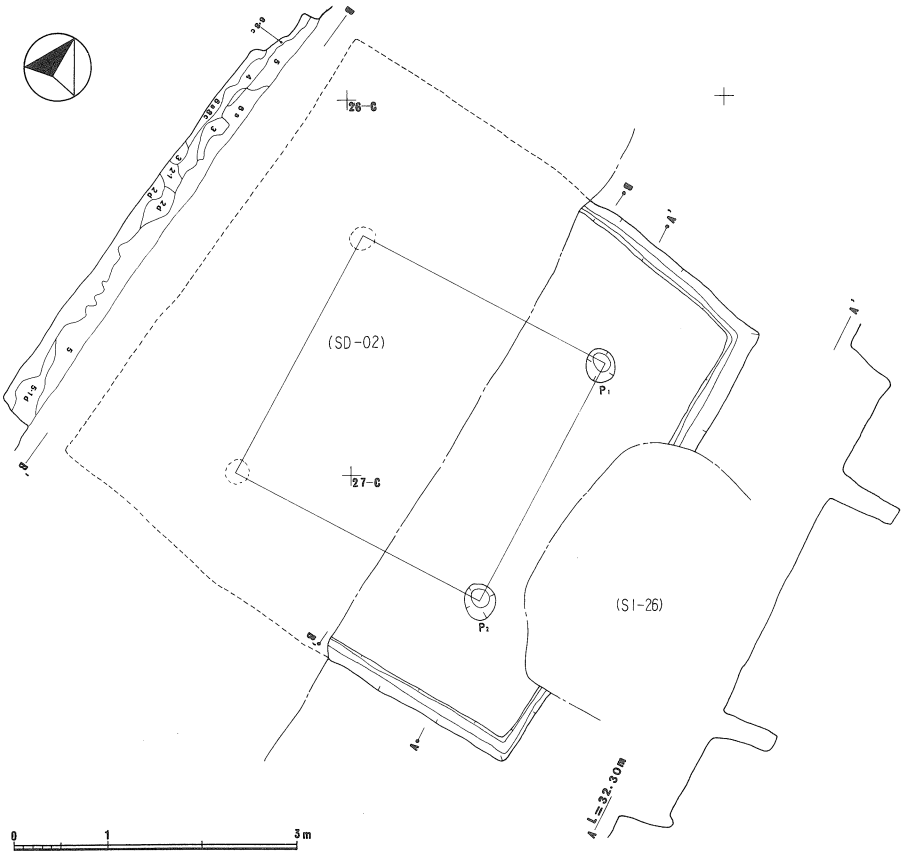
25号住居址（第57・58図）

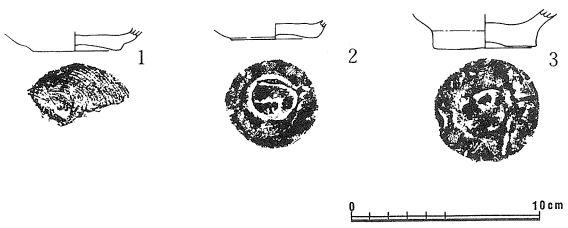
本住居址は，A区，26・27－Cグリットより検出された。本住居址は西側がSD－02によって掘削され，残存遺構は東側のほぼ半分である。さらに東側には26号住居址が切って存在する。

規模は，南北5.45m，東西不明，形状は方形を呈している。主軸はN－0°を指している。床面はローム層上を平坦にし，堅緻に踏み固めた床である。壁溝は北壁溝の幅8cm，深さ6cm，東壁溝の幅9cm，深さ8cm，南壁溝の幅10cm，深さ9cm，西側は不明であった。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は80°で立ちあがり，高さは53cm，東壁は82°で立ちあがり，高さは45cm，南壁は80°で立ちあがり，高さは41cmを側ることができた。ピットは，2個検出され，その規模はP1口径25cm×26cm，深さ72cm，P2口径24cm×23cm，深さ62cmを測れた。火床遺構は不明。覆土は2層に大別でき上層は黒褐色土で，下層は暗褐色土と褐色土ブロックの混合土である。なお，本住居址の覆土

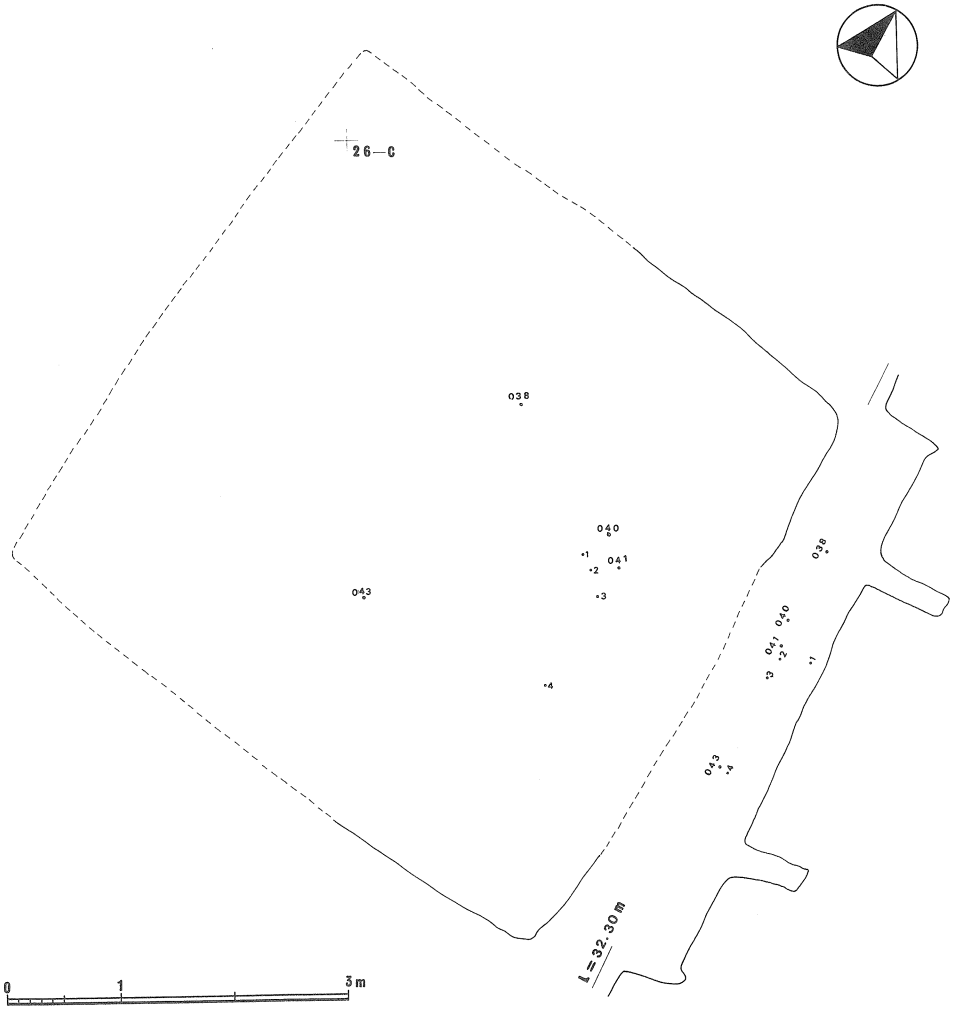
上層の上位から暗褐色土のかなり堅緻な土層が確認された。これはＰ1のほぼ上層に位置し，東西２ｍ，南北１ｍほどの方形状に土間状遺構があった。用途，性格については不明であった。

遺物はすべて小破片で図化可能なものとしては３点があげられる。 1 坏底部片で底部には回転糸切り痕を残す。 2 坏底部片で回転ヘラ切り痕を残す。 3 坏底部片で回転ヘラ切り痕を残す。いずれも底部はややあげ底状の底部で，３はやや台状底部に近い形態となっている。出土位置はすべて覆土中より出土したものである。





第57図　25号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第58図　25号住居址遺物分布図

(表17)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第57図 1	坏 （土師器）	A　6.7cm B　42.8cm C　1.0cm		左回転の糸切り離し。	A 砂粒，砂礫 B 橙色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A　8.8cm B　6.9cm C　1.2cm		ヘラ切りの後，若干周辺部をナデている。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 普通	
3	甕 （土師器）	A　7.7cm B　5.6cm C　1.8cm			A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	

26号住居址（第59・60・61図）

本住居址は，A区，27－C・Dグリットより検出された。西は25号住居址と重複しており，東には性格不明の長方形を呈す掘り込みがあるが，これが本住居址と直接関係がある遺構とは考えられず時期を異にするものと考えられた。

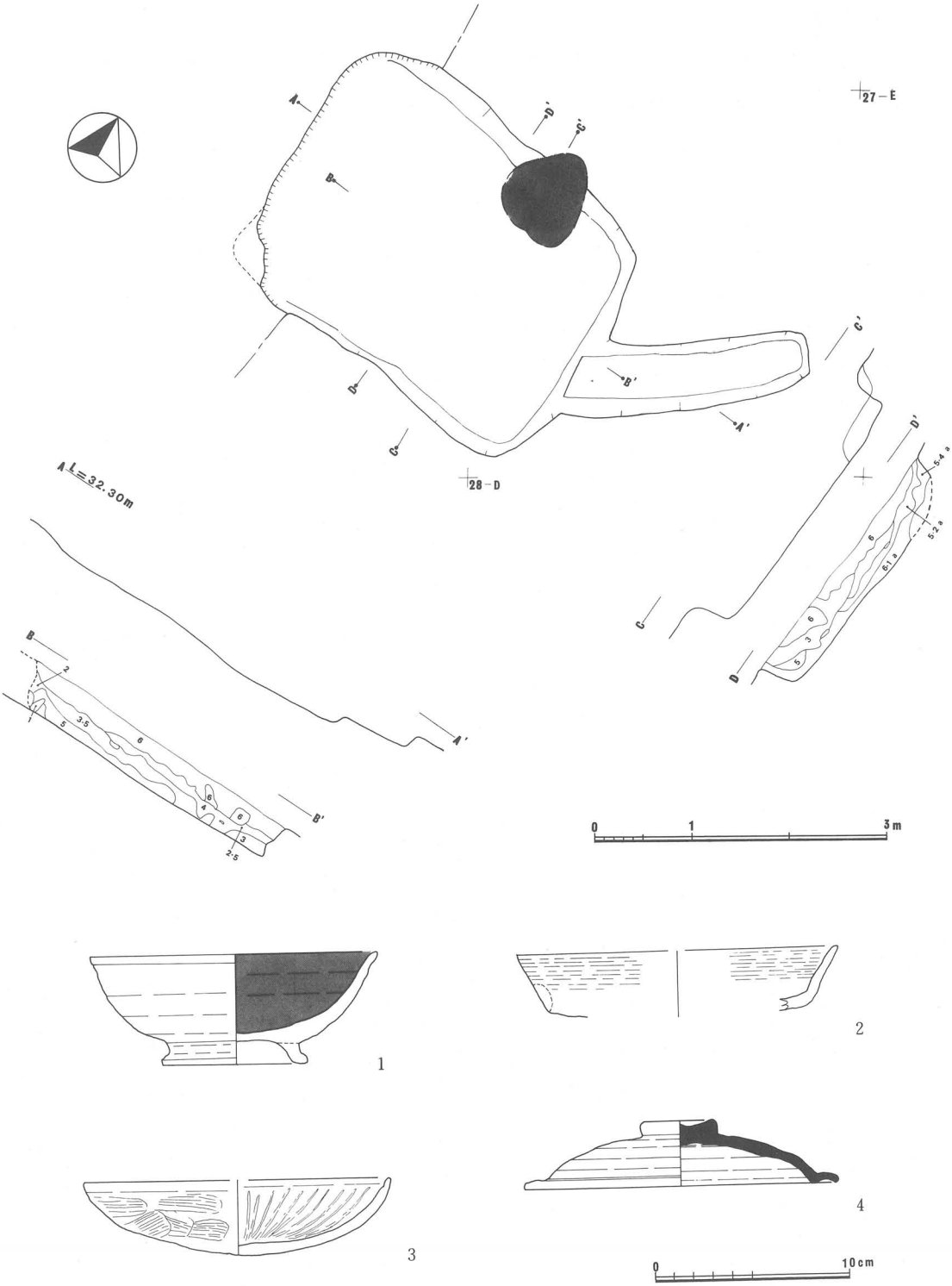
規模は南北2.80m，東西3.50mで形状は隅丸方形を呈する。主軸はN－11°－Eを指している。床面はローム層上を踏み固めた床である。壁溝は検出されなかった。壁面の立ちあがり状況および高さは北壁は78°で立ちあがり，高さは52cm，東壁は78°で立ちあがり，高さは48cm，南壁は81°で立ちあがり，高さは48cmを測れ，西壁は床面際の立ちあがり部分しか確認されず，壁面は25号住居址の覆土となっているため明確には検出できなかった。ピットはなし。

火床遺構は北壁中央から東寄りにカマドが検出された。規模は西袖間の最大幅が65cm，焚口から煙道部までの幅が58cm，高さが21cmを測れた。煙道部は北壁部に三角形に切り込みを入れた形状でつくられている。構築材は焼土魂を積みあげた状態で遺存していた。内部には焼土がかなり堆積していたが，明確に層位を見分けることはできなかった。覆土は大別して3層に分けられ，上層は暗褐色土，中層は黒褐色土，下層は暗褐色土が主体土となり，ほぼ自然堆積の状況をしめしていた。

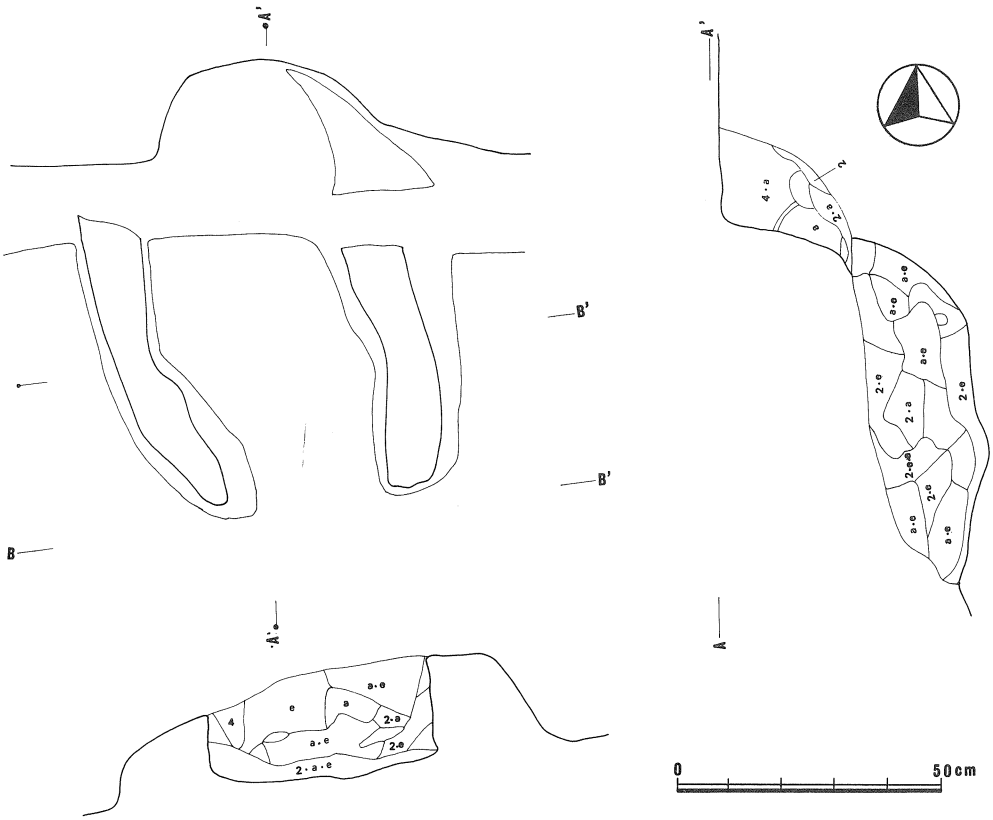
遺物は，図化可能なものとして4点出土した。 1 高台付坏で内面に黒色処理を施したもので，出土位置は西側壁中央の中層より出土した。 2 坏片で中央部の覆土中層より出土している。 3 坏でカマド東側袖部脇の下層中より出土したものである。 4 須恵器の坏蓋でかえりを明確に残す。遺存度50％の破片である。

(表18)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

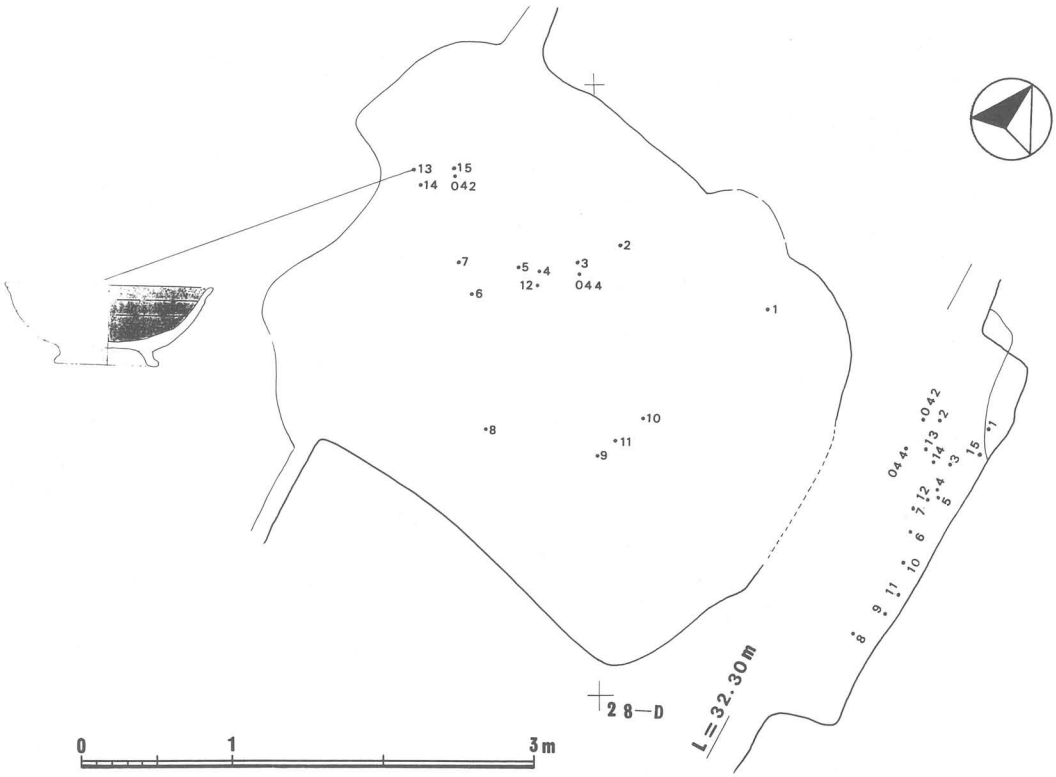
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	高台付坏 （土師器）	A 14.8cm B 7.5cm C 5.6cm	高台は付け高台，体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部は僅かに外反して開く。	水挽き成形の後，回転横ナデを施している。底部はヘラ切り調整で左回転である。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A 14.2cm B ―― C 3.8cm	体部はほぼ直線状に外傾して立ちあがる。底部は扁平ぎみな丸底と思われる。	内外面は回転ナデで仕上げている。底部はヘラ削り，体部と底部との中位には指頭痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
3	坏 （土師器）	A 15.8cm B ―― C 3.8cm	扁平な丸底で，体部は大きく内彎して立ちあがる口縁部はやや外反ぎみに開く。	体部外面はヘラ削り，内面は縦位のミガキを施す。	A 砂粒，石英 雲母 B 橙色 C 良好	
4	蓋 （須恵器）	A 16.3cm 径3.8cm つまみ 高0.9cm C 3.4cm	明瞭なかえりを残す。つまみは擬宝珠型。	回転横ナデ	A 砂粒，長石 B 灰色 C 良好	



第59図　26号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第60図　26号住居址カマド平面実測図

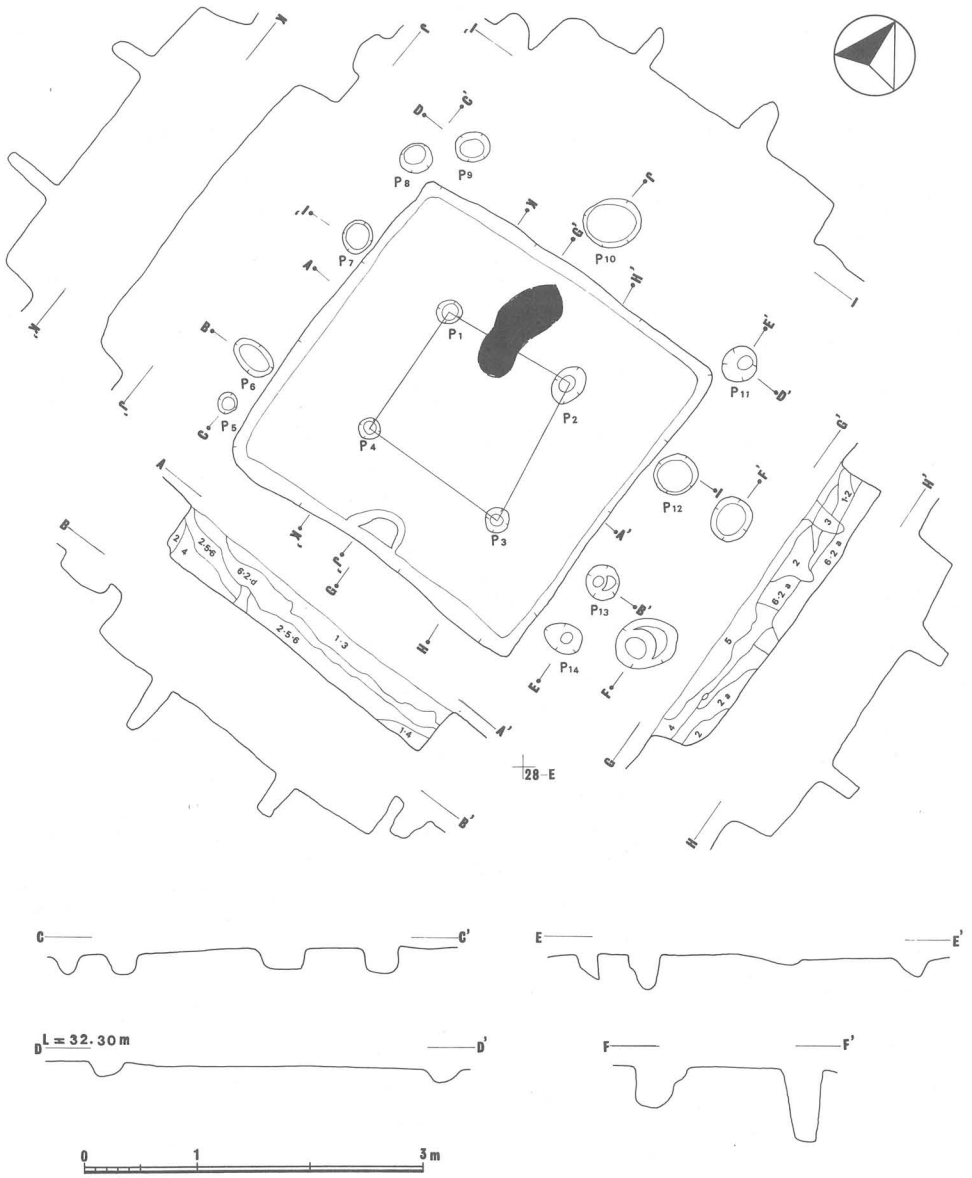


第61図　26号住居址遺物分布図

27号住居址（第62図）

本住居址は，Ａ区，27－Ｄ・Ｅグリットより検出された。本住居址は26号住居址のほぼ北側に隣接して存在し，単独遺構として検出された。規模は南北2.95ｍ，東西2.95ｍで方形を呈する住居址である。主軸はＮ－8°－Ｅを指している。床面はローム層上を堅緻に踏み固めた床である。壁溝は検出されなかった。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は84°で立ちあがり，高さは42cm，東壁は88°で立ちあがり，高さは48cm，南壁は78°で立ちあがり，高さは43cm，西壁は82°で立ちあがり，高さは48cmを測ることができた。ピットは竪穴内および竪穴外の周縁部を含めて16個検出された。規模はＰ1口径16cm×17cm，深さ36cm，Ｐ2口径22cm×24cm，深さ39cm，Ｐ3口径16cm51×15cm，深さ37cm，Ｐ4口径14cm×15cm，深さ50cm，Ｐ5口径20cm×19cm，深さ17cm，Ｐ6口径43cm×30cm，深さ18cm，Ｐ7口径34cm×40cm，深さ19cm，Ｐ8口径34cm×30cm，深さ23cm，Ｐ9口径26cm×28cm，深さ12cm，Ｐ10口径46cm×40cm，深さ17cm，Ｐ11口径30cm×29cm，深さ15cm，Ｐ12口径33cm×32cm，深さ５cm，Ｐ13口径35cm×34cm，深さ63cm，Ｐ16口径45cm×43cm，深さ37cmを測れた。

火床遺構は明確に確認することができず，中央より北壁寄りの床面上から焼土の集積場所が検出されたが，炉あるいはカマドの跡と考えることは難しかった。



第62図　27号住居址平面実測図

覆土は，大別して３層に分けられ，上層は褐色土と黒褐色土とが混在した土層で，中層は暗褐色土，下層は暗褐色土に黄褐色土のローム粒子が含まれた土層で，自然堆積の状況を呈していた。

遺物は土師器の細片は若干出土したが，図化できるものは出土しなかった。

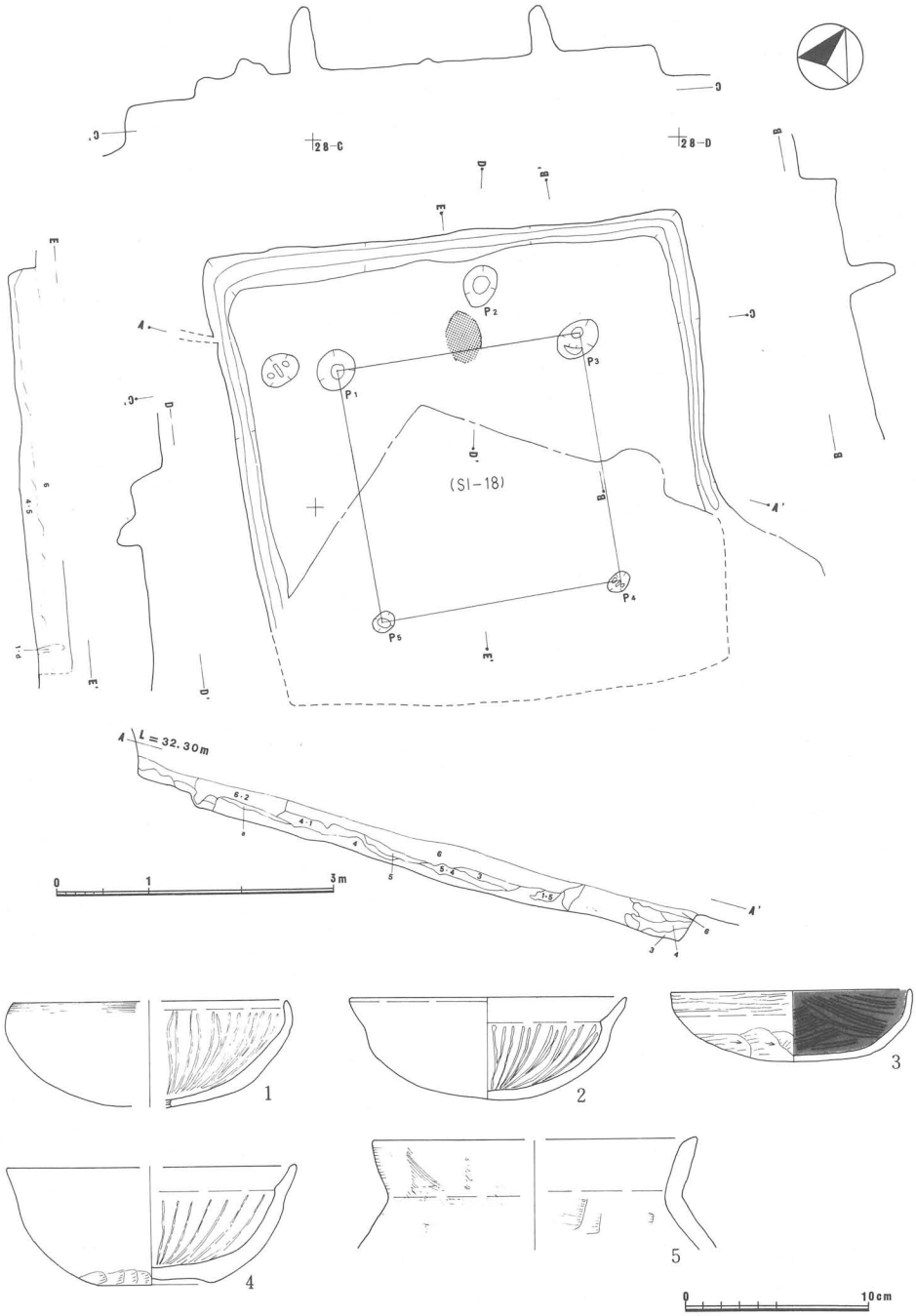
28号住居址（第63図）

本住居址は，Ｂ区，28－Ｃグリットから検出された。本住居址は29号・30号住居址と重複しているが，29号住居址を切り，30号住居址には切られている。

規模は南西・北東5.15ｍ，北西・南東5.05ｍで，形状は方形を呈し，主軸はＮ－55°－Ｅを指している。床面はローム層上を堅緻に踏み固めた床である。壁溝は，検出された各壁面際から検出され，その規模は，南西壁溝の幅13㎝，深さ７㎝，北西壁溝の幅16㎝，深さ６㎝，北東壁溝の幅14㎝，深さ４㎝を測れ，南東側は18号住居址によって切られているため不明である。壁面の立ちあがり状況および高さは，南西壁は81°で立ちあがり，高さは37㎝，北西壁は78°で立ちあがり，高さは36㎝，北東壁は78°で立ちあがり，高さは35㎝を測れ，南東壁は18号住居址によって切られているため不明。

ピットは本住居址の残存部分からは３個，18号住居址と重複する部分から２個検出され，その規模はＰ1口径22㎝×35㎝，深さ72㎝，Ｐ2口径36㎝×36㎝，深さ26㎝，Ｐ3口径33㎝×39㎝，深さ53㎝，Ｐ4口径31㎝×30㎝，深さ48㎝，Ｐ5口径30㎝×29㎝，深さ56㎝を測れた。Ｐ4とＰ5は18号住居址の掘り方内より確認できたもので規模，位置関係から推定して本住居址のピットと判断した。火床遺構はＰ1とＰ3の中間より炉が検出された。焼土範囲は東西46㎝，南北48㎝で床面を最深部で12㎝ほど掘り下げている。堆積状況はかなり良好で焼土および焼土ブロック中に炭化物，灰などが混在していた。覆土は大別して３層に分けられ，上層は暗褐色土，中層は黒褐色土，下層は褐色土が主体土となっており，堆積状況はほぼ自然堆積である。

遺物は，破片でコンテナ１箱分出土したが，図化可能なものとして５点をあげた。 1 坏片で本住居址Ｐ1上の覆土より出土， 2 坏でほぼ70％ほどの残存片で出土位置は１と同位置である。 3 坏でほぼ完形で出土，位置は本住居址の中央部の中層から出土しているが，本住居址に関する遺物としてより18号住居に関する遺物と考えている。 4 坏で西コーナー部の床上面より出土している。 5 甕口辺部で西コーナー部の中層より出土した。



第63図　28号住居址平面実測図・出土遺物実測図

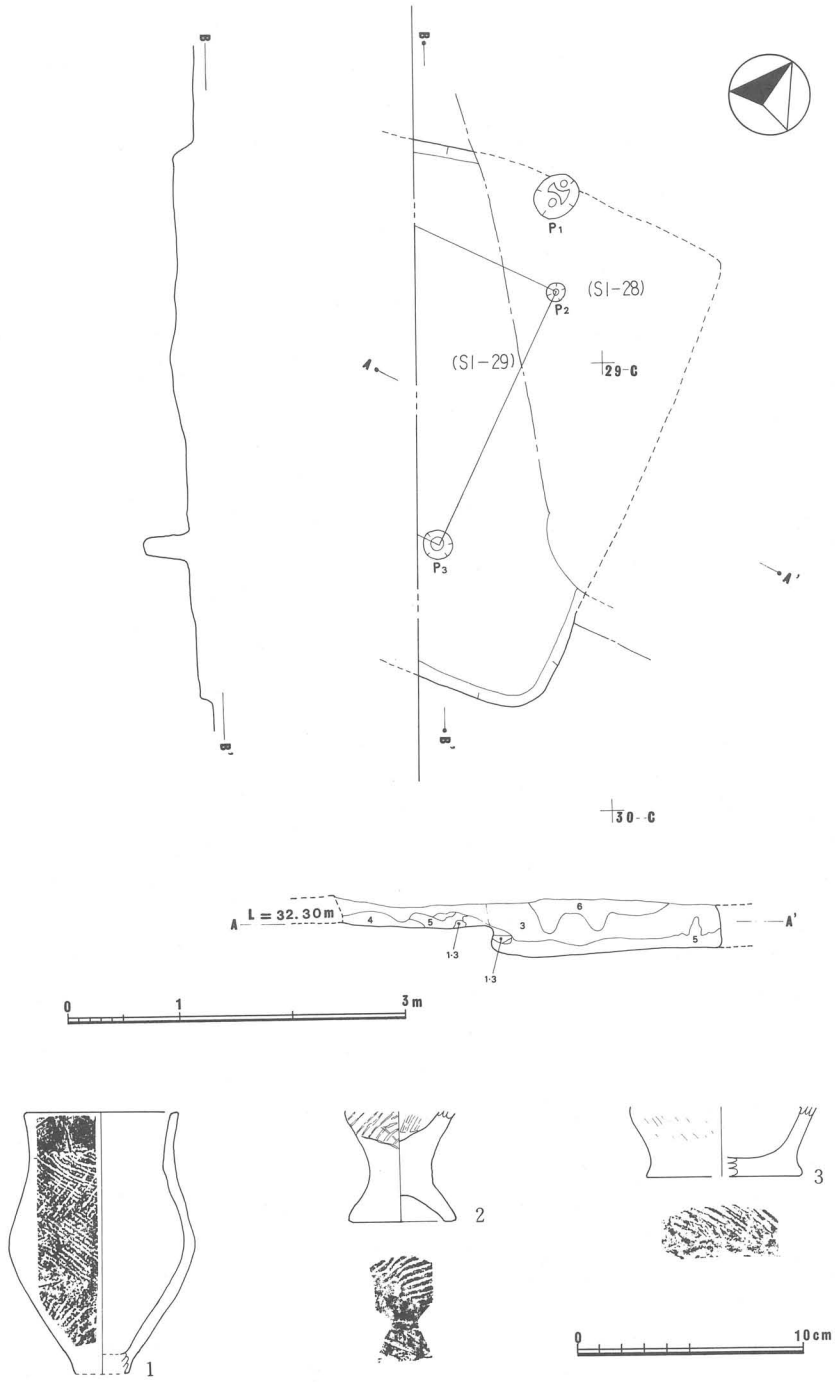
(表19)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第63図 1	坏 （土師器）	A 15.0cm B ——— C 5.8cm	扁平な丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部は更に内彎して開く。	口縁部内外は横ナデ，体部の外面はナデ，内面は縦位にミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
2	坏 （土師器）	A 15.2cm B ——— C 5.6cm	大きく内彎して立ちあがる体部で，口辺部は更に外反して開く。口辺部と体部の接合部は明瞭な稜を持つ。	器面の内外はナデを施し，内面には縦位のミガキを施す。	A ——— B にぶい橙色 （内面は赤褐色） C 良好	
3	坏 （土師器）	A 13.2cm B ——— C 3.8cm	体部は内彎ぎみに立ちあがり，口縁部はほぼ直立して開く。	外面は口辺部が横ナデ，体部下端部がヘラ削りを施す。内面は斜位にヘラナデを施す。	A 砂粒 B 灰褐色 C 良好	
4	坏 （土師器）	A 15.8cm B 6.0cm C 6.4cm	体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部も外反したまま開く。口辺部と体部の接合部内側には稜を持つ。底部は削り出しによる底部である。	内外面はナデを行ない，外面の下端部はヘラ削りによる調整を行ない，内面には縦位にミガキを施す。	A 砂粒，砂礫 B 橙色 C 普通	
5	甕 （土師器）	A 8.9cm B ——— C 5.9cm	ほぼ直線的に外傾して立ちあがる口辺部を有す。	外面はハケ目を施し，内面は口縁部に横ナデとヘラ削りを施している。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	

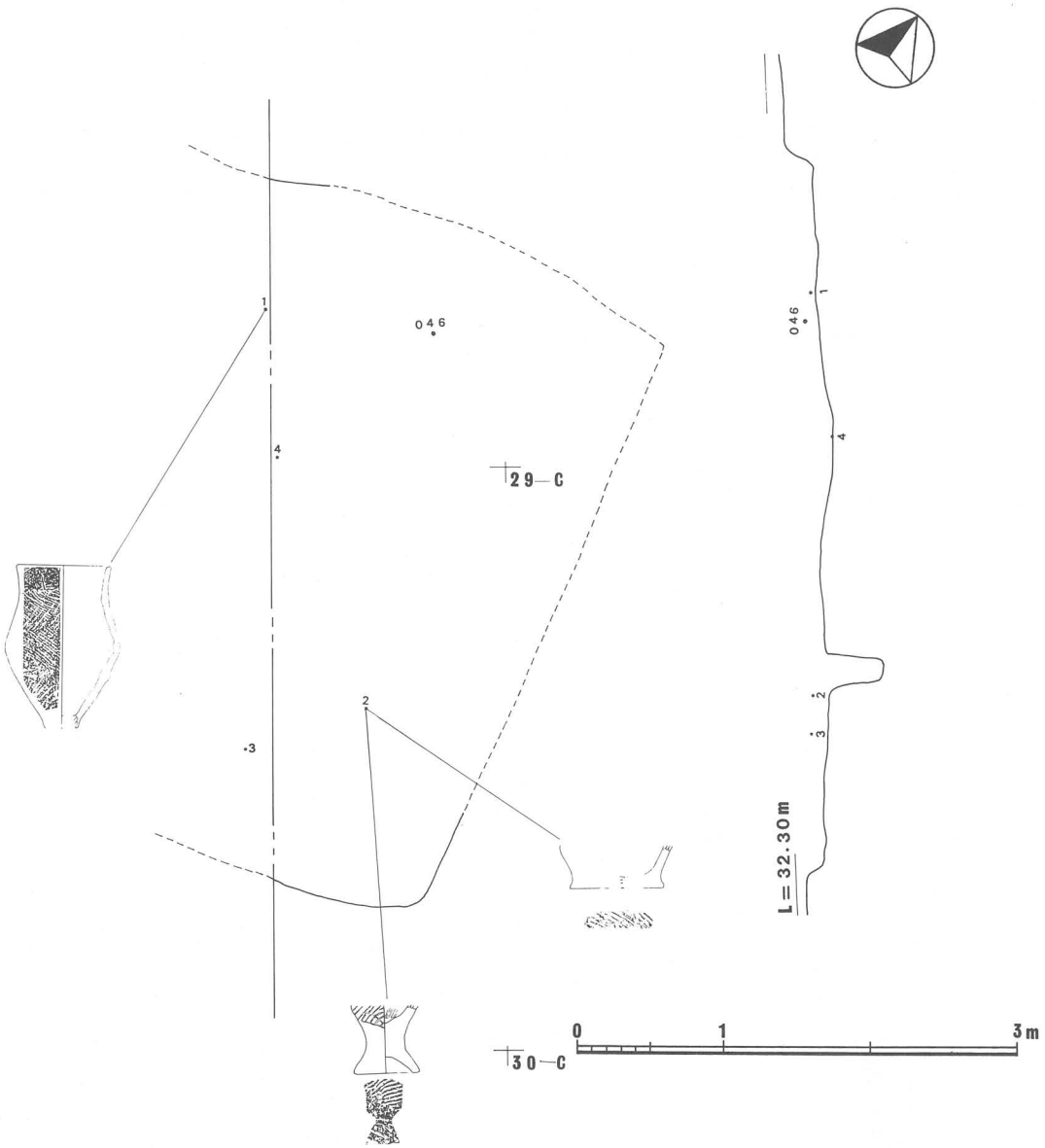
29号住居址（第64・65図）

本住居址は，B区，28・29－Bグリットから検出され，28号住居址によって切られた住居址である。規模は南北4.83m，東西は西側が調査区域外にあるため不明。形状は南東コーナー部から推定すると隅丸方形と思われる。主軸は不明。床面はローム層上の床であるが局部的に堅緻な踏み固め状の部分が残る。壁溝は認められなかった。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は64°で立ちあがり，高さは19cm，東壁は76°で立ちあがり，高さ15cm，南壁は67°で立ちあがり，高さは12cmを測れ，西壁は不明。ピットは3個確認され，P2，P3は本住居址のメイン柱の柱穴と考えられる。規模はP1口径37cm×21cm，深さ21cm，P2口径20cm×19cm，深さ16cm，P3口径33cm×25cm，深さ37cmを測れた。火床遺構は未検出である。覆土は大別して2層に分けられ，土層は黒褐色土，下層は褐色土で本住居址内においては自然堆積である。

遺物はすべて弥生土器（片）であった。　1　小型甕形土器で北西側床上面から出土し，底部の一部が欠損しているほかは完形である。　2　小型壺形土器の底部で，床上面から3とともに出土している。　3　甕形土器の底部片である。他に細片が覆土中より若干出土している。



第64図　29号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第65図　29号住居址遺物分布図

(表20)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第64図 1	小型広口壺 (弥生土器)	A　6.8cm B　2.4cm C 11.6cm	底部からほぼ直線状に外傾して立ちあがる。胴部は中央部が最も張り出し，上半部に至ると内傾して頸部になる。口辺部はやや外傾しながら立ちあがって開く。	口辺部の内外はナデ，胴部内面もナデを行ない，外面には撚り糸文を施している。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	

2	台部（甕） （弥生土器）	A　4.8cm B　4.6cm C　4.9cm	「ハ」の字状に大きく開いた台である。	台部上端にはＬＲの撚糸文を施す。他にはナデを行なったのみである。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
3	甕 （弥生土器）	A　8.2cm B　7.0cm C　3.1cm	外傾して立ち上がる胴部。	内面はナデ，外面はＲＬの撚糸文を施す。底部は無調整。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 不良	

30号住居址（66・67図）

本住居址は，Ｂ区，29・30－Ｄグリットより検出された。本住居址は31号，33号住居址と重複しており，本住居址の明確な平面プランと壁面を検出することができなかった。しかし，東側の壁溝と南側の壁面の段差を一部検出することができた。

規模は，南北3.60ｍ，東西は不明である。形状は残存する東壁溝から推定するとコーナー部にやや丸味をもった方形と推定できる。主軸は不明である。床面は暗褐色土とローム粒子を混入した土質の貼り床を平均15cmほどの厚さで施している。壁溝は，東と南，北側にわずかに残し，その規模は東壁溝の幅20cm，深さ７cm，北壁溝の幅24cm，深さ13cm，南壁溝の幅19cm，深さ８cmを測ることができた。壁面の立ちあがり状況および高さは不明。柱穴は本住居址に関連があると思われるものは検出されなかった。カマドは北側に痕跡が認められたが，構築材はほとんど残存しておらず火床部分にわずかな焼土をともなって検出された。

覆土は，大別する３層に分けられ，上層は暗褐色土，中層は黒褐色土，下層は黒褐色土となっており，ほぼ自然堆積土の状況をしめしている。遺物は，本住居址，31号住居址，33号住居址の３軒が重複しているため取り上げ遺物は一括して載せた。実測可能な遺物は15点であった。１坏で33号住居址南コーナー部の床面上より出土し，ほぼ完形で出土した。出土状況・位置からみて33号住居址に伴う坏である。２坏で本住居址のほぼ中央部の下層より出土している。３須恵器の坏蓋片でカマド部の覆土中より出土した。４中型甕で33号住居址東壁溝部の中央から出土し，下層中より出土した完形品である。５土師質須恵器の甕片で外面に叩き目痕を残す。出土位置は本住居址カマド南側の中層下で出土している。６坏片で本住居址の北東コーナー部床上面より出土している７坏の完形で内面を黒色処理したもので，カマド西側の下層中より出土している。８高台付坏の破片で内面は黒色処理を施している。出土位置は，北東コーナー部の下層中より出土。９須恵器の甕の口縁部片である。出土位置は本住居址の西側覆土中より出土している。10坏の底部片で内面は黒色処理を施し暗文もみられる。出土位置は本住居址の北東コーナー部の下層より出土している。12高台付坏の底部片で内面には一方向に暗文が施されている。出土位置は北東コーナ部の覆土中層より出土している。13坏の破片でカマド内の堆積土中より出土している。14須恵器の坏蓋片で覆土中より出土

している。15須恵器の坏蓋片で，これも覆土中から一括して取りあげたものである。

31号住居址（66図）

本住居址は30号・33号住居址と重複して南西コーナー部のみが明確に検出されただけで詳細は不明である。南西コーナー部を中心として西・南壁の一部と壁溝の一部が検出され，これらの測定数値および所見は，南壁は75°でたちあがり，高さは29cm，西壁は62°で立ちあがり，高さは33cmを測ることができた。壁溝は，西壁溝の幅10cm，深さ5cm，南壁溝の幅12cm，深さ4cmを55測れた。床面はローム層上を踏み固めた床になっているが，やや軟質な床である。

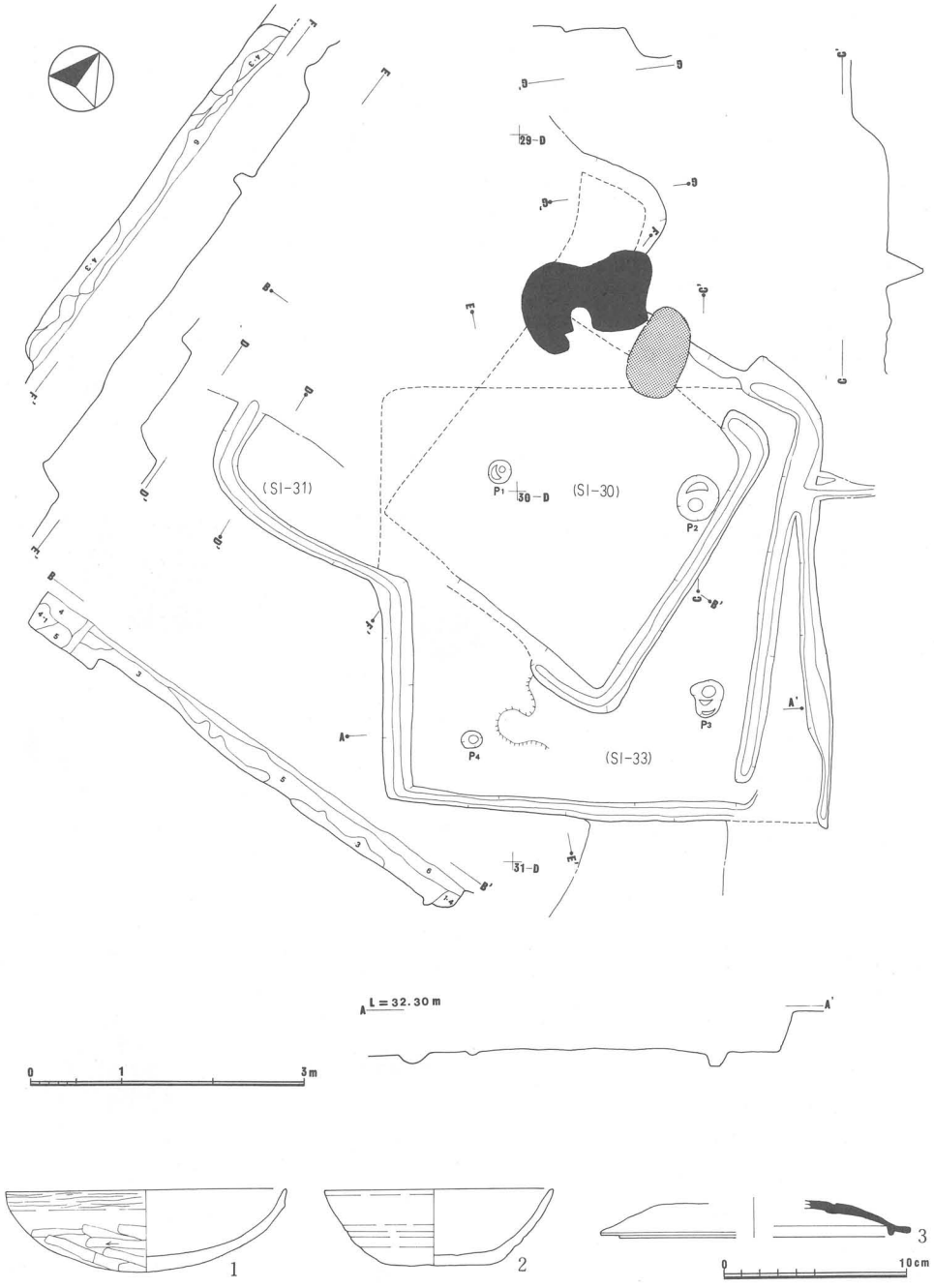
33号住居址（第66・67・70図）

本住居址は，B区，30－Dグリットより検出され，30号・31号住居址と重複して検出され，一部が32号住居址とも切り合っている。

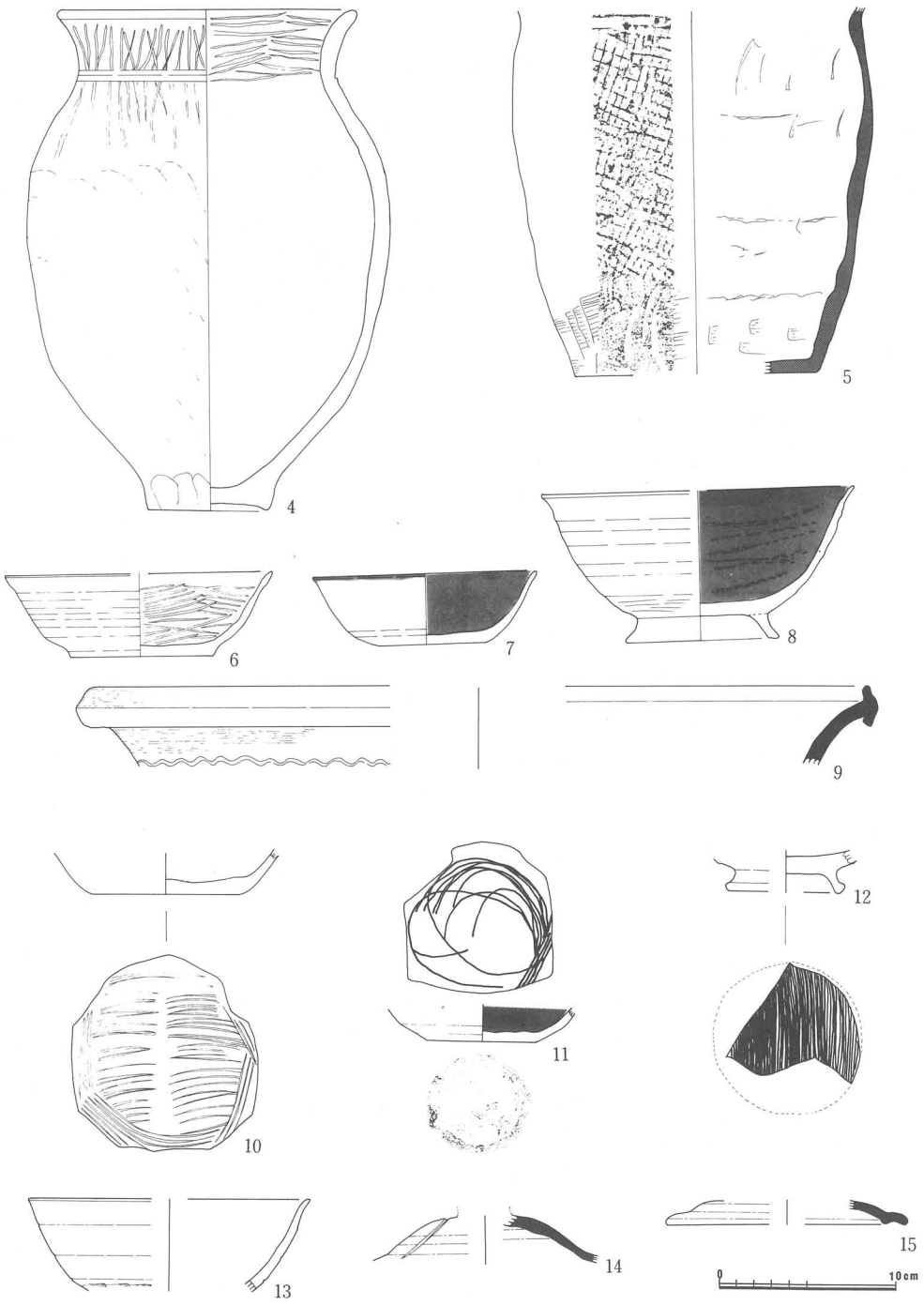
規模は，北西，南東4.75m，南西，北東4.86mを測れた。形状は方形を呈している。（南コーナー部から推定して）主軸は不明。床面は，ローム層上の床面である。壁面の立ちあがり状況および高さは，南西壁は75°で立ちあがり，高さは42cm，南東壁は80°で立ちあがり，高さは39cm，北西，北東壁については本住居址以後の住居址と切りあっているため，本住居址の壁面とは認め難い。壁溝の規模は南西壁溝の幅12cm，深さ4cm，南東壁溝の幅12cm，深さ5cm，北東壁溝の幅18cm，深さ10cmを測れた。ピットは本住居址の柱穴と推定できるものが4個検出され，規模はP1口径24cm×29cm，深さ19cm，P2口径36cm×42cm，深さ45cm，P3口径26cm×35cm，深さ34cm，P4口径26cm×27cm，深さ16cmを測れた。いずれも本住居のメイン柱の柱穴と考えられる。火床遺構は確認できなかった。

覆土は暗褐色土，黒褐色土が主体土となっている。

遺物は，図示可能なもので3点あった。70図の11坏片で底部が欠損している。出土位置は本住居址の東側の壁溝部上層から出土している。14高坏の坏部および脚部の一部で南コーナー部の下層より出土している。15坏で南コーナー部の下層中で14とほぼ共伴して出土している。



第66図　30・31・33号住居址平面実測図・出土遺物実測図　(1)



第67図　30・31・33号住居址出土遺物実測図　(2)

(表21)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	坏 （土師器）	A 15.4cm B ——— C 4.5cm	丸底，体部は大きく内彎して，緩く立ちあがり口縁部はほぼ直立する。	体部内面は横ナデを行ない外面はヘラ削りを施す。口辺部は内外面共に横ナデ，内面には黒色を施す。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 良好	
2	坏 （土師器）	A 13.1cm B 6.1cm C 4.1cm	平底，体部は外傾して立ちあがり，口縁部で緩やかに開く。	体部内外面は横ナデ及びナデによる整形を施す。底部は回転ヘラ切り（右回り）の後，手ナデのような整形を施す。	A 砂粒，雲母（多量）（赤雲母） B にぶい赤褐色 C 普通	
3	坏蓋 （須恵器）	A 17.0cm B ——— C 2.0cm	体部上端面はほぼ扁平で，縁部には「かえり」がみられる。	水挽き成形の後，回転横ナデを施す。	A 砂粒，雲母 B 灰白色 C 普通	
第67図 4	甕 （土師器）	A 17.0cm B 7.0cm C 28.4cm	底部はあげ底。胴部は下半部が大きく外傾し，中央部付近がほぼ直立して上半部あたりから内彎して頸部に至る。口辺部は外反して開く。	口辺部外面は縦位のミガキを施し，内面は横位にミガキを施す。胴部外面は斜位にヘラ削りを行なった後若干のナデを施す。内面はナデで仕上げている。	A 砂粒，長石 B 明褐色 C 良好	
5	甕 （土師質須恵器）	A ——— B 14.0cm C 20.7cm	底部の状況からは明確に甕か甑かについては伴断できないが，ここでは一応甕に分類する。胴部はやや内彎しながら胴部下端より立ちあがり上半部でやや内傾ぎみとなる。口辺部以上の部位は欠損。	胴部内面は荒いナデを行ない，局部的に捲きあげ痕を残す。下端部にはヘラ削りの跡がみられる。外面は下端部にヘラ削り，それ以上の部位には格子状の叩き目痕をほぼ全面的にわたって認められる。	A 砂粒，砂礫雲母 B 明褐灰色 C 普通	
6	坏 （土師器）	A 15.2cm B 8.0cm C 4.7cm	平底，体部は大きく外傾したのち，いったんは内彎してから，口唇部は外反する。	水挽き成形の後，体部は内外共に横ナデ（回転）を行ない内面には横位にミガキを施し，底部内面には暗文を施す。	A 砂粒，砂礫 B 浅黄橙色 C 良好	
7	坏 （土師器）	A 12.7cm B 6.6cm C 4.0cm	平底，体部は外傾しながら立ちあがり口縁部は僅かに外反して開く。	水挽き成形後，内外面は横ナデを行ない，底部には回転ヘラ切り痕を残す。内部は黒色処理を施す。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 良好	
8	高付台付坏 （土師器）	A 17.8cm B 8.8cm C 8.5cm	体部は外傾して立ちあがり，口縁部でやや外反して開く。高台は「八」の字状に開く付高台である。	体部内外面は水挽き成形後回転横ナデを行なっている。体部内面は不定方向のミガキと黒色処理を施す。	A 砂粒，雲母 B 橙色 C 良好	
9	甕（口縁） （須恵器）	A 45.6cm B ——— C 4.5cm		外面は横ナデを施し，波状沈線がみられる。	A 砂粒，石英 B 灰 C 普通	
10	坏 （土師器）	A ——— B 8.4cm C 2.4cm		内面にミガキ（暗文）がみられる。	A 砂粒，砂礫雲母，石英 B にぶい橙色内面黒色 C 普通	

11	坏 (土師器)	A ——— B 6.2cm C 2.1cm	平底	内面は黒色処理を施し暗文がみられる。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 良好	
12	高台付坏 (土師器)	A ——— B 6.4cm C 2.4cm	外反した高台を付ける。	黒色処理を施したのち一方向にミガキを施す。	A 砂粒，砂礫 B 橙 C 良好	
13	坏 (土師器)	A 16.0cm B ——— C 5.2cm	口縁部はわずかに外反する。	内外面ともに横ナデをおこなっている。	A 砂粒，雲母 B 橙 C 良好	
14	坏蓋 (須恵器)	A ——— B ——— C 2.7cm		回転横ナデ	A 砂粒，雲母 B 灰白 C 不良	
15	坏蓋 (須恵器)	A 13.6cm B ——— C 1.4cm	かえりを残す。	回転横ナデ	A 砂粒，石英 B 灰 C 普通	

32号住居址（第69・70・71図）

本住居址は，Ｂ区，30・31－Ｅグリットより検出された。西・南側の一部は33号・35号住居址とも一部重複して検出され，新旧の関係は，切り合状況から本住居址が最も古い時期のものと考えられた。

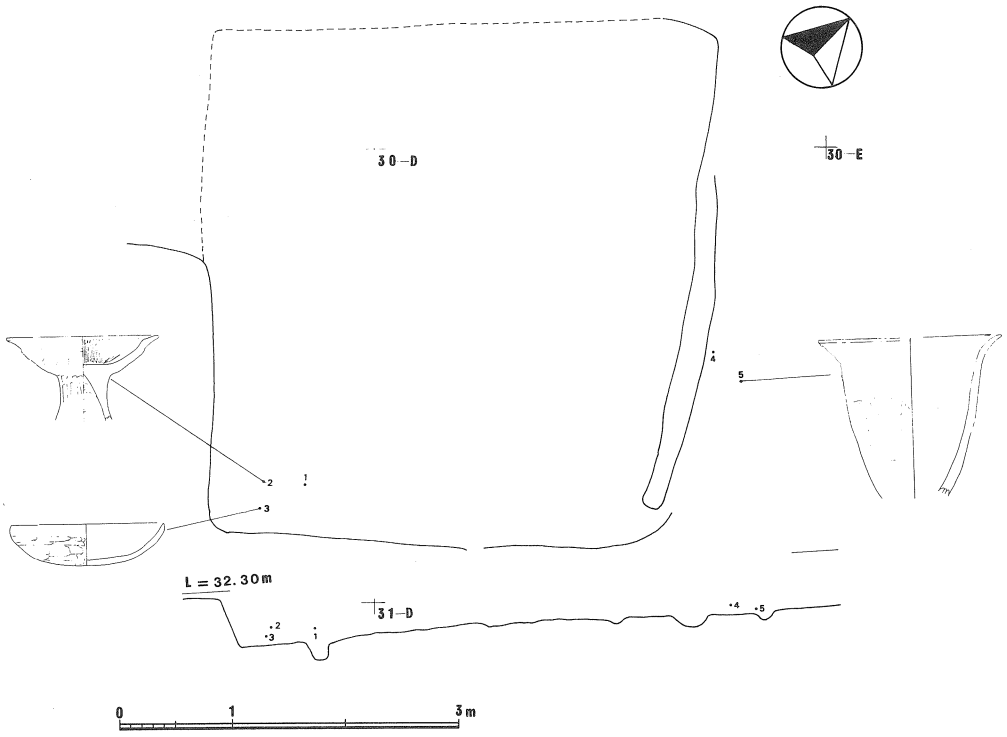
規模は南北4.94ｍ，東西は東側が調査区域外のため不明である。形状は方形と推定された。主軸はＮ－18°－Ｗを指している。床面は，ローム層上の床で，かなり堅緻に踏み固められ，ほぼ全体的に平坦である。壁面は北・南側で検出され，立ちあがり状況および高さは，北壁は78°で立ちあがり，高さ30cm，南壁は80°で立ちあがり，高さ35cmを測れた。壁溝は北・西両方の壁際で検出され，その規模は北壁溝の幅13cm，深さ６cm，西壁溝の幅18cm，深さ10cmを測れた。ピットは３個検出され，規模はＰ1口径28cm×28cm，深さ81cm，Ｐ2口径25cm×22cm，深さ30cm，Ｐ3口径20cm×20cm，深さ33cmを測れた。火床遺構は炉が１基検出され，焼土範囲は東西65cm，南北53cmで中央部が10cmほど床面を掘り込んだ状況であった。堆積状況は焼土ブロックが混在して確認されたが分層はできなかった。

覆土はほぼ２層に分層され，上層は黒褐色土と褐色土粒子が主体土で，下層も黒褐色土が主体土で上層と下層の分層はローム粒子の量によった。

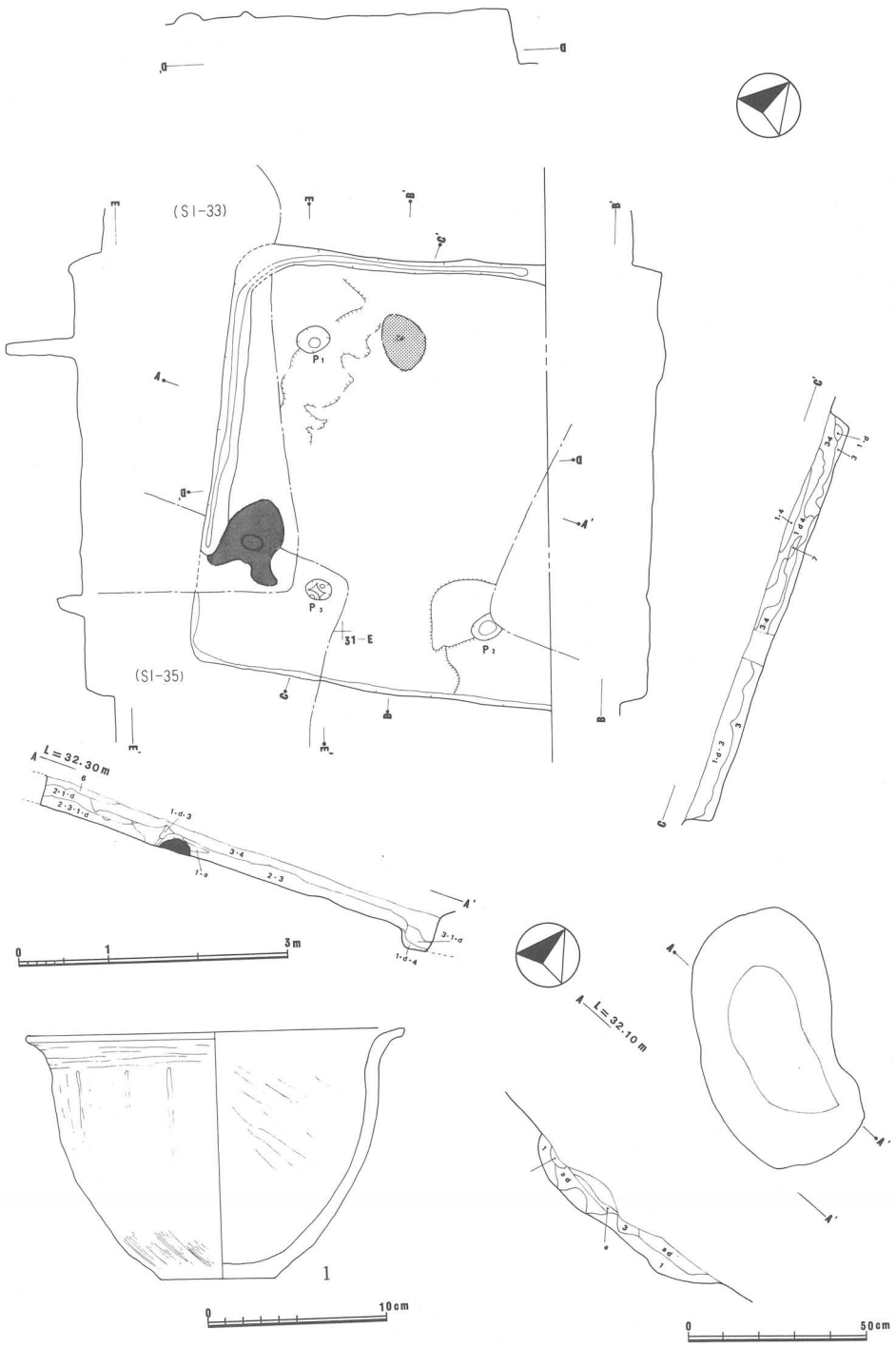
遺物は13点が図化できた。１　鉢で西コーナー部の下層中よりほぼ完形の状態で出土した。２　甕片で炉の南側30cmほどの床上面より出土している。３　坏片で中央よりやや西側の床面上から出土している。４　坏片で西コーナー部北壁際より出土し，層位は上層下位からの出土である。５　坏で西コーナーの床上より出土し９の坏と並置された状況で出土している。６　輪積み痕を残

す坏で手づくね土器に近い技法で製作されたものである。出土位置は南壁際のやや中央より東側の下層中より出土している。7　須恵器の甕口辺部片で本竪穴中央部の覆土中より出土した。8　坏の完形で西コーナー部の下層より出土している。9　坏の完形でこれも西コーナー部の床面上部より伏せた状態で出土している。10　手づくね土器の完形で西壁際の覆土中より出土した。12　坏の底部片で内面に暗文を施し西壁側の覆土中より出土しているが，出土層位および位置から判断すると本住居址に伴うものではなく30号住居址との重複関係から同住居址に伴うものと考えたい。13坏の底部片で内面には黒色処理と暗文を施しており，12同様30号住居址に関連する土器ととらえた。

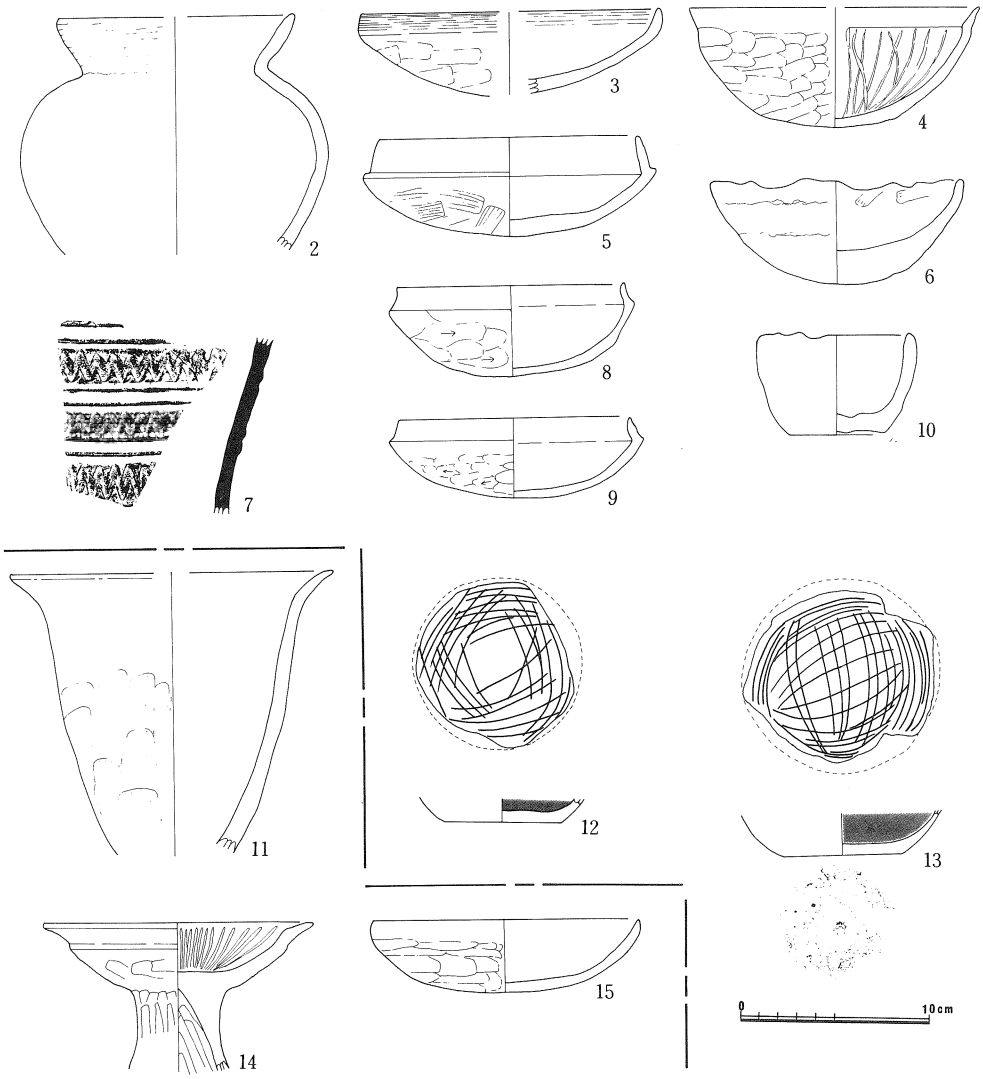
本住居址を含めて，30号・31号・33号住居址出土の遺物類は出土状況から判断していずれの住居址に伴うかという点についてはかなり不明確なものもあり，出土状況のみで伴う遺構を認定することが難しいものもあった。したがって，土器型式によって類似土器を伴う遺構の遺物として分類したものもある。



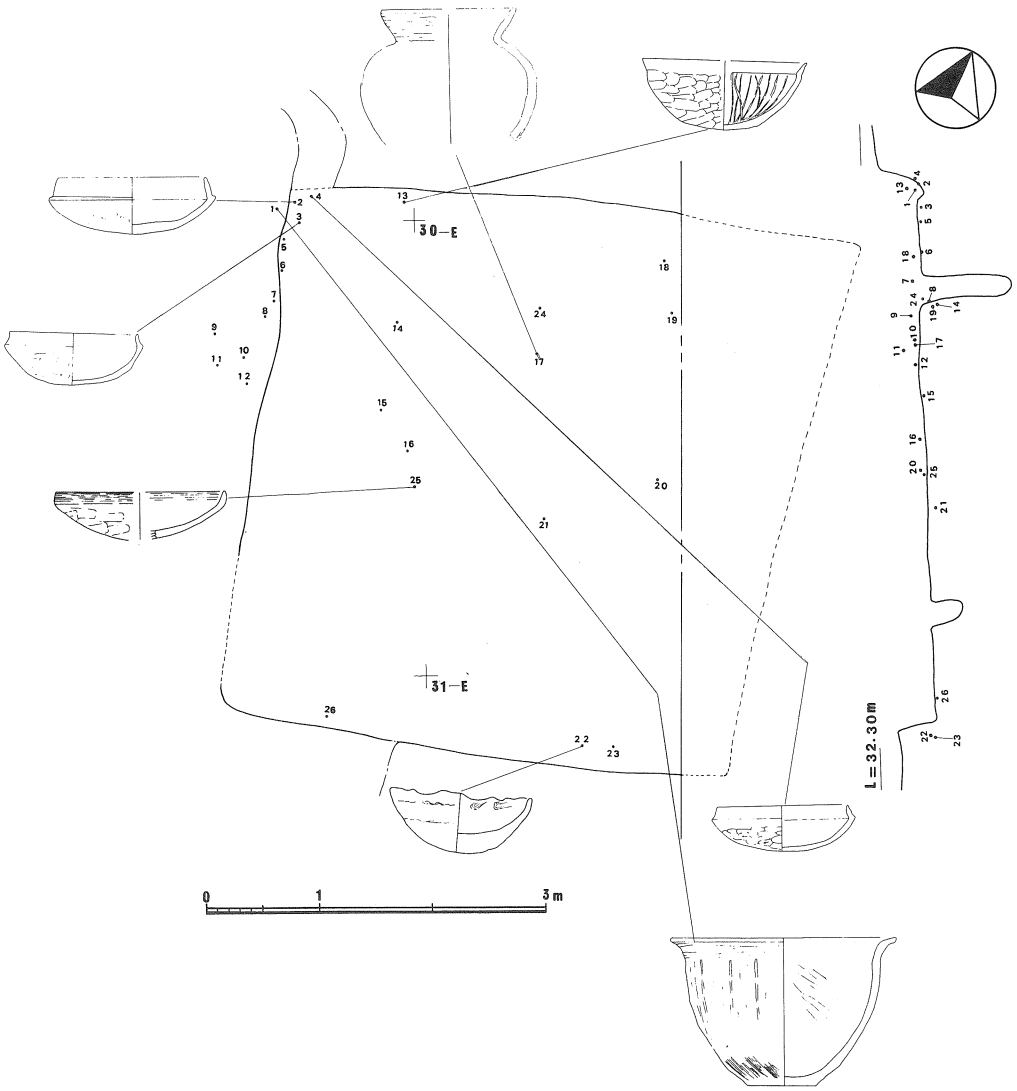
第68図　33号住居址遺物分布図



第69図　32号住居址平面実測図　炉址・出土遺物実測図　(1)



第70図　32・33号住居址出土遺物実測図　(2)



第71図　32号住居址遺物分布図

(表22)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	鉢 （土師器）	A 21.2cm B 6.6cm C 13.7cm	平底，胴部は下半部から中央部まで外傾して立ちあがり，上半部でほぼ直立してから，口辺部に至っては大きく外反して開く。	口辺部は内外面共に横ナデを行ない，胴部は内外共にヘラナデを施す。外面の下半部の一部にはヘラ削り痕が認められる。	A 砂粒，パミス B 橙色 C 良好	
第70図 2	甕 （土師器）	A 12.7cm B ——— C 15.2cm	胴部はほぼ球状を呈し，上半部が大きく張り出し最大径を有す。口辺部は直線状に外傾して開く。	口辺部外面はヘラナデを横位に行ない，胴部内外面はナデを施す。	A 12.7cm B ——— C 15.2cm	
3	坏 （土師器）	A 16.2cm B 不明 C 4.4cm	体部は大きく外傾して立ちあがり，口縁部はほぼ直立して開く。	口辺部は内外面共に横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
4	坏 （土師器）	A 15.4cm B ——— C 6.4cm	体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部では更に外反して開く。	体部外面はヘラ削りを施し，内面は縦位のミガキを施す。口辺部は横ナデを施す。	A 砂粒	
5	坏 （土師器）	A 14.1cm B ——— C 5.3cm	扁平な丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり口辺部は内傾ぎみに立ちあがる。口辺部と体部の接合部外側は明瞭な稜を有す。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラ削りを施している。	A 砂粒 B 明褐色 C 良好	
6	坏 （土師器）	A 13.4cm B ——— C 5.5cm	丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部はほぼ直立する。全体的に不整形な形である。底部はかなり厚くなっている。	内面はナデ，外面も荒いナデを行なっている。一部巻き上げ痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
7	広口壺（口辺部） （須恵器）	A 不明 B 不明 C 9.4cm	横位に櫛状波状文を施し，各2本単位の隆線を持つ。		A 砂粒 B 褐灰色 C 良好	
8	坏 （土師器）	A 12.2cm B ——— C 4.8cm	丸底，体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部は内彎してから立ちあがって開く。	口辺指内外。体部内面はナデを施し，体部外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 普通	
9	坏 （土師器）	A 12.8cm B ——— C 4.2cm	丸底，大きく内彎して立ちあがる体部で，口辺部はやや内傾して開く。体部と口辺部の接合部外側には稜を残す。	口辺部内外と体部内面は横ナデを施し，体部外面はヘラ削りを行なっている。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 普通	
10	手ぐつね	A 8.4cm B 5.8cm C 5.2cm	やや内彎して立ちあがった胴部で，口縁部は直立する。	内外面は荒いナデを施す。	A 砂粒 B 明橙色 C 不良	
11	甑 （土師器）	A 17.2cm B ——— C 14.9cm	胴部は外傾して立ちあがり，口辺部で更に大きく外反して開く。	口辺部内外は横ナデ，胴部内面はナデ，外面は中央部以下の部位にヘラ削りを施し，上半部はナデを行なっている。	A 砂粒，砂礫，石英，長石 B にぶい橙色 C 普通	
12	坏 （土師器）	A 8.8cm B 6.5cm C 1.2cm	平底。体部は外傾して立ちあがる。	体部は横ナデ，底部はヘラ切り，内面には暗文と黒色処理を施す。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 良好	

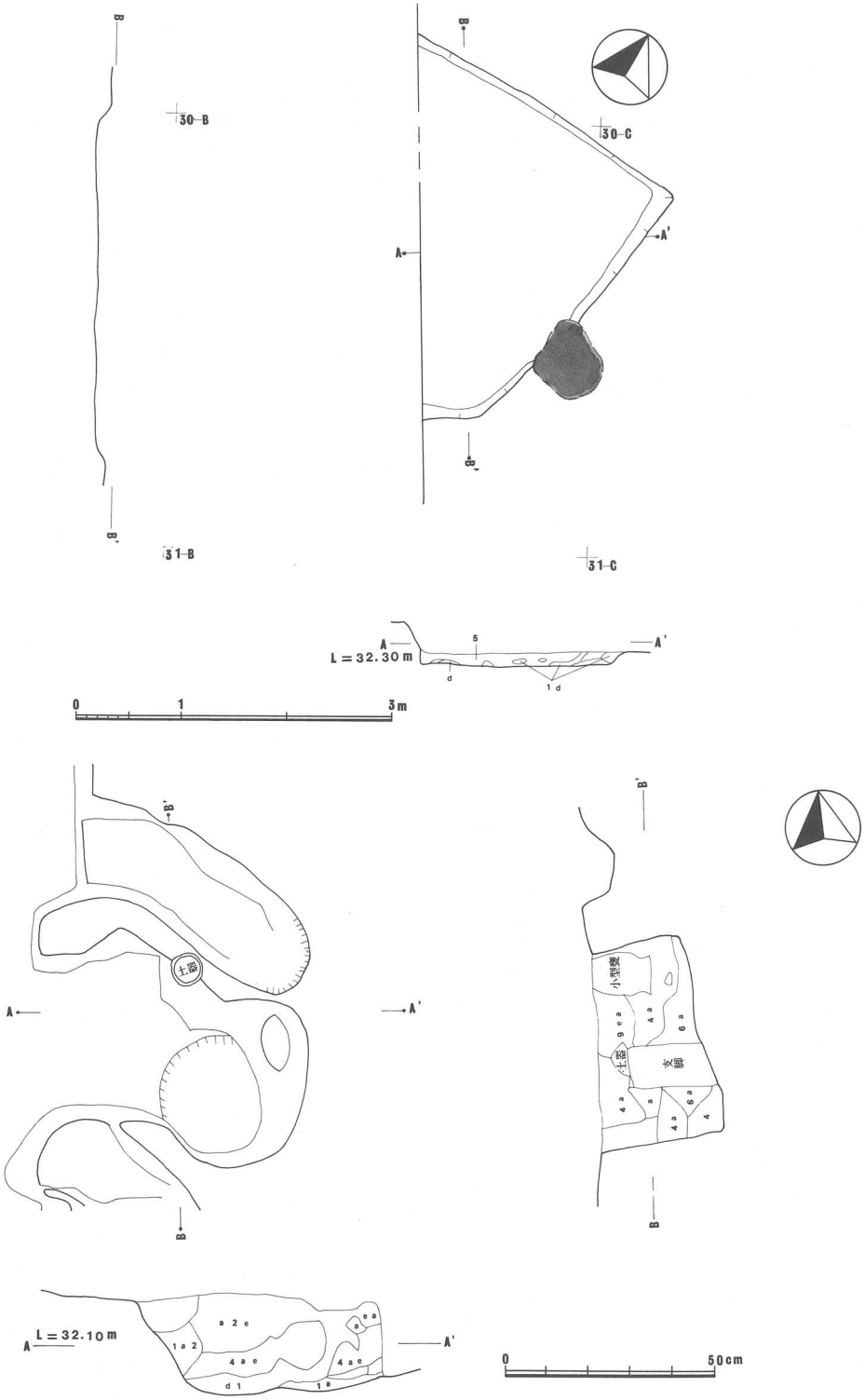
13	坏 （土師器）	A 10.7cm B 6.4cm C 2.2cm	平底。体部は稜く内彎して立ちあがる。	内面は黒色処理と暗文を施す。 外面は横ナデを行なう。	A 砂粒，雲母 B にぶい褐色 C 良好	
14	高坏 （土師器）	A 14.4cm B 6.1cm C 7.8cm	坏部（体部）は大きく外傾して立ちあがり，口辺部では更に外反して開く。口辺部と体部との中位には，口辺部のヘラナデ整形時につくり出した稜を持つ。脚部は重厚で短かいのが特徴である。	（坏部）口辺部外面は横ナデ，体部外面はヘラ削りの後ナデを行なっている。内面は全面的に縦位のミガキを施す。 （脚部）外面はヘラ削りの後ナデ，内面はヘラ削りによる整形を行なっている。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 良好	
15	坏 （土師器）	A 14.5cm B ——— C 3.8cm	扁平な丸底，体部は大きく内彎して立ちあがる。口縁部はほぼ直立して開く。	口辺部内外と体部内面はヘラナデを行ない，体部外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 普通	

34号住居址（第72・73・74図）

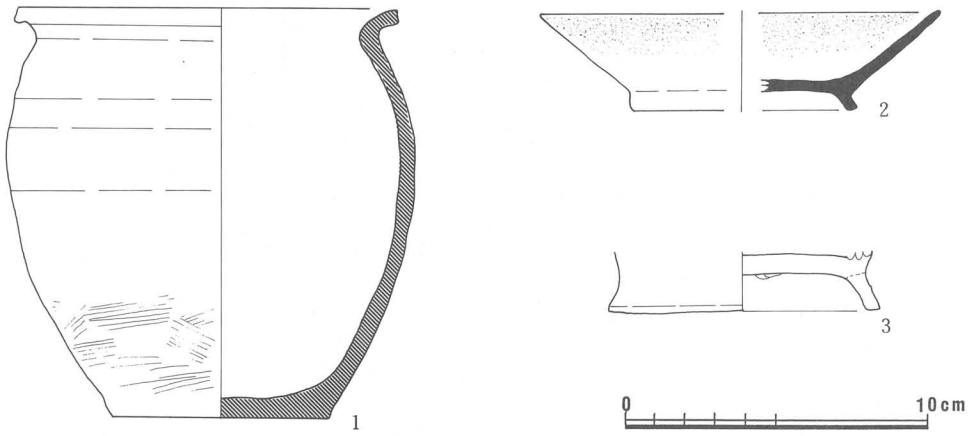
本住居址は，B区，30－Bグリットから検出された。本住居址は約$\frac{1}{2}$ほどが調査区域外にあたるため全掘はできなかった。

規模は南北が不明であるが，東西はおよそ3.00m前後であることが推定できた。形状は北東コーナー部の形状から推定すると方形と考えられた。主軸方向はN－84°－Wを指している。床面はローム層上の床で局部的に堅緻な踏み固めは残るが全体的には軟質である。壁面の立ちあがり状況は東壁は60°で立ちあがり，高さは15cm，北壁は61°で立ちあがり，高さは13cm，南壁は42°で立ちあがり，高さは13cmを測れた。壁溝は検出されなかった。ピットも検出されなかった。火床遺構は東壁の南寄りからカマドが確認された。カマドの天井部は削平されているため検出できなかったが，袖部と火床部はわずかながら検出できた。構築材は灰白色粘土と淡黄色粘土に砂粒を混入している。規模は両袖間81cm，焚口から奥壁部までが64cmで煙道部は明確に検出できなかった。覆土は黒褐色土が主体土でほぼ1層しか確認できなかったが，局部的に黄褐色土ブロック，炭化粒子などが若干含まれていた。

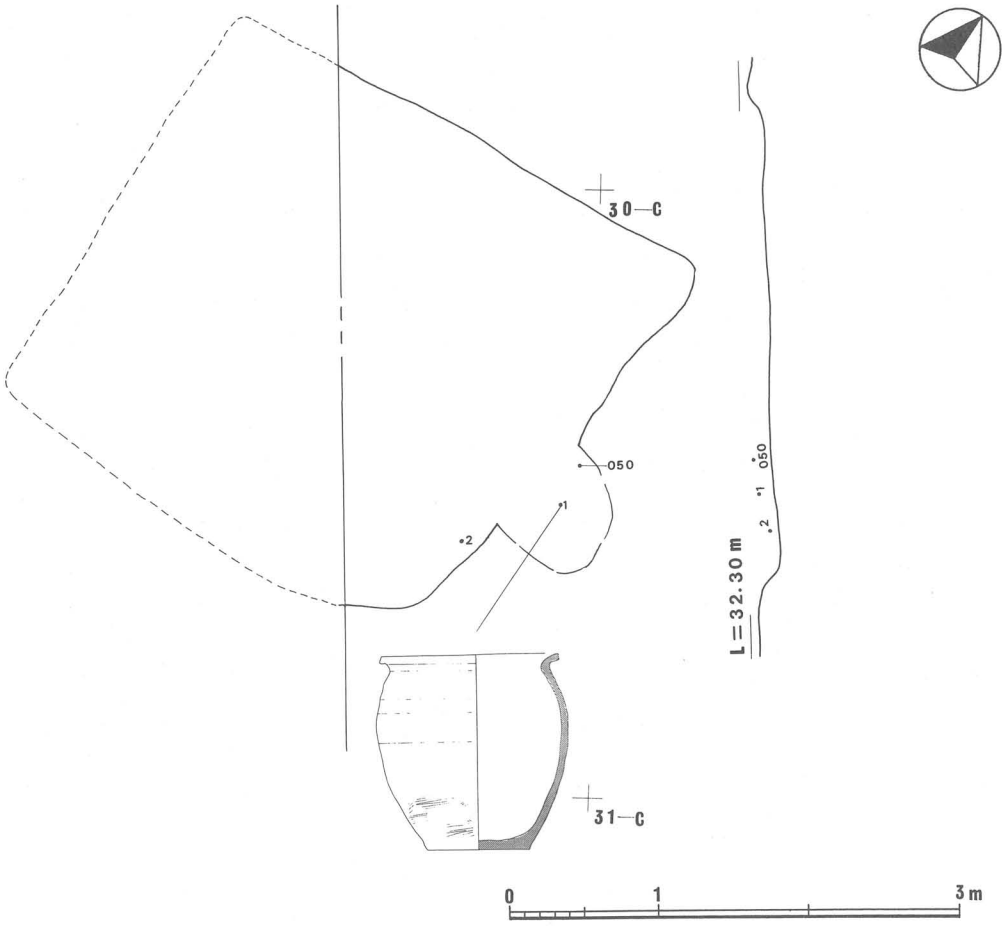
遺物は覆土中より土師器の小破片は出土したが図示できるものは3点であった。 1 小型甕の土師質須恵器の完形でカマド内に伏せた状況で出土している。 2 須恵器の高台付皿の破片である。器面の内外には灰釉が施されている。 3 小型甕の底部片でカマド焚口前の覆土中より出土した。



第72図　34号住居址平面実測図　カマド実測図



第73図　34号住居址出土遺物実測図



第74図　34号住居址遺物分布図

(表23)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	甕 （土師質 須恵器）	A 12.6cm B 7.2cm C 13.6cm	平底，胴部は緩やかに内彎して立ち上がり，胴上半部あたりで，内傾する。口縁部は頸部より大きく水平方向に外反して開く。口唇部外側は平らたくナデている。	胴部内面はナデ，外面は横ナデで，下半部にはヘラナデ痕が残る。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 良好	
2	坏 （灰釉陶器）	A 13.4cm B 7.2cm C 3.2cm	体部は直線的に外傾して開いて立ちあがる。	水挽き成形の後，回転横ナデ，口辺部の内外面に灰釉を施す。底部は糸切り痕（回転糸切り）高台は付高台。	A 砂粒 B 灰白色 C 良好	
3	高台付坏 （土師器）	A 8.5cm B 9.1cm C 2.0cm	ほぼ「ハ」の字状に広がる貼り付高台部。	底部はヘラ切りを行なった後末調整，内面（底部）黒色処理。	A 砂粒 B にぶい橙色 （内黒） C 良好	

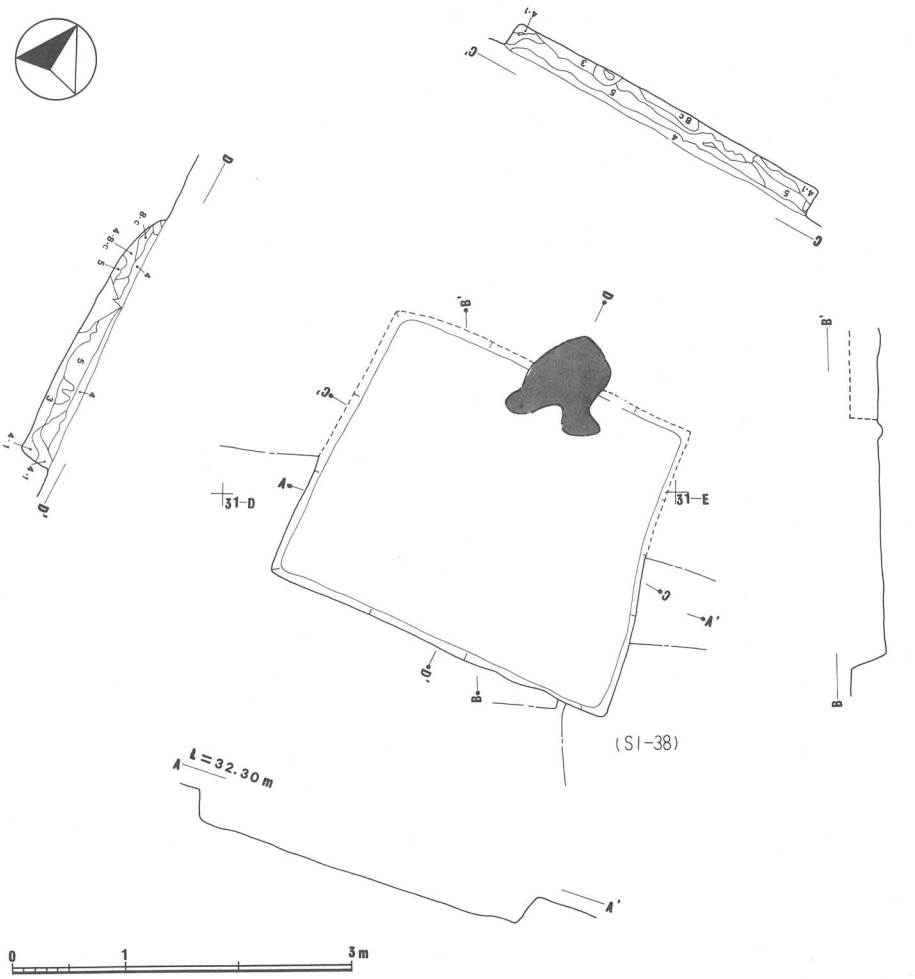
35号住居址（第75・76図）

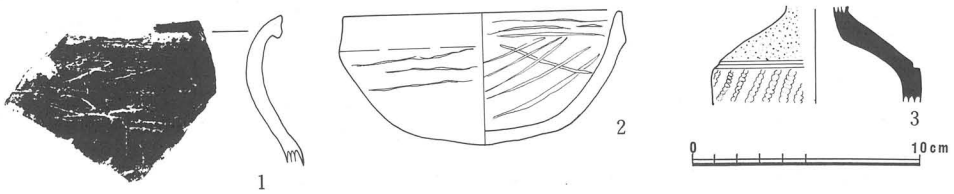
本住居址は，B区，31－Dグリットより検出された。本住居址は32号・33号住居址を切って構築されている。

規模は，南北2.57m，東西3.10mで形状は方形を呈している。主軸はN－4°－Wを指している。

床面はローム層上に暗褐色土を主体土にした貼り床を構築しており，全体的に平坦で堅緻に踏み固めている。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は32号住居址の堆積土を掘削して構築されていたため明確に壁面と断定できなかった。東壁は80°で立ちあがり，高さは32cm，南壁は89°で立ちあがり，高さは34cm，西壁は80°で立ちあがり，高さは29cmを測れた。壁溝は検出されなかった。ピットも検出されなかった。火床遺構としては北側にカマドが構築されていた。構築材は灰白色粘土と砂粒子を含んだ用材で形成されていた。遺存状況はかなり良好で，袖部，天井部の一部が残り焚口も明確に検出された。規模は袖部間の最大幅が83cm，焚口より煙道部までの幅が89cm，高さは34cmを測れた。

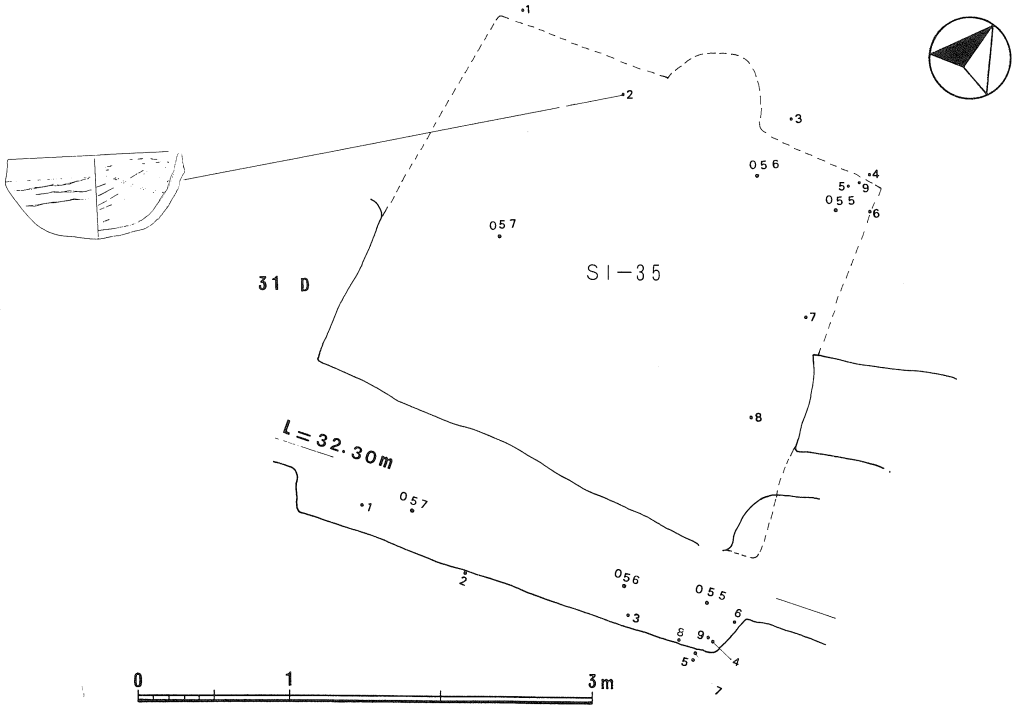
覆土は大別して3層に分層でき，上層は褐色土，中層は黒褐色土，下層は黒褐色土に灰白色粘土ブロックが若干混入されている。堆積状況は自然堆積の状態を呈していた。遺物は図示できるものが3点出土している。　1　土師器の甕口縁部片で，外面には刻書画が書かれており，図柄は動物あるいは昆虫類かと思われる。　2　坏でカマド西側の床面上から出土している。　3須恵器の底片で覆土上層より出土している。





第75図　35号住居址平面実測図

・出土遺物実測図



第76図　35号住居址遺物分布図

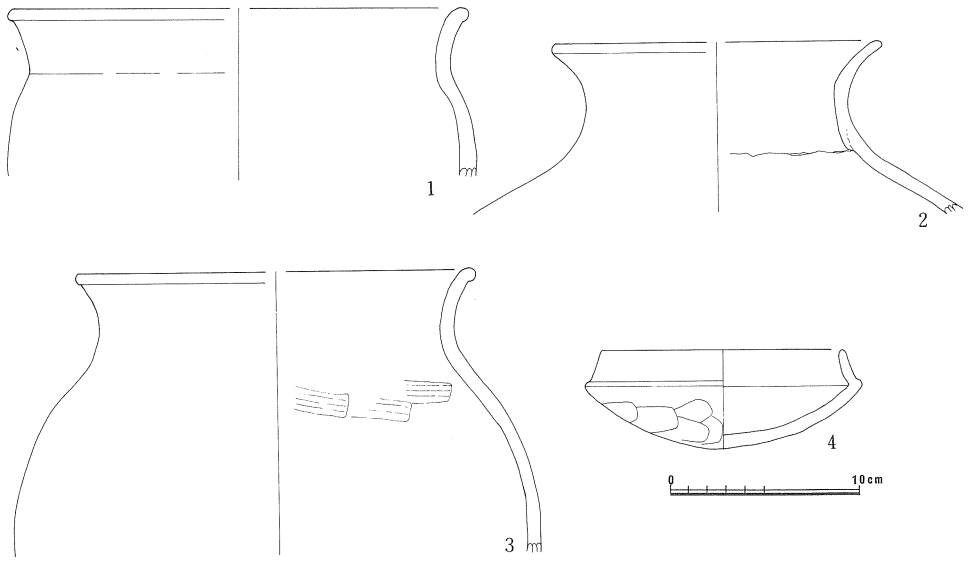
(表24)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第75図 1	甕 （土師器）	A ——— B ——— C ———	外面に刻画があり，昆虫もしくは動物の形である。	内外面ともにナデをおこなっている。	A 砂粒 B にぶい褐色 C 普通	
2	坏	A 12.6cm B ——— C 5.8cm	体部は底部から外方にのびてから内彎ぎみに立ちあがり口縁部は直立して立ちあがる。	口辺部は外面が横ナデ，内面が横位のミガキを行なっている。体部外面はナデ内面は斜位にミガキを施す。	A 砂粒，雲母 B 明赤褐色 C 普通	
3	甕	A 9.2cm B ——— C 4.1cm	内彎ぎみの胴部から大きく内傾する肩部で，胴部と肩部の中位には横位に沈線が周囲されていたと思われる。	内面はナデ，外面胴部には押圧文を施し，肩部には自然灰釉がかかっている。	A 砂粒 B 褐灰色 C 良好	

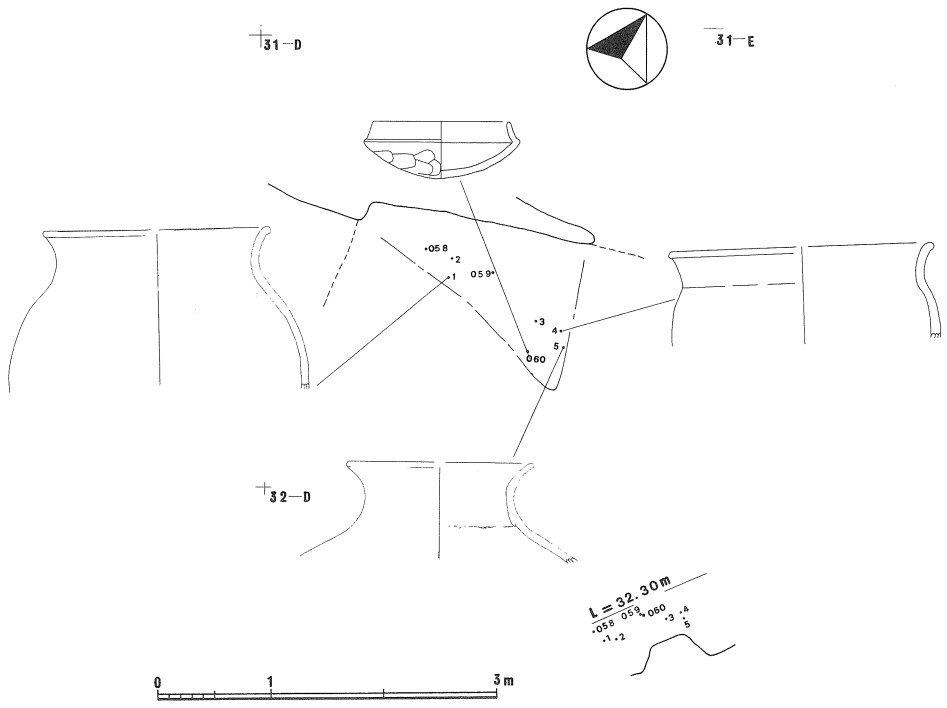
36号住居址（第77・78・79図）

本住居址は，B区，31－Dグリットより検出されたが，竪穴の掘り込みが浅く平面プラン，規模などは明確に確認できなかったが，踏み固めの土間状の床面がわずかに検出された。壁面，ピット，火床遺構などは一切不明である。遺物は図示可能なもので4点ある。

1 甕の口縁部片，　2 甕の口縁～頸部にかけての破片である。　3 甕の胴上半部から口縁部にかけての破片である。　4 坏でほぼ完形である。



第77図　36号住居址出土遺物実測図



第78図　36号住居址遺物分布図

(表25)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

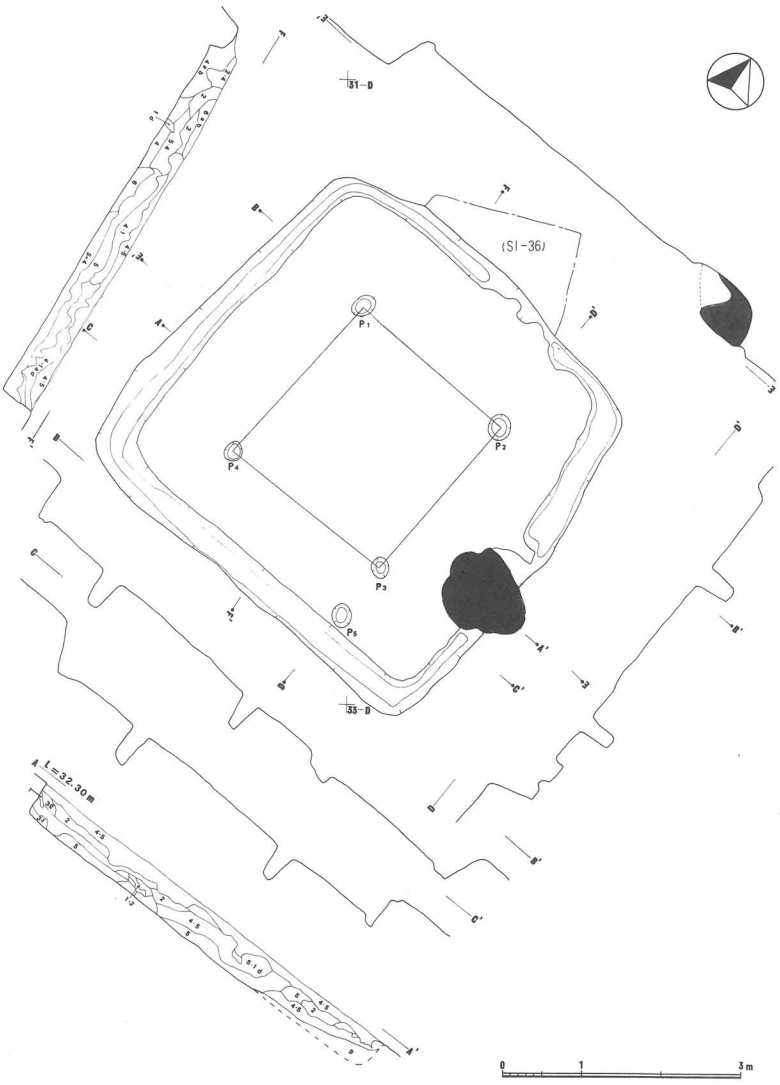
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第77図 1	甕 （土師器）	A 21.5cm B ——— C 9.0cm	やや外反ぎみの口辺部で，口唇部は僅かに肥厚している。	内外面共にナデを施す。	A 砂粒，砂礫，長石 B にぶい橙色 C 普通	
2	甕 （土師器）	A 17.2cm B ——— C 9.0cm	肩部は大きく張り出して，口辺部に至る。口辺部は大きく外反して開く。	内外面共にナデによる整形を行なっている。	A 砂粒 B 鈍い赤褐色 C 普通	
3	甕 （土師器）	A 21.2cm B ——— C 14.4cm	胴上半部から頸部にかけて大きく内彎して，口辺部から口縁部にかけては大きく外反して開く。口唇部は若干肥厚して外反する。	口辺部内面は横ナデ，胴部内外面もナデを行なっているが，内面の一部にはヘラ削りの痕跡を残す。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 良好	
4	坏 （土師器）	A 12.9cm B ——— C 5.2cm	丸底，体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部は内傾して立ちあがる。口辺部と体部の接合部外面には明瞭な稜を残す。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒，雲母 B 明褐灰色 C 良好	

37号住居址（第79・80・81図）

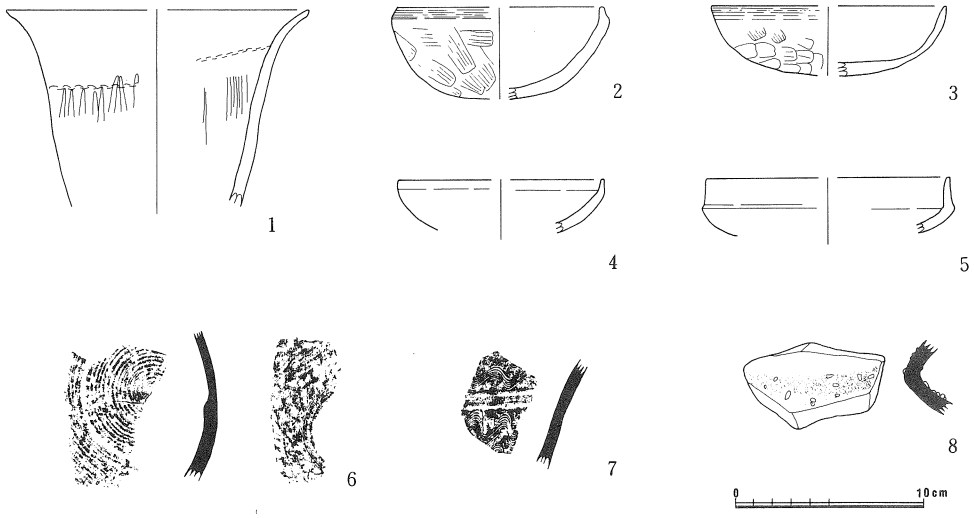
本住居址は，B区，32－C・Dグリットから検出された。規模は東西5.23m，南北5.00mで形状は隅丸方形を呈している。主軸はN－79°－Wを指している。床面は全体的に平坦で，10～15cmほどの厚さで貼り床を施している。壁面の立ちあがり状況および高さは東壁は85°で立ちあがり，高さは51cm，西壁は92°で立ちあがり，高さ52cm，南壁は86°で立ちあがり，高さは51cm，北壁は82°で立ちあがり，高さは47cmを測れた。壁溝は各方向の壁際から検出され規模は東壁溝の幅23cm，深さ9cm，西壁溝の幅25cm，深さ8cm，南壁溝の幅24cm，深さ10cm，北壁溝の幅14cm，深さ7cmを測れた。ピットは5個検出された。規模はP1口径28cm×26cm，深さ50cm，P2口径27cm×28cm，深さ44cm，P3口径23cm×22cm，深さ44cm，P4口径27cm×25cm，深さ48cm，P5口径35cm×37cm，深さ15cmを測れた。P1～P4は本住居のメイン柱の柱穴と考えられる。火床遺構は東壁の中央よりやや南寄りにカマドが付設されていた。規模は両袖間の最大幅90cm，焚口から奥壁部までの幅が102cmを測れ，高さは60cmである。構築材は灰白色粘土と砂粒の混合土で構成されている。内部は焼土，灰，炭化粒子などが充満しているが一部トレンチャーによる攪乱をうけている。カマドの模模，保存状況などは本遺跡で検出されたものとしては最大，最良の遺構である。覆土は大別して4層に分層できる。Ⅰ層は褐色土と黒褐色土，Ⅱ層は褐色土，Ⅲ層は黒褐色土，Ⅳ層は褐色土，黒褐色土が主体土となっている。基本的には自然堆積であるが上層あたりは若干の攪乱をうけていることが認められた。

遺物は，図示可能なものとして8点出土し，他は細片でコンテナ$\frac{1}{2}$箱分の出土があった。 1 坏でカマド南側の覆土中より出土している。 2 坏で北壁中央部よりやや南側の覆土下層より出土し

ている。 3 坏で南西コーナー部の床面より出土している。 4 坏片で覆土中より出土，遺存度は25パーセントほどである。5 坏片でこれも覆土中より一括してとりあげたもので，遺存度は25パーセントほどある。 6 須恵器の提瓶の胴部片である。本住居址中央部の覆土中より出土している。 7 須恵器の坏の口辺部で，これも覆土中より出土している。 8 須恵器の甕頸部片で外面には自然釉がかかっている。出土位置は南壁中央部の覆土中より出土している。



第79図　37号住居址平面実測図

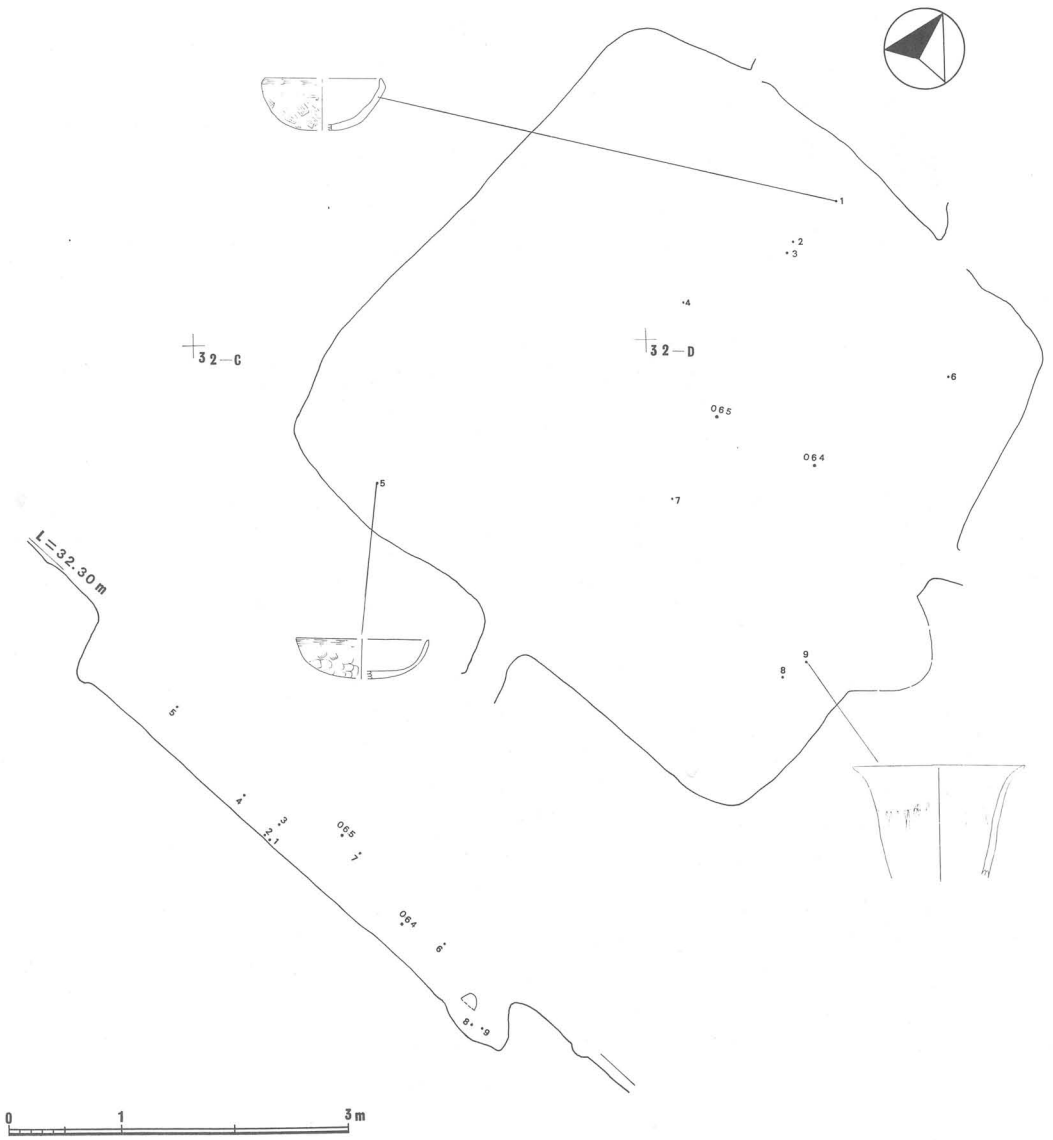


第80図　37号住居址出土遺物実測図

(表26)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 1	甑 （土師器）	A 16.0cm B ——— C 10.5cm	口辺部は大きく外反して開く。	口辺部内外面は横ナデ，外面には縦位のヘラミガキが施されている。輪積み痕も一部残る。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A 11.0cm B ——— C 4.8cm	扁平な丸底，体部は内彎して立ちあがった後，口縁はやや内傾ぎみに開く。	口縁部内外は横ナデ体部内面も横ナデ，外面はヘラ削りを不定方向に行なっている。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
3	坏 （土師器）	A 12.6cm B ——— C 3.7cm	扁平な底部から大きく内彎する体部となり，口縁部はほぼ直立して開く。	体部内面は回転横ナデ，外面はヘラ削りを施し，口縁部は内外共に横ナデを施す。	A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 良好	
4	坏 （土師器）	A 11.0cm B ——— C 2.8cm	体部は内彎して立ちあがり，口縁部はほぼ直立する。	内外面ともナデをおこなっている。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
5	坏 （土師器）	A 12.9cm B ——— C 2.9cm	外面には稜を残し、口辺部はほぼ直立して開く。	口辺部内外面は横ナデ，体部内外面ナデをおこなっている。	A 砂粒 B 褐色 C 普通	
6	提瓶 （須恵器）	A ——— B ——— C 不明		内面は回転横ナデを施す。外面は同じ円状に回転カキ目を施している。	A 砂粒 B 灰白色 C 良好	

7	甕 (須恵器)	A —— B —— C 5.7cm		外面には横位に櫛描波状文を施している。	A 砂粒 B 内外表面は灰色，内部はにぶい褐色 C 良好	
8	甕 (須恵器)	A —— B —— C 4.2cm		甕頸部片で，外面には灰釉を施し，表面には礫片が付着している。	A 砂粒 B 褐灰色 C 良好	



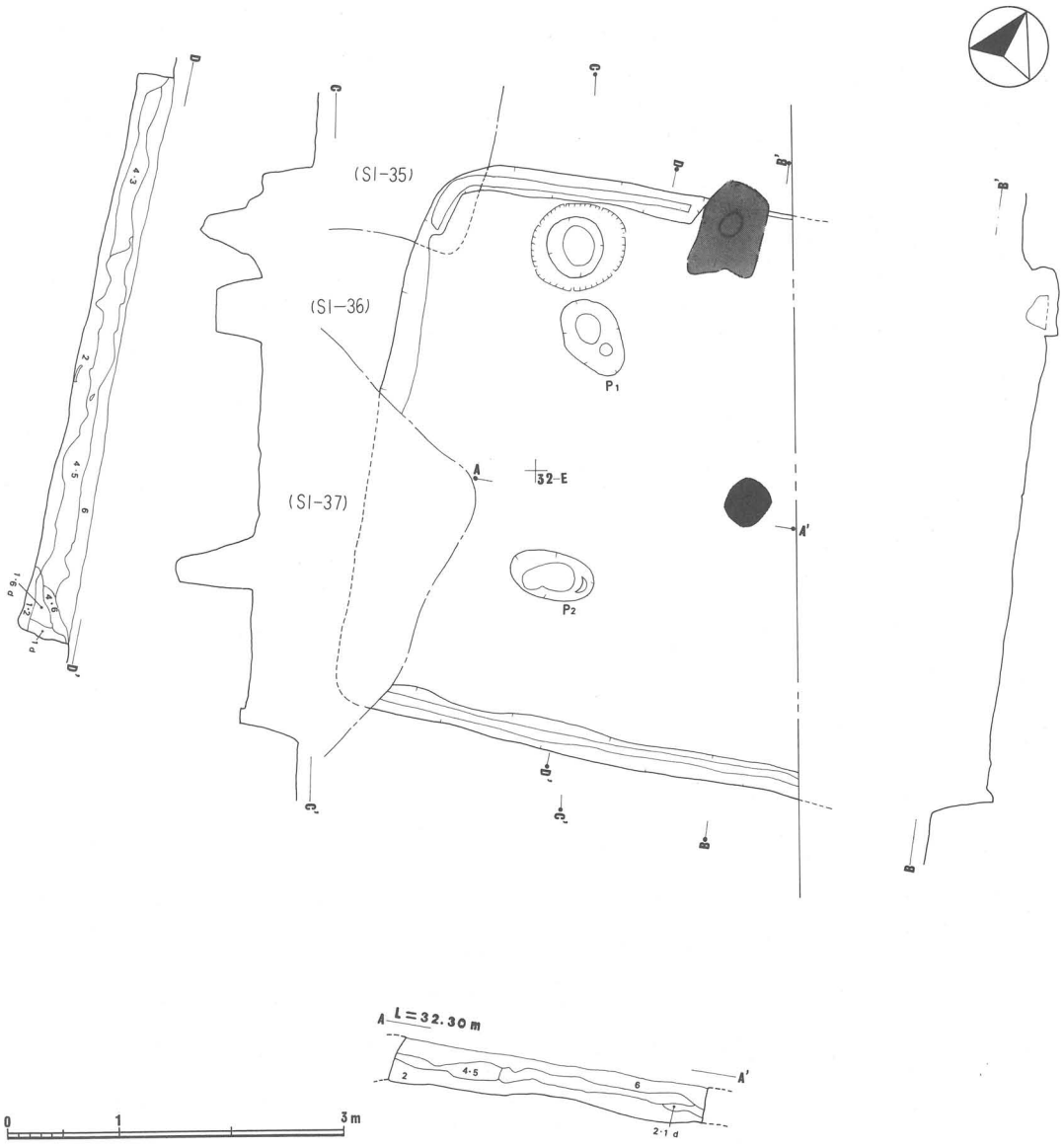
第81図　37号住居址遺物分布図

38号住居址（第82・83・84図）

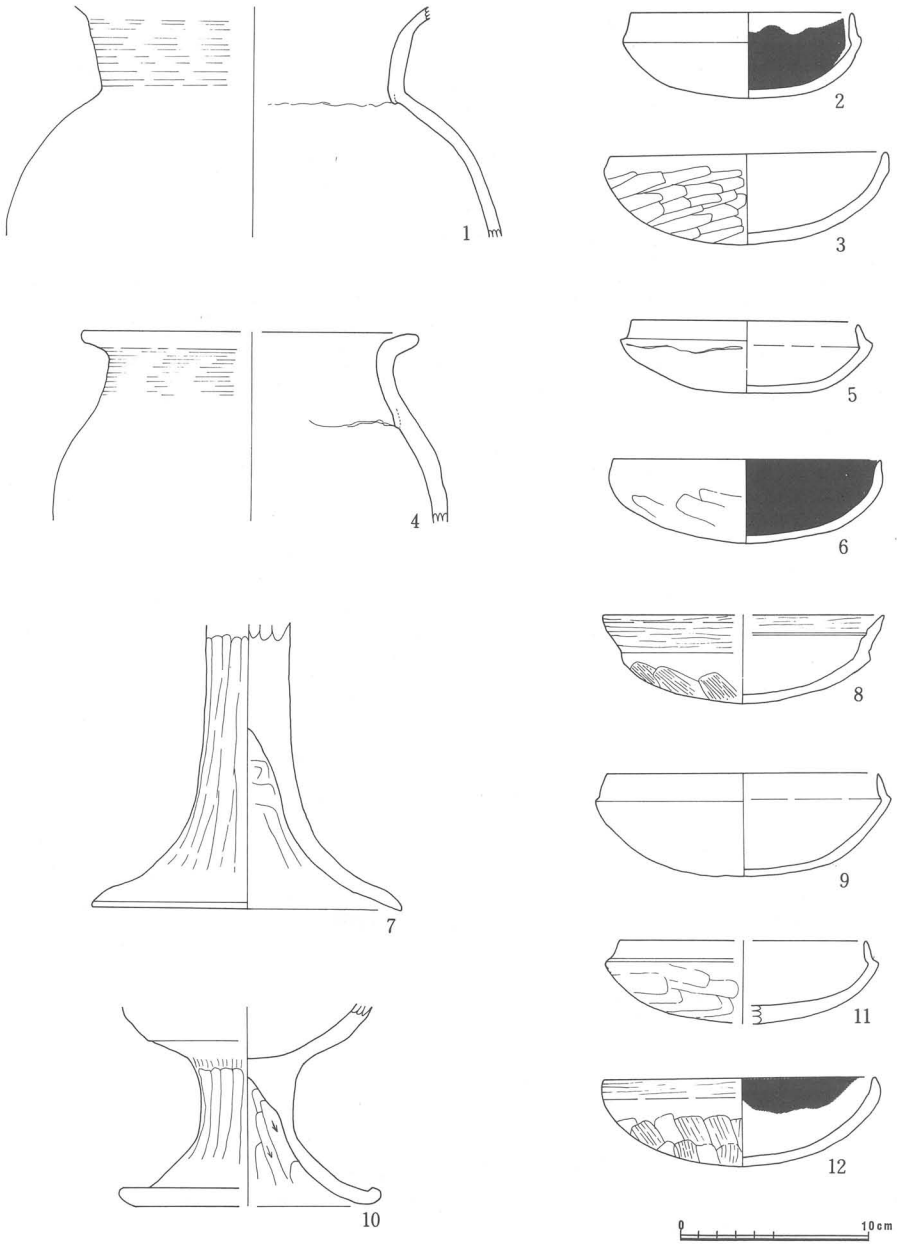
本住居址は，Ｂ区，31・32－Ｅグリットより検出された。東側は調査区域外で未検出，北西コーナー部は35号住居址，南西コーナー部は37号住居址と重複している。新旧関係は本住居址が最も古く，35号住居址が新しい時期のものであることが，切り合状況から判断できた。規模は東西が不明，南北は51.5ｍで，形状は隅丸方形であることが推定された。主軸はＮ－16°－Ｗを指している。

床面はローム層上の床面で，平坦で堅緻な踏み固めの床面となっている。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は84°で立ちあがり，高さ43㎝，南壁は71°で立ちあがり，高さは47㎝，西壁は76°で立ちあがり，高さは25㎝を測れた。壁溝は北・南側の壁下から検出され，規模は北壁溝の幅14㎝，深さ６㎝，南壁溝の幅18㎝，深さ８㎝を測れた。ピットは２個検出され，規模はＰ1口径45㎝×64㎝，深さ45㎝，Ｐ2口径76㎝×40㎝，深さ72㎝を測れた。Ｐ1の北側には貯蔵穴と考えられる土坑状遺構が検出されている。規模は，東西85㎝，南北70㎝で深さは57㎝を測れ，覆土中からは５点ほどの土師器片が出土している。火床遺構は北壁部にカマドが検出され，規模は両袖間の最大幅が52㎝，焚口部から奥壁部までの幅が87㎝，奥壁部はほぼＵ字形に切り込んだ煙道部がみられる。高さは44㎝で，一部ではあるが天井部が残る。構築材は灰白色粘土で砂粒が混入されている。焚口中央部からは高坏脚部が出土している。覆土は，明確に３層でき，上層は暗褐色土，中層は褐色土と黒褐色土の混合土，下層は褐色土となっている。

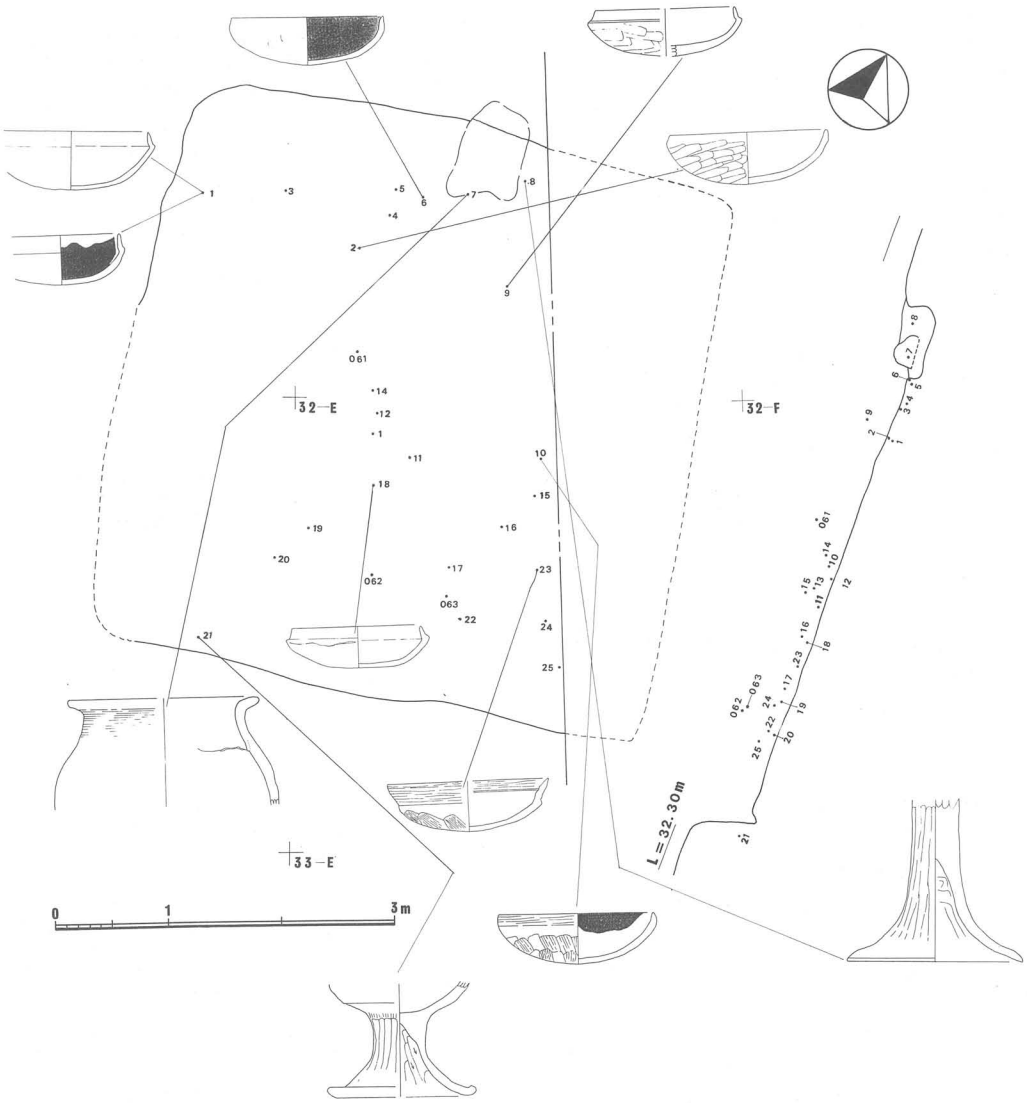
遺物は，全部で12点が図示できた。 1 甕の口辺部から胴上半部片で中央部の覆土下層より出土した。 2 坏のほぼ完形品で９の坏とともに床上面より出土している。 3 坏の完形品でカマド西南側の床上10㎝の層位から出土している。 4 甕片でカマドの焚口部分の堆積焼土中より出土した。 5 坏のほぼ完形品で床中央より南寄りの覆土中より出土している。 6 坏でカマド西側袖前の床面上より出土している。 7 高坏脚部で東側未調査区域境の床面より出土している。 8 坏片で７の脚部より南１ｍ程の床面より出土している。 9 坏で２の坏と重なって出土し，位置は北西コーナー床面上である。 10 高坏で脚部と坏底部が残存している。出土位置は南壁西側の際である。 11 坏片でカマド焚口南１ｍ程の位置で床上10㎝の層位より出土している。 12 坏の完形で東側区域境の床面より出土している。本住居址から出土している土器類は出土層位，位置が良好な状態で確認されているためかなりセット資料としては有効である。



第82図　38号住居址平面実測図



第83図　38号住居址出土遺物実測図



第84図　38号住居址遺物分布図

(表27)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	甕 (土師器)	A —— B —— C 12.2cm	肩部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部はやや外傾ぎみに立ちあがる口縁部はかなり外反していると思われる。	口辺部外面は横位のヘラナデ，内面はナデを行なっている。肩部の内外面は共にナデを施し，肩部と口辺部の接合部には接合痕が明瞭に残る。	A 砂粒，砂礫 B にぶい橙色 C 普通	

2	坏 (土師器)	A 12.8cm B ——— C 4.5cm	扁平は丸底，大きく内彎して立ちあがる体部で口縁部は内傾ぎみに開く。口縁部と体部の接合部外側には不明瞭ながら稜の痕跡をとどめる。	器面の内外面はナデを施し，内面（体部）には黒色処理を施す。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 普通	
3	坏 (土師器)	A 15.0cm B ——— C 4.8cm	丸底，底部から大きく内彎して立ちあがる体部で，口縁部はほぼ直立して開く。	口縁部内外は横ナデ，体部内面も横ナデ，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 淡橙色 C 良好	
4	甕(口縁部) (土師器)	A 18.2cm B ——— C 10.0cm	胴上部から内彎して頸部に至り，口縁部はほぼ水平方向外側に外反して開く。	胴部内外面はナデ，頸部の外面には横ナデを施す。	A 砂粒，砂礫 B 灰褐色 C 普通	
5	坏 (土師器)	A 12.2cm B ——— C 3.8cm	扁平な丸底。底部から内彎して立ちあがった体部で稜にいたる口辺部は内彎して開く。	内外面共にナデを施す。体部外面に捲き上げ痕を残す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
6	坏 (土師器)	A 14.2cm B ——— C 4.4cm	丸底，底部から内彎して立ちあがる体部で，口縁部はほぼ直立して立ちあがる。	内面はナデの後黒色処理を施し，外面は局部的にヘラ削りの痕跡をとどめる。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 普通	
7	高坏 (土師器)	A 不明 B 裾部径 16.5cm C 15.0cm	脚部はほぼ直立して立ちあがり，下部から裾部にかけて大きく外反して広がる。	脚部外面は縦位にヘラ削りを行なっている。内面はヘラ削りによる調整，裾部は内外面共に横ナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
8	坏 (土師器)	A 15.0cm B ——— C 4.8cm	丸底づ底部から大きく内彎して立ちあがり，口辺部と接する体部は底部と体部の区別は不明瞭である。口辺部は直線状に外反して開く。口辺部内面には沈線が周回させている。	口辺部内外面は横ナデ，体部内面はナデ，外面は底部から体部にかけてのヘラ削りを施している。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
9	坏 (土師器)	A 14.4cm B ——— C 5.4cm	扁平な丸底。体部は外方にのびる底部から内彎して立ちあがり，口辺部はやや内彎ぎみに開く。口辺部と体部との接合部外側には明瞭な稜を有す。	口辺部内外面は横ナデ，体部内外面はナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
10	高坏 (土師器)	A 不明 B 不明 C 11.1cm	（坏部）体部は大きく内彎して立ちあがる。 （脚部）太く短めの脚部で裾部は大きく外傾して広がる。裾部縁部は外反する。	（坏部）内面はナデの後ミガキ外面は体部下半がヘラ削り，上半が横ナデ。 （脚部）外面は縦位にヘラ削りを施す。内面はヘラ削り，裾部は内外共に横ナデを施す。	A 砂粒 B 浅葉橙色（上面に灰褐色） C 良好	
11	坏 (土師器)	A 13.2cm B ——— C 4.3cm	扁平な丸底。体部は底部より大きく内彎して立ちあがり，口辺部との接合部に至る。口辺部はやや内彎ぎみに開き口辺部と体部との接合外面には明瞭な稜を残す。	口辺部内外面は横ナデ，内面はナデを行ない，外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
12	坏 (土師器)	A 14.6cm B ——— C 4.8cm	丸底，体部は大きく内彎しながら立ちあがり，口縁部は直立して開く。	口辺内外は横ナデ，体部内面は回転横ナデ局部的に黒色処理を施す。外面はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 良好	

39号住居址（第85・86図）

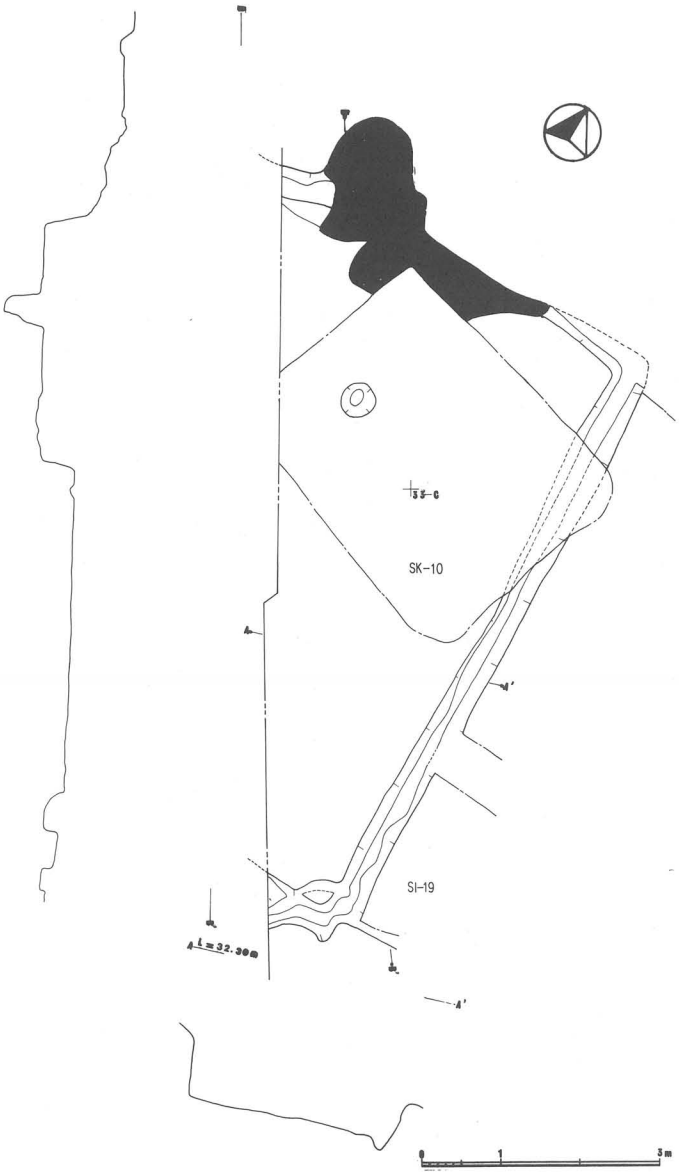
本住居址は，Ｂ区，32－Ｂ・33－Ｃグリットから検出された。本住居址は西側半分ほどが調査区域外にあたるのと，カマド南側に10号土坑が本住居址を切って存在していたため，検出状態は良好ではなかった。

規模は南北8.50ｍ，東西不明。形状は方形と推定される。主軸はＮ－0°を指している。床面はローム層上の床で中央部ほど硬く周縁部にいたるとかなり軟質となる。壁溝は東側からのみ検出され，その規模は幅25㎝，深さ12㎝を測れた。壁面の立ちあがり状況および高さは，東壁は73°で立ちあがり，高さは49㎝，北壁は84°で立ちあがり，高さは24㎝であった。南・西側は不明。ピットは検出できなかった。火床遺構としてはカマドが１基検出されたが，局部的に攪乱をうけているため全容はとらえにくかったが，残存部の規模としては袖方向が78㎝，焚口部より煙道部までが95㎝，高さ40㎝を測れた。煙道部はロームの北壁部をＵ字形に切り込んでつくられている。構築材は，砂粒を含んだ灰白色粘土と淡黄色グロック（粘土質）である。焼土，灰の堆積はみられたが，攪乱のため明確に分層することはできなかった。覆土は黒褐色が主体土であったが，10号土坑の部分になると暗褐色土とロームブロック土がかなり混在して確認された。

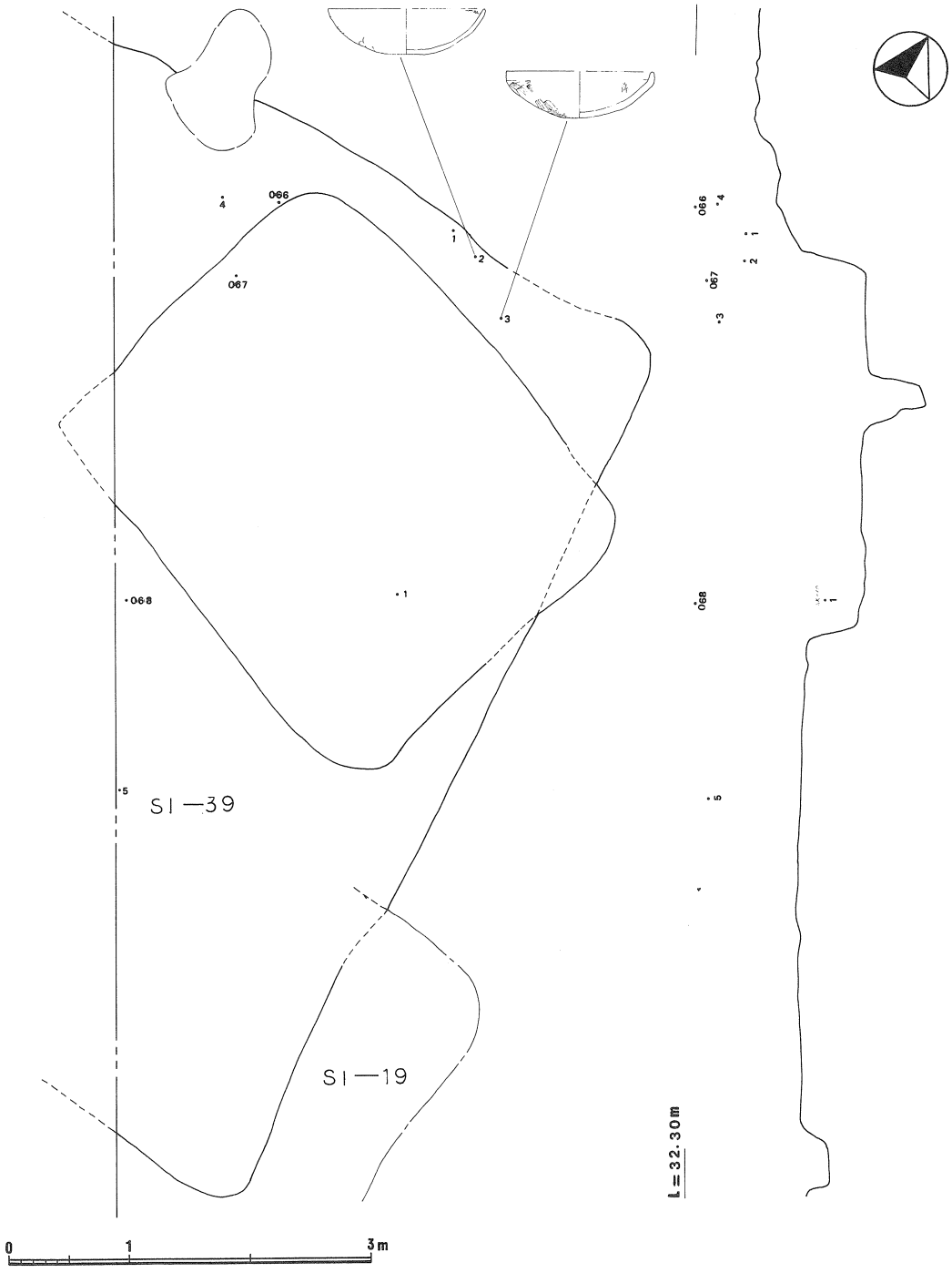
遺物は本住居址に伴うと考えられるものは土師器の細片が若干出土したほか，図化できるものは坏片２点がある。１・２，土師器の坏片でともにカマド東側の堆積焼土の中より出土したものである。

(表28)　　Ａ 口径　Ｂ 底径　Ｃ 現高　　Ａ 胎土　Ｂ 色調　Ｃ 焼成

図版番号	器　種	法量（㎝）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1	坏（土師器）	Ａ 14.0㎝ Ｂ ―― Ｃ 4.0㎝	丸底，体部は大きく外傾して立ちあがる。	内外面ともナデを施し，外面の一部にはヘラミガキがみられる。	Ａ 砂粒 Ｂ 褐色 Ｃ 普通	
2	坏（土師器）	Ａ 13.0㎝ Ｂ ―― Ｃ 4.0㎝	大きく外傾して立ちあがる体部で，口縁部はほぼ直立して開く。	口縁部の内外面には横ナデ，外面の体部にはヘラ削り痕がみられる。	Ａ 砂粒 Ｂ 黒褐色 Ｃ 普通	



第85図　39号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第86図　39号住居址・10号土坑遺物分布図

40号住居址（第87・88・89図）

本住居址は，Ｂ区，33－Ｅグリットより検出され，唯一単独で検出できた住居址であった。規模は，東西3.27ｍ，南北2.45ｍを測れた。形状は隅丸長方形を呈し，主軸はＮ－82°－Ｗを指している。

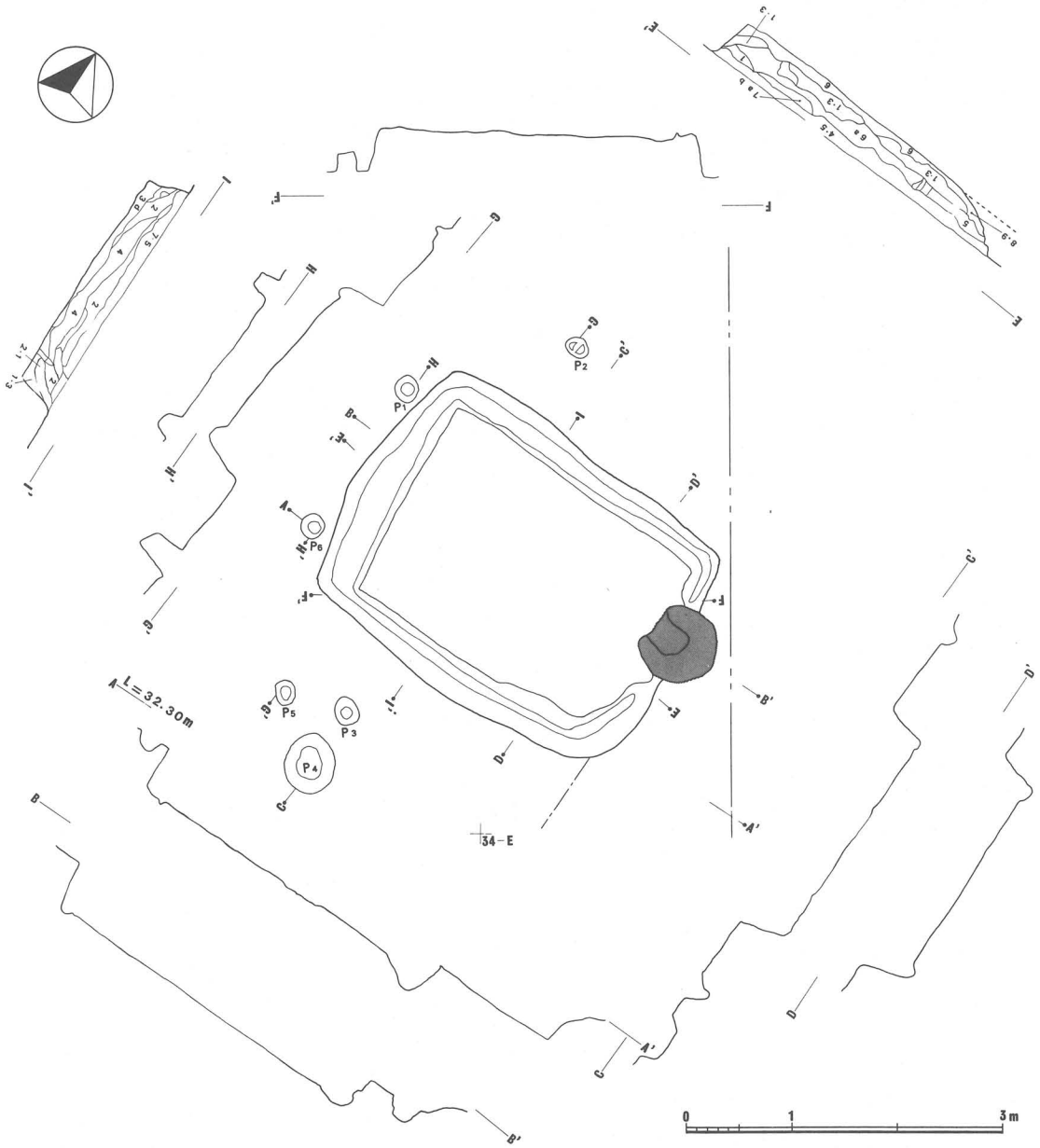
床面はローム層上を堅緻に踏み固め，全体的に平坦な床となっている。局部的には貼り床を構築している。壁溝は各壁面際から検出され，その模模は北壁溝の幅14cm，深さ５cm，東壁溝の幅20cm，深さ23cmで中央部にはカマドが存在するため溝が切れている。南壁溝の幅15cm，深さ６cm，西壁溝の幅15cm，深さ６cmを測れた。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は83°で立ちあがり，高さ41cm，西壁は88°で立ちあがり，高さは45cmを測れた。ピットは竪穴内からは検出されなかったが，外部周縁部からは６個のピットが確認され，いずれも本住居の屋根材あるいは壁材を構成する補助的な柱穴（ピット）と考えられた。規模は，Ｐ1口径19cm×21cm，深さ22cm，Ｐ2口径25cm×23cm，深さ13cm，Ｐ３口径25cm×24cm，深さ19cm，Ｐ４口径45cm×50cm，深さ17cm，Ｐ５口径28cm×29cm，深さ37cm，Ｐ6口径23cm×23cm，深さ15cmを測れた。火床遺構は東壁のほぼ中央部にカマドが付設されていた。規模は両袖間の最大幅が78cm，焚口から奥壁部までの幅も78cm，高さは34cmで天井部は欠落していた。カマドの構築材は淡黄色粘土と灰白色粘土に砂粒が混入されている。内部の焼土は良好な状態で堆積していたが，層状に分層することはできなかった。覆土は大別して３層に分層でき上層は黒褐色土と褐色土，中層は黒褐色土，下層は暗褐色土が主体土となっている。堆積状況は自然堆積の状態を呈していた。

遺物は，覆土中より若干の土師器片が出土したほかは，接合後ほぼ完形に複元できた甕がある。

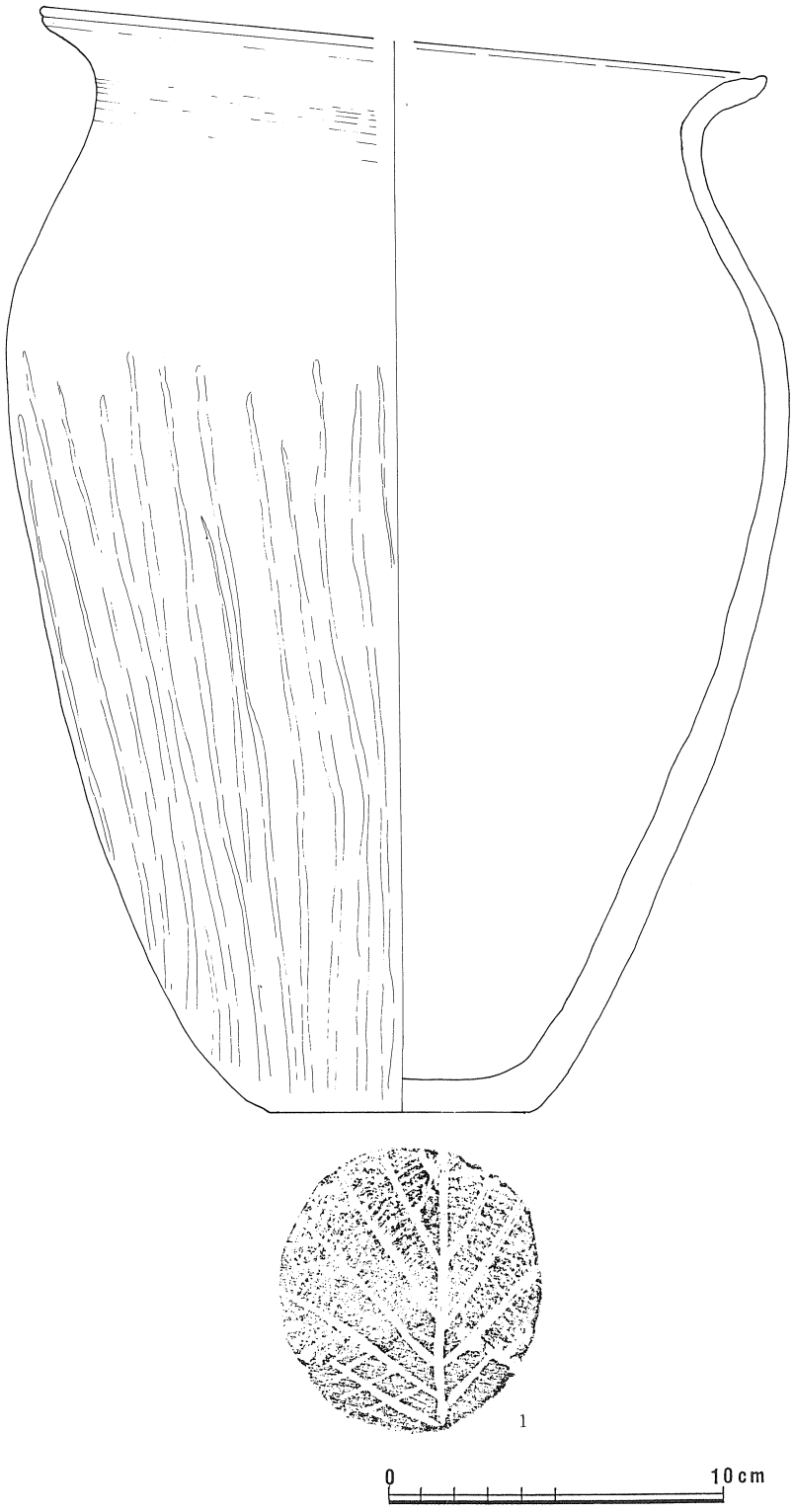
１　甕でカマド南側コーナー部の床面上より押しつぶされた状態で出土している。

41号住居址（第90・91・92・93図）

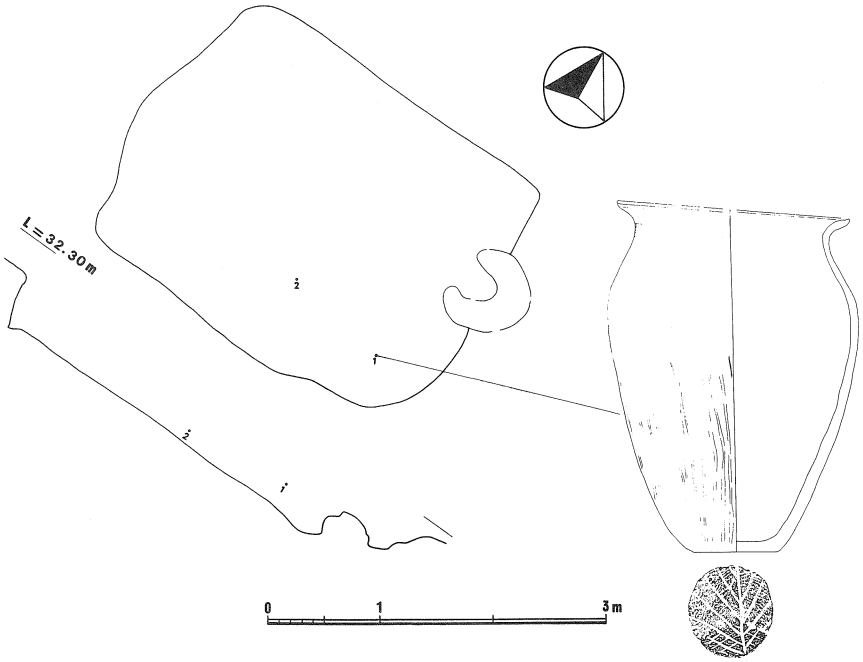
本住居址は，Ｂ区，34－Ｅグリットより検出された。重複遺構としては42号，42′号住居址があり，本住居址は42号住居址に切られていることや，東側の大半が調査区域外に位置しているため規模，形状などについては不明である。残存する部分の床面はローム層上の踏み固め土間でほぼ平坦である。壁面の立ちあがり状況は，西側の一部が遺存しているので，その計測数値は，60°で立ちあがり，高さは20cmであった。遺物は，弥生土器片で，ほぼ完形に近い状態まで複元できたものが２点ある。91図の弥生土器は壺形土器で頸部以上が欠損している。出土位置は本住居址西側の床面上から出土している。92図の甕形土器も弥生土器で91図の壺形土器とともに押つぶれた状態で出土している。



第87図　40号住居址平面実図



第88図　40号住居址出土遺物実測図



第89図　　40号住居址遺物分布図

(表29)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

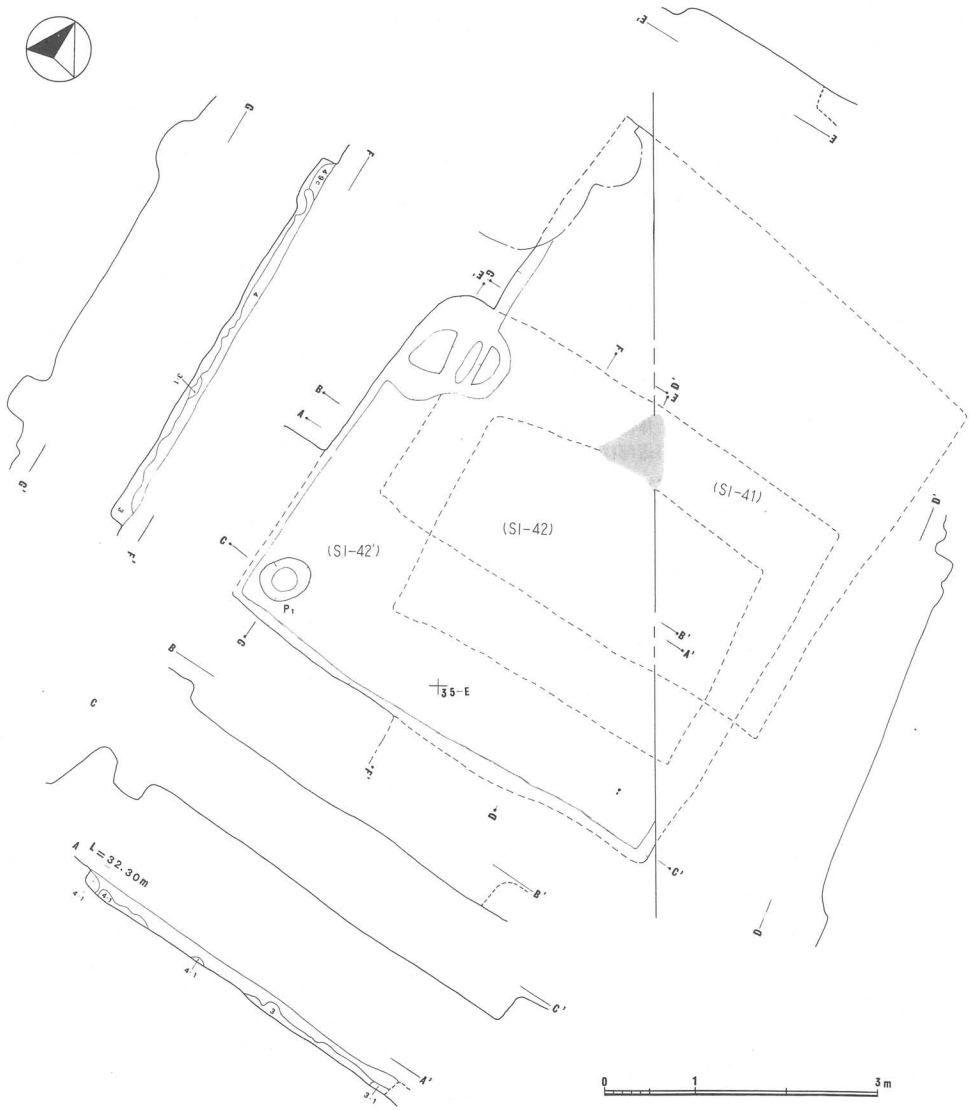
図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	甕 （土師器）	A 21.8cm B 8.0cm C 33.1cm	平底。胴部は下半部よりほぼ直線状に外傾して立ちあがり，上半部より内彎して頸部にいたる。最大径は上半部に有す。口縁部は大きく外反して開き，口縁部内外面には調整時に段をもうけている。	口辺部内外は横ナデを施し頸部外面には横位のヘラナデを施す。胴部外面は胴部下端より縦位にミガキを施しており，上半部以上の部位はナデのままである。口縁部は内外に有段をもつ。	A 砂粒，雲母 B にぶい橙色 C 普通	

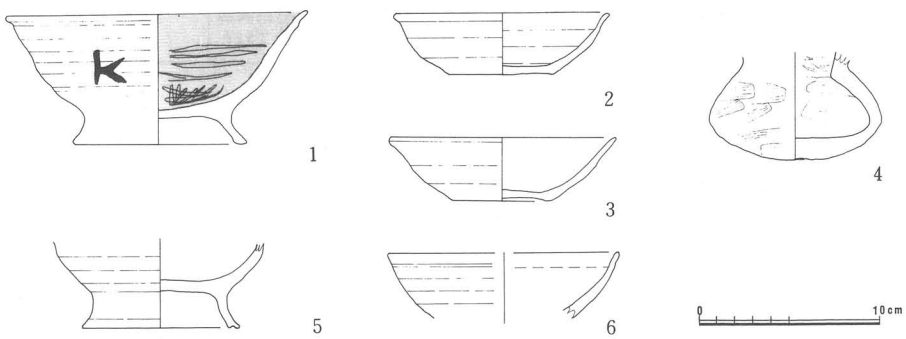
(表30)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第90図 1	高台付坏 （土師器）	A 16.8cm B 8.6cm C 7.2cm	体部はほぼ直線的に外傾して立ちあがり，口唇部はやや外反する。高台部は，付高台で大きくハの字状に開く。 外面に墨書痕がみとめられるが判読は不明。	内外面は水挽き成形後，横ナデを行なっている。内面は黒色処理と暗文を施している。底部は回転ヘラ切りを行なった後，ヘラナデ調整を施す。	A 砂粒 B 灰白色（外面） C 良好	
2	坏 （土師器）	A 12.0cm B 6.0cm C 3.4cm	平底。体部は外傾して立ちあがり，中央土部あたりで一端は外傾度が緩くなる。口唇部はやや外反ぎみに開く。	体部は内外面共に水挽き成形後，回転横ナデを施す。底部は回転ヘラ切りを行なっている。	A砂粒 B浅黄橙色 C普通	
3	坏 （土師器）	A 12.8cm B 5.5cm C 3.5cm	平底。体部は外傾して立ちあがり，口辺部は更に僅かながら外反する。	水挽き成形後，内外面共，回転横ナデを施す底部は，回転ヘラ切りを行なっている。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 普通	
4	坩 （土師器）	A 不明 B C 6.0cm	胴部は中央が大きく張り出す形状を呈している。	内外面共にヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
5	高台付坏 （土師器）	A ——— B 7.6cm C 4.7cm	体部は内彎して立ちあがる。高台部はほぼハの字状に開く。	体部は内外面共とも横ナデをおこない。高台部内外面は回転横ナデをおこなっている。底部は回転ヘラ削りをおこなっている。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 普通	
6	坏 （土師器）	A 12.8cm B ——— C 3.6cm	体部は内彎しながら立ちあがる。	口縁部内面はヘラミガキを施し、体部内外面は横ナデをおこなっている。	A 砂粒 B にぶい褐色 C 普通	

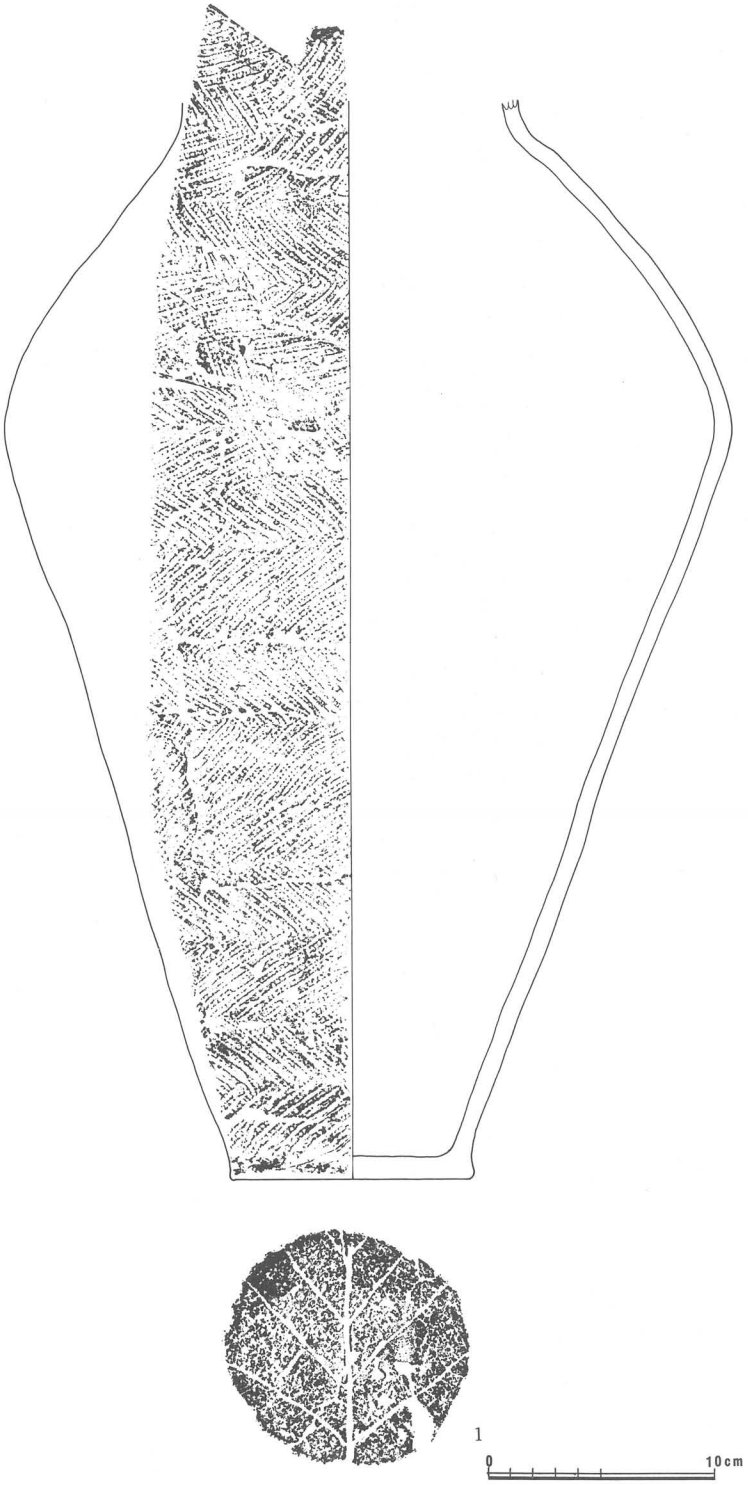
(表31)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第91図 1	壺 （弥生土器）	A ——— B 11.0cm C 47.5cm	底部からほぼ直線状に外傾して立ちあがる胴部は上半部より大きく内傾する。 頸部以上は欠損。	外面には単節の斜縄文をR・L方向で施している。底部には木葉状圧痕を残す。	A 砂粒・パミス B にぶい橙色 C 普通	
第92図 2	壺（甕） （弥生土器）	A ——— B 11.5cm C 36.2cm			A 砂粒・パミス B にぶい橙色 C 普通	



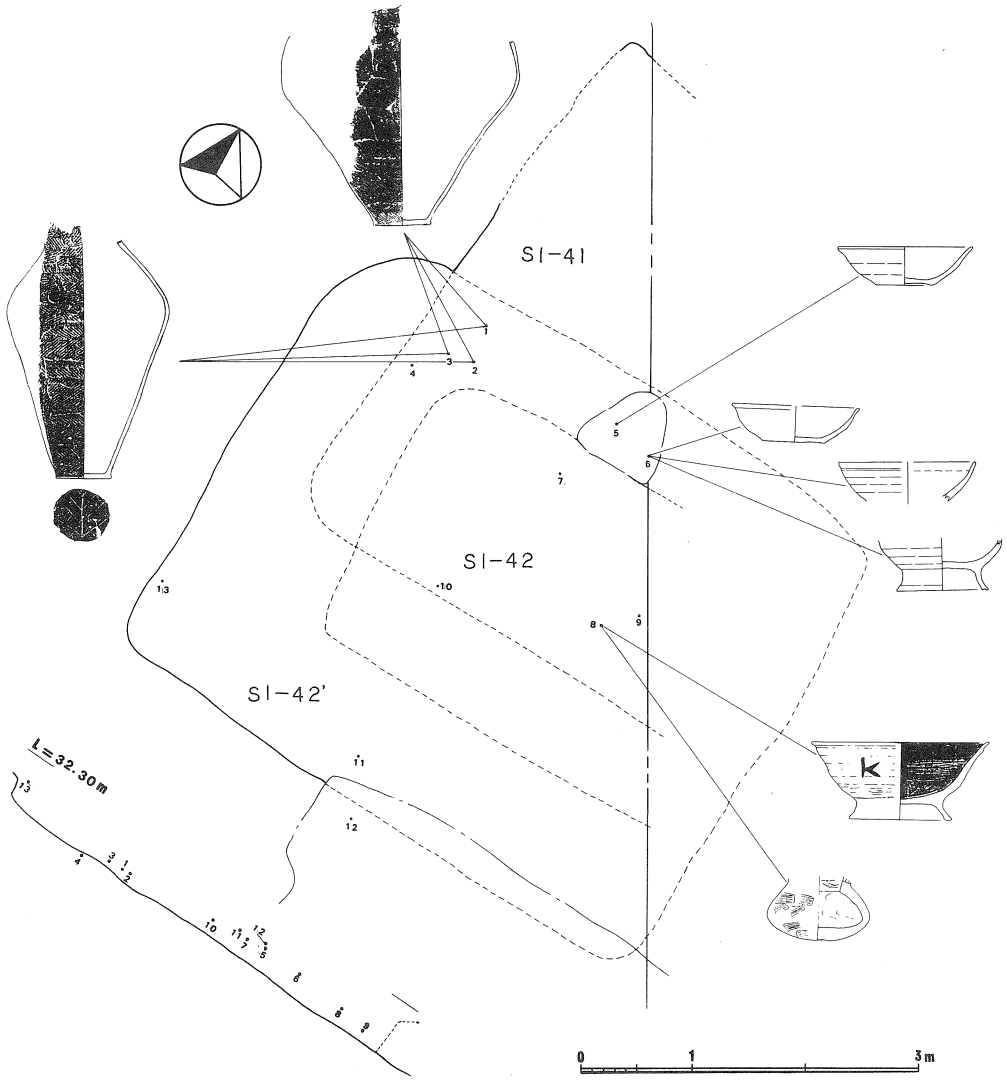


第90図　41・42・42′号住居址平面実測図・42号出土遺物実測図



第91図　41号住居址出土遺物実測図　(1)

第92図　41号住居址出土遺物実測図　(2)



第93図　41・42・42′号住居址遺的分布図

42号住居址（第90・93図）

本住居址は，B区，34－Eグリットから検出され，41号，42′号住居址と重複していた。本住居址は，他の重複住居址より最も新しい住居址で41号，42′号住居址の範囲に構築されていた。したがって，明確な壁面は確認できず，堅緻な貼り床面の範囲で平面プラン，壁面の位置を推定した。推定規模は，南北が4.20m，東西は東側が調査区域外に遺構がおよんでいるため不明。形状は方形と推定され，主軸は不明である。床面は全体的に平坦で，貼り床を堅緻に踏み固めた床となっている。

壁面の状況は不明。壁溝は検出されなかった。ピットも検出されなかった。火床遺構はカマドが北側より検出された。規模は両袖間の最大幅が70cm，焚口部から煙道部までの幅が75cmで高さは20cmを測れた。構築材は粘質土が認められず焼土魂を固めた状態の壁材を使っていたと考えられる。内部は焼土灰，炭化物などが混在して堆積しており，分層することは難しかった。竪穴内の覆土は大別して2層に分層でき，上層は褐色土，下層は黒褐色土となっており，ほぼ自然堆積の状況を呈していた。

遺物は，図示可能なものとして6点出土している。 1 高台付坏でカマド南側1.5mの位置より出土している。また，外器面にはわずかながら墨書がみとめられるが判読は不明である。 2 3はともに坏でカマド内部の焼土中より出土している。 4 は形状からすると小型の坩形土器に類似する土器で，1の高台付坏と同位置から出土している。 5 高台付坏で覆土中より出土。 6 坏で覆土中より出土している。

42号住居址（第90図）

本住居址は，41号，42号住居址と重複した住居址であるが，規模・形状については不明瞭な点が多い。残存壁と思われる部分が西側と南側にわずかに認められるが，耕作時の攪乱を受けているので明確に壁面として把握できなかった。床面は，西，南側の残存部の状況からみるとローム層上の土間で，明確な踏み固めの痕跡は確認できなかった。火床遺構は不明。覆土は褐色土が主体土である。遺物は土師器と思われるが細片が多く，図示はできなかった。

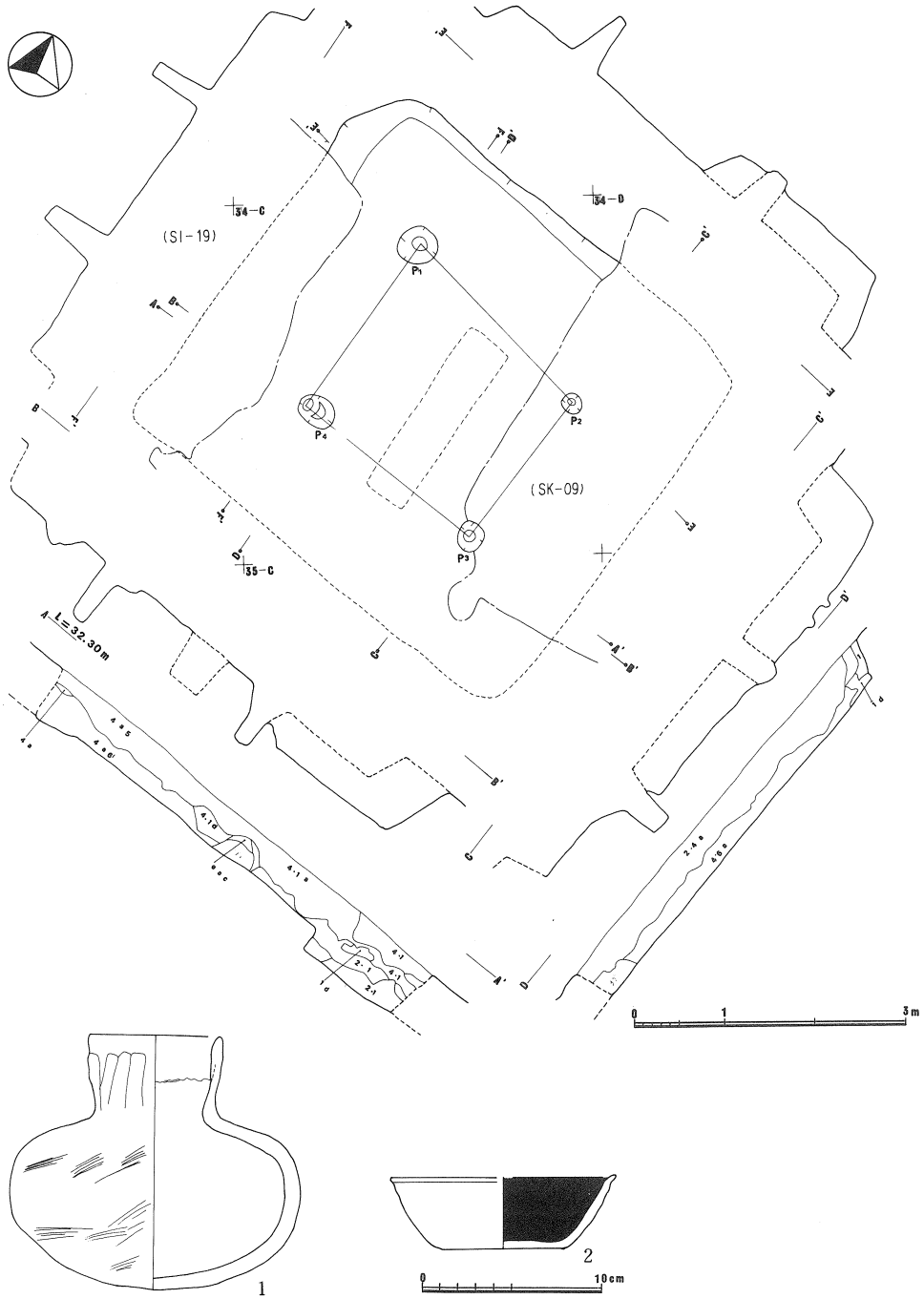
43号住居址（第94図）

本住居址は，B区，34－Cグリットより検出された。重複遺構としては19号住居址，9号土坑などがあり，竪穴の痕跡をとどめるのは北コーナー部とその左右に残る壁面の一部だけである。床面は若干踏み固めた床が局部的に残るが，トレンチャーやイモ穴と思われる穴などによって相当の攪乱をうけている。

規模は不明。形状は北コーナー部から推定すると隅丸方形を呈していたと思われる。床面は局部的な踏み固め痕を残す。壁面の立ちあがり状況および高さは，北西壁は66°で立ちあがり，高さは45cm，北東壁は74°で立ちあがり，高さは47cmを測れ，他は不明である。壁溝は検出されなかった。

ピットは4個検出され，P1口径33cm×29cm，深さ66cm，P2口径25cm×25cm，深さ60cm，P3口径26cm×29cm，深さ64cm， P4口径30cm×34cm，深さ72cmを測れた。火床遺構は不明。覆土は褐色土と黒褐色土からなり，層中には黄褐色土ブロックがかなり混入されており，かなり攪乱をうけている部分もみられた。遺物は図示可能なものとして2点出土した。 1 坩でP1南側の床面上10cmの層位

から出土している。 2 坏で内面は黒色処理を施したもので，西側の覆土中より出土した破片である。

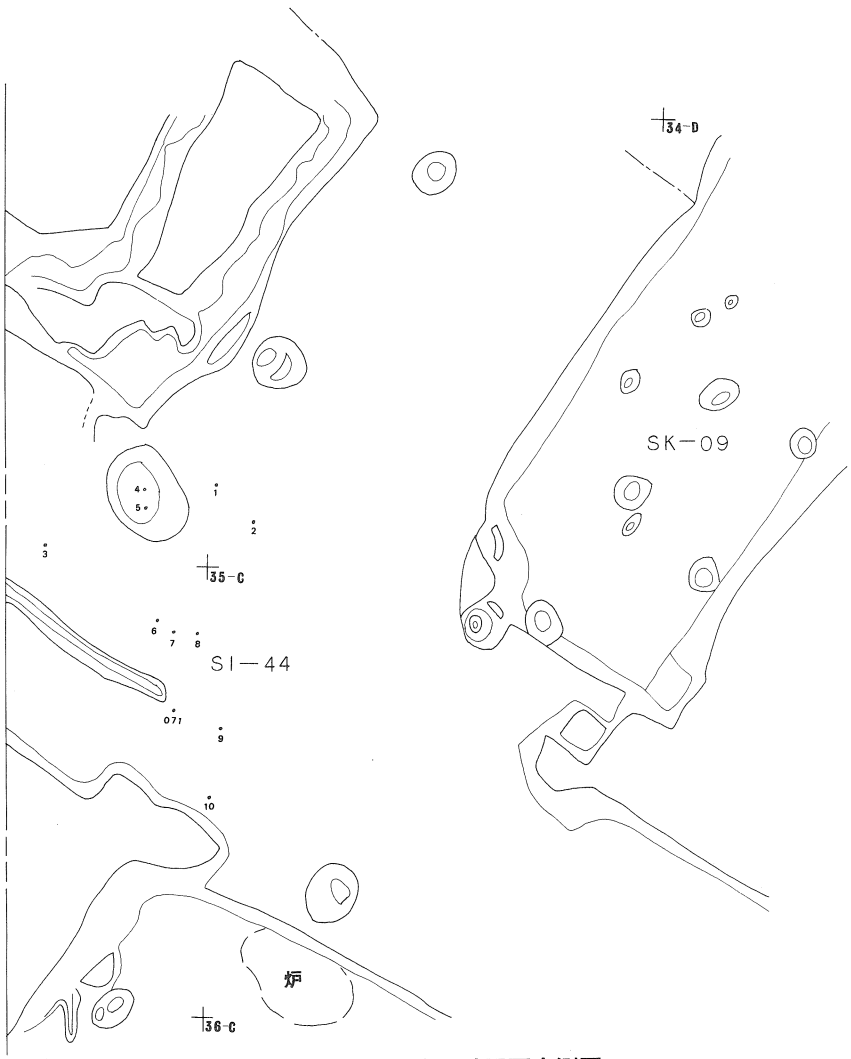


第94図　43号住居址平面実測図・出土遺物実測図

(表32)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	坩 （土師器）	A　7.4cm B C　14.2cm	丸底で，胴部は大きく内彎して立ちあがり中央部が大きく張り出している。上半部は大きく内彎して頸部に至る。頸部から口辺部にかけてはほぼ直立してたちあがって開く。	内面はナデ，外面は胴部がヘラナデ，口辺部～頸部がヘラ削りを施している。	A 砂粒・雲母 B 灰褐色 C 普通	
2	坏 （土師器）	A　12.6cm B　7.0cm C　4.0cm	平底。体部は外傾して立ちあがり，口唇部でやや外反する。	内外面共に回転横ナデを施す。内面は黒色処理を行なっている。底部は回転ヘラ切りを行なっている。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	

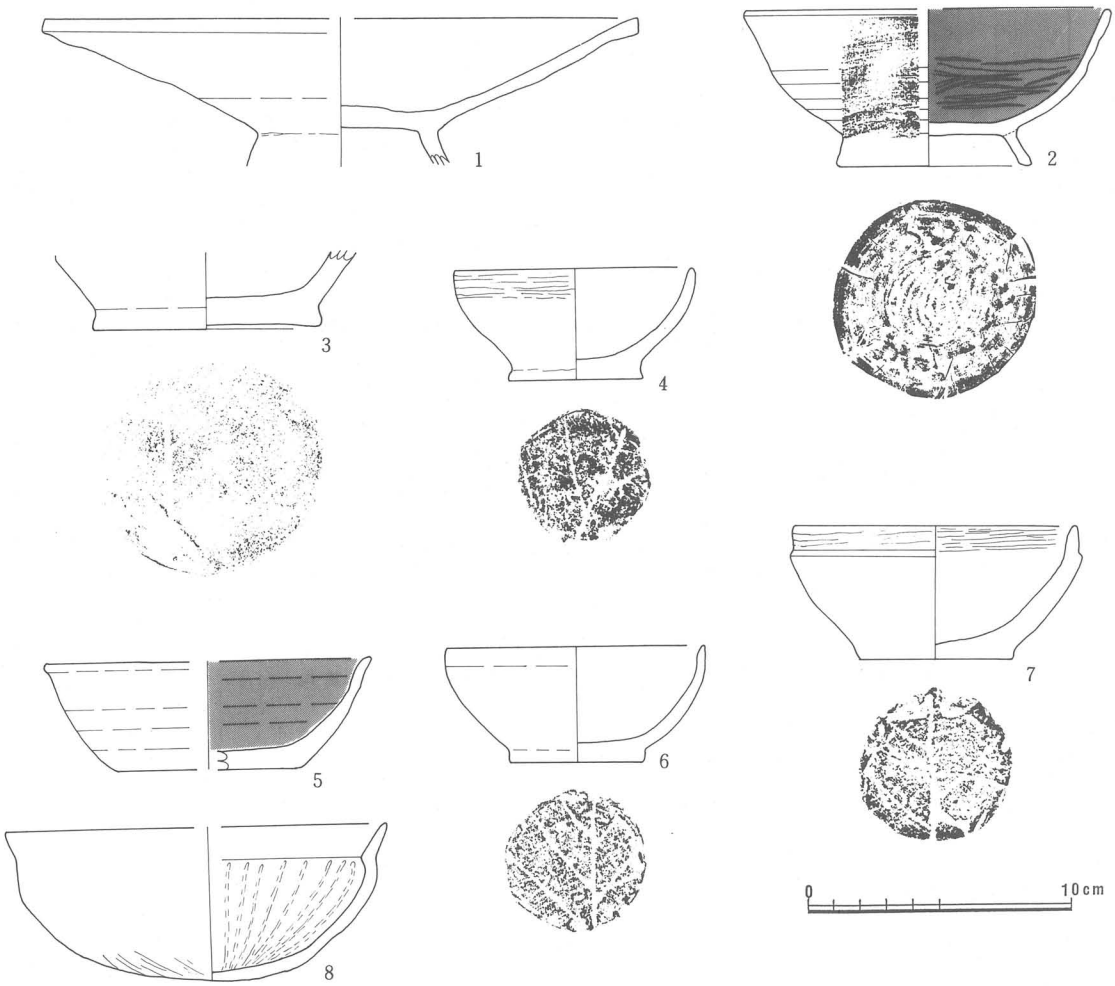
44号住居址（第95・96図）



第95図　44号住居址平面実測図

本住居址は，Ｂ区，36－Ｂグリットより検出された。

本住居址は，遺構のプランや規模，付属施設などが明確に検出することができなかった。一部ローム層上の床面が確認され，出土遺物（96図）も床上面より比較的良好な状況で出土しているため一軒分の住居址の存在が想定できたので住居址番号を設定した。



第96図　44号住居址出土遺物実測図

(表33)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	高盤 （土師器）	A 22.6cm B 7.8cm C 5.6cm	盤体部はほぼ直線状に外傾して開く。	内面は回転横ナデ・外面上部はナデ，下部は回転ヘラ削りを施す。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 良好	
2	高台付坏 （土師器）	A 14.0cm B 7.6cm C 6.0cm	体部は大きく外傾して立ちあがり，口縁部で開く。	水挽き成形後内外面に回転横ナデを行なっている。内面は黒色処理を施す。高台は「ハ」の字状に開く。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 普通	
3	甕（底部） （土師器）	A 11.4cm B 8.7cm C 2.8cm	平底。胴部は外傾して立ちあがる。	内外面共にナデ，底部外面には木葉状圧痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
4	坏 （土師器）	A 9.2cm B 5.1cm C 4.2cm	緩やかに内彎して立ちあがる体部。	底部は木葉状圧痕を残す。口縁部内外と体部内面は横ナデを施す。体部外面はナデ	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
5	坏 （土師器）	A 12.4cm B 7.1cm C 4.1cm	体部は内彎して立ちあがり，口縁部で僅かに外反する。	水挽き成形後，回転横ナデ，底部はヘラ切り内面は黒色処理を施す。	A 砂粒・雲母 B にぶい橙色 C 良好	
6	坏 （土師器）	A 9.8cm B 5.2cm C 4.4cm	内彎して立ちあがる体部で，口縁部は直立して開く。	口縁部外面，及び体部内面は横ナデを行ない外面はナデを施す。底部外面には木葉状圧痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
7	坏 （土師器）	A 10.8cm B 5.7cm C 5.1cm	平底，圧痕を残す。体部は外傾して立ちあがる。口辺部はほぼ直立して開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面は荒いナデ，底部外面には圧痕（葉状）を残す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
8	坏 （土師器）	A 14.6cm B C 5.8cm	丸底。底部の延長として大きく外傾して立ちあがる体部で，口辺部は更に直線状に外反して開く。	内外面をナデを行ない，内面には縦位にミガキを施す。	A 砂粒・パミス 長石 B 橙色 C 普通	

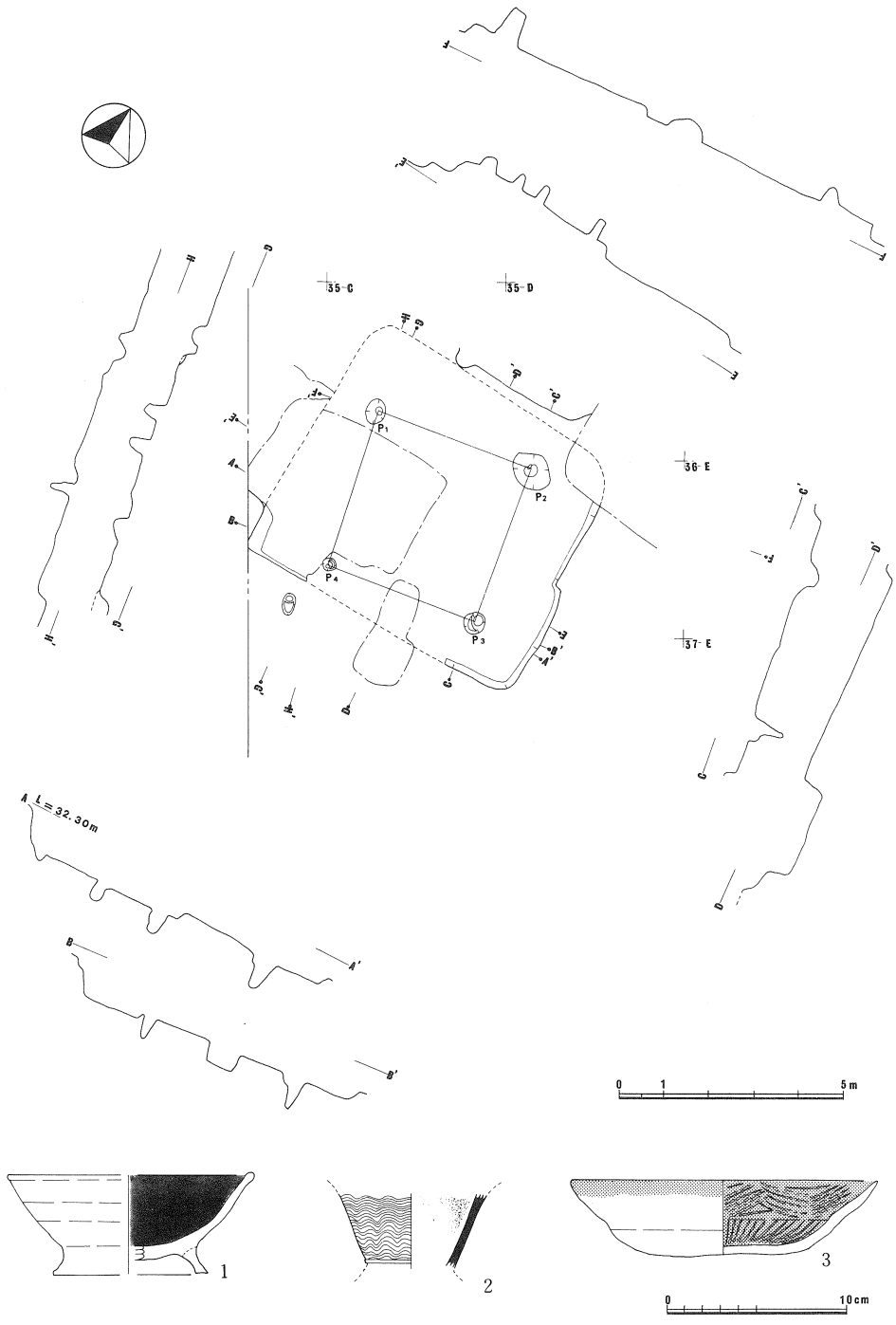
45号住居址（第97・98・99図）

本住居址は，B区，35・36－Cグリットより検出された。本住居址の検出された地区は本遺跡の調査区域内でも最も切り合い状況がはげしく，本住居址と重複する遺構だけでも，46号，47号，44号住居址と12号・13号土坑とが複雑に切り合っている。さらに，トレンチヤーによる攪乱もはなはだしく，遺構の形状にかなりの変形がみられる。規模は推定数値であるが，東西6.55m，南北5.65m前後を測れると思われる。形状は南東コーナー部から推定すると隅丸方形を呈していると思われる。

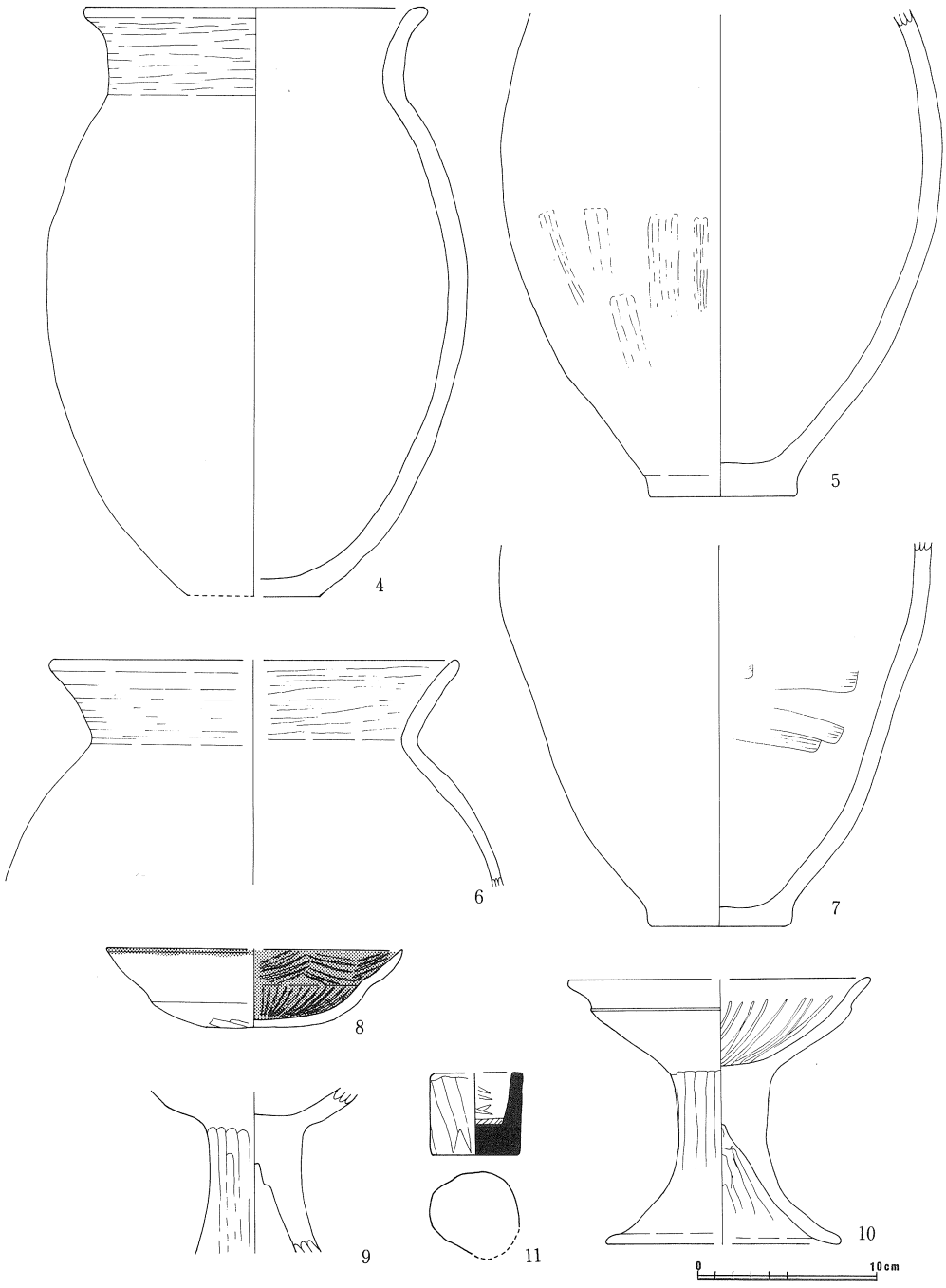
主軸方向は不明である。床面はローム層上の踏み固めとなっている。壁面は各方向に断片的なかたちで遺存しているのでその状況は，北壁は70°で立ちあがり，高さ38cm，東壁は70°で立ちあがり，高さは20cm，南壁は76°で立ちあがり，高さは27cm，西壁は80°で立ちあがり，高さは32cmを測れた。

壁溝は認められなかった。ピットは4個検出され,その規模はP1口径48cm×46cm，深さ39cm，P2口径94cm×76cm，深さ35cm，P3口径55cm×52cm，深さ75cm，P4口径28cm×28cm，深さ51cmを測れた。火床遺構は不明である。覆土は黒褐色土とローム小ブロック土が混在し，若干の焼土粒子も含まれていた。が，明確に分層することはできなかった。

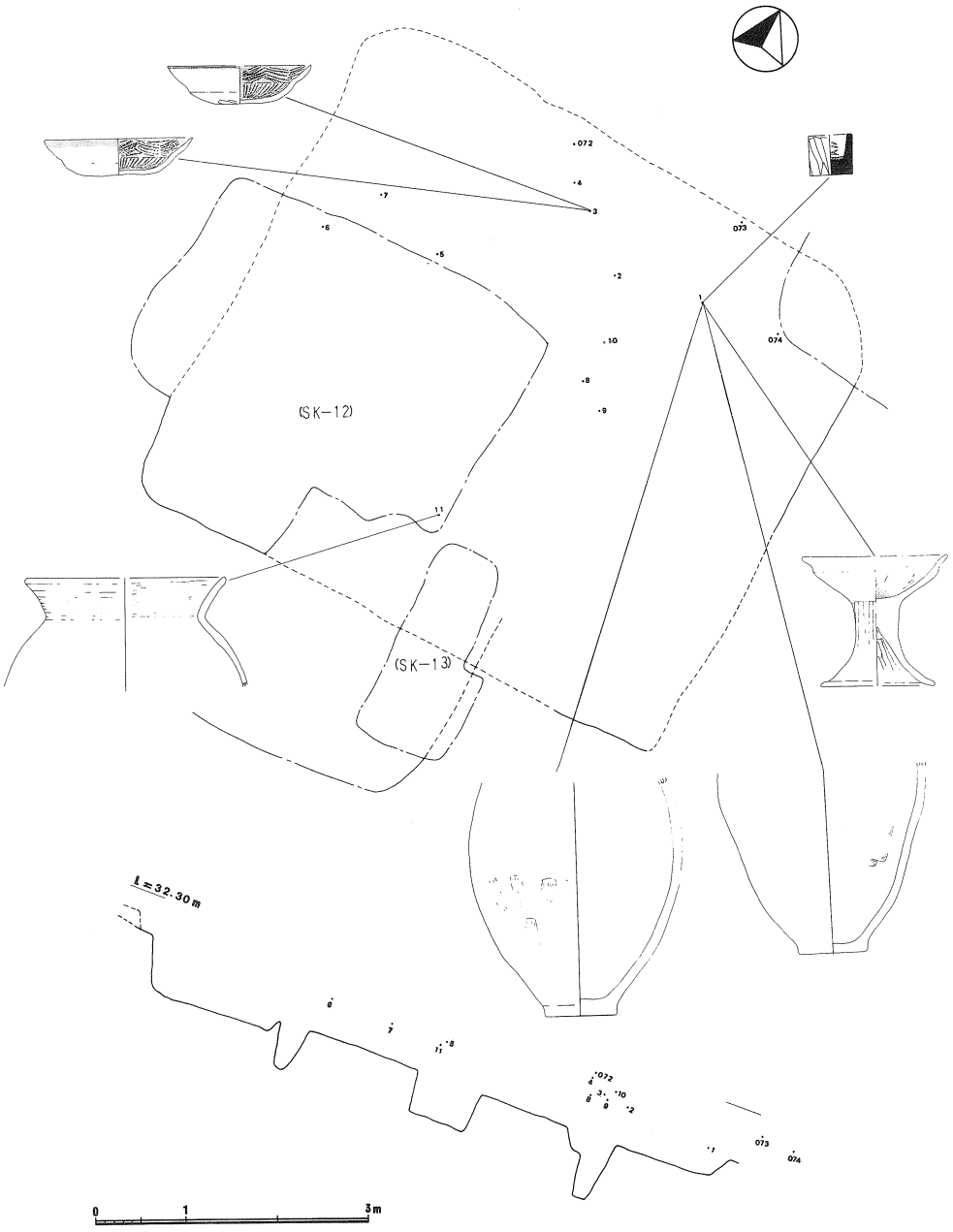
遺物は，コンテナ1箱分の量が覆土中より出土したがいずれも細片であるが，図示できるものとしては11点あった。 1 高台付坏で内面は黒色処理が施されぐ竪穴のほぼ中央部の上層から出土している。 2 須恵器の坏頸部片で，南側の覆土中より出土している。 3 坏で内面に赤彩を施している。出土位置は北側中央部から出土しているが，層位は床面より30cmほど上層となっている。また，8の坏も3の坏と重なって出土している。 4 甕の口縁部から底部までの接合品で残存率は60%である。出土位置は3，8の坏の西側30cmの位置で覆土上層から出土している。 5 甕で底部より胴上部までの破片で，中央より北東寄りの覆土中より出土しており，7，9とともに重なった状態で出土している。 6 甕の口縁部から胴上半部までの破片である。中央より南寄りの覆土中からの出土である。 7 甕の底部から胴中央部までの破片で，5，9とともに出土している。 8 坏で3と重なって出土している。 9 高坏脚部の破片で東側の覆土中からの出土である。 10 須恵器の異形土器で器種は不明である。出土位置は北東コーナー部寄りの床上面で，5，7の甕とともに出土している。 11 高坏の破片である。これも5，7，10と同位置からの出土である。



第97図　　45号住居址平面実測図・出土遺物実測図　(1)



第98図　45号住居址出土遺物実測図　(2)



第99図　45号住居址遺物分布図

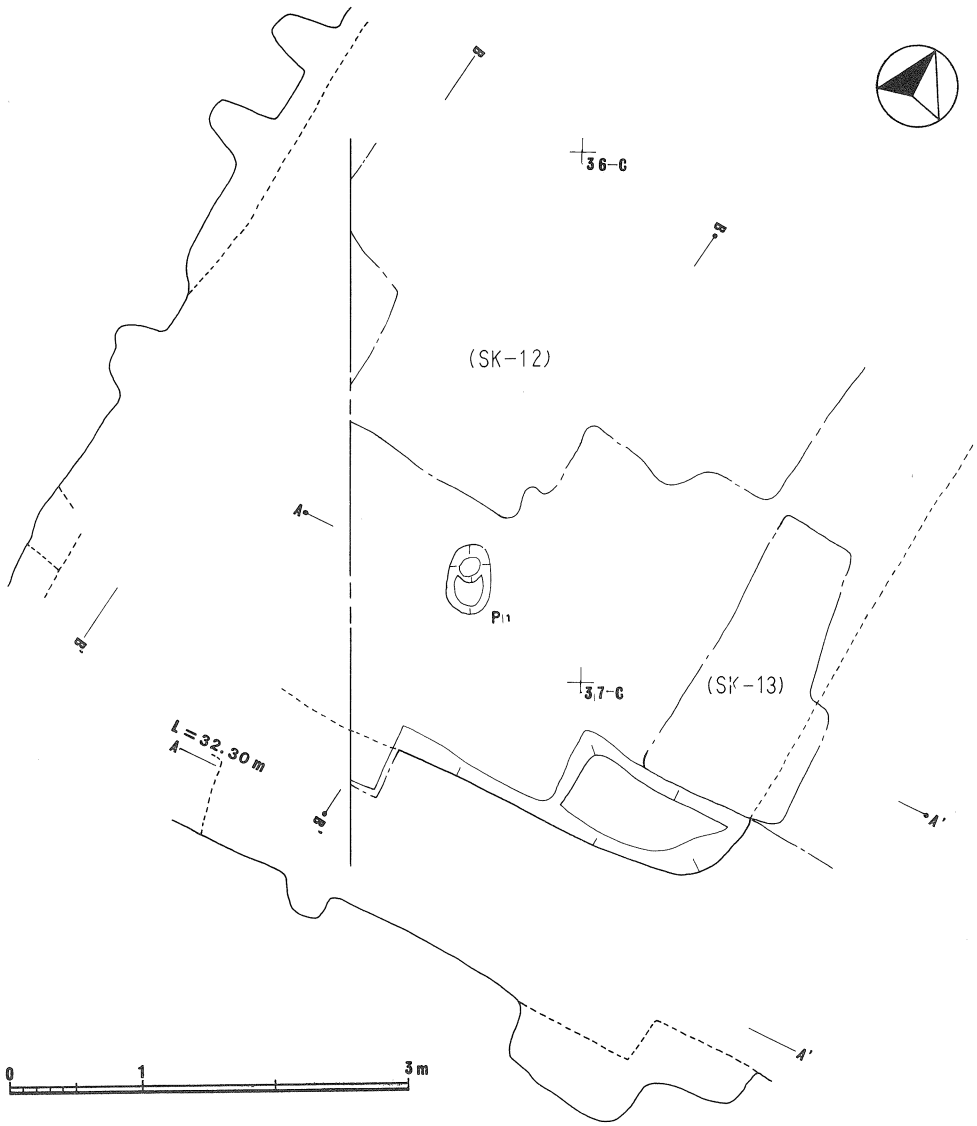
(表34)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	高台付坏 （土師器）	A 13.6cm B 8.8cm C 5.6cm	体部は外傾して立ちあがり口縁部で更に外傾して開く。高台部は「ハ」の字状に開く。	水挽き成形後，回転横ナデを施す。内面は黒色処理を施している。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
2	坏 （須恵器）	A 8.4cm B 6.6cm C 4.2cm	直線状に外反して開く口。	外面は一面に波状文が施され，内面には自然釉（灰釉）がかかる。	A 砂粒 B 褐灰色 C 良好	
3	坏 （土師器）	A 17.2cm B C 4.2cm	底部の延長上に僅かに外傾して立ちあがる体部があり，口辺部もほぼ外反ぎみに開く。	外面はナデ，内面は，四辺部が斜位のミガキを交互に，体部が縦位にミガキを施している内面と口縁部外側の一部に赤彩を施す。	A 砂粒 B 淡黄橙色 C 良好	
第98図 4	甕 （土師器）	A 19.2cm B 7.4cm C 3.3cm	頸部から口辺部にかけてはほぼ直立して立ちあがり，口縁部は外反して開く。胴部は外傾して立ちあがり，中央部辺りで直立し，上半部からしだいに内彎し頸部に至る。最大径は中央部に有す。	口辺部内外は横ナデ，胴部内外はナデを施している。	A 砂粒・砂礫 B にぶい褐色 C 普通	
5	甕 （土師器）	A 21.2cm B 8.6cm C 27.1cm	底部は平底で，大きく内彎して立ちあがる胴部。最大径は中央部に有す。 胴部はやや長胴化の傾向をみせている。	内面はナデ外面はヘラ削りが局部的にみられる。他はナデを施している。	A 砂粒・砂礫 パミス B にぶい赤褐色 C 普通	
6	甕 （土師器）	A 22.8cm B 28.0cm C 12.4cm	大きく内彎してた胴部から頸部に至り口辺部は大きくほぼ直線状に外反する。	口辺部内外面は横位のヘラナデ，胴部は内外面共にナデを施す。	A 砂粒・砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
7	甕 （土師器）	A 24 cm B 8.2cm C 21.4cm	底部から胴下半部にかけては，外傾して立ちあがり，中央部付近からはほぼ直立ぎみとなるようである。	外面はナデを施しているが，表面はかなり荒れている。内面はナデと一部ヘラ削りを施している。	A 砂粒・砂礫 B 暗赤灰色 C 普通	
8	坏 （土師器）	A 16.6cm B C 4.4cm	扁平な丸底，体部は底部から僅かに外傾して立ちあがり，口辺部に至る。 口辺部は更に外反して立ちあがり開く。	外面は底部の一部にヘラ削りを行ない，他はナデ，内面は口辺部で交互のミガキ，体部は縦位のミガキを施す。内面及び口縁部外側の一部に赤彩を施す。	A 砂粒 B 浅黄橙色（内面－赤彩） C 良好	
9	高坏 （土師器）	A 17.0cm B 13.1cm C 14.9cm	（坏部）体部が大きく外傾する。 （脚部）坏底部からほぼ直線状に下がり裾部は大きく外反して広がる。	坏部外面は横ナデ，ナデを行ない内面は縦位のミガキを施す。脚部は外面位にヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 良好	
10	高坏	A ——— B ——— C 9.1cm	脚部上端部はほぼ直線状で下方に至るにつれて外反ぎみに開く脚部	脚外面はヘラ削りを縦位に施している。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
11	円筒形 須恵器	A 5.2cm B 4.9cm C 4.6cm	平底，直立する体部。	内外面ともにナデ。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	

46号住居址（第100図）

本住居址は，Ｂ区，37－Ｂ・Ｃグリットより検出されたが，調査区域外に遺構の大半が存在するのと，12号，13号土坑によって遺構の床面などがかなり攪乱されている状態であった。

規模は不明。形状は明確には把握できない。主軸も不明。床面は遺存部においてはローム層上の踏み固めの土間となっていた。壁面は南壁が62°で立ちあがり，35cmの高さを測れた。ピットは１個が検出されたのみで規模は口径33cm×45cm，深さ32cmであった。火床遺構は不明である。覆土は暗褐色土が主体土で分層できなかった。遺物は土師器片，須恵器片が若干出土したが細片であるため図示はできなかった。



第100図　46号住居址平面実測図

47号住居址（第101・102図）

本住居址は，Ｂ区，35－Ｄ・36－Ｅグリットから検出された。

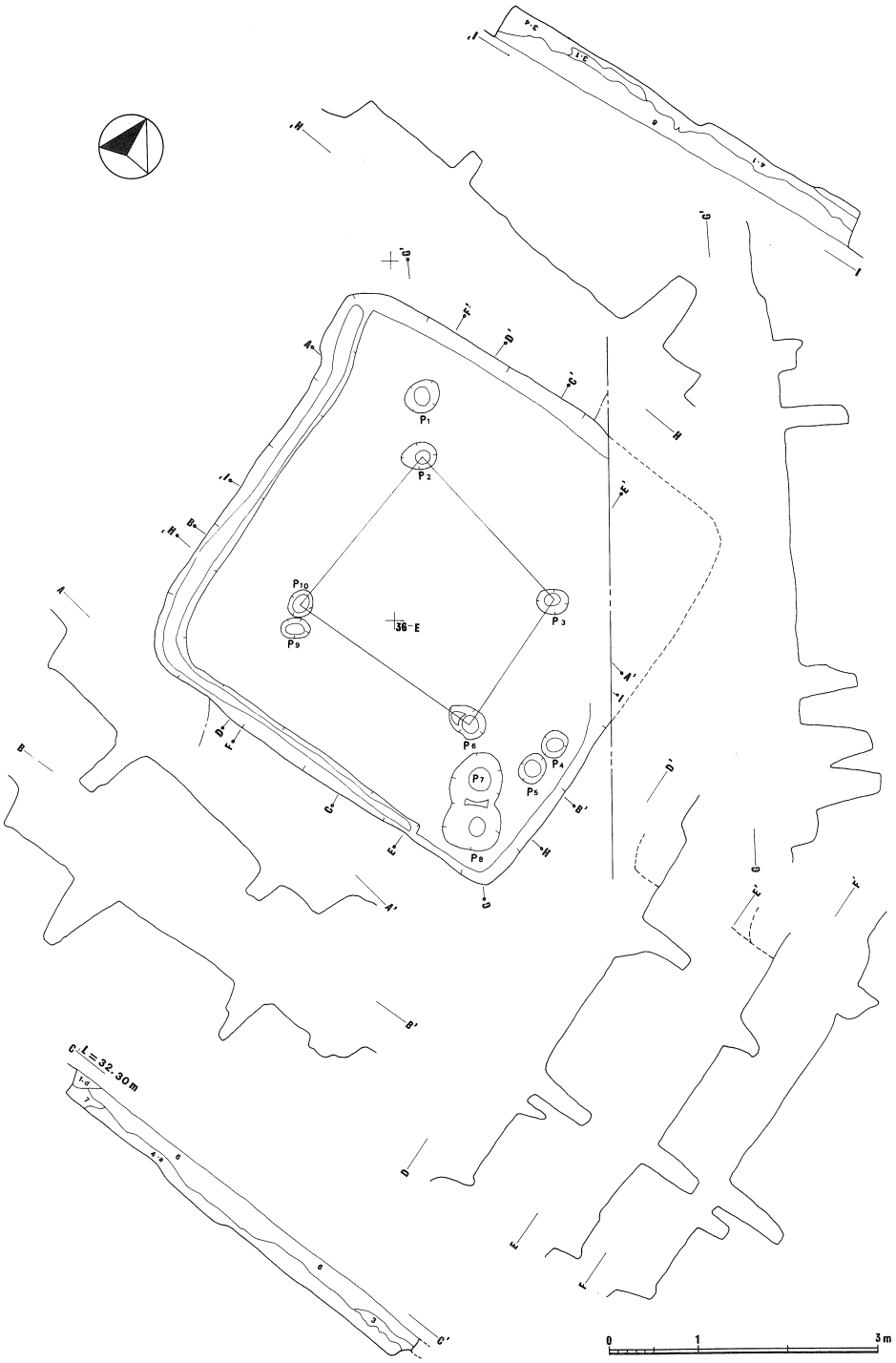
規模は南北4.75ｍ，東西4.85ｍ，形状は隅丸方形を呈している。主軸はＮ－８°－Ｅを指している。

床面は，ローム層上の堅緻に踏み固めた土間である。壁溝は西・南側から検出された。規模は西壁溝の幅15cm，深さ６cm，南壁溝の幅10cm，深さ５cmを測れた。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は60°で立ちあがり，高さは18cm，東壁は80°で立ちあがり，高さは30cm，南壁は76°で立ちあがり，高さ36cm，西壁は88°で立ちあがり，高さは44cmを測れた。ピットは本竪穴内より10個検出された。しかし，すべてが本住居に関連するものとは考えられないが，一応規模の数値については記すことにする。Ｐ1口径44cm×40cm，深さ24cm。Ｐ2口径43cm×48cm，深さ73cm。Ｐ3口径33cm×33cm，深さ40cm，Ｐ4口径32cm×31cm，深さ94cm，Ｐ5口径34cm×30cm，深さ12cm。Ｐ6口径48cm×32cm，深さ68cm。Ｐ7口径42cm×52cm，深さ75cm。Ｐ8口径65cm×50cm，深さ85cm。Ｐ9口径26cm×21cm，深さ33cm。Ｐ10口径30cm×30cm，深さ85cmを測れた。Ｐ2，Ｐ3，Ｐ6，Ｐ10は本住居のメイン柱の柱穴と推定できる。Ｐ7とＰ8は本住居址の土坑的性格を有する遺構と思われたが，形状，セクションなどから判断すると他遺構のピットである可能性が強い。火床遺構は検出されなかった。覆土は大別すると２層に分層でき，上層は暗褐色土あるいは黒褐色土が主体土で下層は褐色土が主体土となっている。

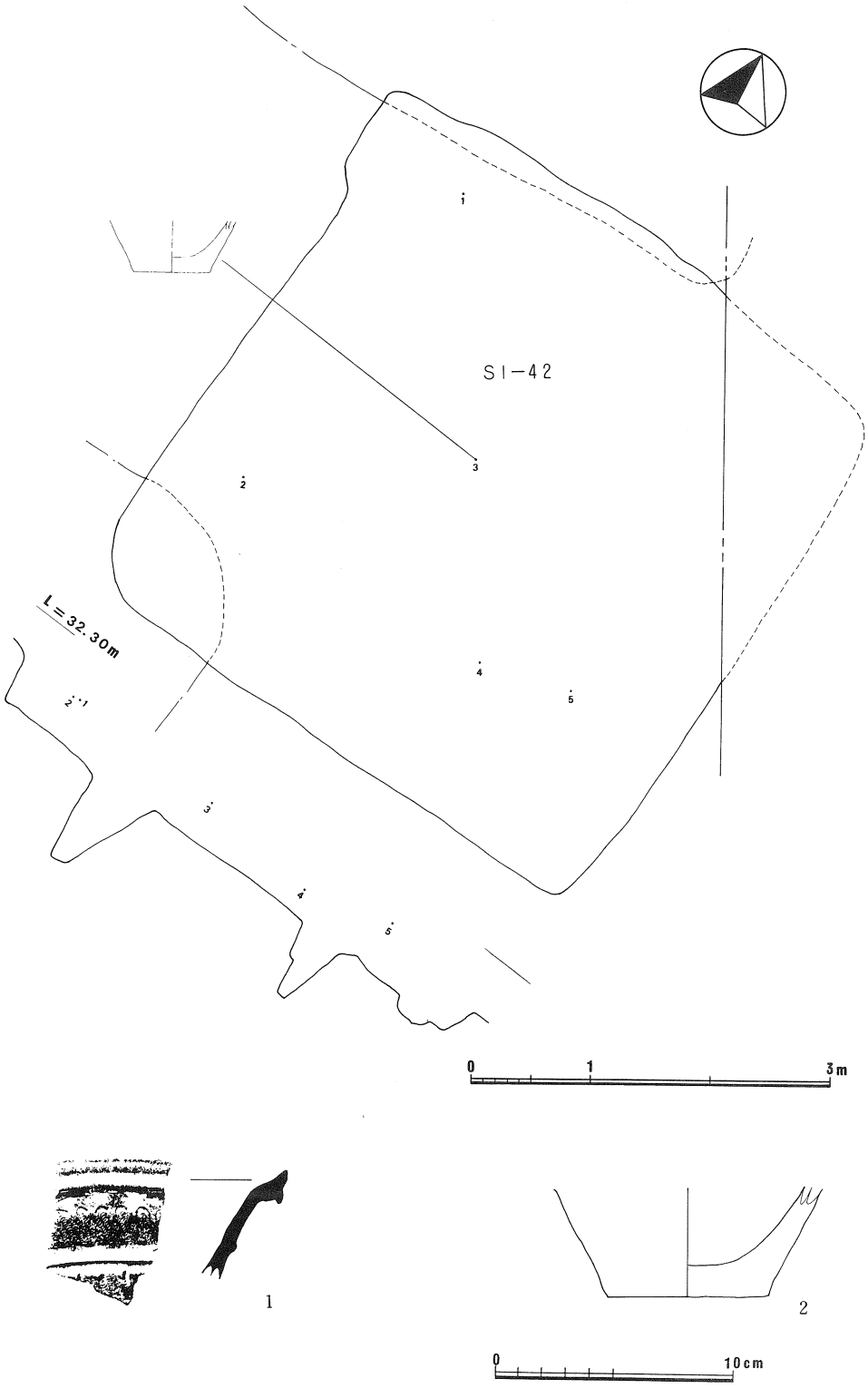
遺物は土師器の細片が若干出土したが，図示できるものは２点あり，１は須恵器の器台器受部の口縁部片で，覆土中より出土している。２甕の底部片で，本住居址の中央床面より出土している。

(表35)　　Ａ 口径　Ｂ 底径　Ｃ 現高　　Ａ 胎土　Ｂ 色調　Ｃ 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第102図 1	器台（器受部） （須恵器）	Ａ ―― Ｂ ―― Ｃ 4.4cm	外器面には櫛歯状工具による波状文が施されている。		Ａ 砂粒 Ｂ 灰色 Ｃ 良好	
2	甕 （土師器）	Ａ ―― Ｂ 6.8cm Ｃ 4.5cm	外傾して立ちあがる胴下半部。	外面には局部的にヘラミガキを施す。	Ａ 砂粒・砂礫 Ｂ 褐色 Ｃ 普通	



第101図　47号住居址平面実測図



第102図　47号住居址遺物分布図・出土遺物実測図

48号住居址（第103・104図）

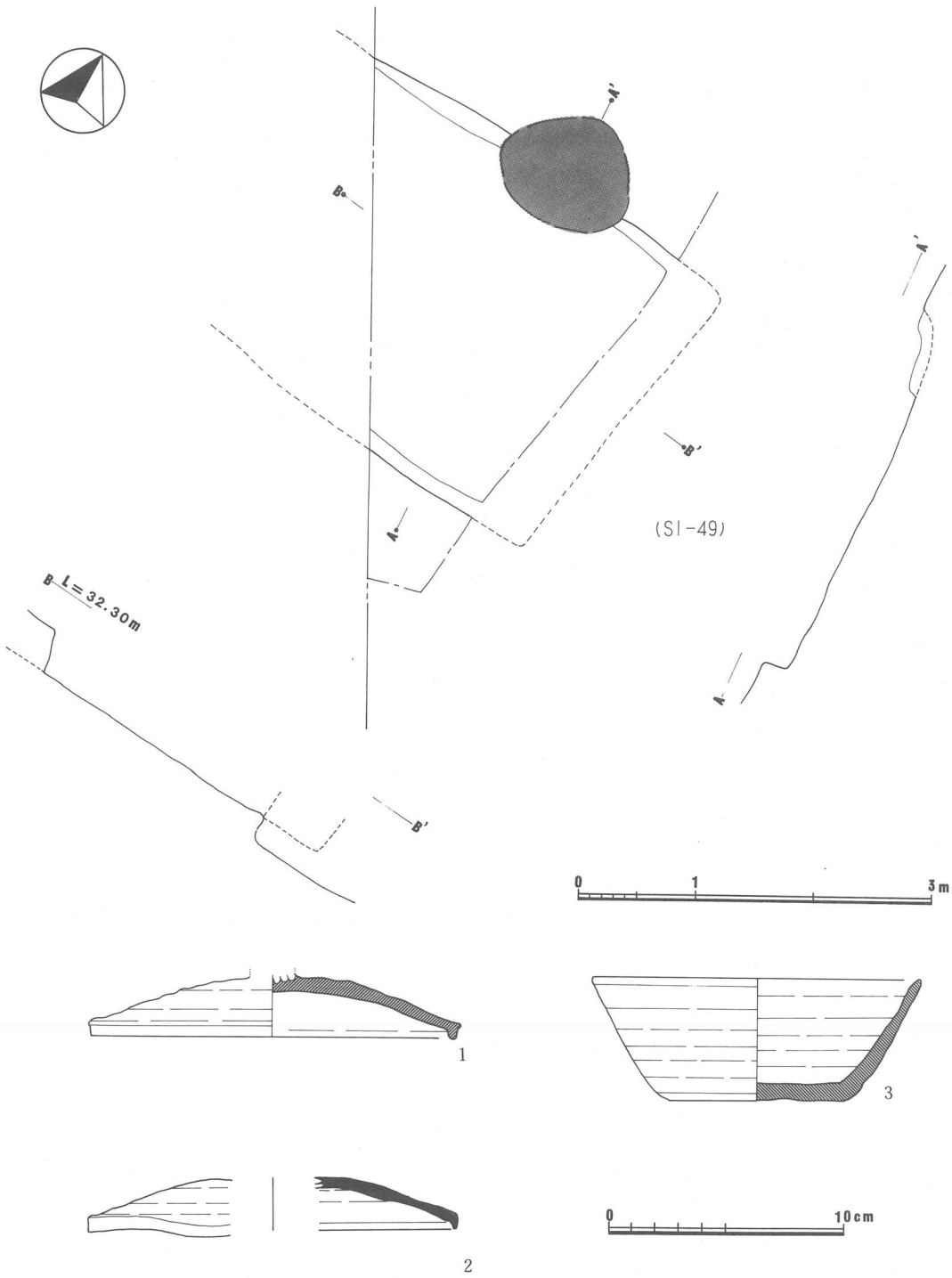
本住居址は，Ｂ区，39－Ｂグリットより検出された。東側の壁部は49号住居址と重複していたため壁面を明確に検出することができなかった。西側の一部は調査区域外にあたるため未確認である。

規模は南北が2.63ｍ，東西は不明，形状は方形と推定できた。主軸は，Ｎ－７－Ｅを指している。床面は全面的に貼り床を施しており，暗褐色土を堅緻に踏み固めた平坦な床となっている。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は83°で立ちあがり，高さは25cm。南壁は84°で立ちあがり，高さは25cm。東・西壁は不明である。壁溝は検出できず，ピットも検出されなかった。火床遺構は北壁にカマドが確認された。規模は両袖間の幅が89cm，焚口と奥壁の幅は74cm，高さは26cmを測れた。構築材は粘土質の材料ではなく，焼土塊状の構築材であったと思われる。覆土は暗褐色土が単層で堆積しており，焼土粒子もかなり含まれていた。

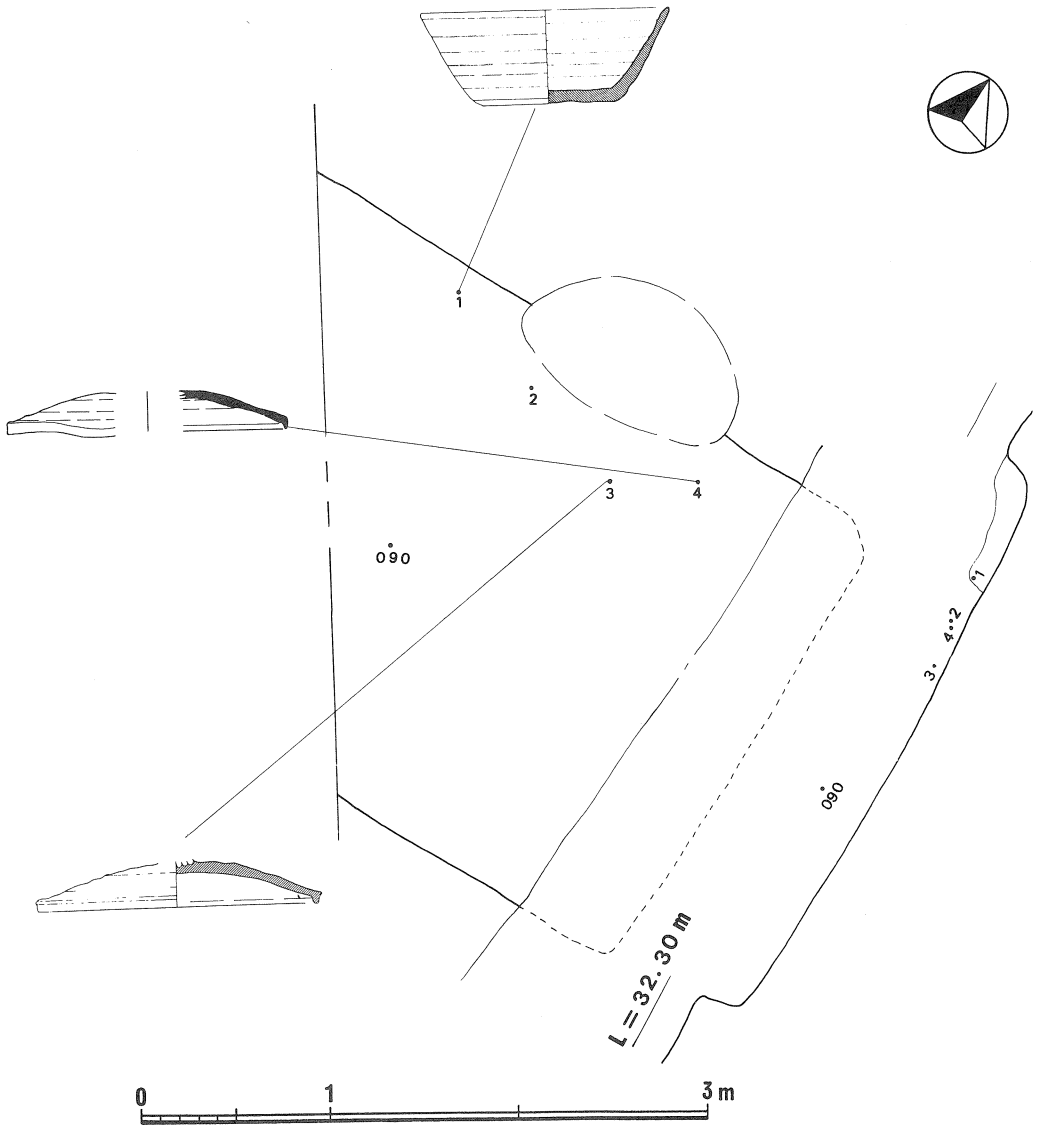
遺物は，土師器，須恵器，土師質須恵器の小破片が若干出土しているが，図示できるものは３点であった。　1　土師質須恵器の坏蓋片で，竪穴中央部の覆土中より出土した。　2　須恵器の坏蓋片で，カマド前東側の床面上より出土している。　3　土師質須恵器の坏でカマド西側の床面上の床面上から出土した。

(表36)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図1	坏蓋（土師質須恵器）	A 基部径 15.6cm B C 2.6cm	つまみ部は欠損，上端面から大きく開く基部となる。かえり部はやや内傾して残る。	水挽き成形後回転横ナデを施し，上端部のつまみ周辺部はヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 良好	
2	坏蓋（須恵器）	A 15.8cm B C 2.3cm	かえりが消滅する。	回転横ナデ。	A 砂粒・雲母 長石 B 灰色 C 普通	
3	坏（土師質須恵器）	A 14.0cm B 7.8cm C 5.2cm	平底。体部は直線状に外傾して立ちあがる。	水挽き成形。横ナデを施す。	A 砂粒・パミス B にぶい橙色 C 普通	



第103図　48号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第104図　48号住居址遺物分布図

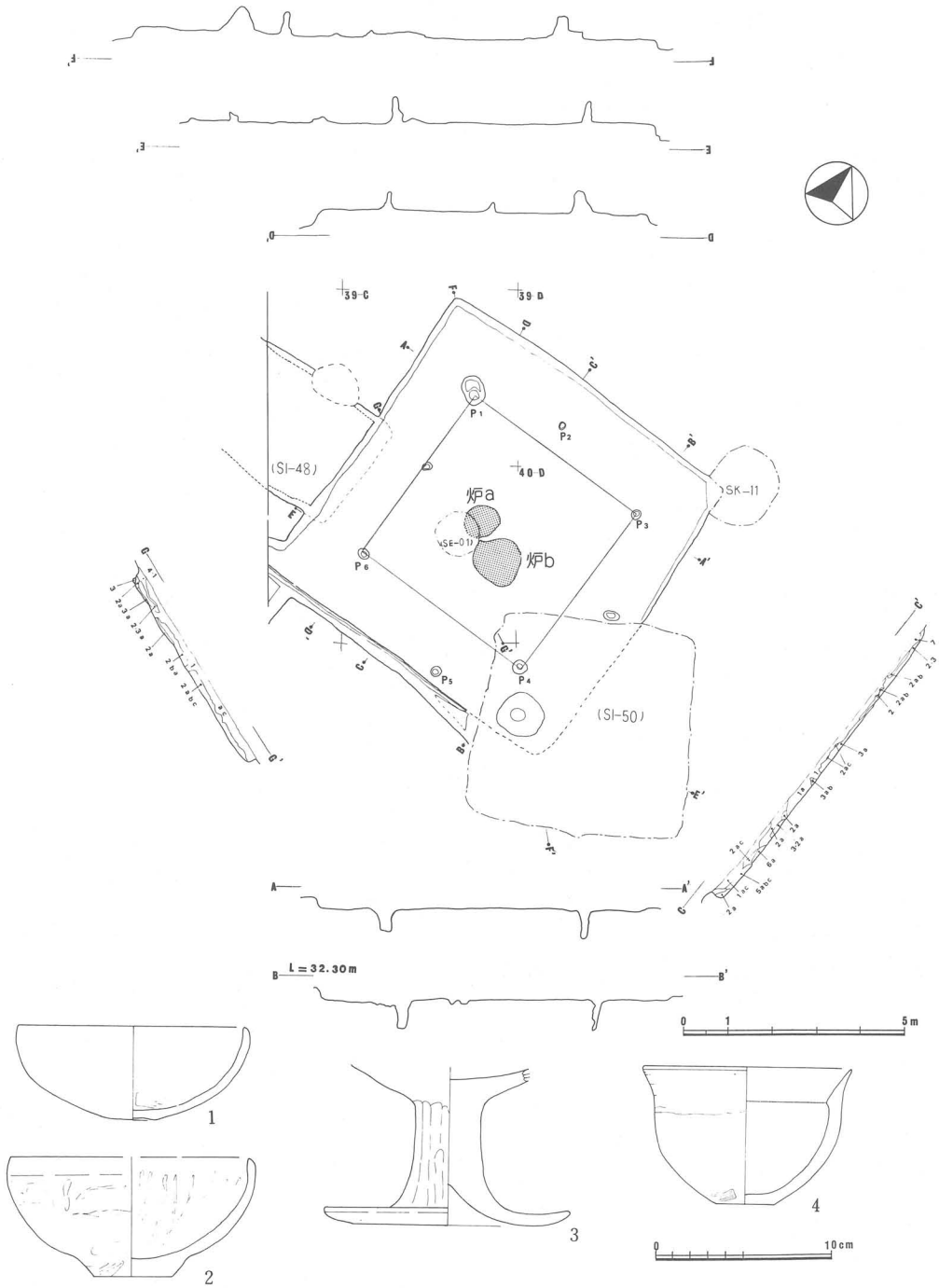
49号住居址（第185・106・107・108図）

本住居址は，Ｂ区，39－Ｃ，40－Ｃ・Ｄグリットより検出された。本住居址は48号・50号住居址と切り合っているほか，床面中央部には井戸遺構（ＳＥ－01）が切り込んで構築されていた。

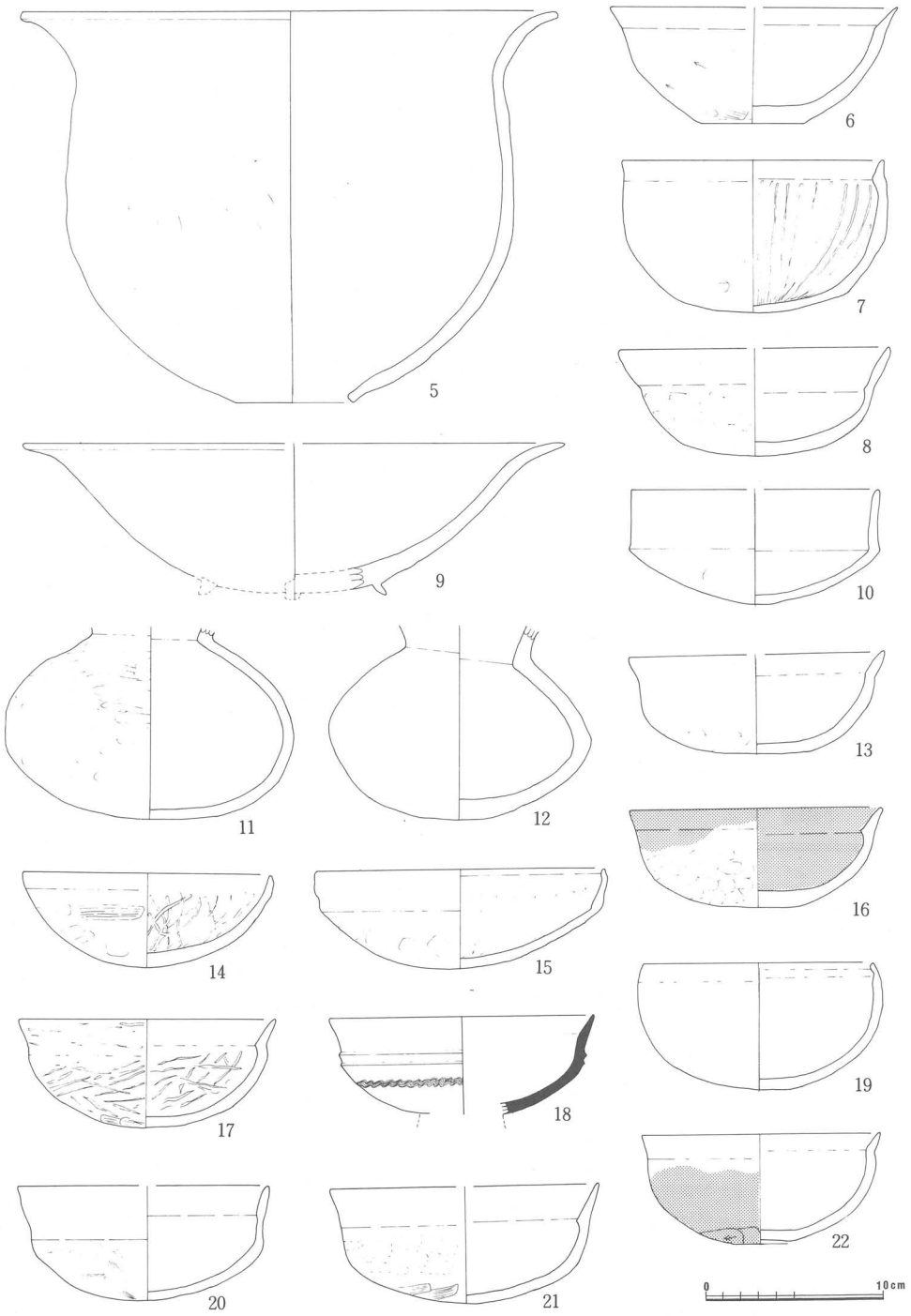
規模は南北が7.83ｍ，東西は7.60ｍで形状は方形を呈している。主軸はＮ－10°－Ｗを指している。床面はローム層上を堅緻に踏み固めた床面で，ほぼ平坦な土間になっている。壁溝は検出されなかった。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁が71°で立ちあがり，高さは20㎝。東壁は54°で立ち

あがり，高さは12cm。南壁は68°で立ちあがり，高さは38cm，西壁は77°で立ちあがり，高さは33cmを測れた。ピットは6個検出され，規模は，P1口径70cm×45cm，深さ33cm。P2口径15cm×15cm，深さ54cm。P3口径22cm×20cm，深さ72cm。P4口径23cm×20cm，深さ46cm。P5口径20cm×19cm，深さ20cm。P6口径22cm×20cm，深さ55cmを測れた。P1，P3，P4，P6は本住居址のメイン柱の柱穴と考えられる。南東コーナー部には貯蔵穴が検出された。形状は隅丸方形で底部は平底，規模は東西が98cm，南北は73cm，深さ64cmを測れた。遺物の出土はなかった。火床遺構は中央部に2カ所の炉が検出された。東側の炉Aの規模は東西が85cm，南北は99cmで8cmほど床面が掘り込まれている。西側の炉Bの規模は東西が1.52m，南北は95cmで床面が15cmほど掘り込まれている。いずれも焼土，炭化物などが混入され，ロームブロックも若干含まれている。なお炉A，BともにSE－01によって一部が切られている。覆土は大別して2層に分層でき，上層は黄褐色土，下層は褐色土と黒褐色土が主体土となっている。堆積状況は部分的に攪乱がみられたが，ほとんどが自然堆積の状況を示していた。遺物は土師器片が多量に出土し，須恵器片も少量ではあるが出土している。出土状況はかなり良好でほとんどが床直上面より出土し，接合可能なものが多く，図示可能なものとして22点あった。 1 坏の完形品で北壁際の中央部の床面上より出土している。 2 坏片で台状の底部を有す破片で，北東コーナー部の床上面より出土している。 3 高坏の脚部片で北東側床上面より出土している。 4 小型鉢で南西側床面より出土している。 5 甑のほぼ完形品で，東側壁際の中央部の覆土上層より出土している。 6 坏の破片で北西コーナー床上面より出土した破片を接合したものである。 7 坏の完形品で北西コーナー部からの出土と6の坏片と重なって出土している。 8 坏のほぼ完形品で北東コーナー部より出土している。 9 浅鉢形の土師器片で底部には小型の貼り付脚が3個貼り付けられている。出土位置は北東コーナー部の床上面より出土している。 10 坏で北壁中央部付近から出土した破片を接合したものである。 11 坩で10の坏片とともに出土している。 12 坩でこれも北壁中央部の壁際から出土している。 13 坏で中央部の覆土中より出土した破片を接合したものである。 14 坏で南西コーナー部の床面より出土した破片を接合したものである。 15 坏で北壁際のやや西寄りの床面から出土している。 16 坏で南西側コーナー部の床面より出土した完形品である。 17 坏で南西コーナー部の床面から出土した破片と覆土中より出土した破片とを接合したものである。 18 須恵器の高坏で坏部の破片を接合したもので，北側床面より出土している。なお，この坏に接合できた破片は，本住居址の北側11mのところに位置する47号住居址から出土した破片と接合できた。本住居址と47号住居址は出土遺物からみると，ほぼ同時期の住居址であったと思われる。 19 坏で竪穴中央部の床面から出土している。 20 坏で北側中央部の床面から出土した。 21 坏で北側中央部の覆土中より出土している。 22 坏で北側床面の西寄り部分から出土している。本住居址より出土している遺物類，とくに土師器はその大半が北側ないし西

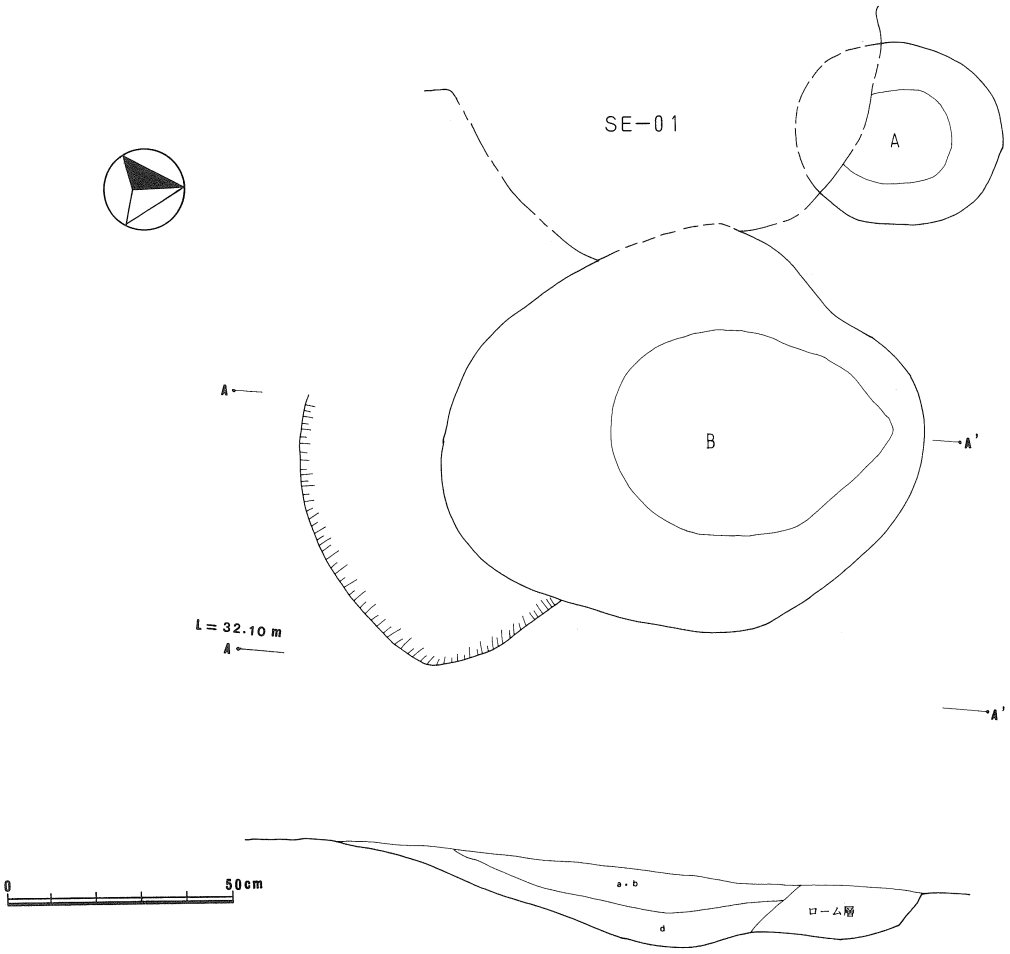
側の壁際より出土しており，北東コーナー部の床面からはとくに集中的に出土している。なお、本遺跡で検出された住居址のなかでは，住居址１軒あたりからの土器の出土量は最も多く出土している。



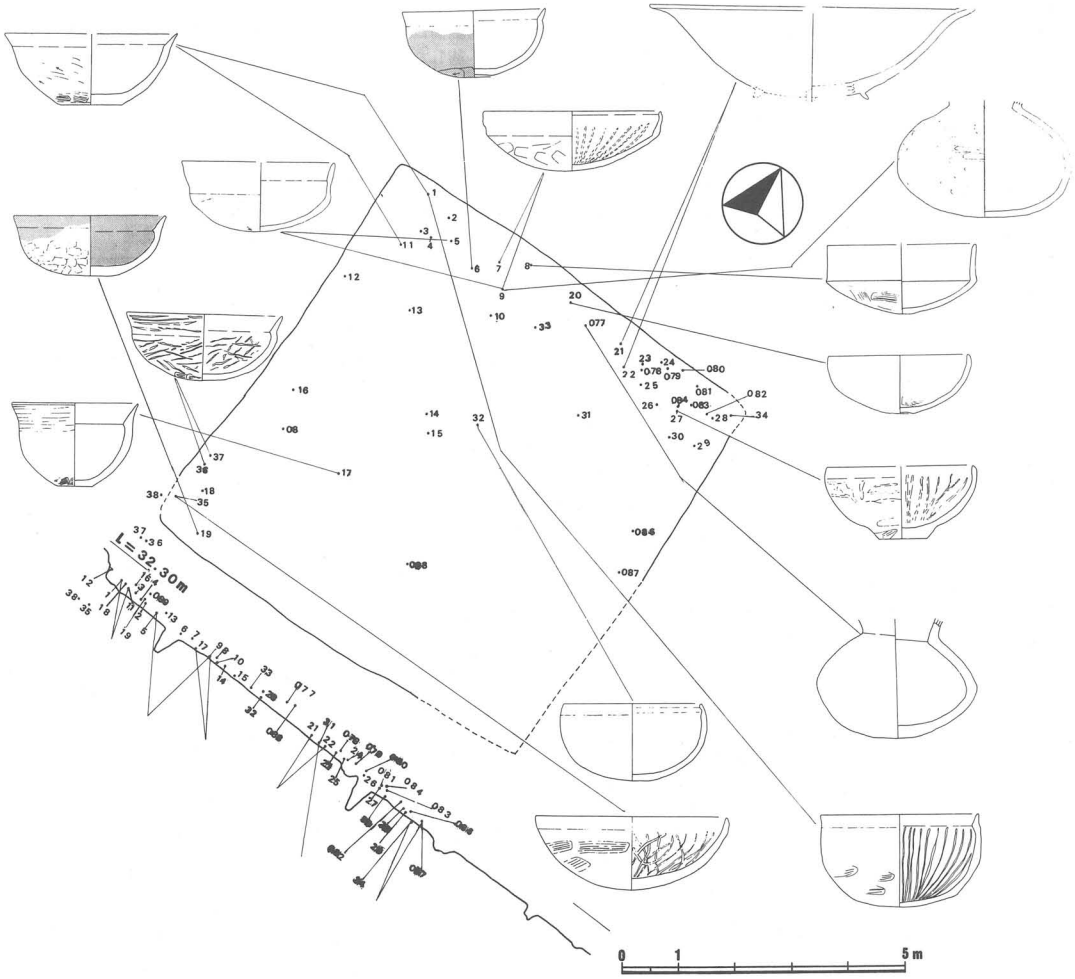
第105図　49号住居址平面実測図・出土遺物実測図　(1)



第106図　49号住居址出土遺物実測図　(2)



第107図　49号住居址炉　平面実測図



第108図　49号住居址遺物分布図

(表37)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 1	坏 (土師器)	A 13.0cm B C 5.1cm	丸底。底部から体部にかけては半球状に内彎して立ちあがり，口縁部は直立して開く。	内面はヘラ削り，外面はナデを施す。	A 砂粒・石英 B 橙色 C 良好	
2	坏 (土師器)	A 13.8cm B 4.6cm C 6.8cm	上げ底。体部は内彎して立ちあがり，口縁部は内傾ぎみに開く。	内面はミガキを施し，外面はヘラ削りの後，ミガキに近い施しを行なっている。	A 砂粒 B 明橙色 C 普通	
3	高坏 (土師器)	A B 14.2cm C 9.0cm	坏部は欠損(底部の一部は残存)脚部はほぼ直立して立ちあがり裾部は大きく横位に広がり端部は僅かに上反している。	脚部外面は縦位にヘラ削りを行ない裾部の内外はナデを施している。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
4	坏 (土師器)	A 11.8cm B 3.4cm C 7.8cm	平底。体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部では外反して開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内外はナデを施す。底部外面の一部にはヘラ削り痕あり。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	

第106図 5	坏 （土師器）	A 30.6cm B 孔径6.8cm C 22.2cm	底孔部から大きく内彎して立ちあがる胴部で中央部あたりからほぼ直立して立ちあがり，口辺部に至る。口辺部は大きく外反して，口縁部で開く。	内面はナデ，外面はヘラ削りを施した後，ナデを施す。	A 砂粒 B にぶい橙色 （外面は黒色） C 普通	
6	坏 （土師器）	A 16.2cm B 5.5cm C 6.6cm	平底。体部は内彎ぎみに立ちあがり口辺部は外反して開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラ削りを行なっている。底部はヘラ削りによって調整されている。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
7	坏 （土師器）	A 14.8cm B C 8.6cm	扁平な丸底。底部から大きく外傾したのち内彎ぎみに立ちあがる体部で口縁部は直立して開く。	口縁部内外は横ナデ，体部内面は縦位にミガキを施す。外面はナデと一部ヘラ削り痕を残す。	A 砂粒・石英 雲母 B にぶい赤褐色 C 普通	
8	坏 （土師器）	A 15.4cm B C 6.1cm	扁平な丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部は直線状に外反して開く。	体部外面はヘラ削り，内面はナデ，口辺部内外は横ナデを施す。	A 砂粒 B 赤褐色 C 良好	
9	鉢（浅鉢） （土師器）	A 30.8cm B C 8.4cm	底部は扁平な丸底。体部は大きく外傾して立ちあがり，口縁部はほぼ水平方向に外反して開く。底部には3個の小脚を付けていたものと思われる。（現在1個）	内外面共にナデを施す。	A 砂粒 B 淡橙色 C 普通	
10	坏 （土師器）	A 14.1cm B C 6.6cm	丸底。大きく内彎して立ちあがる体部から口辺部はほぼ直立して立ちあがって開く。	口辺部内外は横ナデ，体部外面はヘラ削り，内面はナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
11	坩 （土師器）	A 6.5cm B C 10.4cm	底部は扁平な底部で，胴部は大きく内彎して立ちあがり，中央部で大きく張り出している。口辺部以上は欠損。	外面はヘラ削り，内面はナデを施している。器面全体に〝つや〟があり全体的に赤褐色の色調を出している。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 良好	
12	坩 （土師器）	A 不明 B C 11.0cm	丸底。胴部は大きく張り出した胴部である。口辺部以上は欠損。	内外面共にナデを施す。	A 砂粒 B 赤褐色 C 良好	
13	坏 （土師器）	A 14.2cm B C 5.7cm	底部から大きく内彎して立ちあがる体部で、口辺部は更に外反ぎみに開く。	内外面共にナデを施し，底部外面にはヘラ削りが認められる。	A 砂粒 B 赤褐色 C 良好	
14	坏 （土師器）	A 14.2cm B C 5.3cm	丸底。大きく内彎して立ちあがり，口縁部はほぼ直立して開く。	体部外面はヘラ削り，内面はナデの後，ミガキ（暗文）を施す。	A 砂粒・砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
15	坏 （土師器）	A 16.4cm B C 5.7cm	丸底。体部は大きく内彎して立ちあがる体部で，口辺部はほぼ直立して開く。	口辺部外面は横ナデ，体部外面はヘラ削り，内面は縦位のミガキを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
16	坏 （土師器）	A 14.3cm B C 5.6cm	扁平な丸底。体部は内彎して立ちあがって，口縁部はやや外反ぎみに開く。	外面はヘラ削り，内面はナデ。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 良好	
17	坏 （土師器）	A 14.6cm B C 6.2cm	丸底。底部から体部にかけてほぼ半球状に内彎して立ちあがり口辺部は直線状に外反して開く。	内外面共にナデを行なった後ミガキを施している。底部外面の一部にはヘラ削りを施す。	A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 良好	

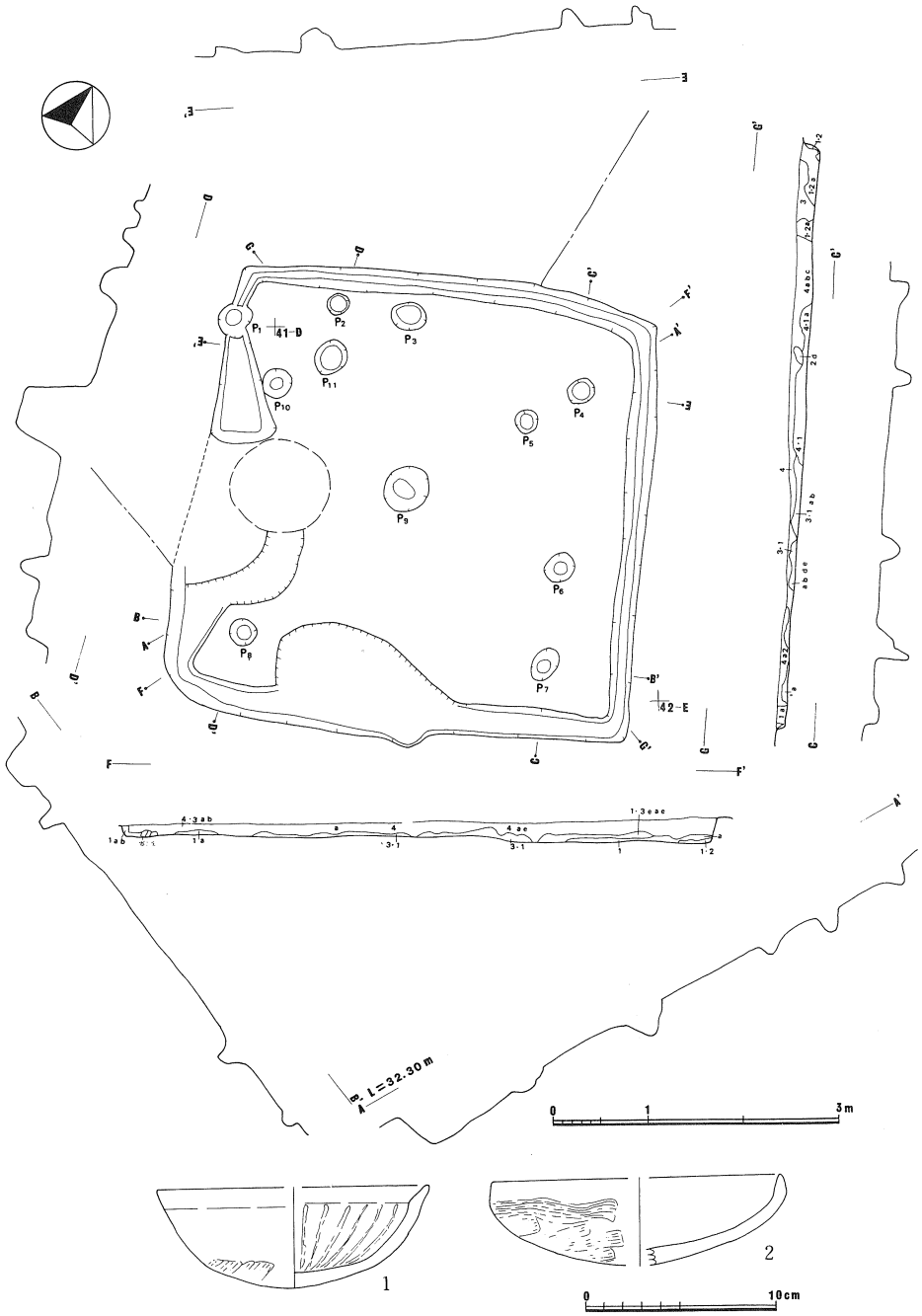
18	高坏(坏部) (須恵器)	A 15.0cm B C 5.6cm	脚部以下欠損。口辺部はやや外反ぎみに開く。	体部中央には2条の隆線を残し，その下位には櫛歯状工具による波状文を施す。	A 砂粒 B 灰白色 C 良好	
19	坏 (土師器)	A 13.0cm B C 7.2cm	丸底。ほぼ半球状を呈す。体部で大きく内彎する口縁部はやや内傾して開く口縁部の内側にはナデによる凹帯を周回させている。	口辺部内外は横ナデ，体部外面はヘラナデ，内面はナデを施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 普通	
20	坏 (土師器)	A 14.2cm B C 6.4cm	丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり，口辺部では僅かに外傾ぎみに立ちあがって開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内面はナデ，外面はヘラ削りの後ナデを施す。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 普通	
21	坏 (土師器)	A 15.2cm B C 6.7cm	丸底。底部から大きく外傾して立ちあがる体部で，口辺部はやや外反ぎみに開く。	口辺部内外面体部内面はナデを行ない，体部外面はヘラ削りの後ナデを施している。底部にはヘラ削りを施している。	A 砂粒 B 赤褐色 C 良好	
22	坏 (土師器)	A 13.5cm B 3.5cm C 6.2cm	ヘラ削りによる底部，ほぼ半球状を呈す体部で大きく内彎する口辺部は僅かに外反して開く。	口辺部内外は横ナデ，体部内外はナデを行ない，底部外面にはヘラ削りを施す。外面の一部には赤彩を施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	

50号住居址（第109・110図）

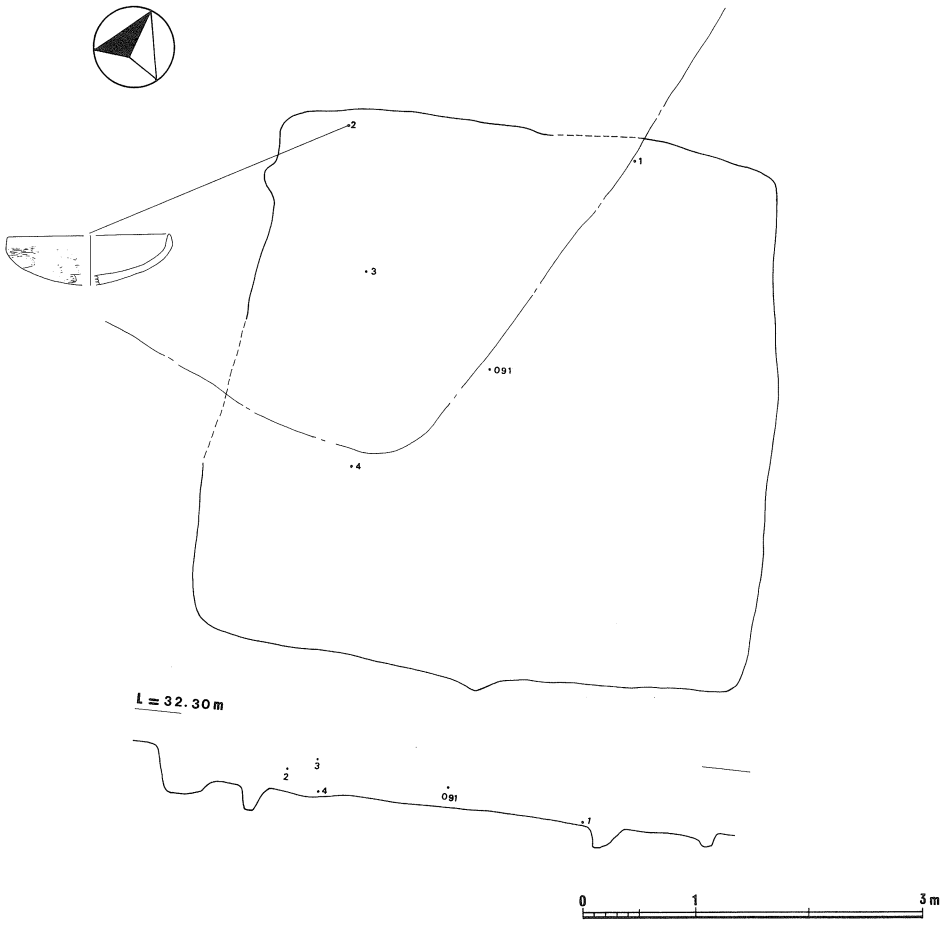
本住居址は，B，41－Dグリットより検出された。西側の一部は49号住居址と重複しており，切り合い状況からみると，本住居址が49号住居址を切っていることがわかった。規模は，南北が4.84m，東西は5.03mで形状はほぼ方形を呈している。主軸はN－23°－Wを指している。床面はローム層上を堅緻に踏み固めた床で，局部的に貼り床を施している。壁溝は四方向から検出されているが，西側は49号住居址との重複もあり，明確な規模，形状は不明であった。規模は北壁溝の幅17cm，深さ9cm。東壁溝の幅18cm，深さ11cm。南壁溝の幅13cm，深さ7cmを測れた，壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁は68°で立ちあがり，高さは9cm，東壁は70°で立ちあがり，高さ6cm，南壁は80°で立ちあがり，高さ28cm。西壁は南端に一部確認され，その規模は，82°で立ちあがり，高さは36cmを測れた。ピットは11個検出された。規模は，P1口径40cm×29cm，深さ27cm。P2口径19cm×21cm，深さ16cm。P3口径39cm×37cm，深さ22cm。P4口径20cm×20cm，深さ21cm。P5口径23cm×27cm，深さ14cm。P6口径28cm×30cm，深さ23cm。P7口径30cm×34cm，深さ21cm。P8口径20cm×24cm，深さ28cm。P9口径45cm×41cm，深さ28cm。P10口径21cm×23cm，深さ26cm。P11口径26cm×23cm，深さ23cmを測れた。本住居址のメイン柱の柱穴はP11，P4，P7，P8が推定されるが，P8については疑問が残らないでもない。火床遺構は検出されなかった。覆土は大別して2層に分層でき，上層は褐色土，下層は黒褐色土と褐色土が主体土となっている。全体的には自然堆積土と観察できたが，覆土上層はかなり，流出していると思われた。

遺物は土師器の細片が多く，図化できたものは，2点のみであった。 1 坏で覆土中より出土した

½ほどの破片である。 2 坏で北西コーナー部の床面より出土した½ほどの破片である。1については本住居址に伴う土師器として図化したが，出土状況および遺構の切り合い関係からみて，49号住居址の土器と思われる。



第109図　50号住居址平面実測図・出土遺物実測図



第110図　50号住居址遺物分布図

(表38)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図	坏 （土師器）	A 14.4cm B C 5.3cm	丸底。体部は大きく内彎して立ちあがり，口縁部もほぼ外傾して開く。体部口縁部の接合部内面には明瞭な稜を有す。	体部は外面にヘラ削りを施し，内面には縦位にミガキを施している。	A 砂粒 B 橙色 C 良好	
2	坏 （土師器）	A 15.4cm B C 4.6cm	内彎して立ちあがる体部で，口縁部はほぼ直立して開く。	内面は回転横ナデを施し，外面はヘラ削りを行なっている。	A 砂粒 B 明赤褐色 C 良好	

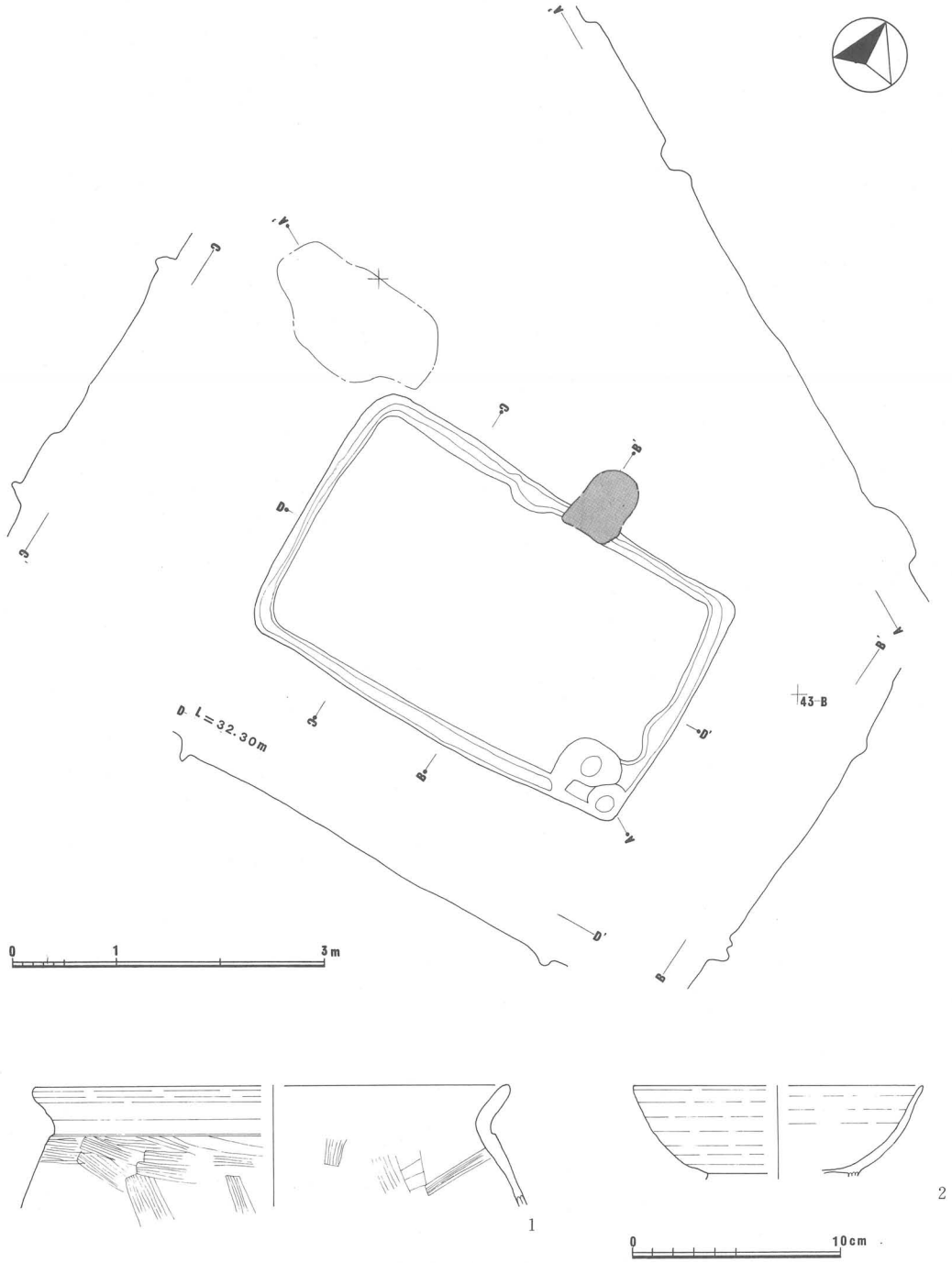
51号住居址（第111図）

本住居址は，Ｂ区，42－Ｃグリットより単独に検出され，切り合い関係はない。規模は，南北が2.63ｍ，東西は4.10ｍを測れ，形状は隅丸長方形を呈している。主軸はＮ－5°－Ｅを指している。

床面はローム層上をかなり堅緻に踏み固め，ほぼ平坦な床である。壁溝は四方向より検出され，規模は，北壁溝の幅12cm，深さ７cm。東壁溝の幅16cm，深さ９cm。南壁溝の幅15cm，深さ９cm。西壁溝の幅12cm，深さ９cmを測れた。壁面の立ちあがり状況は北壁は74°で立ちあがり，高さ８cm。東壁は本住居址の立地地形が斜面となっているため，流出して不明。南壁は66°で立ちあがり，高さは８cm，西壁は74°で立ちあがり，高さは13cmで測れた。ピットは検出されなかった。火床遺構は北壁中央よりやや東寄りの部分からカマドが検出された。規模は両袖間の最大幅が70cm，焚口部から煙り出し部までの幅が84cm，高さが15cmで天井部はほとんど削られていた。構築材については焼土および焼土ブロックのみが検出されただけで粘土・砂粒などはみられなかったため，この焼土ブロック（塊）が構築材の一部ではないかと考えられた。覆土は黒褐色土が主体土で分層はできなかった。遺物は土師器の細片が数点出土し，図示できたものは２点あった。　1　甕の口縁部片で覆土中より出土した。　2　高台付坏の破片で，高台部は欠損している。これも覆土中よりの出土である。

(表39)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

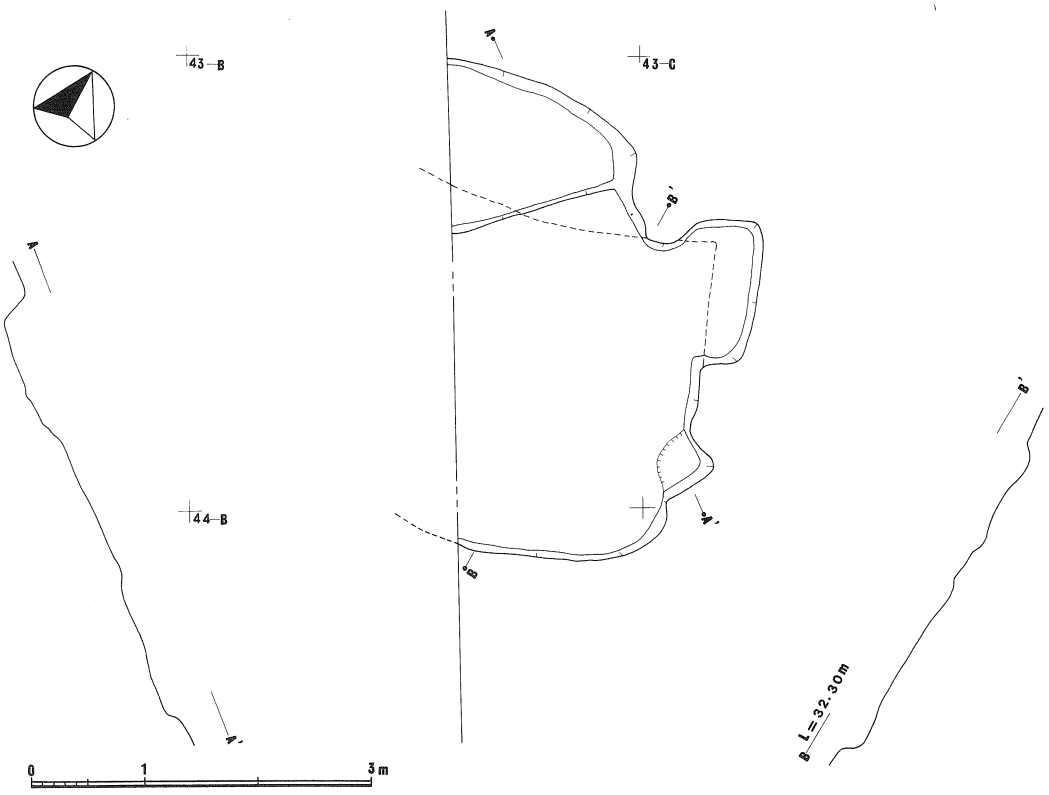
図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 1	甕 （土師器）	A 23.0cm B ―― C 5.8cm	大きく外反する口辺部。	口辺部内外面はナデを施す。頸部外面はヘラ削り痕を残す。	A 砂粒・長石 B にぶい橙色 C 普通	
2	高台付坏 （土師器）	A 14.0cm B 7.5cm C 4.2cm	体部からはゆるく内彎しながら立ちあがって開く口縁部にいたる。高台部は欠損。	内外面ともに横ナデを施す。	A 砂粒・パミス B にぶい橙色 C 普通	



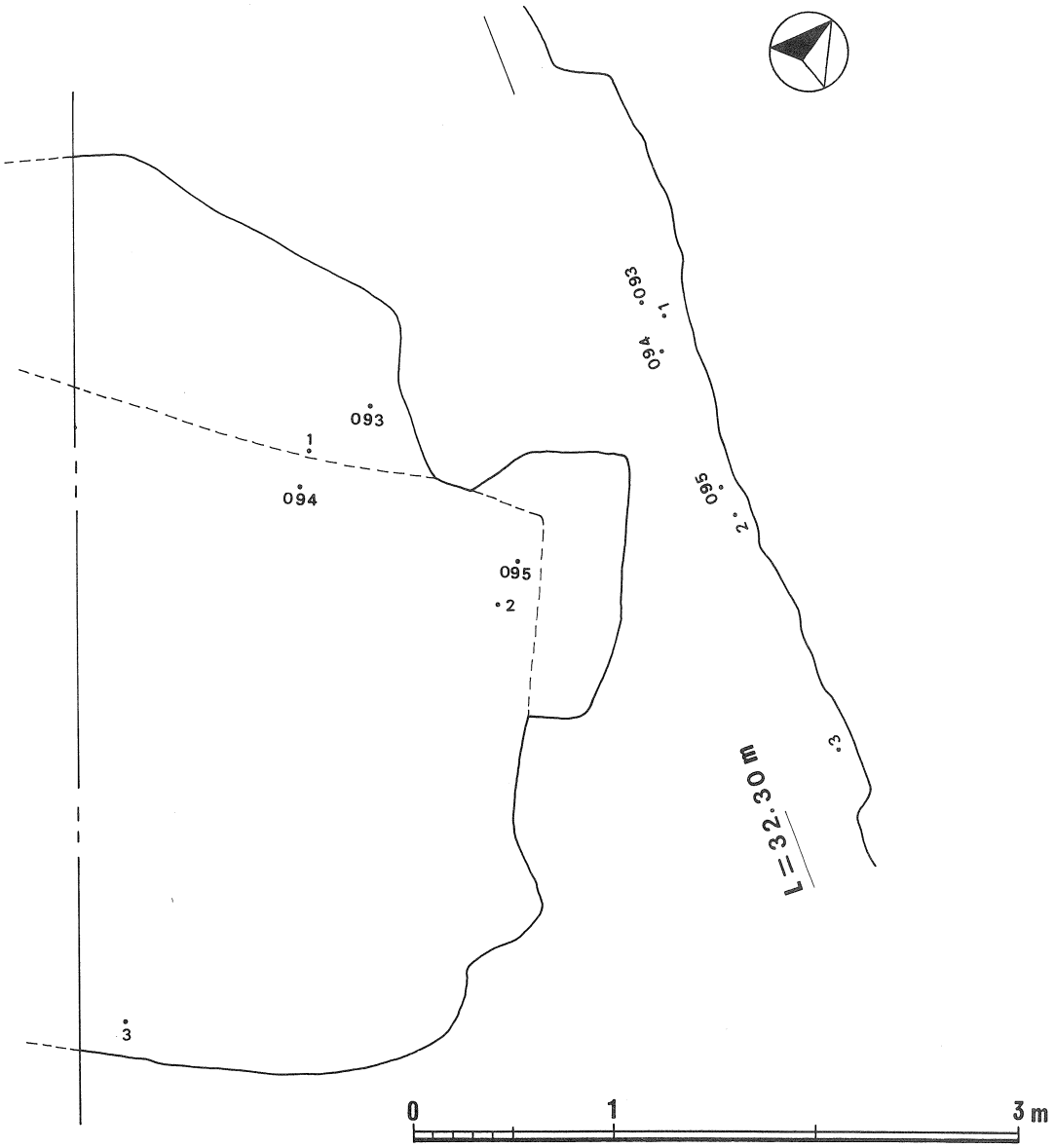
第111図　51号住居址平面実測図・出土遺物実測図

52号住居址（第112・113図）

本住居址は，Ｂ区，43－Ｂ・Ｃグリットより検出された。本住居址が位置する場所は，耕作時のトレンチャーによる攪乱をうけており，規模，形状については不明確である。主軸も不明。床面は中央部がかなり堅く踏み固められてはいるが凹凸が多い。竪穴の壁面周縁部の床面は軟質で低くなっている。壁面の立ちあがり状況および高さは，東壁が82°で立ちあがり，高さは12cm。南壁は66°で立ちあがり，高さは15cm。西・北壁については不明である。ピットは検出されなかった。火床遺構も検出されなかった。覆土は攪乱を各所にうけているため明確に分層はできず，暗褐色土と褐色土が混在している覆土であった。遺物の出土は土師器片が若干出土したが，図示できるものはなかった。



第112図　52号住居址平面実測図



第113図　52号住居址遺物分布図

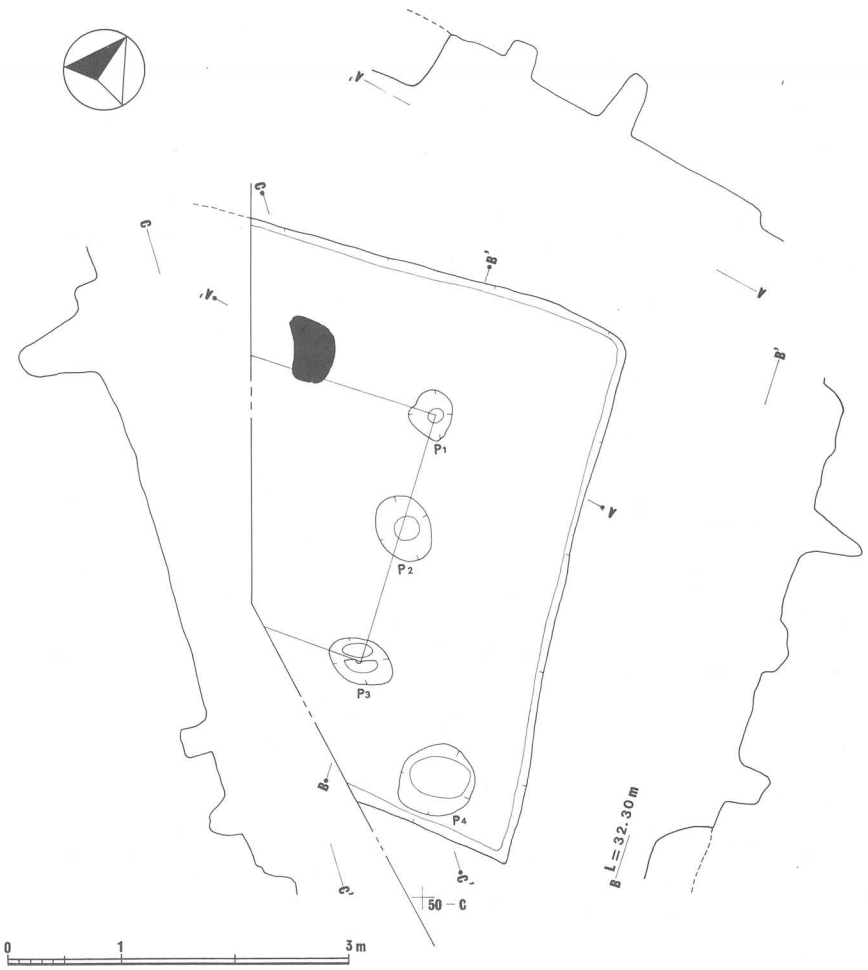
53号住居址（第114・115図）

本住居址は，Ｂ区，49－Ｂ・Ｃグリットより検出された。本住居址は西側部分が調査区域外にあたるため全容はつかめなかった。

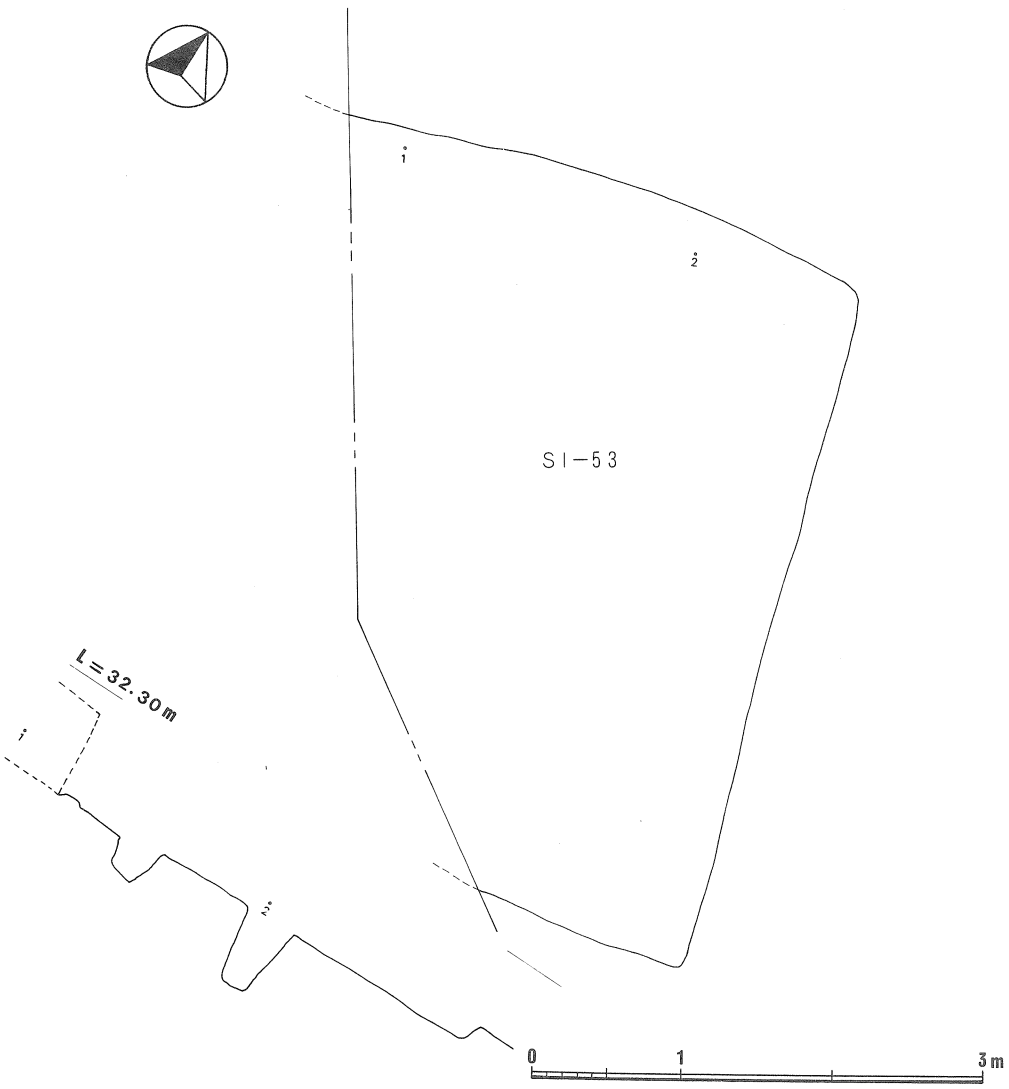
規模は南北が4.73ｍ。東西は不明。形状は方形。主軸はＮ－12°－Ｗを指している。床面はローム層上の床で，ほぼ全体的に平坦であるが軟質である。壁面の立ちあがり状況および高さは，北壁

が76°で立ちあがり，高さは26cm。東壁は82°で立ちあがり，高さは24cm。南壁は90°で立ちあがり，高さは23cmを測れた。西壁については不明。壁溝は検出されなかった。ピットは４個検出され，このうちＰ４は本住居に伴う土坑と考えられたが断定はできなかった。規模はＰ１口径35cm×48cm，深さ51cm。Ｐ２口径55cm×47cm，深さ17cm。Ｐ３口径45cm×43cm，深さ25cmを測れ，Ｐ１とＰ３は本住居のメイン柱の柱穴と推定できる。Ｐ４は貯蔵穴（土坑）と考えられたがここではＰ４として扱った。規模は東西が64cm，南北は59cmで深さ67cmで底部は平坦であった。火床遺構としては北壁寄りから炉と思われる焼土域が確認され，焼土範囲は東西が36cm，南北は42cmで最深部の深さは28cmを測れた。

覆土は，褐色土と黒褐色が主体土となっており，堆積状況はほぼ自然堆積の状況を呈していた。遺物は土師器の細片が若干出土したにすぎなかった。



第114図　53号住居址平面実測図



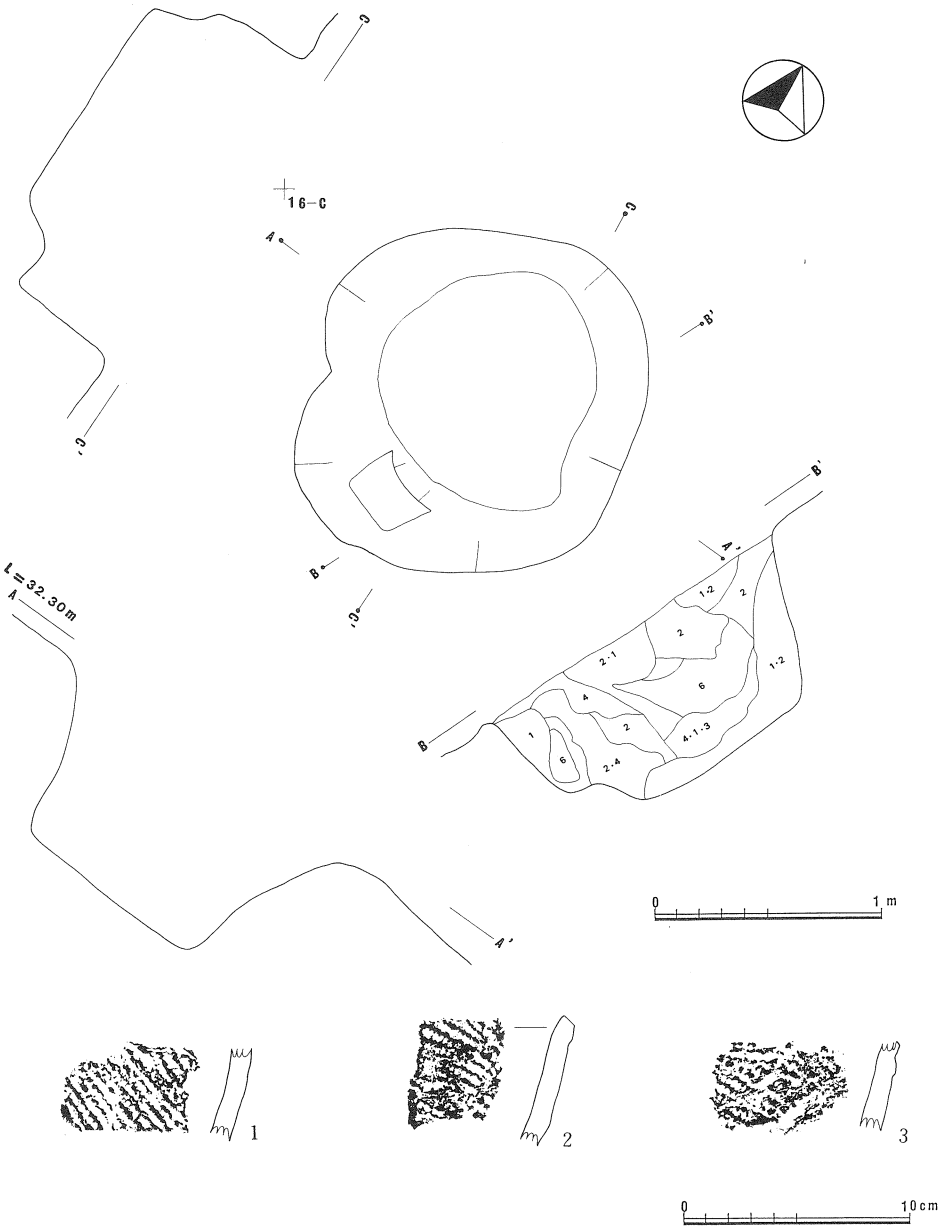
第115図　53号住居址遺物分布図

(2) 土　坑　遺　構（ＳＫ）

1号土坑遺構（第116図）

1号土坑遺構は，Ａ区，16－Ｃグリットから検出された。規模は南北が1.47ｍ，東西は1.30ｍで深さは72㎝を測れた。形状は不正円形を呈し，主軸はＮ－16°－Ｅを指している。底面はほぼ平坦で，壁面は外傾しながら開いている。南側の壁面中段には40㎝×30㎝の規模で小段を有している。覆土

の堆積状況で北側から底部にかけての最下層は自然堆積の状況を呈し，黄褐色土，褐色土が主体土である。この層の上位層はかなり攪乱した状態を示していることから，人為的に埋めもどした覆土と考えられる。土質は褐色土と暗褐色土が混在している。出土遺物は覆土中と底部上面の層中より縄文土器片が3点出土し，いずれも縄文時代前期の土器片である。



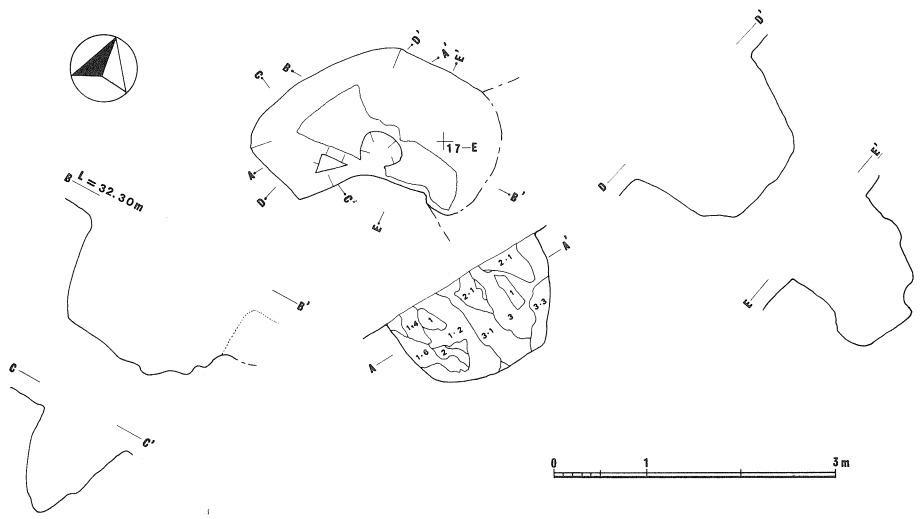
第116図　1号土坑遺構平面実測図・出土遺物拓影

(表40)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	深鉢 （縄文土器）	A ―― B ―― C 6.0×4.0 ×0.9cm	斜縄文を施している。	輪積み痕を残す。	A 砂粒・繊維 B にぶい褐色 C 不良	
2	深鉢 （縄文土器）	A ―― B ―― C 4.0×4.2 ×1.0cm	斜縄文を施している。		A 砂粒・繊維 B にぶい褐色 C 不良	
3	深鉢 （縄文土器）	A ―― B ―― C 5.6×4.4 ×0.8cm	斜縄文を施している。		A 砂粒・繊維 B にぶい褐色 C 不良	

2号土坑遺構（第117図）

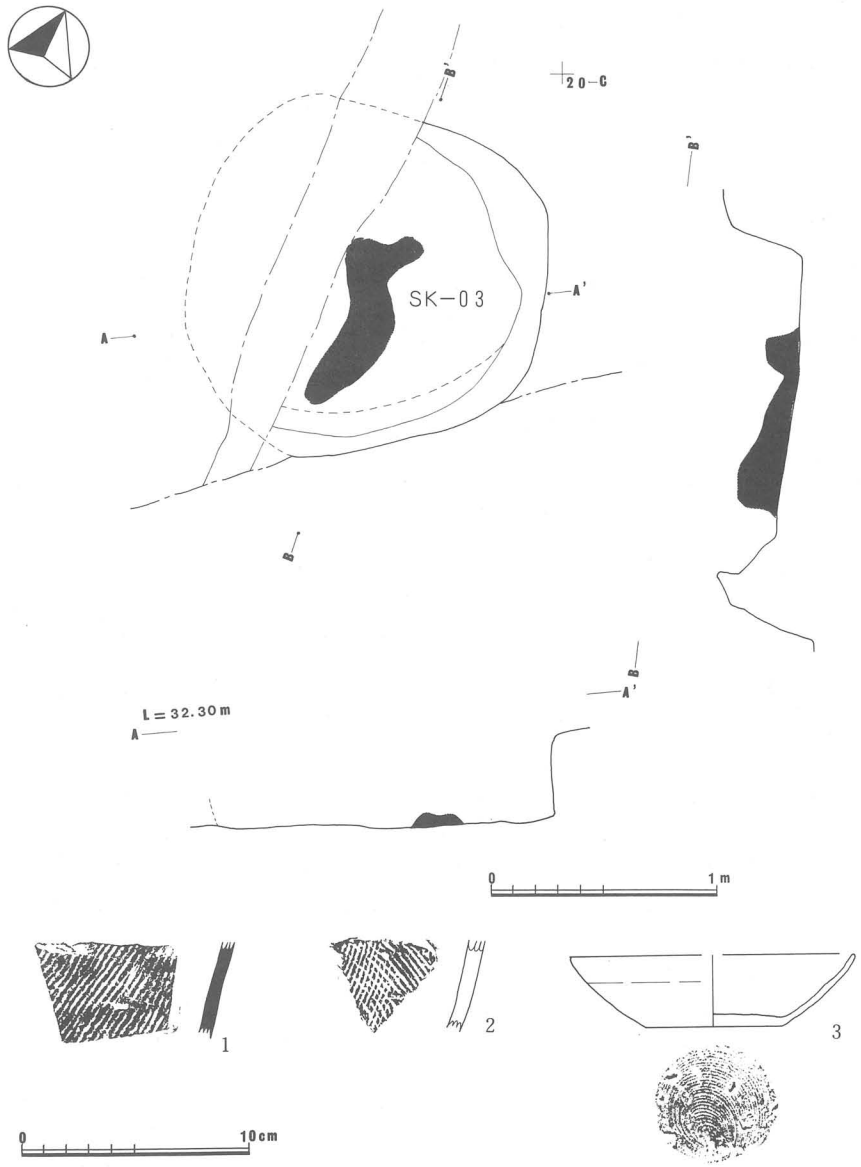
2号土坑遺構は，A区，16－Dグリットより検出された。規模は南北が2.60m，東西は2.40m，深さは最深部で1,10mを測れた。形状は不整楕円形を呈していた。底部はほぼ平坦で，中央部には柱穴状に掘り抜かれたピットが検出された。覆土は，褐色土，黒褐色土，暗褐色土などが混在して堆積していることから，人為的に埋めもどされた状態であると考えられた。出土遺物は，土師器の細片が数点出土しているが，覆土中への流れ込みと思われた。なお，東側の一部は，8号住居址によって切られている。



第117図　2号土坑遺構平面実測図

3号土坑遺構　（第118図）

本土坑遺構は，A区，20－Bグリットより検出された。規模は，南北が1.52m，東西は西側が11号住居址と重複し，切られていたため不明である。深さは40cmを測れた。底面は平坦で底部上層は焼土塊，木炭片などが堆積していた。覆土は暗褐色土が主体土で焼土以外は分層することができなかった。出土遺物は弥生土器片1点，須恵器片1点と糸切り痕を残す土師器片1点が出土したが，出土状況からみて本遺構と直接的な関連は認められなかった。



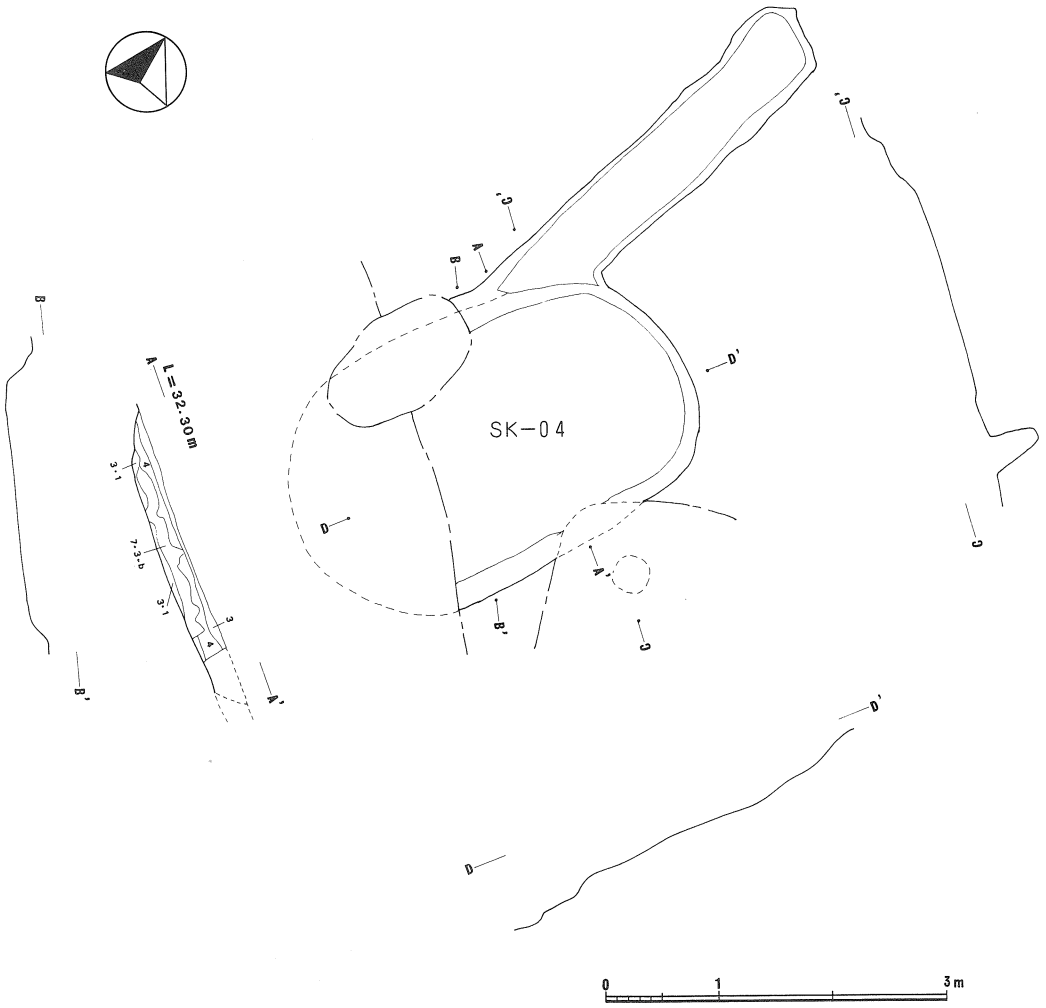
第118図　3号土坑遺構平面実測図・出土遺物拓影

(表41)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第118図 1	甕 （須恵器）	A ——— B ——— C 5.4×4.0 ×0.5cm		外面には叩き目痕を残す。内面はナデを施す。	A 砂粒・長石 B 灰色 C 良好	
2	甕 （弥生土器）	A ——— B ——— C 5.0×4.0 ×0.7cm		外面には交互にハケ目痕を残す。	A 砂粒・パミス B にぶい褐色 C 普通	
3	坏 （土師器）	A 12.6cm B 6.1cm C 3.2cm	平底。大きく外傾して立ちあがる体部で口縁部はやや内彎ぎみに立ちあがる。	底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	

4号土坑遺構　（第119図）

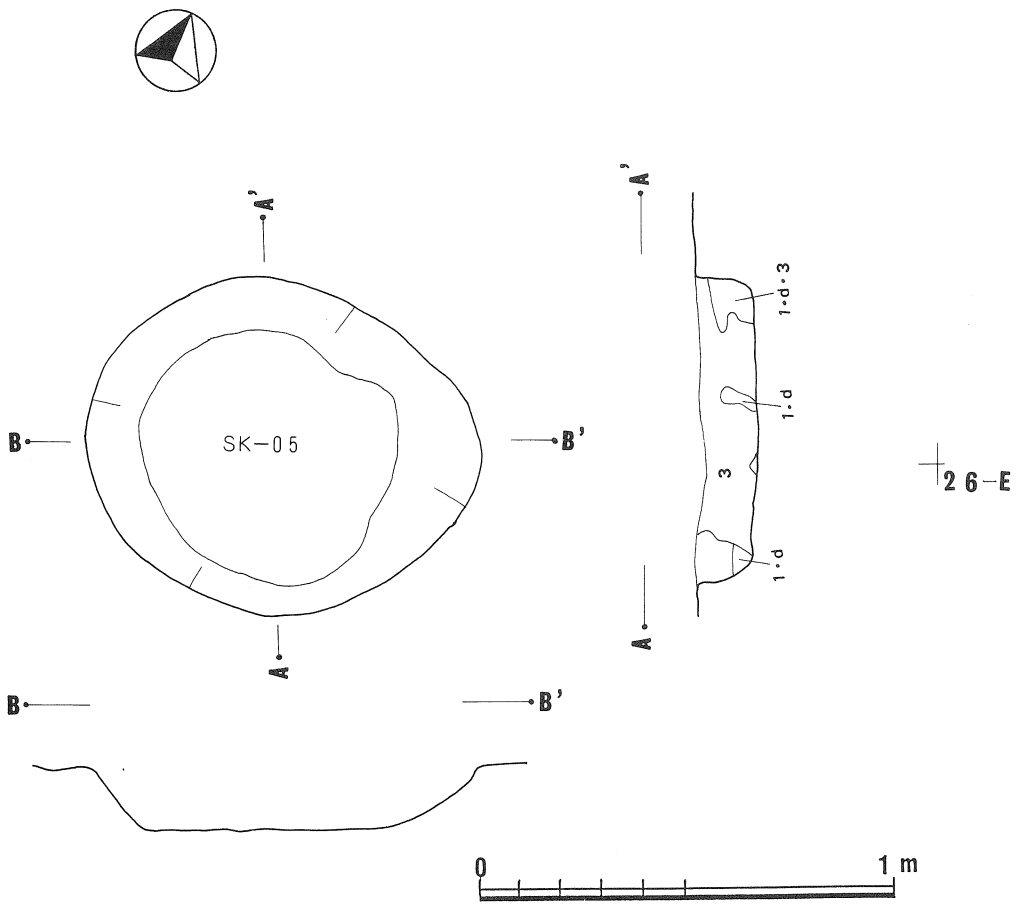
本土坑は，A区，20－Dグリットより検出された。規模は，南北が2.57m，東西は2.50mで深さ28cmを測れた。形状は楕円形を呈し主軸N－32°－Eを指していた。底面は平坦で，壁面は緩やかに開いて立ちあがる。覆土は大別して3層に分層でき上層は黒褐色土，中層は褐色土，下層は黒色土となっている。堆積状況は自然堆積の状況を呈している。本遺構の南側は16号住居址，東側の一部は17号住居址によって切られている。遺物は出土しなかった。



第119図　4号土坑遺構平面実測図

5号土坑構　（第118図）

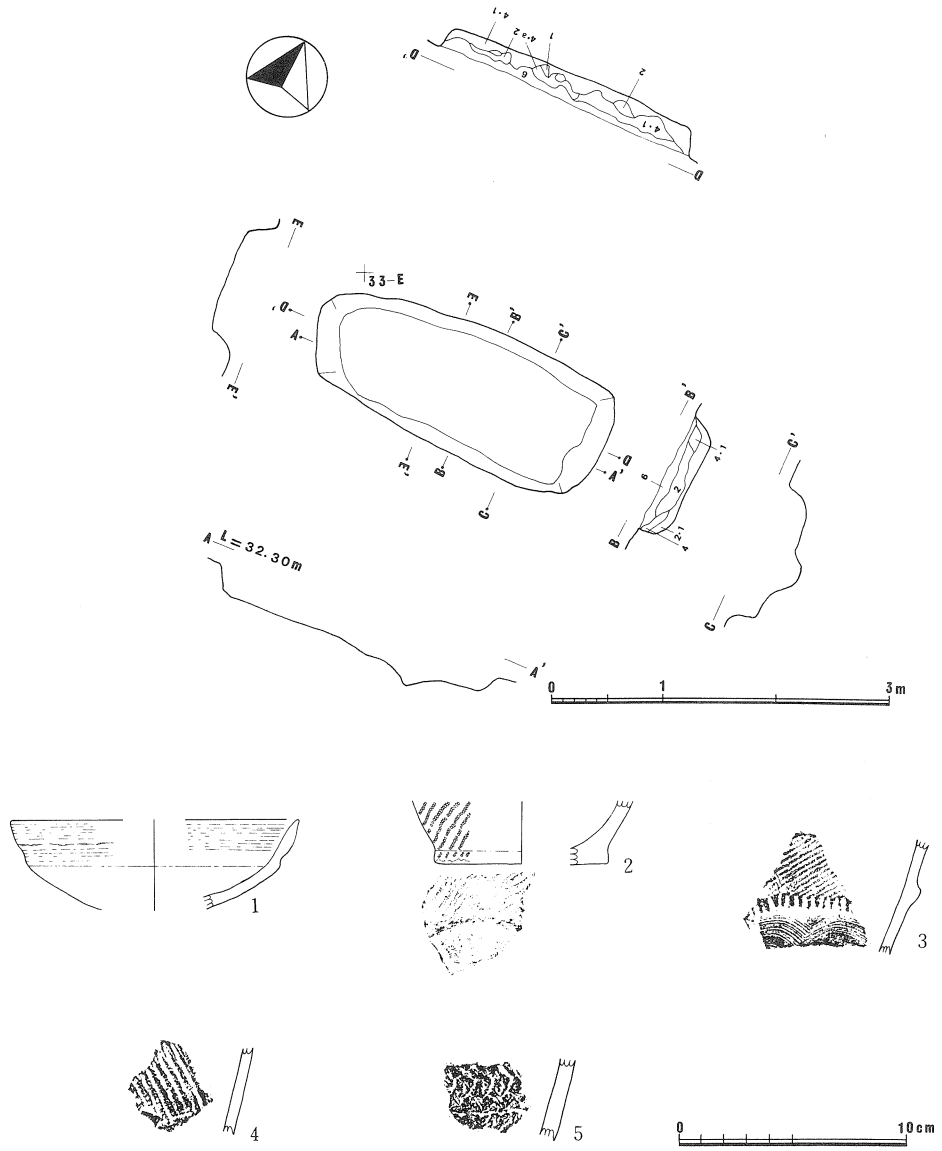
本土坑遺構は，A区，26－Dグリットより検出された。規模は，南北が80cm，東西は95cmで深さは15cmを測れ，形状はほぼ円形を呈している。底面は平坦で，壁面は東・西壁面は緩やかに外傾して立ちあがり，南・北壁面はほぼ直立して立ちあがっている。覆土は黒褐色土が主体土で局部的に黄褐色土ブロックを若干含んでいる。堆積状況は人為的に埋めもどした痕跡が認められた。遺物の出土はなかった。



第120図　5号土坑遺構平面実測図

6号土坑遺構　（第121図）

本土坑遺構は，B区，33－Dグリットより検出された。規模は，南北が1.12m，東西は2.72mで，深さは25cmを測れた。形状は隅丸長方形を呈している。底面はほぼ平坦ではあるが，局部的に凹凸がみられた。壁面はほぼ直線状に外傾して開いている。覆土は大別して3層に分層でき，上層は暗褐色土，中層は褐色土，下層も褐色土が主体土となっており，堆積状況はほぼ自然堆積の状況を示している。遺物は，細片が若干出土しているが図示可能なもの5点をあげた。 1 坏の破片で覆土上層より出土している。 2 弥生土器の底部片で覆土下層から出土，器種は壺あるいは甕と思われる。 3 弥生土器の壺の口辺部片で覆土下層より出土した。 4 ， 5 これも弥生土器の壺ないしは甕の胴部片で，覆土下層より出土している。



第121図　6号土坑遺構平面実測図・出土遺物実測図・拓影

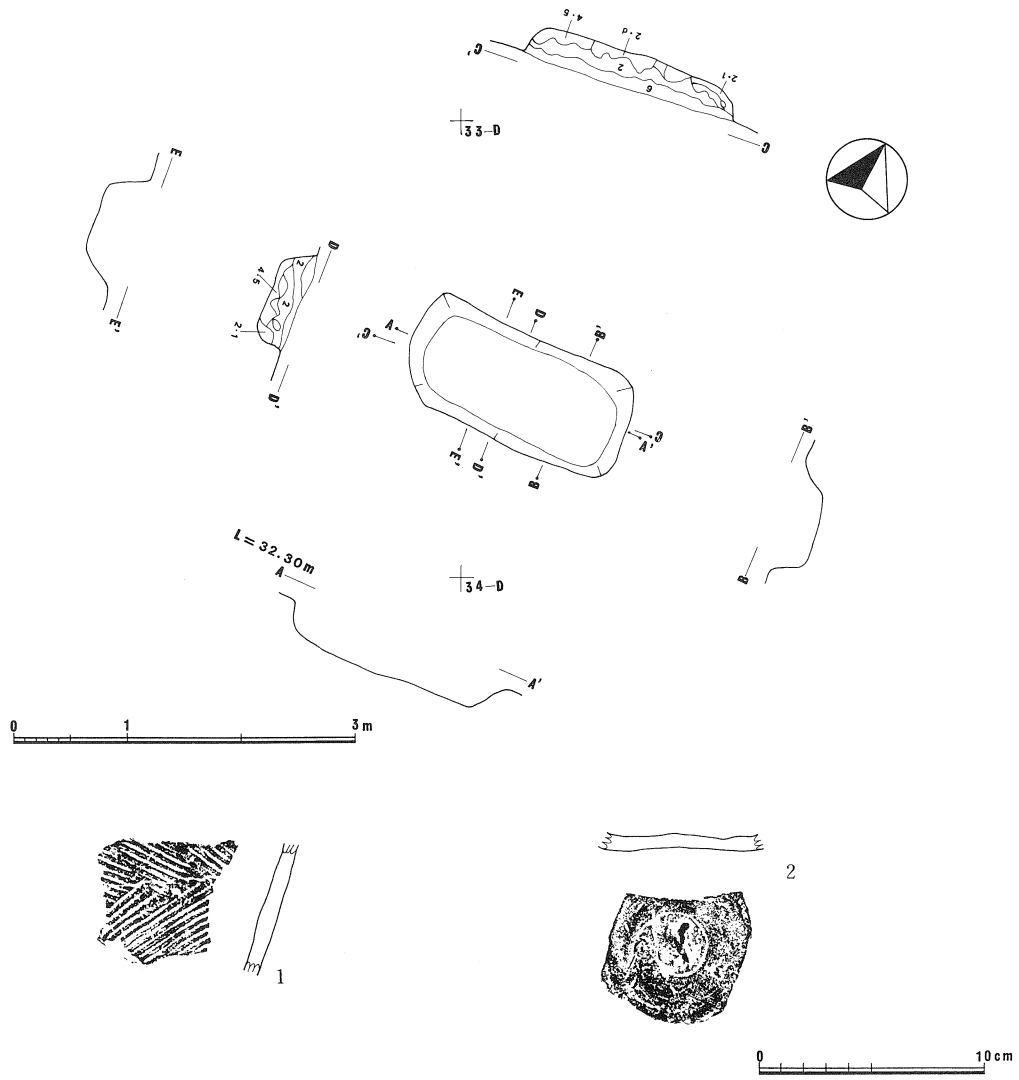
(表42)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第121図	坏 （土師器）	A 12.8cm B ——— C 4.6cm	大きく外傾して立ちあがる体部で，口辺部はさらに外傾して開く。	口辺部内外ともにヨコナデを施す。体部はヘラ削りの後ナデを施す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
2	壺 （弥生土器）	A ——— B 7.8cm C 2.8cm	撚り糸文を施す。底部に木葉状圧痕を残す。		A 砂粒・長石 B 橙色 C 良好	
3	壺 （弥生土器）	A ——— B ——— C 4.8×5.0 ×0.5cm	口辺部片で中央に隆線上に縦位のキザミを入れている。上半部は撚糸文，下半は波状文を施す。		A 砂粒・長石 B 橙色 C 普通	
4	壺 （弥生土器）	A ——— B ——— C 3.4×3.8 ×0.5cm			A 砂粒・長石 B にぶい橙色 C 不良	
5	不明	A ——— B ——— C 3.0×3.7 ×0.5cm			A 砂粒・長石 B にぶい褐色 C 不良	

7号土坑遺構　(122図)

本土坑遺構は，B区，33－Dグリットから検出された。規模は、南北が93cm，東西は2.01mで深さ28cmを測れた。形状は隅丸長方形を呈し，主軸はN－88°－Eを指していた。底面は平坦で，壁面は外傾して立ちあがっている。覆土は大別して3層に分層することができる。上層は暗褐色土，中層は褐色土，下層は褐色土と黒褐色土からなっている。堆積状況は自然堆積の状態を呈していた。

出土遺物は覆土中より弥生土器片および土師器片が出土した。　1　弥生土器の甕ないしは壺の胴部片で，覆土下層より出土した。　2　土師器の坏底部片で底部外面にはヘラ切り痕を残すもので，覆土上層から出土している。



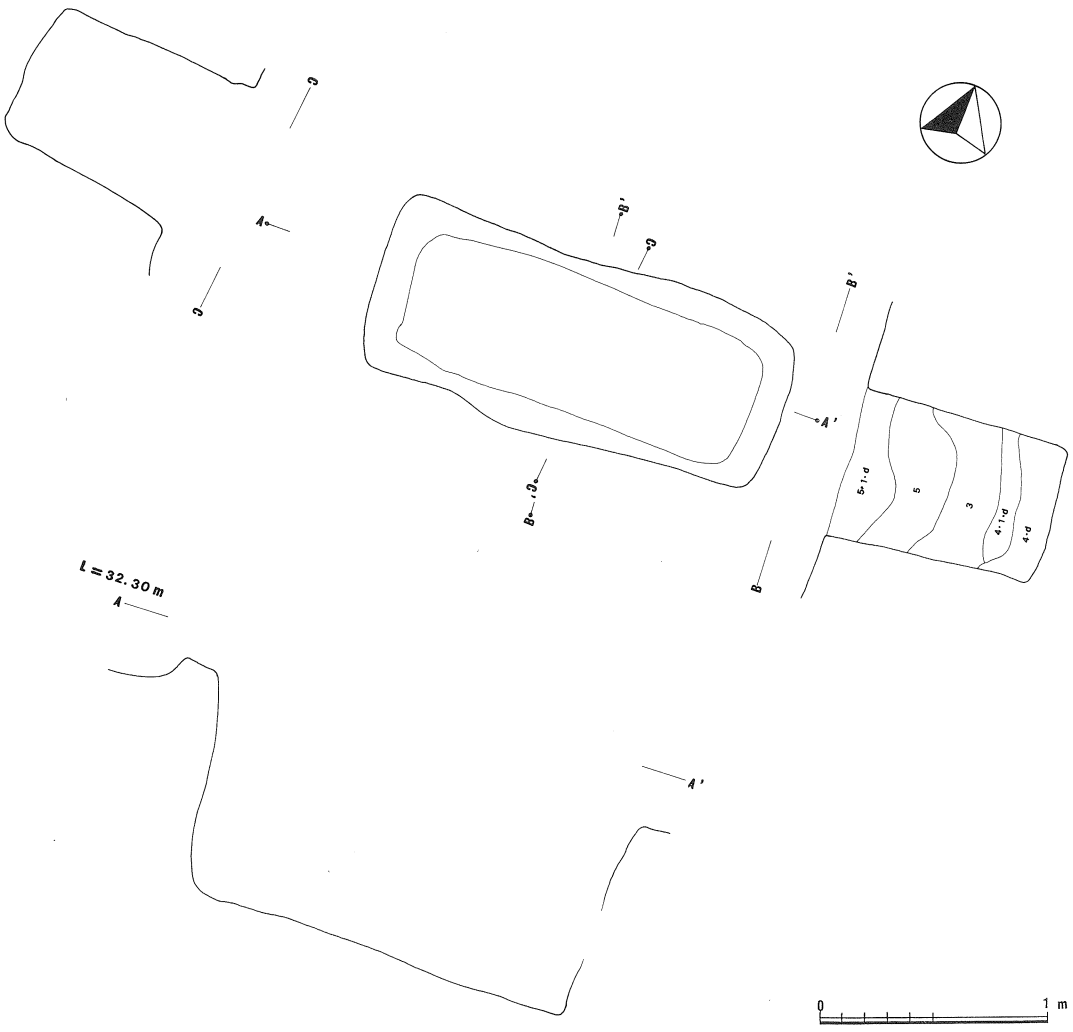
第122図　7号土坑遺構平面実測図・出土遺物拓影

(表43)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第122図 1	甕(壺) (弥生土器)	A ——— B ——— C 5.0×5.0 ×0.6cm	撚糸文が施されている。		A 砂粒・長石 B にぶい褐色 C 普通	
2	坏 (土師器)	A ——— B ——— C ———		坏の底部で回転ヘラ切りをおこなっている。	A 砂粒・雲母 B にぶい橙色 C 普通	

8号土坑遺構　（第123図）

本土坑遺構は，B区，37－Cグリットから検出された。規模は，南北が85cm，東西は185cm，深さ90cmを測れた。形状は隅丸長方形を呈し，主軸はN－85°－Eを指している。底面は平坦で，壁面は北・東・西壁面がほぼ直立して立ちあがり，西壁面はわずかに外傾して立ちあがっている。覆土は大別して5層に分層でき，黒褐色土と褐色土が主で各層中には黄褐色土ブロックが含まれている。とくに最上層と最下層には径2～3cmほどのブロック土が多量に含まれていた。堆積状況は人為的に埋めもどされた時期と，自然堆積によって埋没した時期との土層が認められた。遺物は土師器の細片が32点ほど出土したがいずれも覆土に混って流れこんだものと考えられ，本遺構との関連は認め難かった。



第123図　8号土坑遺構平面実測図

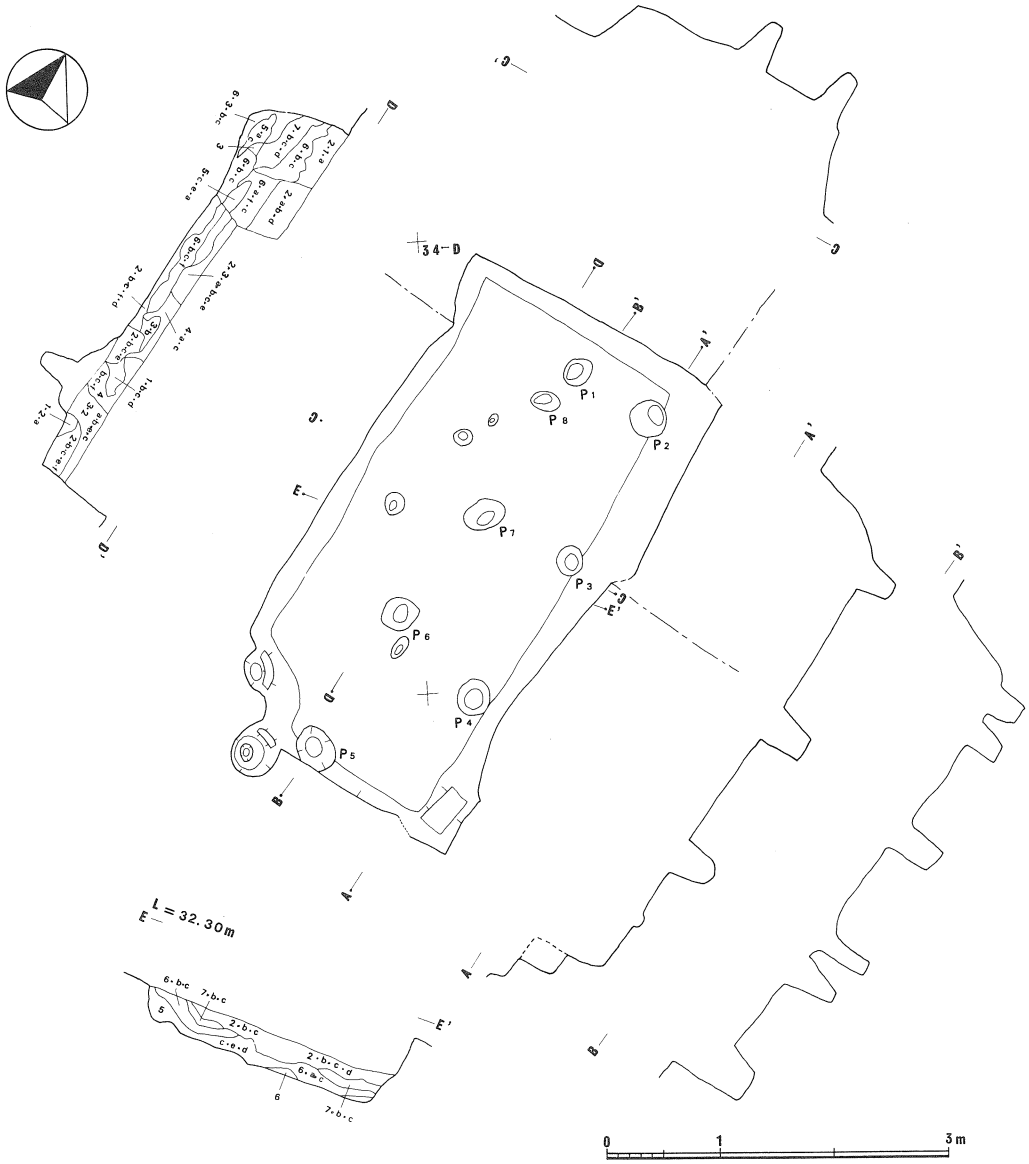
9号土坑遺構（竪穴遺構）　（第124図）

本土坑遺構は，B区，34－Dグリットから検出された。規模は，南北が4.78m，東西は2.45m，深さ82cmを測れた。形状は長方形を呈し主軸はN－0°を指している。底面は鹿沼層まで掘り込まれており，全体的に平坦な面となっている。壁面は各側面とも直線状に外傾して立ちあがっている。本遺構の底部からはピットが8個検出でき，性格は不明であるが本遺構に関連するピット列と考えられた。ピットの規模は，P1口径26cm×28cm，深さ31cm。P2口径20cm×24cm，深さ30cm。P3口径23cm×28cm，深さ38cm。P4口径25cm×28cm，深さ38cm。P5口径33cm×24cm，深さ32cm。P6口径23cm×28cm，深さ47cm。P7口径33cm×24cm，深さ53cm。P8口径24cm×27cm，深さ43cmを測れた。

覆土の堆積状況は位置によって自然堆積の状況を示す部分と，人為的に埋めもどした状況を示す部分とがあった。人為的な埋めもどし部分については，耕作時の攪乱による影響がかなり強いとみられた。覆土は褐色土，暗褐色土，黒褐色土が主体土となっている。また，覆土の下層から底面にかけて焼土と灰が底一面に堆積しており，厚さは10～15cmを測れた。この焼土と灰は，堆積状態と底面および壁面の状態からみて本遺構内で燃焼させたものとは認められず，他所から焼土と灰を搬入し，本遺構の床面上に敷きつめたものと考えられる。出土遺物は覆土中に土師器の細片が若干出土したが本遺構に伴った遺物とは考えられず，覆土中に流れ込んだものと推定した。

本遺構の西から南側にかけては43号住居址が重複しており，本遺構は43号住居址を切った状態で確認できた。また，北東隅部は42′号住居址を切っている。

本遺構および以下の10号，12号土坑遺構の呼称については，現地での遺構確認の段階で土坑遺構と考えていたが，掘り下げ調査の段階では土坑という呼称より，竪穴遺構という呼称が適切と考えられた。したがって，本報告書では便宜上土坑と竪穴遺構という呼称を並記している。



第124図　9号土坑遺構平面実測図

10号土坑遺構（竪穴遺構）　（第125図・126図）

本土坑遺構は，B区，32－C・Bグリットから検出された。規模は，南北が3.07m，東西は3.93mで深さは最深部で1.17mを測れた。形状は隅丸方形を呈し，主軸はN－69°－Wを指している。底面は南側より北側に向って緩やかに傾斜し，本遺構の中央部あたりが最深部となっている。なお、底面全体には小規模な凹凸が多数認められた。

壁面は各面ともほぼ垂直に立ちあがっている。本遺構の底部からはピット遺構が8個検出された。

規模はP1口径39cm×34cm，深さ46cm。P2口径15cm×15cm，深さ36cm。P3口径23cm×25cm，深さ23cm。P4口径13cm×15cm，深さ41cm。P5口径27cm×30cm，深さ23cm。P6口径43cm×21cm，深さ24cm。P7口径13cm×13cm，深さ28cm。P8口径40cm×38cm，深さ31cmを測れたが，このピット群の性格および対応関係は不明である。覆土は，大別すると4層に分層でき最上層（Ⅰ層）は暗褐色土に黄褐色土ブロックが混在した層である。Ⅱ層は黒褐色土，暗褐色土にロームブロックが含まれている。Ⅲ層は黒色土とブロック土，Ⅳ層は褐色土，暗褐色土にブロック土が混入された土層で南側のⅣ層中には少量ながら焼土，灰，炭化粒子が認められた。堆積状況は人為的に埋めもどした部分と自然堆積の部分とが認められた。出土遺物は，覆土中と底部面から土師器，須恵器片が出土している。

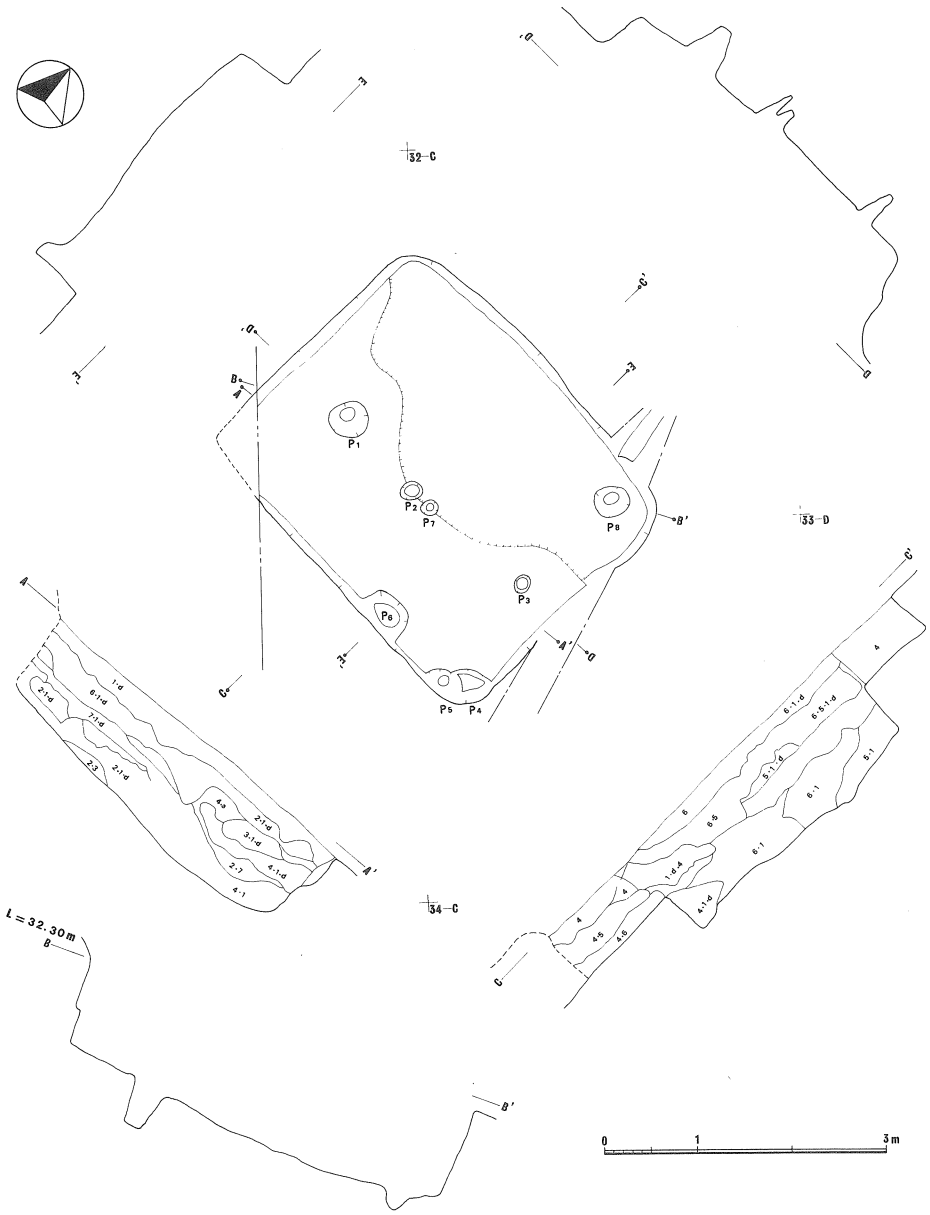
1　甕の底部片で本遺構の中央部よりやや北側の底面上より出土している。底部外側には木葉状圧痕が残り，やや上げ底ぎみとなっている。　2　高台付坏の底部片で，覆土Ⅳ層より出土している。

3　土師器甕の底部片で覆土のかなり上部より出土している。　4　須恵器の甕胴部片でこれも覆土上部より出土している。

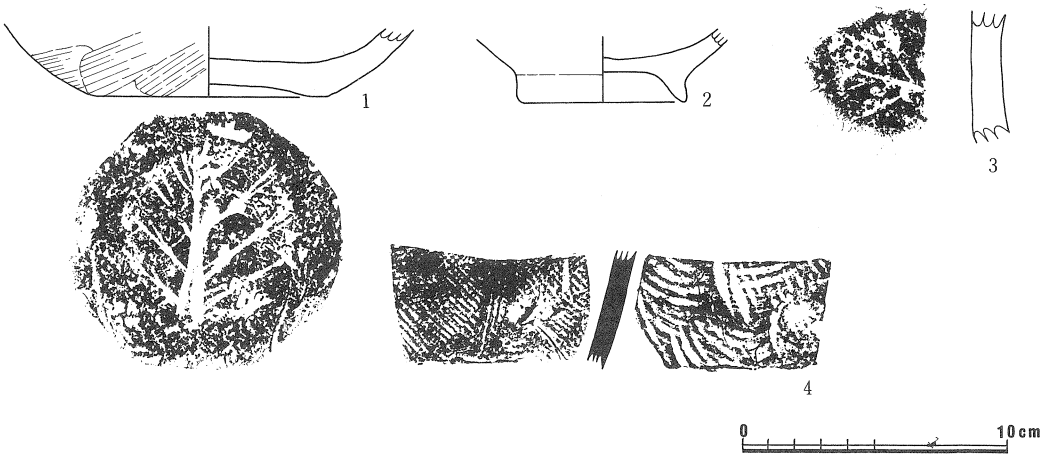
本遺構は39号住居址と重複して検出され，本遺構が39号住居址を切って構築していた。

(表44)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第126図 1	甕（土師器）	A ――― B 9.0cm C 2.7cm	底部片でやや上げ底ぎみ。底部には木葉状圧痕を残す。	内面はナデ。外面はヘラ削り。	A 砂粒・雲母・石英 B にぶい褐色 C 普通	
2	高台付坏（土師器）	A ――― B 6.4cm C 2.6cm		水挽き成形。	A 砂粒・パミス 石英 B 浅黄橙色 C 良好	
3	甕（底部片）（土師器）	A ――― B ――― C 4.5×5.7×0.8cm	木葉状圧痕を残す。		A 砂粒・パミス B にぶい褐色 C 普通	
4	甕（須恵器）	A ――― B ――― C 7.4×4.0×0.8cm		内外面ともに叩き痕を残す。外面は格子状の叩き目痕，内面は同心円の叩き目痕を残す。	A 砂粒・パミス B 灰色 C 良好	



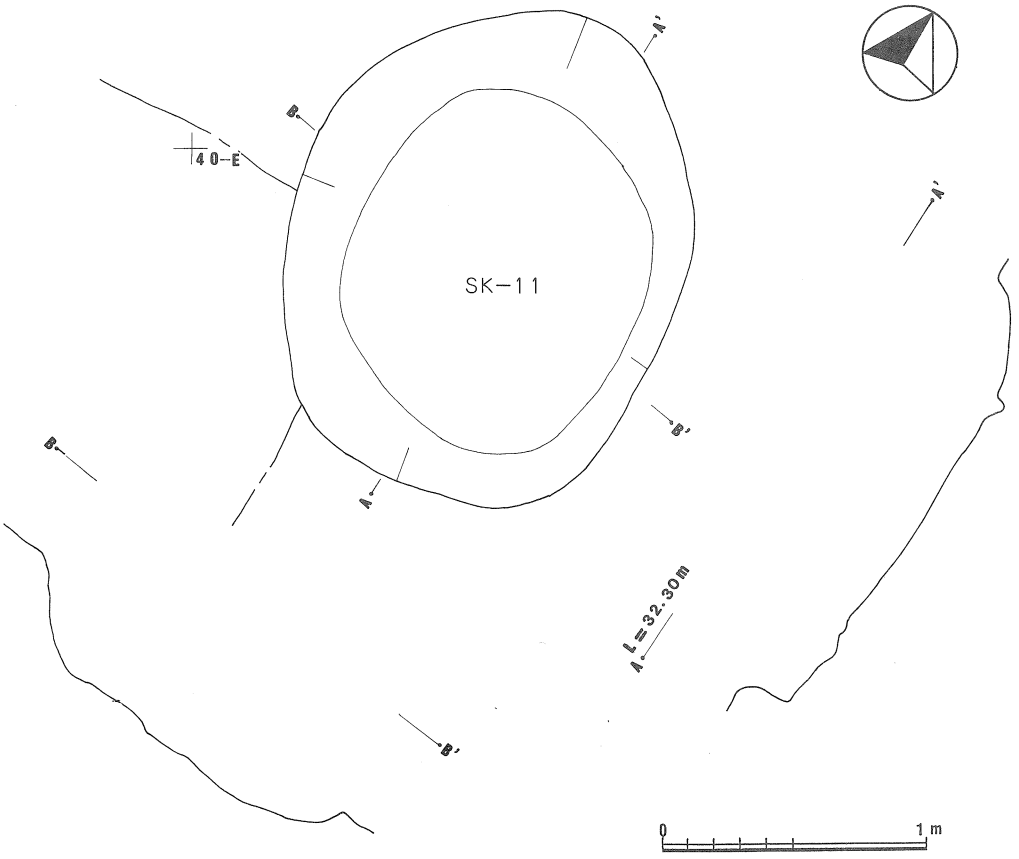
第125図　10号土坑遺構平面実測図



第126図　10号土坑遺構出土遺物実測図・拓影

11号土坑遺構　(127・136図)

本遺構は，B区，40－Eグリットから検出された。規模は南北が4.45m，東西は4.00m，深さは最深部で31cmを測れた。形状は楕円形を呈し，主軸はN－9°－Wを指している。壁面は南側がほぼ直立して立ちあがっているほかは，北，東，西側の壁面は緩やかに外傾して立ちあがっている。底面はほぼ平坦な面ではあるが，局部的に凹凸がみられた。堆積土は暗褐色土が単層で，分層することはできなかった。遺物は覆土中より縄文土器片が数点出土した。しかし，これは本遺構の南壁上端部南側より縄文時代前期の土器片（第133図）が2個体分出土しているのでこの破片の一部が流れ込んだものと考えられた。したがって，この縄文土器片と本遺構との直接的な関連は認め難かった。なお，本遺構の西南側は49号住居址と重複しているが，切り合い状況からみて49号住居址が本遺構によって切られている状況であった。



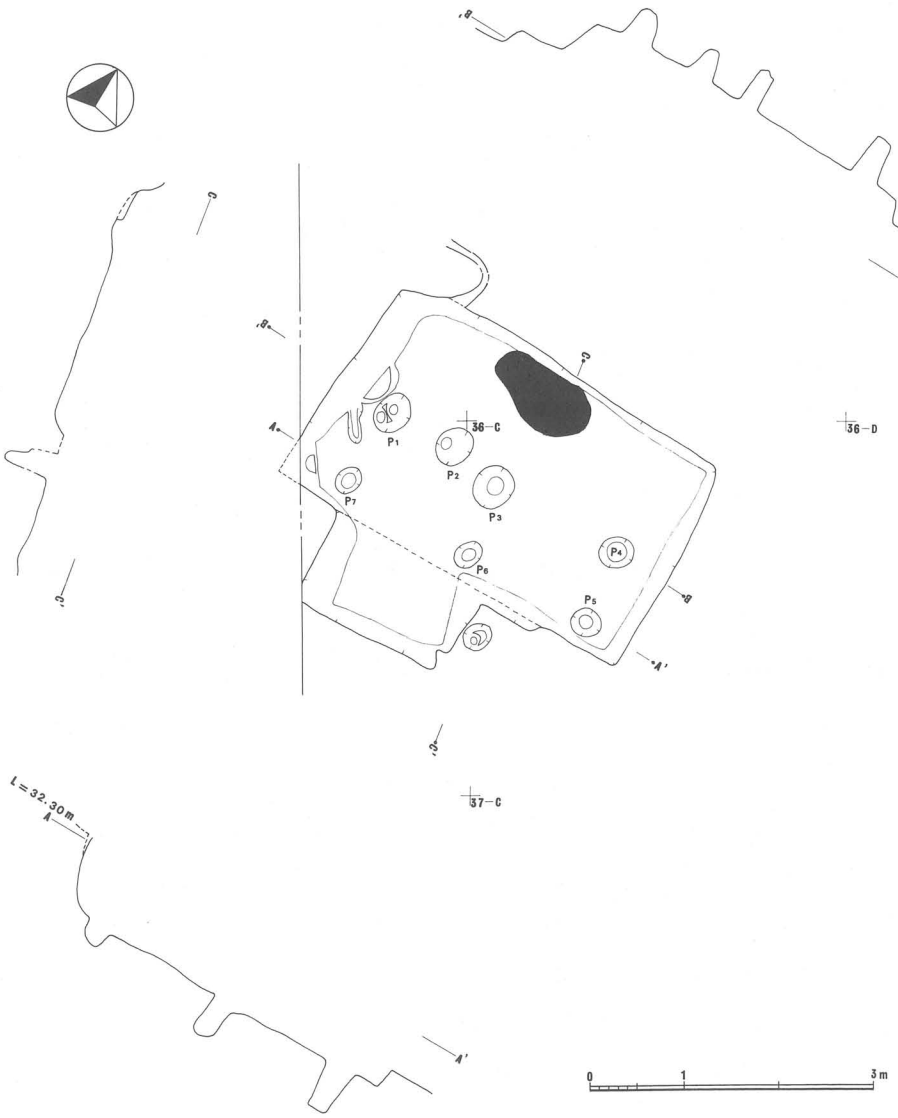
第127図　11号土坑遺構平面実測図

12号土坑遺構（竪穴遺構）　（第128・129図）

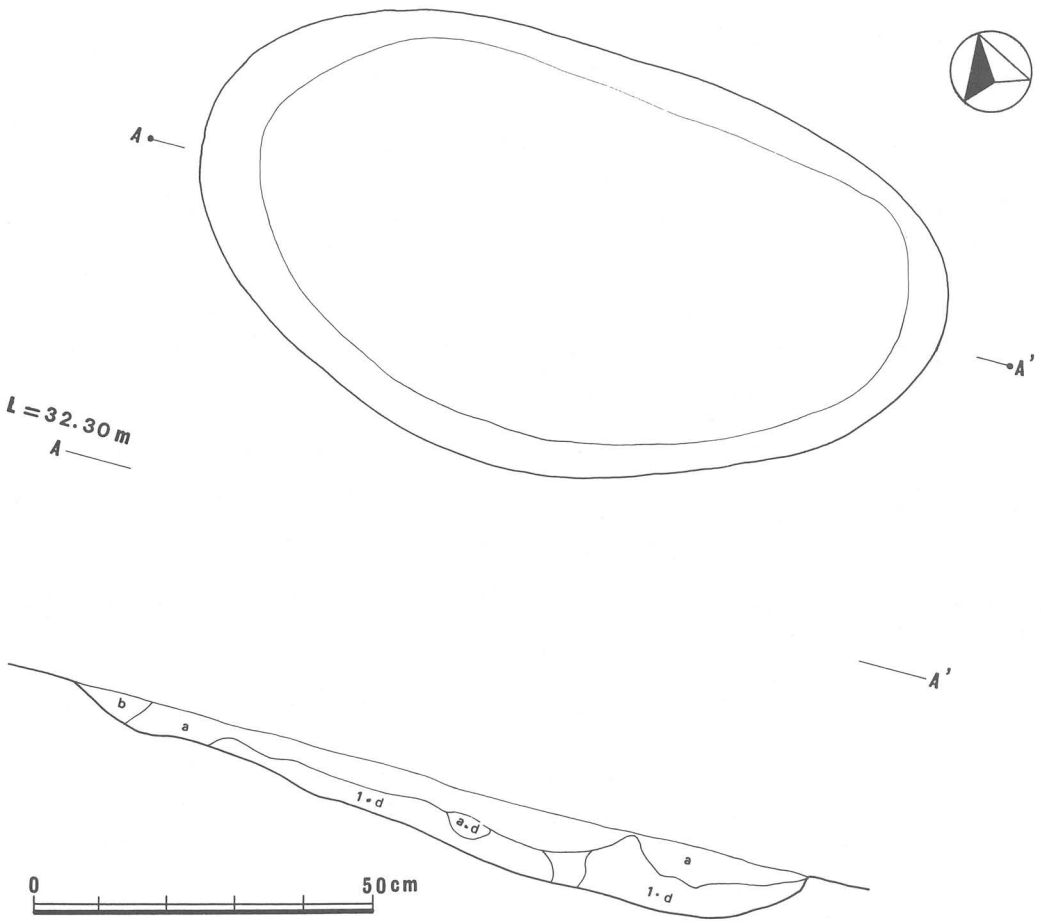
本遺構は，B区，35－B・36－Cグリットから検出された。規模は，南北が2.67m，東西は4.05m，深さが最深部で56cmを測れた。形状は長方形を呈しているが，南側の一部には最近のイモ穴と推定できる掘り込みが掘られていた。主軸はN－86°－Wを指している。底面は全面平坦で，局部的に踏み固めの痕跡が残っていた。また，底面からピットが7個検出され，その規模はP1口径33cm×31cm，深さ35cm。P2口径28cm×28cm，深さ36cm。P3口径26cm×33cm，深さ44cm。P4口径31cm×30cm，深さ49cm。P5口径36cm×38cm，深さ55cm。P6口径30cm×30cm，深さ44cm。P7口径23cm×21cm。深さ23cmを測れた。壁面は東・西壁が直線状に外傾して立ちあがっており，南・北壁が上端部付近でわずかに外反して立ちあがっている。本遺構の北壁際中央部には，炉と推定できる焼土域が検出された。焼土範囲は南北が55cm，東西は110cmで底面の掘り込みが2～10cmの深さを有している。焼土中には若干の炭化粒子が含まれており，ロームブロック土も少量含まれていた。本遺構はピッ

トの対応関係さらには炉の存在などから，上屋構造を有した構築物の存在が推定でき，一種の竪穴住居址に類似する建物が想像できる。しかし，用途，性格については不明な部分が多い。

覆土は暗褐色土が主体土で，層中にはロームブロックおよびローム粒子が多量に含まれており，人為的な埋めもどしをおこなった痕跡が認められた。遺物は土師器の細片とともに常滑焼の甕片が２点，覆土中より出土していることなどから，本遺構の推定年代を考えた場合，この２点の陶器片の出土はかなり重要な意味があると考える。



第128図　12号土坑遺構平面実測図



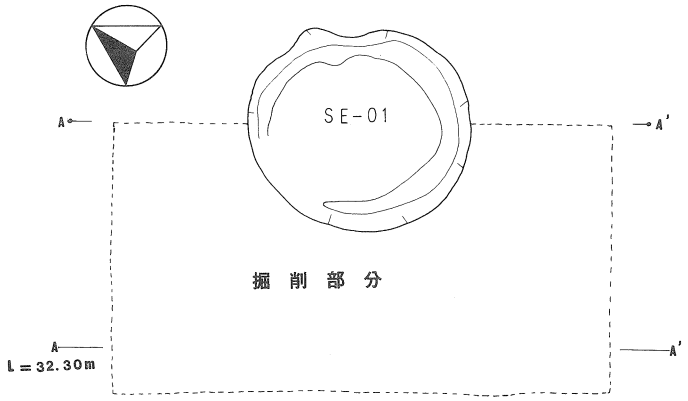
第129図　12号土坑火床遺構平面実測図

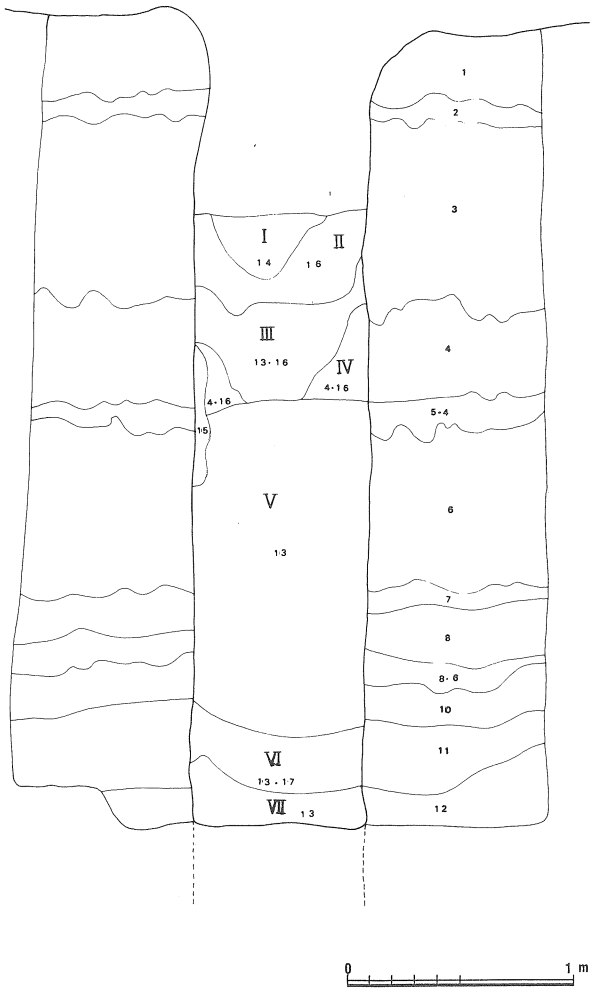
(3) 井　戸　遺　構（ＳＥ）

１号井戸遺構　（第130図）

本井戸遺構は，Ｂ区，40－Ｃグリット内に位置し，49号住居址の竪穴中央部よりやや西寄りの部分から検出された。本遺構は49号住居址を切って掘られており，このことは同住居址の炉を切っていることからも明確であった。規模は口径部が75㎝×74㎝で深さは3.50ｍまでが確認できた。セクション面での確認は3.50ｍの深さであったが，最下面より検土杖で確認した結果，さらに２ｍほど，覆土の堆積があることが確認できた。形状は口径部から下端部まで，ほぼ円形を呈し，口径部上端は若干開いた状態を呈していた。遺構内の側壁面は上部から下部までほぼ円筒状で，壁表面はかなり滑らかに削られており，ローム層，粘土層の部分においても，削り取った工具痕と思われるよう

な痕跡はまったく認められなかった。本遺構は確認された段階では土坑と推定していたが，覆土を85cmほど掘り下げた時点で壁面の状態や検土杖での確認作業から本遺構は土坑遺構ではなく，井戸遺構であることが確認できた。そこでセクション観察を容易にするため，遺構の西側半面を断ち割ることにした。覆土は断ち割り作業中に上端面より85cmほどの部分までが崩壊したため図化できなかったが，崩壊した部分の土層は黄褐色土ブロックと褐色土の混合土が主体土層となっていた。この層以下の土層は大別して6層に分層でき，褐色土，暗褐色土，黒褐色土，に黄褐色土ブロックあるいは黄褐色土粒子が混入されていた。堆積状況は，Ⅰ層からⅣ層までが自然埋没していった状況を呈していたが，Ⅴ層は層中に含まれている含有物および粒子の状態などから，人為的に埋めもどした痕跡が認られた。しかし，Ⅵ・Ⅶ層については自然堆積の状況を呈していることが確認できた。したがって，Ⅵ・Ⅶ層の段階では井戸としての形状を保っていたが，Ⅴ層を投入した段階で井戸としての役目を終えたものと思われる。そして，井戸の機能を終えた後にも坑跡をとどめていたが，そののちⅠ層からⅣ層のように自然埋没していったと考えられる。出土遺物は，覆土の上層部で土師器片，礫などが混入されていたが，これらは覆土の堆積と同時に流れこんだものと思われる。また，細片ではあるが陶器片も1点出土しているが図示はできなかった。





第130図　1号井戸遺構実測図

(4) 道路状遺構（ＳＦ－01）・溝遺構（ＳＤ－01）

（第131・132図）

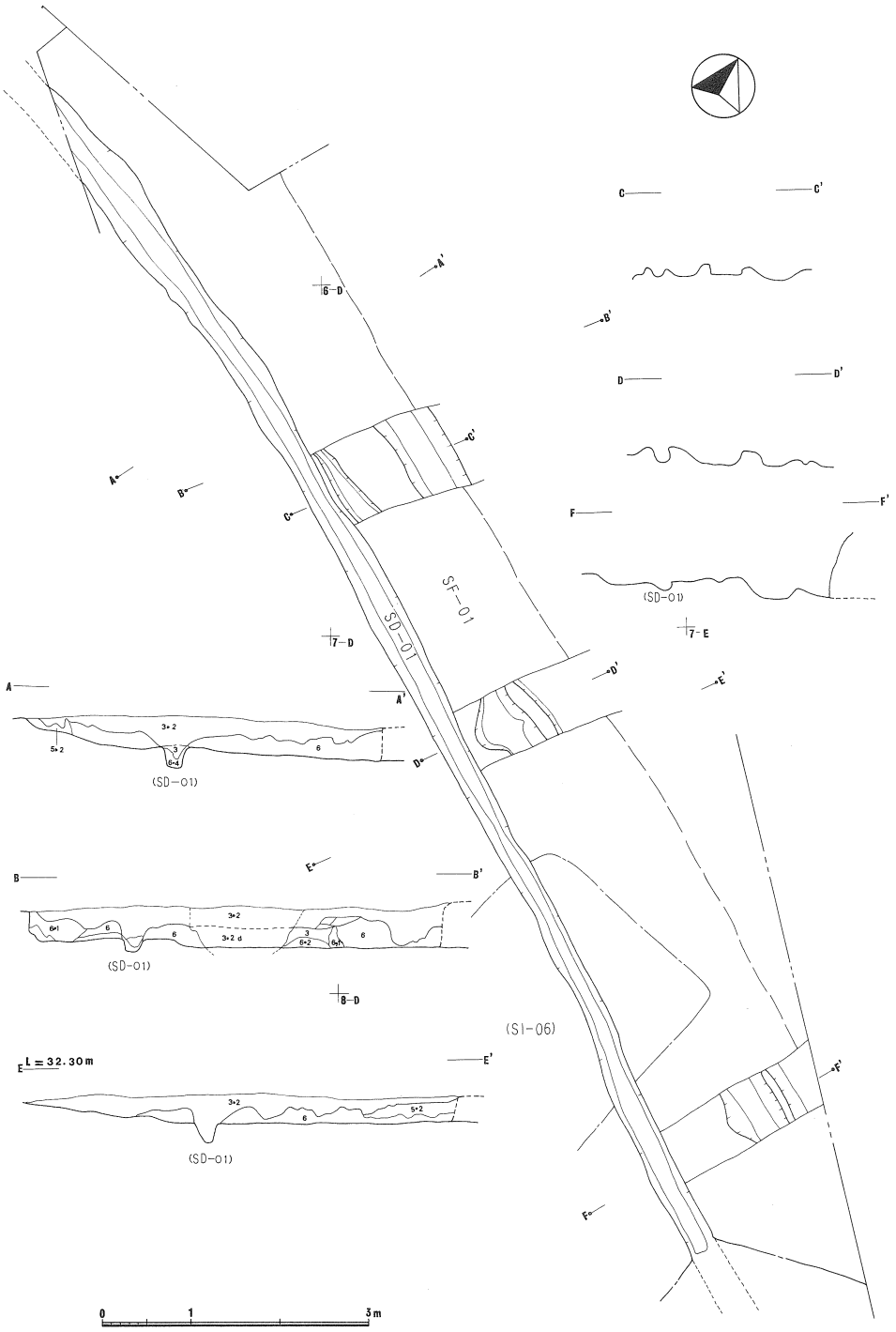
１号道路状遺構は，Ａ区，６・７・８－Ｄ・Ｅグリットから検出され，調査区域の西北端に位置する。本道路状遺構は北西・南東間に延びて検出され，南側から本遺構の側溝と考えられる１号溝遺構（ＳＤ－01）が検出された。北側には特別に遺構は検出されなかったが，緩かな斜面となっていた。本遺構の東端部には３号住居址が重複し，さらに，その西には６号住居址が重複していた。この両住居址と本遺構との新旧関係は，本遺構が両住居址を切っていることから，本遺構が両住居址よりも新しい時期の遺構であることがわかった。

本遺構の検出した規模は，北西・南東間の長さが10.0ｍ，幅が北西部で1.20ｍ，中央部で1.30ｍ，南東部で1.80ｍを測れた。遺構面は，ほぼ２層の土層によって形成され，上層は黒褐色土に褐色土粒子が含まれた土層で，下層は暗褐色土の土層となっており，この下層下位の層は地山のローム層である。このローム層は第131図のエレベーションＣ，Ｄ，Ｆでみられるように凹凸が顕著に認められ，このローム層表面の凹凸は明らかに人為的な掘削を施した痕跡と観察できた。これは道路の構築時，あるいは修復時に人工的に手が加わったところに起因するものと推定できる。

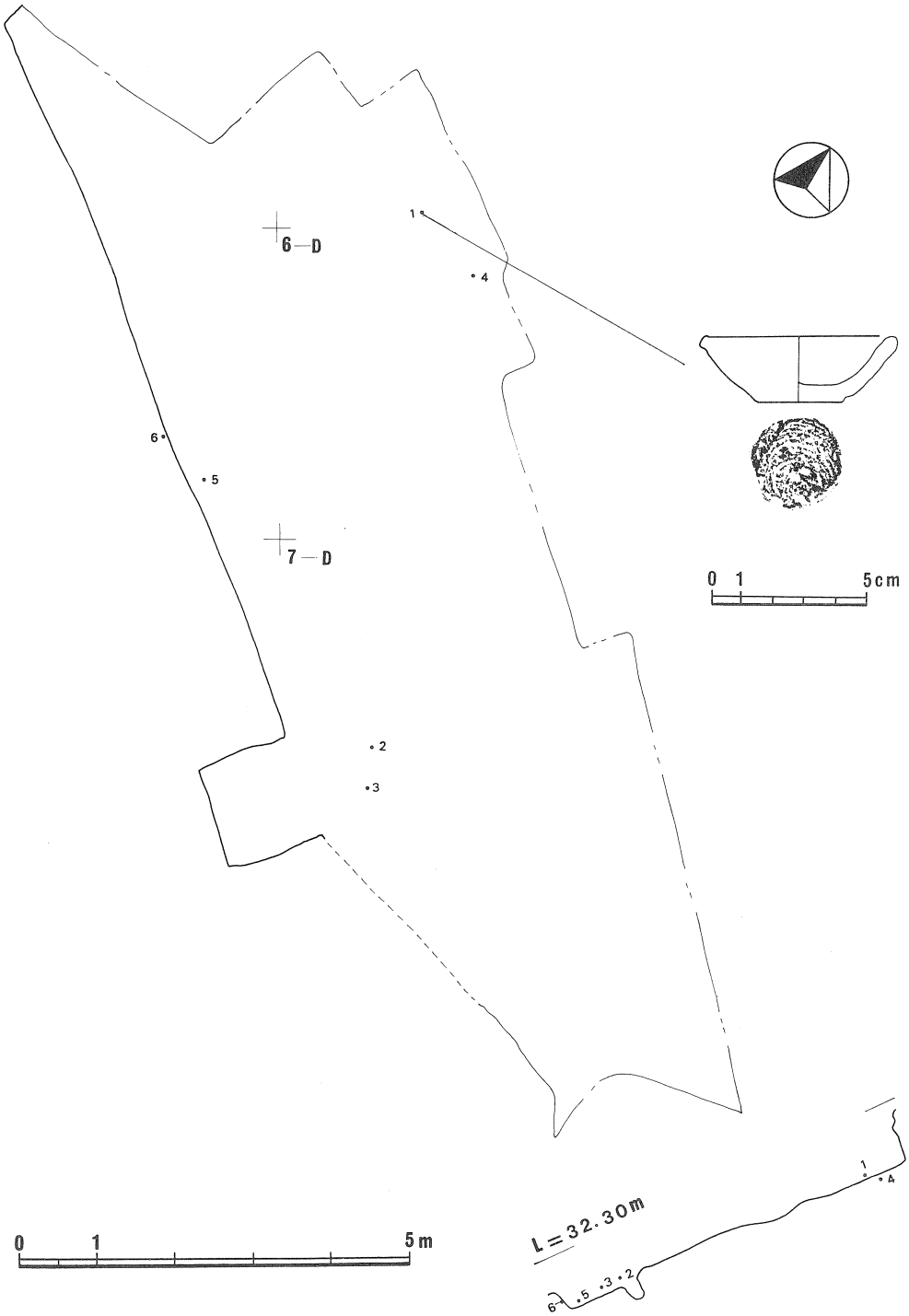
本遺構を形成している上層の黒褐色土と褐色土の層は，かなり硬く踏み締まってはいるが，土層の状態は人為的な盛土ではなく，自然堆積土が硬く踏み締ったという状態の土層であった。また，下層は，局部的に自然堆積の状況を示す部分もあったが，ほぼ全面的に盛土をおこなった痕跡が認めれる土層であった。これらのことから推定すると上層，下層ともに道路状の遺構で，上層が道路面であった時期と，下層が道路面であった時期とにわけられ，あきらかに二時期にわたって使用されていたものと考えられる。

１号溝遺構は１号道路状遺構の南側からほぼ平行して検出され，道路遺構の下層上面より掘り込まれている。したがって，下層部が道路として使用されていた時期に，側溝としての用途で機能していたと考えられる。本溝遺構の形状および規模は，断面形状が全体的に凹形を呈し，規模は検出部分においての総延長は15.0ｍを測れ，上幅は18～25㎝，底部幅12～15㎝，深さ15～28㎝であった。

覆土は２層に分層でき上層が黒褐色土で下層が褐色土で，自然堆積の状況を呈していた。遺物は土師器の細片が数点出土したが，覆土に流れ込んだもので直接関連は認められなかった。



第131図　1号道路状遺構平面実測図



第132図　1号道路状遺構遺物分布図

(5) 道路状遺構（ＳＦ－02）・大溝遺構（ＳＤ－02）

（第131・132図）

２号道路状遺構は，Ａ区，23－Ｅ・24－Ｄ・25－Ｃ・26－Ｃ・27－Ｂグリットから検出され，調査区域のほぼ中央部に位置している。本遺構は，大溝遺構（ＳＤ－02）と完全に重複し，同遺構の覆土上層面に位置している。したがって，遺構の延長方向も大溝遺構同様ほぼ南北方向に向いている。本遺構を道路状遺構としてみた根拠には，大溝遺構の覆土上層に黒褐色土を主体土とした硬質土層が存在していたことにある。そして，この土層は遺構確認の段階では大溝遺構の覆土層とみていたが，土層表面の踏み固めた状態が，明らかに長い時間を経て踏み固められたものであることが観察できたからである。さらには，北東端部（20号住居址との境目）側面より径10～20cmほどのブロック土（暗褐色土）が局部的ではあるが列状に配置された状態で検出されたことに注目したためである。なお，本土層下の層，すなわち大溝遺構の覆土となっている堆積土のうち本層の下位1.0m前後までの土層が自然堆積土ではなく明らかに人為堆積土であった。したがって，この人為堆積土層は本道路状遺構を構築するために埋めもどした土層であると考えられる。

大溝遺構（ＳＤ－02）　（第133・134・135図）

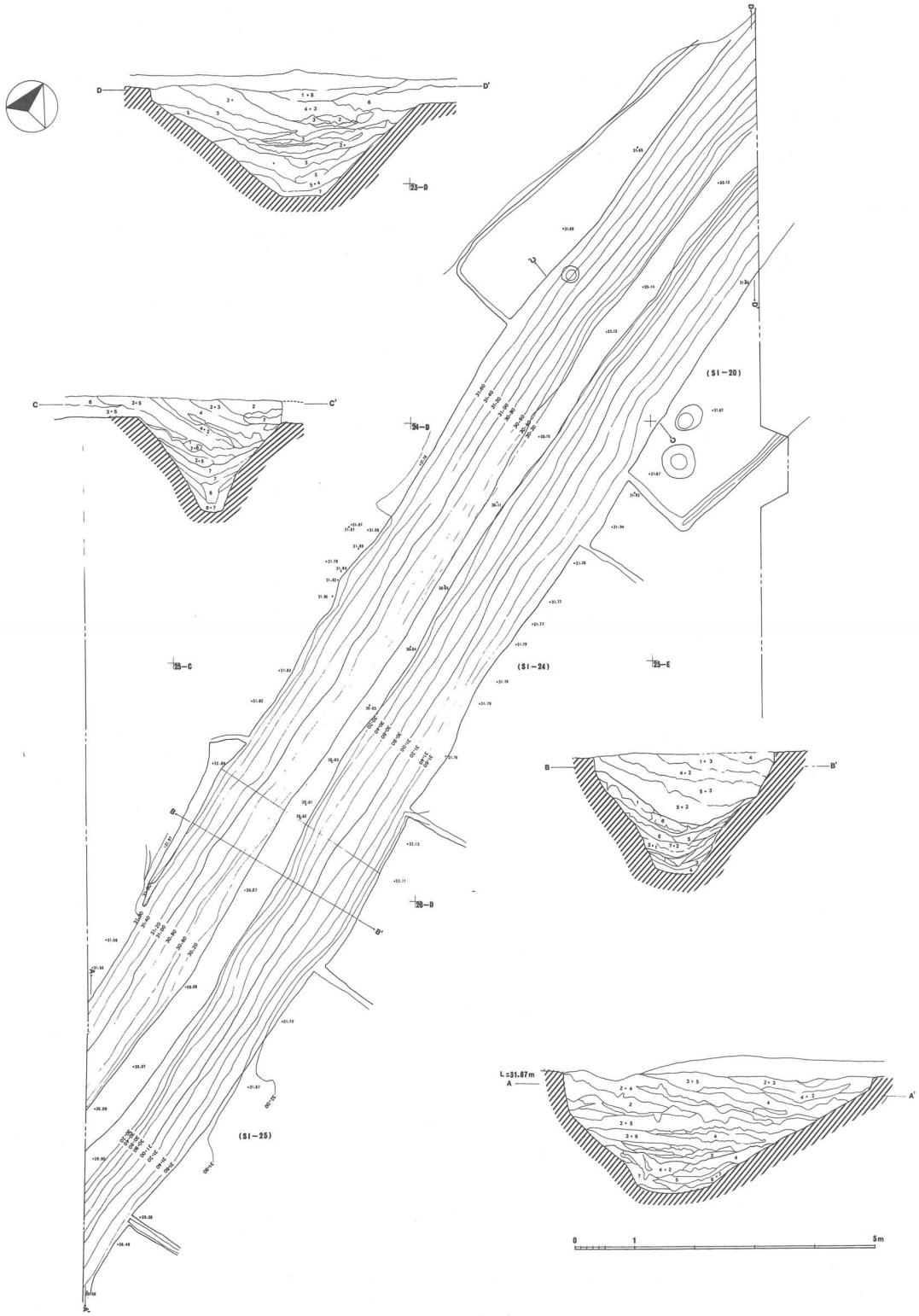
大溝遺構（ＳＤ－02）は，Ａ区，23－Ｅ・24－Ｄ・25－Ｃ・26－Ｃ・27－Ｂグリットより検出され，２号道路状遺構と完全に重複した遺構である。検出規模は長さ20m，上端幅2.44m～3.10m，底部幅35cm～45cm，深さ1.49m～2.01mまでを測れた。断面形状は，薬研形を呈し，斜面の中ほどより傾斜角度がさらに急角度で底部にいたり，底面はほぼ平坦である。主軸はＮ－6°－Ｅを指し，調査区域内で検出された部分においては，直線状に延びる。本大溝遺構と他の遺構との切り合い関係は，20・21・22・23・24・25号住居址が，いずれも本遺構によって切られている。

本遺構内の覆土は，堆積土の中間より下層が自然堆積土で，上層が人為的な堆積土であるということはすでに２号道路状遺構のところでふれた。したがって，ここでは堆積状況および堆積土の土質などについてふれておく。この堆積状況と土質について説明するにあたっては第132図のセクションＢとＣによっておこない，Ａ・Ｄについては遺構の軸方向に対して斜位になるため層位の明確さを欠くため一応参照のみにとどめる。下層の自然堆積土は，褐色土，黒褐色土，暗褐色土，黒色土が主体土として各層位に分層でき，各層とも多少の差はあっても，それぞれの上記の土を互いに含みあっている。いっぽう上層は，５～６層に分層でき，褐色土，暗褐色土，黒褐色土が主体土で黄褐色土ブロックおよびローム粒子などが多量に混入されていた。そして堆積状況は，ほぼ分層したごとに，一起に流入させていることが窺え，分層した層位は，換言すれば土を埋めもどす際の工程を示しているといえる。

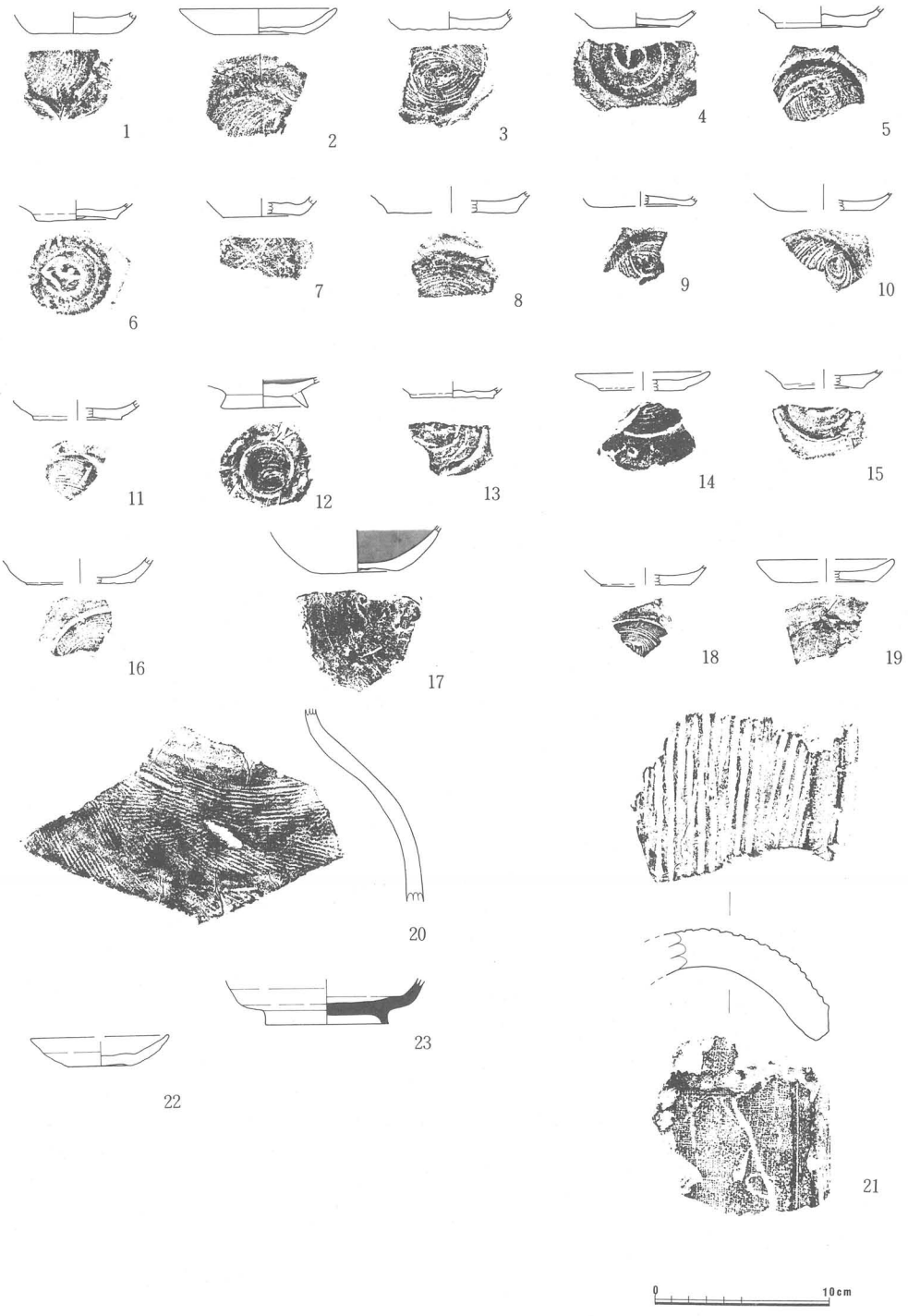
また，この上層は本遺構の西側より序々に埋めてきたことが，セクション中の層位にも明確にあらわれている。

出土遺物は，土師器片，須恵器片，礫などの小片が多量に出土している。しかし，これらは自然堆積土と同時に流れ込んだものと，埋めもどした覆土中に混入されていたものとで，本遺構の年代を示すものとは考えられなかった。ただ，これらの遺物に混って陶器片（常滑）やかわらけ片などが若干出土している。そして，陶器，かわらけ片などは本遺構の下層（自然堆積土）中からとくに多く出土している。したがって，本遺構の構築年代を推定すると，平安時代以前にさかのぼることはむずかしいと考えられ，その構築時期は，かなり年代幅をとってみても中世の段階に求めたい。

本遺構からは出土した遺物とくに土器片は，コンテナ3箱分にもおよんだ。この出土した土器片の種類としては土師器片，須恵器片，陶器片，かわらけ片など多種にわたっている。そしてこれらの土器片は，すべて遺構内の堆積土とともに流れ込んだ状態で出土している。土師器片・須恵器片については，本遺構が古墳時代から律令期にかけての集落遺跡であることや，本遺構の，検出区域内だけでも6軒の竪穴住居址を切って構築されていることなどからも，堆積土中に土師器片等が多量に含まれていてもごく自然であるといえる。こうした状況の内で，注目されるのが，陶器片およびかわらけ片が多量に出土していることである。このことは，本遺構の年代推定をおこなう場合，かなり重要な意味を含んでいることが容易に考えられる。134図には図示可能な出土遺物を掲載した。1～19・22はかわらけで1～3・5・8～12・16・18・19は底部に糸切り痕を残すタイプのかわらけである。4・6・13～15は底部にヘラ切り痕を残すタイプである。20は外面に叩き目痕を残す陶質土器で産地は不明である。21は丸瓦の破片で外面には太目の条線状を呈す叩き目痕を残し，内面には布目痕を残している。この瓦片は本遺構と本遺構によって切られている25号住居址の覆土上層で本遺構と接する部分（西側）の硬質土間状面より出土したものである。なおこの硬質土間状面はほぼ1m四方の規模で確認されたが詳細については不明であった。22はかわらけ片で本遺構の上層上部すなわち道路状遺構面より混入された状態で出土している。23は須恵器の高台付坏の破片で，22と同様の状態でほぼ同位置から出土している。なお陶器片（常滑）も数点出土しているが図示は不可能であったため，写真（図版）で紹介しておく。



第133図　2号大溝遺構コンター実測図



第134図　2号道路状大遺構・大溝遺構・出土遺物実測図

第135図　2号大溝遺構遺物分布図

(6) 遺構外出土遺物

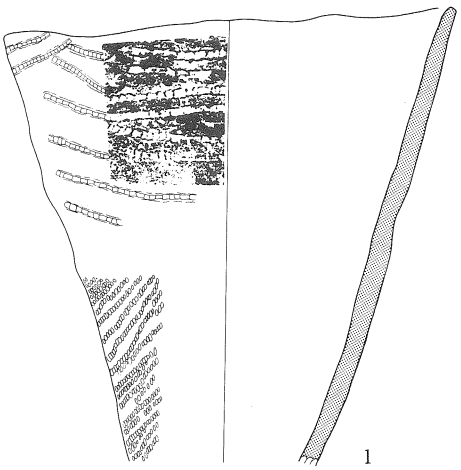
縄文土器（第136・137図）

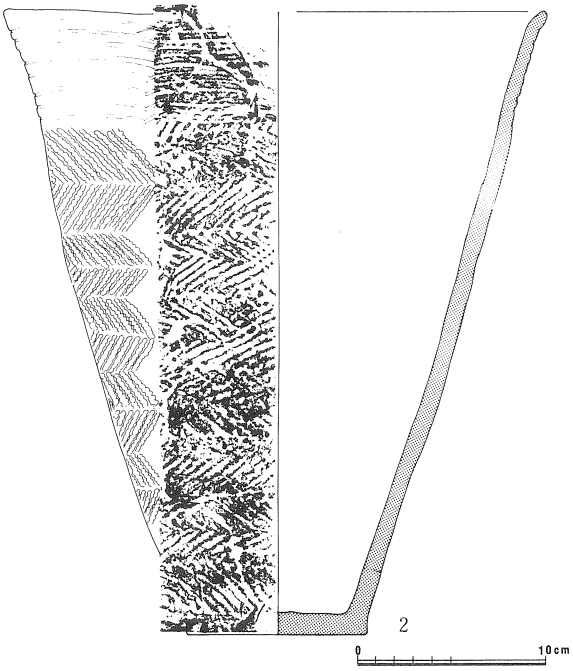
今回の発掘調査区域内において検出された遺構は，弥生時代後期と古墳時代中期から中世までの遺構がその大多数をしめ，遺物類もこれらの時期のものが中心であることはいうまでもない。しかし，発掘作業の段階で遺構の覆土中より，縄文土器片も若干ながら出土していることも事実である。これらの土器片は遺構に伴って出土したわけではなく，堆積土中に流れ込み混入されたと考えられる状態で出土している。そして，明確に縄文期の遺構として，確認された遺構が検出できなかった。しかし，本遺跡には縄文期の遺構が存在しなかったということではなく，今回の調査区域内からは検出されなかったということで，まだ未調査区域にはその存在の可能性が充分あることは，出土している土器片などからも推定できよう。また，調査区域内にも存在はしていたが，古墳時代以降の遺構を構築した段階で，破壊されたということも当然考えられる。今回の調査で出土している縄文土器は前期，中期，後期に属するものが若干ではあるが出土している。なかでも前期に属するものが最も量的に多く出土しており，型式では関山式，黒浜式，浮島式，諸磯式などに属するものである。中期では加曽利Ｅ式系，後期では加曽利Ｂ式系などの破片が出土している。とくにＢ調査区，40－Ｅグリットから検出された，11号土坑の南上端部より出土した前期の土器は，復元可能であったため形式標本としての資料性を高めた貴重なものである。（第136図）

第136図の１は底部が欠損しているが，胴部はほぼ残存している深鉢形土器である。胎土中には繊維痕である小孔を残し，色調は暗褐色で焼成は不良で，非常にもろい。外面の文様は胴部中央より上半に半截竹管の押し引き文を斜位から横位に５条ないし６条にわたって施文している。胴中央より下半にはＬ方向の斜縄文を施している。２は口縁から底部まで部分的に残存している深鉢形土器である。胎土には繊維を含んでおり，色調は暗褐色で焼成は不良である。外面の文様は口縁部から口辺部にわたって横位に７条ないし８条の沈線文を施している。口辺部以下の胴部には，羽状縄文を施文している。１，２ともに縄文時代前期の黒浜式土器に編年されるタイプである。

(7) 調査区域内出土遺物（縄文土器）

第137図の土器片は本遺跡から出土した前期から後期までの破片である。１は胎土に繊維を多量に含んだ底部片で，色調はにぶい橙色である。この底部片は黒浜式の土器片と思われる。２は中期の加曽利Ｅ式系の胴部と思われ，文様は横位に沈線を周回し，その下位にはＬ方向の縄文を施し，沈線の上位には磨り消し帯を有す。胎土は砂粒・砂礫と英粒子を含む。色調は褐色である。３は前期浮島式系の口縁部片で隆帯文の際に三角形刺突文を押し引きによって施している。胎土は砂粒と雲母のほかに繊維痕を認めることができる。色調は橙色である。４は黒浜式土器片で胎土内には繊維

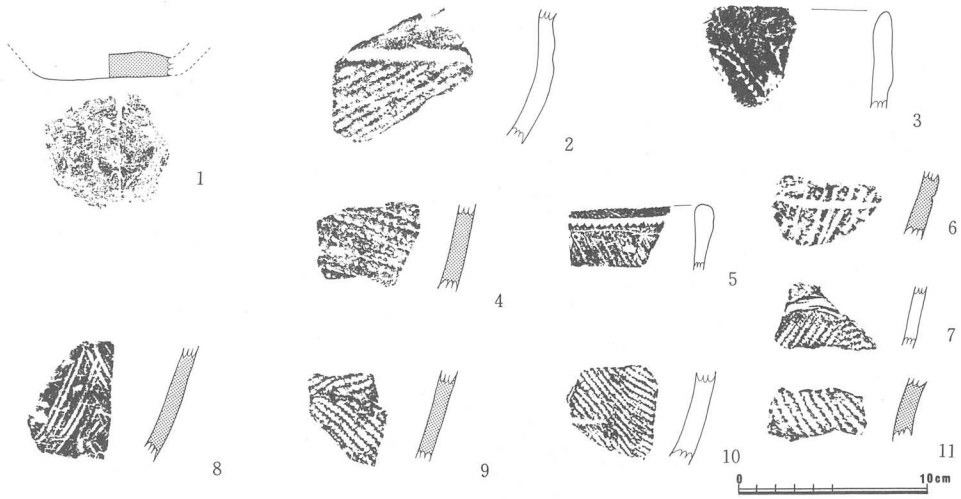




第136図　　遺構外出土土器実測図（縄文土器）

痕を残す。色調は，にぶい褐色である。5は安行式系の粗製土器の口縁部片である胎土は砂粒・パミスを含む。色調は橙色である。6は黒浜式土器の胴部片と思われる。胎土は砂粒・パミスを含み，繊維痕を残す。7は後期加曽利B式系の土器片で，文様は沈線に区画された縄文帯がみられる。胎土は砂粒で，色調は褐色である。

8は円形竹管による並行沈線文を縦位に施している。胎土は砂粒・雲母に繊維を含んでいる。前期の浮島系土器片と思われる。9は前期関山式土器片と思われ，器面にはR方向の縄文が施文され，胎土には繊維を含む。10は諸磯式系の土器片と思われるが明確ではない。胎土は砂粒のみで色調は浅黄橙色である。11は黒浜式土器片でR方向の縄文を施文している。胎土は砂粒・パミスを含み，繊維痕も残す。以上が本遺跡の発掘調査で出土した縄文土器片の一部であるが，いずれも遺構に伴って出土したものではなく，堆積土中に含まれていたものである。



第137図　　調査区域内出土土器片（縄文土器）拓影

(表45)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	かわらけ	A —— B (5.0)cm C 1.2cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・パミス B 明褐灰色 C 普通	
2	かわらけ	A 8.9cm B (5.2)cm C 1.5cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・石英・雲母 B 浅黄橙色 C 普通	

3	かわらけ	A ――― B (5.8)cm C 1.1cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 普通	
4	かわらけ	A ――― B 5.0cm C 0.9cm		底部は回転ヘラ切り痕を残す。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 良好	
5	かわらけ	A ――― B (5.2)cm C 1.1cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・パミス B にぶい橙色 C 良好	
6	かわらけ	A ――― B (4.6)cm C 0.9cm		底部は回転ヘラ切り痕を残す。	A 砂粒 B にぶい橙色 C 普通	
7	かわらけ	A ――― B 4.5cm C 1.0cm		底部にはヘラ記号。	A 砂粒・パミス B 橙色 C 普通	
8	かわらけ	A ――― B (7.8)cm C 1.2cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒 B 淡橙色 C 普通	
9	かわらけ	A ――― B 5.8cm C 0.7cm		底部は回転ヘラ切り痕を残す。	A 砂粒 B 浅黄橙色 C 普通	
10	かわらけ	A ――― B 5.2cm C 1.0cm		底部は回転ヘラ切り痕を残す。	A 砂粒 B にぶい黄橙色 C 普通	
11	かわらけ	A ――― B 5.0cm C 1.2cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 普通	
12	高台付坏	A ――― B 台径 5.0cm C 1.7cm		底部は回転糸切り痕を残し，付高台を有す。内面にはお方向にミガキを残し，黒色処理を施している。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
13	かわらけ	A ――― B 4.8cm C 0.6cm		底部は回転ヘラ切り痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
14	かわらけ	A (7.3)cm B (5.0)cm C 1.0cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 普通	
15	かわらけ	A ――― B (4.6)cm C 1.0cm		回転ヘラ切り痕を残す。	A 砂粒 B 橙色 C 普通	
16	かわらけ	A ――― B (6.2)cm C (1.4)cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 普通	

17	坏	A ——— B 4.9cm C 2.6cm		底部はヘラ切り痕を残し，わずかにあげ底となっている。	A 砂粒・パミス B にぶい黄橙色 C 普通	
18	かわらけ	A ——— B (5.2)cm C (1.1)cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B にぶい褐色 C 普通	
19	かわらけ	A 7.9cm B 5.7cm C 1.4cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B 橙色 C 普通	
20	陶質土器	A ——— B ——— C 11.2cm		外面には叩き目痕を残し，内面はナデを施す。	A 砂粒・雲母・パミス B 灰褐色 C 普通	
21	丸瓦	縦—10.5cm 横—10.0cm 厚— 2.4cm		内面には布目痕を残し，外面には平行左太沈線状の凹部を有す工具による叩き目痕を残す。	A 砂粒・パミス 石英 B 灰色 C 良好	
22	かわらけ	A (8.0)cm B 3.8cm C 1.7cm		底部は回転糸切り痕を残す。	A 砂粒・雲母 B 明褐色 C 良好	
23	高台付坏	A ——— B 台径 7.0cm C 2.6cm		底部は回転ヘラ削りを施し，内面にはロクロ回転痕を残す。	A 砂粒・雲母・パミス B 明灰色 C 普通	

(表46)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第136図 1	深鉢 （縄文土器）	A 24.0cm B ——— C 24.5cm	ほぼ直線状に外傾して立ちあがる胴部である。角棒状工具による押し引き文を胴上半部に施し，胴下半部には斜縄文をL方向に施す。		A 砂粒・繊維 B にぶい褐色 C 不良	
2	深鉢 （縄文土器）	A 29.0cm B 9.7cm C 32.0cm	胴部は底部よりほぼ直線状に立ちあがり，口縁部でやや外反ぎみとなる。口辺部には半弧状に沈線文を施し，胴部以下にはL方向，R方向に2段の斜縄文を施している。		A 砂粒・繊維 B にぶい褐色 C 不良	

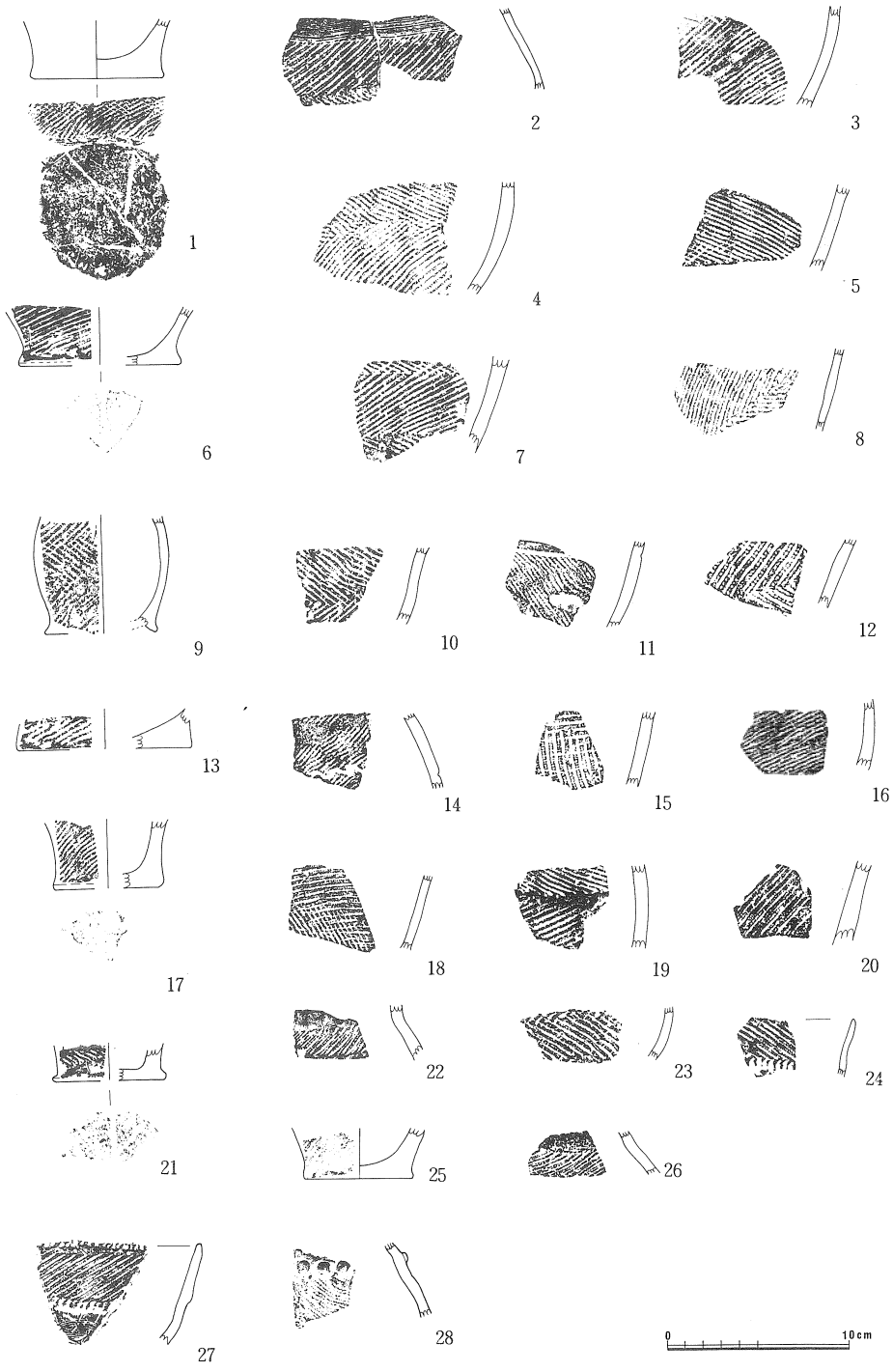
(表47)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第137図 1	深鉢 （前期）	6.7×6.5 ×0.9cm			A 砂粒・繊維 B にぶい褐色 C 不良	

2	深鉢 (前期)	8.9×4.7 ×1.0cm			A 砂粒・石英 B 暗褐色 C 普通	
3	深鉢 (前期)	4.5×4.8 ×1.0cm			A 砂粒・パミス 雲母 B 橙色 C 普通	
4	深鉢 (前期)	5.5×4.5 ×0.8cm			A 砂粒・雲母・ 繊維 B にぶい橙色 C 普通	
5	深鉢 (前期)	5.8×3.8 ×0.7cm			A 砂粒・砂礫 B にぶい橙色 C 普通	
6	深鉢 (前期)	5.8×3.4 ×0.9cm			A 砂粒・パミス 繊維 B にぶい褐色 C 不良	
7	深鉢 (後期)	5.6×3.7 ×0.6cm			A 砂粒・パミス B 褐色 C 良好	
8	深鉢 (前期)	6.4×4.3 ×0.7cm			A 砂粒・パミス 雲母 B にぶい橙色 C 普通	
9	深鉢 (前期)	4.2×5.0 ×0.8cm			A 砂粒・パミス 繊維 B 橙色 C 普通	
10	深鉢 (前期)	5.0×4.9 ×0.9cm			A 砂粒・雲母 パミス B 明褐色 C 普通	
11	深鉢 (前期)	5.0×3.8 ×0.9cm			A 砂粒・パミス 繊維 B 橙色 C 普通	

(8) 調査区域内出土遺物（弥生土器）（第138図）

本遺跡の調査区域内から検出された弥生時代の遺構は竪穴住居址が2軒（部分検出・34，41号住居址）検出されている。また明確に断定はできないが，2基の土坑（6，7号土坑）が数片の弥生土器片を伴っていることから，この時期に比定したものなどがある。したがって，今回の発掘調査



第138図　調査区域内出土土器（弥生土器）拓影

で，弥生時代の遺構として考えられるものとして4遺構が検出できた。しかし，今回の調査区域内からは，遺構は伴っていなくても弥生土器片が調査区全域の覆土，堆積土中に混在した状況で出土している。これは調査区域外の部分にも，弥生期の遺構がかなり存在する可態性を示しているといえよう。

第138図の弥生土器片は，本調査区域内より出土した口縁部片，胴部片，底部片で，器種は壺形土器あるいは，甕形土器と思われる。外器面の文様は撚糸文が施文されているものが大半である。なお，2は胴上半部から頸部にかけての破片と思われ，撚糸文の上位には横位に施された櫛歯状工具による文様が施されているのが特徴である。24・27は口縁部片の一部であるが，撚糸文のほかに隆線上に縦位のキザミが施されているのも特徴となっている。本遺跡から出土している弥生土器片はいずれも弥生時代後期のもので，型式としては栃木県東部域に中心的な分布圏をもつ，二軒屋式土器の系統を引くものである。

(表48)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

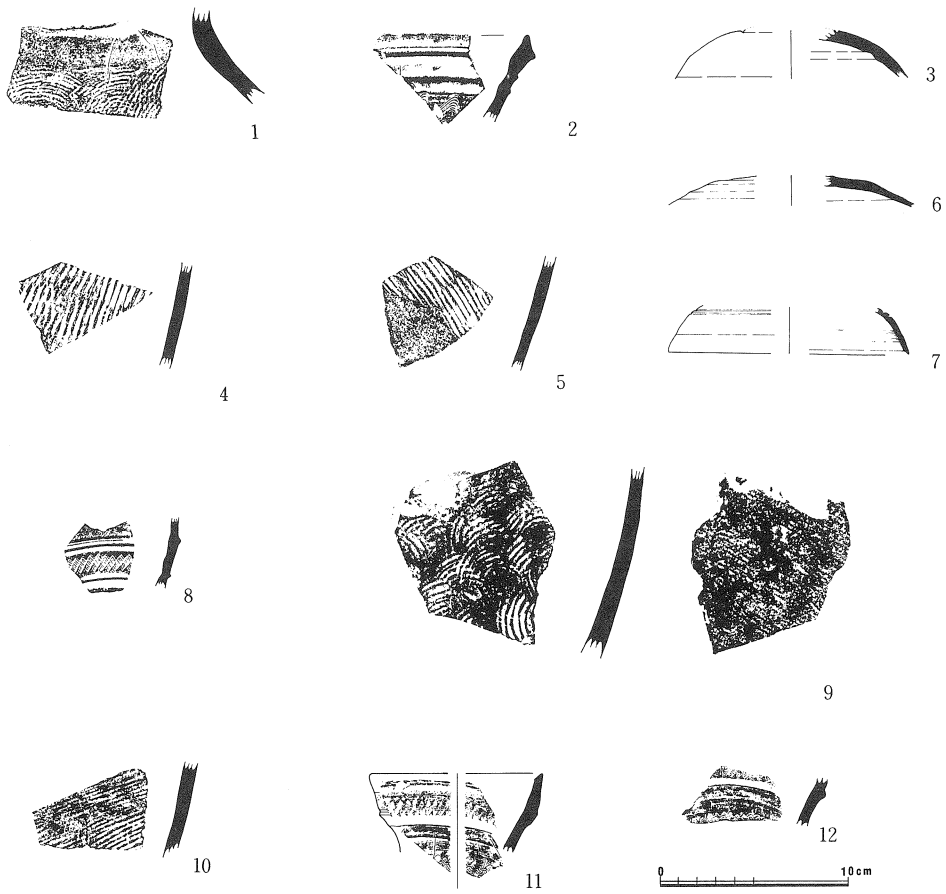
図版番号	器種	法量（cm）	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	壺 （後期）	A ——— B 7.4cm C 2.4cm	底部に木葉圧痕を残す。		A 砂粒・パミス 雲母 B 橙色 C 普通	
2	壺 （後期）	9.8×4.8 ×0.4cm	破片上位には横位にハケ目状文様が施される。		A 砂粒・雲母 B にぶい橙色 C 普通	
3 〜 14	壺 3 （後期） 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14	7.2×3.5 ×0.6cm 5.4×7.2 ×0.6cm 7.2×4.7 ×0.6cm 4.7×4.5 ×0.8cm 6.5×6.3 ×0.6cm 6.8×4.2 ×0.6cm 6.5×6.0 ×0.7cm 4.1×4.7 ×0.6cm 4.4×4.5 ×0.6cm 4.0×5.8 ×0.6cm 5.9×3.7 ×1.0cm 4.2×5.0 ×0.6cm			A 砂粒・パミス B にぶい橙色 C 普通	

15 〜 23	壺 15 (後期) 16 17 18 19 20 21 22 23	4.9×3.5 ×0.5cm 4.7×3.5 ×0.6cm 5.0×4.8 ×0.9cm 6.0×4.5 ×0.6cm 5.2×4.0 ×0.6cm 4.3×4.7 ×0.6cm 4.0×3.2 ×0.5cm 5.2×3.0 ×0.6cm 3.0×3.5 ×0.6cm			A 砂粒・パミス B にぶい褐色 C 普通	
24 〜 26	壺 24 (後期) 25 26	3.0×3.4 ×0.6cm 4.5×2.5 ×0.5cm 4.5×2.8 ×0.6cm			A 砂粒・パミス B にぶい褐色 C 普通	
27	壺 27 (後期)	5.5×5.7 ×0.6cm	口縁部片，口唇部にキザミが入る。口縁部撚糸文，その下位は波状文を施す。		A 砂粒・パミス B にぶい褐色 C 普通	
28	壺 28 (後期)	4.3×3.2 ×0.8cm	貼りコブが付されている。		A 砂粒 B 浅黄橙色 C 普通	

(9) 調査区域内出土遺物（須恵土器）（第139図）

ここで紹介する須恵器は，今回の調査地区内の堆積土中より出土したもののほか，遺構の覆土中より出土はしたが遺構との関連が明確につかめなかった破片について図示した。1は甕の頸部から肩部にかけての破片である。内面はナデを施し，外面の肩部には同心円状の叩き目痕を残している。出土位置はA地区の表採一括で取りあげている。2は壺ないしは甕で，かなり外反した口縁部片である。外面には回転横ナデ時に削り出した微隆線を周回させているほか，その下位には波状文を施している。出土場所はA地区の表土内より出土している。3は高坏の破片で内面は回転横ナデ，外面は回転ヘラナデ痕を残す。出土場所は25号住居址の覆土中より出土している。4は外面に叩き目痕を残し，内面にはほぼナデを施しているが，わずかに叩き目痕も認められる。出土場所は1号土坑の覆土上層である。器種は甕の胴部片と思われる。5は器種は不明だが，甕ないしは壺などの破片と思われる。外面の上位には叩き目痕，下位にはヘラ削り痕を残す。A地区の表土内より出土している。6は杯蓋片で内外面ともに回転横ナデを施す。これもA地区の表土内より出土している。

7は坏蓋の破片で，かえり部は明確なものではなく，わずかに沈線状のかえりを残す。これもA地区表土内からの出土である。8は坏の口辺部片で外面には2条の微隆帯間に波状文を施している。出土地区はA区の表土中である。9は大型甕の胴部片で外面口は自然釉がかかり，叩き目痕も認められる。内面には同心円状の叩き目痕を明確に残す。出土位置はA地区8－Dグリット堆積土中である。10は甕片で，外面は叩き目痕，内面はヘラ削り痕を残す。出土位置は42号住居址の覆土中である。11は坏の口辺部片で，内面には灰釉がかり，外面には隆線と波状文が施されている。出土位置は49号住居址の覆土中である。12は11と一個体と思われ，やはり，49号住居址の覆土中である。年代的には2，11，12が5世紀末と推定され，8は6世紀初頭，7は6世紀中頃，1，4，5，10は9世紀代のものと推定できよう。



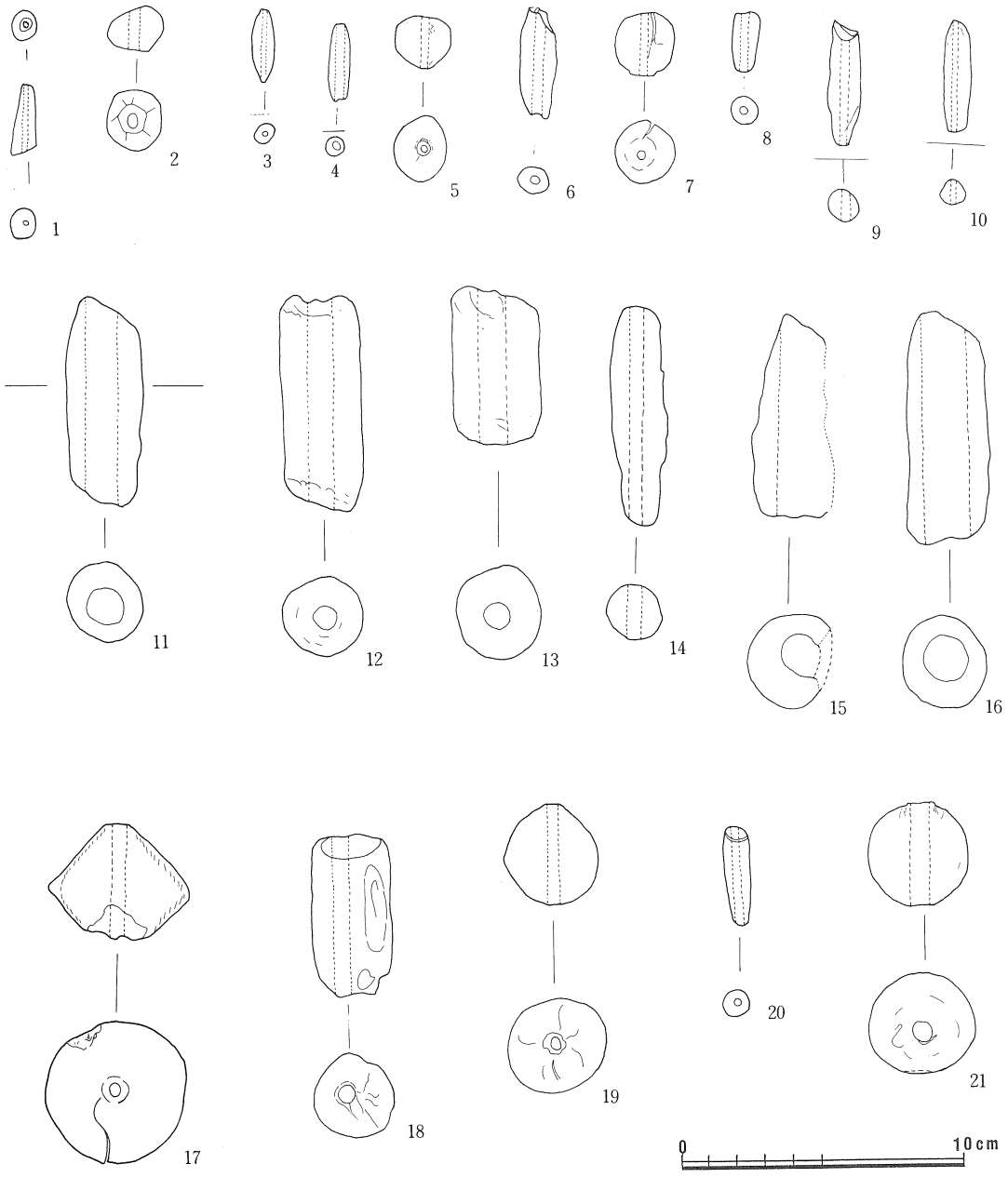
第139図　調査区域内出土土器片（須恵器）拓影

⑽ その他の出土遺物 ——土製品——(第140・141図)

本遺跡から出土した遺物は土器のほかに土製品が若干出土している。出土している土製品としては小型管形土錘，管形土錘，球形土錘などであり，計測数値は以下のとおりである。(表50)

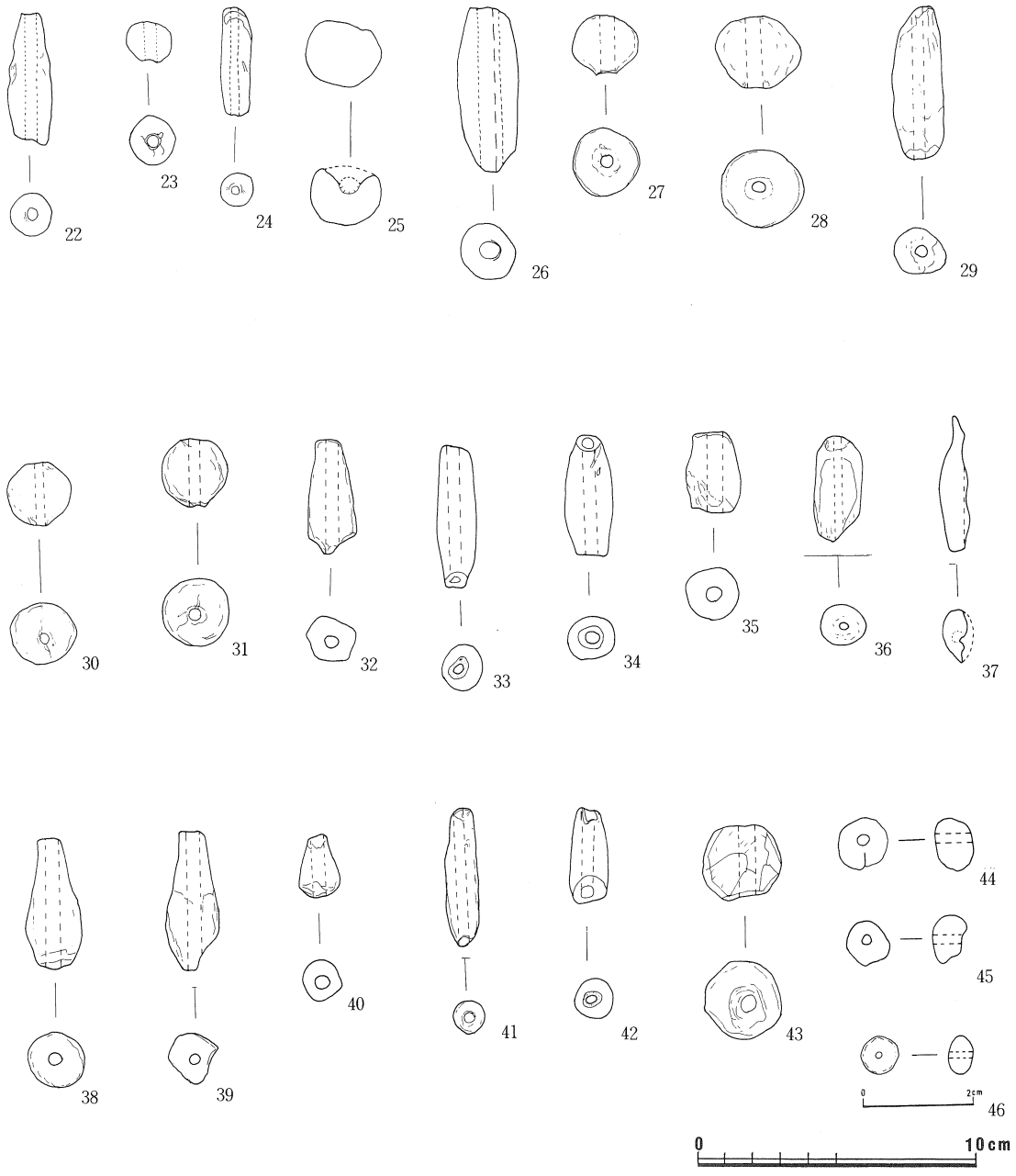
(表49)　　A 口径　B 底径　C 現高　　A 胎土　B 色調　C 焼成

図版番号	器　種	法量 (cm)	形状及び文様の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第139図 1	甕 (胴上半部)	5.0×8.0 ×0.8cm		外面には同心円状の叩き目痕を残す。内面はナデを施している。	A 砂粒・パミス B 灰色 C 良好	
2	甕 (口縁部)	4.5×5.2 ×0.6cm	外面には波状文が施される。		A 砂粒 B 暗灰色 C 良好	
3	坏蓋	6.4×8.5 ×0.9cm		内面は回転横ナデ。外面は回転ヘラナデ。	A 砂粒 B 灰色 C 普通	
4	甕 (胴部)	7.2×4.8 ×0.5cm			A 砂粒 B 暗褐色 C 良好	
5	甕 (胴下半部)	6.2×5.5 ×0.5cm		上部には叩き目。下部にはヘラ削り痕を残す。	A 砂粒・雲母・長石 B 明灰色 C	
6	坏蓋	5.5×5.0 ×0.7cm		回転ヘラ削り。横ナデ。	A 砂粒・砂礫 B 明灰色 C 普通	
7	坏蓋	4.7×2.8 ×0.3cm			A 砂粒 B 灰色 C 普通	
8	甕 (口辺部)	3.5×3.5 ×0.5cm			A 砂粒 B 暗灰色 C 良好	
9	甕 (胴部片)	9.5×8.0 ×0.9cm		外面は淡黄色の自然釉がかかり，内面には同心円状の叩き目痕が残る。	A 砂粒 B 灰色 C 良好	
10	甕 (胴部片)	6.0×4.8 ×0.8cm		内面はナデ。外面はわずかに叩き目痕を残す。	A 砂粒 B 明灰色 C 普通	
11	甕 (口辺部片)	5.0×5.0 ×0.7cm	櫛歯状工具による波状文を施す。	内面には灰釉がかかる。	A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 良好	
12	甕 (口辺部)	2.8×5.0 ×0.6cm	11と一個体と思われる。		A 砂粒 B にぶい赤褐色 C 良好	



第140図　土製品遺物実測図（1）

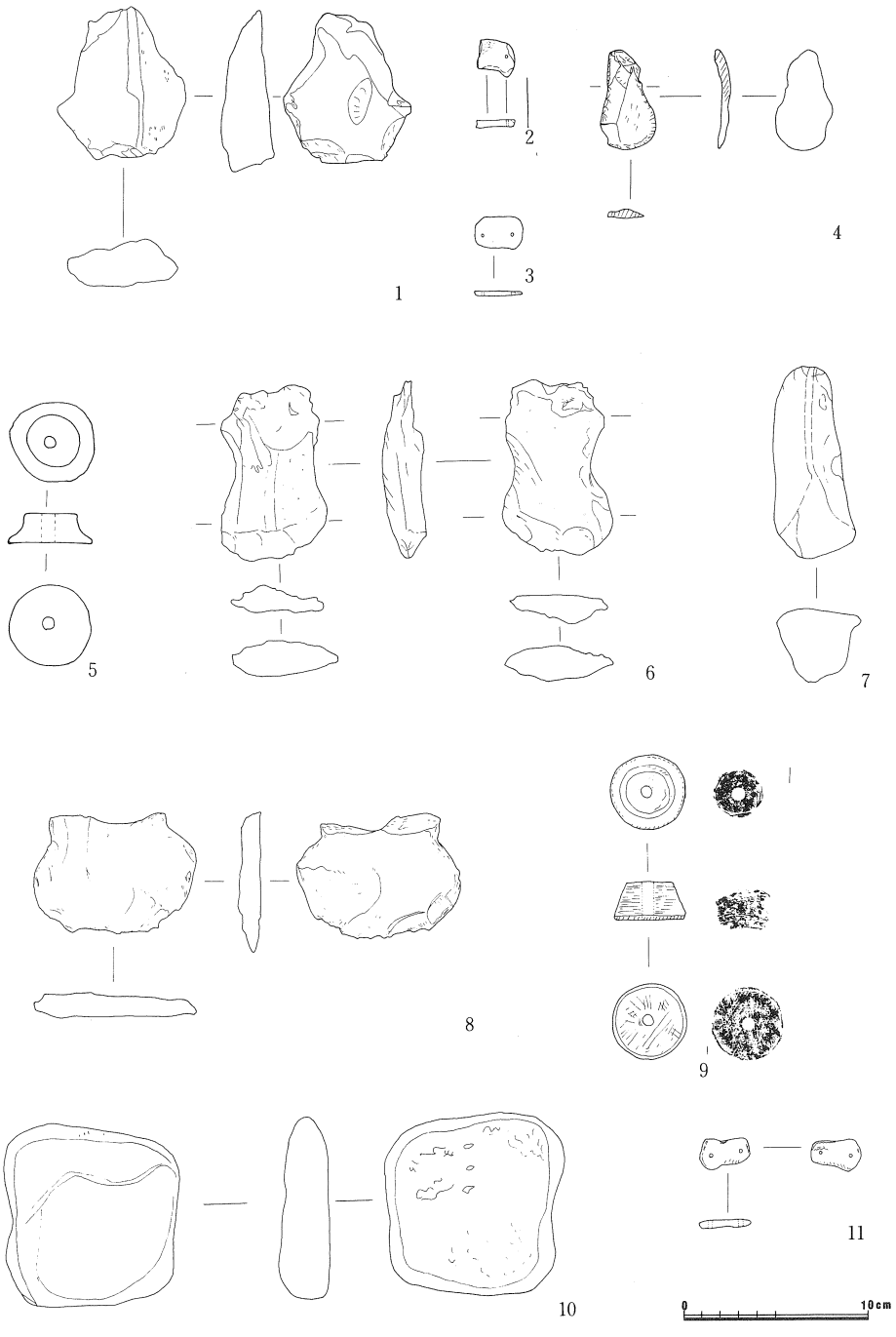
これらの土錘は実用品として用いられたものと（11～19，21～22，25，26～43），装身具として用いられていたと考えられるもの（1～10，20，44～46）などがある



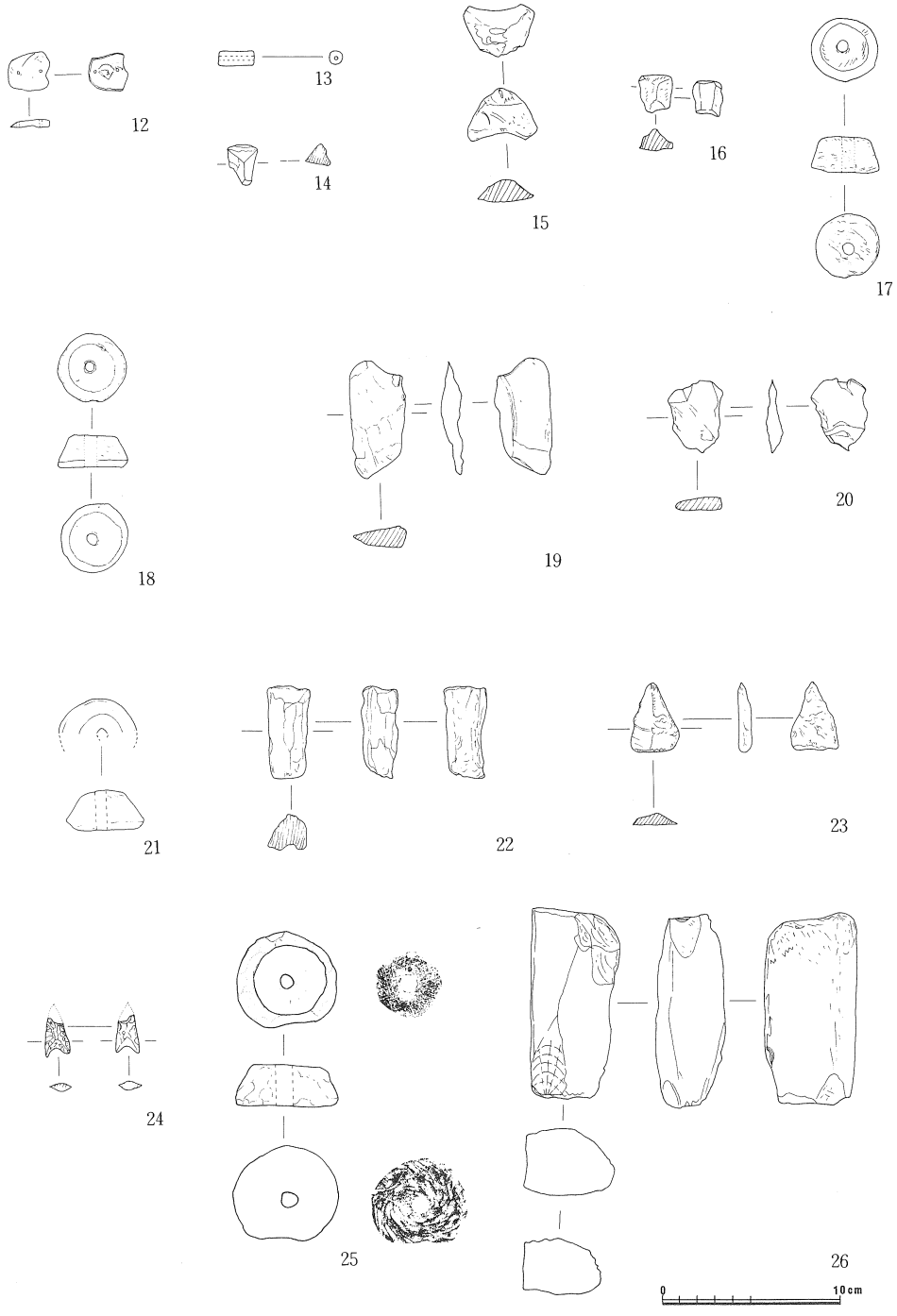
第141図　土製品遺物実測図（２）

(11)　その他の出土遺物 ――石製品――

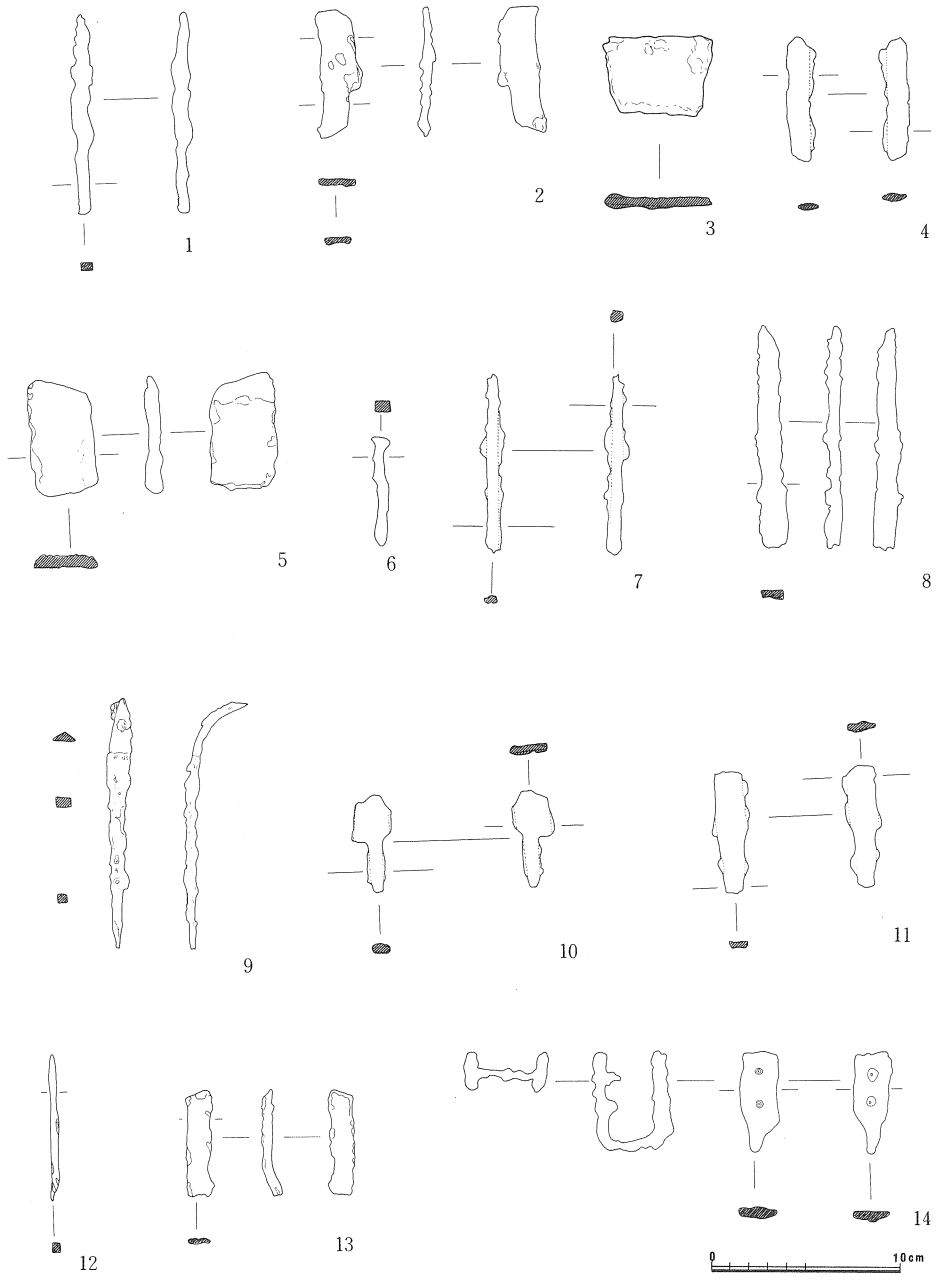
出土した石製品は，剥片，石斧（片），石鏃，滑石製模造品，紡錘車などである。計測数値は以上のとおりである。(表51)



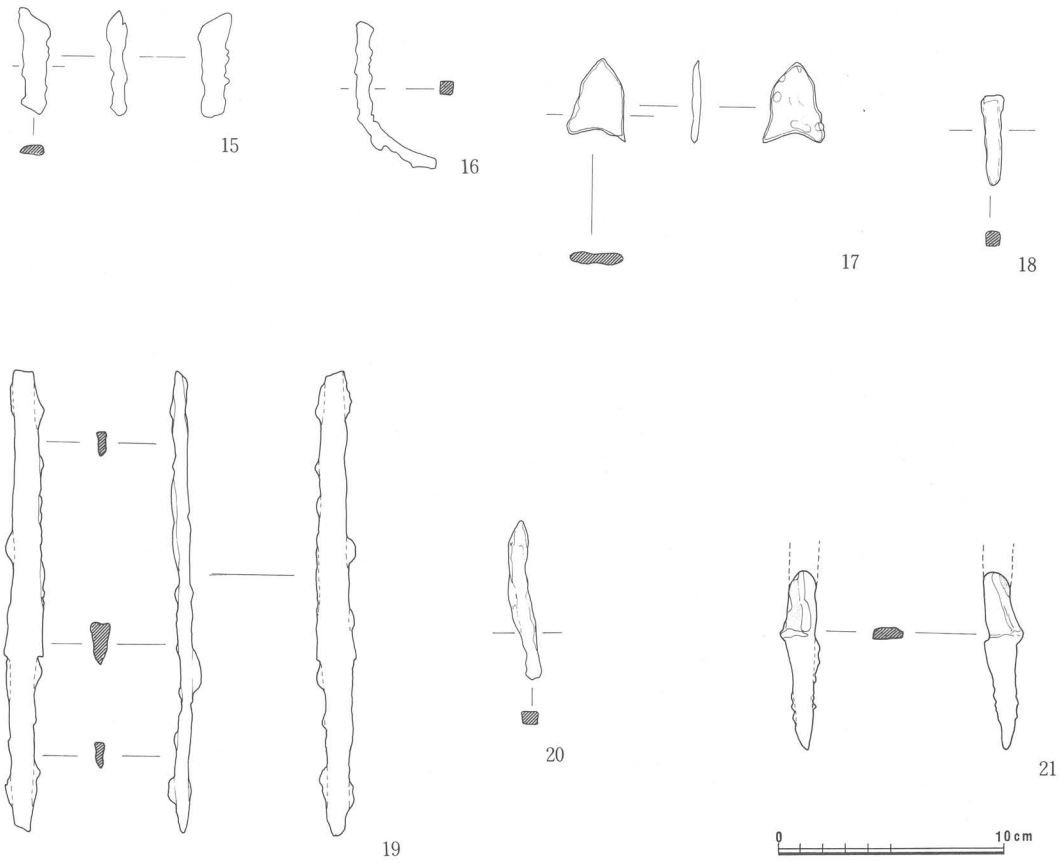
第142図　石製品遺物実測図（1）



第143図　石製品遺物実測図（２）



第144図　鉄製品遺物実測図（1）



第145図　鉄製品遺物実測図（２）

⑿　その他の出土遺物 ――鉄製品――

鉄製品は，刀子，鉄鏃，釘，などのほか，不明鉄片が出土している。計測数値は以上のとおりである。(表52)

出土土製観察表

表50

名　称	長　さ	径	孔　経	重　さ	出土遺構	出土層位	備　考
管　玉	2.6cm	1 cm	0.2cm	1 g	S 1 −02	フク土中	①
土　錘	2.1cm	1.5cm	0.5×0.4cm	5 g	S 1 −02	フク土中	②
管　玉	2.6cm	0.8cm	0.22cm	1 g	S 1 −02	No. 46	③
管　玉	2.8cm	0.8cm	0.2cm	1 g	S 1 −02	No. 46	④
土　錘	1.8cm	2 cm	0.3cm	6 g	S 1 −02	フク土中	⑤
管　玉	3.9cm	1.2cm	0.35cm	4 g	S 1 −02	No. 43	⑥
土　錘	2.1cm	2.1cm	0.5cm	8 g	S 1 −02	No. 35	⑦
管　玉	2.1cm	0.95cm	0.3cm	2 g	S 1 −02	No. 45	⑧
管　玉	4.5cm	1.2cm	0.3cm	4 g	S 1 −02	No. 37	⑨
管　玉	3.8cm	1 cm	0.2cm	3 g	S 1 −02	No. 47	⑩
管形土錘	7.2cm	2.7cm	1.25cm	35 g	S 1 −09	No. 25	⑪
管形土錘	7.7cm	2.9cm	0.9cm	60 g	S 1 −30	フク土中	⑫
管形土錘	5.6cm	3.1cm	1 cm	50 g	S 1 −30	フク土中	⑬
管形土錘	7.7cm	2 cm	0.5cm	24 g	S 1 −16	No. 41	⑭
管　形　錘	7.1cm	3.4cm	1.7cm	46 g	S 1 −09	No. 24	⑮ 須恵質
管　形　錘	8.1cm	3.2cm	1.6cm	58 g	S 1 −09	No. 26	⑯ 須恵器
土　錘	4.1cm	5.1cm	0.5cm	81 g	S 1 −35	No. 4	⑰
管形土錘	5.6cm	3 cm	0.6cm	40 g	S 1 −16	No. 44	⑱
土　錘	3.5cm	3.4cm	0.48cm	36 g	S 1 −20	フク土中	⑲
管　玉	3.5cm	0.9cm	0.25cm	3 g	S 1 −22	No. 3	⑳
土　錘	3.5cm	3.6cm	0.7cm	42 g	S 1 −05	No. 37	㉑
管形土錘	4.8cm	1.6cm	0.45cm	10 g	S 1 −24	フク土中	㉒
土　錘	1.5cm	1.7cm	0.4cm	5 g	S 1 −24	フク土中	㉓
管　玉	3.8cm	1.1cm	03cm	5 g	S 1 −25	フク土中	㉔
土　錘	2.4cm	2.8cm	0.8cm	10 g	S 1 −29	フク土中	㉕
管形土錘	6 cm	22cm	0.8×0.6cm	21 g	S 1 −38	No. 25	㉖
管　玉	2.2cm	2.5cm	0.5cm	10 g	S 1 −39	フク土中	㉗
土　錘	2.6cm	3 cm	0.5×0.3cm	20 g	S 1 −43	フク土中	㉘
管形土錘	5.5cm	1.8cm	0.4cm	19 g	S 1 −43	フク土中	㉙
土　錘	2.2cm	2.25cm	0.3cm	10 g	S 1 −50	フク土中	㉚
土　錘	2.4cm	2.5cm	0.4cm	14 g	S 1 −50	No. 4	㉛
管　玉	4.1cm	1.8cm	0.45cm	4 g	S 1 −44	No. 10	㉜
管　玉	5 cm	1.5cm	0.45cm	10 g	S 1 −44	No. 4	㉝
管　玉	4.2cm	1.8cm	0.4cm	12 g	S 1 −44	No. 7	㉞
管　玉	2.8cm	1.9cm	0.55cm	8 g	S 1 −44	No. 5	㉟
管形土錘	3.7cm	1.6cm	0.3cm	60 g	S 1 −44	フク土中	㊱
管形土錘	4.9cm	2.9cm	0.5cm	70 g	S 1 −44	フク土中	㊲
管形土製品	4.7cm	2 cm	0.5cm	14 g	S 1 −44	フク土中	㊳
管　玉	5 cm	1.8cm	0.5cm	9 g	S 1 −44	フク土中	㊴
管　玉	2.25cm	1.4cm	0.5cm	2 g	S 1 −44	フク土中	㊵
管　玉	4.9cm	1.2cm	0.4cm	5 g	S D −02	フク土中	㊶
管　玉	3.35cm	1.5cm	0.45cm	5 g	S 1 −45	No. 3	㊷
土　錘	2.7cm	2.8cm	0.6cm	20 g	S 1 −45	フク土中	㊸
土　錘	1.5cm	1.8cm	0.4cm	5 g	A区テストトレンチ		㊹
土　錘	1.25cm	1.5cm	0.35×0.4cm	2.5 g	A区テストトレンチ		㊺
小　玉	0.5cm	0.7cm	0.1cm	2 g	S 1 −33	フク土中	㊻

出土石製品観察表

表51

名　称	現長×最大幅×厚さ	重　土	遺材質	遺　構	層　位	備　考
石　　刃	8.2× 6 ×2.3cm	110 g		S 1 −03		①
双　孔　板	2.1×1.7×0.5cm 孔径0.15cm	2 g		S 1 −02	No. 2	②
双　孔　板	2.5×1.6×0.2cm 孔径右0.17×左0.17cm	1 g	滑石	S 1 −07	フク土中	③
石　サ　ジ	5.4cm×3.05×0.55cm	9 g		S 1 −04	フク土中	④
紡　錘　車	4.4×2.8×2.1cm	40 g		S 1 −07	No. 22	⑤
石　　斧	9.6×5.8× 2 cm	130 g		S 1 −11	フク土中	⑥
石　　器	10.1×4.1× 4 cm	170 g		S 1 −11	フク土中	⑦
石　　斧	5.8× 9 ×1.2cm	100 g		S 1 −17	フク土中	⑧
紡　錘　車	4.1×2.8× 2 cm 孔径0.6cm	50 g		S 1 −23	No. 1	⑨
石	9.9×10×2.8cm	440 g		S 1 −28		⑩
双　孔　板	2.7×1.7×0.4cm 孔径右0.2　左0.2cm	4 g		S 1 −32	フク土中	⑪
双　孔　板	2.3×2.2×0.3cm 孔径右0.2×左0.2cm	4 g		S 1 −32	フク土中	⑫
首　　飾	2.05×0.8cm 孔径0.2cm	3 g		S 1 −44	フク土中	⑬
剝　　片	2.3×1.7×1.2cm	2 g	黒曜石	S 1 −44	フク土中	⑭
剝　　片	3.9×2.4×1.2cm	10 g	黒曜石	S 1 −37	フク土中	⑮
剝　　片	2 × 2 ×1.3cm	0.5 g	黒曜石	S 1 −37	フク土中	⑯
紡　錘　車	3.75×2.8× 2 cm 孔径0.7cm	42 g		S 1 −37	No. 2	⑰
紡　錘　車	3.8×2.7×1.8cm 孔径0.7cm	41 g		S 1 −38	フク土中	⑱
石　　刃	6.6×3.2×1.3cm	22 g		S 1 −42	No. 3	⑲
石　　刃	4.1×3.1×0.8cm	9 g		S 1 −41	フク土中	⑳
紡　錘　車	4.3×2.5×2.2cm 孔径0.6cm	28 g		S 1 −42	フク土中	㉑
石　　角	5.2×2.35×2.1cm	31 g		S 1 −45	フク土中	㉒
石　　鏃	3.9×2.7×0.7cm	6 g	黒曜石	S 1 −49		㉓
石　　鏃	2.1×1.4×0.5cm	0.5 g		A区表土中		㉔
紡　錘　車	5.7× 4 ×2.2cm	108 g		A区R − 4		㉕
	10.6× 5 ×3.7cm	330 g		B区Ⅱ層		㉖

出土鉄製品観察表

表52

名　称	現長×幅×厚さ	重　さ	遺　構	層　位	備　考
	10.7×0.5×0.53cm	18 g	S 1 −01	フク土中	①
刃　　子	6.8×2.3×0.7cm	15 g	S 1 −01	フク土中	②
	5.8×4.1×0.5cm	41 g	S 1 −03		③
鎌　　先	6.7×1.4×0.4cm	9 g	S 1 −05	No. 28	④
	6.2×3.5×0.7cm	39 g	S 1 −05	フク土中	⑤
釘	5.7×0.6×0.8cm	5 g	S 1 −07	フク土中	⑥
	9.4×0.6×0.5cm	9 g	S 1 −09	ベルト内	⑦
刃　　子	11.8×1.2×0.5cm	16 g	S 1 −15	フク土中	⑧
	13.4×1.1×0.6cm	29 g	S 1 −15	フク土中	⑨
刃　　子	5 ×2.1×0.3cm	5 g	S 1 −16	No. 2	⑩
刃　　子	6.4×1.8×0.4cm	10 g	S 1 −16	No. 1	⑪
	7.8×0.35×0.35cm	5 g	S 1 −25	フク土中	⑫
	5.7×1.4×0.6cm	7 g	S 1 −30	カマド中	⑬
	右5.4×1.85×0.5cm 左5.3×1.95×0.6cm	30 g	S 1 −30	床　　面	⑭
	4.7×1.3×0.5cm	6 g	S 1 −31	フク土中	⑮
釘	8.5×0.5×0.5cm	10 g	S 1 −38	フク土中	⑯
鉄　　鏃	3.8×2.6×0.4cm	6 g	S 1 −39	No. 4	⑰
釘	3.9× 6 ×6cm	4 g	S 1 −44		⑱
刃　　子	20.6×1.2×0.6cm	35 g	S 1 −42	No. 4	⑲
	7.02×0.5×0.7cm	10 g	S 1 −45	フク土中	⑳
刃　　子	7.8×1.2×0.4cm	10 g	S 1 −19	フク土中	㉑

第4章　ま　と　め

第1節　遺構について

竪穴住居址

本遺跡から検出した竪穴式住居址は53軒であった。このうち12号住居址は調査区域内にコーナー部がわずかに確認されただけで，その規模，形状，時期については，全く不明であった。また，36号住居址についても，わずかな竪穴の掘り込みが37号住居址の北側に遺存するだけで，詳細については，これも不明としかいわざるを得なかった。さらに，44号住居址に想定した住居址も，他の住居址（39･42･45号住居址）と土坑遺構（9･12号）とが切り合っており，このため床面の遺存部分は確認したが，規模，形状などについては全く不明で，そのプランを推定することも不可能であった。したがって，不明あるいは住居址遺構として疑問を有する3軒を差し引くと，本遺跡から検出した住居址遺構で，資料性の高い遺構は50軒ということになる。ここでは，これらの検出した竪穴住居址を，出土遺物（土器）の編年を基調に，切り合い関係も考慮に入れながら時期別に分類し，その特徴について述べたいと思う。時期分類にあたっては，大別して4期に分けられるが時期によっては，さらに細分できる時期もある。これらについては，可能な限り文中においての説明にとどめる。

（Ⅰ　期）

本遺跡においてのⅠ期とは弥生時代後期で，本時期に比定できる住居址は29・41号住居址の2軒がこの時期に相当し，弥生時代後期に属す弥生土器および土器片が出土している。

29号住居址 ――

本住居址はその$\frac{1}{2}$程度が調査区域外であることと，28号住居址によって切られていることなどから実質的な検出面積はわずかである。形状はほぼ隅丸方形と推定でき，壁際には壁溝などの存在は認められなかった。柱穴と考えられるピットは2個確認された。その他の付属施設，規模などは不明である。

41号住居址 ――

本住居址も明確な規模，形状を把握することはできなかったが，西側の一部と床面は確認している。　以上が，今回の調査で部分的ではあるが，確認された弥生時代後期の住居址であり，いずれも二軒屋式土器（片）を伴っている住居址で，これをⅠ期とした。

（Ⅱ　期）

本遺跡においてⅡ期とは，古墳時代中期の和泉式土器を伴出する住居址である。このⅡ期に比定できる住居址は，4・7・16・17・20・24・25・28・47・49号住居址など10軒の住居址が確認され

た。このうち平面プランおよび規模が推定できるものとして7軒の住居址をあげることができる。

本期の住居址の面積は推定・検出面積を含めて，最小で14.0㎡から最大のもので64㎡までの面積を有するものが検出されている。平面プランからみた場合，7号，45号住居址が隅丸方形に近い形態で，17号住居址はほぼ長方形を呈しているほか，他の住居址については方形プランであった。

壁溝の存在は7号・50号住居址の各壁際でみられ，28号住居址は南東側が18号住居址によって切られているため，不明だがほぼ全周していたことが推定できる。47号住居址は南・西の各壁面際のみから確認された。

柱穴は7号住居址では明確に検出できず，17号住居址でも西側に2個検出できただけである。柱穴の数は4本柱のものが28号・47号・49号・50号住居址の4軒から確認され，16号住居址については6本柱であったと推定できる。

火床遺構としては炉が7号・16号・17号・28号・49号の5軒の住居址から確認できた。47号50号については炉は検出できなかった。炉が検出できた住居址の中で49号住居址からは2基，16号住居址では3基の炉が検出されている。

貯蔵穴と思われる遺構は7号・47号住居址から検出されてはいるが，明確に貯蔵穴と断定することはできない。

（Ⅲ　期）

Ⅲ期は古墳時代後期の鬼高式土器を伴出する時期で，本遺跡からは，1・3・5・11・14・15・22・23・32・37・38・45号の12軒の住居址が検出された。このうち遺存状態の良好なものとして11軒の住居址をあげた。

本期の住居址で床面積が推定，検出面積のものを含めると，最小は35号・40号住居址の8.0㎡である。最大のものとしては5号住居址の39.2㎡がある。

平面プランで方形を呈しているものは，1号，5号，22号，35号があげられ，隅丸方形を呈している住居址は，15号，37号，38号住居址がある。

壁溝の存在する住居址は，5号，11号，37号住居址の3軒である。柱穴は1号，15号，35号では検出できなかったが，他の住居址からは検出されている。5号，37号住居址のカマドは，本遺跡で検出された住居址のカマドとしてはかなり大型なものである。カマドの付設されている位置は，北壁ないしは東壁に付設されているものが多い。貯蔵穴は38号住居址で確認されているのみで，他の住居址からは検出されなかった。

（Ⅳ　期）

Ⅳ期は奈良時代から平安時代中葉にかけての土器を伴出する住居址で，2・6・9・10・13・18・24・26・27・30・34・40・42・51・52号住居址が本期に相当する。本期の住居址の面積は最小

で10.8㎡，最大で22.6㎡を有しているが，全体的にみて，前段階の住居址に比べるとやや小型化しているといえる。

平面プランは長方形あるいは隅丸方形を呈すものが多く検出されている。壁溝は40号，51号住居址にはみられたが，他の住居址ではみられなかった。柱穴は2号・9号・40号住居址で検出されたのみで，本期の他の住居址では検出されなかったが，2号，9号住居址は竪穴内部に柱穴を有している。40号住居址では竪穴外部（西側壁上部）に2個のピットが検出されたが，このピットが本住居址のメインの柱の柱穴とは断定できない。しかし，上屋構造に関連するピットであることは充分考えられる。火床遺構としてはカマドが付設されており，北側壁ないしは東側壁の中央あるいは両コーナー部のいずれかに寄せてつくられている。カマドの付設形態はカマドの中心が壁面上端部に位置し，焚口および火床部が竪穴内に，煙道部は壁面の外側に切り込んだ状態でつくられている。なお，カマドの構築材は砂粒子を多く含む灰白色粘土が基本となっているが，26号，51号住居址のカマド部には粘土を使用した痕跡が認められず，焼土塊と焼土粒子が散在しているにすぎなかった。そこで，従来の粘土材で構築されたカマドではなく，他の質の土を構築材として使用していたものと思われる，また，土師質製の置きカマドを使用していた可能性も考えられるが，今回の調査においては置きカマドの破片と思われるものは確認されてはいない。

以上が，今回の調査によって検出された住居址のうち遺存状態が比較的良好で，しかも遺物（土器）の出土状況が明確に把握できた住居址遺構を本遺跡の土器編年に基づいて分類したものである。第4図に図示した住居址以外にも，各期に相当すると考えられた住居址遺構もあったが，切り合い関係によって遺構の遺存状態があまり良好でなかったため，ここでは割愛したものもある。

時期設定については第4図では広義の時代別で分けたが，ここでは土器編年の細分に応じて，さらに各時期に分けた時期もあり，これらについては以下のとおりである。

Ⅰ期――弥生時代後期後葉の二軒屋式土器を伴う。

（第4図のⅠ期）

Ⅱ期――古墳時代中期で和泉式土器を伴うがこれらをさらに新旧のタイプで分類しそれぞれをA，Bの2時期に細分した。

（第4図のⅡ期）実年代としては5世紀後葉と考えたい。

Ⅲ期――古墳時代後期に相当する鬼高式土器を伴う時期で，本遺跡においては，土器編年からさらに3時期に細分できる。

（第4図のⅢ期）実年代としては6世紀後葉から7世紀前葉に考えたい。

Ⅳ期――本期以降は政治史的には律令制が導入されていた時期で，実年代を以下の年代に比定した。

Ⅳ期A―8世紀後葉～末。

Ⅳ期B—9世紀中葉から10世紀初頭。

Ⅳ期C—10世紀後葉以降。

土坑遺構（竪穴状遺構）

本遺跡から検出した土坑遺構は13基検出されているが，いずれも出土遺物の出土状況が明確ではなく，すべて覆土に混入されている状態であったため年代を確定することは難しい，しかし，覆土中からの出土遺物を，状況的判断の一資料とするならば，ある程度の時期を推定することが可能なものと考えられる。こうした意味で，土坑遺構をその出土遺物からみて年代推定すると

1号土坑——縄文前期

2号土坑——不明

3号土坑——不明

4号土坑——不明

5号土坑——不明

6号土坑——弥生後期

7号土坑——弥生後期

8号土坑——不明

9号土坑——（竪穴状遺構）——中世

10号土坑——（竪穴状遺構）——中世

11号土坑——不明

12号土坑——（竪穴状遺構）——中世

13号土坑——不明

以上が土坑遺構の推定年代である。

井戸遺構

本遺構からは，覆土中より礫，土師器片，陶器片などが若干出土しているが，その年代を明確に断定できるだけの状況では出土しなかった。しかし，覆土中より中世陶器（常滑片）が出土していることから本遺構の年代を一応中世までさかのぼれると考えている。

大溝遺構

本遺構の覆土は下層の自然堆積土と上層の人為的な埋土との部分からなり，遺物類も雑多なものが混入されていた。そこで，本遺構の構築年代を考えた場合，問題となるものが，下層の自然堆積

土中より出土した遺物の時期が，本遺構の存在していた時期の遺物とみることが一応できる。そこで下層より出土している遺物としては土師器片，須恵器片，陶器片，かわらけ片などが含まれているが，土師器片，須恵器片については，本遺構の存在する周辺部一帯がこれらの土器を伴う時代の遺跡であり，かつ本遺構も，この時期の住居址遺構を何軒も切って構築されている。したがって，堆積土中に土師器片，須恵器片などが含まれているのも当然と考えられる。しかし，これらの土器片以外にも陶器片（常滑片）やかわらけ片などが多数含まれていたことを考えると，この陶器片、かわらけ片が製品として使用されていた時期に，本遺構が存在していたことを示している。そして，廃棄された陶器片やかわらけ片などが流れこんで覆土中に混入されたものと考えられる。したがって，本遺構の構築された時期，存続していた時期を，陶器，かわらけの使用されていた時期に求めると，中世の遺構である可能性がきわめて高いといえる。実年代としてはかなりの年代幅を考慮に入れても出土している常滑片から推定すると，13世紀ないし14世期の時期として考えたい。

道路状遺構

本遺構は２ヵ所から確認されているが，１号道路状遺構については年代は不明。２号道路状遺構においては構築された時期が，大構遺構との関連から，ある程度の推定は可能であると考えている。それは，大構遺構の覆土である上層部分の人為的埋土が，本遺構を構築するためにおこなわれた土木工事であることが確認できたからである。そこで本遺構の構築時期は，大構遺構に若干の堆積土が堆積しはじめて，大構遺構が大構としての機能をはたさなくなった時期以後に構築されたと考えることができる。実年代としては，明確に示すことはできないが，大溝遺構の存続年代を仮に13ないしは14世紀とするならばこの年代以降ということになる。しかし，明確な年代については比定できない。

以上が，今回の発掘調査区域内で検出された遺構の概略的なまとめだが，仲道遺跡全体としては，今回の調査面積は数パーセントにすぎず，遺跡としての性格を各時期にわたって，把握するにはいたらなかった。そして，個々の遺構についても年代，性格を充分とらえられたものは，かならずしも多いとはいえなかった。しかし，今回の調査によって仲道遺跡が弥生時代後期から中世にいたるまで，欠落する時期はあったにせよ，かなり大規模な集落跡であったことや，大溝を有する特殊なエリアであった時期をもつ遺跡であるということが，今回の調査である程度は想像ができ，さらに今後の大きな課題を提供したといえよう。

第２節　奈良・平安期の土器様相

(1)　はじめに

仲道遺跡における奈良・平安期の住居跡は，付図４の中のⅣ期で示した16軒をあげることができるが，ここではこの他に遺構の輪郭こそハッキリと捉えることができなかったものの，遺物の出土状況が比較的良好な住居跡も参考資料として加えることにする[注1)]。逆に，前記16軒の中には，資料として扱うにはいささか不十分であると思われるものもあり，これらについては除くことにした[注2)]。

なお，ここで取り上げた住居跡の中で，重複関係が認められるのは，18号住居跡と31号住居跡，31号住居跡と30号住居跡があり，３者の切り合い関係から，31号→18号→30号住居跡の順で新旧関係がなりたっている。また，直接重複関係はないものの，前記３住居跡と34号住居跡，18号と26号住居跡，さらには40号，42号住居跡の位置関係が極めて近接しているため，同時期に存在した可能性は少ないものと思われることから，こうした面からも新旧関係を探ることができるものと思われる。

こうして抽出した住居跡10軒を中心に，参考資料として取り扱う住居跡を加え，奈良・平安期の土器についての新旧関係を明らかにする。

各住居跡から出土した土器の新旧関係を探るに当たっては，出土した土器の器種構成（単体としての土器ではなく，供伴した土器をセットとして，その全体構成から特徴をつかむ），成作技法（単体としての土器の成作技術的特徴をつかむ），さらには既に数多く発表されている論文等を参考に進めた。

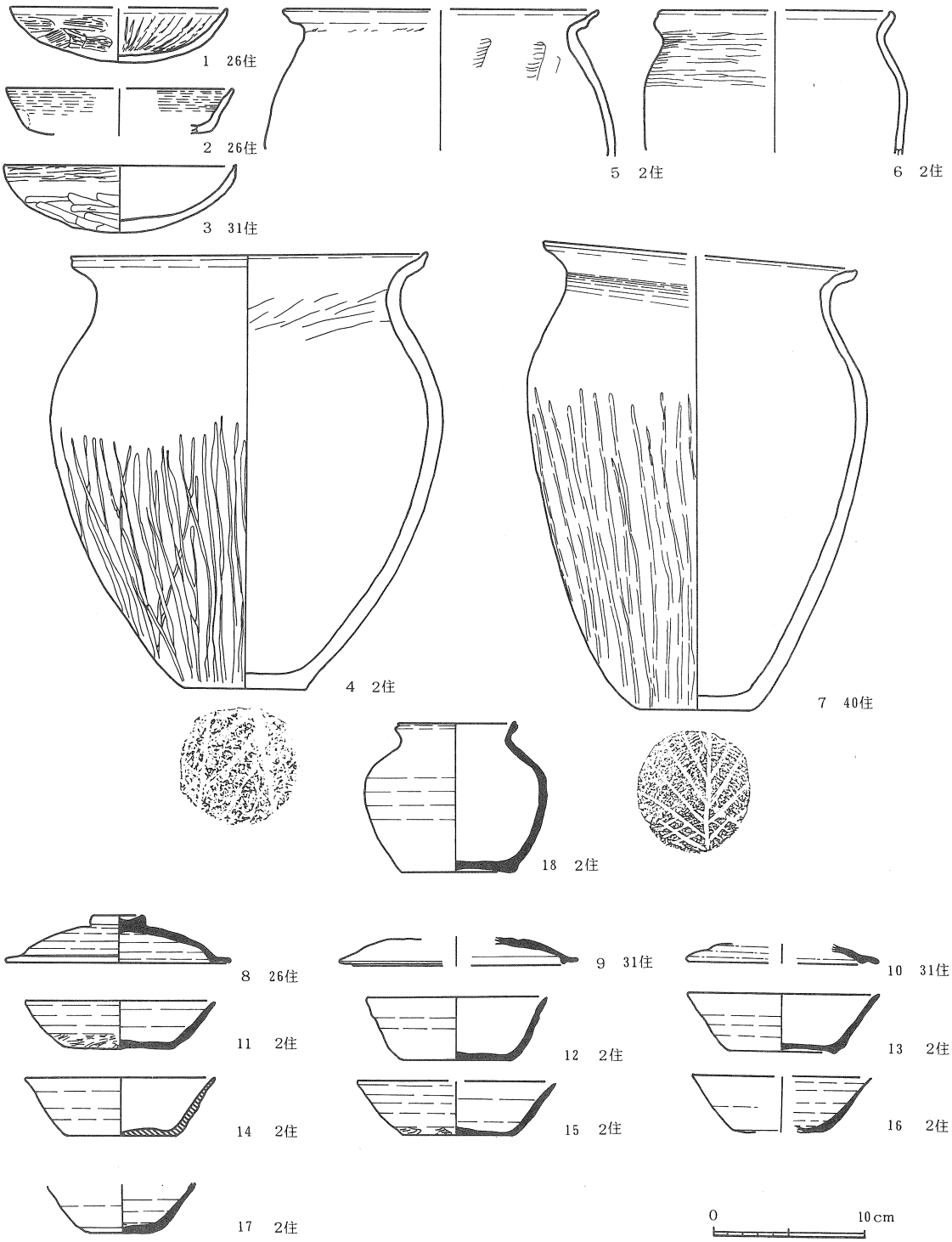
以上の要領で，本遺跡の奈良・平安時代の土器編年を試みた場合，大きく分けてⅠ期，Ⅱ期，Ⅲ期と分類することができる。以下にそれぞれの特徴を記す。

(2)　土器群としての分類

第Ⅰ期

第Ⅰ期は，２，26，31(参考)，40号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種については，土師器では坏・甕，須恵器では坏・蓋・短頸壺をあげることができる。

土師器の坏は，古墳時代後期に見られる丸底を呈する鬼高系の坏（１・３）と，平底気味に調整された盤状の坏(２)がある。鬼高系の坏は，体部と口縁部との境にわずかに稜が残るタイプで，底部から体部にかけては箆削り調整，口縁部および内面はナデによる調整が施されている。口径は15.0cm～15.5cm，器高は4.0cmを測る。一方，底部が平底気味に調整された坏の底部は箆削り調整



第146図　奈良・平安時代第Ⅰ期土器群

を施し，胴下半部は指頭痕が残り，底部と胴部立ち上りの境を明確にしており，指頭痕の残る部分を含む体部および内面は，ナデによる調整を施している。口径15.5cm，底径13.0cm，器高4.0cmを測る。

土師器の甕は，いわゆる「常陸型」の甕で，肩部から胴上部にかけて丸く張り，胴部下半がすぼまり，底部には木葉圧痕が残るものである[文3)]。調整は，口縁部内外面ともナデ調整を施し，肩部外面に数条の篦削りが見られ，胴部外面下半部に縦位の粗い篦磨きを施すもの（4・7）が主である。口唇部は，端部を外方へつまみ出し段状を呈する特徴を持っている。

須恵器の蓋は，いずれも口縁端部の内側にかえりを有している。かえりは口縁端部より突出し，先端が鋭いものと(9)，口縁端部と同じか，やや内側に丸くおさまるもの（8・10）がある。つまみは，(8)のみが残っており，扁平な凝宝珠つまみである。天井部外面は篦削り調整が施され，天井部から口縁部にかけて丸味をもって整型されたもの(8)と，比較的扁平に整型されたもの（9・10）がある。口径は14.0cmから16.8cmである。

須恵器の坏は，2号住居跡から復原可能なものが9点出土しているが，そのうち口径と底径がわかるものは6点である。口径は最大で14.0cm，最小で12.8cm，平均13.5cm。底径の口径に対する割合いは，最大60%，最小で50%，平均55%を測ることができる。また，底部はいずれも回転篦切り後に手持ち篦削り調整を施すもので，篦削り調整を見ると，底部全面に対し概ね2方向の篦削り調整と，磨きに近い篦削り調整（13・14）が見られる。器型を見ると，底部からの立ち上りは直線状外開きが主で，底部と体部の境に丸味を持たせたもの（16・17）も見られる。なお，(14)は他の須恵器坏と技法的に違いは見られないが，色調が全体的に赤味かかった半還元炎焼成ないし酸化炎焼成によるものと思われている土師質須恵器である[注3)]。

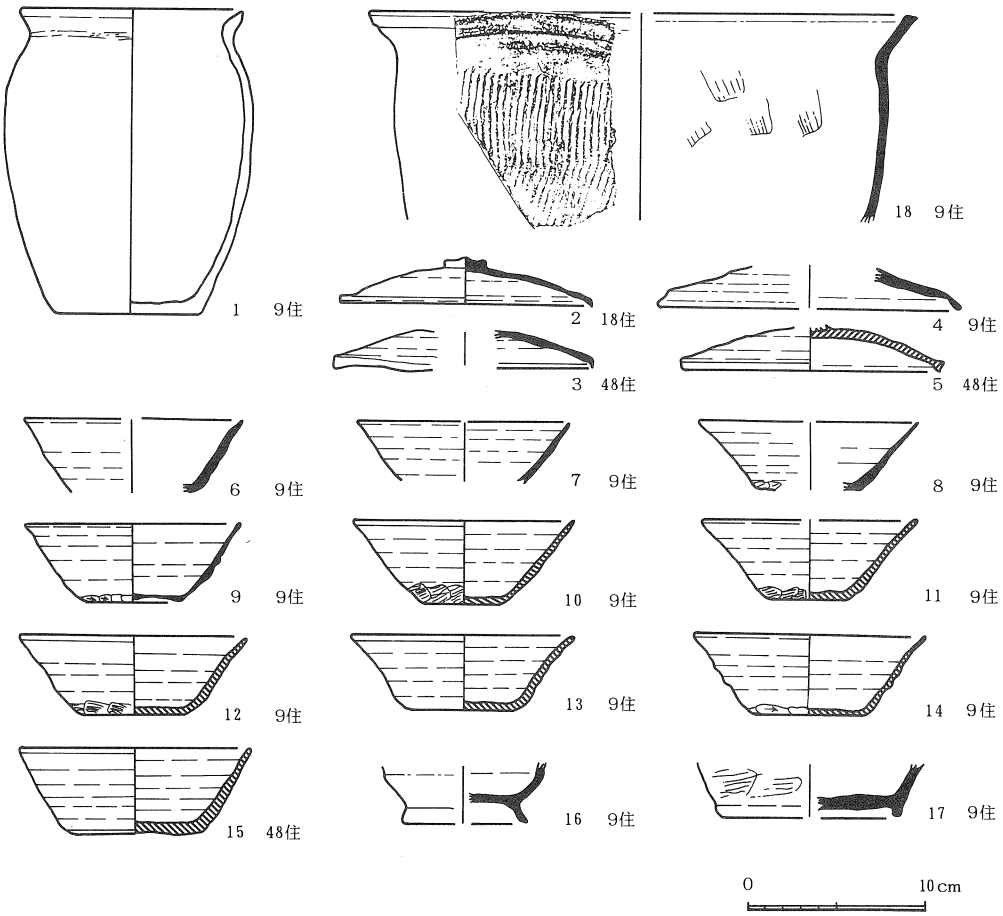
須恵器の短頸壺は，2号住居跡から1点出土している。底部は，回転篦切り後に手持ち篦削り調整を施している。胴下部は篦削り調整を施し，胴中位から肩部にかけてロクロ痕が明瞭に残る，頸部から口縁部にかけてはナデ調整を施している。頸部は「く」の字状にくびれ，口縁部は外反しながら有段状に整形されている。

第Ⅱ期

第Ⅱ期は，9，18，48号住居跡から出土した土器をもって設定した。器種については，土師器では甕，須恵器では蓋・坏・高台付坏・甕をあげることができる。

土師器の甕は，9号住居跡のカマド内から出土した甕のみが全体の器形を把握することができ，他は底部辺の破片であり，ここでは省略する（第29図参照）。

最大径を胴上部にもち，頸部から胴上部にかけてなだらかにふくらみ，底部にかけても同様なだ



第147図　奈良・平安時代第Ⅱ期土器群

らかにすぼまる形をしており，第Ⅰ期の甕と比較して胴部の丸味は見られない。口縁部は，端部を外方へつまみ出すタイプである。調整は，底部外周から胴部下半は箆削り調整を施し，胴上部から口縁部にかけて，および内面はナデによる調整である。底部については不明である。

須恵器の蓋は，いずれも内面のかえりがなく，口縁端部が屈曲し，そのまま折れるもの（2・3・5），口縁端部の屈曲が「ハ」の字状に外開きになっているもの(4)が存在する。天井部外面は箆削り調整で，内面はナデ調整である。つまみは，扁平な凝宝珠つまみ(2)以外は不明である。口径は，大きい方で17.7cm，他の3点は15.0cmである。

須恵器坏は，底部から口縁部までの立ち上りが直線状外開きのもの（6・7・9・10・11），内弯ぎみに立ち上がり，胴上部から口縁部にかけて外反するもの（12・13・14），やや内弯ぎみに丸味をもって外開きに立ち上がるもの(15)がある。口径は最大で14.0cm，最小で12.7cm，平均13.4cmを測る。また，底径の口径に対する割合いは，最大で50%，最小で37%，平均44%である。底部の切離しは，

いずれも回転篦切りである。調整を見ると，回転篦切り未調整のものと(15)，底部全面に手持ち篦削り調整を施しているものと（11･12･13)，底部外周のみに手持ち篦削り（磨きに近い）調整を施しているものがある。なお，底部外周から胴下部にも(15)以外はすべて篦削り調整が見られる。焼成を見ると，第Ⅰ期の中にも１点検出している土師質須恵器の坏も，この段階ではその数を増し，須恵器坏との比率を見ると５：３に及んでいる。坏番号９･11･12･13･14は，カマド内に重ねられた状態で出土したものであり，これで見る限り成作技法上での違いは特に認められない。

須恵器の高台付坏は，底部が回転篦切り後に回転篦削り調整を行い，その上に高台を貼り付けている。高台は「ハ」字状に開き，体部は明瞭な稜を有して立ち上がる。

この他に（17）は，長頸瓶と思われる高台付の底部である。回転篦削り調整の後に高台を貼り付けている。高台は短く垂下している。わずかに残る胴下部には篦削り調整が施されている。

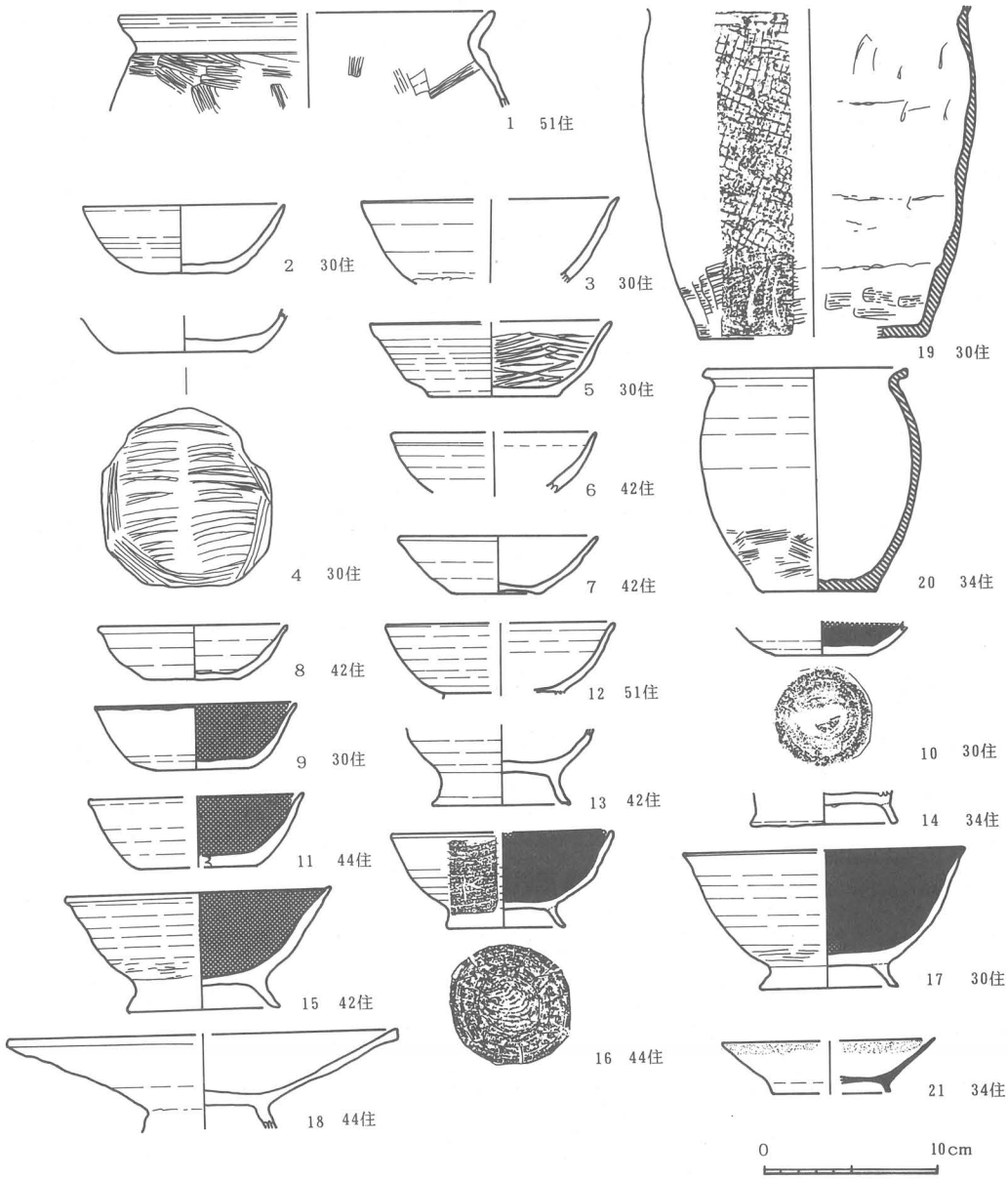
須恵器の甕は，体部外面は平行叩きによる整形が，内面は同じく平行叩きの上にナデによるすり消しが行われており，その上に篦工具による削りも見られる。胴部から肩部にかけて内弯状に外開きを呈し，頸部でややすぼまり，口縁端部に向かって外反する。

第Ⅲ期

第Ⅲ期は，30，34，42，44（参考），51号住居跡出土土器をもって設定した。器種については，土師器では甕・坏・高台付坏，須恵器では高盤甕をあげることができる。なお，34号住居跡からは灰釉陶器も１点出土している。

土師器の甕は，頸部から口縁部にかけて明瞭な稜を有し，口縁部はやや直立ぎみに立ち上がり，口唇部に向かって外反する，いわゆる「コ」の字状を呈する。調整を見ると，胴上部外面は横位および斜位の篦削り，内面は篦削りの上にナデによる調整が加えられている。口縁部は，内外面ともにナデ調整である。

土師器の坏は，坏身内面に黒色処理が施されているものと（９～11)，されていないもの（２～８）に分けることができる。器形を見ると，底部と体部下端との境に丸味を持たせ，やや内弯ぎみに外方へ開くもの（２･３･６･９)，底部と体部下端との境が明確で，やや内弯ぎみに外方へ開くもの（８･11)，底部が高台状に張り出しており，立ち上りは胴下半までは内弯ぎみに立ち上がり，胴上部から口縁部にかけて外反するもの(５)，底部が上げ底気味で体部は直線状に立ち上がっているもの(７)に分けることができる。底部の切離しは，いずれも回転篦切りである。底部の調整を見ると，未調整のもの(７)，底部外周に手持ち篦削り調整が施されているもの（２･５･９)，底部全面に粗い手持ち篦削り調整を施しているもの（８･10･11)，回転篦削り調整を施しているもの(４)がある。内面はナデおよび篦磨き調整で，いずれも丁寧に仕上げられている。



第148図　奈良・平安時代第Ⅲ期土器群

土師器の高台付坏は，須恵器の高台付坏を模倣したような底部と体部の境に明瞭な稜をもつタイプは見られず，いずれも底部からの立ち上りは内弯気味に立ち上がるタイプである。高台はいずれも「ハ」の字状に貼り付けられ，中には足高高台付坏と呼ばれる器形に類似した高台が発達した坏も見られる（13･15）。底部の切離しは，回転糸切り（16），回転篦切り（13.17）に分かれ，調整を見ると回転篦削り（14･15），ナデによる調整（13･16･17）を施すものがある。坏部内面は，ナデおよ

び篦磨き調整を丁寧に施しており，その上に黒色処理をするものもある（14～17）。法量的には，口径，高台径，器高の3者を測ることのできる坏が15・16・17の3点のみであるが，この中で高台径および器高の口径に対する割合いを見ると，15・16は対高台比56％，対器高比42％と同じ法量であるのに対し，17は対高台径比49％，対器高比48％と違いを見せている。

土師質須恵器の高盤(18)は44号住居跡から出土しており，底部から胴部下半にかけて回転篦削り調整が施されている。また，胴上部から口縁部にかけてはナデ調整であり，内面についてもロクロ痕の上に全面ナデ調整を施している。高台は下端が欠けており，全体の法量は不明であるが，かなり発達しているものと思われる。

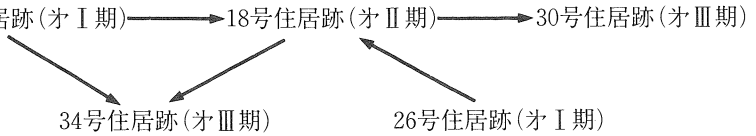
須恵器の甕はいずれも土師質須恵器である。30号住居跡出土の甕(19)は，体部外面に格子目叩きと体部下位には篦削り調整が施されている。内面には，粘土紐接合痕が明瞭に残り，胴下部には横位の篦削りによる調整痕が残る。34号住居跡出土の甕(20)は，底部から胴下部にかけて粗い篦削り調整が施され，胴上半にかけてはロクロ痕の上を回転ナデによる調整がなされ，口縁部から内面にかけても回転ナデによる調整が施されている。底部は手持ち篦削り調整である。甕(19)は，体部が底部から内弯気味に立ち上がり，頸部ではわずかにすぼみをみせるのに対し，甕(20)は胴部に緩やかな丸味をもち，頸部で「く」の字状にすぼみを見せ，口縁部は大きく外反する。口縁端部は，外方へつまみ出し，垂直方向に厚みを持たせている。

灰釉陶器の高台付皿は，底部が回転糸切りの上に高台を貼り付け，回転ナデによる調整が見られる。口径13.2cm，高台径6.9cm，器高3.2cmを測る。釉は，口縁部外面ハケ塗り，内面は自然釉である。

(3) 住居跡の重複関係から見た時期区分

当遺跡の出土土器を大きく3期に分け，それぞれの特徴について述べてきたが，次に当遺跡の住居跡の重複関係および位置関係から3期についての新旧関係をみる。

重複関係については，先に述べた通り18号・30号・31号住居跡があり，切り合い関係から31号→18号→30号住居跡の順に新旧関係を表すことができる。これに位置関係から見て，同時期に存在した可能性の少ないものと思われる住居跡をあてはめると，以下のようにまとめることができる。



31号住居跡と18号住居跡の新旧関係を遺物の面から見ると，両住居跡ともに出土遺物が少ない中で，須恵器の蓋に差異を見ることができる。すなわち，31号住居跡出土の蓋はいずれも内面にかえ

りが残っているのに対し，18号住居跡出土の蓋にはかえりがないタイプが出土している。このことから，31号住居跡は18号住居跡に先行するものと考えられる。

30号住居跡と18号住居跡の新旧関係を見ると，30号住居跡から出土した土器から須恵器の量が極端に減り，日常什器の主体が完全にロクロ成形の土師器に移っていること。さらに，高台付坏・埦の出現などから見て，30号住居跡は18号住居跡より新しい時期の住居跡と見ることができる。

また，31号・18号・34号住居跡の新旧関係についても同様の見方から，標記の順番がそのまま新旧関係を表していると考えられる。

(4) 各時期の年代観について

当遺跡における奈良・平安時代の土器を，第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の3期に区分できることは既に述べた通りであるが，ここではこうした時期の年代について考えてみたい。

第Ⅰ期

第Ⅰ期については，鬼高系の丸底の坏と，底部篦削り，体部は指頭痕とナデ，内面がナデによる調整を施す平底気味のいわゆる武蔵系坏の影響が見られるものと思われる坏，さらにかえりを有する須恵器の蓋の供伴関係が見られる一群(第Ⅰ期ａ)と，須恵器坏と常陸型甕が供伴する一群(第Ⅰ期ｂ)に分けることができる。

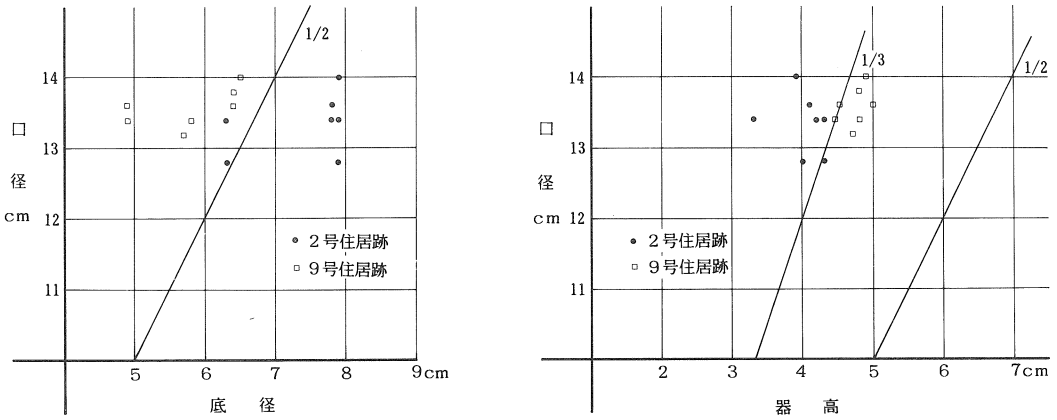
前者は26号・31号住居跡からなる。鬼高系の坏とかえりの有する蓋から，この一群を8世紀第1四半期頃に位置付けられるものと考えられる。したがって，この時期には武蔵型坏と同様な製作技法の影響が当遺跡周辺まで及んでいたことも考えられる。

後者は，2号・40号住居跡からなる。鬼高系の坏が姿を消し，大半が須恵器坏に取って変わる時期である。坏の特徴として，底径の口径に対する割合いが50％を超えていること，口径が12.8㎝～14.0㎝と武蔵前内出1号窯に近い数値を示している[文41]。甕は，最大径が胴上部に位置し，球状の張りを持たせている。こうしたことから，この一群を8世紀の第4四半期頃と位置づけることができる。なお，当遺跡においては本期(第Ⅰ期ｂ)をもって土師質須恵器の初現とすることができる。

第Ⅱ期

本期は，第Ⅰ期ｂに引き続き須恵器が日常什器の主体を占める時期である。本期の須恵器坏の特徴は，前期(第Ⅰ期ｂ)の坏と比較すると，法量と底部の調整技法に違いを見ることができる。

第149図は，第Ⅰ期ｂを構成する2号住居跡出土の須恵器坏と本期を構成する9号住居跡出土須恵器坏の法量分布を示したものである。底径の口径に対する比率を見ると，50％(図上では$\frac{1}{2}$線)を境



第149図　第Ⅰ期b（2号住）と第Ⅱ期（9号住）の坏に見る法量比較

に概ね分けることができる。すなわち，第Ⅰ期bでは平均値で55％を測るのに対し，第Ⅱ期ではいずれも50％以下と大きな違いが見られる。また，器高の口径に対する比率を見ても，33％(図上では$\frac{1}{3}$線)を境に第Ⅰ期bと第Ⅱ期に分けることができる。このことは，坏について見ると口径には大きな差異は認められないが，底径の縮小化，器高の増加といった傾向を顕著に表わしている。

また，坏底部に施されている調整技法からも差異を見い出すことができる。すなわち，第Ⅰ期bでは既に述べた通り，底部全面にわたり手持ち篦削り調整を施すのに対し，本期では前期の調整法に加え，底部外周のみ手持ち篦削り調整を施すタイプが主流を占め，さらに回転篦切り後未調整のものが新たに見られる。

こうした違いに加え，土師質須恵器の増加も注目される。図化できない破片も含め，須恵器に対する土師質須恵器の割合いを9号住居跡で見る限り5：3と増加の現象を見せている。

以下のことから，本期を9世紀第3四半期後葉から第4四半期と位置付けられる。

第Ⅲ期

本期は，須恵器の量が著しく減少し，代わりにロクロ成形土師器坏が主流を占めると同時に，高台付坏の普遍化が見られる。このことは，同じ茨城県西部に所在する北新田遺跡でいうⅪ期に相当するものと考えられ，そこでは10世紀第2四半期～同第3四半期と位置付けられている[文5)]。

34号住居跡出土の灰釉陶器の高台付皿は，愛知県猿投山西南麓窯の中の折戸53号窯跡出土のものと似ており，同時期のものと考えられることから[注4)]，34号住居跡を10世紀後半と位置付けることができる。

なお，30号住居跡出土遺物を見ると，胴部外面に格子目叩きを施した甕(19)，大形の高台付椀(17)，

台状高台坏(5)等は，同じ第Ⅲ期として取り扱った他の遺物と比較した場合，明らかに時期的に差異が認められる。　30号住居跡の特徴を前述三つの土器(19・17・5)で見た場合，その時期を10世紀末～11世紀第1四半期と位置付け，他の住居跡は10世紀後半(970～990年代)に位置付けたい。

注1）ここでは31号住居跡と44号住居跡が該当する。なお，44号住居跡出土遺物の中には古代末期に位置付けられている台状底部を有する坏と類似の坏が3点見られる（第96図4，6，7）。台状底部を有する土師器の特徴として，器種としては小形甕・鉢・坏があり，いずれも底部に台状な粘土板が貼り付けられ，外見上は「く」の字状に底部が屈曲する。小形甕の底部には木葉痕を残すものもしばしば見られる。また，調整技法として坏の場合，口縁部はヨコナデ，体部外面は篦削り調整，内面はナデ調整を施すことがあげられている。出土分布は，多摩丘陵地域を中心に相模原市付近に多く見られ，河川で言うと多摩川の支流である大栗川と相模川の支流である境川の中流域に多く見られる，と紹介されている[文1，文2]。44号住居跡出土の坏を見ると，台状の底部は外見上では同じ特徴を有しているものと思われるが，小形甕に見られる木葉痕が，ここではいずれの坏にも見られるところに差違を見い出すことができ，調整技法についても，口縁部のヨコナデは同様であるが，体部については篦削り痕は認められず，磨きに近いナデ調整が施されている点などの違いが見られる。こうした点で，44号住居跡出土の坏については検討の余地があるものと考え，本論では敢えて取り扱うことを避けた。

注2）6・10・13・24・27・52号住居跡がここでは該当する。これらの住居跡からは図示可能な遺物の出土が見られなかった。

注3）土師質須恵器についての扱いは，本報告書第1章の中の「遺物の記載方法」参照。

注4）多治見市教育委員会若尾正成氏よりご教示をいただいた。

文1）甲崎光彦：台状底部を有する土師器について，「神奈川考古（第21号)」(シンポジウム古代末～中世における在地系土器の諸問題)，神奈川考古同人会，1986.2

文2）鶴間正昭：古代末期土師器坏・小形甕にみられる台状底部の出現とその背景，「東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅲ」，㈶東京都埋蔵文化財センター，1985.3

文3）浅井哲也：「北郷C遺跡・森戸遺跡」，㈶茨城県教育財団文化財調査報告書第55集，1991.3

文4）山口辰一：「武蔵国府関連遺跡調査報告Ⅴ」(須恵器坏の変遷と窯址出土資料の対比)，1984.3

文5）㈶茨城県教育財団：「年報6」(昭和61年度調査課10年のあゆみ)，㈶茨城県教育財団，1987.3

終 章 む す び

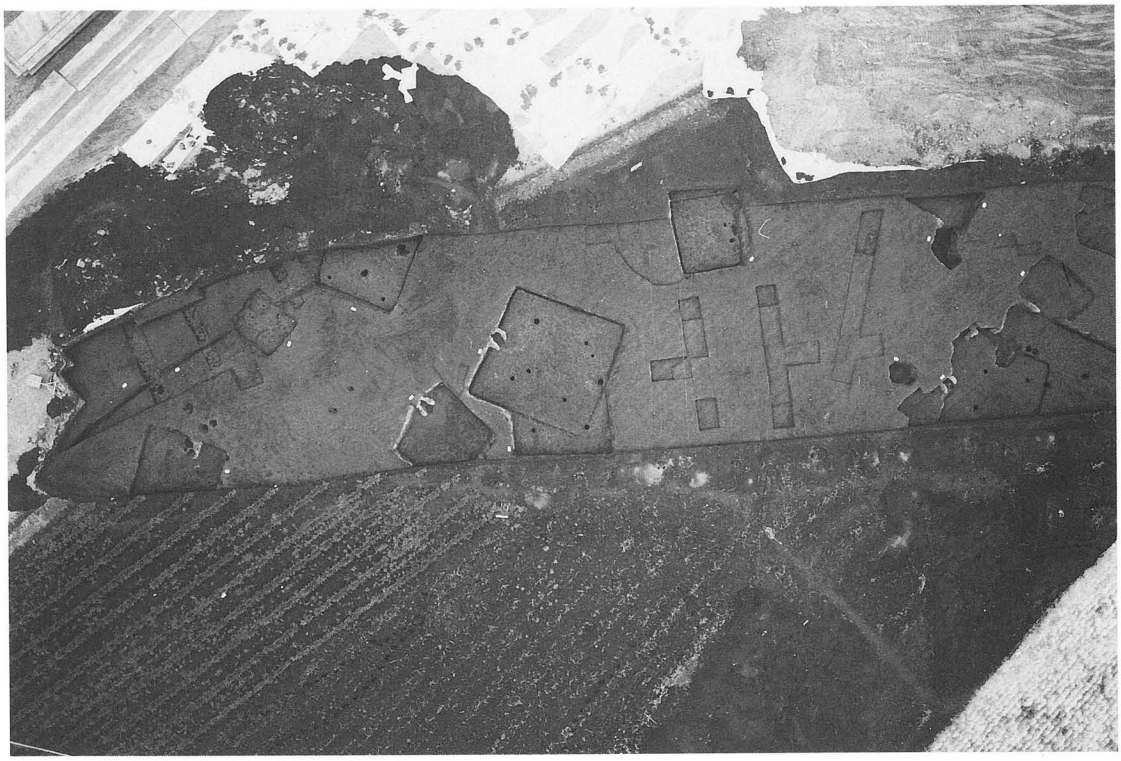
仲道遺跡は，町史編纂事業の段階で実施された分布調査の折に，土師器や須恵器の破片が採集され，町の周知遺跡として認定された遺跡である。それ以前にも，畑の耕作時あるいは町営住宅建設の際にも土師器，須恵器などの土器が出土し，各地権者によってこれらの土器が所蔵されていた。そして，これらの出土した土器型式から判断して，古墳時代の集落遺跡であるということが推定されていた。しかし，今までに発掘調査が実施されていたわけではなく，本遺跡の集落遺跡としての年代幅や，遺跡地としての範囲が明確にされていたわけでもなかった。そこで今回霞ヶ浦用水事業に関連して発掘調査が実施され，局部的ではあるが集落遺跡の一部を垣間みることができ，その成果としてはかなり大きな成果を得たと考えている。しかし，今回の発掘調査の範囲は，あくまでも送水管の埋設部分という限定もあり，集落遺跡としての全容を明らかにしたわけではない。したがって，仲道遺跡全体として，遺跡の性格づけは当然ながら不可能であり，また，遺跡の評価としても今回の調査部分のみでは，その全てを結論づけることはできない。ただ，今回の調査によって，遺跡として不明瞭な部分が多い中で一歩脱却し，本遺跡の10分の１あるいは100分の１を，検出した遺構や出土した遺物から窺い知ることができたことは事実であると思う。さらに，発掘調査前の段階では，全く想像もしなかった大溝遺構や道路状遺構などが確認されたことは，予想外の大成果といえよう。今回の調査では縄文時代前期から中世にいたるまでの遺構，遺物が確認されたことは本遺跡あるいは本遺跡を取り巻く地域的環境，歴史的環境を考えるうえで大きな意味が含まれているということを，今回の成果が物語っているといえる。

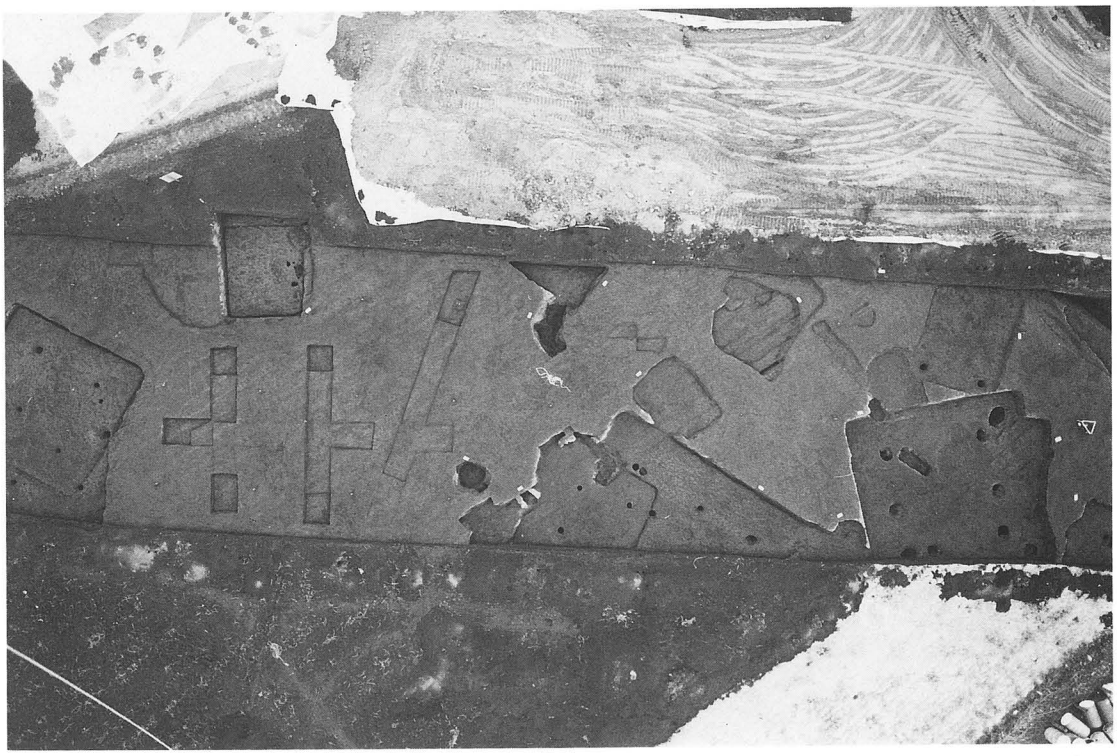
なお，今回の発掘調査および本報告書をまとめるにあたって，水資源開発公団をはじめ，関係各位の御指導・御協力に対し，文末ながら深く感謝の意を表する次第である。

写真図版

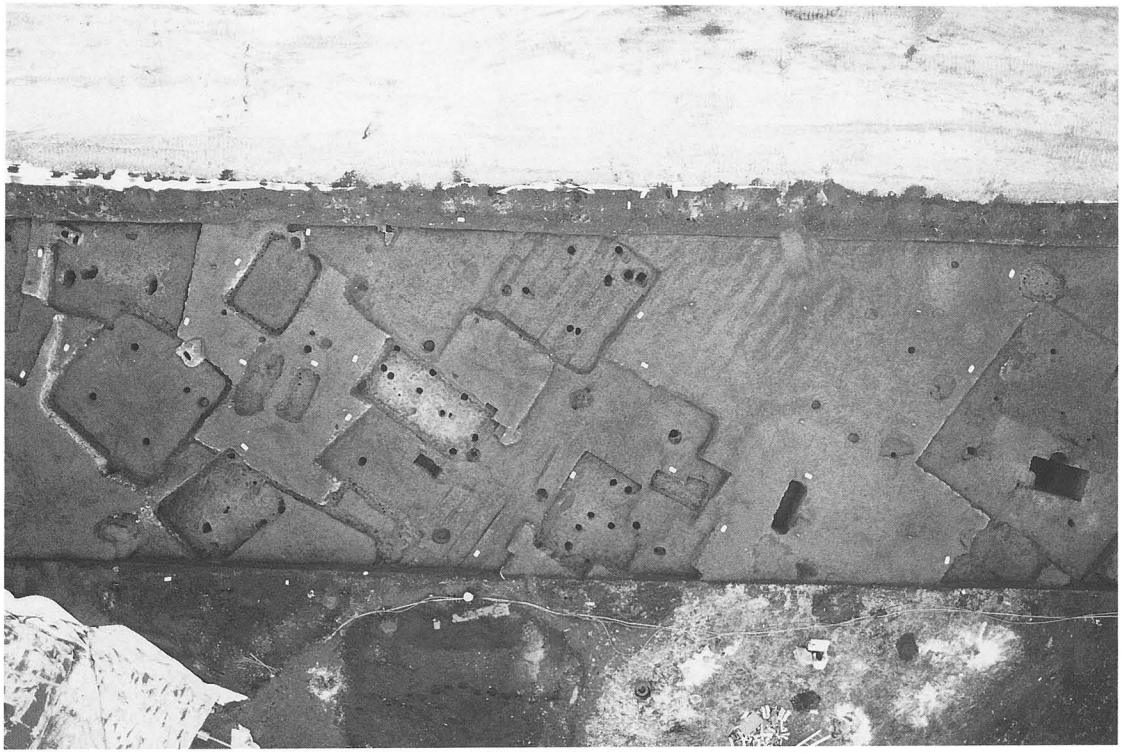
空中よりみた発掘調査区域全景

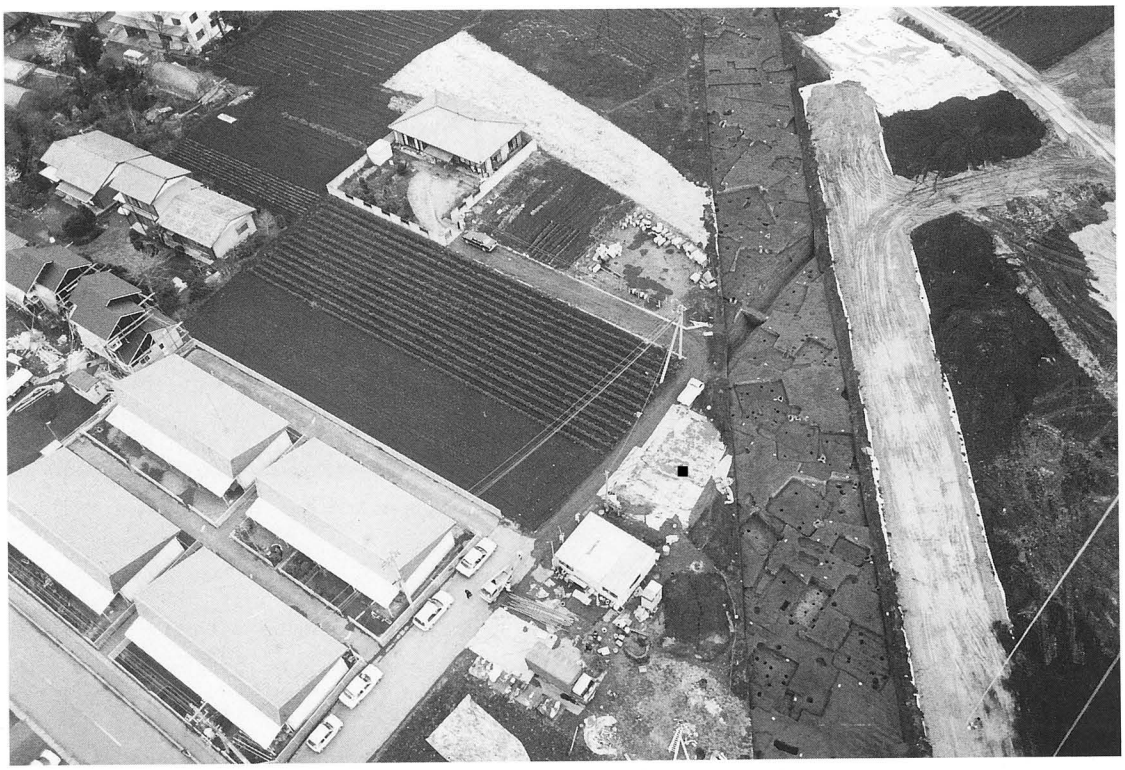
A調査区空中写真





B調査区空中写真





仲道遺跡と発掘調査区域（南側から）

仲道遺跡と発掘調査区域（北側から）

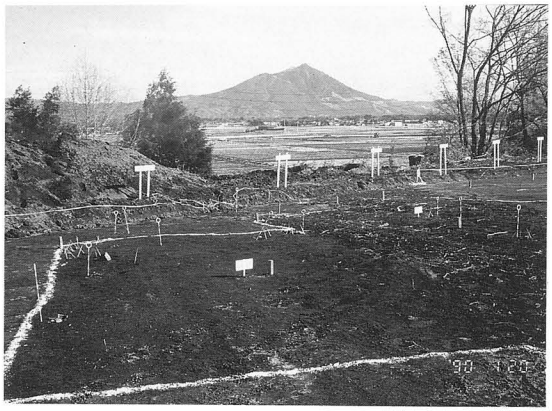
A調査地区

作 業 風 景

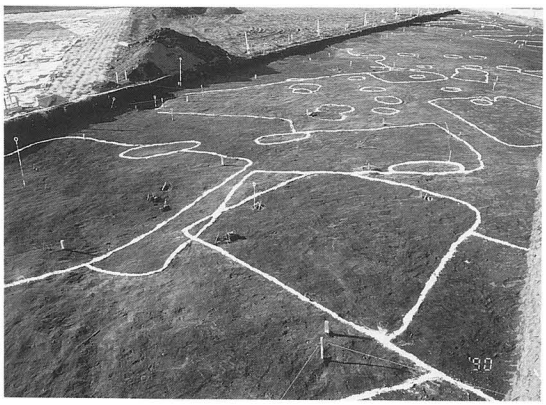
B調査地区

B調査地区風景

遺構確認状況



遺構確認状況



遺構確認状況

遺構確認状況

1 号住居址

1 号住居址

1 号住居址遺物出土状況

2 号 住 居 址

2 号住居址カマド

2 号住居址遺物出土状況

3 号住居址

3 号住居址遺物出土状況

3 号住居址遺物出土状況

4号住居址（前方・手前は5号住居址）

4号住居址（左側）と5号住居址（右側）

5号住居址

5号住居址

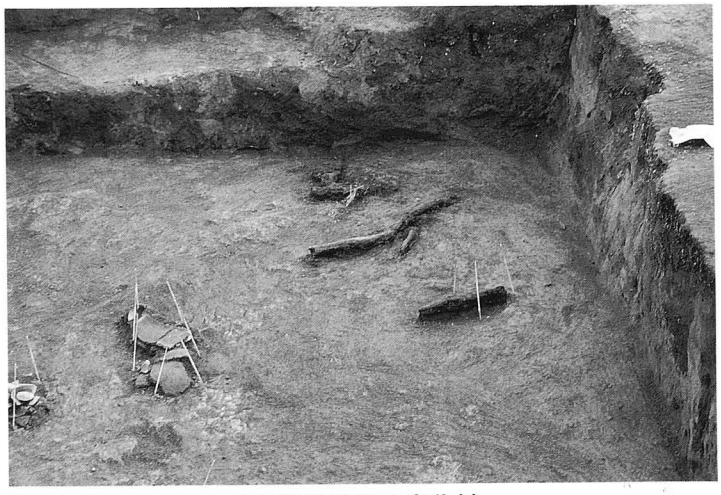
5号住居址カマドと遺物出土状況

5号住居址カマド内の遺物出土状況

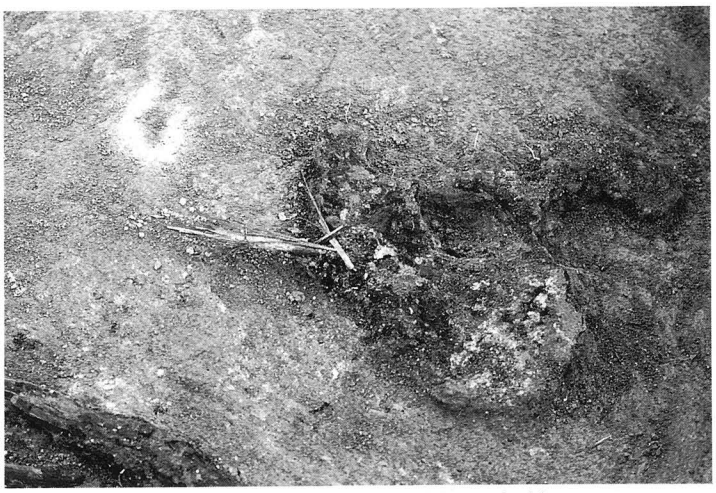
6 号住居址

7 号住居址

7号住居址遺物出土状況

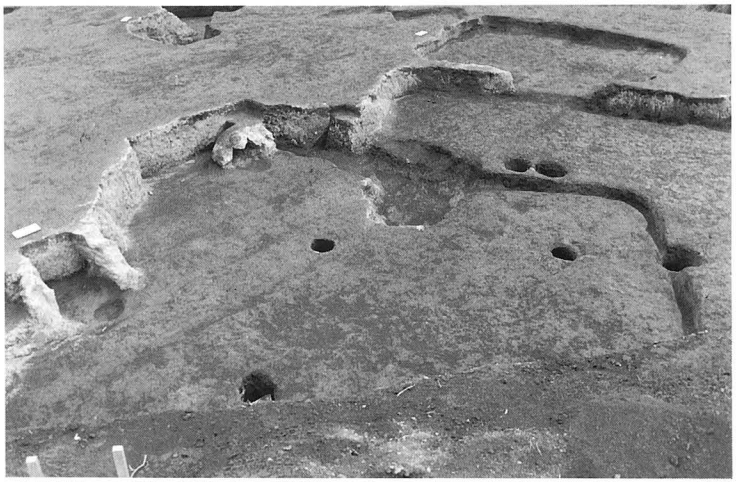


7号住居址出土炭化材



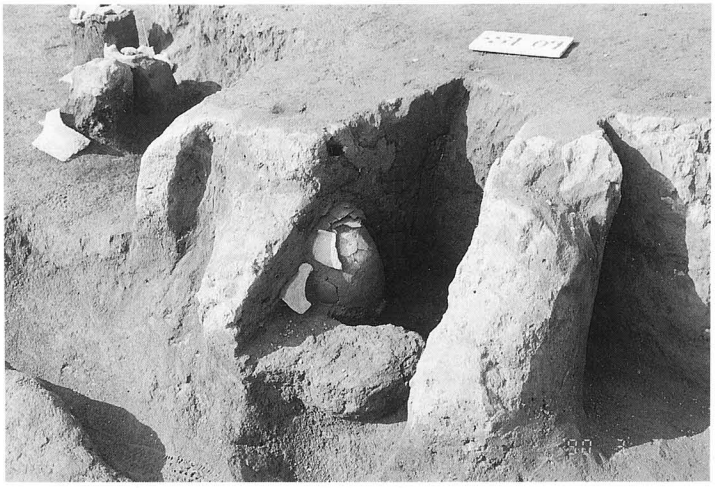
7号住居址出土炭化材と屋根材

8号住居址

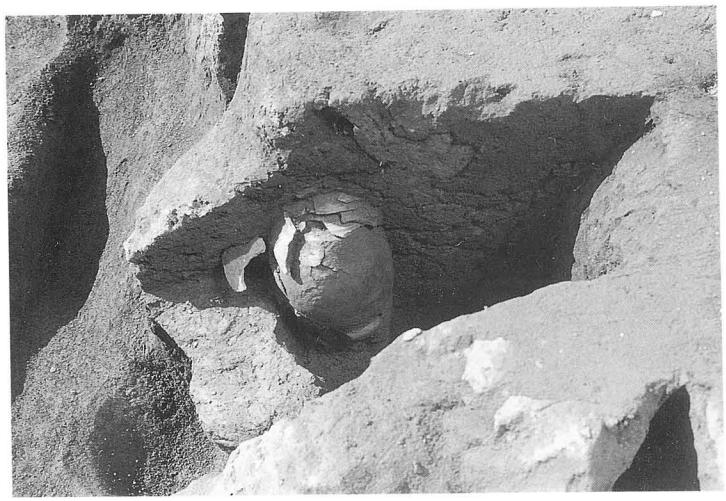


9号住居址

9号住居址と11号住居址（左上）



9号住居址カマド

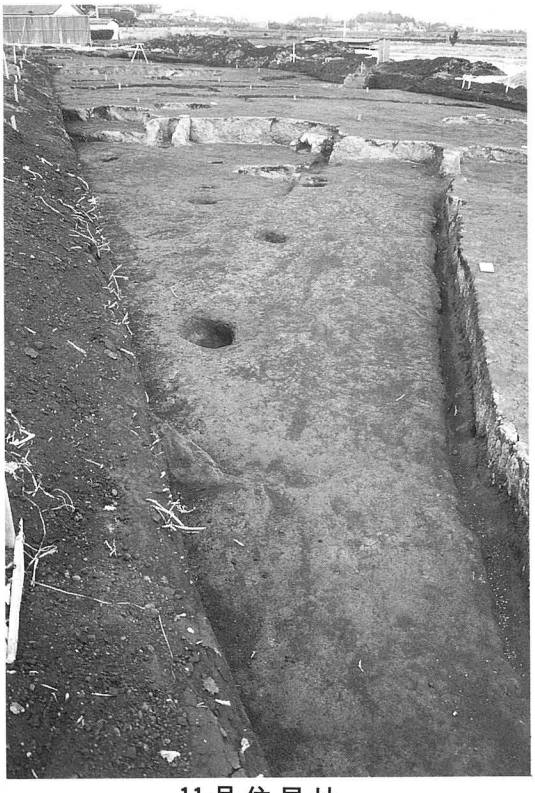


9号住居址カマド遺物出土状況

9号住居址カマド遺物出土状況

10号住居址

11号住居址（上方左側・右側は９号住居址・手前は10号住居址）



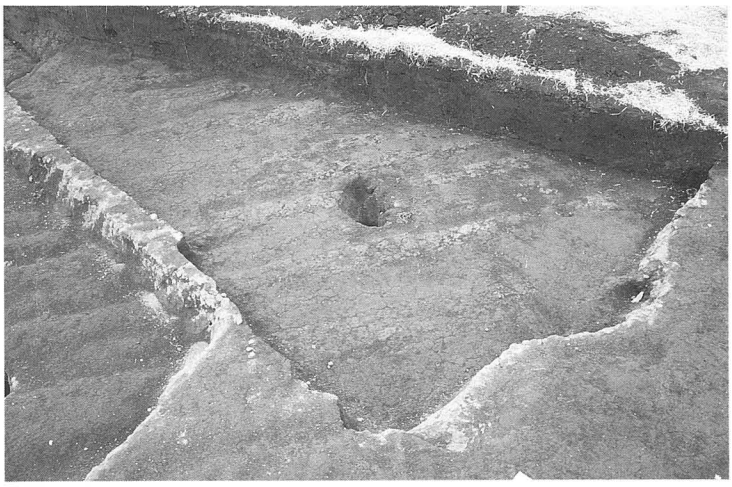
11号住居址

13号住居址

13号住居址

14号住居址（右側・16号住居址と重複する）

14号住居址内に堆積する焼土



15号住居址

16号住居址

16号住居址

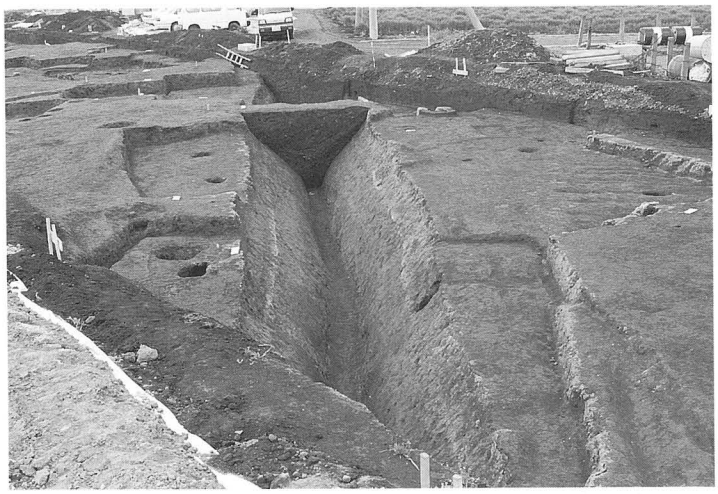
17号住居址

17号住居址遺物出土状況

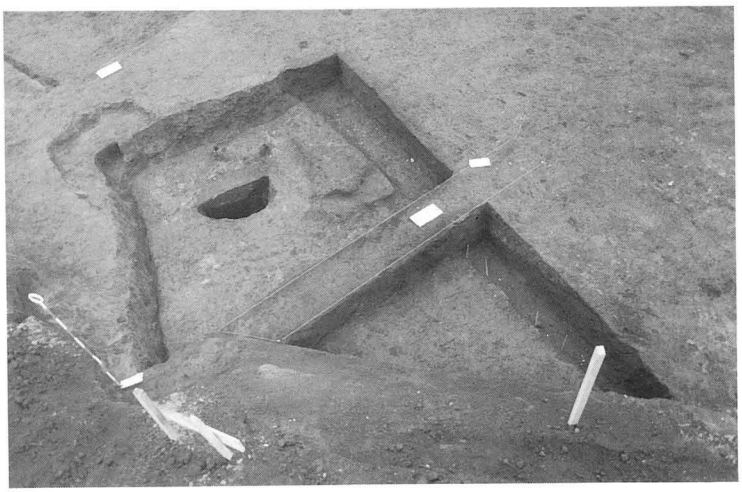
18号住居址

18号住居址

18号住居址遺物出土状況



大溝遺構によって切られている20号住居址（手前）



20 号 住 居 址

20号住居址遺物出土状況

21号住居址

22号住居址

22号住居址カマド

22号住居址遺物出土状況

23 号 住 居 址

24 号 住 居 址

25 号 住 居 址

25号住居址（左側は大溝によって切られている）

26 号 住 居 址

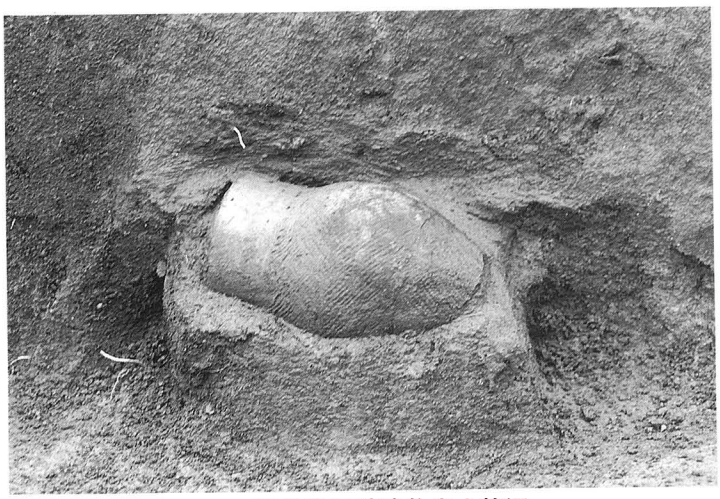
27 号 住 居 址

26（左側）・27号住居址（右側）

28 号 住 居 址

28号住居址遺物出土状況

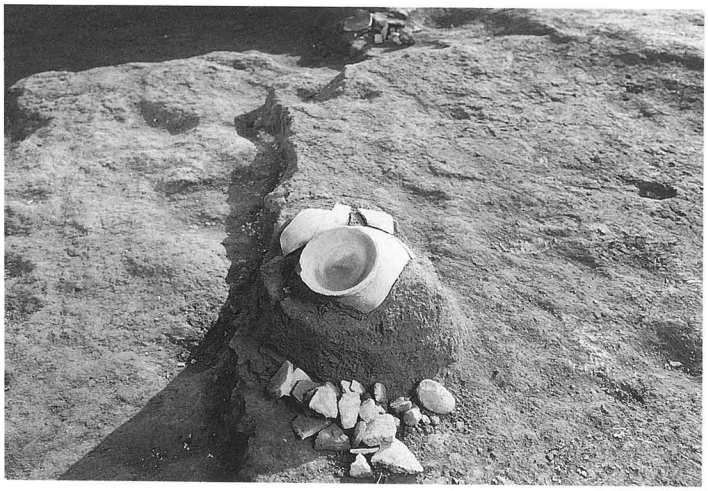
29号住居址（上方）



29号住居址遺物出土状況

30（左上）・33号住居址

30号住居址遺物出土状況



30号住居址遺物出土状況

33号住居址遺物出土状況

32号住居址

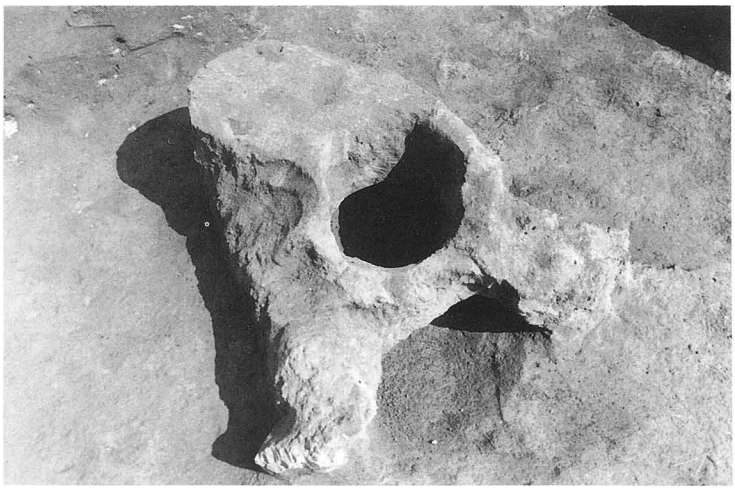
32号住居址遺物出土状況

34 号 住 居 址

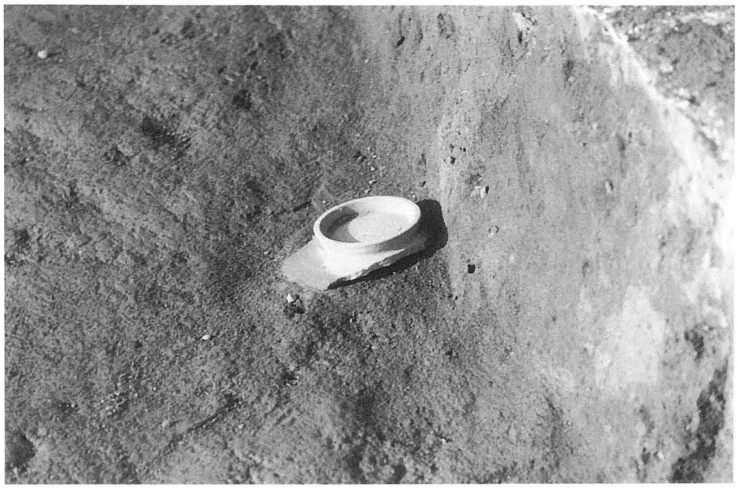
34号住居址カマド

35 号 住 居 址

35 号 住 居 址



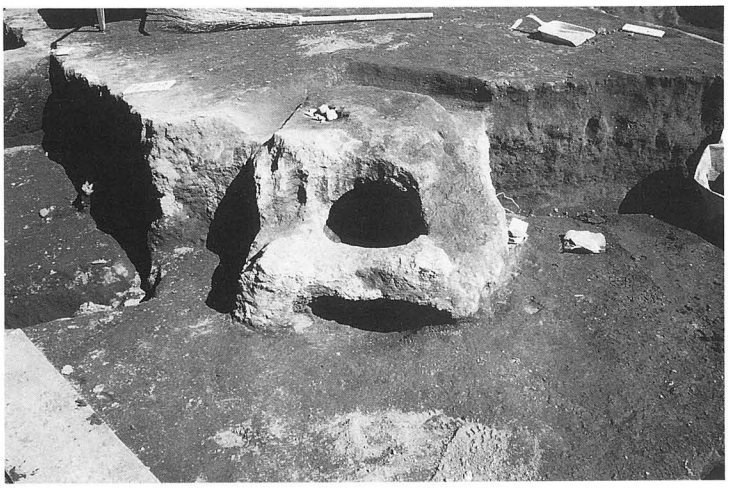
35号住居址カマド



35号住居址遺物出土状況

37号住居址

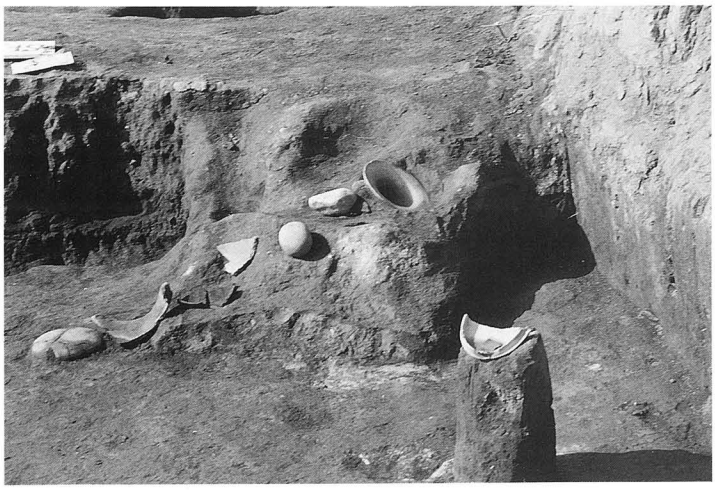
37号住居址



37号住居址カマド

38号住居址

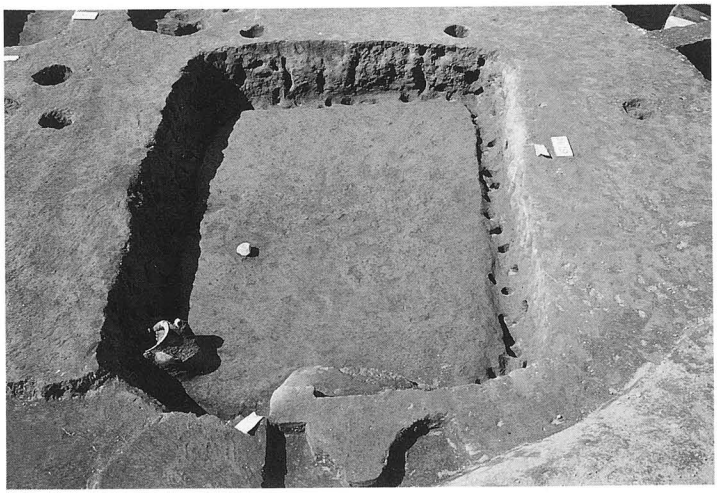
38号住居址遺物出土状況



38号住居址カマド遺物出土状況

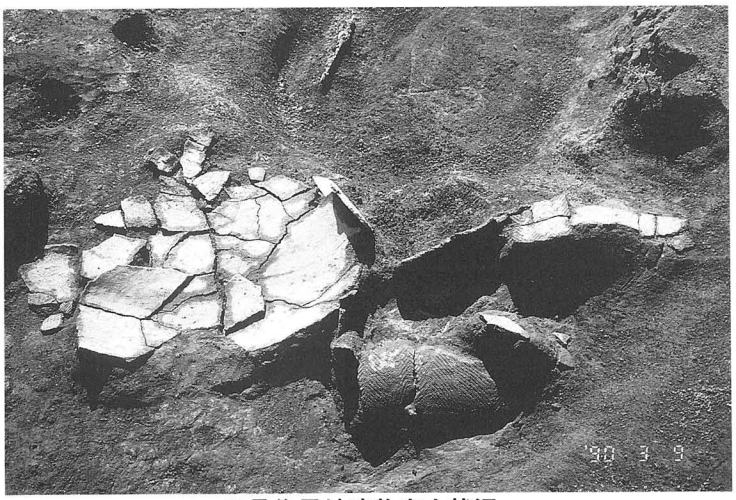
39号住居址と10号土坑

40号住居址



40号住居址

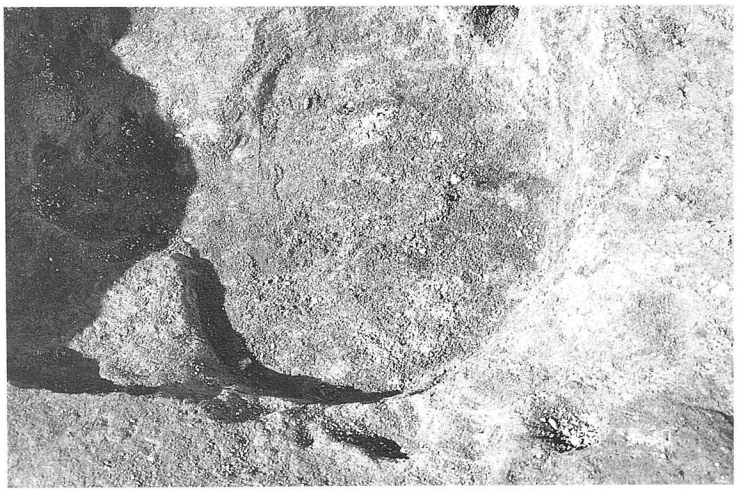
41・42・42′号住居址



41号住居址遺物出土状況

41号住居址遺物出土状況

42号住居址カマド遺物出土状況

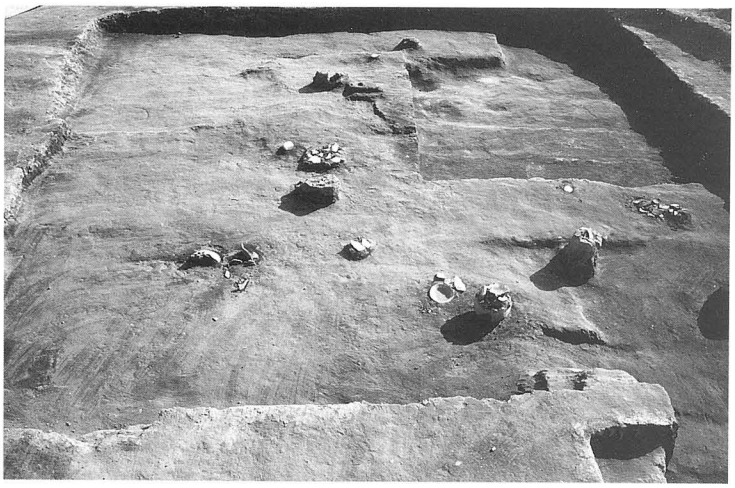


42′号住居址内土坑

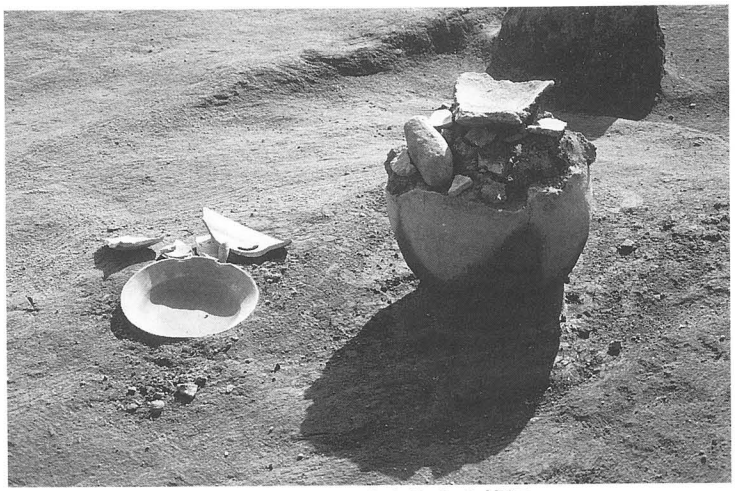
42′号住居址内土坑出土の刀子

43号住居址と９号土坑

43 号 住 居 址

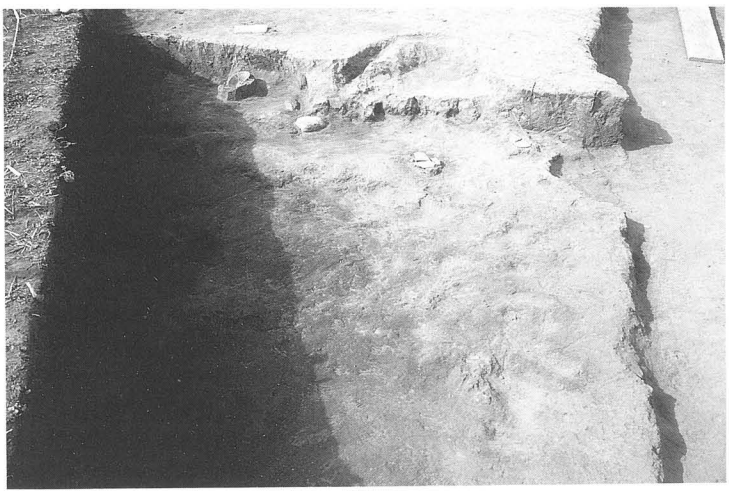


45 号 住 居 址



45号住居址遺物出土状況

47号住居址



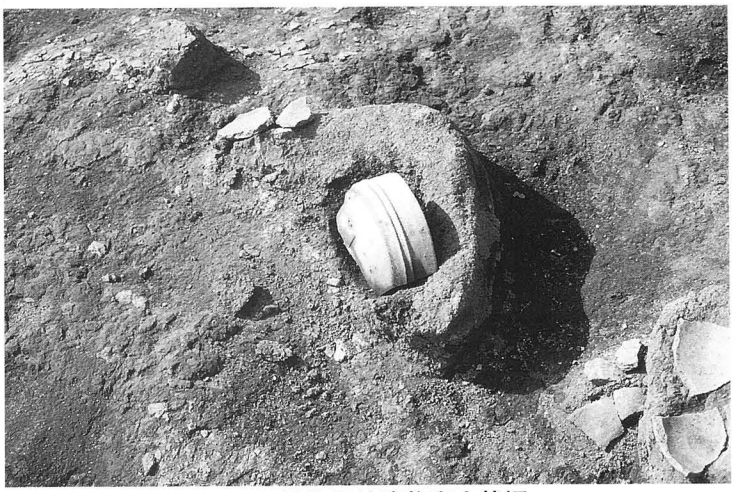
48号住居址

48号住居址遺物出土状況

49号住居址（手前）

49号住居址

49号住居址遺物出土状況



49号住居址遺物出土状況

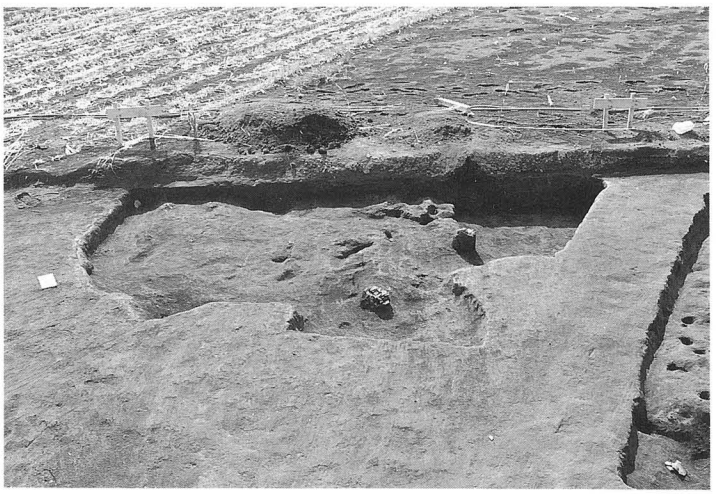
49号住居址遺物出土状況

50 号 住 居 址

50 号 住 居 址

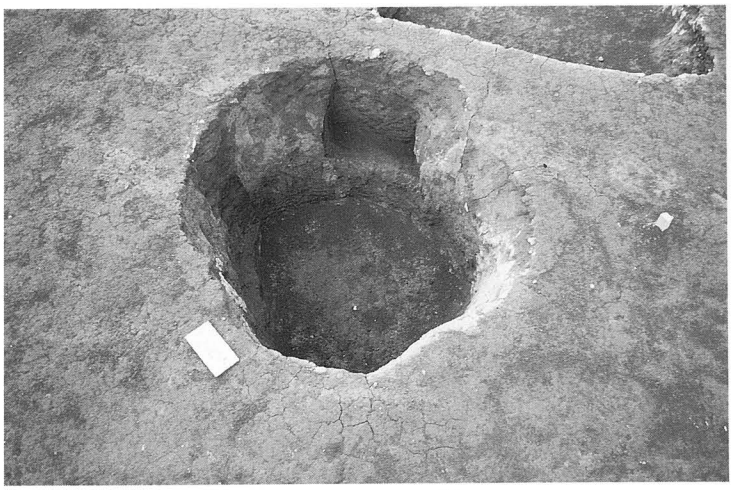
51 号 住 居 址

51 号 住 居 址

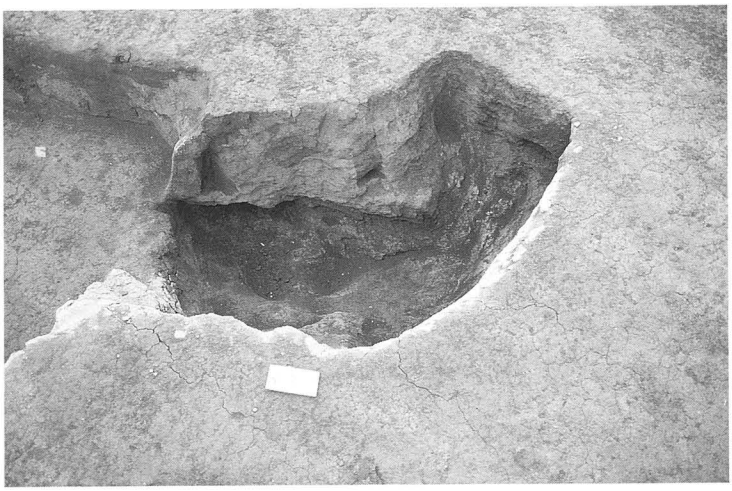


52 号 住 居 址

53 号 住 居 址

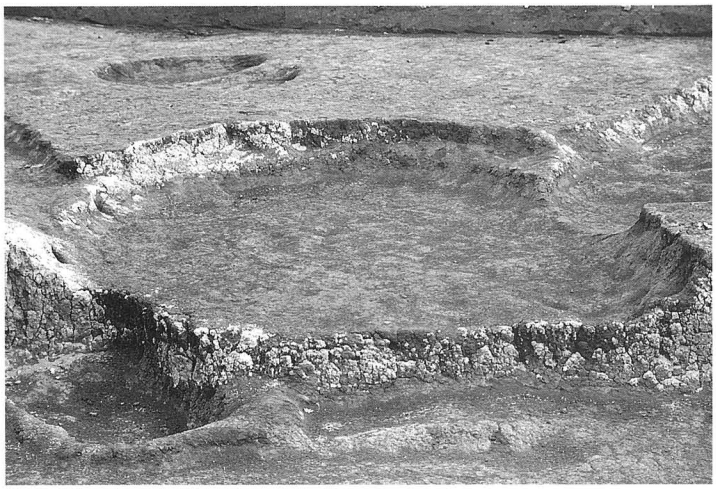


1 号 土 坑



2 号 土 坑

3 号 土 坑

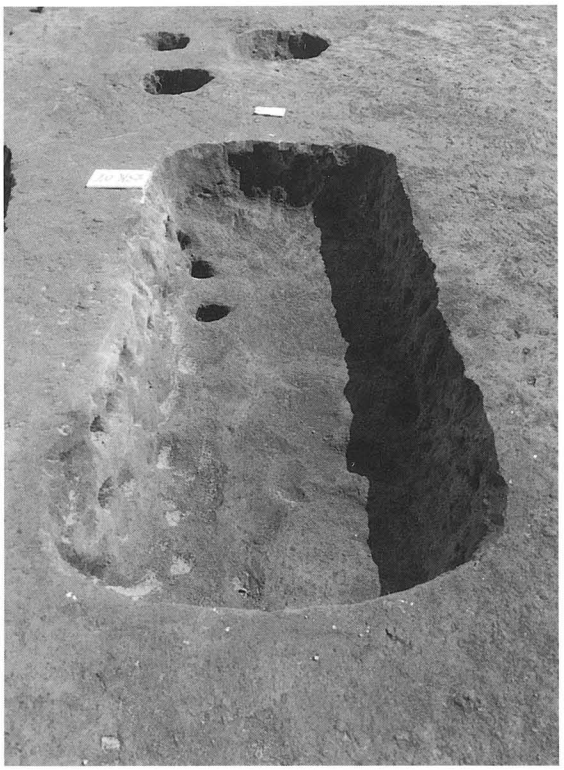


4 号 土 坑

5 号 土 坑

6（右側）・7号土坑（左側）

6 号 土 坑



7 号 土 坑

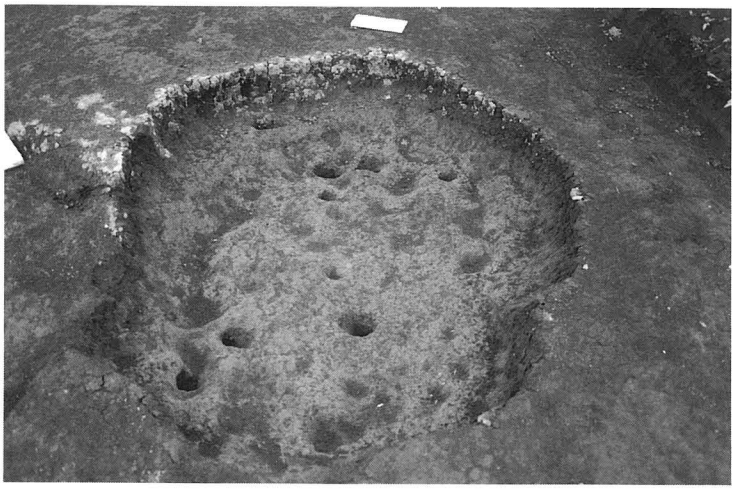
8 号 土 坑

9 号土坑（竪穴状遺構）

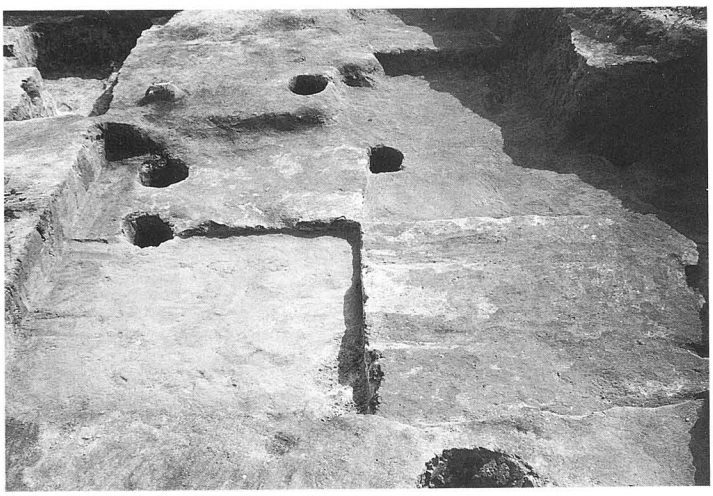
10号土坑（竪穴状遺構）

10号土坑堆積土状況

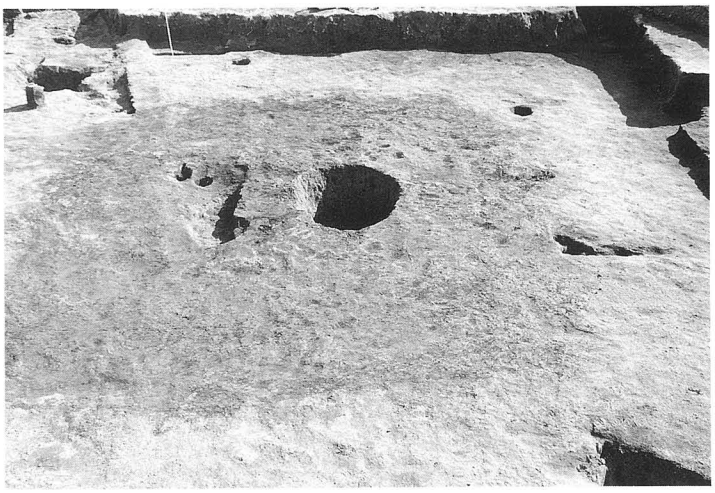
10号土坑堆積土状況



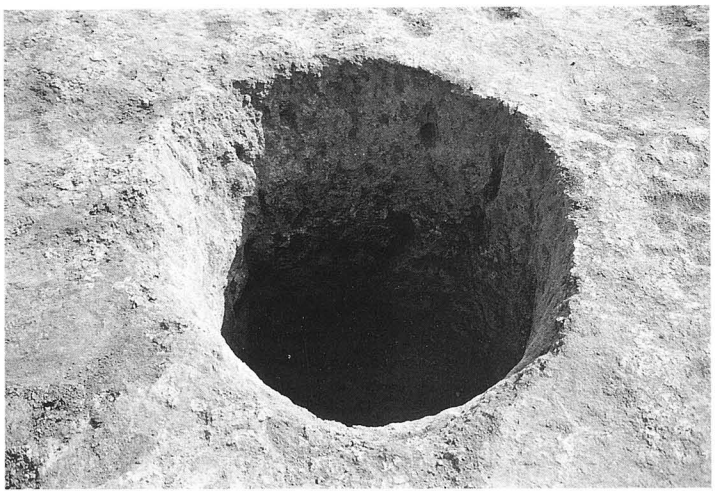
11 号 土 坑



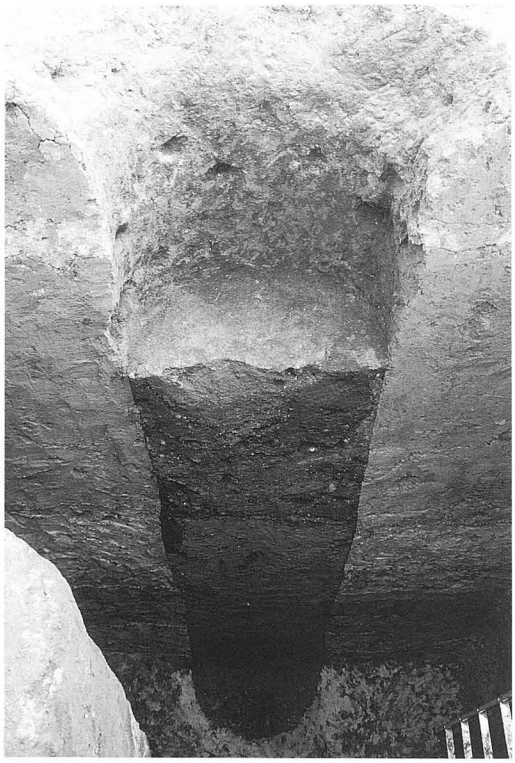
12号土坑（竪穴状遺構）



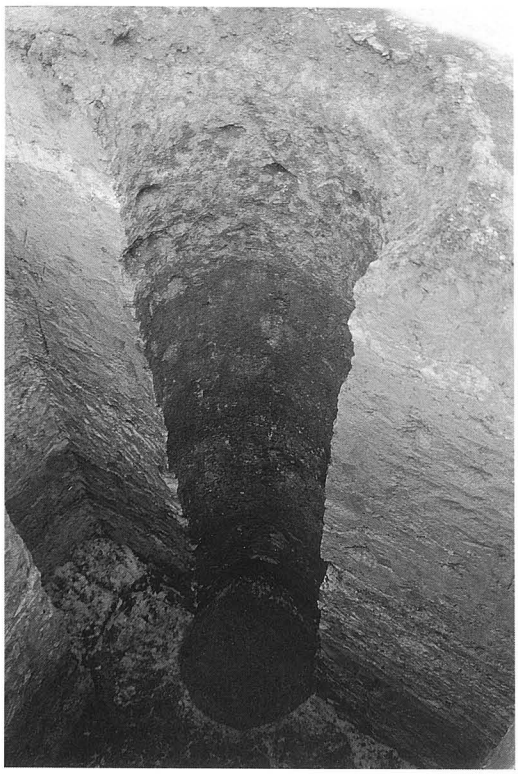
井戸遺構



井戸遺構



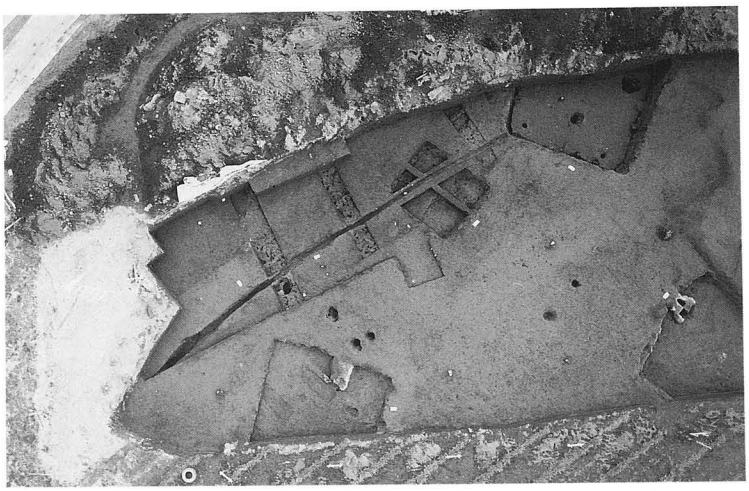
井戸遺構内堆積状況



井戸遺構完掘状況

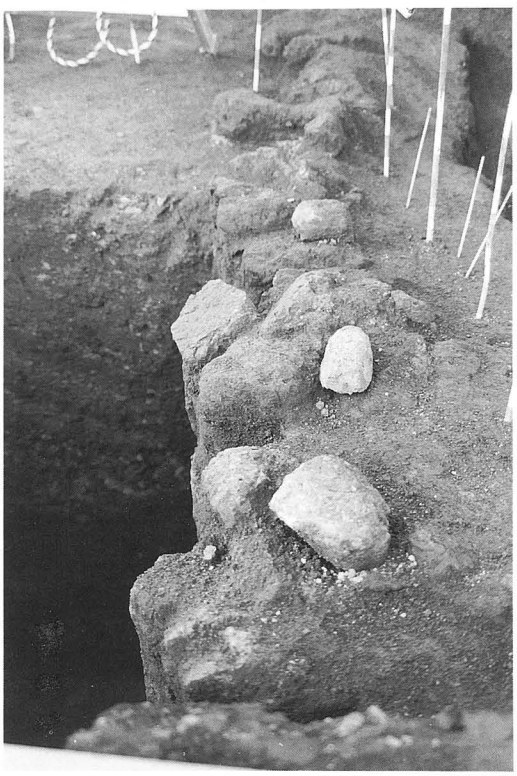
1 号道路遺構

1 号道路遺構

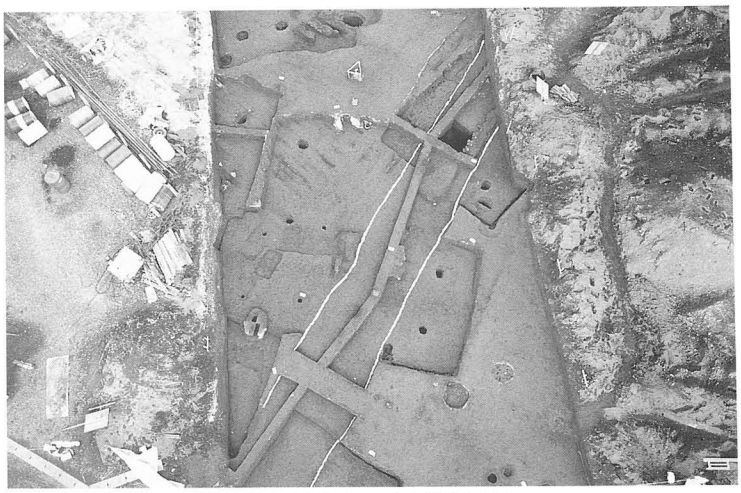


空中よりみた 1 号道路遺構

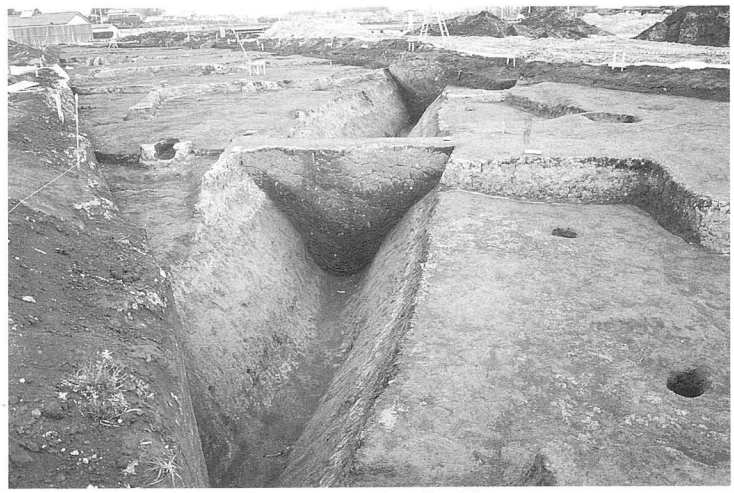
2 号道路遺構



2 号道路遺構（東側縁部に残るブロック土）



空中よりみた２号道路遺構



大 溝 遺 構

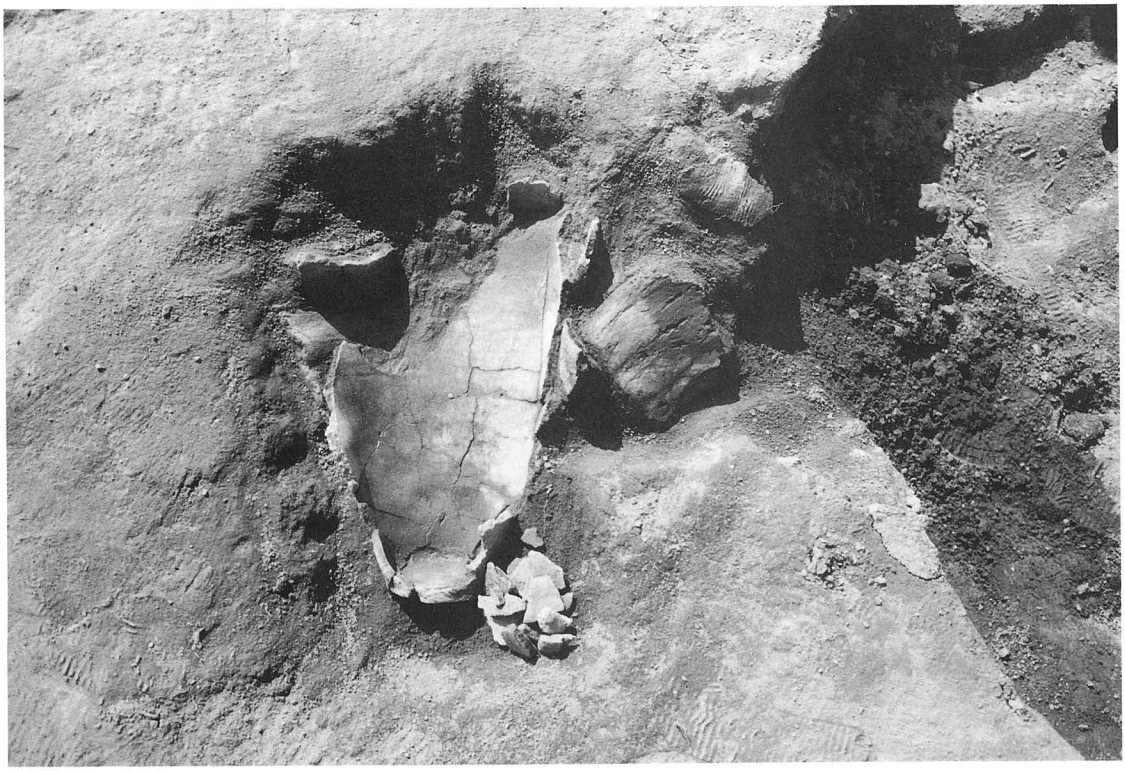
大 溝 遺 構

空中よりみた大溝遺構

大溝遺構の堆積土状況

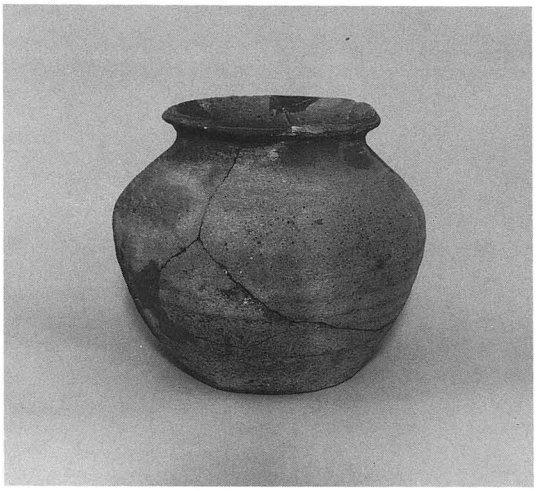
大溝遺構の堆積土状況（南北軸方向）

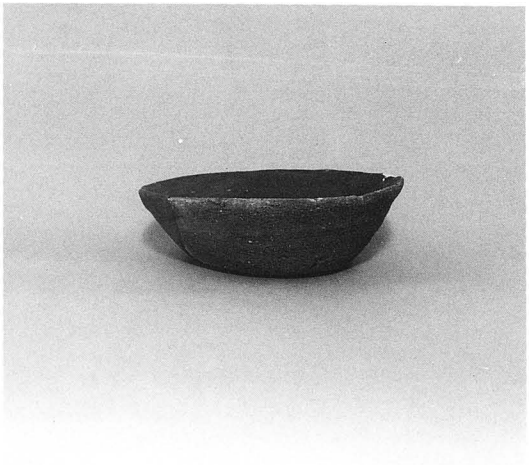
大溝遺構の発掘調査風景



遺構外出土遺物（縄文土器出土状況）

1号住居址出土土器



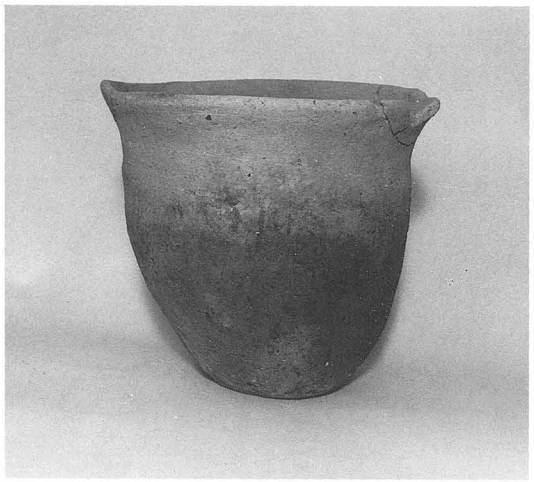


2号住居址出土土器

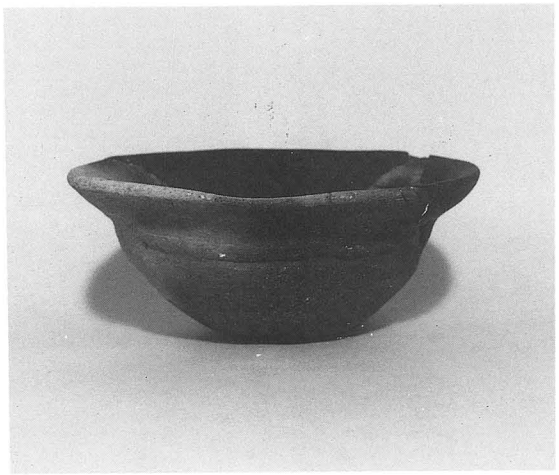
3号住居址出土土器

4号住居址出土土器

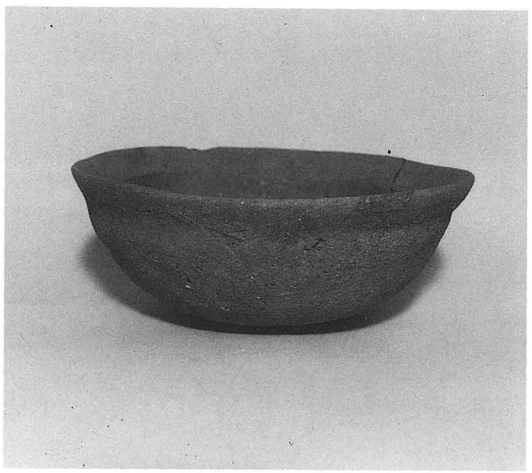
5号住居址出土土器 (1)



5 号住居址出土土器 (2)



5号住居址出土土器 (3)

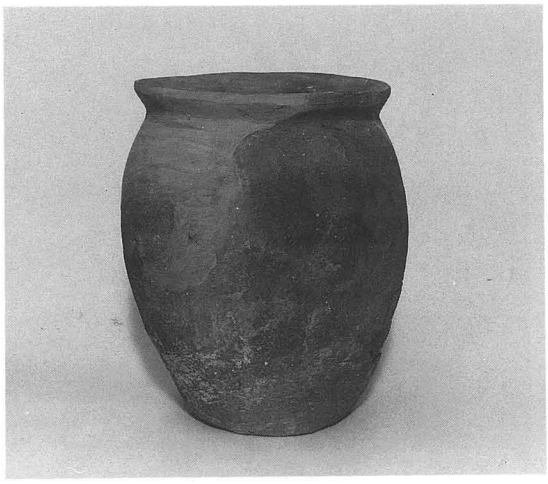


7号住居址出土土器 (1)

7号住居址出土土器 (2)

7号住居址出土土器 (3)

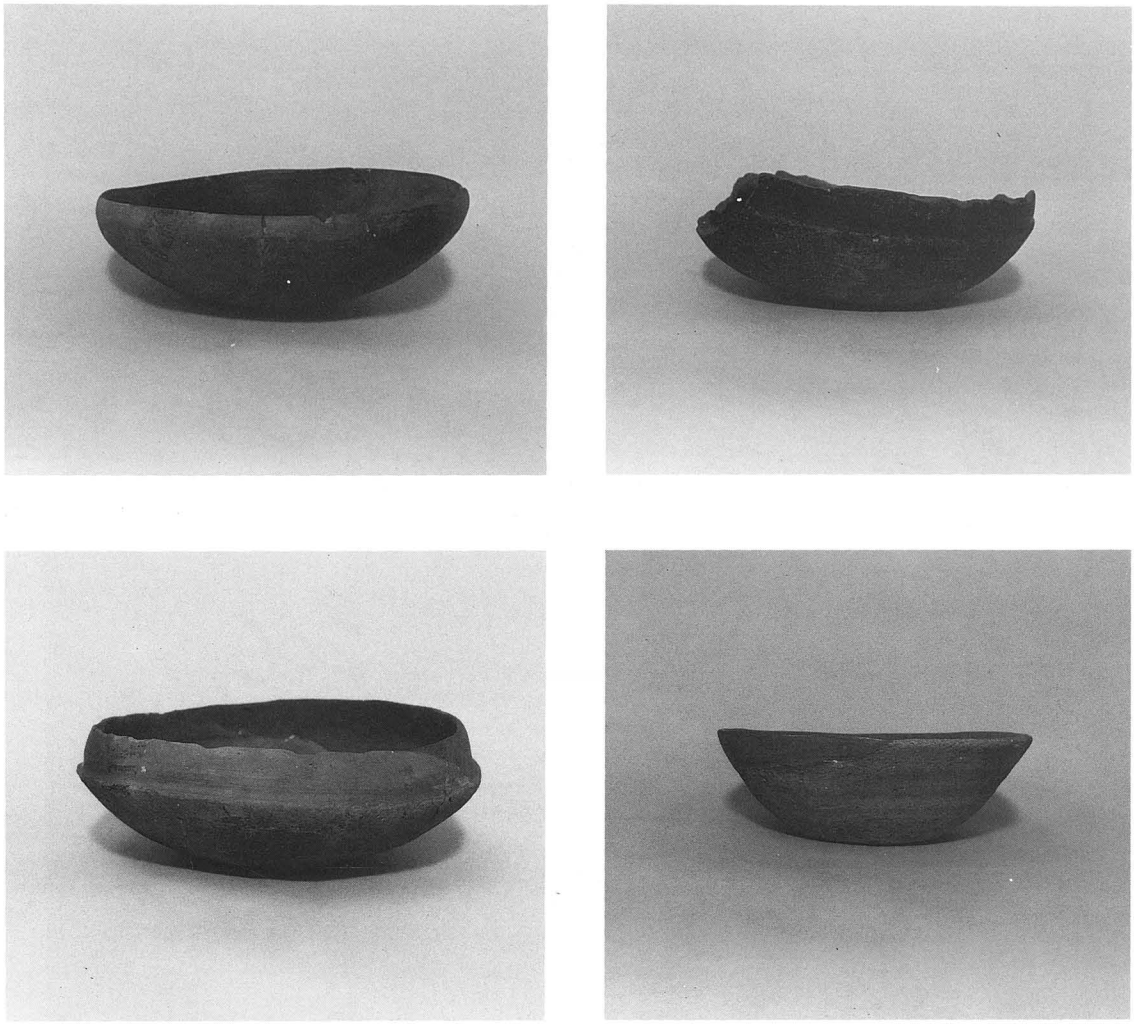
9号住居址出土土器 (1)



9号住居址出土土器 (2)

11号住居址出土土器

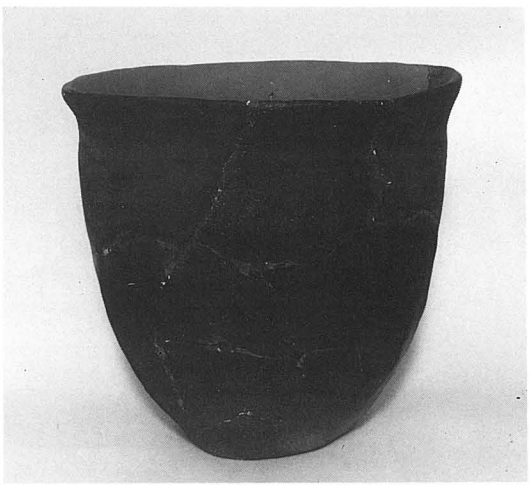
15号住居址出土土器 (1)

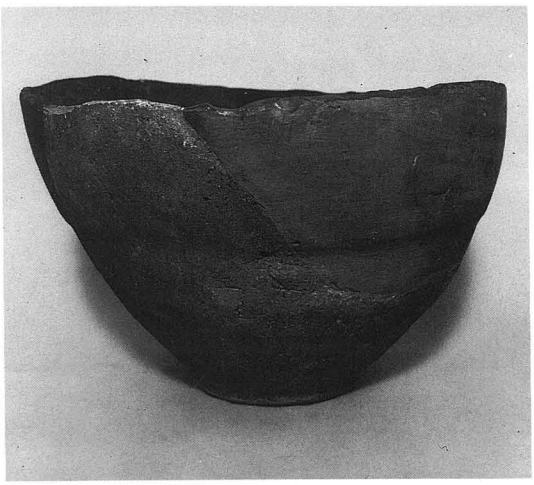


15号住居址出土土器 (2)

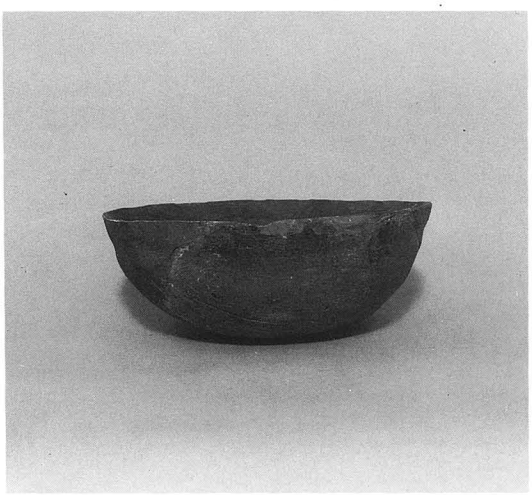
14号住居址出土土器 (1)

14号住居址出土土器　(2)



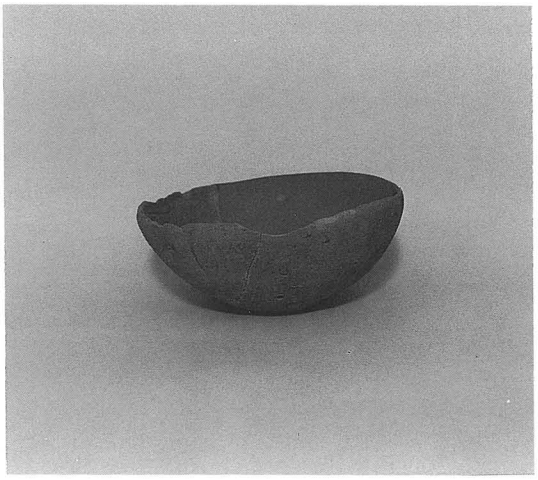


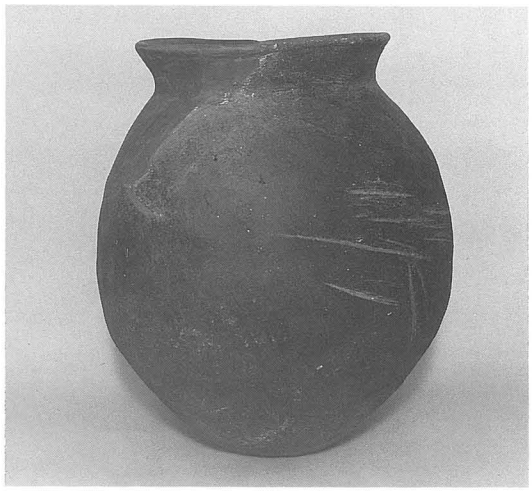
16号住居址出土土器　(1)

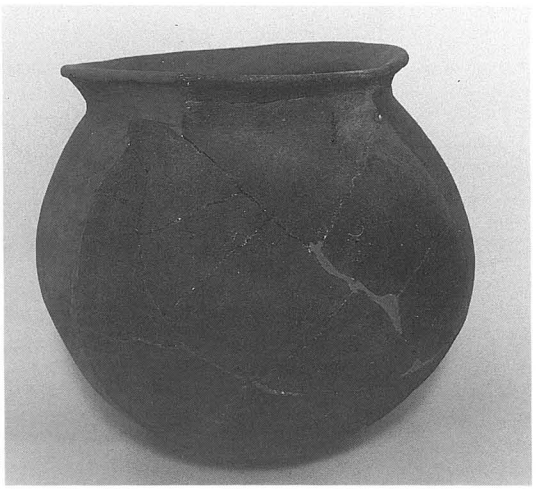


16号住居址出土土器 (2)

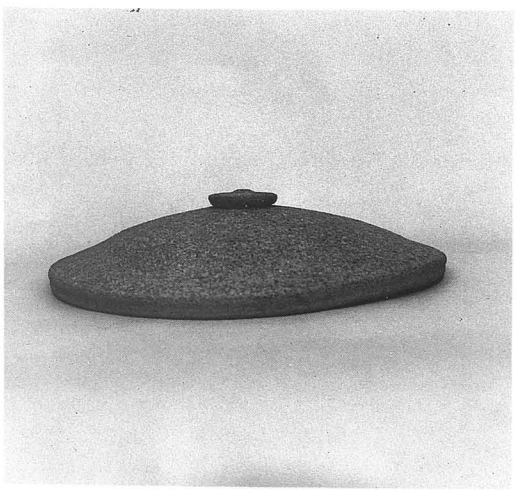
17号住居址出土土器 (1)





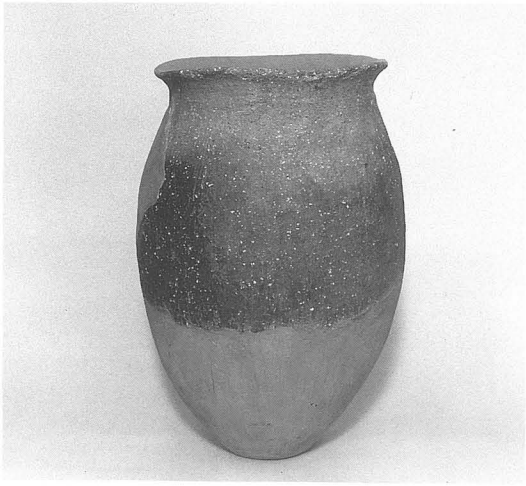


17号住居址出土土器 (2)



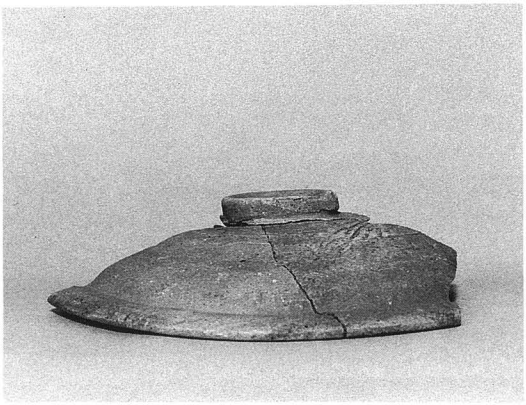
18号住居址出土土器

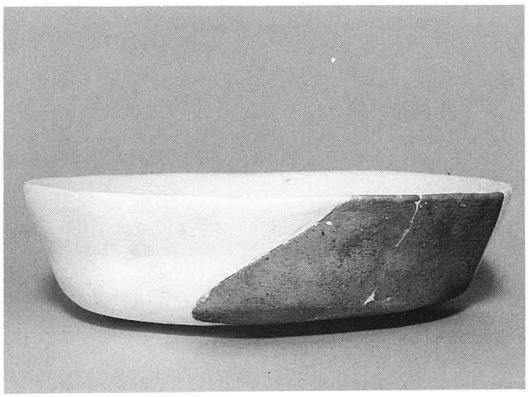
20号住居址出土土器



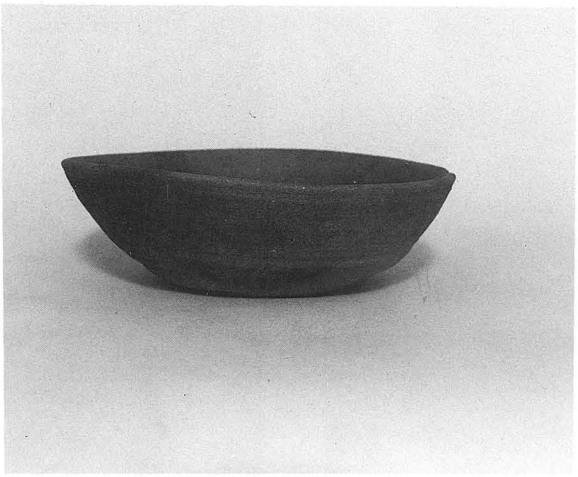
22号住居址出土土器　(1)

22号住居址出土土器 (2)





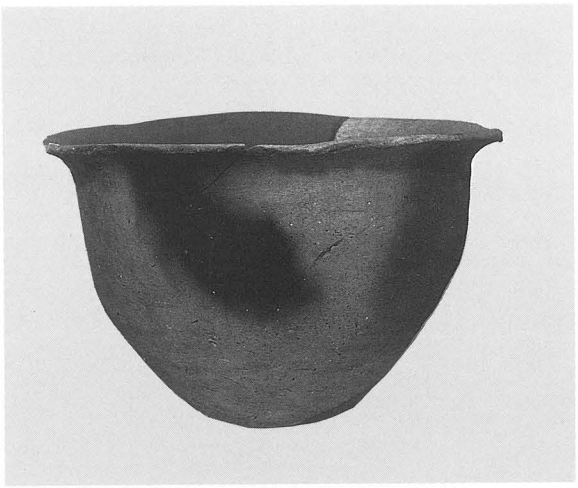
26号住居址出土土器



28号住居址出土土器

29号住居址出土土器

30・31・33号住居址出土土器



32号住居址出土土器 (1)

32号住居址出土土器 (2)

33号住居址出土土器

34号住居址出土土器

35号住居址出土土器

36号住居址出土土器

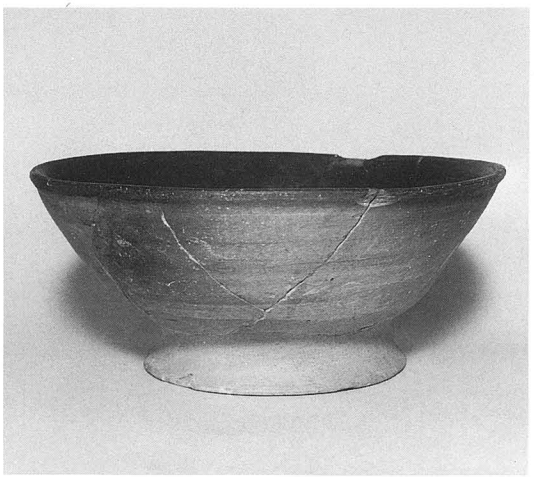
38号住居址出土土器　(1)

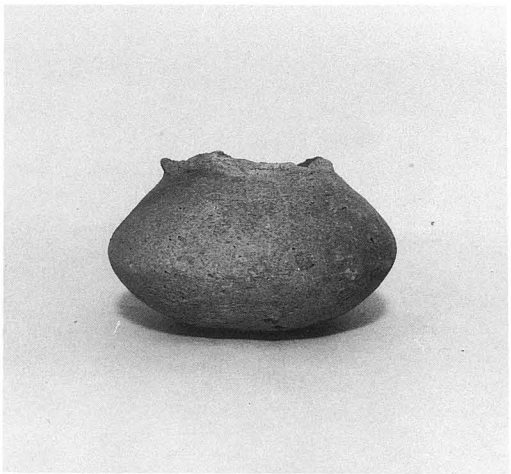
38号住居址出土土器 (2)

38号住居址出土土器 (3)

40号住居址出土土器

42号住居址出土土器 (1)

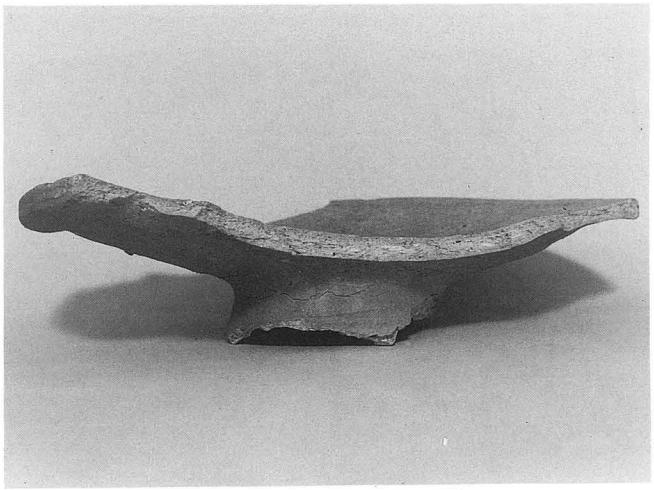




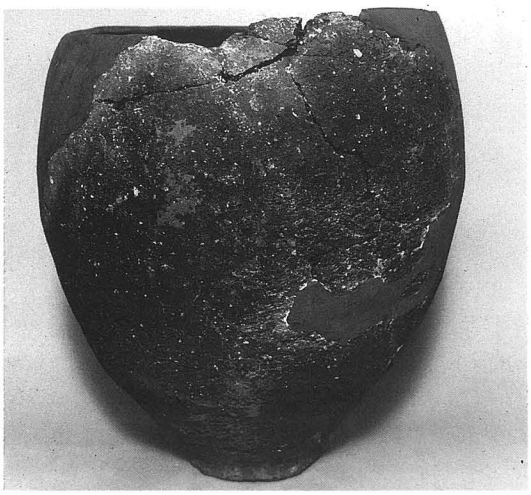
42号住居址出土土器　(2)

41号住居址出土土器

43号住居址出土土器

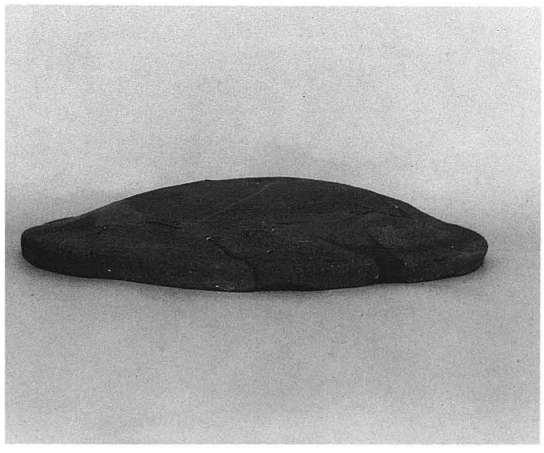


44号住居址出土土器

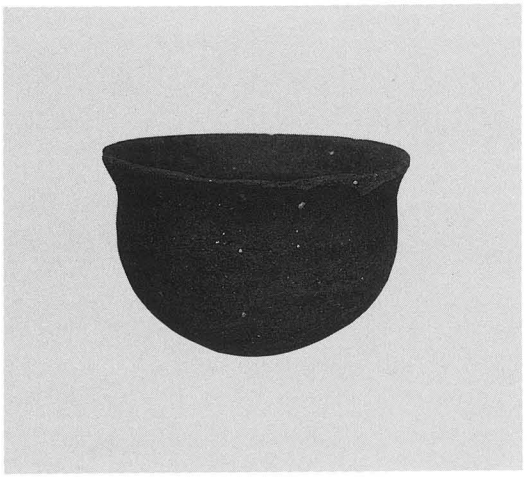


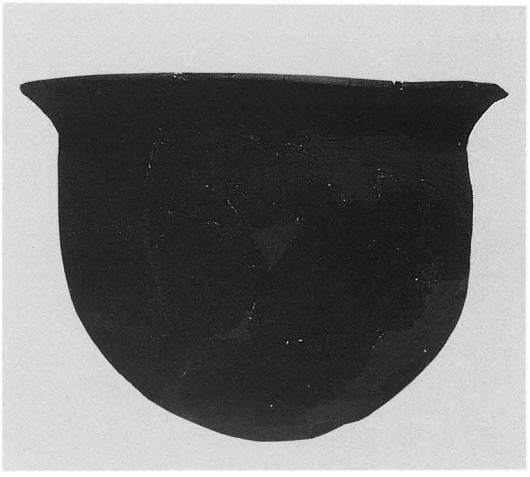
45号住居址出土土器 (1)

45号住居址出土土器 (2)

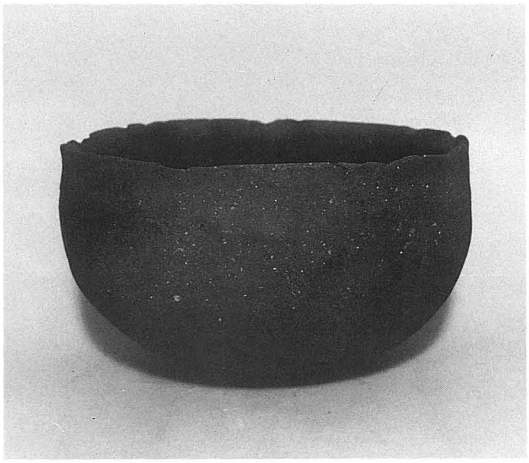


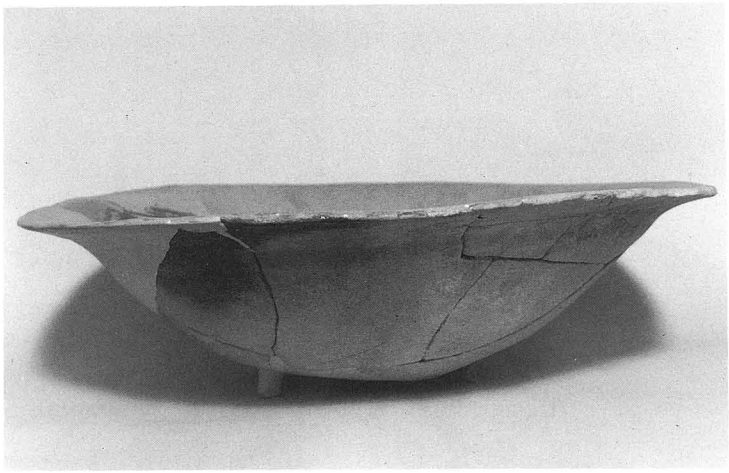
48号住居址出土土器





49号住居址出土土器 (1)

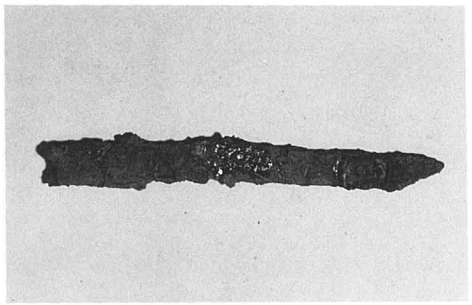




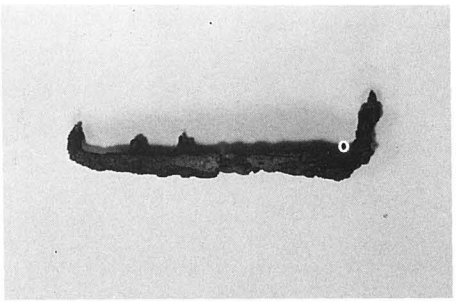
49号住居址出土土器 (2)

49号住居址出土土器 (3)

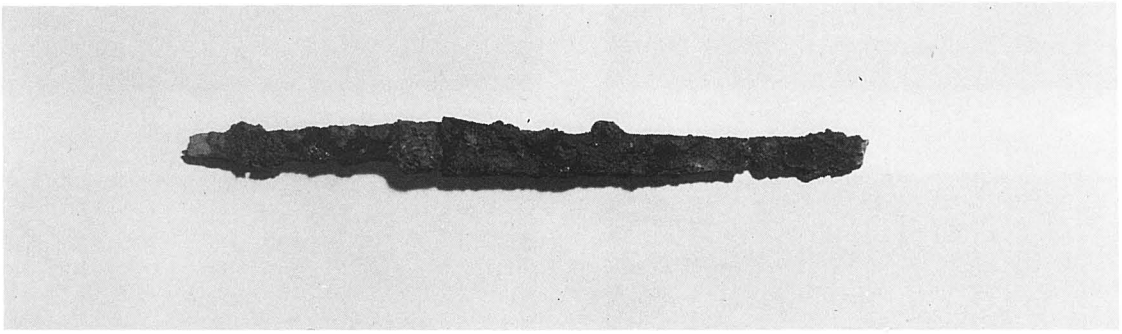
49号住居址出土土器 (4)



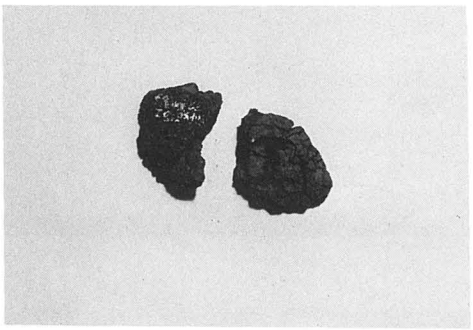
15号住居址覆土中



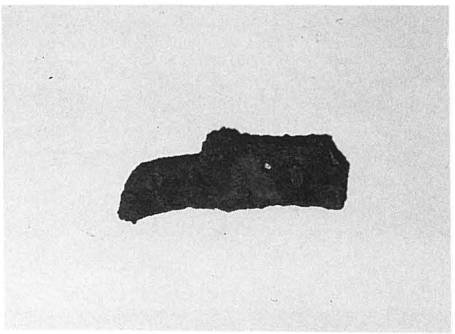
A調査区覆土中



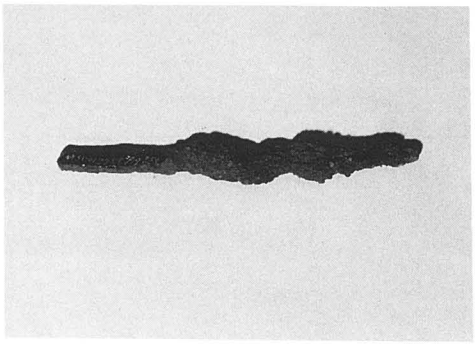
42号住居址



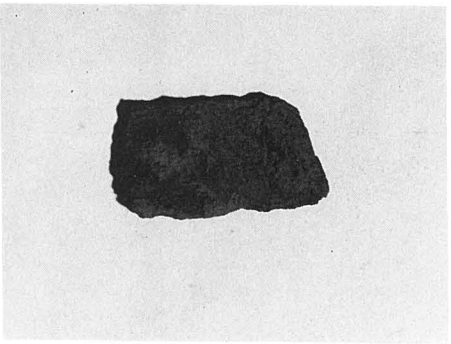
2号住居址



1号住居址覆土中

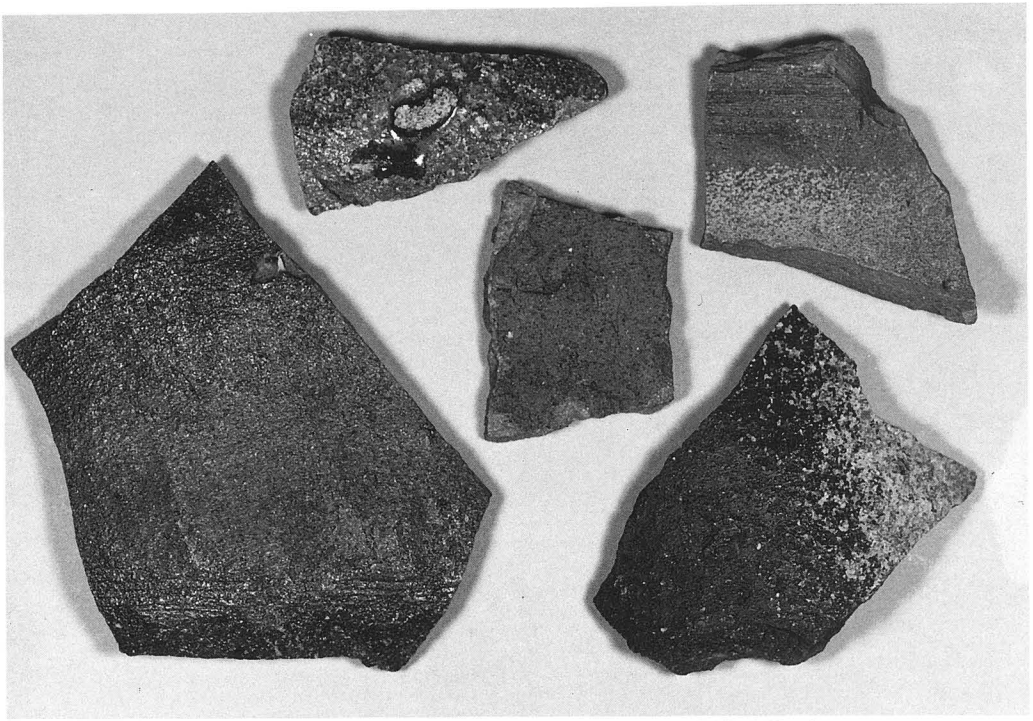


9号住居址



3号住居址

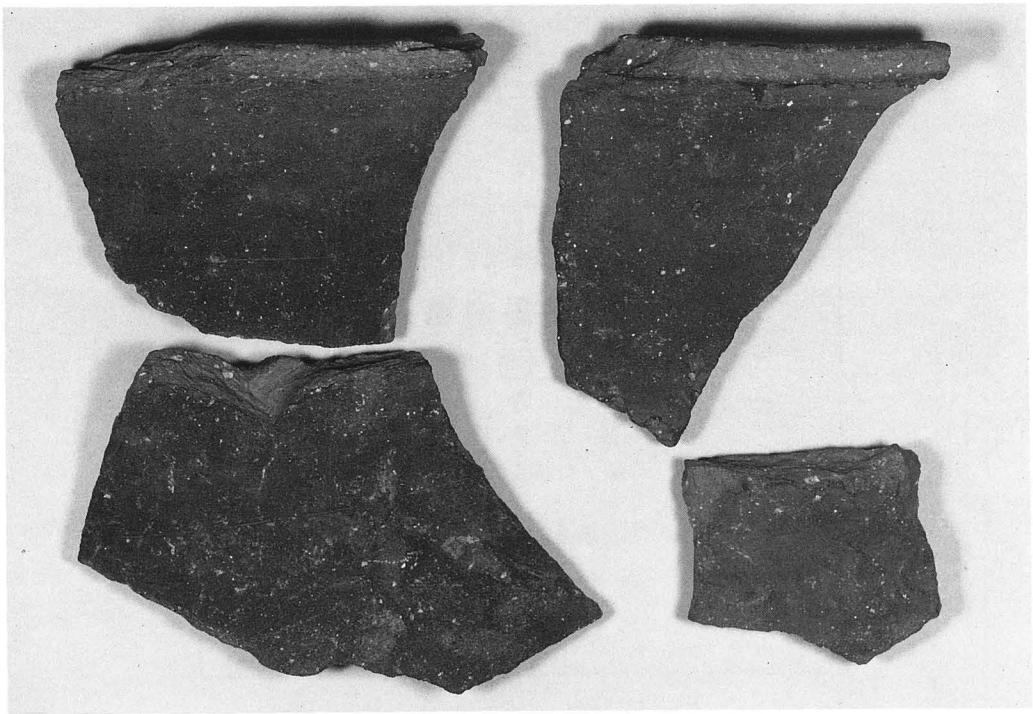
出土鉄製品



大溝遺構（SD－02）覆土中　　大溝遺構（SD－02）覆土中

25号住居址覆土中

1号井戸遺構覆土中　　大溝遺構（SD－02）覆土中



大溝遺構（SD－02）出土

出土陶器片

関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会報告書第１集

仲道遺跡発掘調査報告書

霞ヶ浦用水送水管埋設工事地内

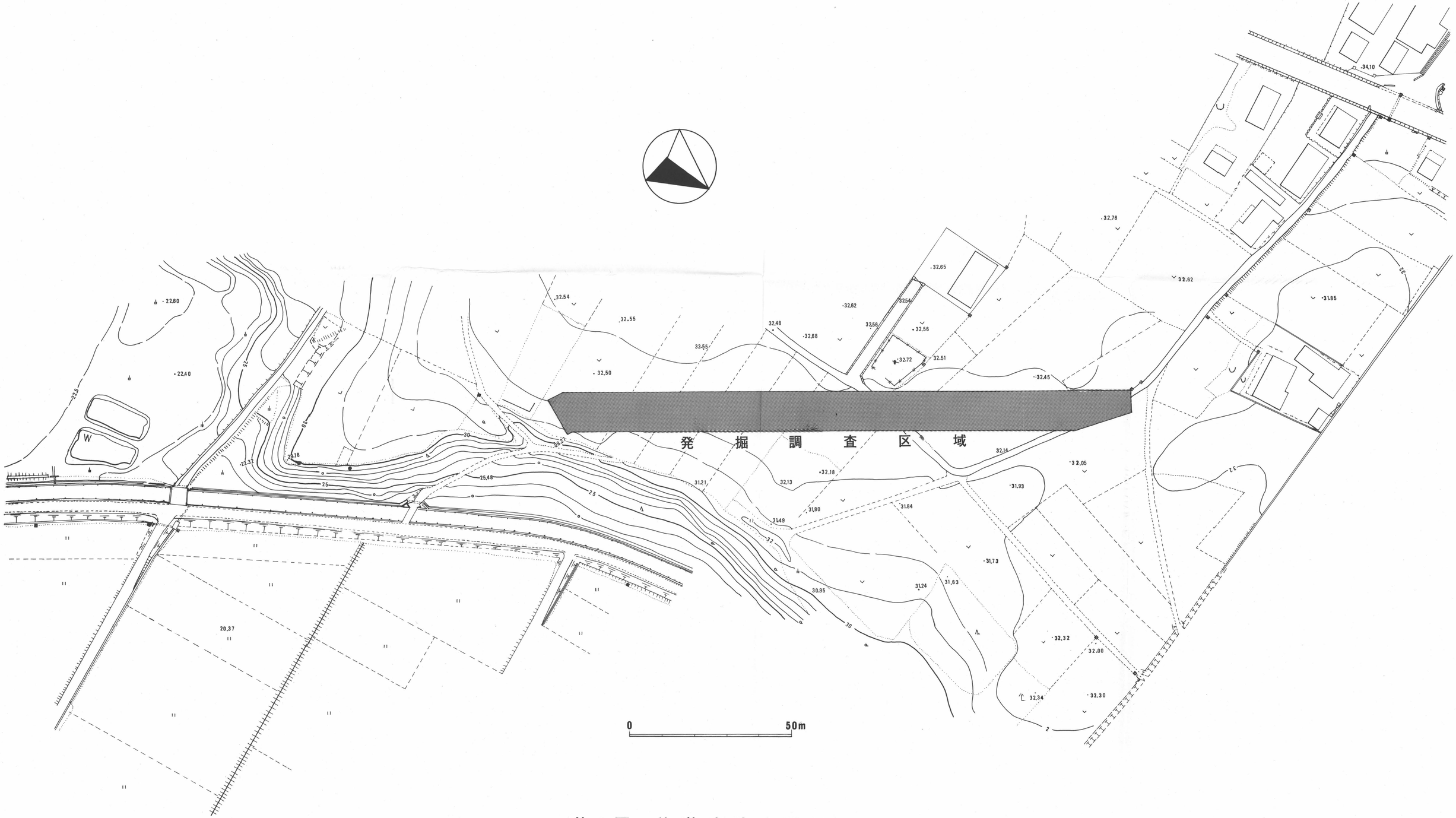
平成３年10月25日　印刷

平成３年10月31日　発行

発　行　関城地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査会

関城町教育委員会

印　刷　石崎印刷株式会社



第１図　仲道遺跡地形図

第２図　仲道遺跡周辺図（仲道遺跡・井上城址）

第 3 図　仲道遺跡遺構全体図

V 期

IV 期

III 期

II 期

I 期

SD-02
SK-10
SK-09
SK-12
SE-01
06
02
09
10
13
24
27
26
30
18
34
40
42
48
51
52
01
03
05
11
14
15
22
23
32
35
38
37
45
07
04
16
17
20
24
25
28
47
49
41
SK-06
SK-07
29
40 m
10
0

第 4 図　仲道遺跡時期別遺構位置図